
インフィニット・ストラトス 幼馴染と親友と学園で

sirasu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス 幼馴染と親友と学園で

【Nコード】

N4916Q

【作者名】

s i r a s u

【あらすじ】

幼馴染である一夏がISを起動させたことを知るオリ主。ちよつとしたことで世界で2番目にISを起動させた男となってしまう。急遽、秘密で学園に入学したオリ主は、そこで親友や幼馴染、さらには別れた恋人とも出会ってしまう。オリ主の平凡な学園生活いたいどこに!!!と、言うオリ主、オリキャラ、オリISありのお話です。チトはありません。《現在 おかげさまで裏切り・第二部開始です》

登場人物紹介（前書き）

初めての割り込み投稿♪
いやードキドキワクワク

基本的にはキャラは、原作のままでいきたいとおもっているので、
オリ主との関係に重心をおき、紹介します。

登場人物紹介

神代 宙（かみしろ そら）本作品のオリ主

性格は、一見女好きに見えますが・・・まあ フカーイ事情があります。基本的に、気さくな奴です。

けど、言いたいことは、はっきり言うタイプです。

専用機 残響性能は本文で

ちなみに名前の由来は、もともと自分が そら という言葉が好き
なだけです。名字は、直感です。（笑）

織斑一夏（おりむら いちか）主人公

関係 幼なじみ

篠ノ之 箒しののほづき

関係 幼なじみ

セシリア・オルコット

関係 特になし 進展あります。

鳳 鈴音ファンリンイン

関係 セカンド幼なじみ 中学まで一夏といたため

シャルロット・デュノア

関係 特になし 進展あり

ラウラ・ボーデビツヒ

関係 特になし これまた進展あり

さて、オリ主と原作キャラとの関係を書きましたが・・・著作権は

？やっペーあかんことしたかも・・・

と内心気にしまくりですが次からは、出す予定が決まっているオリキャラです。

神代 香 （きょう）オリ主の妹 重度のブラコン

雅 智花 （みやび ともか）中学時代の宙の彼女 IS学園在住

学校が変わるという理由で宙からわかれた、嫌いになったと思いきむ。

夏目 優 （なつめ ゆう） 中学時代の宙と智花の親友。人当たりがよく面倒見がいい。相談役

白石 葵 （しらいし あおい） 中学時代の親友。とっても無口。とあることがあって、宙に感謝している

登場人物紹介（後書き）

うはっ　ぎりぎりセーフ（文字数が・・・）　PSPだからでした。
正直のところ最後のキャラは説明不足でして少し付け加えと訂正を
宙からわかれようといわれわかれることに、しかし宙が嫌いになっ
たからと勝手に勘違いしている。
性格は、吹けば消えていきそうな気弱な娘。だけど、しっかりとし
た一面もあり恥ずかしがりやなのに宙に告白した。

よしっ　終わりです。いやーきれいに収まらなかったけどこれにて、
一見落着です。

第二話は、明日更新です。（たぶん　いや出来るだけ）

プロローグ（前書き）

SEEDのゲームみたいなタイトルで始まりましたが気にしないでください。

ただただ、ネーミングセンスがないsirasuです。

さて張り切っていきます。プロローグです。見方によっては第一話です。

どうぞ

プロローグ

プロローグ

「あーーーーー!!」

叫んでいるのは、この話のオリ主である神代宙（かみしろ、そら）は、新聞を読んでいた。

おっさんか!! と呼ばれるれても仕方ないぐらいの雰囲気をかもし出している。

しかし、かれは学生である。

そう学生なのだ。

大事なことなので2回言わせてもらった。顔立ちはきりっとしていて、なおかつ綺麗である。

髪は長くもなく短くもない黒髪。特徴的なのはロケットと呼ばれるネックレスをしているとこだ。服装は

黒の学ランを着て、下はスラックスをはいている。そんな彼は今通学中だ。電車で。もちろんほかの利用客もいるので叫ぶと一気にこちらに視線が集まったので「すいません」とあやまった。

宙

世界初男でISを動かした男 織斑一夏 と小さく新聞に書かれていた。そしてIS学園に通うことも。

「うそだろ」と、思わずつぶやいていた。

だってあいつは俺と同じ藍越学園を受けたはずだ。カンニング事件とやらで試験会場で会わなかったが大丈夫だろうと思いい試験を受けたのだが、俺の知らないところでこんなことになっているとは・・・

くっそーうらやましす いや、うらやましい！！だってあれだろう。女の子いっぱいなのだろう。

ハーレムじゃないか！モテモテやないか！

「藍越学園、藍越学園です。」車内にアナウンスが流れ学生たちは電車から降りている。

どうやら宙には聞こえていないようだ。そして無常にも扉は閉まり発車した。

「次は、IS学園、IS学園です。停車駅となります。」この放送は2回繰り返し返されたが、宙の耳のは入らなかった。

プロローグ（後書き）

あとがき

ここまで読んでくれた皆様、ありがとうございます。

短くてすいません。プロットなしに書いていたらこんなに短くなっ
てしまいました。

更新はなるべく早くやりますので、次も見てください。

おねがいします。後、遠慮なしに意見、誤字、脱字などバシバシい
ってやってください。

P・S

Mではありませんよ

第1話 IS初接触（前書き）

今日二回目の投稿です。

第1話 I S初接触

第一話

「おーい、君」

さっきからうるさいやつだ。一夏をどうしようかと考えてるのに邪魔ばっかしやがって、こいつどうしてやろうか・・・

「君？ここは停車駅だで行ったろさっさとでていきなさい」と、今度は強い口調で言ってきた。

さっきからいちいち・・・ん？　そーいや今何ていった？

「あの一なんていいました？」

「停車駅だといったんだよ」

結構怒っているようだ。語尾に力が入っている。

「停車？・・・駅？」

言葉を口にだしてようやく理解した。どんどん頭が冷えてくような感覚。

「わかったら早く降りろ」

はい　と、返事をし手に持っていた素早く新聞をたたみ、かばんの中に直して電車から出た。

そこは、まさにIS学園。藍越学園ではない。一夏をどうしようか？ 学校遅れた などの考えは一切きえ

ただただ目の前の光景に、心と目を奪われた。その大きさに心や目を奪われていると一人の女性が話しかけてきた。

黒いスーツに身を包み綺麗な黒髪の女性だった。

「ん？ 何だ貴様は、男からしてこの学校の者ではないな」

女性の声なのに芯があり、そして独特な低いトーンの聞きなれた声は

「千冬さん お久しぶりです。」

条件反射で礼をしてしまった。男なのに情けないとは思いつつも、昔一夏とともに鍛えられたことを思い出した。

その時につけられた怖い印象は今現在も消えることなく、俺のトラウマとなっている。

「宙か。何でこんな所にいるんだ？ 一夏に会いに来たのか？」

どうやら、一夏に会いに来たと勘違いされたようだ。これはアイツにいろいろと言えるチャンス。利用しないではない。

時計を確認するとAM 6:00 休日だが補修がやってる時間だ。今から電車に乗っても間に合わないし・・・

「はい 一夏に会いに来ました。」

「そうか 例外もくそつたれもあったもんじゃないか」

うわお クールビューティ千冬さんからそんな言葉が聴けるとは、思いしなかったぜ。

他校の制服姿のほうは気にしていないようだ。

休みの日に校則で着用を決められている学校もあるし、いいか。

「まあいい　SHR前に一言だけ言わせてやろう来い」

「はい　ありがとうございます」

ここでも俺のトラウマは、発動した。何と言うか本当に情けない

5分くらい学園の中を歩き学生寮の中に入った。始めてみた学園の中は最新設備ばかりでつつい目移りしてしまった。

特大のグラウンドにドームまでどこを見てもすばらしいの一言だった。そして今は、学生寮の一夏の部屋の前だ。ふと、ドアの隣にあるプレートに目が入る。そこには

織斑　一夏

篠ノ之　箒

の二人に名前。

ぬぁにー！ーツインルームだと？女と男がひとつの部屋だと？ゆるさん、神が許そうが、仏が許そうが、俺は、俺は！

と、心の中で叫んでいると

「一夏起きろ」

と、ドアを開けながらづかづか入ってゆく千冬さん、そして恐る恐る部屋の中に入ろうとする俺。

べ、別に幼馴染である箒の寝顔を見よう、とかなんて思っていないんだからね！！

部屋に入ると、目の前でたたき起こされる一夏、そして箒はというと、いなかった。内心めちゃくちゃ悔しかったが、それを表に出さなかった。

「ん？ 宙か？」

「元氣そうだなあ　おい」

まだ寝ぼけているのかゴシゴシと目をこすっている。

「一言だけ言わせてもらおう・・・ずるいんだよてめえ何がISだ何が相部屋だ何でてめえは男の夢を独占しているんだ！！　コンチキショウ、おかしいだろ、何でてめえはIS起動できんだよ。そして何でゆっくり寝てんだよ！！」

と、はあ、はあ、と息切れしながらも言った。いや叫んだ。一言ではないが、言いたいことは言わせてもらった。

とつてもすすきりとしたので帰ろうかなと思ひ振り向くと

ゴスツと音を立ててめり込むクラス帳

「うるさい」

千冬さん一言で俺の心はトラウマの中に！！

「すいませんでしたあー」

と音速で腰から90度に曲げ謝罪する。ちなみに一夏は、耳を押さえている。

「よし用件は済んだな帰るぞ」

「あつちよつと待ってください」

最初部屋に入ったときに目にはいった白いガントレットを手にとり観察する。

しばらく眺めていると何かが書かれていたので口に出してみた

「白式？」

そして俺の体は光に包まれた。

第1話 IS初接触（後書き）

むう、時間かった。

結構しんどいね。こんなにパソコンの前にいたのネットゲ以来かも・

・
ということで更新しました。

何か誤字、脱字ありましたら教えてください。

後、読みにくいところも

第2話 起動（前書き）

こんにちはsirasuです。

お気に入り登録が昨日より今日のほうが増えている。

キヤーーww やばい、ヤブアイとってもううれしいsirasu
です。

読んでくれてありがとうございます。皆様の期待に応えられるよう。
日々是精進です。（漢字うろ覚えww）

というわけで第二話です。どうぞ

第2話 起動

第二話

「白式？」

ただただ白いガントレットに書かれていた言葉を口にした。いや、読んだ。

それだけ他に特別なこともしていない。

じゃあ なぜ目の前が白い光に包まれているんだ？体中から光に包まれているんだ？

皮膜装甲展開・・・・・・・・完了
スラスター正常作動・・・・確認
ハイパーセンサー最適化・終了

突然頭に響く音、流れてくる情報何もかもが手に取るようにわかる。
わかるけど、意味がわからない。

どうなっているんだ？

白式 起動

最後に響く音 開ける視界 体は軽く 光は解け 目に見えるのは
肘から先が白い鎧に包まれ、手のひらは青く、腰から下には腕と
同じ白に包まれた足。

背中には独立して浮いている白い塊があった。そして、高い目線。

最後に目の前に広がる情報

シールドエネルギー？ 武装表示？ さっぱりだ。全然わからない。俺はいつたい・・・

「大丈夫か？」

クールビューティ千冬さんの声が聞こえる

「は、はい大丈夫です。」

また体か勝手に・・・ほんと情けない
けど今のは怖くなかった。怒るよりも驚いたり、混乱している気がした。

一夏は、目を見開き信じられないようなものを見ているような目をしている。

ざまあww と心の中で言い、改めて今の自分を見る。

これはたぶんISを起動させているんだ。女しか起動できないの
にどうして・・・

「っっ」

急に視界が光に包まれる。自分の足が地面に付く感覚、重力を感じる。

光が消えると手には白いガントレットが握られていた。

「あれ？なにが・・・」

グッと強引に手を引かれる感覚、千冬さんだ。

「来い、身体検査だ」

はっ？意味がわかりません。俺って怪我なし病気なしの健康体ですよ。

「何が起こったんですか？」

「お前はISを起動させた。普通じゃないだから、検査をするんだ。」

優しい声だった。いや、心配している声だった。

この人はいつでも、厳しい。でも、人一倍やさしいんだ。だから、一夏も嫌いになれないんだよな。

あれから一通り検査を受けた。血液検査や、MRIなど現在の持つる技術を持って体を調べられた。

周りにはたくさんの大人がISの《打鉄》（日本の量産機）の前に立つ俺を見ている。

そして俺はISに触れた。

第2話 起動（後書き）

30分ぐらいかな原作読み返しながら書き上げました。
少し短かったかな・・・。

内容あんまり進んでなくてごめんなさい
作者の文才がないせいなのです。

次話では必ず宙の専用機である

残響（エコーは宙がつけた本当は字のとおりです。）
について書きたいと思います。ある程度はがんばって表現しますが、
基本皆様ご想像のとおりでいいです。

これからよろしくお願いします。

第3話 初登校（前書き）

すいませんでした。

なぜ最初に誤ったかという点、エコー残響までいけませんでした。
前回のあとがきに書いてあったのに・・・

プロットも書かずに感覚で書くところなっちゃいました。すいません
ということで、第3話どうぞ

第3話 初登校

第3話

「いってきます。」

「体に気をつけるのよ」

一夏の専用機である白式を起動させたことにより身体検査を受けた俺は、日本の量産機である《打鉄》をも起動させた。

本来なら世界で2番目にISを起動させた男ということで大々的に報道されるはずだったが、学園が情報を操作して俺のことをかくまってくれることとなった。しかし、条件として

IS学園で寮生活をしながらIS学園で基礎知識を学び記録をとらせてくれ

ということだった。それを俺は、人権を侵害しない範囲であればと承諾しはれてIS学園に編入することとなった。

今日はあれからちょうど一週間後の休日。編入については、親も無料ということで、あっさり了承。一番ひどかったのは妹の香がなかなか許してくれなかったことだ。香は時々帰るということでもなにか収まってくれた。編入手続きもIS学園がしてくれることとなり、本当は情報を流れるのを防ぐためすぐにでも寮に入れたかったらしいが、千冬さんの進言により一週間の猶予が与えられた。

そして今、俺は一週間の猶予期間がおわったので登校するところだ。朝から、妹が布団の中に入っていたりと大変なことがあったりした。春だから寒くないはずなのだが・・・

うーん、わからん

制服は学園が用意するということで、藍越学園の制服を来て登校することになった。片手に分厚い本（必ず暗記して来いといわれた）が詰まったかばんを持ち、私物が詰まったエナメルバッグを肩にかけて家を出た。改めて家を出ることを考えるとさびしくなってきたので、少し小走りで行くことにした。

「IS学園、IS学園です。」

と、電車のアナウンスが告げる。かばんとエナメルの存在をしつかりと確認し、軽い足取りで電車を降りる。駅のホームにいた女性はこつちを見て驚いている様子だったが無視して歩いた。校門に着くと黒いスーツを着た千冬さんが待っていた。

「千冬さん　おはようございます」

ゴスツと、音を立てて頭にめり込むクラス帳。本気で痛い、あまりにも痛いので頭をさすっていると

「織斑先生だ」

「は、はい千冬先生」

やばっミスった

と思ったとき追撃が・・・

ガッ

い、痛い　音が違う！！今回は角が脳天に・・・

「ごめんなさい　織斑先生」

「よし　いいだろう　待っていた付いて来い。」

と、必要なことだけ言い、寮の部屋に案内してくれた。プレートには

織斑　一夏

神代　宙

さすがに、女と同室はありえないようだ。

「荷物を置いて支度をしろ」

言われたままに荷物を置き部屋から出る。次に案内されたのは更衣室の、一角周りをカーテンに囲まれている。どうやら女と男で分けられているようだ。

「これに着替えろ」

と、渡された服？に着替えた。そして案内されたのは第一アリーナAピット。

第3話 初登校（後書き）

次こそは！！ すぎこそは！！
必ず残響^{エコー}について投稿します。

さて次回予告が終わったので、自分のことについて書きたいと思います。

正直、ほかのオリキャラに専用機を持たせるかどうかで悩んでいます。

それとオリ主の宙のことなんですが、「そら」で変換しても出てこない
もうホント地味につらいんです

次は今日中かな？（投稿のこと）

第4話 専用機（前書き）

すいませんでした。ようやく完成したので投稿します。

お気に入りが増えていることに感動を覚えたsirasuです。
お気に入りにももらったからにはがんばります。

それでは、第四話 どうぞ

第4話 専用機

第4話

第一アリーナAピットで俺を待っていたのは、幼馴染たちだった。そして『黒』

「そ、宙」

「ほら言ったら箒 宙だって」

「久しぶり 箒」

一夏が 俺は？ と聞いてきたが 昨日あっただろ と返した。箒は若干驚いてはいたがすぐに元のきりっとした表情に変わる。変わっていなかった。強気な目や頭より高い位置で結んだ髪どれも懐かしかった。思わず

「変わってないな」

と言ってしまった。特に箒は反応しなかったが少しうれしそうだった。

一夏や箒に氣をとられていたが、すぐに本当の目的と対面する。

黒。真っ黒。すべての色、光を凌駕した威圧感。そして鈍い輝き。どれも俺の目を奪うにはできすぎた物だった。いや、ISか……。

「これが宙君の専用IS『残響』《ざんきょう》です。」

千ふy・・・ゲフン織斑先生クラスの副担任の山田先生が言う。

「これが・・・俺のI・・・S」

残響、ざんきょう・・・英語でエコー、か

「よし、エコーよろしくな」

と、軽く触る。初めて起動させたときとは違う。圧倒的にこっちの
ほうが
やさしい感じだ。流れ込む、と言うよりより教えてくれると、言っ
たほうが近い。

「エ、エコー？」 幼馴染たちが声をそろえて言う。よく聞けば山
田先生も言っていた。

「ん？ 残響って言いにくくね？ って言うかあだ名のほうが親しい
感じがする」

しーん、あれ？ なんかおかしいこといったかな？

幼馴染たちや千冬先生が軽く笑う。山田先生のほうは、ついていけ
てないようだ。

ホントわけがわからない 何で笑うんだよ。

「すぐに装着しろ。今からちょっとした試験を受けてもらう。

その時にフォーマットとフィッティングをやれ。わかったな。」

急に話してきた。

すぐに条件反射で「はい」と応える

すぐに残響の空いている部分に入る。足を入れ体を預け、手を入れ
る。

かしゅ、かしゅ、という空気が抜ける音が響く。

まるで自分の手足のような感覚。新鮮なのではなく、懐かしい。そして、俺と残響はつながった。

ほっそりとした腕や足、余計な装甲などなく鋭いイメージがある。両肩から背中についている二枚の縦板、形はバスターブレード（Fより）みたいだ。

頭についているのは、ヘッドバンドみたいなやつで中央のカメラは、まるでオニキスのような輝きを見せている。

ハイパーセンサーが起動する。

目の前に広がるデータは一週間のうちに覚えたので、手に取るようにわかる。

わからなかつたら殺されるしな・・・

別の枠で、今回の試験内容が出た。空中に浮いている的を切るか射れば良いらしい。

一個落とすごとにレベルが上がって、攻撃や回避などを行うと言う内容だ。

なぜか懐かしい感じがした。やったことがあるような・・・思い出せないので思考をやめた。

そして、ピット・ゲートに移動しようと一步目を踏み出す、すると体が浮くような感覚とともに

残響が答えてくれた。後は重心を前に傾けるだけだ。

今、残響は初期化フォーマットを行っている。と、同時に最適化処理ファインテューンをしている。その視界の端に流れる膨大な数字見てるだけで気分が悪くなってくる。それを感じたのか、

処理を行っている枠は消えた。心の中でありがとうと、呟き。ゲートに着いた。

アリーナ内にたくさんの灰色の丸い玉が飛んでいる。あれがターゲットらしい。

それから、たくさんの観客がいる。

そして、俺はエコーとともに舞台上上がった。

第4話 専用機（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

残響のイメージは結構がんばったのですが、わかりにくいようでしたら

スパロボLのストレイバードで画像検索してください。

そんな感じです。

誤字、脱字、訂正や言いたいことがあったらどんどん言ってください。

ただ今、どうするか、めっちゃ悩んでいるんでアイデアも待っています。

第4話外伝 妹の気持ち（前書き）

ほとばしるインスピレーションに身を任せかいてみました。

勉強すればするほど溜まるSirasuです。

思い切って妹の香視点です。

第4話外伝 妹の気持ち

第4話外伝

最近驚くことがありました。

それは、お兄ちゃんの初めての休日補修の日でした。

藍越学園？に合格した、と聞いたときは涙が出るほどうれしかったことを今でも覚えています。

体の悪い私は学校というものを知りませんが、いつもお兄ちゃんが学校のこと話してくれます。

私のひとつ上のお兄ちゃんはいつも楽しそうに話してくれます。仲のいい友達とあそんだり、クラスメイトたちと勉強したりするとこらしいです。

その日は、昼に帰ってくるといったまま昼に帰ってきませんでした。帰ってきたのは、PM7..00でした。

いつもは約束する時間に一度帰ってくるのですが、その日だけ帰ってこなかったのです。

帰ってきたお兄ちゃんは、少し疲れているようでした。

帰ってからすぐにお兄ちゃんは、お母さんとお父さんと呼んで、3人で話をしていました。

すぐに、お父さんの怒鳴り声やお母さんの静めようとする声が聞こえました。

「ふざけているのか!!」

「おちついてください」

本気で怒っていました。その時は、どうして怒っているのかわからず。

好奇心に負けてベッドから降りてふらつく足で壁伝いに一階へ降りました。

その時に聞こえてきたのは・・・

「俺をIS学園に入れてくれ」

お兄ちゃんの声でした。学校については知りませんでしたがIS学園のことは知ってました。

全寮制の学校で、ISについて学ぶ学校だということを。けど、ISが女性だけが動かせるとは知りませんでした。そのとき私はがむしゃらに走っていました。

「お兄ちゃん、ダメ 行っちゃダメ」

気づいたときには無意識に言葉を言っていました。

お兄ちゃんは、その時とっても驚いていました。私が壁に捕まっていると

すぐに来てくれて私の体を支えてくれました。本当に優しいお兄ちゃんです。

そんなお兄ちゃんは、私と目線を合わせて

「ごめん。俺は行かなくちゃ行けないんだ。」

と、いいました。けど、私はすぐに両耳をふさいでしまいました。本当は、わかっていたんです。お兄ちゃんの目を見れば覚悟していたことを・・・

それでも全寮制の学校に行くのは反対でした。

お父さんはこれをいいことに

「香のことも考えろ。お前がいなくなったら話し相手がいなくなる

だろうが」

「あなた、それは・・・」

その言葉は、お兄ちゃんを怒らせるのには十分でした。

「ふざけるな！！本当はあなた達が話し相手になるはずだ。それを、俺に勝手に押し付けてきたのは誰だ？

確かに俺は妹と話するのが好きだけど、あなた達はそれを見て見ぬフリをしてきた。今頃になって話し相手　とかのことを考えてんじやねえよ」

初めて聞きました。お兄ちゃんの怒ったところは、なかなか見れませんが。

でも怖くありませんでした。むしろ、かつこよかったです。

私のことを考えてくれるおにいちゃんが好きでした。言うことは何でも聞いてくれるお兄ちゃんが好きでした。けど、

「お兄ちゃん、お願い、行かないで。」

私はずるい女です。つくづく思いました。少しだけ兄の制服をつかみ離れたくないと意思表示をしました。

そして、お兄ちゃんは私の目を見て言いました。

「本当にごめんな。俺だってお前のそばにいてやりたいけど・・・俺は、行かなくちゃならない。

それは俺自身のためでもあるんだ。せつかくのチャンス無駄にしたいくない。だから、おねがいだ。」

目を見ればわかるんです。大好きなおにいちゃんのことですから・・・さっきと変わらない目で、覚悟で

話してきました。お兄ちゃんが離れていくことが怖かった。けど、お兄ちゃんに そばにいてやりたい ということを聞いて、私も覚悟を決めました。といってもお兄ちゃんに比べればちっぽけな覚悟です。

「じゃあ、お願いします。一ヶ月に一日でも良いから帰ってきて・・・
そしたら許してあげます。」

お兄ちゃんは黙ってうなずきました。私の最後の強がりでした。それに心を打たれたのか、それともおにいちゃんの覚悟に気づいたのかは、知りませんがお父さんやお母さんは何も言ってきましたませんでした。

こうして、お兄ちゃんのIS学園への入学が決まったのです。でもさすがに最終日は、寂しかったのでお寝ている兄ちゃんの布団に勝手に入り寝ました。そのときのお兄ちゃんの匂いはとってもいい匂いでした。

第4話外伝 妹の気持ち（後書き）

やっとおわりました。時間にして40分。駄文ができたと思います。
ドライアイが・・・

まあそんなことは気にせず。最初これを書いているときは、なんか
すごい方向に進んでしまっって一回消しました。そのときの文はいつ
か出そうと思っています。

そんなあれこれをしているうちにできた文章です。
少なからず本遍に影響させます。

誤字脱字、訂正あったらよろしく願いします。
次は、明日かな？

第5話 試験(前書き)

やっと死地(学校)より帰ってきたsirasuです。

今日はシャトルランをやりました。ちなみに85回でした・・・。

(体力ねえ)

走っているときに妄s・・・想像したものです。

それでは第5話どうぞ

第5話 試験

第5話

俺とエコーは、アリーナ内に着地した。そこから見る光景に思わず息を呑んだ。

アリーナ内に浮かんでいる百体の的　ピットにいるIS学園の生徒に圧倒されてしまった。実際このことは、極秘に行われるはずだった。しかし、生徒会長や生徒たちの強い要望があったので、こんなことに・・・。

そんなに俺の恥ずかしいところ見たいのかよ。てか、情報漏れすぎ！　学園内とは言え何でこんなことに？俺が起動させたところを見た生徒は　千冬sあー　織斑先生に口止めされたはずだ。

ハイパーセンサーで織斑先生達がいる建物を意識すると、目の前に広がるモニターにその建物の映像が映される。

嘘だろ　映像なのになぜか黒いオーラが……。絶対怒ってるよ、あれ。

「宙、なんか言いたいことはあるか？」

遺言を残せとでも？そんな感じにしか聞こえない

「どうした、言いたいことはないのか？なら・・・」

「は、はい　少し待ってください」

モニターに武器一覧を表示させる。『二丁拳銃』（ベレッタのよな感じ）と『ミサイル』の二種類。名前はなかった。『ミサイル』はどうやら脛あたりの側面から出るらしいので、手のひらに二丁拳銃のイメージ

って普通にできるかつっ！日常的に持っているならもだしも、普通の日本人にできるか！あつ　できるわ、エアガンがあるじゃないのひらに光が集まり、拳銃が生成される。それを、左右の手で一丁ずつ、つかむ。

おお、できたよ。結構簡単にそれじゃあ

「試し撃ちの許可を「いいだろう」くだ・・・」

即答だった。話の途中なのに言ってきたので正直、驚いた。追加で「あてるなよ」と織斑先生は言う。できるだけ当てないようなるべく数の少ないほうへ、撃つ。

ガン　反動で腕に衝撃が来たが、思ったより軽かった。すぐにISが弾道や速度、反動などを計算する。それをもとに、ISが勝手に弾道を予測してくれる。

「始め」ビーーーー

急に！？

織斑先生の独特な女性の低い声と甲高いブザーの音がアリーナに響く。

「ケンカで大事ななのは、相手より先に攻撃を当てることだ。」あの有名なケンカ●段の人の言葉だ。右手を前に突き出し、的に向かって照準をあわせ、撃つ。命中した。

確かに、言うとおりだな

続けて今度は、左手を同じように突き出し照準を合わせ、撃つ。これも当たる。ここまで来ればあせることはなかった。レベルも上

がっていくが、まだまだ序盤、あまり動くこともないし攻撃もしてこないで、ガアン ガアン ガアンと、撃つ。リズムよく響く銃声。その音と一緒に爆散する。

うーん これ一個いったい、いくらなんだろう？

と、考えてると、不意に響く警告音、モニターには、敵にロックオンされています の文字。それをハイパーセンサーの恩恵により確認すると、撃ってきた。今までまったく動いていなかった残響の足が、初めて動いた。右足を軸にして、身をひねるように回転。撃ってきた的に対して照準を定めて、撃つ。次々となる警報。その一つ一つに、どちらかの足を軸とした、踊るような回転をしながら。照準に納まった的から撃っていく。そんな攻防の中で……

これは・・・やったことがある。この感覚・・・一度どこかで・・・あっ思い出した。

「織斑先生」

「なんだ？」

さっきと変わっていない、怖い声だった。

「思い出しました。これは昔、束さんの家でやったゲームと同じです。そのときは確か・・・仮想空間の中でやったような。」

ピットがざわつく、どうやら俺の声は観客席にも聞こえるらしい

「どういことだ。」

「えーと、遊びに行ったときに「ゲームしてみない」と、声をかけられてやりました。そのゲームは、頭になんか変なものをつけて、体で操作できるタイプのゲームでした。」

さらにざわつく。

うう、一夏の言ったことが本当なら、この後には、質問攻めが来るはずだ。覚悟しとこう……。

「その時どこまでいった？」

「えーと、最高で59ぐらいでした。」

「そうか、わかった。それより、いつまで地面に足をつけているつもりだ。」 えっ？

「飛べとでも？」

「……………」

帰ってきたのは沈黙だった。

沈黙の皇帝、いや女帝？ 違う、肯定だ。何気にうまいこと考える俺。自画自賛乙。

それにしても、飛ぶイメージか……。あのゲームでは飛べなかったんだよね。飛ぶってどんな感じかな？ 浮く 感覚？ 水の中で浮く感覚でいけるか？

残響の足は、地面から離れた。浮いたのだ。しかも、いまだに回避運動しながら、攻撃していた。レベルは37を示している。

まだ、36機か。今度こそ、空を飛ぶイメージ 角錐をイメージする……角錐って何？

考えても攻撃は止まらない。むしろ撃ち落しているので、激化している。

考えても無理！！ 飛ぶイメージを摩り替えろ、頭で風を切る感じだ。

ぐん と、体が引かれる感覚。宙は空を飛んでいた。アリーナの中心まで上がる。その間にも何機か落としていたので、レベルは50。自己新まで、あと9。今までと同じように回転しながら、撃ってきたやつから撃つ。レベルは上がっても、撃つ直前と直後は止まる、これは何回もゲームをした経験だ。そして、ついに超えた。レベルは60、未知の領域だった。うれしさに高ぶる感情を抑え、心をしづめようとする。その時、警告音が大きく鳴った。

ビー――

気づいたとき、すでに遅かった。的からは、何機かが同時にビームが発射し、軸足となっている。右足集中、直撃した。ドン と、足が吹き飛ばされるような感覚。右足に直撃したので、装甲は吹き飛び生身の足が出ている。

バリア貫通、ダメージ98。シールドエネルギー残量、502。実態ダメージ高。

もちろんこの試験も、バトルと同じくシールドエネルギーが0になれば終わりだ。的のビームは、一つ一つは威力が小さいが、集中させればバリアーを貫くらしい。

くそっ 俺はあせていた。レベル60になってから、一発も当てることができない。警告音が鳴っても、反応できない。ロックオンをして残された左足から、今日始めて使うミサイルを撃つ。正直、神頼みだった。しかし、全弾撃ち落された。銃で撃つても当たらない、神頼みのミサイルも当たらない、攻撃はよけない。負の連鎖だった。撃てば撃つほど、動けば動くほど、何をすればいいのかわからなくなっていく。

くそっ くそっ 俺はこんなにも無力なのか？あれほどしてきた覚悟は何だのか？ISに乗れば、知れば俺の知りたいこともわかるからって、甘く考えていたのか？考えれば考えるほど悪い方向へ行く。

もうすでに、右足、左肩、バスターブレードみたいな両板は、消し飛んでいた。

「違う」

いつの間にか俺は口に出していた。自覚はなかった。
今までの様子を見て、ざわついていた観客は静まった。

「違う！」

さっきとは違う強い声で

「違う！！」

もっと強い声で

「俺は、俺の覚悟は、そんなちっぽけなんかじゃねえー！！！」

叫んでいた。

無常にも響く警告音、目の前で撃とうとしている的。その時、俺が見たのは、モニターに出た
フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

モニターに出た、希望の光だった。

第5話 試験（後書き）

ようやく終わりました。少しクサイかな？

長かった。気づいたら一時間以上打っていました。

タッチタイピングできないので、思考と文章のスピードが違っているように進みません。

タッチタイピング習得してー 作者心の叫び

誤字脱字、訂正あったらよろしくお願いします。

意見やアイデアも待ってまーす。

第6話 一次移行《ファースト・シフト》（前書き）

すいません。登場人物を変更しました。

すぐに出てこないの、見なくても良いかも・・・。

今日の投稿二回目です。

では第6話、どうぞ

第6話 一次移行《ファースト・シフト》

第6話

シールドエネルギー残量 100。実態ダメージ、レベル高。

板はもがれ、右足と左肩を奪われ、今にも落ちそうになっていた。悔しかった。何もできない自分が。機械相手に踊らされ、ぼろぼろにされ、八方手詰まりになったことが。

何のためにIS学園に来たんだ
目的があるからだろう

そう自分に言い聞かせた。けど、心のどこかであきらめていた。それが、本当に悔しかった。

的を相手に何もできないことが、これから先何もできない、と教えられているようで。

お前の覚悟はそんなもんなんだって教えられているようで。

「違う」無意識に言った。

周りが静かになる。

「違う！」自分に言い聞かせるように

「違う！！」あきらめることをやめるように

「俺は、負けたくない！」心のそこから叫んだ

その時、モニターに現れた

フォーマットトフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

の一文。わかっていた。勉強したからではない、本能が、魂が、そう叫んでいるんだ。押せと。半分無意識に、押した。

光に包まれる。

気持ちちが落ち着く。

目が完全に覚めた。

キィィイン 高周波の金属音。光がはじける。現れたのは、漆黒のIS。

形は、今までのとほぼ変わらない。無駄を省いた、四肢に、肩から背中についていた板。基本的なのはほとんど変わっていない。

変わったのは、腰の部分と板の部分、そして特徴的なのは、体中に走っている赤いライン。

腰は、前面に腰当。両腰と後ろ腰についた黒い短剣。両腰に、2本ずつ、後ろ腰に3本だ。

板の方は、全体的に太くなり、外側に赤いラインが入った。

警告音は止まっていない。すぐに回避行動を行う。今までとは違うISとの一体感、まるで本当に自分の体になったみたいに軽く動く。

これが、俺のISか・・・。

心が躍った。ISが自分のものになったからではない。応えてくれたことに対して。

「行こう エコー。絶対クリアしてやるよ。俺のためにも、俺に伝えてくれたお前にためにも、必ず」

武器は、ファースト・シフトしたときに消えた。だから、もう一度モニターに武器の一覧を出し、「二丁拳銃」をコールした。名前も決まっていた。

「一弦」右手の銃。威力、命中精度にすぐれている。

「二弦」左手の銃。連射性能、反動にすぐれている。

どちらも最初の時と同じ形ではなかった。銃身は伸びて、赤いラインが入っている。二丁は同じ形である。個性の出た、新たな武器「一弦」を的に向け、照準をあわせて、撃つ。

ガアアン 今までとはかなり違う、ビームの奔流。ビームは射線上にいる敵を打ち貫いた。レベルが一気に上がる。目まぐるしく動く。それに「二弦」を向け、照準をあわせ撃つ、撃つ、撃つ。

「一弦」よりも威力は低いが、弾をばらまくように撃ち前面の広範囲の敵を、壊滅状態まで追い込む。そして、さらに上がるレベル。もう目では終えないほど、早く動き体当たりまで仕掛けるようになった。

確かに、速いけどまだいけるはずだ。そうだろうエコー

残響はそれに応えるように背中板を横に倒し、肩より上に上がった。もはや翼のようだ。今までたたんでいたかのように存在した翼を広げ、加速する。的を追っかけ「一弦」と「二弦」で打ち落とす。今レベルは98。残り3機。アリーナ内を縦横無尽に動くのは、追いかけて撃つと時間がかかりすぎる。もう一度武器一覧を見る。

「フェザーミサイル」

「七弦」

「大正」

目線だけで「七弦」を見て、起動させる。腰にある黒い短剣が、体から離れた。有線によりつながっている「七弦」はひとつの的を、追いかける。つながっているワイヤーに触れ、一機が落とされる。さらに追い討ちをかけるように、もう一機を黒い短剣は切り刻んだ。レベル100、最高のレベルだ。もう見えない。

「フェザーミサイル」の準備をする。ロックオンするのではなくアリーナ全体の空間に対して撃つ。ある程度進むと、ミサイルは爆発し、名前どおり羽を撒き散らした。その一つ一つが爆発物のようであるが通ったと思われる道を爆発で教えてくれる。

「大正」を起動させる。2つの翼の上辺の赤いラインが離れる。そして、赤いラインは肩の上を通り前に出た。それに「一弦」と「二弦」を連結させる。

エネルギーチャージ20% これ以上はシールドエネルギー不足
エネルギー残量予測、5。

「はは、それだけありゃ十分だ。必ず当てる。」

ヒューイイーン エネルギーをチャージしている音だ。たまらなく心地がいい。照準をあわせ、

エネルギーチャージ完了

待ってましたといわんばかりに、トリガーを引く。赤黒い閃光が走り、最後の一機を貫いた。

それと同時にブーーーと、終了のブザーが鳴り響いた。

第6話 一次移行《ファースト・シフト》（後書き）

これで第一部は終了です。いやー長かった。本当にきつかった。

そーいや言い忘れていたけど、時間列はクラス代表決定戦が終わったところです。

まだ鈴は来てません。

相変わらず駄文ですが、読んでくださってありがとうございます。つぎは、明日更新予定です。（なんか知らんけど昼までWW）

自己満足の作品でしたが、皆様を満足させるよう、がんばります。末永く読まれることを・・・

第7話 転校初日いや、編入初日? (前書き)

また増えているお気に入り数・・・。
うれしくないわけがない!!

今日は、学校の推薦入学とやらで休み!! 書きまくるぜー

それでは、第7話どうぞ

第7話 転校初日いや、編入初日？

第7話

「いやーホントお前、すごかったよな」

「そんなことはねえよ。一度やってたんだから」

「それでも自己新だろ？すごいじゃん」

「あの試験で学校でやってるの？」

「さあ始めてみたぜ？」

・ ・ ・

と何にも面白くない話が進んでゆく。今は、部屋で一夏と二人きりで対談中。

改めて思ったけど、こいつの言ってる言葉は本当にアレだな。女に持てるはずだ・・・。

しかも、昔からの付き合いだ、アレは一夏の本心だってことぐらいわかる。何も考えないでもてるってどんだけだよ。お前は男の鏡だよ・・・。

確かにほめられることは、うれしくないわけではない。織斑先生にもほめられたが、実際あの試験をクリアしたのは、運によるものが大きいと思っている。なぜなら、撃たれたら終わるときに土壇場で設定が終了するのだから。もう、奇跡か、偶然か、わからない。

それとも俺の覚悟を知りたかったのか？まあ、ISには意識があるというし・・・。夢物語なのかな？エコー

首にかかっている、黒いペンダントを見る。形は、よく見るアクセみたいなので、紐の先に小物がぶら下がっている感じだ。隣にかかっている銀のロケットのペンダントと、見事に両方の良さを引き立てあっている。この黒いペンダントは、残響の待機状態らしい。

試験を終わってからすぐのことだった。ピットに戻りISから出て、それを一時的に山田先生に預けメンテナンスをやってもらおう。

どうも俺や一夏のISはどんどんメンテナンスをするらしい。まあそれで、いつも調子がいいのはうれしいことだが、なんか相棒を調べつくされている感じしか、しないんだよねあー。一夏はどう思ってたんだろ？

と一夏に視線を向けると、目が輝いていた。目がキラキラとしている。正直、気持ち悪い。なんとなく、初めておもちゃをもらった、こどもみたいだと思った。ゴスツ 一夏の頭に名簿がめり込む。ざまあww と前もやったように、心の中で言う。

「宙」

「はい」急に名前をよばれたが、条件反射発動。すぐに返事をする。
「今さっき言っていたことは、本当か？」

「嘘はつきません」

「そうか」と、小さい声でつぶやき考え込む千冬さん。ゴスツ

「織斑先生だ」

「はい」

見抜かれてしまったようだ。理由はわからないが、なぜか鋭いとき

がある。ピットで体と心を休めて約10分、ようやくメンテが終わったようだ。

「宙君、おまたせしました。はい、どうぞ」

と、差し出されるトレー。その上には待機状態の、エコーが乗っていたが俺には最初なんだかわからなかった。

「なんですか？それは」

「これは宙君のIS、残響の待機状態です。呼び出せばすぐに展開できますよ。ただし、規則があるのでちゃんと読んでくださいね。はい、これも」

どさつ。手に渡されたのは、タ●ンページ並の分厚さと重さの本。と、待機状態のエコー。
なぜかエコーのほうがおまけになっているような気がする。

IS起動におけるルールブックって書いてるけど、俺の地獄の1週間の時に渡された本と同じ感じのやつが来たし、これも覚えろとおかしいだろ！！ペラ紙だぞこれ何ページあるんだよ。

「今日はおしまいだ。明日からは学校だから、今日は帰って休め」

現在の時間は・・・3時！？今から部屋に帰り、これを覚えろとでも？

まったく人権もあつたもんじゃない命令を受けて、今一夏と話をしている。正直に言う、覚えるのをあきらめた俺は一夏との世間話に夢中になっている。編入初日は、質問攻めになったことや、3週

間も追っかけまわされたことも聞いた。聞いてしまったことをいままさらながら後悔している。

「ふわあ。すまん宙、俺寝るわ」

「ああ、わかった。おやすみ」

「おやすみ」

最初、こいつから話かけてきたのに先に寝るってどうよ？と、思ったがいつものことなのでスルーした。俺も寝ようと布団に入ったが、今日の試験の興奮が忘れられず、うまく寝ることができない。寝ようとするが、目をつぶるほど鮮明にあの光景を思い出してしまい、眠気が飛んでしまう。

あーもうくそっ 全然ねえし、一夏はバクスイしてるし。明日学校なのにどうしよう。編入？転校どっちだっけ……。どうでもいいことは、ほっといてまさか初日の授業で寝るというずうずうしいことは、できないし……。走るか

考えたことを即行動に移す。部屋を出ながら学校の中の走るコースを考える。結局、学校内を一周しようという結論に至り、走った。

はあ、はあ、はあ、やっぱり広いなここ一周しただけなのに汗が・

・

今は4月下旬。夜は冷え切っているのに宙の体は汗だくだ。長袖の白いシャツに黒いジャージという格好だが、汗で引っ付きかなり気持ち悪い。幸いにも、部屋には洗濯機や乾燥機もあるのですぐに洗濯することができる。部屋に帰ったら、洗濯してシャワーを浴びるか、考えていたら割とすぐに一周した。そこは、寮の裏側だったので表に回る。すると玄関に、人がいた。ショートカットの髪にま

だ幼さを感じさせる横顔。俺は知っている。

「おっ智花じゃん。どうしたの？」

ビクッという擬音語が出そうな勢いで背筋を伸ばした智花は、すぐにこちらのほうを向き、目と目が合う。こちらから見ると、右側で髪をリボンで結んでいる特徴的な髪型は、思ったとおりの人物だった。なぜかは知らないけれど、さっきからオドオドしている。

「どうした」

「あ、あ、あ」

呂律が回っていない。こういうときは、黙って待つのが対処法だ。仮にも付き合っていたのでそれぐらいは、わかる。まあ学校が違うからといって、別れたのだけれど、今でも好きだと思う。

「宙君はどうしたの？こんな時間に」

若干、舌をかんだが、だいぶ落ち着いたようだ。

「ちょっと眠れないからさ・・・走ってたんだよ。」

「そっそうなんだ」

まだ、落ち着いていないようだ。確かによくかむことが多いが、続けてかむことは稀だ。やっぱりあのときのことを、気にしているようだ。

「なあ、智花。あの時のこ」「ごっごめんなさい」と

話をさえぎったと思えば、今度は急に走り出し寮の中へ帰っていつ

た。

ん？なんか気に触ることもいったのかな？

と一人物思いにふけていたが、ようやく眠気が来たのでさっさとシャワーを浴び、洗濯して、寝た。

第7話 転校初日いや、編入初日？（後書き）

うーん、こんなのでよかったのだろうか？

あまり恋愛の描写は苦手なsirasuです。

高校一年生で彼女いない暦15年の俺に書けるとは思っていないのですが、作品が作品だけに、恋愛描写は、必須なのでがんばりたいと思います。

誤字脱字、訂正あればよろしく願います。

第8話 一夏曰く、セカンド幼馴染 前編（前書き）

今日二回目です。

言うこともないので・・・

第八話、どうぞ

第8話 一夏曰く、セカンド幼馴染 前編

第8話

「ではこれよりISの基本的な飛行操作を実践してもらう。織斑、宙、オルコット。ために飛んでみせろ」

初めての授業は、見せ場だった。いや、訂正しよう一夏とは違い、今回は2回目の俺は恥さらしの場合だ。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒と変わらんぞ」と、せかされる。

うう、無理だ。絶対無理だ。けどやらないと……。集中、集中。行くぜ、エコー

すぐに、胸から全身に薄い膜が広がっていく。約0.7秒の展開時間。光の粒子が集まり、IS本体となる。モニターが表示され、各センサーが五感を強化するような感覚した。展開が終わるころには、一度浮いていた体も地面についていた。同じく、セシリアもIS『ブルー・ティアーズ』を装備し、浮かんでいた。

おお、始めて見たけどカッコイイなあれ。ブルー・ティアーズ？
確か……。碧い雫？だっけ
ネーミングセンスいいなあ

そのころ一夏は、「集中しろ」と織斑先生に言われ、やっと装備した。一夏も空中に浮いている。

どうして？ 俺は地面に脚をつけているのに・・・。

と、疑問に思っている

「残響は地面に足をつけて戦うようですね。後の先と言ったところでしょうか。」

おお、わかりやすい説明ありがとうございます。思わず、手のひらとこぶしで、ポンとしてしまったじゃありませんか。

ちなみに、後の先とは簡単に言うとかウンター重視の戦い方のことだ。

「よし飛べ」と、織斑先生は命令する。

セシリアはすぐに急上昇し、はるか頭上で制止した。俺や一夏も後に続くが、かなり遅い

「何をやっている。スペック上の出力では白式や残響のほうが上だぞ」

お叱りの言葉を受けてしまった。一夏も、俺と同じような顔をしていた。

「一夏さん。イメージは所詮イメージ。自分がわかりやすい方法を模索するほうが建設的ですよ」

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体まだあやふやなんだよ。なんでういているんだ？これ」

「お前の言うとおりでが、ここから先怒られないためには、受け入れるしかねえぞ」

セシリア、一夏、俺の順番だったが、それよりも気になることが・・。

一夏さん！？ 俺にはないのかよ。まさか・・・箒と同じくこいつもホの字なのか？

確かに、何で浮いているんだ？今のエコーの翼は展開したときと変わらず閉じたままなんだけど・・・。

「説明してもかまいませんが、長いですわよ。反重力力翼と流動波干涉の話になりますもの」

「わかった。説明はしてくれなくて言い」

「そう？残念ですわ。ふふっ」

うがぁーイーイチャついてんじゃねえ。なんだ俺は無視か？無視なのか？あるいは村八と言う。

「一夏さん、よろしければまた放課後に指導してさしあげますわ。そのときは二人きりで・・。」

また、一夏！！しかも“また”？“また”だと、何だかんだ言つて、セシリアさんきれいだしな。うらやましすぎるぞ一夏！！

「一夏っ！いつまでそんなとにいる！早く降りて来い！」

いつのまにか箒が山田先生からインカムを奪い取り、怒鳴っていた。

授業中は回線オープンだしな……。まったく関係がない俺にも、怒鳴り声が聞こえる。イチヤつく声も、一夏に対する怒鳴り声もすべて聞こえる。なんかとばっちりを受けているようだ。

「織斑、宙、オルコット、急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から10センチだ」

「了解です。では、一夏さん、お先に」

また、無視された……。なんか本当に碎けそうだよ、俺の心。

しかし、何だかんだ言ってもセシリアさんなので今の命令を難なくクリアしている。「うまいもんだなあ」と一夏から聞こえる。確かに、イギリスのだっけ？ 代表候補生だけあるな。

「一夏、俺が先に行く。いいな？」

「いいのか？ 俺は良いけど……」

「ありがとさん。んじゃ行って来るわ」

急降下。俺の中のイメージは、頭を下に向け、加速。地面が近づいたら上半身と下半身を入れ替え、スピードを落とし、着地。よくガムがしているような動作だ。その、イメージを意識し集中する。イメージどおり、頭を下に向け加速する。ある程度落ちると、モニターに 限界高度です。今の状態なら墜落します。 の警告文。音はならない、なぜなら墜落は危険とみなされないからだ。

あんまり手前でも、チキンと思われるからな。ぎりぎりまでもう一度モニターに警告文が表示される。

今だ!!

上半身と下半身を入れ替えて、逆噴射のイメージ。地面すれすれに来たところで、さらに逆噴射のイメージをし、完全に着地する。お、と歓声の声上がる。ハイパーセンサーで織斑先生や山田先生、ついでにセシリアの顔を見ると、驚愕の表情をしていた。しかし、一番驚いているのは自分自身だった。

できたよ。嘘だろ・・・まあ、いけるとは思ったけど。それでも一発クリア？なんか俺スゲーな。

ギョーンッ

ズドォオンッ!!!

俺に驚いていたみんなの前にさらに驚くべき出来事が起こった。墜落したのだ、地面に。墜落した地面には、巨大なクレーターができている。そんな出来事にみんながくすくすと笑う。

ちくしょー何だアイツ、狙ってんのか？結局なんだかんだで、目立ってるし！

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。」

「……………すいません」

ざまあ W W 今月で何回使っただろうか？心の中でそうつぶやき、

一夏のもとに走る。そこでは、また修羅場が発生していた。箒とセシリアが一夏を取り合っている。激しくなる前に、織斑先生が止めたから良いものの、あのまま行けば・・・考えるのも恐ろしい。

「織斑、宙、セシリア武器を展開しろ」

さらに命令が下る。一夏は右手を左手でつかみ、セシリアは横に向かって、武装を展開した。そして、織斑先生が一言ずつ釘を打った。そして俺の目の前に立ち

「どうした、できないのか？」

「い、いえ、大丈夫です。少し見とれていただけです。」

正直者には福来る、ってね。

「さっさとしろ。貴様も怒らせたいのか」

来なかった・・・。

銃のイメージを、だらりと下げた腕の手のひらに集中する。昨日の実戦のおかげか、簡単にイメージすることができ、すぐに両手でつかむ。

「もっと早くできるようにしろ」

「はっはい」

「時間か。織斑グラウンドを片付けておけ、ついでに宙。お前もだ」

最終的には苦勞をする俺と一夏だった。

第8話 一夏曰く、セカンド幼馴染 前編（後書き）

読んでくださってありがとうございます。鈴が登場しない・・・

誤字脱字、訂正など待ってます。もちろん感想も受け付けますので
どんどんしてください。

第9話 一夏曰く、セカンド幼馴染 後編（前書き）

やっ和鈴の登場です。

アニメの声優違うくね と思うのは自分だけでしょうか

そんなことより第9話、どうぞ

第9話 一夏曰く、セカンド幼馴染 後編

第9話

俺の目の前では、いま痴話げんかが起こっている。さっきから箒の、「くいって感じた」が連発し、そのたびに一夏が「くいって何だよ」と講義する。しかし、箒は「くいって感じた」としか言わない。ついには、箒が歩き出し、一夏がそれを追っていく。それを見ているのも飽きたので、アリーナから出ようとしたとき、何かこっちを見ている存在に気づいた。特徴的なツインテールに、勝気な顔。鈴だ。

「おーい、鈴。何してんだ？」

ビクウツと、極最近見たような気がする行動をとり、こっちを向く、鈴。

「何かよう？ 宙」と、「まるで私はなにもしてません」ってな顔で言う。相変わらず、変わっていない

「それはこっちにセリフだ。お前こそなんでこんなところにいるんだよ」

「はあ？ それ人に言えるわけ、男の宙が何でここにいるのよ」

そういえばそのとおりだ。俺の情報は、この学園のトップシークレットだったんだ。世界に知れ渡っている、男でISを使えるのは、織斑 一夏だけと、言うことになっているのを完全に忘れていた。どうしようかと悩んでいると

「まあ一夏の関係者なんでしょ、総合事務受付って場所に案内しなさい」

懐かしい命令口調だ。

「オーケーです。こっちだよ。」

案内してやると、すぐに手続きを済ませ少し世間話をした後に、またこっちに戻ってきた。

「二組ってどこ？」

なぜか、案内役として定着してしまったので、場所を教えた。その後散々振り回されたのは、いうまでもない。

・・・

夕食の時間になったので、食堂に行くと『織斑 一夏クラス代表就任パーティ』が行われていた。公明の罨かもしれないが、俺は知らなかった。後日談だが、来るのが遅かったので何も知らないなら何も知らないままに、とクラスで決めたようだ。

何気にヒドイ・・・。

実際は、俺に一夏が取られるのを防ぐ為らしい。それなら何で一回、あんなに酷い事を、と言おうと思ったがやめておいた。

さて、そのパーティだが女子に囲まれた一夏に、クラッカーが乱射される。そのときの一夏の表情は、周りの顔とは違い3段階ほど暗かった。よく見ると、一組の中にも二組が混じっている。しかも、何の違和感もなく溶け込んでいるときたもんだ。女って恐ろしい・・・。一夏が助けてコールをアイコンタクトによって求めるが、俺のほうで、それに気づいた女子の視線に耐え切れず強制遮断。さらにがつくりとうなだれる一夏。本当にかわいそうだ。さらに、箒は、

機嫌が悪いらしい。修羅場だ、これ。そんなときに

「はいはい、新聞部です。」

新聞部の副部長 黛 薫子の出現により、箒の機嫌がさらに悪化。本当にドンマイ……。それから一夏は、アンケートをとられセシリアと写真を撮ることになった。

「 $35 \times 51 \div 24$ は？」 74.375 だろ、と計算をしていたら、ぐいっと女子に引っ張られる。

「え？ えっと・・・2？」そしてなぜか、ツーショットなのに入るクラスメイト。この間、わずか1秒にも満たないスピードでポーズを整える女子。

「ぶー、 74.375 でしたー。」

パシヤツと写真をとられる。団結力のいいクラスということがわかったところでパーティーは終わった。

・・・

次の日、

「織斑君、神代君、おはよー。ねえ転校生のうわさ聞いた？」

このとき俺は知っていたが、今言うのは無粋だな、と思い。黙っていた。転校してきてから、膨大な量の質問に答えていたら、いつの間にか女子と話せるようになった。ちなみに席は、一夏の隣だ。

「今の時期に？」

一夏は言う。その隣の奴がすべて知っているとは知らずに、おつか

れさん。

「そう、何でも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」と興味なさげに一夏は返すが

「代表候補生？」俺は違った。

「知ってるの？」

「いや。知らなかったよ、ありがとう」内心かなりあせっているが、平然を保って返事をする。

「やだなあー、お礼言われるほどじゃないって」

とそんな、他愛もない話をしていると

「その情報古いよ」今の俺の悩みのためが出てきた。そいつは、二組も専用機持ちがクラス代表になったと言うと、

「鈴・・・？お前、鈴か？」やっと一夏が反応する。

「そうよ。中国代表候補生、ファン・鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

「何かっこつけてるんだ？すげえ似合わないぞ」

あーあ言っちゃったよ。そこは言わなくても良いのに・・・そら見ろ！！起こったじゃないか。まったく

「はいはいはい、喧嘩はやめろよ。仲がいいのはわかったから」

「なっ何言ってるのよ」

なんとか、二人の間に割り込み、俺に攻撃を向けさせることで中和させる。こいつらは、本当に中学のときから喧嘩が多い。口喧嘩だから良いけど、毎回悪いのは一夏なのに、本人はまったく意識がないので、問題だ。

はあ、いい加減わかってくれないかな一夏。そろそろ気づいてもいいころなのに……。これで、箒、セシリア、鈴の三人が一夏争奪戦に入ったか、大変だ。修羅場がもっと酷いことに……。

もう一度、ハア、とため息をついたところで。ゴスッ！鬼が現れた。一組のみんなは音速で自分の席に戻り着席していた。セシリアや箒もまた叱り。取り残されたのは、俺、鈴、一夏だ。

「SHRの時間だ。教室へ戻れ」

急に小さくなった。鈴は、教室から出て行く。俺と一夏は互いにアイコンタクトをする。

「びびってるな」「ああ、びびってやがる」と、軽く笑っていると

ゴスッ　ゴスッと二回も響く打撃音。

「さっさと戻れ」

キ●タマが縮みこんだ。下品な言い方だが、本当にそうだったんだから仕方がない。このあとは、クラスメイトに質問攻めにあったり、質問攻めで心身ともに疲れきっている所に、授業が来て叩かれたりと、大変なことがあった一夏と俺だった。

第9話 一夏曰く、セカンド幼馴染 後編（後書き）

すいません。さっきからほぼ原作どうりに進ませてもらいました。つまらなかったと思います。次は、練習に1話使って、やっとな鈴との対戦ってところです。それかまた外伝を作ってみようかなあ

誤字脱字、訂正などあったらよろしくお願いします。

第10話 練習試合（前書き）

マクロスが！！やばい

面白すぎてやりまくるSirasuです。

けど更新は、忘れません

ではでは、第10話どうぞ

第10話 練習試合

第10話

「宙!! これは一体どういうことだ」俺のほう聞いてえよ。

「宙さん、あの中国人と、一夏さんの関係は？」あなたはいつから、俺を下の名前で呼んでいるんですか？

「彼女は織斑君の何？」セシリアさんが今俺に聞いているんですけど、同じ質問はしないで。

この状況を説明すると、一夏が鈴に会いに行ったため、一夏にするはずの質問の矛先が俺に来た、ということだ。あまりの質問の多さに、心の中だけしか対応できず口に出せない。

「待ってくれ、そんなに一度に聞かれても、聖徳太子か孔明ぐらいしか答えられないって」

「孔明？ 聖徳太子？」

と、クラスの半分以上が頭に？マークを浮かべる。

ええい、歴史の偉人の逸話も知らない女子共が!! けど、ラッキ―攻勢が弱まった。よし次からこうやって切り抜けよう。……ゾワッこの背筋が凍る感覚は。

「早く席に着いたほうがいいy」

スパパパパンと、言い終わる前に鳴る気持ちのいい音。クラス

帳の横一閃が繰り出されていた。

「座れ！！授業を始める」

ちなみに一夏はというと・・・すでに隣に座っていた。あまりの速さに気づくことさえできなかった。さすが、三週間も生き残った奴だ。この日の授業は、セシリアと箒がクラス帳打撃を何回も受けることとなった。理由は言うまでもない。もちろんその怒りの矛先は一夏に向けられた。

放課後

「よし、宙練習試合だ」

「待て待て待て、聞いてないぞ」何を言っているんだこいつは、急にやる気出しやがって、

「大丈夫、許可は取ってある」許可ってこんなにも速く取れてもいいの？

「何でそんなにやる気なんだよ」と、素直に疑問をぶつける。

「約束したんだよ、あいつに勝ったら、昔した約束の意味を教えてください」

昔した約束？もしかして「料理の腕が上がったら毎日酢豚を食べ

させてあげる」っていうやつか。こいつ、素で言ってるのか？ いまだにわかっていなかったとは・・・ドンマイ、鈴。

「どうした？ 頭痛いのか？」

「い、いや。なんでもない」

無意識に頭を押さえていたようだ。押さえたくもなるよ、まったく

「早く展開しろよ」

「ちょっと待て、なんで俺なんだ？ 別にセシリアでも良いだろう？」

ピットで待機しているセシリアの顔が、輝き。箒の視線が俺に焼きつく。

「セシリアとは一回やったから、今の俺に足りないのは実践だと思うんだ。」

いや、基本だと思います。って言っても、絶対引かないからなこいつ。この強引さを少しでも女に使っていただきたい。そして、仕方なく、仕方なくだぞ！！展開した。

「試合開始」

千冬さん！？ もしかして仕組んだの千冬さんですか？

「どこ見てんだ、いくぞっ」

突っ込んでくる一夏、もちろん真っ直ぐに。それを、地面すれす

れの水平噴射跳躍で、地面をすべり、かわす。そして、回避中に呼び出した「一弦」で撃つ。呼び出しも授業のおかげでかなり速くできるようになった。「一弦」の射撃をかわし、さらに突っ込んでくる、一夏。

「おまえは、真っ直ぐ来ることしかできんのか」

「最短距離だからな。しかも、お前なら接近していけば勝てる。」

どっからそんな自信が出てくるんだ？そんなんだから千冬さんに怒られるというのに……。

今度の突撃は、ギリギリでかわし、背中に向かって「二弦」を高速で連射する。しかし、白式は当たる直前で空中へ逃げた。

「当たるかよっ」

「はあ、さいですか」

ホント調子に乗ってんなあ。ため息しかでんよ、左手の癖抜けきってないし……。

すぐさま、モニターに視線で指令を送り、「七弦」を起動させる。それを、射出するが、簡単にかわされる、当たり前だ。一度とはいえ同じタイプの「ブルー・ティアーズ」を、四機も落としたのだからな。しかし、こっちは七機ある。しかも、射撃でなく切断を主とした武装だ。さっきから切ろうとするが、刃物と刃物だからに切れない。

「そっちはっか気が行ってるけど、いいの？」

両肩の「大正」を起動させ射撃体勢に入る。今回は「一弦」と「二弦」を連結させずに撃つ。もともと「大正」は、普通の射撃武器だ。前みたいに連結させるのは、チャージして撃つときか、命中精度を上げるときだけだ。「七弦」の対応に気が行っている一夏は、さらに「大正」の相手をしなければならぬ。しかも、「一弦」と「二弦」もいつでも発射可能である。「七弦」で動きを止め、得意距離である中距離や遠距離の射撃で相手を倒す。それが残響の基本的な戦い方だ。

「俺の勝ち なっ？」

俺は勝利を確信したとき信じられないものを見た。

一夏が目の前にいる。残響と白式は、結構な距離があつたはずだが、今はゼロに等しい。どうやら、緊急時加速イグニッションブーストを使つたらしい。すぐさま、「一弦」で反撃するが、「雪片式型」に防がれはじかれる。そしてそのまま、「雪片式型」は、バリア無効化攻撃を残響に与えた。試合終了の合図が鳴る。俺は負けた。

そして、ISを待機状態に戻した俺たちは試合結果に、反応する俺たち。

「よっしゃー俺の勝ちだ」と子供心丸出しではしゃぐ一夏。

「くそっはめられた」

「はめられたじゃない。馬鹿者が」

ゴスと、いつものクラス帳が頭にめり込む。

「まったく。勝つまでは油断するなといっただろうが」

そのとおりだった、最後の最後で、油断したから一夏の接近に気づけなかった。勝負の敗因は自分のせいだった。それを、相手のせいにしてしまった・・・

「ははっ最低だな。俺」

「ふっどうやら反省したようだな」

「はい。すいませんでした。・・・それより聞きたいことがあるのですが、一夏に進言しましたよね？」

勝負開始時に思った、疑問をいう。なぜなら、一夏は好戦的なタイプではない、いつも後出に回るからだ。そこも、モテル理由のひとつなんだろうが・・・。そんな性格を知っているからこそ今日の試合は予想外だった。

「知らんな、それより一夏。クラス対抗戦の日程表ができたので持って来てやったぞ」

はぐらかされた・・・。

そんなことよりも、クラス対抗戦の日程表が決まったので俺も一夏の頭の横から覗いた。そこには・・・一回戦一組対二組と書かれていた。それより俺の目を引いたのは、三組代表 雅 智夏の名前だった。

第10話 練習試合（後書き）

こんな感じで終わらせてみました。

この終わり方だと、次の話が短くなるような気がします・・・

誤字脱字、訂正あったらよりしくお願いします。

第11話 宙、智花に合いに行くとのこと（前書き）

明日は、マラソン大会だ！！

運動苦手なsirasuです。

しかし、運動はいいことです。なぜならネタがどんどん湧き出るから

というわけで、第11話どうぞ

第11話 宙、智花に合いに行くとのこと

第11話

クラス対抗戦の日程表を改めて見る。そこには、3組代表 雅 智花と、書かれている。

うん、見間違いではないな。確かに書かれているよ。漢字もあつてるし、そしてここが3組か・・・。

「こんにちは、雅さんいる？」

ガタタといすを跳ね上げる音が聞こえる。どうやら智花の席は、教室の一番奥の方らしい。(覚えとこう) 智花は、小走りでこっちに来ようとするが、ズダダダダダ 人の波に消された。

「雅さんとはどういう関係？」

「恋人？ 恋人なの？」

「どこまでいった？」

「キス？ それとも・・・」

「」「」「キヤー」「」「」「」

俺の周りを取り囲み、そして質問攻め。ここに来て数週間たったが、いまだに衰えることを知らない。しかも、勝手に想像してしまう始末、正直、手に負えません。

智花 サイド

今日は特に目立った授業はなかったので、親友の夏目 優と話をしていた。優は、とっても整った容姿をしていて、淡い黄色の髪をポニーテールにしている。それは、元氣よさを象徴しているようだ。性格は人懐っこく、明るくて、いつも彼女の周りには笑顔が溢れている。そんな彼女に私は憧れていたりもする。

「それで？どうなったの？」

今は、優に先日宙君に会ったことを相談をしているところだ。

「それ以上聞くのがいやで逃げ出しちゃった」優は今頭を押さえている。どうしたんだろ？

「はぁ、あきれた。何で逃げちゃうかなー」

「だから聞きたくなかったんだってば」

「聞かないと始まらないでしょうが」

怒られちゃった。何で怒るのかな？また頭を押さえてるし、

「こんにちは、雅さんいる？」

急に呼び出された。それも、私が知っている声で……。顔が熱くなっているのがわかる。どうしよう今のままじゃ恥ずかしい。落ちて私！！

「早くいきなよ。彼が待ってるよ」

ガタタと、いきおいよく立ちすぎて、いすが跳ね上がる。

「なっ何言ってるのよ？待ってないってば、よんでるの！」

「本当はうれしくせにー。今度はちゃんと話し聞いてくるのよ」

どうしよう、どうしよう、だんだん歩くのが早くなってるよ。顔の熱さも止まんないし……。
これじゃあ面と向かって離せないよおー。

ズダダダダ横からの強い衝撃に私は何されたのかもわからないまま流された。

智花 サイドアウト

「で？ 本当の関係は？」

「彼女？ 彼女なの？」

「いないなら私を彼女にしてー」

「「「「「キャー」」」」」」

さらに聞いてくる女子、そして暴走。まったく止まることを知らない人たちでした。よく見ると近くまで、知っている髪型が。俺は日本男子の平均的身長であるため、周りにいる女子より頭一個分だけ高いから、すぐにわかった。

「ごめんちょっとどいてくれるかな」

と、智花の近くにいた女子の肩に触れてどかそうとしたら

「触られた……触られちゃたよ。妊娠しちゃう」

「「「「「キャー」」」」」」

本当に止まらないので、一瞬殴ってやろうかな、と思ったけど実効に移すのだけはやめとこ……。なので「大丈夫だって、それぐらいで妊娠していたら少子高齢化が問題になるわけがないだろ」と、

冗談で言ったら

「え？ 宙君てば、少子高齢化止めるの？ やだー、そんなに産めるかなー？」

「産む前に受け入れないとね」

キヤ—」

冗談が通じない。あっやべ、本気でむかついてきたぞ、どうしようかな、一夏はこれに耐えてきたのか、さぞかしたいへんだっただろうな。って俺も被害者だけど・・・さっさと終わらせるか。

「ちよつとごめんよ」と、また女子の肩に触れ横へ軽く押した。「強引なんだから」と、聞こえてきたがもちろんイラツと来たので無視。

「あつ宙君。どうしたの？」

「いやー、クラス対抗戦の日程表を見たんだよ。そしたら、お前の名前が載ってるからさ」

「今、お前って行ったよ」

「お前ね。私は名前のほうがいいなあー」

「えーお前でも良いよ。そしたらさ、あなたっていいからね」

「「「「キヤー」」」」もうホントにどっかの宗教団体かと思うよ。

「うっ
うん」

「おめでとう。いやーお前がなるとはね、考えてもいなかったよ。いじめられてないよな？」

中学生のとき智花とは、ずっと同じクラスだった。そしてあれは一年生のときだったかな？ クラスメイトの女子が、委員長がめんどく

さいからって智花に強制的にやらせようと、いじめていた。そういう過去があるので心配で来てみたが、どうやら心配ないようだ。

ちなみに、そのいじめていた女子はというと、とある事件によってちょうど荒れていた俺の、格好の憂さ晴らしの対象となった。そのころは、毎日毎日けんかをしていたときだったので、もう言葉に表せないほどボコボコにしまった。今でも主犯の一人が泣きながら謝っているところを思い出せる、あのときの顔は・・・想像してくれ。

まあ、そのあとは祖父ちゃんにこっぴどく叱られて、力の使い方を教わったんだが・・・心の教育だったらわかるんだけど、習ったのは武術で、教われれば教わるほど、喧嘩が殴るだけの行為になっていたので、詰まらなくなったのでやめた。

祖父ちゃんは、これで良かったと思っているらしいけど、本当によかったのかな？この前も負けたことだし少し本気出してみようかな。

「大丈夫。今回は私から立候補したの、優もいるし」

「げっあいつもいるのか？」夏目 優 今、最も会いたくない人物だ。あれは歩く凶器だ、俺に会うだけで攻撃してくる。一応、親友だ。というより悪友かもしれない

「いるわよ。ここに」

「いたんだ、優。ヒサシブリデスナ」思わずカタコトに・・・

「何でカタコトなのかしら？」さすがは氷の女王と呼ばれた女、視線がいたい

「そんなことないよ。」何とか、カタコトを戻す。

そのときに、ニヤリと口元がゆがんだのを見てしまった。

「そう？それより何の用かしら？別れたんでしょ、智花とは」でっかい爆弾を落としていきやがった。

もちろんそんなおいしい情報を逃す皆さんではない。

「わかれたって」「うそー」「そうそう、ふったんだよ」おい、そこ。何ばらしてんだよ。「えーマジでありえない」「じゃあ、じゃあ今フリーってこと?」「そうなのよ」だからそこ! 何やってんだよ。智花泣きそうになってるぞ。

宙は思った。近くには、泣きそうになっている智花、そして爆弾を落としまくる親友。

どうすりゃ良いんだよおーーーーー

心の中で思いきり叫んだ。

第11話 宙、智花に合いに行くとのこと（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

断空我さん感想ありがとうございます。

これからも一日、最低一話更新でがんばります。

第12話 侵入者（前書き）

マラソン大会で慢心相違になっているsirasuです。（漢字あってたっけ？）

すいません。今回は、少し読みづらいかも・・・
いつも読みづらいと思っている方は、勘弁してください。文才がないので

ということで第12話、どうぞ

第12話 侵入者

今日は五月のいつだっけ？とにかく、クラス対抗戦当日だ。アリーナにはIS《甲龍》を装備した。ひんぬー少女がいる。

「何であんたがここにいるのよ」

ピットにいただけで何もしていないのにこんなことを言われてしまった。確かに、俺の存在は学園だけのトップシークレットということになっている。だから一夏曰く、セカンド幼馴染である転校生鈴はその事実を知らない。俺の存在は、確実に彼女の中のイレギュラーなのだろう。前会ったときは、一夏関係者と言うことで話しが通じたが、さすがにずっと学園にいたので疑われたようだ。

「一夏の身の回りをする係りの人ですけど何か？」と、あくまでしらを切ってみる。

「じゃあなんで授業受けてんのよ」うう、痛いところをつかれてしまった。

「一夏のために覚えてんだよ。それより来たよ、いとしの彼」

「かつ彼って」うん、わかりやすい反応ありがとうございます。どうやら、うまくかわしたようだ。よかた、よかった、本当によかった。なぜなら、さっきからずっと「何、他の女と話してんのよ」と、優のアイアンクローが決まっている。智花が何とか止めようとしてるが終わらないアイアンクロー。

ここで、アリーナ内に一夏と白式が入ってきた。そしてようやく俺も解放された。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスが両者を指定の場所に誘導する。すでにそこでは口舌戦が始まっていた。

「一夏、今謝るなら少し痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

「一応行っとくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

すでに臨界点だ。こっちが・・・「早く始まりなさいよ。何してんの？」さっきから興奮が治まらないのか、優が俺を殴っている。そして、智花はというと、緊張でさっきから固まっている。最終戦なのに今から緊張してどうするんだよ。

『それでは両者、試合を開始してください』

アナウンスとブザーが試合開始を告げる。ブザーが消えたころ、両者はぶつかった。「雪片式型」と青竜刀みたいなのがぶつかる。ガキーン、と弾かれたのは一夏。一夏は何とか練習で、できるようにクロス・グリッド・ターンなった三次元躍動旋回を決めて正面に捉える。

ドクン、何だこの感じは？ドクン、さっきから落ち着かない。胸騒ぎがする。ふと、首にかかっているペンダント・・・待機状態のエコーを見る。震えていた。わずかに、何かを知らせるように。

いや、待てどうして俺は今、エコーが何かを教えていると認識したんだ？

何の証拠もないのに、どうして？

「宙、あんたいったいどうしたの？」

優 サイドイン

「宙………宙！」

さっきから宙は反応しない。首にかかっている残響を見ている。いや、この顔は考え事をしている。いつだってこいつは、私の先を行う。いつもいつも、どうして？自分ひとりで悩むのよ。

あの時だって、あいつは自分ひとりで悩んで、傷ついたのにどうして……。不安なんだ、こいつのこう言うところは、あのときの二の舞になるようで……。

「宙、あんたいったいどうしたの？」

優 サイドアウト

いったいどれくらい考えたのだろうか、気づいたときは、優に声をかけられていた。何とか反応しようとしたが、

「どうした？そんな顔してらしくないぞ」俺はビックリしてしまった、あの優が心配そうな顔で俺を見ているからだ。

「どうした？それはこっちのセリフよ！！試合に集中しなさい。そのために呼んだんだから」

そうだ、俺は三組に行ったとき優に「智花を優勝させるのに手伝いなさい。アンタだったら、アドバイスの一つや二つくらいできるでしょ」確かにそのとおりだ。こいつは俺と、ずっと同じ学校だったから、俺の過去を知っている。「わかったよ。ケンカ殺法で良いか？」と返したので、こいつらと今試合を見ていたのだった。

それより、いったい何なんだ？この胸騒ぎは・・・。

「宙くんどうしたの？」やっと緊張から戻った智花が、俺を心配している。いつもいつも俺の心配ばかり、そういや彼女のころからそうだった。俺にとって過ぎたるものだな

「いや、何でもない。心配かけてごめん」くだらないことで、こいつらを巻き込むのはやめよう。もう二度と、巻き込みたくない。絶対のだ。

ドガアン 一夏が地面にたたきつけられた音だ。それから先は鈴の独壇場だった。一夏が突っ込んでも軽くないなされ、肩にある衝撃砲を撃たれている。当たりこそしないものの、完全に鈴のペースだ。

さすがは代表候補生名だけはあるな。しかし、胸騒ぎは終わらない。俺の杞憂であればいいが・・・

その時だった。

ズドオオオオンッ！ 突如、外からの砲撃によりアリーナのシールドが破られたのだ。

まさか、これが胸騒ぎの正体なのか

第12話 侵入者（後書き）

どーでしたか？読みづらかったと思います。

「わかってるなら直せ」と言われても仕方がないのですが、難しいです。

毎日日本読んだりして、勉強はしているのに、才能がないため進歩しないのです。

すいません。もっとうまくなるため、がんばります。

誤字脱字、訂正あったらよろしく願います。

第13話 侵入者 撃退（前書き）

ぐう、かぜが・・・からだを蝕んでいる状態のSirasuです。

外伝を書きたい！！書きたいけど体が・・・

それでは、第13話どうぞ

第13話 侵入者 撃退

第13話

アリーナに侵入者が入ってきた。しかも、アリーナのシールドを打ち抜いてだ。その侵入者は、ステージの中央に降り、その時の衝撃によって、もくもくと煙を立てている。

「な、何なんだ？何が起こって・・・」いまだに状況がわかっていない一夏は、混乱していた。すぐに鈴からの通信が入ったようで、落ち着きをだいぶ取り戻した。

「お前はどうするんだよ!？」どうやらオープン回線になったようだ。俺もいまだにプライベートチャンネルは、使い方がわからない。頭の後ろってどこ？

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ!」

「逃げるって・・・女をおいてそんなことができるか!」

はあ、そんなことを言うからもてるんだよ、お前は!!

すでに試合を見ていた生徒の中で混乱が起きている。このままではまずい。事情を知らない鈴の、目の前でISの使用は禁じられているし、どうにかしないと

「落ち着け!!」と、俺は叫んだ

いきなり大声を出されたので、驚いたのかこっちを見た。

「落ち着くんた。あせらなくていい、一人ずつゆっくりと避難しろ。わかったか!」

そうして、ようやく落ち着きを取り戻したのか、確実に避難している。最初は、正直怖かった。なぜなら今の世の中、女尊男卑の世の中だ。本当なら否定されたっておかしくない。けど、みんな俺の声を聞いてくれた。こんなときは、落ち着けないやつから先に死んでゆく、人を信じることができないやつから死んでいく。そんなことを俺は知っている。

「智花！優！早くお前たちも逃げろ」

「あんたはどうすんのよ？」こう返されるのを、読んでいた俺は「最後に逃げるから大丈夫だ。知ってるだろ？こういう時、俺は人の話は聞かないよ」

これ以上巻き込んでたまるか！二度と巻き込まないと決めたんだ。絶対に一人も死なせない。俺の前で死なせるもんか

そんな、俺の覚悟を感じたのだろう。「智花、行くよ。あいつは絶対聞かないわよ。だから速く」と智花を連れてピットから出た。周りを見渡すと、ほとんどの人が避難に成功したようだ。だからと言って、すべてが終わったわけではない。速くほかの人を避難させるために走った。そのときだった。

「きやああああ」

聞こえてきたのは甲高い声だった。それも聞きなれた鈴の声だ。すぐさまアリーナへ視線を向ける、するとそこには、倒れている鈴と鈴を守っている一夏が目に入った。

「織斑先生、ISの使用許可を！！」無意識に叫んでいた。緊急時に通信するための携帯で千冬さん呼び出す。

「それは無理だ。お前も速くそこから逃げろ。今教師のISがそっちに向かっているから大丈夫だ」

「何が大丈夫なんですか！？今、一夏が倒れている鈴を守っているんです。白式のエネルギーを考えたらもう時間ないなんてことは、とつくにわかっているはずですよ」対戦中に来たので、一夏の白式は、もうほとんどガス欠状態だ。

「それでも無理なものは無理だ。生徒を危険にさらされることはできない」

「罰は、何でも受けます」と、言い放ち携帯の電源を切る。これ以上話しても無駄と判断した結果のは行動だ。鈴が気絶していることを再確認する。

さつきから動いていないし、気絶している。これなら大丈夫だ。

残響を装備する。制服のままで行っただけで少しエネルギーが少なくなってしまったが、そんなことは関係なしに「大正」を起動させる。

遮断シールドレベル4 「大正」のエネルギーチャージ50%で破れます。

モニターに表示された情報を確認し、それを実行させる。その間にも、一夏のエネルギーは減っていく。

「くそっ、早くたまれ。たまれよ」

チャージ完了 いつでも撃てます。射撃タイミングを「一弦」「二弦」に接続完了

よし でたらめだが、シールドを狙い撃つ。強い衝撃が体にかかるが、残響が計算し、受け流す。赤黒いビームは、遮断シールドに穴

を開けていた。迷わずそれをぐり、一夏の元へ

「一夏！大丈夫か？」

「宙か、こっちは大丈夫だが・・・」

「わかっている。速く鈴を助ける！時間は俺がかせぐ」

『フル・スキン全身装甲』の黒いISに、「一弦」を撃つ。黒いISは、スラスターの尋常ではない出力で、それをかわす。続けて「二弦」を撃つが、さっきの二の舞になった。

くそっ、当たらない。どうすればいいんだ？もっと速ければ、接近戦の装備があれば・・・

普通ISは、最初に装備している『プリセット初期装備』だけでは不十分なので、『イコライザ後付装備』というものがあり、それを装備するために『バース拡張領域』がある。一夏のISはそれが、完全に埋まっていたが、俺のは違った。開いているけど装備できないのだ。理由は不明だ、無理やり装備しようとすると、まるでそこに装備があるようにISが拒む。だから、残響は初期装備のままだった。俺はあせっていた。攻撃がとどかないのは、精神的につらい。

「一弦」「二弦」 展開装甲可能
ウイング 展開装甲可能

・ 何なんだこれは？どういう意味なんだ？鬼が出るか蛇が出るか・

宙は、それを許可した。すると、両肩の翼が開き、さらにそこから二枚に分かれた。合計四枚の羽が残響を動かす。「一弦」「二弦」は銃身がグリップの部分と一直線になり、横に開き刃がスライドし

て出てきた。

これは、剣！そして翼か・・・

剣は多少不自然な形ではあるが、しろい片刃の刃は鋭く光っている。黒いISが急に、宙を殴ってきた。いつもの回避行動でかわそうとするが、翼の出力が上がっているのか予想以上に横へ動いた。

速くなっているのか？そうか、またエコーは応えてくれたんだ。なら迷うことはない、できなかった近接も、今はできる。よし行くな、俺は、近接攻撃の手加減なんてできねえぞ

もう一度殴ってきたので、それを、順手にもった「一弦」を使ってそらし、踏み込んだ。そらしたときに金属が擦れ合ういやな音が聞こえるが、気にしない。コマのように回転して懷から追い出そうとする黒いIS、だがそれはできなかった。

ゴン と、右腕が地面に落ちる音。そして、右腕を失ったためバランスを崩して倒れる黒いIS。モニターには、敵IS起動停止 の文字。宙は、踏み込んだとき、「二弦」を使い下から上に向かって、間接部分を切っていた。そしてさらに、操縦者がいるであろうと思われる部分に斬撃を加えていたのだ。そこへ、一夏が近づいてくる。オープン通信で「倒したのか？」と聞いてきたので「さあな、あんなのだからわからん。近づかんほうが良いだろう」と、返した。しかし、その忠告を聞かずに近づいてくる一夏、それと同時になる警告音。

敵ISの再起動を確認！警告！白式がロックされています！

振り向いたときすでに放たれていたビーム。そして一夏は、そのま

まじームの中に飛び込んだ。

保健室

「うっ……?」

「ようやく気がついたか。まったく、急に飛び込むから驚いたぞ。絶対防御があったから良いものの。無茶はするなよな」

一夏が目を覚ましたので、軽く注意し、現状報告をした。

「けが人なし、死亡者なしだ。けが人は、お前だけ」

現状報告を聞いた一夏は、ホッとしている。鈴は無事だったのだ。軽い打撲のみ……

「見舞いに来たのは、お前だけなのか?」落ち着いたのか、こんなことを聞いてきた。

「ふふっ、ちげーよ。今さっきまで、千冬さんがいたが職員会議で出て行ったよ」

そのときの一夏を見ている表情は、とっても柔らかだったのを印象深く覚えている。まだまだ、聞きたいことがあるようだ。次々に質問してくる。

「試合は、どうなったんだ?」

「覚えていないのか?あの時お前は、あいつの左腕と引き換えに意識を失ったんだよ。まあ、その後、何もできなくなったあいつは、先生たちに連れて行かれたよ」その後、あの黒いISがどうなったかは、神のみぞ知るってやつだ。

そして、クラス対抗戦は中止となった。もちろん、俺には厳しい罰が待っていたがな……

第13話 侵入者 撃退（後書き）

うまくかけたかな？

戦闘描写が短すぎるような・・・？

誤字脱字訂正よろしくお願いします。

第13話外伝 好きになったのは・・・ (前書き)

あはようございます。

外伝を書きたかったので、書いてみました。えー、かなり急いで書いたので、駄文です。そしてあまり本遍には、関係ないのでよまなくてもいいです。すぐに、戻るか、クリアボタンを押すことをお勧めします。

興味のある方は、読んでください。

外伝です。どうぞ

第13話外伝 好きになったのは・・・

第13話外伝

智花

私が宙君を好きになった理由は、助けてもらったからだ。普通ならそれぐらいでは、好きにならないだろう。けど、本当に好きになってしまった。

あれは中学一年生のころだった。私は、引っ越してきたばかりで友達がいなかった。入学式だったが、転校してきたみたいだ。知っている人もいなかった。つまらなかった入学式が終わり教室へ。ここでは、もちろん一人だった。ここは地元の小学校の何校かが、ここに来るようになっていて。なので、少なからず一人ぐらい知っている人がいる。けど私は、知らない人だけだった。

その中で、私と同じく一人だったのが宙君だ。そのころの宙君の見た目は、いかにも不良だった。ボタンは全開だし、関わるな!! というオーラみたいなのが出ていた。宙君は、何かが気に入らなかったのか、すぐに出て行った。

初めてのホームルームは、自己紹介だった。私は、普通にした。

「宙君？宙君はいないの？」

と先生が言った。ちょうど宙君の番だったようだ。けど、宙君はもういない。だから

「さっさっさ帰りました」

と言った。先生は、それを聞いて、宙君の自己紹介は後日してもらう事になった。

その後だった、地獄が始まったのは。クラス委員長を決める事になったので、誰かいないのか、と先生は聞いた。もちろん誰も上げたがらない。そんな空気を讀んだ先生が、

「まあ、すぐに決めてもらわなくてもいいから・・・うーん、一週間後また話し合いがあるからそれまでに決めておくように」

と、いつて出て行った。すぐにクラスは騒ぎ出す。

「お前やれよー」「やらねーし、お前こそすればいいじゃん」「絶対したほうがいいって」「やだーわたしできない」

そんな会話が聞こえる。けど私には、誰もいない。

「ねえあなた。この人じゃないでしょ？」と、たくさんの友達に囲まれていた人が話しかけてきた。

「そうですけど・・・」

「私たちと友達にならない？」

「ええっ良いんですか？」本当にうれしかった。こんなに、早く友達ができるとは、思ってもいなかったからだ。

「全然、かまわないわよ。当たり前じゃない」

「ありがとうございます」このまま一人でいるのは寂しかった。だから、これでいいと思った。

「だから、ひとつ言う事聞いてほしいのだけど」隣にいた人から話しかけられた。

「委員長になってくれない？」最初は、何を言っているのかわからなかった。聞き間違いだと思った。

「聞いている？委員長にならないかって言ってんの？」

「えっ？」意味がわからなかった。みんながやりたくないように、私だってやりたくないのだ。

「頭悪いの？委員長になれって言ってるの」徐々に言葉が悪くなっていく。威圧的になっていく

やりたくない。自分からは良いけど、人にやらされるのだけはいやだ。だから、はっきりといった。

「やっぱりたくないです。すみません」と、怖かったけど言い切った。

「はあ？何言ってるの？友達になろうって言ってるのよ」どんどん口調が強くなっていく。さっき話しかけてきた人は、こっちを黙って見ている。

「けっけど、友達はそんなじゃないと思います。そういう風に作るのは、違います」くさいけど、こんな事を言った。そしたら、みんなに笑われた。

「ドラマの見すぎじゃない？あんたみたいなやつに友達ができても思ってるの？もう知らないからね どうなっても」

と、意味深なことを言ってみんな、私のそばから消えていきました。怖かった。言葉の本当の意味もわからなかったから。

次の日

学校に来たら悲惨な光景だった。テレビでしか見たことないような机に落書きがされていた。『死ぬ』『消えろ』とかだ。私は黙って消した。一生懸命に消しているのが面白かったのか。クラス中の女子の笑い声がする。泣きそうだった、絶望した。こんな事が、一週間続いた。その内容は・・・思い出したくもない。

話し合いの日

朝のホームルームが始まる前に宙君が来た。あれから初めての登校だ。その日は、最終日だけに、激しかった。私のノートに大きく『死ね』の二文字。一週間も立てば気にならなくなると思っていたが、相当これは、私の心に刺さった。学校においてあったノート全部の全ページに書かれていた。教科書も破られ、ゴミ箱へ。そんなものは序の口だった、いろいろとヒドイことをされた。そしたら

「そいつ、いじめてんのか？」初めて宙君がしゃべった。

「それが？」宙君は私をいじめていた人に話しかけていた。

「いや、ちょっとな。おまえ、わるいことしたのか？」と、私がいじめられるきつかけを聞いてきた。けど答えられなかった。もうこれ以上何かされるのが怖くて、しゃべれなかった。心のどこかでは、あきらめていた。もう二度と戻れない事を・・・

バキッ 誰かが殴った音だ。

「私の顔を殴り・・・なあ？いじめて悪いことだよな？それならさ、ちよつと憂さ晴らし、してもいいよね」・・・は？」

バキッ ガシヤン

もう一度殴った音だ。しかも顔を、殴られた人は吹き飛び机に当たった。

「何、ちよつとした憂さ晴らしだ。いじめさせてくれよ、すつきりするんだろ？」

そこからはすごい光景だった。さっき殴られた倒れている人を、つかみ顔面だけを殴った。気絶しては、起こし、気絶しては、起こし、また殴った。その人は、顔面が赤く晴れていた。口からは血が出ていた。そうして、一通り殴りすむと、

「そういや、テレビでやってたけど、いじめって黙ってみている人も同罪だって」

にやりと口元をゆがめこう言った。そしてそのまま近くにいる人から殴っていった。逃げようとした人は、足に蹴りを入れ動けなくしたら殴り続けられた。時々、口から血が出て顔につくがまるで気にしない。そして宙君は全てを、私の前からなぎ払った。

「ごめんなさい、もうゆるして・・・」

さっきまでいじめていた人が、今度は泣きながら助けてといている。

「じゃあ、ひとつだけ聞こう。許したことあるのか？一度でも・・・」
「あっあるわよ。当たり前じゃない」誰が、信じるもんか。やめてって、いってもやめなかったくせに・・・

「ふーん？よかったね先生たちが来たよ。反省するんだな」ガラガラと、教室のドアが開けられる。

いじめていた人を投げ捨てた。そして私の目の前に立ち一言。

「ありがとさん、おかげで憂さ晴らしができた。」

このころはまさか好きになるとは思ってもいなかった。

一ヵ月後

宙君の謹慎処分がなくなった日、宙君は登校してきた。

「おはよう」

誰も挨拶しない。

「おはよう、いじめられてた人。」

「わっわたしは、智花って言う名前があるの」

「ふーん、そうなんだ。興味ないや」

そう言い。私の前から消えていった。それから、毎日話しかけていた。「何で、話してくるの」と聞くと、「お前しかいないから」と答えた。このとき、少しだけうれしかった。誰かと話すことができると思った。

毎日毎日話しかけられて、ようやく気づいたことが一つあった。彼は、本当は優しくかった。何気ない言動は、必ず私のことをよく見ている。例えば「髪切った?」とかだ。そして、ケンカの時だって自分から殴ろうとはしなかった。何度か話しているときに上級生に絡まれたこともあったが、どれもこれも宙君は、降りかかってくる火の粉を払っているだけだった。あれから半年後、私はいつの間にか、ずっと宙君の隣にいた。宙君の隣なら、誰も寄ってこない。それでよかった、こうなることを望んでいた。人が嫌いだったのに、信じることもなんてやめていたのに、こんなにも、誰かと共に過ごす時間がこんなに必要な時間になっていたのは、宙君のおかげだ。だからこのときに決めたのだ、どんなに遠くたっていいこの人の目が届く範囲にいれば、と。その後、私は告白した。宙君が、彼氏になっってから聞いた話だと、「いじめられているのがわかったから、助

けようとしたんだよ。実際は、殴りたかったただけだったからかもしれないけどね」

最終的には、ふられたが、いや嫌われたかもしれないが、それでも宙君を嫌いになることはない。

第13話外伝 好きになったのは・・・（後書き）

読んでくださった皆さん、ありがとうございました。こんなだ分、
本当なら出すべきではないと思ったのですが、一応書いてしまった
ので出しとこうと思ったんですよ。

意味が通じたかな？通じればいいんですけど・・・

次の話は、今日中に出します。昼ぐらいかも・・・

第14話 転校生は男!?(前書き)

飴が足りない!! 昨日から風邪を引いて、のど飴に依存している s i r a s u です。

さっきも言ったように、飴が足りない!! ので、買いに行こうかな と思っています。

それでは、第14話です。どうぞ

第14話 転校生は男!?

第14話

「ただいま」

俺は、一夏が家の様子を見るところなので、ついでに妹に会いに来た。

「お帰りなさい」

わが妹が、真っ先に返事をしてくれた。家で待ってくれる人がいるのは、いいことだな。

「どうしたの?」 どうやら暗い顔をしていたようだ

「ん? ああ、なんでもないよ。それより部屋からでて良いのか?」

香は、体が弱い。だから医者に、あまり動くな、と言われていたはずだが

「うん、調子がいいときは少しずつ動けっといわれたの」 調子がいようだ。いいことだ、元気なのは。

「そうか、よかったな。治っているのかな?」

「たぶんそうだと思う」 うれしそうに笑っていた。

最後に「よかった」とつぶやき、家に上がる。久しぶりのわが家だ、前までは気になっていなかった匂いが今はわかる。香の匂いだ。両親はただ今仕事中よって香との二人きり、これならゆっくり話すことができる。その後は、昼飯を作ってやり一緒に食べて一夏がくるまで妹の質問にこたえていた。俺の女性関係ばっかだったような・・
・まあ、気にしたら負けかな?

ピーンポーン「宙、いるか？」

「おお、いるぞ」

一夏が来たようだ。香が悲しそうな顔をして見上げてくる。もともとそんなに背が高くないので、ほとんど無意識に上目遣いをする。時々ねらってないか？って思うときもあるが・・・

うう、そんな眼で見んなよ。行きたくなくなるじゃないか

「大丈夫だって、すぐに帰ってくるさ。約束しただろ？」

「・・・うん、わかった」それでも、まだ割り切れていないのか、悲しい顔のままだ。

「俺のことが心配か？」単刀直入に聞いてみた。素直になったほうが良いよね。

「うん」

「そうか、じゃあ俺は、まだまだなんだな？妹に心配されるなんて・・・」

「違う、そういう意味じゃ「じゃあ、何？」・・・お兄ちゃんはズルいです」どうやら、あきらめたようだ。

「ズルい？何が。そんなに心配ならお前も来たら良いのに・・・」しまった。地雷を踏んでしまった。

しばらくの沈黙。先に香が口を開いた。

「治ったらね。じゃあ、いつてらっしゃいお兄ちゃん」少しだけ元気になっている。よかった。

「ああ、行ってくるわ。ちゃんと約束は守るからな」

俺は、香に背中を向け玄関へ行った。振り返ってはいけない、振り

返れば行きたくなくなるのがわかったからだ。・・・もっとゆっくりしていきताかったな。

時は変わって今、寮にいる。朝ごはんもすでに済ませたので後は、SHRまでにクラスの行くだけだ。一夏は、鈴に誘われ先に行った。

俺を誘ってくれるやつ、なしっと。自分で言ってて、悲しくななんてならないよ。寂しいけどね・・・

そんなことを考えても意味がないので、教室に行くことにした。部屋を出たとき、俺はすぐに異変を感じた。女子が俺の姿を見ると、急にびくびくするのだ。固まって話をしているグループにあいさつしたら

「宙君!？」

「どうしたの?そんなに驚いて」

「なんでもないよ。ねえみんな。ハハハ」

と、なんか白々しい。笑い方もへんだ。

隠し事か?それでも仲間はずれみたいでいやだな。

と、考えていたら教室に着いた。そこでも女子は、俺を見た瞬間ビクツとなる。ホントにやめてほしい、軽くいじめの領域だって。

「諸君、おはよう」織斑先生がやってきた。すぐにみんなは、あいさつしすばやく席に着く。小さい軍隊みたいだ。そういつている俺も、席についているのだから・・・

そして、少しの説明をした後ホームルームの役割を副担任の山田先生にバトンタッチする。そして、山田先生はあわてて開始する。いっつも思うが、この人は先生やってて良いのか？

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です」

「えええええっ！？」みんなが驚く。けどさ、俺思うわけよ。何で一組ばかりなんだろう、と。そんな顔を、俺と一夏はしていたのだろう。

「一人は理由がありまして・・・すぐにわかると思います。もう一人はどうしても一夏君のクラスが良いということですよ」と、山田先生に悟られ、補足説明を受けた。

するとどうだろう。一夏が急に震え始めた、理由はとっても簡単。セシリアと箒が、凍りつくような視線を集中させているからだ。顔こそ笑っているが、目が・・・。本当にかわいそうなやつだ、と思っではいるが、俺も一夏に肘をうりうりと入れている。そして転校生が入ってくる前に、顔を伏せた。理由はめんどくさいからだ。だって、俺の存在は知られてませんから・・・それでも興味あったので少しだけ見えるように顔を伏せた。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

と、懇切丁寧な、単純な転校生のあいさつを受けた。転校生は、にこやかな顔で笑っている。人なつっこい顔。貴族みたいな顔立ち。髪は金髪で、それを首の後ろで束ねている。体は華奢で、すらっと伸びた足がかっこいい。印象は貴公子のようだ。そして、一番目を引くのが、男の制服だ。

「きゃあああああああ」

衝撃波としか思えなかった。高い声と音量が、本当にやばい。その後も、「男子が増えた」とか何とかで、騒いでいる。元氣、そうとしか表現できないほど、騒いでいる。まあ、それを途中で織斑先生が止めた、止めなかったらいつまでも終わらなかっただろう。と俺は思う。そして視線は、もう一人の転校生へ集中した。輝くような銀髪を腰までおろしている。左目の黒い眼帯は、某アクションゲームの主人公、蛇さんが使っているようなものだ。右目は赤いが、冷えている。その人は自己紹介を、織斑先生に促され、ようやくした。

「ラウラ・ボーデヴィッツだ」

それだけだった。クラスみんなは、キョトンとしている。当たり前だろう、自己紹介ならもっとすることがあるはずだ。例えば、出身地など、ここに来た理由とかいっぱいあるはずなのに。で、そのラウラとか言う人は、

「！ 貴様が」

こっちにやってきた。一夏の目の前に立ち、そして

パシッ

止めた。急に一夏に殴ろうとしたし、一夏も反応できていなかった。ので、ラウラとか言う人の平手打ちを手首をつかむことで止めた。

「一夏、少しは反応しろよ。わかるだろそれくらい」

クラスのみんなや一夏もポケーとしている。平手打ちを止められた本人は、我に返りつかまれた手を解こうとしている。もちろん、女が男の握力にかなうわけがない

「急に殴るのは、タブーでしょ。軍人さん」

自己紹介では、言ってなかったが、半分確信して言った。どうしてかというと、眼帯がアレだからと言う理由ではない。体の芯が入っていたからだ。武術や戦闘訓練をしていれば、体に芯が通る。それは癖のようなものだ。当たられたのがびっくりしたのか、片目しかない目を見開いている。

「ん？なんか不思議な事いった？」

「「男？（だと）」」

転校生の二人が口をそろえて言う。しまった、めんどくさい事を避けるため顔を伏せていたのに・・・うっかり反応してしまいこの様だ。

「「どうして（なぜ）男が（男なんかが）ここに居るんですか？（居るのだ!）」」

まただ。なんかこの二人の転校生息びったりだな。仕方がないのだろう。何回も言うが俺の存在は知られていない、こうなる事くらい予想できたのに・・・しくじった。

「そいつは、織斑の補佐だ。もちろんISなんて起動できない。私が、織斑が一人がいやそうだったので呼んだんだ」

ナイスフォローです、千冬さん。二人からは見えないように親指を

立てる。

「一夏の親友の宙といいます。今言われたとおりなので心配しないでください」と、手を離して軽くお辞儀をした。

今日は、驚いた顔を見るのが多い一日だった、

第14話 転校生は男!?(後書き)

どーでしたか？

最近お気に入り登録数が見るたびに増えているのでうれしいです。
これからも失望させないようにがんばりたいです。

さて、話は変わってアニメの話に入りたいと思います。

アニメ原作無視してるよね？と、5話を見て驚きました。

まあ、僕も結構無視しているので人の事いえないんですけど・・・
ww

誤字脱字訂正あったら、よろしく願います。

今日は、結構調子がいいので・・・4時ぐらいかな？投稿します。

第15話 先生の実力（前書き）

プロットを書いてて思ったんですが・・・
最後のオリキャラ 葵の出番は？しまったああー！！！！
完璧に忘れていた。プロットは、25話ぐらい行ってるのに・・・
書き直します。

それでは、第15話どうぞ

第15話 先生の実力

第15話

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか。そして・・・」俺のほうをにらみつける。

「貴様は、私を馬鹿にしているのか！」つかまれていた、手首を軽くさすり、そう言ってきた。

「馬鹿に？お前を？するわけないじゃん。女の子だからやさしくしてあげたのに、激しいほうが好きなのかな？」俺は、幼馴染が殴られるのを黙ってみていられるやつじゃない。軽く怒っている。クラスのみんなは、「キャー」とか何とか行ってるけど、無視無視。

「ふんっ」顔を真っ赤にして、こちらをにらみつけてきた。そして、去っていた。

「あーゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて大にグラウンドに集合。今日は、二組三組と合同でIS模擬戦を行う。解散」

と、織斑先生の言葉で、波乱？の自己紹介は終わった。

「織斑。宙。シャルルの面倒を見てやれ。同じ男だろう」そうだ、今からこのクラスは、女子の着替えタイムだ。早くこの場から移動しなければならない。

「君が織斑君？はじめまして。僕は、・・・」とゆっくり自己紹介しようとしたので

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから」一夏が言う。

「一夏の言うとおりで。さっさと更衣に言ってこないと」俺もそれに続いた。

そして、一夏はシャルルと教室を出て行った。俺も、と考えたが今日は合同。俺のことを知らない人が、三人もいる。そのままグラウンドに行こうとしたら

「宙君どうしたのいつまでもそんな所にいて？もしかして着替えが見たいとか・・・」しまった。つかまってしまった。

「おー、将来の婿さんになるのなら見せても良いよ？」と、のほほんさんが言う。

のほほんさんって言うのは、いつもいつも、ぶかぶかの服を着ているのが印象的な女子だ。長すぎる袖は、完全に手を覆っている。あだ名は、一夏がつけた。

「まさか、少し考え事をしてただけだよ。ごめんね早く行くよ」と、言い。さっさと教室を出た。

さっきから廊下が騒がしいが、たぶん一夏とシャルルが逃げているのだろう。本当に元気な人が多いな・・・。一夏とシャルルの無事を祈りつつ、人がいない道をとおり第二グラウンドへ行った。

第二グラウンドに到着。俺一人だった。当たり前だ、俺は、着替えずに来たから。けど、広いグラウンドに一人だけたっているのは、寂しい。そんなことを考えていたら、千冬さんがやってきた。

さすが教師。誰よりも早くここにくるなんて、まじめな人だな・・・と、感心していた。

「おい、宙」急に、名前を呼ばれた。

「はい、何でしょうか？」

「お前は、ここで見学している」と、グラウンドの端っこを指差し

命令した。

「はい、わかりました」授業に参加して、3人に怪しまれてもだめだしな・・・。

そして、徐々に集まってくる生徒。今では、グラウンドはスク水みtainなISスーツを着ている女子がたくさんいる。

一、二、三組合同なのにグラウンドが半分も埋まらないってどんだけ広いんだよ。しかも、第二グラウンドだぞ。これがあと何個もあると考えると、いったいどれだけ広いんだよ。

一夏たちが送れてグラウンドにやってきた。そして、一夏に対して、セシリアと鈴が話しかけている。本当にうらやましいやつだ。あんなに簡単に女子に囲まれるとは・・・。少しの間話していると、おもむろに織斑先生が近づいていく。そして、

「安心しろ。馬鹿は私の目の前にいる」

バシャーン と、クラス帳打撃が二人に決まったのは言うまでもない。

・・・

「では、本日から格闘および射撃を含む実践訓練を開始する」

青空の下で織斑先生の声が響く。俺は、グラウンドに端っこで小さくなっている。なんか、惨めだな・・・。

「嵐！オルコット！」と織斑先生が言う。二人は、しぶしぶ前に出てきた。どうやら今から模擬戦を始めるようだ。けど、二人はやる気がなさそうだ。さっきからなんか、ぶつぶつとつぶやいている。

そこへ織斑先生が近づくと、

「やはりここはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットの出番ですわね!」 「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね! 専用機持ちの!」 と、なんかわかりやすいぐらいたる気を出した。どうせ千冬さんが「一夏に良いところ見せれるぞ」とか何とかいったんだろう。二人は、すでに敵意をむき出しにしている。

キィイイン……。何の音? と音のした方向……。空を見上げてみる。

「ああああーっ! どっどいてくださいーっ!」 落ちてきた。しかも一夏の方へ、

ドカーン! どうやら一夏は、白式を装備して難を逃れたようだが……。山田先生を上から覆いかぶさるような体制になっている。しかも、片手が豊満な胸に……。それを見たセシリアと鈴がISを起動させる。後ろに黒いオーラが見える、ゴゴゴってオーラが……。そして、俺は地面を見た。

何をしているのかって? もちろん、いい感じの石ころがないのか探しているんだよ。

考えていることは同じなのか、セシリアが「スターライト Mk. ?」を撃つ。一夏は危険を察知したのか、かわすが、すぐに鈴も青竜刀そうてんがけつ「双天牙月」を連結させ投げる。それもギリギリでかわされた。そのときだった、ちょうどいい石ころを見つけた俺は、

「いざ、日輪の力をかりて。必殺のストレートオー!」 思いっきり、振りかぶって投げた。必ず殺すと書いて必殺のストレートが一夏を襲う。セシリアと鈴がこっちを振り向き、親指を立てる。

シュンッ！俺も驚くほどのスピードが出た石ころは、一夏にどんどん近づく。しかし、それは当たらなかった。上体をそらし、かわす。しかし、無理にそらしすぎたため倒れた。そこに、「双天牙月」が戻ってくる。形状が形状なだけにブーメランのように戻ってくるのだ。倒れている一夏に戻ってくる「双天牙月」。あっ、死んだな一夏、と冥福を祈ろうとしたら

ドンッドンッ！鳴り響く二つの銃声

山田先生が五十一口径アサルトライフル「レッドバレット」を撃っていた。撃ち離れた弾丸は「双天牙月」にあたり、軌道をそらした。ほかの人たちも驚いている。あの、山田先生が落ち着いた表情をして打ち落としていた。その事実が俺たちを驚かせた。あの、山田先生がだ。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は造作もない」

「むっ昔のことですよ。それに代表候補生止まりでしたし……」
衝撃の事実発覚！！なんと山田先生は、代表候補生だった。みんな口をあけてポカーンとしている。

「さて、小娘どもいつまで惚けている。さっさと始めるぞ」
「え？あの、二対一で？」「いや、さすがにそれは……」と反論する二人。

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」いや、それはありえないだろう、と俺は思っていた。だって代表候補生だし、二人の実力も知っている。

試合が始まる。そこから先は驚きの連続だった。射撃だけで鈴とセシリアを誘導し、ぶつける。そしてそこに止めのグレネード。二人は地面に落ちてきた。そこでは、みにくい話し合いをやっている。会話の内容は聞き取れなかったものの、二人の評価が落ちていくのは、わかった。

「さて、これで諸君にもI S学園教員の實力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

と締める。そして授業は、衝撃的な事実と共に始まった。

第15話 先生の実力（後書き）

どーでしたか？

文才がほしい・・・マジで。まあ、とにかくがんばります。

誤字脱字訂正、よろしくおねがいします。

第16話 正体は？（前書き）

今日も死地（学校）から帰還したSirasuです。

今日は、授業中にプロットを書いていることが先生に見つかりそうになりました。

あせりましたぜー

それでは第16話、どうぞ

第16話 正体は？

第16話

授業が開始された。

「専用機持ちは織斑、オルコット、シャルル、凰、ラウラだな。では、グループになって実習を行う。各グループリーダーがやること。いいな？では、分かれろ」

もちろん、俺の名前はない。そのことをみんなわかっているのか、俺の名前を口に出さない。気遣いは、うれしいのだが・・・軽く無視されているような気分だ。その後、女子たちは一気に二人の元へ集まった。一夏とシャルルだ。確かに、集まるところは指定されていないが、それでもこれだけ集まるとは・・・それに嫌気がさしたのか千冬さんが、

「この馬鹿どもが・・・。出席番号順に一人ずつグループに入れ！順番はさっき行った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンドを百週させるからな！」

本気でやりそうな言い方だったので、蜘蛛の子を散らすがごとく移動した。そして二分とかからないうちに専用気持ちの元に集まった。そこでは、

「やったあ。織斑君と同じ班っ。名字のおかげね・・・」

「うー、セシリアかぁ・・・。さっきボロ負けしてたし。はぁ・・・」

「凰さん、よろしくね。あとで織斑君のこと教えてよっ・・・」

「デュノア君！わからないことがあったら教えてね！ちなみに私はフリーだよ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

と、いろんな声が聞こえる。唯一聞こえてこないのは、ラウラの班だ。張り詰めた雰囲気が漂っている。人とのコミュニケーションを拒んでいるオーラ。生徒たちへの軽視をこめた冷たい眼差し。さっきから一度も開くことのない口。さすがのあの元気な人たちも、立ち向かうのはやめているようだ。少しかわいそうに思えてきた。

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を一班一体取りに来てください。数は『打鉄^{うちがね}』が三機、『リヴァイブ』が二機です。好きなほうを班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

と山田先生が言った。山田先生がいつもより数倍しっかりして見えるのは気のせいだろうか？さっきの模擬戦がそう見させているようだ。

「各班長は訓練機の装着を手伝ってあげてください。全員にやってもらうので、設定でフィッティングとパーソナライズは切ってあります。とりあえず午前中は動かすところまでやってくださいね」

本当にしっかりしているように見える。いかにも「仕事のできる女」のオーラが見えている。そして、訓練機がいきわたった後、ようやく実習が始まった。各班好きなようにやっている。ときどき、千冬さんが見ているが、たたかれる人が続出。しかも、一夏の班とシャルルの班からばかりだ。男の班になったら最後、女子たちは止まらないので千冬さんにたたかれてばかりだ。ドンマイとでも言うべきか・・・

「宙!!」いきなり織斑先生に呼び出された。

「はい、何でしょうか」条件反射発動っ。ああ、俺って情けない
「ボーデヴィツヒの班が遅れている。手伝ってやれ」当たり前前命令口調。もとより反論できません。

「はい、わかりました」

早速、ボーデヴィツヒの班に行く。その班の女子は、やっと助けが来た見たいな感じで俺に近づいてきた。

「宙君、教えて」と、みんなが口をそろえて言ってくる。ボーデヴィツヒの班は三組の班だったので、優と智花もいる。

「じゃあ、順番どおりにやろうか。一番の人こっちに来て」と、訓練機の前に立ち言う。そこで、ボーデヴィツヒに一言だけ言っただけで終わった。

「おまえさ、教官の命令を無視すんの？」案の定、かかってきた。
「なっそんなつもりは……。それより、男である貴様が教えることができるのかっ」さっきのことをまだ怒っているようだ。

「教官といていた人の命令を聞かない人よりできるよ……」と、軽い口調で言った。

「馬鹿にしているのか貴様は!!」

「はいはい、そうそう上手だね。そのまま歩いてみようか。重心を前に軽く倒すような感じだよ」と、一人目がようやく装着したようなので、ボーデヴィツヒの話を無視して手伝った。もちろん、それで食い下がるようなやつではない。

「人の話を聞いているのか」相当ご立腹のようだ。

「俺はさあ、幼馴染を殴ろうとするやつは嫌いなんだよ。あっ訂正していい？人を殴ろうとするやつね」その言葉は自分にも刺さったが、そのまま二人目を見ることにした。

「きつ貴様!!」織斑先生がいるからか手を出してこないの、無視して早く終わらせようとした。

「では午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うで、各人格納庫で班別に集合すること。専用機持ちちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散。それと、宙はこの後私の元へ来るように」

そして、午前中の授業は終わった。俺は、織斑先生に呼ばれたので近づく。他の生徒はすでに昼食を取ろうと、散っている。

「織斑先生、何ですか？」素直に質問してみる。

「お前は、午後の授業は来なくて良いぞ。その代わりに、残響のメンテナンスをしている。わかったな」

「はい、わかりました」もちろんここでも。条件反射発動っ！なんか久しぶりの感覚だよな、さっきも・・・

場所は変わって屋上。普通の学校は、屋上は危険とかなんかで、封鎖されているはずだがIS学園は違った。整備されているし、円テールブルまである。なぜか今日は、貸切のようなので、一夏、俺、箒、セシリア、鈴、シャルルの6人で食事を取っている。昼飯は個人で用意してきたようなんだが・・・箒は、一夏の分までお弁当を作ってきたようだ。セシリアも大きいバケツを抱えているし、鈴もバツクの中から二つタツパを取り出した。

俺の分は？二つしか用意していないようだし。セシリアにいたっては、一夏に勧めている。全員一夏の分かよ！！まあ、シャルルのはパンだけど・・・。

一夏が、セシリアの作ってきたサンドイッチを口に運ぶ。見た目は綺麗だ。いいなあと思っていたら、急に、食べた一夏の顔が青くなっている。どうしたんだ？

「どれどれ、俺にもくれよ」と言い、了解も取らずにひとつ取り、口に運ぶ。鈴が何か言いたげだったが無視する。女子の手料理だ、誰が逃すかつ！

甘い。甘すぎる！！何だこの味は・・・まるで砂糖の塊を食べているぐらい甘い。嘘だろうBLTサンドだぞ。これでは・・・料理がへたいとかのレベルじゃない。形だけが綺麗な、暗黒物質^{ダークマター}だ。いや、いくらなんでも某有名小説のレベル5の第二位を超えている。

「あ、ああ、いいんじゃないかな・・・。お、俺は好きだよ」一夏！お前は男前過ぎる。こんな料理をはっきり言わないなんて・・・。しかも、おいしいと言い切るとは。

セシリアは、俺に感想は聞いてこなかったので無事にすんだ。俺は一夏のようにやさしくはできないので、はっきりと言ってしまいそうだったので、安心した。

「そうですか！では、残りもどうぞ！」お、鬼がいる。あの料理を食べろとでも？

一夏も軽く引いている。それから一夏が、他の人の弁当を食べた。しかも、あーんイベントまで発生し、うらやましいことになっている。そこで俺は、一人だけ置いていかれているシャルルに近づいた。

「シャルルは、参加しなくて良いのか？」と軽く、おちよくってみ

る。

「ぼ、僕は、良いよ。みているだけで・・・」と言った。そのときの顔が、ポワーンとしていて軽く赤くなっている。それは、まるで今頃の女子のように見えてしまったので、

「お前本当に男か？」と、ついつい疑問を口にしてしまった。とても小さい声で言ったはずなのに・・・

「え？ええっ！男だよ。どこからどう見ても男じゃないか」と、聞こえたのかビクツと体を震わせ反応した。

「そうだよな。ごめん、失礼だよな」一応疑問は解けなかったから、謝る。男として当然の反応だったのだけど・・・

「そう、そうだよ。失礼だよ」と、シャルルは顔をそらす。

今の会話のひとつひとつの行動、言動が、作られたような感じがした。俺は、それを見逃さなかった。確信はなかったが、どこかおかしいと思った。男という自分を作っているようにしか見えなかったんだ。

そして、疑問を残したまま午後の授業は始まった。俺は、みんなと違うガレージで残響のメンテを行った。一人で寂しかった、と思ったのは言うまでもない・・・

第16話 正体は？（後書き）

どーでしたか？

自分的には、シャルルが一番好きなのですが・・・妥協したわけでもないですけど、ラウラにフラグを立てています。

この調子でどんどん行くぜー、と思っていましたが・・・。テスト期間が迫っている！！

弟もテスト休みで家にいるからかけなくなるし、テスト勉強しないといけないので投稿がおろそかになるかも・・・

まあ、まだ先のことなのでわからないけどww

誤字脱字訂正あったらよろしくおねがいします。

第17話 考え事（前書き）

なんか作風が変わっているような・・・と感じているSirasuです。

わけありで、次回からシリアス？パートに入ります。

ではでは第17話どうぞ

第17話 考え事

第17話

俺は今山田先生と職員室で話しをしている。

「山田先生、シャルルと俺の部屋を変えてください」

「別に問題はないですけど・・・どうしたんですか？」急に部屋を変えろといわれたら普通、怪しむよな・・・

「シャルル君は今日学校に来たばかりなんで、少しでも落ち着いてもらおうと思ひまして。それと、俺より一夏の方が面倒見が良いので・・・」俺は、正直なところ初対面の人と話しをするのは苦手だ。よって、同じ部屋にいて様子を見るということをあきらめた。それと、シャルルはたぶん俺のことを警戒しているはずだから、一夏と同室にしてもらった。俺の考えが正しければ十中八九、シャルルは女だ。そして、何かあれば必ず俺のところへ相談してくるだろうと、思い一夏に託した。

「わかりました。それではこれがシャルル君の部屋の鍵です。シャルル君には、私から言いますので・・・」と、ごそごそと机の引き出しの中から鍵を取り出し渡してきた。それを受け取り「ありがとうございます」と言って、職員室から出た。

・・・

そして学生寮。ここは一夏たちの学生寮の隣の学生寮だ。そこにいる女子たちは驚いている。なぜなら、俺が手荷物を持った状態で現れたからだ。ラフな格好をしているが、それも前の寮で経験済みで気にならない。いや、訂正しよう。

少しだけ気になる・・・だってしょうがないじゃん。それが男の

性だろ!!

そして、驚き、騒いでいる女子達を無視して自分の部屋に着く。その時

「宙様」急に話しかけられた。聞いたことがある声だ。「様」に反応したのか廊下で見ていた女子がざわつく

「なあ、いつになったら様付けが終わるんだ？葵」

俺に話しかけてきたのは親友、白石 葵だ。目を覆っている黒い髪は、肩の少し下ぐらいで切っている。目はほとんど見たことがないが、他のところを見る限り美人だ。性格は少しおとなしい。今のように話しかけてくることはほとんどない。

「様づけが終わることはありません。それよりなぜここにいますか？」断言されてしまった。

「ああ、シャルルと部屋を替わったんだ。一夏の方が面倒見が良いからな」

「そうですか。わかりました」と、言い。自分の部屋に戻っていった。

どうしたんだろう？あんなに嬉しそうに・・・と疑問を抱きながら部屋に入る。今日はもう遅かったのでそのまま眠りに着いた。それからしばらく女子が俺の姿を見るたびに騒ぐという落ち着かない日々が続いた。

・・・

あれから五日後（土曜日）の放課後。俺は今、優と智花の練習につきあっている。なぜかというと、土曜日の午後は自由時間になっているので、優にまた誘われたのだ。「学年別トーナメントで優勝す

るために手伝いなさい」と、命令口調で。しかも、返事もいえないまま強引に智花と優に引っ張られてアリーナに・・・ちなみに土曜日はアリーナが全面開放されているのでどこでも使って良いらしい。そして、かれこれ2時間、優が乗る『打鉄』うちがねと智花が乗る『ラフアール・リヴァイブ』は戦っている。

「ふう、これで終わりにしましょう。智花」と、優が話す
「うんっ。そうしょっか、優」どうやら終わったみたいだ。

二人は俺の前に下りてきた。そして、ISから降りて俺の目の前に立ったので、俺は二人にアドバイスを送った。それから二人は、更衣室に入ったので、俺は更衣室から二人が出てくるのを待っていた。

はあ、学年別トーナメントで優勝したら俺が一夏のどちらかと付き合える、か。

この話は、偶然寮にいたときに聞いた話だ。これだったら女子達の反応も納得がつく。俺たちの話をしていたから急に來た俺や一夏にびっくりしたのだろう。

まったくめんどくさい話だよ。付き合うとか勝手に決めやがって・
・そういうやあいつらも知っているのかな？

と考えていたところにちょうど二人が出てきた。

「おまたせー」と優

「待ったかな？」と智花

「全然。考え事してたから」と俺だ。

そうして、俺たちはアリーナから出て寮に帰った。寮が違うので玄

関前で別れ、そのまま自室へすぐにシャワーを浴びベットに飛び込む。

付き合う、か。智花は、どう思っているんだろうか？あの時、別れたから嫌われているだろうからなあ。俺はどう思っているんだろ・
・智花のこと

こんこん ドアがノックされる音だ

思考を切り替え、ドアを開ける。ドアの前に立っていたのは、一夏だ。

「相談があるんだが」思ったとおりだった。

「そうか、早かったな。部屋に入れよ」と、部屋に入ることを片手で促す。「早かったな？」と不思議がっていたが、さらに部屋に入ることを促した。

一夏が部屋に入り、テーブルを挟むようにして座った。「コーヒーでいいな？」と言うと、「ああ、なんでもいい」と返してきたのでインスタントコーヒーを入れる。IS学園の寮は、一通りの家具はそろっている。本当に税金を無駄に使っているように思えてくる。

「シャルルのことだろ？」コーヒーを二人でゆっくり飲んでいたが、このままじゃ話が進まないのだから話してみた。

「なんでわかったんだ？」軽く驚いているようだ。眉を上げている。「勘、かな？それより何があったんだ、教えろよ」ずずず、コーヒーを飲みながら促す。

それから、一夏から一部始終を話してもらった。部屋に戻ったとき偶然シャルルの裸を見たらしい。つくづく幸運だなと思ったが、そ

うでもなかった。シャルルは愛人の子供で父親の会社が危機、ということで白式のデータを盗すみに来たらしい。男と偽っていたのは、一夏に近づきやすいから。というあまりにも重い内容だった。ひどい話だ、親が子供を利用するとは……。親か、俺の親は……

「どうしたらいい？」考え事をしているときに、話しかけてきたのですぐに切り替える。

「どうぞ好きにしてください」真剣に悩んでいる幼馴染に対して、俺は不適切な言葉を言った。

「おまえ、人事だと思って!!」一夏は、怒っている。机を強く叩き、体を乗り出してきた。

「人事だろ？何が違う？」これも一夏のためだ。あえて厳しく言う。「くっ……」両手を握り締めている。それも、白くなるまでだ。

「大体、違うんだよ、お前の考えていることは根本的に、な」そう違うのだ、根本的に

「何がだ……何が違う」まだわからないらしい、

「人に相談することだよ。これは、人の人生に関わる問題だ。それをどうにかしようと、人に相談するのか？違うだろ、一夏」そう、どんなに重たい問題があるうが人の人生だ。他人がどうにかしようとするべきではない。

「……」まだ考えがまとまらないらしい。真剣に考えている証拠なので、正解を言う。

「だから、お前のいいたいことを言えばいいんだ。それ以上俺達はまだ、かかわってはいけない」と言った。一夏は、それを聞いたとたん飛び出していった。

一夏も、もう少し考えることができたらなあ。まあ、人のことを真剣に考えるなんてあいつらしいか……。俺ももう少し考えるべきか……

そして、俺は寝た。智花のことを考えながら

第17話 考え事（後書き）

どーでした？

うーーん、今回は何もなかったような・・・

誤字脱字訂正あったらよろしくお願いします。

第18話 それぞれの過去（前書き）

どうもすいません。いつもの投稿時間より遅れてしまった。自分の中では決めていたのに・・・

懺悔の途中の s i r a s u です。

今回は、ラウラの過去？の描写が原作にあったのでそれに乗っかってみました。

では第18話どうぞ

第18話 それぞれの過去

第18話

ラウラ サイドイン

暗い。暗い闇の中にいた。いつ頃からこうなのかはもう覚えていない。ただ、生まれた時にはもう闇の暗さを知っていた。人は生まれて始めて光を見るというが、この少女は違う。闇の中ではぐぐまれ、影の中で生まれた。そしてそれは今も変わりが無い。

光のない部屋で影を抱いて闇に潜み、その赤い目は鈍く光を放っている。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。

それが自分の名前だとは知っているが、同時にそれが何の意味持たないことを理解している。

けれど、唯一例外はある。教官に・・・織斑千冬に呼ばれるときだけは、その響きが特別な意味を持っている気がして、そのたびにわずかな心の高揚を感じていた。

あの人の存在が・・・その強さが、私の目標であり、存在理由

それは一条の光のようであった。

出会ったときに一目でその強さに震えた。恐怖と感動と、歓喜に心が揺れた。体が熱くなった。そして願った。

ああ、こうになりたい・・・と。

これに、私はなりたいた。

空っぽだった場所が急激に埋まり、そしてそれがすべてとなった。自らの師であり、絶対的な力であり、理想の姿。

唯一自らを重ねてみたいと缶いた存在。

ならば完全な状態でなおことを許せはしない。

織斑一夏……。教官に汚点を残させた張本人

あの男の存在を認めはしない。

排除するそのような手段を使っても……。

そのとき不意に、ある男の顔がさえぎった。織斑一夏の隣に必ずいる男の顔が、私のことを馬鹿にする男の顔が・

あの男から排除せねば……。あの男を排除せねばとどかない。

暗い闘志に火をつけ、ラウラは静かにまぶたを閉じる。闇と一体になりながら少女は夢のない眠りへ沈んで言った。

ラウラ サイドアウト

???
サイドイン

目を開けるとそこは、赤かった。暖かい色ではない、絶望の赤色。そして痛かった、熱かった。体中に痛みが走る。消えることのない鈍痛。気が狂いそうだった。しかし目の前にある光景がそれを許さなかった。崩れた瓦礫や転がる死体。燃え盛る炎の赤、始めて見る量の血の赤が、体中に走る痛みを抑える。

自らの足元を見る。親の体が、目の前に転がっている。いや、親

だった体だ・・・そこに転がっている手。よく見慣れた手だ、さわっていた手だ、握っていた手だ、抱いてくれていた手だ、忘れるはずもない。自分の親の手を・・・

ここはどこだ？

俺は、何をしていたんだ？

何でこんなことになっているんだ？

何もわからない。理解できない、したくない。はじめてみる血が、肉が、視界に入る。吐き気がうせるほどの圧倒的な光景。そのとき少しだけ記憶が戻る。親が自分を強く押している記憶、その後崩れていく瓦礫の中に消えていく記憶。そこで終わった。少年は、自分の力のなさを呪った、自分が何でもできていれば、力があれば親は死ななかったはずだ。そのとき心に浮かぶのは絶望だった。希望なんてものがちっぽけに見えるぐらいの絶望、一人の少年は、ただただその絶望を受け入れるしかなかった。

「うわああああああつ！！！！！！」

気づけば、体の痛みも忘れ叫んでいた。その時に誓った。力を手に入れると、何を使っても、誰かを利用してでも、必ず力を手に入れると誓った。その誓いが道を踏み外していることも知らずに・・・少年は力を欲した、誰にも負けない力を。光など消えうせてしまった瞳に、残酷な光景を映して・・・

???

サイドアウト

「うわああああああつ！！！！！！」

ガバッと、布団を上げ体を起こす。いつまでたっても消えることのない記憶、それをいつまでたっても夢の中で見てしまう。

「くそっ・・・くそお」

力任せに布団をたたき、涙が出ている。忘れられないことに、腹が立つ。

がちや 「どうしました！？ 宙様」と勝手に部屋に入ってくる、葵。かなり驚いている。それほど声が大きかったようだ。廊下では、部屋の前に女子がたまっている。ちなみに葵が俺のことを様付けで呼ぶのはもう慣れたらしい。

「なんでもないよ」と強気に言う。

「泣いていますよ、嘘をつかないでください」体を乗り出してくる、葵。

「本当になんでもないから」と今度は優しく言う。

「宙様、嘘をつかないでください。お願いします」と、頭を下げる。

それは、恥じらいなど微塵もなく、完全に俺に頭を下げている姿だ。その姿に・・・

「なんでもないって言っているだろうが！！」裏拳で目の前で下げられていた頭を殴り、言うはずじゃなかった言葉を言った。音が聞こえたのか部屋の前にいた女子が騒ぎはじめる。

「なんでもないですから、大丈夫ですから、皆さん部屋に戻ってください」と葵が、すぐに立ち上がり

女子に混乱が起きないように解散させる

くそっ何をやっているんだ俺は！！関係ないやつまで殴って何がしたいんだ・・・

俺はどうしてこうも弱いんだ・・・あいつのほうがよっぽど強い

じゃないか・・・

「宙様、大丈夫ですか？」さっき殴られたにもかかわらず、また話しかけてきた。

「ごめん。今は一人にしてくれ・・・」謝罪の言葉は足りないことがわかってるが、今はこれぐらいしか出てこなかった。
「わかりました」と部屋を出て行く。

葵の宙に対する姿勢、態度はあるときから変わっていない。

回想 イン

中学3年生のころだ。

「私をあなたの犬にしてください」そんなことを言われた。もちろん「はあ？いきなりそんなことを言ってきて素直に はい っていえるか!!」と断ったのだが・・・

「あなたは私を救った。だからあなたに忠誠を誓います」と頭を下げて言ってくる。結局断りきれずにそのまま今も続いている。というか・・・俺が折れた。

そんなことがあった。忘れるはずもない衝撃的な行動だった。今もどうやって葵を救ったのかはわからない。

回想 アウト

俺は、まだあの夢を見るのか・・・

あれから宙は、鍛えた。体のことを考えずに、親友の優の声も聞かずに、ただがむしやらに自分の体を鍛えた。そして、強くなっているはずだった。そういう自覚があった。そのときはまだ知らなかった。心を・・・

第18話 それぞれの過去（後書き）

どーでした？

次回は外伝となります。

そして、最近思ってるんですけど、

小説を書いている人はなにをしながら書いているのかな？

できれば教えてくださるとうれしいです。

ちなみに自分は原作を読み返しながらと音楽を聴きながらです。

誤字脱字訂正あったらよろしくお願いします。

第18話外伝 優の覚悟（前書き）

こんばんは、今やっと書き終えたSirasuです。

今回も皆さんに通じればいいのですが・・・
自信がないです。

では、第18話どうぞ

第18話外伝 優の覚悟

第18話外伝 優

皆さんは、白騎士事件というのを知っていますか、あの事件は確かに死者はいませんでした。そう一人もない、この事実は確かです。普通ならありえませんが、しかしその後あの事件のせいで起こった事件などは、含まれていません。そう、宙が一回道を踏み外したのもそのせいで起こった事件のでした・・・

これは、私や宙が小学4年生の話でした。宙は家族と共に海外旅行へ行った時のことです。白騎士事件は、その時に起こりました。その事件は世界を敗北に導きました。そのとき外国の空港から日本行きの便はきえました。だから、帰国する日にちが遅れました。

四日間でしたっけ？そのぐらい外国の空港に足止めを食らっていたはずです。その後宙とその家族は帰国してきたのですが・・・日本中で同時にテロが起きました。その理由は祖国が負けたから、というくだらない理由です。テロを行った人たちは日本中の空港に爆弾を体の中に入れてを持って行き、自ら自爆するといった方法でした。ひとつの空港に何人もいて、完全に破壊し、殺しつくそうとしました。その時に生き残った、ただ一人の人間が宙です。

宙は、小学4年生にして天涯孤独の身になりました。

それが、彼に起こった出来事です。さて、ここからが本題です。

回想 イン

四年生の頃

宙があゝの事件から始めて帰ってきたとき、宙は変わっていた。優しかった宙はそこにもいなかった。目にも光はなくなただただ虚空を見つめていました。話しかけても何も反応がない。宙は学校に来て席に着きそこから一步も動かず授業を受け、そして帰る時間が来ると席を立ち帰る。そんなことが毎日繰り返された。そして、怪我の数が日に日に増えていきました。私は気になった、いったい彼が何をしているのか……。だから帰っている宙をこっそり追いかけてました。

そこでは、四年生だった宙が中学生の人たちとけんかをしていました。もちろん勝てるはずもなくただ殴られ続けていた。しかし、宙は倒れても倒れても起き上がった。それは、何かに引つ張られるように見えた、目に見えない何か宙を操っているように見えた。殴られて、倒れても何度も何度も立ち上がる宙を見て逃げ出す人もいた。遠くから離れた手見ていた私の目もそれは恐ろしいと感じてしまった。涙も出すことがない目や、額と鼻と口からでる血。その姿は、小学四年生のもものではなかった。

そして、宙は殴られ続けることで相手の心を砕いた。尻餅をつく人や恐怖で動けなくなる人もいた。そのとき宙は初めて動いた。抵抗する気もない彼らを今度は宙が殴り続けた。気絶して動けなくなつたものや逃げていく中学生。最後に勝つたのは宙だった。

一年後 五年生の頃

宙はこの町で最強となっていた。町中の不良どもを見つけては、けんかして勝ってきた結果だった。負けはなかった。学校でもそのうわさは広まり、宙の周りから人が消えていった。私も周りの人に流され宙から離れた。

宙は、この頃すでに敵はいなかった、味方も……

一年後 六年生の頃

宙から離れて約一年がたった頃、私は塾から帰宅していた。時間はPM10・00過ぎ、夜の町を帰っていた。不良やヤクザたちはもう消えていた。風のうわさだったけど、宙が消したらしい。だから女が夜にうろついても襲われることはないはずだった。安心しきっていたそのとき

「あの女をつれて来い!!」

どこからか、男の声が聞こえてきた。この頃はすでに女尊男卑の時代に入っていたが、夜の街に関係ない。腕をいかつい男に、急につかまれ引っ張られた。そしてそのまま引きづられるように、路地裏につれてこられた。そこで見たのは、変わっていないあの友達の姿だった。

宙はけんかをしていた。二年間けんかしてきた経験は今の宙の強さと比例していた。そして、どんなに倒れても立ち上がる姿も変わっていないかった。

「おい、ガキィ! 動くな!! こいつがどうなってもいいのかぁ!!」

どうやら私は人質にされたようだ。けど、人質にされた怖さより宙が変わっていないかったことに恐怖した。目の光は戻っていない、今だ虚空を見つめている目。その目がこっちを向いた。反応はなかった。

「止まれって行ってんだよ。聞こえないのか」

宙は、周りにいたやつらが人質を取ったという事で安心して気を抜いたのを見逃さなかった。こぶしをあごに入れることによって一発で全員を倒した。私を人質にしているやつもこの光景に少したじろいだ。当たり前だ、人質をとられているのに動く人間なんているわけがない。いるとしたら、絶対大丈夫だと考えている馬鹿か、関係ないと割り切れるやつぐらいだ。宙は完全に後者だった、現に彼は止まっていない。

「とまれっっていつているんだよ!!」

あせっているように見える。普通なら形勢逆転する場面で、宙は止まらなかった。この事実を私を捕まえているやつも、怖がっているように見えた。けどその表情はすぐに安堵のものとなる。宙が止まったのだ。

「やっと止まったか・・・」

安心してゐる。体から力が抜けていくのがわかる。それが命取りとなった。宙の足元に合ったバットが飛んできた。バットは正確に私をつかんでいたやつの眉間に当たり倒れる。蹴ったようだ。そして、私に近づいてきた。

「宙。何でまだやっているの？」

最初に言葉を言ったのは、私だった。何度もいおうと思っていた言葉、何年も前から聞こうと思っていた言葉。その数秒は、永遠より長く感じた。

「どうしてここにいる」

ずっと聞きたかった声、初めて聞いた声は声と認識するには遠すぎるものだった。そこに感情などなく、棒読み状態だった。目も私を見ていない。

「私はこいつに連れられてきたの。それよりも答えて、何でまだこんなことをやっているの」

地面に転がっている男を見た後、宙の目を見ていった。目を見ているはずなのにあわせられない。

「お前には関係ないよ。じゃあね」

といい、帰ろうと振り返る宙。その後姿に、もう二度と会えないような気がした。そういう気がした私は、無意識のうちに宙の体を後ろから抱きしめて、止めていた。正直怖かった。拒絶されるかもしれない、そう考えた。

「お前、見ていたろ。けど、あのときから見なくなった。なんで？」

その声ははっきりと認識することができた。疑問の色が見えた。うれしかった。ただそれだけのことだったのに涙が出てしまった。宙は最初から私のことを認識してくれた事実も私をうれしくさせた。

「宙が怖かった」

「怖かった？僕は変わってないよずっと。なにを言っているの」

私は正直に自分が思ったことを言った。それなのに彼は変わっていないといった。

「変わったわよ。あの事件からあなたは変わった・・・」

少しの沈黙。彼の目にはまだ光は戻っていなかった。

「変わったか・・・ねえ、知りたい？僕に起こったこと」

そのとき、これしかないと思った。宙が戻ってくるには宙を知るしかなかった。私は、宙のことを知らなすぎたんだ、そう思った。だから・・・

「聞かせて。お願い」

もう二度と後には戻れない。そう確信していた。これを聞いたら私は・・・

「じゃあ、教えてあげる。そうだなどこから始めようか・・・じゃあさ、あの事件のことは知っているよね？あの事件の後から俺は、夢を見るんだ」

「夢？」

「そう、夢。お前は見たことある？人がさ、俺の脚をつかんでくるんだ。あの時死んだ人たちだと思う。その中に俺の親もいたからね・・・わかる？わからないよね。あの人たちは、俺に、なんで生きているのか、と聞いて来るんだよ。」

想像できなかった。できるはずがなかった。宙にしか見えない世界がそこにあった。宙はいつもあの夢を見するという、何で生きているんだ、と言う夢を。

「信じられないだろ？だから俺は、生きている証を残すために強くならなくちゃいけないんだ。見るな、とは言わないから好きにしてくれ。俺は、とまるわけには行かないんだ」

間違っている。その言葉は私の口から出なかった。この話を聞く前ならいえたかもしれない。けど、聞いてしまったから言うことはできなかった。だからせめて・・・

「強くなるってそういうことかな？」

「何でそう考えるの？俺が間違っているとでもいいたいの？」

「間違っているといえるわけじゃない！！そんなに重たいもの抱え込んで、なにをしようとするの？あのような人たちをすべて倒していくの？そうすることで、あんたの気持ちが晴れるの？あの頃の宙はいつ戻ってくるのよ！！」

すべて吐き出した。自分の胸にあった言葉を・・・

「あの頃の俺？戻ってくるわけないよ。世界中からあのようなことを少しでも起こす可能性のある人は消していけないといけないから」

その言葉は十二歳の少年の物とは思えなかった。

「けど、ありがとね。何か、楽になったよ。このもやもやした気持ちば、誰かに聞いてほしかったんだと思うよ」

そのときの宙は、泣いていた……。彼は一人で抱え込んで、そして一人で傷ついていた。

回想 アウト

このとき私は、再び覚悟を決めた。もう二度と彼にこんな気持ちにはさせない、と。絶対だ。

第18話外伝 優の覚悟（後書き）

どーでした？ つたわりましたか？ 読みやすかったですか？

明日は、休日だけど・・・試験がつ！・・・ない。

やったぁー！、どんどんかけるぜえ、と思っていましたが

明日9時に集合　とのメール。書けねえ！！

誤字脱字訂正あったらよろしくお願いします。

第19話 宙は怒る（前書き）

一日一回投稿を破りそうなSirasuです。

大半の人は、土曜日になるはずですね・・・

すいません

それでは第19話どうぞ

第19話 宙は怒る

第19話

「ねえ、いつまでついてくんの？」

俺は、散歩していた。散歩というよりは気分転換だ。あれからいつも心配しているのか、葵が俺の後ろをついてくる。しかも授業中でも・・・本当にうんざりしている。別に嫌いというわけでもないが、ずっとついてきているので少々嫌気が・・・。

さっきも

「何でついてくるの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

という会話があった。そのときは返事もくれなかった。このせいで俺は千冬さんに怒られるし、授業は集中できないし、困ったもんだ。頭が痛い・・・

「すいません。どうしてもあなたのことが心配でした」

初めて俺にしゃべってきた。正直シカトされすぎて心が折れそうになっていたところだった。

「やっと話してくれたか。だからなんでもないって・・・・。あの時はごめんな。カッとなっちまった。」

話をしている途中で、葵を殴ってしまったことを思い出してしまった。

「そんなことはどうでも良いです。私が宙様の機嫌を損ねてしまったからです」

こんな最悪の男に頭を下げている葵。それに思わず頭を軽くたたいてしまう。

「俺に頭なんか下げなくてたって良いよ。そんな立派なやつじゃないから」

「いいえ。それを決めるのは、宙様ではありません。私自身ですから」

本当に不思議なやつだ。いまだに俺は、こいつに何かした覚えはないんだが……。そして、俺は放課後になったのでなんとなく第3アリーナへ行くことにした。

「宙君っ！」

このかわいらしい声は、智花だ。

「おー、智花か。どした？」

「第3アリーナに行くの？ 私たちと一緒に行かない？」

私たち？ ということは……

「なに？ 私はいらないって言うの？」

ぎぎぎ、首がそのような音を立ててまわり、声の主をとらえた。

「や、やあ。お前も行くのか……」

「いやなの？」

「ま、まさか。いやなわけないじゃん」

冷や汗が俺の首を伝う。こいつは乱暴だからな・・・

「宙様、いやならいやと、はっきり言えばいいかと思います」

ホントにこいつは俺のこと心配しているのか、と思うほどの横槍が入った。

「ん？ あんた誰？ 宙の何？」

当然、反応する優。最悪だ……。どうしてくれるんだと葵の方向を向く。

「あなたこそ宙様のなんですか。隣にいるのは元彼女の智花様ということは存じ上げていますが……。あなたは誰ですか？」

でっかい爆弾を踏んでくれました。あのことがトラウマになっているのか、智花がフリーズする。

「智花！？ あんたなんてことを……。私は宙の親友よ。さあ、あなたは宙のなんなの？」

「私は宙様の犬です」

優の目が光り、俺のほうを向く。あれは激昂状態を意味する。簡単に言うと、俺の死ぬ時間が近づいている。

「や、やだなあ、葵。俺はまだ認めていないけど・・・」

「反論しないので、てっきり受け入れられたと思っていましたが・・・」

・違うのですか？」

さらに優の目が光る。あれ？目の錯覚か？オーラさえ見えてくるぞ・・・

「ち、違うんだ優。」

「何が違うのですか？」

変なところで意地を張っている葵が、俺の顔に自分の顔を近づいていく。その距離は相手の吐息がかかるほどだ。その光景を見た優は、手を伸ばす。その行き先は俺の胸倉だったが、葵の手刀によって防がれる。

「あなたは宙様に触らないで下さい。元彼女の智花さまならまだしも、あなたごときが、気安く触れるな！！」

ずいぶんと「元」を強調していた言い方だった。その言い方に友かが俺の袖を引っ張ってくる、控えめに。

「宙君？」

その顔は、泣きそうな顔で、戸惑っている顔だった。昔から急な展開についていけないところなる。

「智花、葵はなんか知らないけど前からあの調子なんだ。だから安心して良いよ」

だぁー！、何に安心するんだよ。馬鹿か俺は！！俺と智花はそんな関係じゃ・・・

そして、俺を守っている葵とそれを見て牙をむく優、俺の袖を軽くつかんでいる智花。そして、それらの扱いに困る俺。

どうしたら終わるんだよ、これ・・・

そう思った時だった

「おっ宙。どうしたんだ？こんなところで」

俺の親友である一夏が話しかけてきた。その後ろには、シャルルと箒もいる。救世主の登場に心が震えてしまった。早速今の状況を説明しようとする、

ガシッ、何者かに両肩を捕まれる感覚。いや、何者か達だ。両肩に当たっている感触が違う。

「何を言おうとしているの？（しているのですか？）」「」

優と葵だ。何でこんなときだけ団結することができるのかな？しかも、さっきまでけんかしていたというのに・・・。そういえば、今日はじめて優と葵が会ったよな？

「宙たちも第3アリーナへ行くんだろ？なら一緒に行こうぜ」

「おおっそうだな。うん、そうしよう。それがいい」

と一夏の背中を押すように、優と葵から離れる。「ま、まちなさいよ」「まっってください」と耳に聞こえるが、無視。智花はさっきから俺の袖を離さないの、問題なし。

「あれ、誰かが模擬戦しているようだね。でもそれにしては様子が」

シャルルが言う。
ドゴオンッ！

突然の爆発に驚き走り出す俺と一夏。すばやく観客席のゲートをくぐり、ステージを見る。煙を切り裂くように出てくるIS、それは鈴とセシリアのIS、そして黒いISだった。

「鈴！セシリア！」

と一夏が叫ぶが、ここは観客席ステージの中にいる鈴とセシリアにとどくことはない。それより気になったのが黒いISだった。すばやく残響のハイパーセンサーだけ呼び出す。

『シュヴァルツェア・レーゲン』 登録操縦者 ラウラ・ボーデ
ヴィッヒ と、モニターに表示された。

シュヴァルツェア・レーゲン？たしか、ドイツでトライアルの途中だったんじゃない。ラウラ・ボーデヴィッヒ！？アイツの専用機だと？

ステージ上で戦っている、鈴とセシリアのISは相当ダメージを追っているのに対して、ラウラは、ほぼ無傷、しかも2対1で追い込まれているのは鈴とセシリアだった。鈴は衝撃砲「龍砲」を撃つが、ラウラを手突き出しただけで止める。さらに肩にあった刃が射出される。どうやら残響の「七弦」と同じ武器のようだ。その刃は、鈴の迎撃射撃をかわし足を絡めとる。セシリアも鈴の援護をしようとビットを射出する。「スターライトMK？」や「ブルー・ティアーズ」の射撃をよけ、さっきと同じく腕を突き出す。するとその先でビットが止まる。そこを狙っていたと言わんばかりに「スターライトMK・？」を撃つ、がラウラの大型のカノン砲の相殺される。セ

シリアはさらに撃とうとするが、さっきつかまった鈴がワイヤーによってセシリアにぶつけられ、そこへ

「イグニッション・ブースト
『瞬時加速』!」

一夏が言った技能の名前は、一夏の十八番だった。それで急接近し両手のプラズマ手刀を展開、さらに腰のワイヤーブレードを射出。三次元躍動で接近してくるそれと、ラウラが繰り出すプラズマ手刀。鈴は下がりながら捌くが、前進しながら猛攻を仕掛けるラウラに、じりじりと追い詰められる。しかも「龍砲」を接近した状態で使おうとしたが、大型カノンの砲撃で壊される鈴。壊された衝撃でよろけたところへ、止めの一撃を入れようと接近するラウラ。何とかセシリアの介入により攻撃は防がれたが、「スターライトMK?」が四散する。セシリアは受け止めたと同時にウエスト・アーマーに装着された弾頭型ビットをラウラへ射出!!

ドガアアアアンツ!

自爆覚悟の攻撃は二人を地面にたたきつけた。ラウラはダメージをほとんど受け付けずに空中に浮いていた。そして、イグニッション・ブースト瞬時加速。地上にいる二人に急接近しワイヤーブレードで捕まえ、そして一方的な虐殺が始まった。ラウラの拳が鈴やセシリアのISに叩き込まれ、シールドエネルギーはあつという間になくなり、デットゾーンへ到達。それでも、攻撃をやめないラウラに一夏の何かが振り切れた。

「おおおお!」

白式を展開し、すぐに「雪片式型」を構築、「零落白夜」を発動させた。そしてバリアーを破り、瞬時加速をして二人の元へ向かった。シャルルもそれへ続く。

俺も人のことを言える立場ではないけど、あれは許せるか!!

無意識のうちにバリアーをISの展開もしないで突破する。優や智花、葵が止めようとするが止まらない。観客席からステージは3メートルぐらい離れているが、落下の途中で壁を蹴り方向を横方向へ変える。そして着地と同時に走しり、「スターライトMK. ?」の部品を思いっきり蹴った。

「ちっ……。雑魚が」

シャルルのアサルトライフルの銃撃と俺の蹴った残骸がラウラを邪魔する。何かにとらわれていた一夏が動き出し、二人を救出する。シャルルが何とか射撃で牽制するが、二世代とISも装備していない二人では、ラウラは止めれない。体がかめる、瞬時加速の体制をとるラウラ。そこへ何者かが入ってきた。

ガキン!

「やれやれ、これだからがきの相手は疲れる。」

「千冬姉!? (千冬さん!?)」

ISスーツもまどっていないのに、「打鉄」のブレードを持っている千冬さんが割り込んできた。そして、ラウラや一夏たちに提案する。それを聞いたラウラは、ISを装備状態を解除した。

「教官がそう仰るのなら」

そして俺をにらんでくる。しかも見下した表情で

「貴様は馬鹿か？ I Sもない癖して私に突っ込んでくるなど・」

「ふう、I Sがあるからって調子に乗っている人にはいわれたくないよ」

「貴様らは私の話を聞いていたのか？」

と最後に千冬さんが閉める。そうして俺は思った。

「アイツはボコボコにしてやる」と。

第19話 宙は怒る（後書き）

どーでした？

今日は中学生の恩師の元（塾）へ行ったら、投稿が遅れてしまった・・・

本当にすいませんでした。

誤字脱字訂正あったらよろしくお願いします。

第20話 トーナメントはタッグ!? (前書き)

祝20話!! なんとなく祝ってみたSirasuです。

10話ぐらいでやりたかったけど、できなかったんですね

ではでは第20話どうぞ

第20話 トーナメントはタッグ!?

第20話

俺は今、保健室にいる。ラウラが鈴やセシリアをボコボコにしたあれから、一時間後だ。ベッドの上では打撲の治療で包帯を巻いている鈴とセシリアがむっすーとしている。ちなみに俺はというと・・・

「あんたは何でそんなに飛び出すかな？」

「宙様！私に言ってくれれば、私が行きましたのに・・・」

「宙君」

3人からお叱りを受けている。いや、智花は俺のことを心配しているはずだ・・・たぶん。そして、助けたときに優に殴られていたので、たんこぶの治療中。

「別に助けてくれなくてよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

「お前らなあ・・・。はあ、でもまあ、怪我がたいしたことなくて安心したぜ」

「一夏、はつきり言ったらどうだ？あいつら絶対負けていたって・・・」

鈴、セシリア、一夏、俺の順だ。一夏はやさしすぎる、こういうときは、はつきりと言ってやったほうが相手のためになるというのに・・・

「はあ？負けてない いたたたっ」

「そもそもこうやって横になっていること自体無意味 つうう」

っ！」

馬鹿なんだろうか。一夏

あほだな……。宙

馬鹿ね。優

無能ですね。葵

大丈夫かな？ 智花

「馬鹿でもあほでもないわよっ！」

「一夏さんや神代さんこそ大馬鹿、大あほですわ！」

みんな口に出したわけでもないのに、俺と一夏だけすごい反撃を受けた。一夏が怒られるのは、なんとなくわかるけど……。俺は？

「あんたは勝手に飛び出すからよ」

「宙様が勝手に飛び出すからです」

おおっやつと理由がわかったぞ。俺がISも付けずにラウラの目の前に立ったからか、でもセシリアは知ってるよな？俺のISのこと。知らないのは、鈴、ラウラぐらいだもんな。

「好きな人に格好悪いところ見せられたから、恥ずかしいんだよ」
「ん？」

シャルルが飲み物を買って戻ってきた。どうやら俺と同じ考えのようだ。確かに好きな人の目の前で格好悪いところは見せれないよな……。それを一夏は聞こえていないようだ、首をかしげている。鈴とセシリアはしっかりと聞き取れていて、顔を真っ赤にし怒り始めた。

「ななな何を言ってるのか、全っ然っわかんないわね！こここここれだから欧州人って困るのよねえっ！」

「べべっ、別に私はッ！そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ！」

あほだな、ホント……。一夏を落とそうとするなら好きとストレートに言わなくちゃ……。あの鈍感はわからないのに……。

と俺は思ったが、口に出さなかった。だって教えたりしたら、一夏は決め切れないからハーレムが結成する。しかも、全員ラブラブなはずだ。それだけは、許せない。まあ、そんな心配も皆無なほど一夏はひどいからな、鈍感……。鈴とセシリアがあんなに顔を真っ赤にしているのに気づかないし……。

「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」

「ふ、ふん！」

「不本意ですがいただきますようっ！」

まるでひったくるように渡された飲み物を受け取る。相当テンパッているようだ、一気に口を開け飲み干していく。ああ、そんなことしたら体に悪いのに、という顔をしている一夏。この健康オタクがっ！！

ドドドドドッ！「な、何だ？何の音だ？」「なんだろうな？」

一夏、俺の順だ。地鳴りに聞けてもおかしくはないその音は、廊下から響いている。しかもだんだんとこちらに近づいてくる。

ドカーン！と保健室のドアが吹き飛ぶ。マジで。レールから外れたドアは壁にぶつかり、止まる。

「織斑君！」

「デュノワ君！」

「宙君！」

入ってきた女子に・・・いや、なだれ込んできた女子に俺と一夏そしてシャルルが囲まれる。ちなみになぜ俺が下の名前で呼ばれているかというと、俺が下の名前で呼ばなかったら反応しない、言い切ったからだ。苗字が嫌いというわけでもないが、あまり呼ばれたくはない。

「ど、どうしたんだ？」

「な、な、何なんだ!？」

「ど、どうしたの、みんな・・・ちょ、ちょっと落ち着いて」

「「「これ!」「」」

俺と一夏、シャルルの前に女子たちが一枚の紙を広げる。そこには・・・

今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、二人組みでの参加を必須とする。なお、ペアができなかったものは抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは・・・

とそんなことが書かれていた。そして、手が伸びてくる。

「私と組もう、織斑君！」

「私と組んで、デュノワ君！」

「私と組んでくれないかな? 宙君！」

よく見ると一年生の女子が俺たちの周りを囲んでいた。一人は女だけだな……。どうやら男の俺達と組に来たようだ。ここで、原作ブレイク……。ごほん！じゃなくて一夏とアイコンタクトをする。幼馴染で男同士だからできる技だ。

「一夏っ」「ど、どうしたんだ」「俺と組め」「なんで？」「良いから俺と組め、女子には先客がいると伝えろ」「お前が言えば良いじゃないかっ！」「俺が言うのはまずい、鈴がいる」「ああ、わかった」

アイコンタクト終了。鈴とセシリアが動こうとするが

「ごめん、俺先客がいるから」

と断る一夏。それを聞き俺に女子の視線が集まるが、苦い顔をして鈴を指差すとシャルルへ行った。そして、シャルルは女子に飲まれていった。シャルルすまん、お前の犠牲は忘れない……。鈴やセシリアも負けじと一夏とくもうとするが、ISの状態が想像以上に悪く出場停止となった。

「ははっ、残念でした、鈴セシリア。けが人は大人しくしていろってことだよ。なっ」

「こらこら、落ち着け。さっきからけが人の癖に体動かしすぎだぞ。ホレ」

と一夏と俺は軽くつつく。

「「ぴぐっ！」」

軽くつついたはずだが結構痛かったらしい。二人ともおかしな言葉

と甲高い声をシンクロさせ、凍りついた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「す、すまん。軽くやったつもりなんだが・・・」

「あ・・・・・・・・すまん。そんなに痛いとは思わなかった。悪い」

二人の沈黙とにらみつけている目を見れば、相当痛いことがわかったので俺、一夏の順に謝った。

「い、い、いちかぁ。そして、そらぁ・・・・・・・・あんたねえ・・・」

「あ、あと、で・・・・・・・・おぼえてらしゃい・・・」

うわぁ・・・・・・・・。なんかいやな予感してきたぞ。一夏にいたっては変な汗が出るし・・・・・・・・。それよりどうすっかなー、トーナメント。織斑先生に相談してみっか。

第20話 トーナメントはタッグ!? (後書き)

どーでした？

たった今次話を書き終えたところで・・・葵のストーリーどの辺で入れようかなと迷っています。(葵のストーリー自体、考えてなかったり・・・)

誤字脱字訂正あったらよろしくお願いします。

第21話 女装!?(前書き)

明日はバレンタイデーだけど毎年チョコをもらったことがない Si rasu です。

いやー一度でいいから本命はもらいたいよね?

明日はバレンタイデーということで、その時にあった出来事を投稿します。

ではでは第21話どうぞ

第21話 女装!?

第21話

ラウラの一件の後保健室に言った俺は、学年別トーナメントに一夏と組んで出ることとなった。鈴やセシリアそしてラウラの三人に気づかれないようにするために千冬さんがいる職員室へ向かった・・・

「というわけでして、お知恵を拝借しよう・・・」

「つたく、手がかかるなお前は」

「すみません」

「謝る必要はない。ちょうど私も考えていたところだ」

「ほ、本当ですか？」

「私が嘘をついたことがあるか？」

「い、いえ、ありません。それよりいったい何なんですか？」

「これだ」

とおもむろにかばんから取り出してきたのは、化粧道具・カツラ（金髪のアート）・胸のパッドだった。

「これをどうしろと？」

「見てわからんのか？ 女装しろというわけだ」

「じょ、女装!？」

急に叫んでしまったので、職員室内がざわつき始める。ざわつくと言ってもくすくす笑いがどこから聞こえるぐらいだが・・・。一応謝り、また千冬さんの方を向く。

「女装をしろと？」

「何度言えばわかるんだ。それ以外に方法がないだろう？」
「た、確かに」

そのとおりだった。仮面をかぶればいい、と思っていたがそれでは戦えないし、胸の方も問題だ。さすがに高校一年生となると大なり小なり、少しぐらいはあるからな……。俺は腹をくくり、決めた。

「はぁ、わかりました。やりますよ、女装」

「そうか、じゃあこれを貸す」

「ありがとうございます」

正直不本意だが、仕方がない。千冬さんから化粧道具とカツラ、胸パッドをもらい、職員室から出て行く。かすかに職員室のほうから笑い声が聞こえてきたが、気にしないでおこう……。

職員室 サイドイン

「ぷっ……ははは！あの宙が、あの宙が女装か！私が考えたこととはいえ……くっ、ははっ！あいつが女装？くくくくっ……はははっ！」

それから千冬は、一人で笑いまくった。もちろん職員室にいた先生たちも同じく笑っていた。

職員室 サイドアウト

手に千冬さんからもらった化粧道具とカツラ、胸パッドを持ちながら、廊下を歩いていった。それを隠すものなどない。それを見た女子生徒はくすくすと笑う。

くっそー。笑うなよ。俺だっていやなのに……。って今思ったけど化粧はどうすれば……

「宙、どうしたの？そんなところで……」

優がはなしかけてきて、俺の手にあるものを見てすぐに……

「ぷっ……あはははははは。そ、宙、も、もしかして女装するの
か？」

「わ、笑うな！そして大声を出すな！お、俺だって仕方なくなんだぞ」

「くくくっ、まじか？あの宙が……。あはははは」

優の笑い声を聞いて、女子が集まってくる。このままではまずい、と思ったので優の手を引いて脱出。ある程度人ごみを抜け、寮の方向を向くと……。その先にいたのは智花と葵だった。

「宙くん？どうしたのそんなにあわてて」

「宙様、どうなさったんですか？」

急に飛び出した俺のことを最初は心配してくれた二人だったが、すぐに俺が手に持っているものを見て……

「宙君！？それどうしたの？もしかして……。ふふっ」

「宙様！それは……。ぷっ……。す、すいません」

優よりはましだが笑い始めた。これ以上うわさされるのはまずかったので、その二人もテイクアウト（お持ち帰り大作戦）し、寮の俺の部屋に猛ダッシュで入った。

「はっ、はっ、はっ・・・っ、つかれた」

ばたんっ、とベッドに身を沈める。あの三人組は今でも笑っている。

「ほ、本当にどうしたの？ふふっ・・・これ？」

休んでいたら智花が話しかけてきた。一通り息も落ちついてきたので

「トーナメントで出場するためだよ。ほら俺、まだ知らない人いるじゃん？」

「なるほど、それで女装ね。ぷっあははは・・・」

「そうなんだ・・・ふふっ」

「そうですか・・・くっ」

もう本当にどうにでもなれ！仕方なくしているといっているのに・・・ずっと笑っているし・・・くそっ

三人は俺の女装道具を手に取り、きゃあきゃあとさわいでいる。一人は化粧道具を見てブランドとか見ているし、一人はカツラをかぶっているし、一人は胸パッドを入れようと上を脱ごうと・・・っ、おいっ。

「何しているんだ？」

「いえ、いれてみようかと思ひまして・・・だめでしたか？」

なんと、葵だった。俺の中では常識人のほうだったのに・・・

「そういうことを言っているわけじゃなくて・・・」

「そういうこと？何のことですか？」

「あつもしかして・・・宙のエッチ。見たいなら見たいって言えばいいじゃない」

と優が自分の胸を強調するように、前で手を組む。ちなみに、優は結構あるほうだ（セシリア？とかわらないくらい）。智花はつつましいね（BからC？）。葵は・・・さっしてくれ。

「お前のなんて見たくねえし」

「ひっどーい。それ女の子に言う言葉じゃないわよ。あっそうか、智花のが見たいのね」

一人で勝手に納得した優は、智花のを脱がそうとする。「や、やめてよお」と反対しているがあまり抵抗していない。葵にいたっては・・・「私の身と心はすでに宙様にささげています。いまさら見られても恥ずかしくありません」だそうだ。正直葵がなぜこうも俺に忠誠をささげているのか、いまだに心当たりがない。それはさておき、すき放題やっている三人の暴走を止め（約10分間ぐらいかった）、本題を話し俺が今困っていることを話した。

「化粧？それぐらいなら別にやってもいいわよ」

「そ、そうか。ありがとな」

「宙様！？そんなやつに頼まなくても私がやりますのに」

優にありがとうと言っただけなのに、私を強調され言われた。なぜか犬猿の仲にある葵と優はよくぶつかる。それを智花が止めようとするが、止められない。止めることができない智花はすぐに俺のところへ来て助けを求める。最近よく見る光景だったが今回は違った

「宙君、私がしてあげよっか？」

と抜け駆けをしてきたのだ。優と葵は未だに言い争って聞こえていないらしい、その様子を見る限り智花に任せたほうがいいと思った。

「うん、そうしてくれ。ごめんね」

「い、いや。いいよ、それぐらいなら・・・」

俺の声は二人の様子を見たので軽く引き気味だった。智花もなぜか緊張しているのか、呂律が軽く回っていない。

まだ引きずっているのかな、あの事？やっぱり俺のこと嫌いになったのかな、最近話していると結構緊張するし・・・。どうなんだろう

こうして、俺の女装は確実のものとなった。明日がトーナメント本番。俺は自分にかんばれと言い聞かせる、そして二人の言い争いを止め三人を部屋に帰し、ぐっすりとねた。

第21話 女装!?(後書き)

どーでした？

なんか書いていたら急に偏頭痛が発生。側頭部が痛い・・・
さっさと寝ることにします。

誤字脱字訂正あったらよろしくお願いします。

外伝 2月14日と言ったら？（前書き）

どーも今日も死地より無事帰還したsirasuです。

相変わらず外伝は駄文です。いつもの駄文だけど・・・
それより今日は学校でチョコもらえなかった腹いせをエネルギーに変換し、書いてみました。かなりの駄文ですが興味があったら読んでください

では外伝です。どぞ

外伝 2月14日と言ったら？

外伝

中学生3年生のころ。俺が智花に告白され日、それがバレンタイン。忘れるはずもない……。

時は放課後、俺は智花に呼び出されて校舎裏にいた。

このシュチュエーションは、あれしかないよな。告白か……。俺は……。

「宙君」

智花がやってきた。肩で息をしている、どうやら走ってきたようだ。

「ごめんね、帰りのSHRが遅くなって遅れちゃった」
「いいよ別に待っていないから」

俺もちょうど10分前からここに來ていたのだが……。考え事のおかげで時間をつぶすことができた。智花が持っているものを見る。手に握られているのはきれいにラッピングされた何か。チョコレートだろう。

やっぱりそうなのか。俺は……。いいんだろうか、智花の好意には気づいていた。気づいてきたけど今まで無視してきた。俺は……。幸せを……。

「急に呼び出してごめんね・・・」

「ああ、全然かまわないよ」

「・・・・・・・・・・」

沈黙。勇気を出そうとしているのがわかる、智花の手がスカートをギュッと握られている、これは彼女なりの勇気の出し方。ようやく手を離し俺の目を見て来てチョコと思われるものを俺に差し出して

「好きでした。付き合ってください」

そう言った。それだけだった。でも、それだけでも十分に伝わった。いや、十二分だ。うれしい、だがそれ以上に心にあるのは、なんともいえない気持ちだった。

「なあ、智花。俺はどうしたらいいんだろうな」

俺の頭の中を埋め尽くしているもやもやには、今は亡き両親の顔やあの事件で死んでいった人たちの声が入っている。

『お前が幸せ得お手に入れることは許されない』

まるでそういつているように聞こえるうめき声だ。突然の質問に目を丸くする智花。顔を上げ目を見開き涙をためる智花の目。

俺に彼女がいると思われたかな？

と考えた。けど実際俺には彼女なんていない。だから

「ああっ、違うんだ、そういう意味じゃなくて・・・」

最後に言いそうになった言葉を止める。

俺は何かしてきたのか？俺はあの人たちに報われる何かを……。人を殴ってきた、それだけだ。それだけなのに告白された。俺に幸せを求める権利なんて……

「ごめん。……付き合うことはできない」

「つ、付き合えない？どうして……。なにが悪いの？教えてよ、宙君のためならなんだって……」

「お前は悪くない」

「じゃあどうして……」

「俺は幸せになってはいけない、なっちゃいけない。なったらいけないんだ」

あの事件の日に夢で見た光景そして俺をつかもうとしてくる手、忘れることもできない出来事、そのすべてが俺に幸せになることはできないと言っているようだった。だから幼かった俺はそれを受け止めた。受け止めるしかできなかった、それ以外のすべを知らなかった。その日から感情を消したことを覚えている。そんな俺に「付き合ってください」の言葉。

どれだけ勇気がいるのだろうか？そんな覚悟を俺は……。無理だ、そんな言葉俺が受け取るものじゃない……。ただでさえ俺は智花や優、葵に救ってもらったのに、いまさら幸せなんてもの……。自分の望みなんてやっぱり叶えるべきじゃない

「し、幸せってそんなものじゃないと思うよ。幸せは誰かから分けてもらうものだと思う。優も言ってたんだよ、あいつはいつも一人で抱え込み過ぎて、大丈夫だから……覚悟はしているから……私

に分けてくれないかな？」

俺の手を握りそう言い切った、笑顔で。

どれだけ救われただろうか？ あいつらやみんなの笑顔に・・・感謝しても仕切れないのに、俺はいつたいどうすればいいんだよ。

俺は気づいたら彼女の胸の中で泣いていた。あの日から消えていた涙が今になって現れた。大声を上げて泣いた。それからいつたいどれぐらいの時間が流れただろうか、ひとしきり泣き終わった後、気がかりだったことを言う。

「俺は何かできたのかな？ あの世界にいるみんなのために何かできているかな？」

言葉が口から出て同時に胸が苦しくなった。自分でも驚くほど感情的な言葉だった。

「わ、私は宙君に救ってもらえたよ・・・だ、だから、も、もしかしたらそういうふうに救えた人もいると思う。だから宙君がやってきたことは決して無駄じゃなかったと思うよ」

その一言が決定打となり、俺の心にあるもやもやは、はれた。

俺の望みは・・・

「智花、こんな俺でよければ付き合ってくれ」

そして、受け入れた。

外伝 2月14日と言ったら？（後書き）

どーでした？

読んでくださった皆さんありがとうございます。駄文に付き合ってもらって・・・

明日は普通に投稿しますので、7時ぐらいかな？

誤字脱字訂正あったらよろしくお願いします。コメント、アドバイスもお願いします。

第22話 イレギュラー発生!! (前書き)

どーも身内からのチョコを虚しくほうばりながら食べているSir
asuです。

原作の二巻がまだ終わらない!! ネタがいっぱいたまっているのに・
・
だって新ISの設定だって終わっているのにまだ出せないってどう
いうことだ!!!

愚痴はこれぐらいにしておいて

それでは第22話、どうぞ

第22話 イレギュラー発生!!

第22話

目をあけるとよく見た事のある天井だった。一夏の部屋から出て行ってからもう一週間になるがどの部屋も同じ部屋のようなだ。今日は学年別トーナメントの一回戦の日、だからすばやく起きて歯を磨き、顔を洗い、そして着替える。下にISスーツを着て、その上から制服を着る。ちなみに、この学園の制服は改造OKなのが俺と一夏は変えていない。よく女子から個性を出したほうが良いと言われるが二人ともファッションについてはまったく興味がないので、何が似合うのか何がかっこいいのかわからない。このことをいつもの女子達に言う俺の場合・・・

「ええっ!? もっと格好良くてもいいと思うよ・・・たぶん」

「はあ? なに言ってるの、第一印象は大事でしょうがっ!!」

「宙様!? こんなことを言うのは嫌ですけどあの女の言うとおり、身だしなみは大事です」

一夏の場合・・・

「まあ私としても格好いいほうが・・・ゴニョゴニョ」

「紳士は常に身だしなみを気にするものですよ」

「あんたは人の目を気にしなさすぎなのよ」

と言うように二人ともあえなく撃沈しました。その後、女子達に制服を改造しに行くことを約束させられたのは言うまでもない。

制服改造して何の意味があるんだ? 大体二人しかいないのに個性

なんか出したって・・・

そんなことを考えていると、ビットについた。朝早く来たのに、そこで俺を待っていたのは、一夏・千冬さん・山田先生・『ラファール・リヴァイブ』・『打鉄』だった。

「ん？なんで織斑先生と山田先生がいるんですか？俺なんかしました？」

「宙、なんか話があるんだってさ」

「話？なんのことだろう」

女装もこのあと三人と会ってそこでやるつもりなので特に伝えられることもないはずだが・・・

「宙。ちょっとこっちに來い」

「はい」もちろん条件反射発動っ！！

「宙さん、簡単に説明しますね。えーと、この学年別トーナメントのことですが・・・残響の使用を禁止します」

「・・・・・・は？」

驚くのも当然だ。だって専用の機体が使えないのはハンデになりかねない。今までの授業、放課後の自主練でも残響しか使っていないので、『ラファール・リヴァイブ』の特徴は資料のみ、『打鉄』は一回だけ入学のときに起動させたことがあるぐらいだ。初めて使う機体で勝てるほどISは甘くないことは、わかっている。

「宙、私が説明してやろう。学年別トーナメントは各国政府関係者、研究所員、企業エージェントなどが見に来ることはわかっているな」

「はい」

この人たちは三年生のスカウトや二年生の一年間の成果などを見に来るらしい。無論一年生も見erわけです。そこで目をつけられることもよくあるようだ。

「そこで、お前の残響は見られてはならない。なぜならあのISはどこから送られてきたのかわからないからだ」

「はい？ わからないんですか？ てっきりどこかの会社に事情を説明して作ってもらったと思っていたんですが・・・」

「あのISはお前がこの学園に入学することが決まったさいに送られてきたものだ。送りつけた人は不明。理由もくわしくは、わかっていなかったが同封されている書類に、宙君へと書かれていたからお前に譲ったわけだ。こちらとしてもお前たちのデータは喉から手が出るほどほしいものだからな」

「そうだったんですか・・・って、納得できるわけじゃないでしょう！ そんなに簡単に専用機渡して良いんですか？」

「なに、心当たりがあったんでな」

とどこかを見るように俺から目をそらした。その表情を見たら反論ができなくなってしまう。千冬さんも何か考えがあつてのことらしい。

「というわけでして、宙君にはこちらの二機のうちどちらか一機を使ってもらいます。どちらがいいですか？」

山田先生に話をしめられて、どちらか選ぶように言われた。『打鉄』は一回起動したことがあるが、武装が近接専用のブレードとシールドぐらいで少ない。『ラファール・リヴァイブ』に関しては武装が豊富だが武器のコールに時間がかかる。どちらにしようかなと山田先生に資料をもらったときに目に入ったものがあつた。

「まだ拡張領域パストロットがあいていますね、ここに何か入れても大丈夫ですか？」

「はい、まったく問題ないですよ」

「わかりました。では、『打鉄』の刀と盾を『リヴァイブ』に入れて使用してもいいですね？」

「はい、好きにしていますよ。でも残響の武器は入れないでくださいね」

「ありがとうございます。早速準備にかかりますので・・・一夏手伝ってください」

「おう、いいぜ」

ルール上使用できる機体は何でも良くて、拡張領域や後付装備もしいいようだ。早速、一夏に手伝ってもらい『リヴァイブ』に入れていく。先生たちはこのあとも用事があるらしく、この話を伝えた後出て行った。入れ終わったらすぐに三人組の元へ、試合開始まで2時間ぐらいあるのでゆっくりしてもらうことにした。

一夏 サイドイン

化粧室に入って一時間たった。まだ、いつも宙という三人組が宙を女装させるのを手伝っている。宙から女装して出ると聞いたときは腹が痛くなるほど笑った。あの宙が・・・と考えると今でも笑えてくる。中学時代、影で悪魔と呼ばれていたあいつが・・・くくくっだ、だめだ、笑えない自身がない。絶対笑ってしまう。最初は化粧室の中でも笑い声が聞こえていたが、今は聞こえてこない。それほど真剣なんだろうか？と思ったが逆にその様子を想像してしまい・・・笑ってしまった。そのとき

「終わったよ・・・宙君」

「終わったわね……」
「……終わりました」

と化粧室の中から聞こえてきた。声が軽く引いていたがどうしたんだろう？と思っていたところで三人が出てくる。その三人の顔は軽く引きつっていて、何か見てはいけないものを見ていたかのような表情をしていた。生気はなく自信なさげに肩を落としている。そして、最後の一人が出てきた。

美女？あれ、宙と三人しか入っていないよな？誰も中に入れてないはずだったんだが……

「おい、いつまでじろじろ見ているんだ」

不愉快そうな俺が知っている声が聞こえた。その声の主を探そうと周りを見渡したがそれらしい人はいなかった。だから目の前にいる美女をもう一度見た。よく見ると化粧をしていて最初はわからなかったが宙の顔だと認識できた。

いやいやいや、嘘だろ。冗談だろ、おかしいこれはおかしい、これは夢だ。

「だから一夏、いつまで見ているんだ」

その声は確実に彼女から出ていた、そのことが俺を現実に戻した。

「宙なのか？」

「ああ、どうなっているんだ？鏡見させてもらえなかったんだよ」

「だ、大丈夫だ。これならばれない、絶対」

目の前の美女が不思議そうに首をかしげる。そのしぐさはいつもの宙のものだったが、姿形が違って今それは、とても女らしかった。

一夏 サイドアウト

一夏が俺の事を見ている。じろじろ見られているので軽く腹が立ち・

「おい、いつまでじろじろ見ているんだ」

と一夏に言ってやった。すぐに周りを見渡してまた俺のほうを向いてきた。またじろじろと見られる

「だから一夏、いつまで見ているんだ」

俺は一夏に想像以上に見られたことに腹が立った。それに鏡も見せてもらえなかったのはいらいらは軽く怒りが臨界点だ。それなのに智花たちの肩の落としている様子や一夏がじろじろと見ていることに、今の自分がどうなっているのか興味がわいてきた。

「宙なのか？」

「ああ、どうなっているんだ？ 鏡見させてもらえなかったんだよ」

素直にどうなっているかが気になり聞いてみた。

「だ、大丈夫だ。これならばれない、絶対」

一夏は軽く引いているような声でそういつてくる。

本当に今どうなっているんだろう？引いているってことは、想像以上にひどいのかな？ああーもうっ気になる。絶対見てやるっ！！

と洗面所に入る。そして鏡を見て自分の姿を確認しようとする

「ダ、ダメッ！」

「ダメです宙様」

「ダメだっていつてんのよ」

あの三人組が止めてきた。

「なんでだよ。そんなに悪いのか？一回ぐらい見せろよ」

と強引に見てみる。すると、鏡の中に美女がいた。

あれ？俺はどこだ？えーと三人に腕をつかまれている美女ぐらいしか見あたらないけど……。そういえば俺って三人に腕をつかまれているよな……。って、俺か！！これが俺なのか！！

「ああ、見ちゃった」

「本当に自信なくしたわ。あんなのを見せられたら」

「宙様……。わたしちよっと……」

あきらめたのか腕を放し、一言ずつ言う。その声は耳に入ってこない、なぜなら目の前鏡に映っている自分に目を奪われた。

葵 サイドイン

最初はよかった。見ているだけで心がわくわくした。いったいどうなるんだろうと思っていた。智花さまは軽く笑っていて、優とかいうやつは下品に馬鹿笑っている。わたしもできるだけ顔に出さないように笑っていました。カツラをかぶせるところまでは良かったのですが、問題は化粧をしていくときに出てきました。それは・・・化粧をすればするほど、どんどん女の顔に近づいていくことです。もともと宙様は、美形だったので似合うと思っていたがまさかこれほどとは・・・化粧をしている二人ともいつの間にか声が出なくなっているし、優というやつが突然鏡を隠したのもこのせいだろう。その時だけ優というやつに不本意だが感謝しました。終わったときにはもうそこには宙様はいませんでした。いたのは私たちの女の自信をボロボロにした美女だった・・・。

葵 サイドアウト

第22話 イレギュラー発生!! (後書き)

どーでした？

専用機を使わせない理由は、宙にはちよつと試練を、と考えています・・・

これを期に強くなってくればな、と思っています。

誤字脱字訂正あったらよろしくお願いします。コメントやアドバイスもよろしくお願いします。

第23話 一回戦（前書き）

まぶたを開けると時は8..45だった。

さあ、名作の冒頭部分をパクッたsirasuです。

7時ごろには投稿すると感想で言っておいて・・・気が付いたらこの有様です。

本当にすいませんでした。

それでは第23話どうぞ

第23話 一回戦

第23話

さっきから俺のほうを向いて、きれいだの、あんな人いたっけだの言ってくる。けど俺は無視、さっさとピットに行きISの再調整を行う。この前言われたとおり俺は専用機が使えない。だからこそISを自分になじませるため詳細なデータを入れないといけないのが残響の中にある俺のデータを入れようとする

容量オーバーです

と表示される。いったいどれほどの容量なのか気になる。せめて俺の射撃のときの癖とかを入れようとしても

容量オーバーです

だそうだ。そんなに情報量はないはずなのに入れることができない。この『リヴァイブ』だって俺のためのに千冬さんが借りてきたものだ。このトーナメントの期間中なら自由に使っていいといった。だからほかの人のデータを消して俺だけのデータを入れようとしても入れることができない。だから今ISに乗って射撃の練習をしている、そうしていれば後はISが勝手に学習してくれるから……しかしそれでも残響には遠く及ばない。

くそっあと少ししかないのに……こんなんじゃアイツに勝てないラウラと黒い機体『シュバルツェア・レーゲン』が頭の中に出てくる。幼馴染をボコボコにやられてだまっているやつがいるはずがな

い。それでも今状態じゃ無理だった。第2世代の量産型が第3世代に勝てる見込みはない、ただでさえこちらは一夏の近接オンリーと言うハンデがあると言うのに

「第一試合開始時間です。織斑班の人たちはピットへ集合してください」

無常にも練習時間の終了が告げられ、すぐさまアリーナへ向けて飛ぶ。普段のIS学園なら禁止だがトーナメントの期間のみ校内での使用は自由らしい。あくまで校内だけど・・・。

「わりい、一夏遅れた」

「お、おう」

ピットに到着した俺はすぐにエネルギーの補充と弾薬を補充する。いまだに俺の姿に慣れていないのか一夏は少し引き気味だ。

「一回戦の相手は？」

「ん？ああ、少し待ってろ・・・雅・夏目組だ。・・・これってお前といつもいるやつなんじゃ？」

俺は弾薬を補充しながらしていたので、そのことを聞いたときに弾を落とした。

「まじか？」

「ああ、まじだ」

最悪だ。あいつら絶対負ける気ねえじゃん。あのことを知っているだろうし・・・

あのことは、これで優勝すればどちらかと付き合うことができる
と言う噂だ。一夏はこのことを知らないで、「なんで女子たちっ
てこんなことに燃えることができるのかな」と素でいつていた。自
分のことだと知らずに……。弾薬とエネルギーを補充した俺たち
はピットからアリーナへ出た。すでに二人は待っている。

モニターに表示される数字 試合開始まで五秒。四、三、二、一
試合開始。

「行くわよ智花」「うん」

と突っ込んでくる優。一人が接近戦をしよう一人が援護をするとい
う俺たちと同じ戦法だ。だが自分たちの戦法の弱点を考えない馬鹿
はいない。俺はすぐにプレイヤートチャンネルを開く。今回は俺の
口調の調整まで手が回らなかったなので、会話のすべてをプレイヤー
トチャンネルにすることとなった。

『一夏』『わかってる』

これだと援護しているやつが邪魔になるので先につぶす。前衛と後
衛を入れ替え突っ込んでくる優の一撃を呼び出していたナイフでブ
レードを受け流し智花の目の前に行く。

「宙君、ごめん。負けるわけには行かないから」『こっちだって。
手加減すんなよ』

すぐさまIS用近接ブレードをコール、上から相手の銃身をねらう
ように右下へ切る。後退してよけようとするが、俺はそのまま加速
し追撃を仕掛け、今度は振り下ろしたブレードを返して下から上
に向かっ手振る。キーン！と金属音が響き銃身を切り落とした。

「あっ」

切られた銃を捨てすぐに新しい武器をコールするが、持っていたナイフを投げ集中を乱す。うまく盾で防いだがそれが命取りだった。『リヴァイブ』にある盾の下には第二世代最強と言われた武器パイランカーが眠っている。それをモニターに視線で指示して盾の装甲を弾き飛ばす。そして現れた杭を盾へ突きつけた。

『すまん、くらえっ』

ズガンッッ！パイランカーの一撃を叩き込まれた智花の腕はあさっての方向へ吹き飛び、守るものがなくなる。すぐさまショットガン『レイン・オブ・サタデイ』をコール。智花へ向けてフルオートで連射。これをくらった智花のISは絶対防御を展開。もちろんISのシールドエネルギーは底をつき、動かなくなる。

『ごめん、智花』

一言智花にそう言った。そしてすぐにいまだに戦っている一夏と優の元へ飛ぶ。

『一夏、待たせたな』「いや、こっちももう終わる」

そういうと一夏は自身のワンオフ・アビリティである『零落白夜』を発動。優の一撃を受け止めそしてはじく、体制を崩したところへシールド無効化の一撃を与えようとする。

「まだ負けるわけには・・・」

高速で物理シールドを展開し何とか受け止める。

「くそっ」『一夏、悔しがるのはあとだもう一度行くぞ、今度はきっちりサポートする』

受け止めたシールドへ徹甲弾を打ち込み盾を四散させ、そしてもう一度、一夏の『零落白夜』の袈裟切り、優も近接ブレードで受け止めようとするがさせるわけにはいかない。

『負けられないんだよ、優』

ガキーン 盾とブレードがぶつかった音だ。ある程度距離が離れていたのに優は驚愕の表情を浮かべているが

「瞬時加速か・・・」

と言う結論に至り、奥歯をかみ締めて悔しがっている。そこへ一夏の攻撃が入り

ブーーーー

試合終了を告げるブザーが鳴った。

「ごめん私のせいで」

「そんなこと言ったらダメよ、智花。これはタッグ戦なんだから」

ピットへ帰ってきた俺たちはISの補給と整備をしながら話していた。一夏はISを検査に出しに行くと言ったので、この場にいるのは俺、智花、優の三人だ。

「残念でした。一夏や俺、シャルルと付き合いなければ正規の手順でお願いします」

「なっ」

「ど、どうして知っているの？」

俺がそのことを知らないと思っていたのか、また驚く。俺は耳をとんとんと叩きながら

「地獄耳なもんで」

「「盗み聞きじゃない（だよ）」」

と言うと、きれいなハモリで返された。

「けど、結構強かったよ」

「負けた私たちに言っても仕方がないわよ」

「そうだよね」

明日は二回戦、あいつと当たるまでは負けない。絶対に・・・

第23話 一回戦（後書き）

どーでした？

戦闘シーンが短いような・・・。一回戦って原作壊してね？ とかの意見は無視してやってください。お願いします。短いのは作者である私のせいで、原作壊したのはオリキャラに愛着がある私のせいです。

明日からテスト一週間前なので一日一回投稿ができなくなります。本当にすいません。時々投稿しますが、たぶん一回できればいい方かと思っています。それが終わればきちんと投稿したいと思っているので、楽しみにしてください。

誤字脱字訂正あればよろしくお願いします。アドバイスやコメントも可です。

第24話 二回戦 前編（前書き）

テスト期間で更新が遅れるかも・・・とか言っていたのですが、日程が決まったのでそれを知らせるためにストックを切らします。

正式には三月三日にテストが終わります（一週間ですよ、ひどくね？）。

二月の二十六日から更新したいと思います。

では一日遅れとなりましたが、第24話どうぞ

第24話 二回戦 前編

第24話

「きゃー、お姉さまこっちを向いてー」「お姉さま私にISのご教授をお願いします」

さっきから俺を取り巻いているのは、一回戦の試合を見ていた女子だ。その一回戦を見てファンになったらしい。正直、迷惑だ。

ルックスは最高、ISの腕前もいい、そして一言もしゃべらないと言うことが噂となり、今では軽く学年の半分ぐらいが俺の自主練を見に来ている。気にすることもないので無視することにした。それが逆効果だとは知らずに……。

一通り射撃訓練が終わった後、ピットに戻り二回戦の情報を待ちながらエネルギーと弾薬の補充を行う。

「宙、二回戦の相手が決まったぜ」

「ん？でたのか？」

一夏はこの前と違ってなれてきたようだ、言葉に引いている様子を感じない。また、トーナメント表を見に行くのを忘れていた。どうやら俺は補充に集中し過ぎていてトーナメント表を見るのを忘れていたようだ。

「相手は？」

「シャルルと白石だ。強敵だな」

保健室の一件のあと葵に頼んでいたことは実行されたようだ。その

頼みとは「葵、俺は一夏と組むことになった。だからシャルルが余ったんだよ、できれば彼をパートナーにしてやってくれ」と言うことだ。

ビー、両者ともアリーナへ出てください

甲高いブザーの音と電子音が聞こえる。どうやら試合が始まるらしい。さっさと補充を済ませてアリーナへ出て行った。そこではまた二人が先に待っていた。

「今日も負けないよ、一夏」

「すみませんが負ける気はないです」

なぜだかやる気満々の二人だった。

シャルル 回想イン

「これは男には内緒の話ですが、宙様よりあなたが女と言うことで行っておきたいことがあります」

女の子の中から僕を助け出した葵と宙君から呼ばれている女の子が話しかけてきた。

「どういうこと？」

「このトーナメントで優勝すると、あなたや一夏様そして宙様と付き合うことができると言うことです」

「えっ、そんな話があったの？」

「はい」

僕はその話に驚いた。

一夏と僕と宙君が？付き合うことになっているなんて……。ということは、ほかの人が優勝したら一夏がほかの人にとられるってこと？いけない、そんなのありえない

「わかっていただけたでしょうか？このトーナメント負けるわけには行きませんので・・協力してください」

「うん、わかったよ。絶対優勝しようね」

「はい」

最後の彼女の力強い返事はとても頼もしかった。

シャルル 回想アウト

『なあ宙、何であんなに気合は言ってるんだ？』『さあな』

シャルルや葵の普通じゃない様子に不思議がっている一夏が話しかけてきた。俺はしゃべるとばれるのでプライベートチャンネルを開く。なぜやる気が満々なのは大体予想がついているが、このことを知らないのは一夏だけなので教えなかった。教えたなら女子になんていわれるかわかったもんじゃないからだ。おそらく殺されるだろう。

試合開始まであと五秒。

カウントダウンが始まる。『打鉄』に乗っている葵はブレードを、

シャルルは両手同時に銃を、一夏は『雪片式型』を、俺は片手ずつアンチマテリアルライフルとアサルトライフルをコールする。

三、二、一 開始。

試合開始と同時に待ってましたと言わんばかりに突撃する一夏と葵。すぐに彼らはぶつかり、切り合いを始める、すると今度はシャルルが俺に射撃をしかけてきた。

「不意打ちって・・・そんなに勝ちたいの？」 「勝たないといけな
いからね」

ボイスチェンジャーで音声を変更し女性の声に近づけてオープンチヤンネルで話す。こうして俺と一夏は分断された。もともとこっちの作戦も俺とシャルルが戦う作戦だったから願ったり叶ったりってやつだ。そんなことを敵に悟られてはいけないので軽くあせっている様子の演技をして、シャルルに対してアサルトライフルを撃つが、シャルルにいつも簡単によけられる。

くそっ、まだ誤差が残っているのか

照準は合っていたのに当たらなかった。本来なら二、三発は当たっているはずだった。いまだに消えてくれない誤差に腹を立てつつ後退しシャルルの有効射程範囲から出る。シャルルはすぐに『高速切替^{イッパチ}』（事前呼び出しを必要としない、戦闘と平行して行えるリアルタイムの武装呼び出し）を使用し新たな武器をコール、俺はあらかじめ呼び出していたアンチマテリアルライフルをフルオートで連射。かずうちやあたるだろう作戦を実行したが誤差のせいで一発もあたらない。弾が切れたところで相手に向かって投げつけ、すぐにコールした『レイン・オブ・サタデイ』で撃つ。もともと面制圧に特化

したショットガンだ命中率が低くても当たる。それは見事に命中し投げつけたアンチマテリアルライフルは砕け散りさらに広範囲に破片をばら撒いた。

「くっ」

シールドで受け止めながら横へ逃げるように旋回するシャルル。ショットガンを捨て利き腕である右腕にアンチマテリアルライフルをコールし、もうひとつの作戦を決行することにした。しかし、シャルルに建て直しの時間を与えすぎたようだ。

「まだまだ、こっからだよ」

ラピッド・スイッチをフル活用して攻め立ててくる。アサルトライフルを撃ち尽くしては、捨ててまた新しいライフルを呼び出し撃つてる。それを左腕コールした実体シールドと元々あった盾で防ぎながら作戦を思い出す・・・

作戦会議 イン

『俺がシャルルと戦うよ、別にいいだろ？お前じゃ勝てないからな』
『そんなことないっ！次は勝って見せる』

『お前それ、負けフラグ立ててるぞ・・・。それより作戦だ、作戦』
『相手はシャルルだし、気をつけないとな』

『ああ、そうだな。一回戦の各個撃破では勝てないだろう・・・残響があれば何とかなれると思うが』

『ないものねだってもしょうがないからな、どうする？』

『・・・うーん、戦っている間に隙を見て狙撃するから、零落白

夜で葵を倒すか？』

『そんな作戦できるのか？相手はシャルルだぞ、賭けみたいなものじゃないか』

『できないものじゃないだろう、いくらなんでも人間なんだし・・・』

『まるで化け物みたいな言い方だな、宙・・・』

『実際ラピッド・スイッチってチートだろ？』

『それを言うならA I Cもじゃないか？』
アクティブ・イナーシャル・キャンセラー

『まあ、そんな話より、基本この作戦で行くことで良いな、一夏』

『わかった、それで行こう。・・・それよりその格好本当にどうにもならないのか？』

『俺だってやめてえよ』

作戦会議 アウト

第24話 二回戦 前編（後書き）

どーでした？

なぜか話が長くなってしまった……。いまだに二巻が終わらないです。三回戦ぐらいでやめます（そんなに敵いないし……）。

そーそー、最近活動報告ってやつを知ったんですよ。テキストに書いたりしますので興味がある方は見てください。今はアンケートをとっていたり……

誤字脱字訂正あったらよろしく願います。コメやアドバイスもまっています。

オリIS 残響（前書き）

時間がないですが、今のうちにやり忘れていたことをやりたいと思います。

設定です、どうぞ

オリIS 残響

設定

機体名 残響 宙は残響のことをエコーと言う。

世代 第四世代

色 白式の白とは反対の完璧な黒、それに赤いラインが入っている

形 無駄を一切省いたような装甲で鋭いイメージを与える
(全体的なイメージはスレイドバードと検索してください)

武装 手持ち武器「一弦」
「二弦」

背面武器 「大正」

腰部武器 「七弦」

足部武器 「フェザーミサイル」

機体説明

近距離、中距離、遠距離用の武器は一通り搭載されているが、基本的に中距離間で本来の性能を発揮する。しかし、搭乗者である宙は

射撃もできるが、特に近距離戦を好んでいるため展開装甲が出てきて以来、本領は発揮できていない。一夏の『白式』と内部構造が似ているため『白式』とだけはエネルギーを分け合える。

武器説明

「一弦」「二弦」は黒い銃で銃身は長くなっていると書いているが、それほど長いわけではない。とり回しが重視されている。

「大正」はバスターブレードのような板の上部にある赤いラインの部分が本体になっている。その威力はレベル4の遮断シールドを50パーセントの出力で破るほどの威力を持つ。「一弦」「二弦」との連結が可能で、連結させた場合命中率が上がる。連結しなくても発射可能。

「七弦」は腰部にマウントされている。左右に二本ずつ、後ろに三本装備されている。形は黒い両刃の短剣で一本一本が機体とワイヤーでつながっている。『シュヴァルツェア・レーゲン』のワイヤーブレードとは違い、ワイヤーは捕まえることより切断用に特化している。

「フェザーミサイル」は両足のすねのあたりに付いている。弾の種類はたくさんある。ひとつは広範囲に羽を撒き散らすタイプがある。その羽は一つ一つが何かに触れた時点で起爆するようにできている。

手持ち武器である「一弦」「二弦」そして背面に付いているバスターブレードみたいな板に展開装甲が使われている。展開すると「一弦」「二弦」は剣になる。その形状は白い片刃の刃がグリップ部分

から出てきている感じ。長さはそんなに長くはない。板の展開後は驚異的な高速戦闘を可能とするが操りきれていない。

オリIS 残響（後書き）

こんな感じかな？

親がうるさいので結構雑になってしまったかも・・・

新しいことが出て来次第、更新します。

次回の更新日は2月26日と変わりません

第25話 二回戦 後半（前書き）

ども、久次振りに更新しましたsirasuです。

二月二十六日の更新するといっていました、こっちが耐えられませんでしたww

では、第25話です、どうぞ

第25話 二回戦 後半

第25話

『一夏、こっちはできたぞ』

作戦の第一段階であるシャルルと葵を射線上に捉える、は成功した。しかもまだそのことを気づかれていない。作戦は順調に進んでいる、チャンスは一度きりのこの作戦、何とか成功させて一夏と俺でシャルルと戦うところまでは行きたい。そうすれば一夏の『零落白夜』があるこちらが有利だ。

『わかった。次は俺の番だな、白石の動きを止めればいいんだよな』
『ああ、できるか?』 『やらないといけないんだろう?』

ハイパーセンサーが一夏を捉える。一夏は前へ前へと攻め立てている、葵は急に攻めてきたことに驚いたのか一夏の刀をはじき距離をとろうとする。が、それを追いかけて距離をつめる一夏

「し、しつこい男は嫌われますよ」「知るかつ」

オープン回線の会話が聞こえる、葵の声はあせっているように聞こえる。シャルルも聞こえているはずなのだが、攻めるのを中断する気はないらしい。さっきアサルトライフルを撃っていたシャルルは、弾が切れるのと同時にラピッド・スイッチでショットガン、アサルトカノン等と武器を次々と換え弾幕を張っている。それを可能な限り盾で受け止めたり回避しているが、致命傷ではないもののちりも積もれば何とやらだ、徐々にだが確実にエネルギーは減っている。

『まだなのか一夏、このままじゃジリ貧だ』『あと少しで・・・』

モニターで射線の確認や一夏たちの様子を見ているが、葵の動きが止まらないことにあせり始めたときだった

ギインッ！

鳴り響く金属音、切り合った刃が火花をちらいているのが目に入る。

今だっ！！

右手に持っていたアンチマテリアルライフルで弾をよけながらシャルルに照準を合わせる。葵と射線が重なったとき、俺は迷わず引き金を引いた。花火が近くでなったかのような轟音が出た。このアンチマテリアルライフル、通称対戦車ライフルは湾岸戦争で二千メートル先の戦車を爆破した伝説を持つ対戦車ライフル『バレットM81A1』。本来あまりの威力と反動に連射性能はつけられないと考えられていたが、ISの馬鹿げた反動制御能力をフルに使うべく改良を重ね、威力や命中性能そして新たに36発もの弾を連射できる、反動を度外視したライフルだ。

名は『メタライーターMAX』

本当なら両手で扱うものだが、今回は片手で使いフルオートで撃ちつくした。その衝撃はすさまじいものだった。ISが相殺してくれているとはいえ、十分に肩を痛められるぐらいの威力だった。

シャルル サイドイン

僕はなぞの美女に弾幕を張っていた。一夏の隣にいる女の子、誰な

のかわからないけど許せない。一夏には悪いけど勝たせるわけには
いかない。あの女が一夏の隣にいるなんてありえない。弾幕を張り
続けていれば足止めもできるし、じりじりとエネルギーを削れる。
こっちは拡張領域が二倍近くある、負ける要素はない。このままい
けば勝てるっ、と思ったときだった。今まで防ぐか、かわすかして
いた女の子がライフルをこっちに向けて照準を合わせてきた。

警告。敵のISにロックオンされています。

モニターに現れる警告と同時になる警告音。そして轟音になる。反
射的に回避行動に出たのが間違이었다、僕の後ろにいたのは葵だ
った。

シャルル サイドアウト

葵 サイドイン

「し、しつこい男は嫌われますよ」「知るかつ」

急に攻めてきた宙様の友人である一夏様から離れようと、一太刀目
を弾き距離をとろうと後退するが、すぐに距離を詰められる。それ
から執拗に追いかけてきては斬撃を繰り返すので、今度はこちらか
ら攻めた。

ギインッ！

と金属が擦れ合う音が響き、火花が散る。一夏様と鏖迫り合いにな
ったときだった。

ズガガガガガンッ！！！！

轟音が鳴り響いた。その音は宙様やシャルルたちの戦闘の音だと思っていたが

警告。接近する飛翔物あり

というモニターに表示される文字に驚愕した。ハイパーセンサーで飛翔物を捉えようとしたときにはもう遅かった。アンロック・ユニット非固定浮遊部位の鎧みたいなものが砕け散り、右腕を破壊した。

葵 サイドアウト

葵のISの右腕が破壊されたのをモニターが表示した。狙いは良かったが反動が相殺し切れていないのと誤差が原因だった。本当なら全弾命中してそれで終わっていたはずだったが、それは叶わなかった。その後一夏は『零落白夜』を発動し一撃のもとに葵を倒してこちらに向かってきた。

「やられたよ。あれが作戦だったのかな一夏？」

「ああ、そのとおりだ。・・・シャルル行くぞっ！」

一人で突っ込む一夏をサポートするために、さっきのアンチマテリアルライフルとショットガンをコールして後を追いかける。一夏の『雪片式型』の一太刀をシャルルはコールした近接ブレード『ブレード・スライサー』で受け止め『レイン・オブ・サタデイ』を撃つ。一夏は何回かあの攻撃を受けたことがあるのか、まるでそう来るこ

とがわかっていたかのように避ける。避けられた弾はもちろん俺のほうへ、もちろん避けることはできないので盾を使って防御しようとしたが・・・『レイン・オブ・サタデイ』が壊れた。爆発したそれは俺のＩＳに当たる、その衝撃が体にも伝わってきたが声を出すことができないので奥歯をかみ締める。

『大丈夫か？』

『大丈夫なわけあるかっ！わかっているなら事前に教えてくれよ』
『す、すまん』

『誤んなくて言いそれより集中しろ、と言いたいところだが交代しろ』
「はっ？」

俺の提案に驚きを隠しきれない一夏は、たぶんうっかりだろうがオープン回線で返事をしてきた。

『プライベートチャンネルにもどれ・・・。交代しろといったんだよ』

『何でだよ、俺がサポートに回っても仕方がないだろうが』

一夏の武器は近接戦闘武器のみ、それではサポートをすることができない

『だからだよ。一夏、俺が近接戦闘に持ち込むから隙を見て『零落白夜』を叩き込め』

『その手があったか』

お前はもう少し考えろよ・・・

それからすぐに場所を入れ替え俺がシャルルの前に立つ。右手に持ったアンチマテリアルライフルを投げつけ、同時に右手にブレード

左手にナイフをコールする。シャルルがアンチマテリアルライフルを迎撃したと同時に瞬時加速を使い懐へ入った。ちなみに瞬時加速は一夏とともに千冬さんから習った。

「瞬時加速!?!」

いきなり懐に入られて驚いているのか両目を見開くシャルル、すぐに『ブレット・スライサー』を手につく。その対応の早さにこっちも驚いたが、動きを止める必要はない。隙の少ない突きとはらいを使い、攻め立てる。突きなので受け止めることはされないが、受け流されて『レイン・オブ・サタデイ』のコンボ。しかし、それは一夏の動きを見て予習済み、打たれる前に切る!

今は女の格好だけど・・・格闘戦は十八番なんだよつ!!

突き出された『レイン・オブ・サタデイ』を切り落としさらに接近し、盾の装甲を解除する。右手にブレード、左手にナイフ、そして盾に仕込んでいたパイルバンカー『灰色の鱗殻』《グレート・スケール》の三段構えで攻め立てる。『ブレット・スライサー』を右手のブレードで円の運動を使い巻き上げ、弾き飛ばす。

「巻き技!?!」

驚くシャルルに対し、さらに攻め立てる。『グレート・スケール』を相手の盾に直接当て、ゼロ距離で放った。

ズガアンツ!

すさまじい威力のそれは盾を打ち砕き、腕を吹き飛ばした。ガードがあいたので間接にナイフをねじ込み、さらにブレードでスラスト

ーを切断。ここで真打、一夏の登場だ。『零落白夜』の最大出力のそれは通常時の二倍はあり、体制を崩しい動力も半減したシャルルにはかわせなかった。シールド無効化の一撃はすでに残り少なかったシャルルのエネルギーを食らい尽くした。

ビーー

！試合終了のブザーが鳴る。これで三回戦、ようやく、あいつとっ！

第25話 二回戦 後半（後書き）

どーでした？ 結構前に書いたので内容がわからないのですが・・・

戦闘描写は苦手です。自信がありませんorz

誤字脱字訂正あったらよろしくお願いします。

第26話 三回戦 開始(前書き)

どーも、今日はテストでしたが更新します。

書き方を変えてきています。読みやすくなっていればいいのですが・
・。ちなみにこれからも変えて行きます。

ではでは第26話、どうぞ

第26話 三回戦 開始

第26話

「きゃーこっち向いて」「何でそんなに強くて美しいの?」

前回の試合からさらにギャラリーが増えている。専用機持ちに勝ったと言うことでさらに名声が上がったらしい。無論声を出すことはできないので、無視する。

「クールなところもしびれるー」「無口なところが格好良いよね」「ねー」

最近気がついたのだが・・・どうやら無口は逆効果らしく、しゃべらない人と定着してしまい、人気が出てしまいファンクラブができたとか何とか・・・。そんなことよりも今はやることがある、それは最終調整だ。未だに消えてくれない誤差を消すために、こうやって自主練しているがまだ消えない。

早く消えてくれ、今日はあいつとやるのに・・・

ガアンッ! ガアンッ!

空中に出てくる的を打っていく、真ん中に当たることはない。ギャラリーはそれでも「すごい」など何など言ってくる。

俺は真ん中をねらっているのに・・・

照準は的の真ん中をとらえているが、真ん中には当たらない。これ

が機体と操縦者の感覚の誤差だ。ひどいときには格闘戦にまで影響を及ぼすと言うが宙のはそこまでではない、それが唯一の救いだ、あいつは現時点で一年生最強だから、不安要素は消しておきたいと思っではいるが、それもできそうになかった。

・・・

宙が自主練している頃、観察室の中で山田先生と織斑先生は話していた。

「いやー、神代君や織斑君は強いですねえ。連携も取れていますし、『零落白夜』もきっちり使いどころがわかっているようですし」

今、ピット内のモニターでは二人の一回戦の様子や二回戦の様子が映し出されている。二人はまさに快進撃と言っても過言ではない、二人の連携の取れているところや専用機持ちのシャルルを倒したことは、教師陣も驚いていた。

「ふん。あれくらいの連携なら四年生まで一緒に居たからできているだけだ。そして、『零落白夜』の使用タイミングも宙が考えているのだろう、一夏は大して役に立っていない」

身内に対しては辛口評価しかしない織斑先生に、山田先生は苦笑気味に笑う。

「そうだとしても織斑君に合わせてくれる友人がいるだけすごいじゃないですか。それだけ友達を大事にしていることですよ」

「まあ・・・そうかもしれないな」

ぶすつとした感じでそう告げる織斑先生だったが、それが照れ隠し

だと言うことが最近わかっていっているようなので、特に気にすることなく話を続ける。

「それにしても、宙君には驚かせられるばかりですね、近接戦闘もですけど・・・特に女装には」

語尾のほうがやや自信なせ気に小さくなっている。

「ああ、あれは少し傷ついたな・・・いまさらながら、後悔しているよ」

織斑先生もいつもの覇気が感じられない。それほどまでに宙の女装は女の心を打ち砕くようだ。長年努力を積み重ねている女性に今までは、なんだったのかと思わせる宙、恐るべし！！　そうして、何とか気持ちを切り替え話を続ける二人。

「それにしても学年別トーナメントのいきなりの形式変更は、やっぱり先月の事件のせいですか？」

先月の事件・・・黒い全身装甲ISの襲撃は、一般的には反政府組織の仕業と言うことになっている。IS学園が襲撃されたと言うことだけでも重大なことだと言うのに、それが無人機だとわかれば、ますます事態は危うい方向へと向かってしまう。今でも各国が敵対国の仕業ではないのかとお互いを疑っている状況なのだ。

「詳しくは聞いていないが、おそらくそうだろう。より実践的な戦闘経験をつませる目的で、ツーマンセルになったのだろうか」

「でも一年生は入学してまだ三ヶ月ですよ？戦争が起こるわけでもないのに、今の状況で実践的な戦闘訓練は必要ない気がします・・・」

山田先生の言うことはもっともだ。けれど、その疑問を投げかけてくるのはわかっていたので、織斑先生の表情は変わらない。

「そこで先月の事件が出てくるのさ。特に今年の新入生には第三世代兵器のテストモデルが多い。そこへなぞの敵対者が現れたら、なにを心配すべきだ？」

「・・・あ！　つまり、自衛のため、ですね」

「そうだ、操縦はもちろん、第三世代兵器を積んだISも守らなくていけない。しかし教師の数が湯減である以上、それらは原則自分で守るしかない。そのために実践的な戦闘経験なのさ」

「はあ、なるほどなるほど。あ！　試合がそろそろ始まりますね」

・・・

「三回戦に来てようやく当たるとはな」

「そりゃ何よりだ。こっちもおんなじ気持ちだぜ」

一夏とラウラの気持ちは同じだった。

「一夏っ！　隣にいるのは誰だ」

箒が俺のほうをにらみつける。

「こいつは俺の友達だよ」

「友達だと？　幼馴染の私を差し置いて友達と組んだというのか」

箒は真っ赤に顔を染めてぼそぼそと言っている。正直最初の「友達だと？」のところしか聞き取れなかった、どうやら一夏も同じらし

い。そして、なぜか俺の方向へいかにも怒っていますという、視線が突き刺さる。

「貴様らも、下らん種馬を取り合うのか」

その目には侮蔑の意味が、その言葉には明らかに呆れている声が混ざる。その言葉に箒は反論しようとするがあと一步のところをやめた。チームワークのことを考えているようだ。

ふーん。チームワークはゼロと、それでも箒はラウラを助けるだろうからな・・・

『一夏、箒からやるぞ』『好きにしてくれ、俺はラウラとやる』『時間稼ぎにだけはなるなよ』『ああ』

プライベートチャンネルを開き、簡単な作戦会議をする。目を合わせている様子にさらに怒ったのか、箒の視線がさらに強くなる。

試合開始まで五秒。

いつもどおりのカウントダウンが始まる。俺は手にブレードを、一夏は『雪片式型』を、箒は俺と同じく手にブレードをコールする。今回は最初から近接戦闘で戦うようにした。

箒にはすまないけど、一撃で葬らせてもらう。

四、三、二、一・・・開始。

「叩きのめす」

一夏とラウラの言葉が重なり三回戦の開幕だ。

第26話 三回戦 開始（後書き）

どーでした？

明日もテストなので結構めんどくさい俺は勉強しねえ、
という結論に至ったところです。

誤字脱字訂正あったらよろしくお願いします。

第27話 VTシステム（前書き）

どーも、今日もテストがあり心身ともに死に掛けているsirasuです。

まだ二巻終わらん・・・この調子だと六巻まで90話必要になるかも・・・

ちなみに次の作品は禁書かアリアのどれかにします。（終われば・・・）

コメントよろしくお願いします。

では、第27話どうぞ

第27話 VTシステム

第27話

「叩きのめす」

ラウラと同じ言葉を言い放ち飛び出す一夏。瞬時加速を使う、当てられれば戦局はこちら側に傾くが・・・

回想 イン

これは鈴とセシリアがやられたときの意見を聞いているときだ。

「A I C? なんだそれ?」

「シュバルツェア・レーゲンの第三世代兵器よ。アクティブ・イナ―シャル・キャンセラーの略。慣性停止能力」

「ふーん」

「ちなみに一夏さん、P I Cはご存じですわよね?」

「・・・知らん」

「はあ? 一夏、それは最初に習っただろう。パッシブ・イナ―シャル・キャンセラーのよって浮遊、加速、停止をしているんだろ」

「おお、説明ありがとな宙。どこかで聞いたことあると思ったらそれか」

あまりの馬鹿さ加減に鈴とセシリアは呆れている。その後、A I Cの性能について語ってもらい、俺と位置かで分析した結果、完璧に破る対策はできなかった。

回想 アウト

視界の端で一夏の動きが止まるのを捉えた。が、今はそんなことを気にしている暇はなかった。目の前に鬼が立っている、俺に一夏のパートナーを取られたことが相当ショックだったのか黒いオーラが噴出している。

「覚悟はできているだろうな」

その声はそこらへんにいる人なら縮みこんでしまいそうな迫力があつた。知ってるあの三人組ならともかく、俺の正体をばらすわけにもいかなかったので黙っている

「無言は肯定の意味で受けとつてもいいな？」

と疑問系で聞いてきたが、すでに刀を構えている。両足を縦に開き中段の構えを取る筈、それに対し俺は構えを取らなかった。その様子にさらに腹が立ったのか黒いオーラが吹き出る。

うわあ、やべえ・・・これはホントにやばいかもしれない。あんなに怒っている筈は見たことがないよ・・・。まあ、やりやすいけどね

開いている左腕を突き出し、手のひらを上に向け自分のほうへクイックイツと二回折り曲げた。

「ほう、死にたいらしいな」

そう言い捨て飛び出してくる箒。刀を最上段まで上げる、それはまさに一撃必殺の威力を誇るはずだった。

ザンッ！

俺は飛び込んでくる箒に対して瞬時加速を使い、すれ違いざまに箒のISの腕を切り落とした。怒っていた箒の最上段からの一撃は隙が大きかったので、俺は最速にして最大の一閃を繰り出した。一瞬の判断で勝負が決まる戦いの中で冷静さを失うことは負けを意味する。だから一撃で倒そうと向かってくる箒を倒すのは簡単だった。ISのエネルギーは切れてはいないが放心状態となっているので箒に止めを刺さなかった。

「なにっ！」

その様子を見ていたのかラウラが驚く。もちろん集中力は切れ、大型レール砲の一撃を与えようとしていたが失敗に終わる。

「すまん」『いいってことよ。それより箒には悪いことしたな・・・』

そんな気持ちはすぐに切り替えて目の前の敵に集中する。一夏を逃がしてかなりご立腹のようだ。

『一夏、お前右を頼むわ。俺が左のほうを担当するから』

プライベートチャンネルを切ると同時に瞬時加速する。一夏とそんなことは話していないが息が合った。さすがのラウラも同時に接近してきたことに驚いている。が、すぐにプラズマ手刀とを展開、ワ

イヤーブレードを射出して迎撃しようとする。俺と一夏はさつきした会話どうりに分担し、プラズマ手刀一本とワイヤーブレード3個と戦う。

「うおおおおっ！」

「・・・・・・・・・・」

一夏は気合の入った咆哮とともにすべてのワイヤーブレードを叩き落しラウラに切りつける。俺は無言の気合とともにワイヤーブレードのワイヤーを引っ張り体制を崩させ斬りかかる。まさに阿吽の呼吸とも言えるべき連携攻撃だったが

「その程度のことです」

ラウラはプラズマ手刀をしまう。

まずい！ A I C かつ！

脳裏にひとつの考えが浮かんだところで、ビシッ！ と凍りつくように俺と一夏の動きは止まる。ラウラの両手は俺と一夏に向けられている。

「口ほどでもなかったな・・・消えろ」

回収されていたワイヤーブレードが射出される。もちろん、動くことはできない。

「くそおおっ！・・・なんてな」
「なにっ」

一夏のまったく動じていない様子に目を見開くラウラ、動じていない理由はすぐにわかったはずだ。

カッ！

閃光玉または閃光手榴弾^{フラッシュ・グレネード}とも言う。つかまったときに俺がコールしていたものだ。確かにA I Cに対して完璧に破る対抗策は出なかったが、もしかまったときのことを話し合って決めていた作戦のひとつだ。いくら軍人だろうが急な閃光には目もくらむはず、案の定予想どおりに集中力は切れA I Cは解除された。あらかじめ目を閉じてセンサーを切っていた俺たちに被害はない。まだ目を開け切れないラウラに一夏の『零落白夜』と俺のさっき箒に与えた斬撃を同時に、ラウラへと向かわせた。

「おおおおおっ！」

初めてラウラの表情に焦りが見える。まだ目が見えていいはずなのに武器を振り回し止めようとする。しかしそれも虚しく空を切り、俺たちの攻撃は直撃した。

ギインッ！ ザンッ！

二つの斬撃が決まったとき異変が起きた。

ラウラ サイドイン

こんな・・・こんなところで負けるのか、私は・・・！

確かに相手の力量を見誤った。それは間違えのないミスだ。しかし、それでも

私は負けられない！ 負けるわけにはいかない・・・！

試験管の中で生まれ鉄の子宮で育てられた。そこに私はいた。戦いのために作られ育てられた。私は優秀だった、性能面で最高レベルを記録続けた。しかしISの出現により私の世界は変わった。『ヴォーダン・オージェ』それは目の中にナノマシンを入れることで擬似ハイパーセンサーにし、ISとの適合性向上のため行われた。危険性はなかったはずだった、理論上ではそうだったはずだ。しかし、私の左目は金色に変質し、常に稼動状態になり制御不能と陥った。このせいで私は部隊の中の落ちこぼれとなった。そんな私に光が届いた。それは教官・・・織斑千冬との出会いだった。教官は私にこういった。

「ここ最近の成績は振るわないようだが、なに心配するな。一ヶ月で部隊最強の地位へと戻れるだろう。何せ、私が教えるのだからな」その言葉に偽りなどなく、私はすぐに部隊の最強の座に君臨した。特別に私だけ、ということをしたわけでもなくただ教官に従っただけだった。だから

ああ、こうなりたい。この人のようになりたい

心のそこから思った、願った、そして懂れた。私はそれから時間を見つけては教官のそばに居た。近くにいるだけで力がわいてくるような感覚、それは勇氣に近いらしい。その力があつたから私は聞いた。

「どうしてそこまで強いのですか？　どうすれば強くなれますか？」

そのとき教官が笑った。その表情に心が少し痛んだのを覚えている。

「私には弟と弟みたいなのがいる」

「弟と弟みたいなの・・・ですか」

「あいつらを見ていると、わかる時がある。強さとはどういうものなのか、その先になにがあるのかをな」

「・・・よくわかりません」

「今はそれでいいさ。そうだな。いつか日本に来ることがあるならあってみるといい。・・・ああ、だがひとつ忠告しておくぞ。あいつらに・・・」

やさしい笑み、どこか気恥ずかしそうな表情、それは・・・

それは、違う。私の憧れるあなたではない。あなたは強く、凛々しく、堂々としているのがあなたなのに

許せない。教官にそんな表情をさせる存在が。そんな風に教官を変えてしまう二人、認めることはできない。だから・・・

あいつらをたたき伏せると決めたのだ。今は一人しかいないがそれでも負けるわけにはいかない。

壊さなければいけないのだ。動かなくなるまで、徹底的にっ！！
そのために、そのためには

力がほしい

ドクンと何かが私の中でうごめく。そして、そいつはこう言った。

「願うか？何時、自らの変革を望むか？より強い力を欲するか？」

言うまでもなかった。力があるなら、それを得られるのなら、私など・・・空っぽの私など、なにから何までくれてやる！だから力を・・・比類なき最強を、唯一無二の絶対の力を・・・私によこせ！

Damage Level・・・D.

Mind Condition・・・Uplift.
certification・・・Clear.

《Valkyrie Trace System》・・・boot.

ラウラ サイドアウト

第27話 VTシステム（後書き）

どーでした？

アニメを今さっき見たのですが・・・抜かれた。ちよつとショックです。

無駄に時間かけているほうが悪いのですが・・・文も短いし・・・。

悩みどころがたくさんあります。今日は後一話ぐらい投稿しようかな？

誤字脱字訂正あったらよろしく願いします。

第28話 あの手技は（前書き）

どーも、本日の度目の投稿となりましたsirassuです。

特に書くこともないので第28話、どうぞ

第28話 あの手技は

第28話

箒サイド イン

私は怒りに身を任せ、そして敗れた。実際にはISのエネルギーはまだ残っているが、心を打ち砕かれてしまった。

しゅ、修行が足りん・・・

一夏のこととはいえ簡単に相手の挑発に乗ってしまったことに、自分が許せない気持ちになる。落ち着けば勝てたかもしれない相手だった。しかし、勝てなかった。自分が未熟だったことにも腹が立つ。

しかし、あの剣技はどこかで・・・

「あああああつ！！！！！」

突然、耳に響く声。絶叫になにが起こったかを確認しようと集中する。そこでは

「な、なんだ」

箒サイド アウト

二つの斬撃がラウラ決まった時だった。

力がほしい

な、何なんだこの声は！ どうして俺の頭に響いて来るんだ。一体誰なんだ……。

力があるなら、それを得られるのなら、私など……空っぽの私など、なにから何までくれてやる！ だから力を……比類なき最強を、唯一無二の絶対の力を……私によこせ！

力……だと。力が欲しいだと……いけない、いけない、それでは俺のようになってしまう。それはダメだっ！！ それだけは……絶対に望んではいけないっ！！

「あああああっ！！！！！」

ラウラの声が頭の中に響いたとき突然、ラウラが身を引き裂かんばかりの絶叫を発した。その時にラウラのIS『シュヴァルツエア・レーゲン』から激しい電撃が放たれ、俺と一夏の体は吹き飛ばされた。

「ぐっ！ 一体なにが……。――！！？」

あの声の正体はこいつなのか！？

俺も一夏も目を疑っている。視線の先でラウラが……。そのISが変形していた。いや、変形などと生やさしいものではない。装甲をかたどっていた線はすべてぐにやりと溶け、どろどろのものになって、ラウラの全身を包み込んでいく。黒い、深くにこった闇がラウラを飲み込んでいった。

「なんだよ、あれは・・・」

くそ、一体どうなっているんだ……。頭に声が響いたと思ったら、今度はラウラが・・・

俺は口に出すことができないので頭の中で、一夏は口に出していた。おそらくそれを見ていたであろう俺以外が一夏と同じ考えだろう。ISは変形できない。ISがその形状を変えるのは『初期操縦者適応』と『形態移行』の二つだけだ。パッケージ装備のよる多少の部分変化は合っても、基礎の形状が変化することはまずない。そんなことはありえないし、そういう風にできている。

だがありえないことが目の前でおきていた。変形などではなく粘土細工で最初から作り上げるように見えた。『シュヴァルツェ・レーゲン』はもうそこにはない。解けたものはラウラの全身を包み込み、心臓の鼓動のように脈動を繰り返しながら地面へと降りていく。それが地面に付いたとき、急に形が出来上がっていく、そしてそこにいたのは黒い全身装甲の『何か』だ。以前襲ってきたやつと同じ特徴はあるものの形状はまったく違う。ボディラインはラウラのそれをそのまま表面化した少女のそれであり、最小限のアーマーが腕と足につけられている。そして頭部はフルフェイスのアーマーに覆われ、目の箇所には装甲の下にあるラインセンサーが赤い光を漏らしていた。

「《雪片》・・・！」

「雪片」だと！？

黒いISの武器がその昔、千冬さんが振るっていた刀と同じだった。似ていると言うレベルの話ではなく本物に限りなく近い複製だった。

一夏が刀を中段に構える。それを見て俺も構えようとしたら・・・

箒サイド イン

「な、なんだ」

なにが起こっているんだ？ 急にボーデヴィツヒのISが溶けた
と思ったら、あの襲撃者のISに、似ていなくもないISになった
ではないか！ そしてその手には「雪片」！！

箒は目の前で起こっていることをただ呆然と見ていた。動けないわけではなかったが、一夏の隣にいた謎の女にやられたことや、ラウラのISに変化が起こったことを頭の中で処理し切れなかったから動けなかった。視界の隅に一夏が構えるのが見えた、その時黒いISが動いた。居合いに見立てた刀を中段に引いて構え、必中の間合いから放たれる必殺の一閃。その一閃を見たとき、箒の頭の中の疑問のパズルに最後のピースが埋まった。

あの動きは千冬さんの動き・・・そして、あの女が繰り出してきた技は・・・認めたくはないが、あの技を完璧に受けた私にはわかる。あの女の技は千冬さんと同じ技・・・

箒サイド アウト

あの黒いISは驚くことに千冬さんの技を使ってきた。俺が箒に使ったわざと同じ技だ。名前は知らない、ただ昔一夏と同じく千冬さ

んの護身術を教えてもらっていた頃、一度だけ千冬さんが俺たちに見せてくれた真剣の技だ。俺がなぜ使えているのかと言うと・・・わからない、いつの間にか使えていたんだ。気が付いたらあの不良や、やが付く人にも使っていた。今頃思ったがあの六年間生きてこれたのは千冬さんのおかげではないかと思う。

そのようなことはどうでもいい、今は目の前にいる敵に集中しよう。その技を受けた一夏は手に持った「雪片式型」を弾かれる。そして黒いISは上段の構えと移る。冗談であって欲しかった。（ギヤグではない）縦一直線に落すように振り下ろされた斬撃は、一夏の背面にあるアンロック・ユニットを断ち切った。

「いつ」

思わず口に出すところだった。本当は一夏と言うべきだった言葉を無理やりのどの奥に封じる。なおも攻め続けているIS、何とか一夏たちの間に入ろうとしても、うまく一夏の体の位置を調整され撃つに撃てないし入るには入れない。約数分間その状態が続いたときだった、今までうまくしのいでいた一夏が崩れ始めた。ついに相手の一太刀が入り左腕が切られた。それはうまく後方へ回避したように思えたが、相手はそれを上回っていた。

くそっ！ 早く入らないと一夏がやられる。

そして俺はあの黒いISの目の前、一夏の前に一気に飛び出していた。

第28話 あの手技は（後書き）

どーでした？

明日は投稿ません。

次回予告 タイトル 共通点
お楽しみに

こんな適当な予告ですいません。

誤字脱字訂正あったらよろしく願います。

第29話 共通点(前書き)

どーも、卒業式の練習のせいで若干やつれているsirasuです。
卒業しきつてめんどくさいですよ、特に見送る側は・・・。
つらいんですよ、卒業証書授与とかが。

こんな愚痴を言っても仕方がないことに気が付きました、今。というわけで話をこの話の方向に戻しますが、まだ二巻が終わらん。それが今の悩みです。

ではでは第29話、どうぞ

第29話 共通点

第29話

ギイン！

『下がれ一夏、こいつは俺がやる』

黒いISが一夏の止めをさそうと、攻撃が大振りになったときにうまく入り込めた。俺の後ろで一夏の『白式』が消えていくのが目に入る。エネルギー切れらしい。黒いISと鏖迫り合いになっているので、何とか押し返そうとすると、

スッ

急に力が抜ける感覚。そして傾く体、まずいっ と思ったときにはもう遅かった。前へ倒れそうになっている俺に、上段から振り下ろされる『雪片』。

ガァンッ！

―絶対防御発動、シールドエネルギー残量、0。戦闘継続不可。

くそっ！

たったの一撃で『リヴァイブ』のシールドエネルギーが底に着いた。起動停止した『リヴァイブ』から出た直後

「……………がどうした……………」

「一夏!？」

ボイスチェンジャーで声質を変え、一夏の口に出した言葉に反応する。

「それがどうしたああっ！」

俺の隣を走りぬけ、一夏は黒いISに殴りかかる。俺は反応できず、ただその後を呆然と目で追うしかなかった。

「待て、一夏。なにをしている！ 死ぬ気か!？」

怒りをあらわにして激昂する一夏。一夏は拳だけで黒いISに近づいていく、その拳が黒いISに触れる瞬間、何とか反応した筈に止められる。

「離せ！ あいつ、ふざけやがって！ ぶっ飛ばしてやる！」

俺も無意識のうちに拳が硬く握られていることに気づいた。あの動きは千冬さんのものだ。そして、俺と一夏が最初に習った『真剣』の技だった。始めてみたときの事を今でも思い出すことができる。

『いいか、一夏、宙。刀は振るうものだ。振られるようでは、剣術とは言わない』

初めて持たされた鋼鉄のそれは、ずしりとその重みを俺たちの腕に与えた。手に持っているだけで緊張し汗が出てくる。構えようとしても重過ぎて構えることすらできなかった。

『重いだろう。それが、人の命を絶つ武器の、その重さだ』

冷たく、鈍い輝きを放つ刀に俺は心を奪われた。人を切るために生まれ、作られ、鍛えられた、その存在は俺の心に感動を与えた。波紋や鈍い輝きはとてもきれいだったことを覚えている。

『この重さを振るうこと。それがどういう意味を持つのか、考えろ。それが強さということだ』

そういった千冬さんは厳しく、そして優しい目俺たちに言った。いつもと違う表情だった。その後、俺と一夏はあの人に一步でも早く近づきたくて、力になりたくてその強さを追い求めた。けれど、俺はそんな大切なことを忘れ、人を傷つけた。千冬さんから習った技で・・・

くそっ！ 俺はなんてことを・・・

そんな大切なことを忘れていた自分に腹が立つ。不覚にも黒いISに少しでも感謝してしまった。

俺は千冬さんに近づきたくて、手に入れた技や力で人を大勢傷つけた。その罪はいまだに消え切れていないだろう、俺が傷つけた人は今でも俺のことを許してくれないはずだ。それでも俺はあの黒いISに・・・いや、ラウラに教えないければならない。力とは・・・千冬さんの力はそのようなものではないと。

「どけよ、箒！ 邪魔をするならお前も——」

「っ！ いい加減にしろ！」

バシーン！

と頬を思いつきり箒に叩かれた一夏。叩かれた一夏は横に転がった。落ち着いていくのがわかる。

「何だというのだ！ わかるように説明しろ」

「あいつ・・・」「俺が説明する」・・・宙!？」

「宙!？」

驚いている箒をいつものように無視して、ボイスチェンジャーのスイッチをオフにし、箒や一夏にしか聞こえないように話す。

「あれは、千冬さんだ。正確に言うデータだが・・・」

「そのデータは千冬姉のものなんだ！ 千冬姉のだけのものなんだよ。それを・・・くそっ!」

黒いISは目の前に立っている俺たちに攻撃を仕掛けてこなかった。武器が攻撃に反応して行動するタイプの自動プログラムのようものだろう。一夏の攻撃は攻撃と認知されなかったのが、せめてもの救いだっただ。

「お前は・・・いつも千冬さん千冬さんだな」

「それだけじゃねえよ。あんな、わけのわからない力に振り回されているラウラも気にいらねえ。ISとラウラ、どっちも一発ぶっ叩いてやらねえと気がすまねえ」

「すまん、一夏。ラウラを殴るのは俺の役目だ。今回だけは譲れねえよ」

やる気のなっている一夏に釘をさす。しかし、これだけは譲れなかった。

「ふざけんな、あいつも殴ってやらないと気がすまないといっているんだ」

「お前の気持ちはわかっている。どうせ、あれは暴力だってこと教えたいんだろ？ だからこそ、俺に任せてくれ・・・もう二度と俺と同じ過ちはさせないさ」

そう、それはあの日誓ったことだ、助けてもらったときに・・・二度と繰り返してはいけないう。あのことを知っている一夏もわかってくれたようだ。

まあ、あの事を知らない筈はポカーンとしているがな・・・

「わかったよ。とにかく、俺はISをぶん殴る」

「理由はわかったが、今のお前になにができる。白式のエネルギーも残っていない状況で、どう戦う気だ」

「ぐっ・・・」

筈の言ったことは正論だった。あの黒いISは一度『零落白夜』を受けているので、もうほとんどエネルギーは残っていないはずだ。しかし、『白式』には一撃も決めることができないどころか、装甲を展開することもできないだろう。

『非常事態発令！ トーナメントの全試合は中止！ 状況レベルをDと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む！ 来賓、生徒はすぐに非難すること！ 繰り返し！』

と耳に入ってくる、先生からの連絡。

「聞いているとおり、お前がやらなくても状況は收拾されるだろう。だから――」

「だから、無理に危ないところに飛び込む必要はない、か？」
「そうだ」

俺も黙って聞いていたが、箒の言うことは正しかった。間違いなく最善の行動だろう。けど、賛成することはできない。

「だからなんだ？ 俺はあいつを助けたいから・・・教えてやりたいからやるんだ」

「宙の言うとおりだ。お前の言っていることは全然違う。俺が『やらなきゃいけない』んじゃないんだよ。これは『俺がやりたいからやる』んだ。ほかの誰かがどうだとか、知るか。大体、ここで引いちまったらそれはもう俺じゃねえよ。織斑一夏じゃない」

「ええい、馬鹿者が！ ならばどうするのだ！ 宙はISを使えない、一夏はエネルギーがない。どの道何もできないではないだろうが」

それを聞いた俺は観客席を見る。そこにはもう誰もいない。避難は完了したようだ。

「俺はできる。エネルギーも一夏に分けることもできる」

「本当か！？ だったら頼む！ 早速やってくれ！」

なぜ俺ができるかというと、ほんの少し前、俺が一人で残響のメンテをしていたときだった。そのとき急にやってきた山田先生が話をしてくれたのだ。

『それにしても神代君のISは不思議ですね』

『なにがですか？』

『前、一回織斑君のISと一緒に点検したときがあるじゃないですか』

前回の侵入者を撃退したときだ

『はい、それがどうしたんですか』

『それが、織斑君のISと似ているんですよ』

『ん？ 似ていないですけど・・・』

黒いところや全体的に鋭いイメージがある残響のフォームを見る。
そこからは似ていると言うことはできなかった。

『外見ではなくてですね、作りが似ているんですよ』

『作り？』

『はい、作りです。内部構造がほとんど変わらないんですよ』

『内部構造が？』

俺はその意味がまったくわからなかったので、頭にはてなマークが
浮かぶ。

『内部構造が似ているってことは、エネルギーを渡しやすいんですよ。ちょうど残響にもバイパスを構築することもできますし・・・』

『それっ！ 教えてください！！』

それを聞いた俺は先生に接近して手をとった。そのときは無我夢中
だったようなので、そのときなぜか先生が顔を赤くしている意味が
わからなかった。

第29話 共通点（後書き）

どーでした？

前書きで言い過ぎたため、後書きのネタがないWW

誤字脱字訂正あったらよろしく願います。

次回の投稿は明日か明日以降となります。

テストのせいで・・・一日一回投稿ができないのです。

第30話 決着 そして・・・（前書き）

ども、卒業式で今日は試験がなかったので執筆しまくっていた
i r a s uです。

結局こうしました。 意味は本文を読めばわかると思います。

ではでは、第35話どうぞ

第30話 決着 そして・・・

第30話

「さっさと終わらせますか、こんな茶番はもう死ぬほど見たっての」
「ああ、こんなふざけたこと終わらせてやるよ」

すばやく残響を起動させる。ちなみに許可はもう取ってある。

「んじゃ、はじめますか・・・エコーのコア・バイパスを開放。
エネルギーの供給を許可する。一夏、白式のモードを一極限定にし
ろ。エネルギーは足りるが、おまえの『零落白夜』を何回も使うた
めにそうしてくれ」

「おう、わかった」

残響から伸びたバイパスを白式の待機状態であるガントレットに差
し込む、そこからエネルギーを流し込む。

なぜかその時、残響が震えているのを感じた。まるで何かに喜んで
いるかのように・・・。

「どうだ？ 一応終わったぞ。半々でお前に渡したから」

バイパスをガントレットから離すとまた、残響が震えるのを感じた。
さっきとは違い何かに悲しんでいるように・・・。

俺も残響を一極限定にしてエネルギーの消費を抑えた。理由は一夏
のもしものエネルギー切れに備えるためだ。

「腕の装甲と武器だけでいいよな」

「そうだな、そのほうがいいだろう。そっちのほうが長く使える」

俺も腕の装甲と武器だけにして、すぐに展開させる。そんなに長くはない展開状態の「一弦」と「二弦」の刃が、今だけでも長く見えた。

さあ、行くぞエコー。防御なし。当たれば即死か、重症。お前は無謀と思うだろうな。だけど、俺にはやらないといけないことがある。信じてくれよ。

「い、一夏っ！ 宙！」

そんな二人を傍観していた箒が、弾かれたように口を開いた。その目は真っ直ぐに俺たちを見据えている。

「死ぬな……。絶対に死ぬな！」

「なにを心配してんだい、バカ」

「心配されているのに、バカはないだろう、一夏」

「そ、そうだ。バカとは何だ！ 私はお前が」

ん？ お前が？ 俺は……。どこへ？ また俺が忘れられてる……。影薄いのかな？

「信じろ」

「え？」

「俺を信じろよ、箒。心配も祈りも不必要だ。ただ、信じてまっけてくれ。必ず勝って帰ってくる」

「ああ、一夏の言うとおりに信じてくれ。変に氣遣われるより氣が楽だ」

あいつに……。ラウラに、強さを教えてやらないとな。俺はまだ強

さが何かわからないが、それは違うと教えてやらないといけない。
もう二度と俺のような過ちを犯させてたまるか。

「じゃあ、行って来る」

「勝って来ますか」

「あ、ああ！ 勝ってこい、一夏！」

「また俺は無視ですか！！」

ここの所たまっていた不満を一気に開放する

「さっさと行くぞ、宙」

開放したはずだが、一夏にさえ無視された。

俺、本当に自信が・・・ズタボロにorz

「じゃあ、行くぜ偽者野郎」

「そうだね、行こうか・・・」

張り切る一夏のとなりで軽く落ち込んでいる俺。こんなにも戦闘が始まる前に士気が落ちたのは初めてだ。気づけばいつの間にか一夏は『零落白夜』を発動している。その形は今までの形とは違い、細く、鋭く、尖っている。それはまるで日本刀のようだった。

その時だった、こっちの武器やISに反応したのか、急にこっちへ向かってきた。一夏はまだ集中していて気がついていない。

本当に厄介なやつだよ一夏は

ギイン！ 千冬さんの動きをしている黒いISの一太刀を右手の「一弦」で受け止める。なんとなく言った言葉が気になったが、無視

することにしよう。

「宙っ!？」

受け止めたことに驚き、声を上げる一夏

「心配すんな、それよりさっさと集中しろ。こいつに勝つんだろ？」
「わかった。やられるなよ」

ああ と短く返事をし、目の前にいる敵を見据える。

本当に哀れだな。千冬さんの動きを真似るとは・・・士気が下がっているとはいえ負けられないな

前みたいに力を抜き鏢迫り合いから俺の体制を崩そうとしたが、このとき妙にさえていた俺はこのことに気づき逆にこちらから先に離してやった。すると、俺と同じように前のほうに体制をくずす黒いIS、そこへ左手の「二弦」で攻撃したが、黒いISは倒れそうになっている体をひねり、やや強引に『雪片』で弾いた。

どんだけ化け物なんだよ、千冬さん・・・

その動きは最早人間技とは思えなかった。鋭く早い剣技と圧倒的な反射神経、それこそが織斑 千冬を優勝に導いた要素だ。そんな行動ですら真似をする黒いISの性能に驚く、そして怒った。

「千冬さんの侮辱をするなよ。あの人はもっと強い、こんな剣じゃなかった」

「そのとおりだ、宙」

どうやら一夏の準備が終わったらしい、その目には一切の曇りはない。そんな一夏の変化に気がついたのか、黒いISの目標は一夏へと変わった。

一夏に飛び込み、刀を振り下ろす黒いIS。もちろん千冬さんの動きだったそこに、心はない。だから

「「ただの真似事だ」」

ギンッ！ 『一閃二断の構え』をとっていた一夏は、腰から抜き放って横一線、相手の刀を弾く。そしてすぐさま頭上に構え、縦に真っ直ぐ相手を断ち切る。

正直名前を聞いたときは最初、矛盾としか考えられない名前だったが、これこそが一閃二断の構え。一足目に閃き、二足目に断つ。

「ぎ、ぎ……が……」

ジジッ……と紫電が走り、黒いISが真っ二つに割れる。そして、そこから出てきたラウラは俺たちと目が合った。眼帯がはずれ、あらわになった金色の左目と。ひどく弱っているかのように見えたそれはまるで、助けてほしい、と言っているように見えた。

そんなラウラに約束どうり一発ぶちかまそうと抱きかかえた。その体は思ったよりも小さく、やわらかかった。乱暴にすれば壊れそうな感じがして、殴りそうになった手を止めた。

「すまん、一夏。ぶちかまそうにも無理だ」

「……まあ、勘弁してやるか」

「ひとつ忠告しておくぞ。あいつらに会うことがあれば、心を強く持て。あいつらは未熟者のくせにどうしてか、妙に女を刺激するのだ。油断しているとほれてしまうぞ?」

そんな風という教官はひどくうれしそうで、それでいてどこか照れくさそうで、なんだか見ているこちらがもやもやとした。だから、――今ならわかる。あれはそう、ちょっとしたヤキモチだったのだ。それでつい、あんなことを聞いてしまった。

「教官もほれているのですか?」

「姉が弟や弟分に惚れるものか、馬鹿め」

ニヤリとした顔で言われて、私はますます落ち着かなくなる。教官にこんな顔をさせるそいつらが――羨ましい。

そして出会って、戦って、理解した。

強さとは何なのか。その答えを探しているもの……私と同じ考えを持つ者に出会ってしまった。

『強さね……。なんなんだろうな? 未だにわかんねえよ』

……。そう、なのか?

『そりゃね、人それぞれあるだろうからな。俺の強さは何なのか、俺だって知ってるよ』

・・・じゃあなぜ、私を否定できる。

『一度過ちを犯したからだよ』

・・・過ち？

『そう、過ち。お前と同じように力だけを求めたよ。結果俺は人として最低な男になった』

・・・最低か・・・。

『ま、そんな俺を助けてくれてやつがいたからな。だから、俺はお前を助けた』

・・・助けた？

『さっきから疑問形が多いやつだな。まあいい、そうです、助けました。それが俺にできる唯一の罪滅ぼしだからな』

・・・罪滅ぼしか、私も・・・。

『お前はしなくていいよ。俺のようにはまだなっていないから。未遂ってやつだよ』

・・・どうしてそんなことを言える、私は・・・

『何もしていないぞ。力を求めて強さを手に入れてから、誰も傷つけていない。そうだろう？』

——しかしっ。

『あーもう、うるさいなあ。俺が良いって言ったら良いの。お前は
まだ踏み間違っていないよ。俺から言わせてもらうと、まだまだだ
ね。まだ修正が効くから・・・俺と違ってな』

・・・どうしてそんなに、強いのだ？

『俺が強いか・・・。お前はバカか？』

・・・実際に私を倒したではないか。

『勝てば強いのか・・・まだ間違っているな。負けることにだって
意味はある、そっから学べよ。』

・・・もし、お前に俺が強く見えるとしたらそれは、悩んだからじ
やないかな？』

・・・悩む？

『そう、悩んで、悩んで、悩みまくって、それでも先に進もうと這
いつくばってでも進んできたからな。そういうところがお前にとっ
て強そうに見えたんじゃないのか？』

・・・わからん。なにが強さなのかも・・・

『んじゃ、一緒に探さないか？ 俺とさ』

・・・えっ？

『探そうって言ってんだよ。ないなら見つければいい。だから、一
緒に探してみないか？』

・・・そう、だな。

『二度とお前に間違った道を歩ませないようにしてやるよ。そんな風にならないよう守ってやるよ』

言われて、私の胸は初めての衝撃に強く揺さぶられる。

『守ってやるよ』

そう言われて、私は――ああ、そうか。これがそうなのか。ときめいてしまったのだ。そして、早鐘を打つ心臓が言っている。こいつの前では、私はただの十五歳なのだと、ただの『女』なのだと。

神代 宙

ああ、これは確かに。惚れてしまいそうだ。

第30話 決着 そして・・・（後書き）

どーでした？

結果 ラウラは宙に惚れました。

誤字脱字訂正などあったらよろしくお願いします。

第31話 嫁宣言!?(前書き)

ども、sirasuです。

前書きで話すネタが切れました・・・

ではでは第31話、どうぞ

第31話 嫁宣言!?

第31話

『トーナメントは事故により中止となりました。ただし、今後のデータ指標と関係するため、すべての三回戦は行います。場所と日時の変更は各自個人端末で確認の上――』

ピッ、と誰かが学食のテレビの電源を落とす。俺は一夏と同じ海鮮塩ラーメンを食べながら見ていた。

「ふむ。シャルルの予想どうりになったな」

「そうなのか？」

「そうだよ。あ、一夏、七味とって」

「はいよ」

「ありがと」

このように三人でゆっくりと食事をしていた。当事者がのんびりとしているのでどこからか批判が来てもおかしくないの。ちなみに、ついさっきまで教師の皆さんに囲まれて事情聴取されていた。やっとな開放されたと思ったら、時間は食堂終了ギリギリの時間。あわて戻ると、話を聞きたかったのかかなりの女子が食堂で待っていた。とりあえず先に晩飯を食おうと席に座るとそこでシャルルと合流し、三人で食べることになった。そこで急に重大な告知があるというところでテレビに帯が入り、そしてさっきの内容となるわけである。

「ふー、ごちそうさま。学食といい寮食堂といい、この学校は本当に料理がうまくて幸せだな。・・・ん？」

「本当にうまいよな、ここ。それよりどうしたんだ？」

一夏が女子のグループを不思議そうに見ていたので、俺も見ることにした。

「・・・優勝・・・チャンス・・・消え・・・」

「交際・・・無効・・・」

「・・・うわああああんっ！」

バタバタバタと数十名が泣きながら走り去っていた。それを見た一夏は驚いている。

「どうしたんだろうね？」

「さあ・・・？」

「女子の考えていることはわからん」

内心、心あたりがありまくりなのだが、それを教えると女子がかわいそうに思えてきたので口に出すのをやめて、一夏たちに続く。

「・・・」

女子が去った後に、一人呆然と立ち尽くしている姿を見つける。それは一夏と俺のファースト幼馴染の筈だった。目の錯覚なのかはわからないが、口から魂が抜けているのが見える。その様子を心配に思ったのか一夏が近づく。俺は食器を先に片付けることにした。学食のおばちゃんに軽く挨拶し、食器を置こうとしたときだった。

「付き合っても良いぞ」

ん？　なんて言った？

「だから、付き合っても良いって・・・おわっ!？」

付き合って良いだと? ふざけるな!!

食器をすぐに置き、一夏の元へ走る。すでに箒に締め上げられているが、それをさらに締め上げる。

「おい、どういふことだ一夏。説明しろ!」

「ほ、ほ、本当、か? 本当に、本当に、本当なのだな!？」

「い、息が・・・」

一夏の顔が真っ青になっていたのですぐにおろす。そしてすぐに事情聴取を開始する。

「ま、まってくれ、わかった順番に答えるから。箒の方からでいいな?」

「わかった」

「うむ」

その提案に箒と俺はうなづく

「本当に付き合ってもいいぞ」

「な、なぜだ? り、理由を聞こうではないか・・・」

突然の一夏の箒に対するの告白に、なぜか俺のほうが気が気でない。その証拠に貧乏ゆすりをしている。

「そりゃ幼馴染の頼みだからな。付き合うさ」

「そ、そうか!」

箒はそれを聞いて喜んでゐる。しかし俺には一つ引かなかったことがあった。

頼み？ 告白って頼みなのか？ もしかして・・・

「買物ぐらい」

「・・・」

まったくもって予想通りだったので、深いため息が出る。

びきい！ と隣にいる箒から擬音語が聞こえた。その顔を見ると・・・修羅がいた。

「・・・だろぅと・・・」

「お、おう？」

いまだに自分の失態に気づいていない一夏。

一回死なないと治らないか・・・

その後、箒の怒りを買った一夏が引き飛ばされたのは言うまでもなかった。さらにその後、山田先生から大浴場の使用ができると聞き、一時部屋に撤退する。なぜかシャルルと一夏がきょどっていたが、いつものように無視した。

風呂に入るために道具を引っ張り出してきたのだが、とんでもなく時間がかかってしまった。約十分間のタイムロスだ。風呂自体久しぶりなので、勝手に足がスキップになってしまう・・・恥ずかしい。その後風呂場に着き、服を脱いで、早速風呂に入ろうと扉に手をかけたところで中から声が聞こえてきた。

「・・・あ、あんまり見ないで。一夏のえっち・・・」

は？

さつきから疑問しか出ていないが、これは理解しがたいことだった。

今の声って・・・シャルルだよな？・・・あつ、思い出した、

シャルルって女だったんだよね。

って、違う！！そこじゃなくて、何で一緒に入っているんだよ！！

え？なに、なに？またフラグ立てたのかあいつ・・・。

うそだろ・・・冗談でしょ・・・ありえねーーーー

「ぼ、僕が一緒だと、イヤ・・・？」

ごはっ！シャルルの言葉に俺の精神は致命的なダメージを受けた。宙は倒れた。

はっ そんなことをしている場合ではない！！どうにかしなければ・・・どうすればいいんだ？

えーと、整理してみようか。

俺が風呂場に遅れてきた。

そしたら風呂からシャルルの声が聞こえた。

シャルルが女ということを思い出した俺。結果 一緒に入っている。

うん、このリア充が！！

と心の中で叫び、そしてそのまま何もできないことを悟り、部屋

でシャワーを浴びて寝た。

「み、みなさん、おはようございます・・・」

場面が変わってここは教室。簡単に言うて翌日のHRだ。いつもの元気がない山田先生はふらふらと危なっかしい。俺はそんな目で見ていたのだろう

「織斑君、神代君、なにを考えているかわかりませんが、私を子ども扱いしようとしているのはわかりますよ。先生、怒ります。はぁ・・・」

とこんなことを言ってきた。どうやら一夏も同じらしい。怒りますという言葉に覇気がない。そんな山田先生に心の中で謝罪をする。

「今日は、ですね・・・皆さんに転校生を紹介します。転校生といえますか、すでに紹介は済んでいるといえますか、ええと・・・」

先生の説明はよくわからないものだった。それでも、ざわつき始める女子。

「じゃあ、入ってきてください」
「失礼します」

この声は・・・

「シャルロット・デュノアです。皆さん改めてよろしく願いします」

ぺこり、スカート姿のシャルルが礼をする。クラスのみんなはポカンとしている。

「ええと、デュノアさんはデュノア君でした。ということです。はああ・・・また寮の部屋割りを組み立てなおす作業が始まります・・・」

先生が落ち込んでいる理由はそこにあった。その様子からして、とてつもなくめんどくさそうだ。

って、待てよ？

「え、デュノア君って女・・・？」

「おかしいと思った！ 美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って、織斑君、同室だから知らないってことは――」

「ちよっと待って！ 昨日って確か、男子が浴場つかったわよね！？」

一気に騒がしくなる。しかも、男であるが故に、俺まで巻き込まれている。関係ないのに・・・

バシーンッ！ 教室のドアが吹き飛んだ。その光景は最近見たことがあるので驚きはしなかったものの、そこで現れた鈴に身震いする。背中に見える龍はきつと、目の錯覚だと信じたかった

「一夏あつ!! 死ね!!!!!!」

衝撃砲がフルパワーで発射された。射線には隣にいる俺も含まれた
いるわけで・・・死んだな。

ん? 死んでないな・・・生きてるよ! あははは

「・・・・・・・・」

どうやら一夏の目の前に立っているラウラが止めたらしい。その身
には『シュヴァルツェア・レーゲン』をまとっている。しかし、よ
く見ると大型レールカノンがない。

「助かったぜ、サンキュ。・・・って言うかお前のISもう直った
のか? すげえな」

「・・・コアがかろうじて無事だったからな。予備パーツで組み直
した。が、お前を助けたわけではない」

そういつて、今度は俺の目の前へやってきた。

「もしかして、俺を助け——むぐっ!?!」

いきなり唇にやわらかい感触が・・・俺はそれを完全に気を抜いて
いたので反応ができなかった。

バシーンッ! また扉が開く音だ。

「宙! 説明してもらおうかしら」
「ッッ!」

「宙様、なにをなさっているのですか？」

さらに運が悪いことに三人組がやってくる。

最初にやってきた優は完全にシャルロットのことを聞きに来たのだろうが、今の現状を見てプルプルと肩が震えている。

次にやってきたのは智花だが、混乱しすぎてフリーズしている。

最後にやってきた葵は、完全に理解しているらしい。・・・龍が見える。

クラスメイトはというと、あんぐりとしている。

「お、お前は私の嫁にする！ 決定事項だ！ 異論は認めん！」

「な、なんで？ 理由がわからないのだが・・・。しかも、嫁？」

「お前が私を守るといったのだろうか？ しかし私も驚いたぞ、あの金髪がお前だったとはな」

ここで突然のカミングアウト！！ このことに対してさらに騒がしくなる。

「えっ！？ どういうこと？ あの人が宙君？」

「てっきり一夏の恋人だと思っていたけど、よかったあー」

「それよりも女装だったよ、女装。きれいだったよねー」

先生たちに、このことは秘密だぞ、と言われていたのだが・・・ばれてしまった。もちろん待っているのは死刑か何かだろう。でも、そんなことよりも今の状況の方がやばかった。

「そして、日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしと聞いた。故に、お前を嫁にする」

誰だそんな間違った日本の知識を言ったのは。そして、誰だ俺に

殺気をぶつけているのは。

ドガッ！ 俺の頬の隣を駆け抜けて行った物体があった。振り返ってみると・・・コンパス？ 確かに学校の必需品ではあるが、壁を五センチ以上めり込ませるものではない。戦場●原さん！？

「へえー、葵あんたやるじゃない。そうか、文房具にもこんな使い方があるとはね」

と懷から定規を取り出し、投げて来た。それを何とかかわすことができたのだが・・・壁がめり込んでいる。

「お、おい。やめてくれ、優、葵。ラウラのことは俺が被害者だし、昨日風呂に入っただのは一夏とシャルロットだけだ」

「な、なにを言い出すんだ、宙！！」

ジャキンッ！ 衝撃砲が開いた音だ。

ビシュンッ！ 一夏の鼻先を掠めるように打たれたビーム、『スターライトMk？』だ。

ダンッ！ 理解しがたい光景だが、一夏の前に日本刀が刺さっている

「あんたねええええっ！！！」

「ああら、一夏さん？ どこかにお出かけですか？ 私、実はどうしてもお話してはならないことがあります。ええ、突然ですが急を要しますの。おほほほ・・・」

「・・・一夏、貴様どういふことか説明してもらおうか」

どうやら一夏の方も大変らしい。ざまあWW、と思っていたが現実はどうも優しくはないらしい。

「シャルロットさんでいいのかな。ちょっと武器貸してくれませんか？」

この丁寧な口調は智花だ。口調はいつもどおりだが、黒いオーラが・

「あ、それ良いわね。私にも貸してよ」「右に同じく」
「・・・別に良いけど」

三人の気迫に押されて、渡される武器。もちろんシャルロットが護身用に使っていた人間用の武器だ。だが、威力はISの技術もあるおかげで・・・やばい。どれぐらいかというと、Dイーグルがフルオートで発射されると考えてもらいたい。いくら俺でもそれはちょっと・・・

「「は、はは、ははは・・・」」

人間は極限の状態になると笑うしかなくなるらしい。一夏と俺は今そこにいる。

ガガガガガガッ！ ドガアアアアアンツ！

その日教室の壁は蜂の巣になり、あまりの衝撃にゆれたとき。

第31話 嫁宣言!?(後書き)

どーでした？

若干テストのせいでテンションが低くなっているsirasuです。

誤字脱字訂正あったらよろしくお願いします。

第32話 恐怖の未読メール（前書き）

どーも、明日試験なのに小説を書いていたsirasuです。

正直超やべーのですが・・・ちなみに明日は社会と数学なのです。得意教科なので勉強しなくてもいいかと思いい書いていました。得意教科といっても・・・聞かないでください。

ではでは第32話、どうぞ

第32話 恐怖の未読メール

第32話

機械だらけの部屋に響く声

「うんうん。用件はわかっているよ。ほしいんだよね？ 君だけの
オンリーワン、代用無きもの（オルタナティブ・ゼロ）、ハイエンド 等の専用
機が。もちろん用意してあるよ。最高性能にして規格外使用。そし
て、白や黒に並び立つものその機体の名前は『あかつきはき紅椿』
オーバースペック」

パチッ と目を開ける。俺は昔から寝起きだけはいい、起きる時は
すぐに起き、すぐに覚醒するのが自慢だ。体を起こそうと両手をベ
ッドにつけたのだが・・・

ふに。 何でしょうか、やわらかくそして温かい感触が左手に広が
る。

「ん・・・」

落ち着け、俺。また状況を整理しよう。起きた、そして体を起こ
そうとした。ここまでは良い。そしたら、やわらかい、温かい。待

て、おかしくないか？　おかしいだろう。鍵は閉めていたはずだ。誰も入ってこれないはずだ。じゃあなんで人が？　まあ、あの声からして……

「ラウラか」

布団を勢いよくめくる。そこにはドイツ代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒがいた。ラウラは先月転校してきた、その後いろいろとありすぎたのだが……。そんなことよりも問題はどうして俺の横で寝ているかではなく、裸なのが問題なんだ。付けているのは左目の眼帯と待機状態のＩＳ――右太もものレッグバンドだけだ。長い銀髪が腰のラインをなでている。

「ん……。なんだ……。？　朝か……。？」

「少しは隠せよ」

「おかしなことを言うな嫁よ。夫婦とは包み隠さぬものだと言いたぞ」

「俺たちはすでに夫婦なのか？」

「そう言ったはずだ」

「そうか……。？」

もうこれ以上話しても無駄だと感じたため、あきらめたように返事をする。ラウラも俺と同じく寝起きはいいほうらしい、目を一度こするといつもの表情に戻った。

「日本ではこういう起こし方が一般的と聞いたぞ。将来結ばれるもの同志の定番だと」

「……。間違った知識だな。一体誰なんだ教えているのは……。？」

「しかし、効果はてきめんのようだな」

「ああ？」

「目は覚めただろう」

「俺は寝起きがいいほうなんだよ」

「・・・朝食までにはまだまだ時間があるな」

何気に俺の言うことを無視し、シーツを身にまとい、一度束ねた後ろ髪をふぁさつと散らす。朝の日差しを受けて輝く銀髪は、綺麗としか表現できない。ちなみにこの行為はトーナメント以降より毎日行われている。軽くセクハラだと思うのだが・・・。

「どうした？　・・・あ、あまりそう見つめるな。私とて恥じらいはある」

「すまん、髪が少し気になったただけだ。それよりなにが恥じらいだ、ないだろうが」

髪が気になった、と言ったので髪をいじくりながら、目の前にいる嘘つきは頬を染めて視線をそらした。それはその・・・言いにくいのだが・・・かわいい。いや、かなり可愛かった。

「やめろ、といっても無駄なんだろう？」

「私のことを良くわかっているではないか、これは相思相愛というやつだな」

「ちげーよ」

まったく反省の色がないラウラに正直心が折れそうだったが、何とか折れないようにこらえる。ラウラはずっとこの調子だ、なにを言っても無駄な状態、要するにずっとラウラのターンなのだ。

「あれ？　眼帯はずしたの？」

金色に輝く左目に気づいた俺は、疑問を口に出した。ちなみにラウ

ラはこの目のことを嫌って眼帯を着けていたらしいのだが・・・

「確かに、かつて私はこの目を嫌っていたが、今はそうでもない。お、お前が綺麗だと言うからだ・・・」

「そうか・・・」

頬を赤く染めたラウラを見て、自分の犯した過ちに気づいた。いつの間にか、結構ラウラにフラグを立てていたらしい、結果こんなにもセクハラじみた行為をしてくるはめに・・・。

「まあ、いいか。飯、行こうか」

「わかった」

俺はこんなことが嫌ではなかった。むしろ結構気に入っている。なぜなら、いつも一人で天井を見上げるのは寂しかったからだ。

何だかんだ言って、こいつも俺のことを考えて行動してくれてるしな・・・

こんなことを考えながらラウラに服を着せて食堂へ出発した。

食堂に到着！！ 早いって？ 気にするな、気にしたら負けだぞ。と言うことで俺は、ご飯に味噌汁そしてめざし一匹の朝ごはん定食を取り、席につく。それに続いてラウラが俺の隣につく、メニューはパンとコーンスープそれにチキンサラダだ。そんな俺の視線に気が付いたのか

「ん、欲しいのか」

「うんにゃ、いらね。朝はご飯に限る」

そして、ご飯をおかわりする。ちなみに五杯目だ。この光景に最初は食堂のおばちゃんもびっくりしていたが、今は日常茶飯事なので慣れている。ラウラも最初は驚き、質問して来たのだが

「ん？ どうしてそんなに食うのかって？ 一夏曰く、朝ごはんはきちんと食べたほうがいらしからな。本当は腹が減っているだけだ。もともと大食いなんだな」

と返した。最後に付け加えて

「ダイエットに効果的らしいぞ」

とボソツと言ったはずなのだが、その瞬間、食堂にいた女子の目が光ったのはいつものように無視した。

「わああっ！ ち、遅刻するっ・・・！」

シャルロットが登場する。いつもはもっと早いのだが、今日は遅刻した。どうしたんだろうと気になったが、隣にいる軍人から肘が入ってきたのでやめた。

「お前は私の嫁だぞ。他の女の子とは考えるな」

さいですか

今まで完全に忘れていたが、あの三人組はあのキス事件の後、妙に団結していていつも一緒にいるらしい。今はたぶん、朝ごはんはすでに済ませて自習をしに教室の机に向かっているはずだ。そんなことを考えながら時計を確認する、朝のSHRまで残り十分だった。

「ラウラそろそろ行こうか」

「うむ。私のことも考えてくれるとほいい嫁になるな」

嫁という言葉にも最近気にならなくなってきたので無視する。というか、反論しても変える気はないらしい。

教室へ到着した。だから早いって？ 気にすんなよ。まだSHRは始まっていなかったので席につく。あと少しぐらい時間があつたので本を読むことにした。早速机から引き出し、読む。題名は「ヨスガノソラ」と言うやつだ。妹の今日から強制的に渡されたものなので読む気はなかったが、自分の呼んでいる本がなくなったので仕方なく読むことにしたのだ。と言っても読む気がないのでいつもの用意に速読は使わず、ゆっくりと読むことにした。隣にいた女子がなぜか笑っていたが毎回恒例の無視だ。

『ハル・・・ハル。んっ。春は私のこと迷惑なんかじゃないよね？ 私はこんなに・・・愛しているのに。ハルのためなら・・・何だっとしてあげられるのに・・・。好きだよハル。ずっと・・・一緒にいて・・・』

『ソ・・・ラ？ そらが・・・僕のことを？ 兄としてではなく？ そんな・・・そんな・・・』

一体どういう話なんだこれ？ 最初はてっきり同名だから読ませたかったんだと思ったんだが・・・これなんてエロゲ？ 妹が好きになる兄貴がいると思っただけのかよ。兄弟で子供作ったら奇形児が生まれる確立が増えるから、本能的に家族を嫌うようになっていくのね。なにがしたいのかな？ 香は。

スパアンツ！ 出席簿アタックだ。最近はや音で判断できるようになった。うれしいことなのかうれしくないのかよくわからない。本を閉じて机の中にしまおう。殴られたのはシャルロットと一夏らしい。

キーンコーンカーンコーン。チャイムが鳴り、SHRが始まる。今日は千冬さんの担当だ、教卓に地冬さんが立っている。

「今日は通常授業の日だったな。IS学園といえお前たちも扱いは高校生だ。赤点など取ってくれるなよ」

自慢じゃないが、藍越学園の入試で俺は偏差値75を取っている。よって勉強の心配はない。なぜ俺がこんなにもできるかと言うと・・・めんどくさくなったので後日言うことにする。

「それと、来週から始まる校外特別実習期間だが、全員忘れ物などするなよ。三日間だが学園を離れることになる。自由時間では羽目をはずし過ぎないように」

校外特別実習期間^{りんかいがしゅう}は、三日間の日程のうち、初日は丸々自由時間となっている。もちろん臨海の名の通り海があるので、そこは咲き乱れる十代女子。先週からずっとテンションがあがりっぱなしなのである。俺も一夏もそれには興味がないので水着を買わないと女子に言ったところ・・・酷い猛反発を受けた。よって一夏は週末買いに行けらしい。俺は・・・

「ではSHRを終わる。各人、今日もしっかりと勉強に励めよ」

ちょうどショートの終わったので携帯を開き、メールボックスを見る、そこには・・・

未読メール 98件

一言付け加えよう、全部妹の香からだ。理由はわかっている、先月家に帰るのを忘れていたせいだ。今月になってからマシンガンのようにメールが届いたのだが、これでも半分上以上は消している。こんなこともあり週末は完全に家に居ることにした。

第32話 恐怖の未読メール（後書き）

どーでした？

ヨスガネタ入れてみました。まあ、今までにもいろいろとネタ入れているんですけどね・・・なぜか今回だけ言わせてもらいました。なんてったってエロゲですから。

誤字脱字訂正あったらよろしくお願いします。

第33話 ご機嫌取り（前書き）

どーも、今日やっとテストが終わったんですよ。それで無駄にテンションが上がっているsirasuです。

待ちに待っていた、ディシディアも発売されたので今日は徹夜でゲームー！！ をしようと思います。

そのせいで更新が遅れるかも・・・

出来るだけそうならないように注意したいです。

ではでは第33話、どうぞ

第33話 ご機嫌取り

第33話

週末の日曜日、俺は今実家にいるが・・・リビングで正座をして、妹の香に怒られている。その理由は、約束を破ったからだ。一ヶ月に一回は帰るという約束を・・・。現在の時間は九時、怒られてから二時間は経過しているはずだ。しかし、香の怒りは治まることを知らないらしい、いまだに怒りのオーラが見えるし目が・・・死んでいる。

「お兄ちゃんは自覚がないんです。・・・だから・・・聞いていますか?・・・」

くだらねと長い説教にかなりまいっている俺は、何とか逃げ出そうと策を練るが、なぜか感づかれてしまい結局ずっと怒られるはめに・・・。土曜日はいろいろと準備があり（もちろん臨海学校の）、家に帰ることができなかったので、今日は朝六時から帰宅して七時についたのだが・・・説明したとおりです。

もう、どうしようかな? 水着は買ってないし、準備だってまだなのに・・・。どうすれば・・・

「お兄ちゃん?・・・お兄ちゃん!!」

「うるさいよ。今ちよつと考え中・・・はっ!」

「へえー、無視ですか。無視するのですか。自分の妹をねー。ふーん」

あわわわ、やばい、まじでやばい。別にあの軍師ではないが、無

意識に同じ言葉が出てしまうぐらいやばい。

「す、すいませんでした!!」

「人を無視しておいて、謝ってすむと思っているのですか？」

「無視するのは癖でして・・・」

「癖ならなおさら悪いです。そして今は私が怒っているんです、きちんと聞いてください」

「・・・はい」

あまりの怒気に思わず土下座してしまった。妹に土下座をする俺って一体・・・

これが絶対王政の縮図です。テストに出やすいから気をつけよう。ちなみにあのメールの内容はと言うと、約束と言う言葉が永遠と書かれていた。それが何通も・・・怖かった、本気で怖かった。

しかも、冗談のレベルではない。ガチです。ガチなんです。結果今この状況になっているわけでして・・・はい。

今現在の俺の目標は今日の機嫌を直すと言うことになっている。

しかしどうすれば・・・。

・・・そういえば今日は一夏が買い物に・・・それだああああ!!

「香!!」

「は、はい。何ですか？」

俺が急に叫んだことに少したじろいだようだ。チャンスッ! このまま一気に押し込む。

「買い物に行こう」

「え? か、買い物ですか？」

「そうだ。嫌か？」

嫌だったらどうしよう。今の俺にはこれしかないのに・・・

「あ、あの、その・・・わかりました。行きましょう」

「ほ、本当か？ 本当だな。じゃあ行こう。今すぐ行くぞ。着替えて来い」

「は、はい」

なぜかは知らないが香は顔を真っ赤にして、寝間ぎから着替えるべくリビングから出て行った。

もう、急にどうしたでしょうか？ 積極的になったりして・・・も、もしかして、デ、デ、デートのつもりなのかな？ あああ、どうしよう。どの服着てくればいいのかな？ 何色がすきなのかな？ そう言えばお兄ちゃんの好きなものは聞いたことがありますね・・・チェックの必要がありますね！！

一体どれくらいたっただろうか・・・リビングから出て行ってから結構待ったはすなので、腕時計で確認する。

A M 9..30

結構かかっていました。智花のときもそうだったな、あいつはいつまでたっても服が決めきれてなかったからな。香もおんなじタイプ

なのかな？　こういう時は黙って待っていたほうが良いはずだ。

「準備ができましたよ。行きましょう」

玄関から聞こえてくる声、もちろん香だ。待っていたほうが良いな
と思っていたときにこの仕打ち、結構つらい。

「ああ、わかった。行こうか。場所はえーと・・・『レゾナンス』
でいいか？」

「はい、大丈夫です」

「レゾナンス」は駅前にあるショッピングモールだ。食べ物はそろ
っているし、衣服も量販店から海外の一流ブランドまで網羅してい
るし、各種レジャー施設も完備している。なんでもありのショッピ
ングモールなのだ。ちなみに駅に直接つながっているので簡単にい
くことが出来る。

と言うわけで到着。え？　だから早いって？　作者に聞いてくれそ
んなこと。って俺は誰に話しているのだろうか？

「ところで何かほしいものがあるのですか？　兄さん」

「ああ、水着を買いに着たんだ。香も一緒に選んでくれないか？」

「はい、喜んで」

早速、なぜか喜んでいる香と水着売り場に行く。

喜んでる、喜んでる。これで機嫌は良くなったな。良かった。ホ
ントに・・・

財布の中には軍資金がたっぷり眠っていたのでちょうど良い機会だったので、大量に使うことを決めた宙だった。ちなみにこのお金は、昔つぶしたヤがつく人の闇金やサラ金を無断で貸してもらったものだ。余談だが、返すつもりなどない！！

「レゾナンス」の中を歩いていく宙と女の子を見ている、四つの影があった。二人が角で視覚から消えると、頃合とばかりに物陰から出てくる影。皆さんの察しの通り、智花、優、葵、ラウラの変則パーティだ。

「誰なんだろう？ あの女の子」

「わかりません。一体宙様とどのような関係なのでしょう？」

「仲よさそうよね」

「直接聞けば良いだろうが」

どうしてラウラと三人組の仲がよくなっているのかと言うと、宙の努力のおかげと思ってほしい。こんなに話せるぐらい仲を良くする為に、どれだけ苦労したかは想像して下さい。

「待ちなさい。もし、彼女だった場合どうするのかしら？」

「ふむ。その可能性はないな、私と言う夫がいると言うのに」

「どこから来るのかしら？ その自信・・・」

「もし、そうだとすれば・・・殺すか」

「ええ！？ それはダメだよ」

「智花さまの言うとおりです。ただ殺すのではなく・・・なぶり殺しです」

「もっとダメだよ!!」

「そうよ、なぶり殺しぐらいじゃすまないわ。好きになっている人がこんな近くににいるのにね」

「ち、ちよつとやめてよ優。第一殺すこと自体ダメだって」

唯一常識人である智花は抱きついてくる優を払いのけ、四人は見失わないように行動した。

「お兄ちゃんどれにします?」

妹が選んできた水着を見る。その際、好きな色は、好きな模様は、とかを香がしつこく聞いたことは、気にしたら負けだと思う。なんとなく・・・

正直、別にどれでもいいのだが、一応考えているフリはしておこうと思う。すぐに取ったら適当に考えていると思われて、酷い目に合うことは経験済みだ。

「これにするか」

香が選んできたやつの中で唯一黒だった水着をとる。好きな色は、赤と黒と応えていたのだが、一着しか黒は選んではくれなかったのが少し残念だ。その水着は黒をメインとして赤のラインが入っているだけのシンプルなものだった。

エコーとおそろいか……。良いよね。

と言うわけで水着を買おうとしたところ

「そのあなた」

「あ？」

俺と香しかないはずだ。

「男のあなたに言っているのよ。その水着片付けておいて」

名も知らない相手から急に言われた。ISが復旧した十年で女尊男卑の風潮は、あつという間に浸透した。どの国でも女性優遇制度が設けられ、男はこうして町を歩いているだけでも見ず知らずの相手から命令されるようになってしまった。

「香、レジはどこだっけ？」

いつものように華麗に無視。もうすでに十八番の領域である。

「どうやら立場がわかっていないみたいね」

その一言に、イラッと来た俺は

「立場がわかっていないのはお前のほうだろ？ 誰に向かって命令しているんですか、お・ば・さ・ん」

「ホントに立場がわかってないみたいね。警備員呼ぶわよ」

「呼んでもかまいませんよ。俺無実ですし、ここには証明者もいるので」

隣にいた香を抱き寄せる。女性は相当頭にきているようなので、さらに怒らせて見ようと思う。

「ねーねー、呼べば？　ってか読んじやっていいよ、別に。お・ば・さ・ん」

少しだけ殺気を開放し、語尾を強めただけで女性は悔しそうに去っていった。ざまあww

「お兄ちゃん？」

「ん？　もしかして、怖かった？」
「はい」

香の元気がなくなっている姿を見て、反省する。あまりあれは使わないほうが良いらしい。

あれでも本気じゃないんだけどな。それより少し楽しかったかも・
・久しぶりに。ふふふ・

「ごめん、ごめん。まったく嫌になるよ、あーいうやつは・・・
それよりレジどこだっけ」

「あっちです」

「おお、あっちか。よし、こっちに行こう」

と俺は女の水着売り場を指差した。

「ええ！？　何ですか？」

「お前のだよ。後、遠慮はいらんぞ」

どうせ抵抗されることはわかっているので、先に逃げ場をつぶした。こうしないと、抵抗し続けて結局断られることも経験済みだ。

「私は水着なんていりませんし・・・」

「ん？　なんで、一応、今の病気は治ったろ？」

「治りましたけど・・・持病はまだ治っていませんし・・・」

香の持病は簡単に説明すると心臓が弱い、よって十分な運動をすることができず体力がつかないので、簡単な病気でも長く続くのだ。

「持病なんてどうでも良いだろうがよ。泳ぎに行きたくはないのか？　俺と一緒に」

「え？　あの、でも、その、えーと」

そう言う香は混乱したので、ゆっくりと水着売りのところまで押していく。その時ちょうど更衣室のところにいた山田先生と織斑先生を発見したので、声をかけようとしたところ・・・一夏が出てきた。更衣室から。もちろん女の・・・

「え？」

「えっ？」

「ええっ？」

「はあ？」

ちなみに一夏、山田先生、一夏、俺の順だ。

「なにをしてる、バカ者が・・・」

織斑先生が軽く頭を押さえながらそう言った次の瞬間、軽いパニックに陥った山田先生の悲鳴がこだました。その声に驚き、香も一緒に悲鳴を上げたのだった。

第33話 ご機嫌取り（後書き）

どーでした？

そういえばいい忘れていたことがあるのですが・・・

三巻のテーマは宙の覚醒、となっております。意味は後々分かると思います。

ちなみに一卷は、紹介みたいなものです。（お試しと思ってもらってもかまいません）

二巻は力の意味・考え、となっております。

あと、一卷と二巻の共通のテーマとして過去の関係性と言うものを考えていました。

ちなみに四巻はつかぬ間の楽しいひととき、となっております。

五巻から先は教えません。これ以上はネタバレとなるので・・・

誤字脱字訂正などあればよろしく願います。

第34話 姉弟? の恋話(前書き)

どーも、テストが返ってきたせいでテンションがガタ落ちしている
sirasuです。

赤点がない分よかったですけど・・・

原作読み返して気がついたんですけど、四組にいる専用機持ちって
言うのは一体誰なんでしょうか？

ではでは第34話、どうぞ

第34話 姉弟？ の恋話

第34話

「はあ、水着を買いにですか。でも、試着室に二人はいるのは感心しませんよ。教育的にだめです」

「す、すいません・・・」

ぺこりと頭を下げるシャルロット。の隣で・・・

「て、てめえ、つぶしてやろうか」

「や、やめてくれ、宙。それだけは勘弁だ」

片手を握りつぶすような動作をして一夏に迫る。すると、大事なところを押さえながら下がっていく一夏。

ははは、やべ！ 怒りがおさまんね

「ところで山田先生と千冬ね——織斑先生はどうしてここに」

「へえー、一夏よ。無視するか・・・」

話題を変えようとする一夏を懲らしめようともう片方の手で襟をつかもうとしたら

「神代君落ち着いてください。まったくだめですよ、こんなところで。それよりも、私たちも水着を買いに着たんですよ。あ、それと今は教務中ではないですから、無理に先生って呼ばなくても大丈夫ですよ」

「ちっ、許してやるか・・・」

先生に言われてしまったらしょうがないので、伸ばしていた手をひっこめる。そして、家あたりからついてきている人たちに・・・

「出てきたら？ 黙ってついてくるなよな。言ってくれば一緒に行こうかと思ったのにさ・・・」

ギクッ、本当にわかりやすいぐらいの反応、ありがとうございますました。

「いつからわかっていたんですか？ 宙様」

「あんたもしかして・・・」

ある程度予想はしていたが・・・優と葵だった。

「やっぱりか・・・あと二人いたと思うけど、別行動してるのか？」

「あ、あんたそんなところまでわかっていながら無視してたの？」

「一体どれぐらい把握しているのですか？」

二人の疑問に答えようとしたとき、ふとさっきから香がおとなしいと思ったので見てみると俺の体の後ろに隠れていた。

「最初から把握していました。そして、無視してたのは誤るよ・・・香？ どうしたの？」

「ごめんなさい、ちょっと・・・」

「ふーん、恥ずかしいとかか？」

そう言うと、俺の服を遠慮がちにつかみまます隠れてしまった。そして、顔が少し赤くなっている。

く、かわいいじゃねえか、結構効いたぜ!! こいつは昔から恥ずかしがり屋だからな・・・よしっ!

香の肩後ろ手につかむ。びっくりしたのか肩が震えたが、それを無理やり前に持ってきた。

「俺の妹の香だ。よろしくしてやってくれ」

「ええ!? お、お兄ちゃん?」

「うろたえるな我が妹よ。自己紹介ぐらいできるだろ」

「は、はい。・・・え、えーと、神代 香といいます。よ、よろしくお願いします」

妹・・・厳密に言えば従姉妹になるのだが、そのがんばって自己紹介をしている姿に少しだけ感動してしまったので、自分の黒髪とは違う淡い色の髪をなでる。香は撫でられるとうれしそうに、身をよじった。

うんうん。がんばっている姿が誰でも一番輝くよな。それよりも、かわいいなあーもう。兄が言うのもなんだが、香は美人のレベルのほうに入っているよな。

「い、妹だったんだ・・・」

「良かったです・・・殺さなくて」

優と葵が何か言ったようだが、聞き取れなかった。小言で言うぐらいだろうから、たぶん大事なことなので首を突っ込まないようにしておく。

「俺の名前は織斑一夏って言うんだ。よろしく」

少し目を香からはなしたとき、一夏が香に近づいていた。なんとなくではなく、完全に危険だと思ったので握手をしようとしていた一夏の手を叩き落とし

「てめえはダメだ」

「な、なにするんだ宙。別にいいじゃんか自己紹介ぐらい」

「ダメだ。お前にだけはやらん」

「なんのことだよ」

絶対に一夏だけにはやらんぞ！！ こいつは勝手にフラグ立てるからな……。香だけはやらせん、やらせんぞ。間違っても一夏の兄貴だけにはなりたくない！！

香を一夏から遠ざけるようにして自分の体の後ろに移動させ、一夏をにらみつける。俺の気迫に一夏もあきらめたのか、シャルロットに隣に戻っていった。心の中でガッツポーズをとり、一通りこの場にいるメンバー（もちろん一夏以外）に、自己紹介をさせた。

「さっさと買い物を済ませて退散するでしょう」

ふう、とため息混じりにそう言ったのは千冬さんだった。手に持っているのはどうやら水着で、千冬さんも俺たちと同じく土壇場準備らしい。

「あ、あー。私ちょっと買い忘れがあったので行って来ます。えーと、場所がわからないので夏目さんに白石さんでしたっけ、ちょっと連れて行ってくれませんか？ それにデュノアさんも」

山田先生は何かひらめいたような顔をして、そう言い三人を強制的に連れて向こうへ言ってしまった。この場に残されたのは俺と一夏、

香だった。

「・・・まったく、山田先生は余計な気を遣う」
「え？」

あー、そう言う事か。だったら・・・

「香、先に水着を選んできてくれないか？ 俺は少し千冬さんと話してからいくから」

「わかりました。早く来てくださいね」

「りょーかい」

我が妹ながらすぐに空気を読んでくれることに感心する。香が水着売り場の中にまぎれていった頃

「お前もか、ふう・・・。言っても仕方がない、か。一夏、宙」

「な、なんですか？ 織斑先生」

「なんすか？ 千冬さん」

一夏は名前で呼ばれたことが久しぶりだったのか硬い反応をしてしまう。そのようすを見た千冬さんは、苦笑いを浮かべた。

「ここは学校じゃないからな、名前で良い。どうやら宙のほうがよっぽど物分りがいいようだな」

「わ、わかった。それより宙と比べるなよな」

その様子は、俺のほうがお邪魔じゃないのかと思ってしまうほどだった。一夏は俺と比べられたのが気に入らなかったのか、少しだけ口を尖らせた。それを見て俺は少しだけ笑った。

「で、一夏、宙。どっちがいいと思う？」

そういいながら千冬さんが見せたものは専用のハンガーにかけられた水着二着。

片方はスポーティでありながらメッシュ状にクロスした部分がセクシーさを演出している黒水着。

もう片方はこれまた対極的で、一切の無駄を省いたかのような機能的な性重視の白水着。

正直俺はとっても興味がないので、一夏の顔をうかがった。

「――白のほう」

「興味ないです」

ガスッ！！ 俺の頭に手刀が入った。

「な、なにするんですか！！」

「お前はデリカシーと言うものがないらしいな」

正直に言ったつもりだったが、それが気に入らなかったようだ。いまだにジンジンする頭を押さえる。

一方、一夏が言ったことに対して、苦笑いをしていた。

「黒の方が」

「いや、白の――」

「嘘をつけ。お前が先に注視していたのは黒のほうだったぞ。昔から、お前は気に入ったほうを注意深く見るからな。すぐわかる」

千冬さんは一夏の習性を読んでいたようだ。俺もそのことは知っている。知っていたが故に疑問に思うことがあった。

これ聞く必要あったのか？

口に出すともう一度くらいチョップが来そうなのでやめておいた。
見破られた一夏はというとポカーンとしている。

「まったく、弟が余計な心配をするな。心配しなさ過ぎるやつもう
いるが……。大体、私とその辺にいる男になびくような女に見える
か？」

「いや、見えないけど……。でも千冬姉、彼氏とか作らないのか
？　そういう話、一回も聞いたことないしさ」

「すいませんね、心配しなくて……。それより一夏、俺よりデリ
カシーなくねえか？」

「兄弟だからかまわん。彼氏は手のかかる弟と弟分のお前が自立し
たらな。考える」

自分のことを弟分と言ってくれたことに少しばかりうれしくなって
しまった。どうやら俺には血のつながりのない家族が多いようだ。

「で、お前たちはどうなんだ」

「え、俺？　何が？」

「考えたことないっすね」

「考えたことはないはひどいだろ……。お前たちは彼女を作らな
いのか？　幸い学園内には腐るほど女がいるし、よりどりみどりで
ろう？」

よりどりみどりって……。女ね、俺と仲がいいやつは智花、優、
葵、ラウラぐらいか……

「宙は、ラウラなんかどうだ？　いろいろと問題はあるだろうが、
あれで一途なやつだぞ。容姿だって悪くない」

「確かにね・・・」

「それに、キスした仲だろう」

痛いところをつかれてしまった。千冬さんは俺のことをからかっているのか微笑をたたえていた。

「まんざらでもないか？」

「悩むところですネ・・・」

「ふむ、そうか。容姿は好きなほうか？ 嫌いなほうか？」

「容姿ね・・・。うーん、こういうの話は嫌いですが、ラウラはかわいいと思いますよ」

「ほう」

それを聞いた千冬さんは満足そうにうなずいた。

「一夏の方は・・・後で話すか。まあ、なんにしても私の心配をする前に自分のほうをどうにかするんだな。私はまだ、弟や弟分に気を遣われているような年ではないさ」

「あーもう、わかったよ。へんな心配はしない。これでいいだろ？」

千冬さんの俺への質問に一夏も戸惑っているらしい、この話を早く切り上げたいのだろう。俺もあまり香を待たせるのはしたくなかったので切り上げることにした。

「ああ。それでいい」

最後ににやりとした笑いを残して、千冬さんはレジのほうへ歩いていく。俺は香の所へ走っていった。

尾行していた四人はあの女のこのことが気になっていたが、いつもの宙の様子に安心して優と葵だけが尾行することになった。ラウラと智花は別行動である。

ラウラは水着売り場にいた。ふと、水着を持っていないことを思い出したが、私には必要ない、泳げれば何でもいい、と考えていた。ちなみにIS学園はスク水である。

「ラウラはかわいいと思いますよ」

いきなり宙の声でそう聞こえた。三人で話しているところまでは把握していたのだが、この不意打ちである。その突然の言葉に顔が熱くなっていくのがわかった。心臓は言うことを聞かず、高鳴って止まらない。ドイツの冷水とまで言われたラウラだったが、取り乱してしまった。

か、か、かわいい・・・？ 私、かわいい・・・かわいい・・・

意味もないのに周りを見渡し、胸に手を当て集中する。何度も何度もコールする番号を間違えながらオープン・チャンネルを開いた。

第34話 姉弟? の恋話(後書き)

どーでした？

めっさ気になる謎の専用機持ち

次回はラウラの勘違いが暴走するだろう

誤字脱字訂正あったらよろしくお願いします。

第35話 勘違いはほどほどに・・・（前書き）

ども、今日はテストがあったのですが弁当を忘れてしまい・・・
集中できずorz

ではでは第35話、どうぞ

第35話 勘違いはほどほどに・・・

第35話

「おーい、香。選んだか？」

「えーと、い、一応・・・」

「何だ？ 自信がないのか」

千冬さんの話が終わったので、すぐに香のもとに走る。着いた時には、手に水着を持っていたのだが俺が来たとたん隠してしまった。一瞬だけ目に入ったが、それは水色の水着のだったが、形はうまく見ることができなかった。

ちっ もっと近づけばよかったか

自分の行動に後悔しながら、香にお金を渡し

「何で隠すんだよ・・・まったく、見せなくても良いから買って来い。つりはもらってよし」

「そんな、わるいよ」

「たっぷりあるので大丈夫ですよ、心配しなくても良いぞ」

とやや強引にはあるが、香にお金を持たせてレジに誘導する。香をレジに送り出したとき銀色が目に入った。

その銀色はよく見たもので・・・というか見すぎたもので・・・毎朝拝んでいるものでして・・・あれだ。そうラウラの銀髪だった。そのラウラは今、変な風に体をくねらせながら水着を選んでいる。

「どうしたんだ？ ラウラ」

「ひゃうっ！」

普段の知っている彼女ならあげるはずもない声を上げて、体をのけぞらした。

「一体どうしたんだよ。そんなに驚くことか？」

「な、な、な、なんでもない。そうだ、なんでもないんだ」

絶賛テンパリ中のラウラだったので、逆に心配になってきてしまった。

「本当にお前大丈夫か？」

「だ、だ、だ、大丈夫だ。ま、まったく問題ないぞ」

「そうか、なら良いや」

これ以上話しても無駄だろうと思い、すばやく切り上げた。

いまだにそわそわしているから気になるのだが・・・

ラウラは依然として落ち着かない態度をとっている。まるで早くどこかに行けと言わんばかりに・・・

そんなことをしている内に水着を買ってきた香が合流した。

「お兄ちゃん買って来ました」

「そうか。んじゃ、飯にすっか。どこがいい？」

なんとなくおながが減ってきたので時計を確認すると、すでに十二時を回っていたのでご飯に誘った。丁度、この『レゾナンス』には何でもそろっているのでこのままここで外食でもしようかと提案したのだが・・・

「今日は絶対にお兄ちゃんの手作りしか許しません」

とこのように、はつきりと断られてしまった。笑顔で・・・正直に言わせてもらおうと目が笑っていなかった。怖かった・・・

「といわれても、なに作ろうかな？ 昼って考えにくいんだよねー。

何か食べたいものとかあるか？」

「手作りなら何でも良いですよ」

「それが一番困るんだよ」

何でも良い、が本当に一番困る。何でもいいといわれると逆に、気を遣ってしまう。だから一番嫌な答えだ。

ピキーン！ なにを作ろうかと悩んでいる俺は、ひらめいた。これは名案だったのですぐに実行することにする。

「ラウラ！！」

丁度、俺が目を離れた隙に水着を買っていたラウラに声をかける。すると、なぜかさっきのテンパリ状態から回復していたラウラは、すぐに俺の目の前に走ってきた。そして、胸を張り堂々としている。そのあまりの変わりように・・・

最早こいつ情緒不安定だろう。本当に大丈夫なのか？

本気で心配してしまった。

「どうしたんだ？ そんな顔して。それより用件は何だ？」

そんな顔をしているのが、自分のせいだと知らないラウラは普通に話しかけてきた。思わず深いため息が出る。

「ふう・・・そうだな、俺の家に来ないか？」

今なんと言ったんだ？ 家に来ないか・・・それは、まさか

顔が熱くなっていくのがわかる。同時に心臓もいうことを聞かなくなってきた。

「ちょ、ちょっと待っている」

そう言い残し宙から離れた。ある程度離れた所で、再度プライベートルチャネルを開く。今回も何度もコールする番号を間違えた。

『どうしたんですか？』

ついさっきも水着の件で相談していたため、あっちも名前と階級を省いたようだ。今ラウラが会話しているのは、クラリッサ・ハルフォーフ大尉だ。ラウラの部隊の副隊長である。

『わ、私だ』

『わかっています。まずは落ち着いてください』

『あ、ああ、すまない。そ、それより・・・さ、誘われてしまった』『誘われてしまった？ 何にですか？ 誰にですか？』

さっきと同じミスをしていたので、自分が恥ずかしくなる。自分でも驚くほど混乱しているようだ。

『そ、そ、宙に、家に・・・さ、誘われてしまったのだ・・・どうすべきなのだ?』

『さっきと同じように状況を把握したいのですが』

『直接そう言われたのだ』

『それは本当ですか!!』

急にクラリツサの声が大きくなったので、少しだけ驚いてしまった。

『本当だ。それよりどうすればいいんだ?』

『それはもう・・・』

『もう?』

『あれしかないですね・・・C』

『ツツ!!』

いくらラウラといえど、その辺の知識はある。ABCぐらいなら知っているようだ。

『Aまでは行っているんです。このさいBぐらい飛ばしても良いでしょう』

『で、でも、心の準備が・・・』

『なにを言っているんですか、今ここで戸惑っても何にもなりませんよ』

『そ、そうか・・・!』

『やっとわかってくれたようですね、下着はなにをつけているんですか』

・ ・

「どうしたんだ？ 遅いな、あいつ」

同時刻、宙はラウラに待っている、といわれたので待っているのだが、一向に戻ってくる様子がない。おなかも減ってきたし、香がなぜかご立腹なので早く帰って作りたいのだが・・・

「宙君」

ちょうど、ほかの事を考えようと思っていたときに、よく聞いたことのある声で呼ばれた。振り返って見るとそこには、智花がいた。

「おお、尾行部隊の最後の一人じゃないか」

「やっぱり気づいてたんだね」

「もちろん、気づくよ。あんなにばれればれな尾行は・・・それより今までなにをしていたんだ？」

「ちよつと買い物をしてたんだ」

智花がそう言いながら右手に持っていた袋をあげる。袋から推測してアクセサリーの一種だと思われる。

「誰のなんだ？」

「秘密だよ」

ふふっ、と微笑む智花。気になって仕方がないのだが・・・後ろに

いる香からのプレッシャーが・・・

またですか！！ さっきの銀髪の人といい、この人といい、一体、お兄ちゃんの何なんですか！！ 今日私は私とお兄ちゃんだけで、いるつもりだったのに……。この感じは……

香は、自分でもコントロールすることができないこの気持ち（通称嫉妬心）を理解できないことにイラついていた。

冷や汗が頬を伝う感触がした。いや、そんな生やさしいものではない、今でもだらだらと流れている。

本当にどうしようかな？ 香は怒ってるし、誘ったラウラも帰ってこないし、俺間違ったかな？

自分の立てた他力本願作戦はこうして終わりを告げようとしていた。そのとき、さらにひらめいた。

そうだ、こいつらも誘おう

こうして、宙は自ら底なし沼にはまった。もちろん自覚なんてしていない。

十分後、クラリッサとのプライベートチャンネルを切って宙の元へ帰った。そこには、宙、なぞの女の子、三人組がいた。その様子を見て、サツと隠れもう一度プライベートチャンネルを開く。

『一体、どういうことなんだ？』

『言っている意味がわからないのですが・・・』

『すまない。戻ったのだが・・・増えている』

『なにがですか？』

言葉は落ち着いてはいるが、心はテンパリまくっているラウラ。

『人が増えているのだ、これはどういうことだ』

『・・・まさか、同時に？』

『同時になにをするんだ!!』

『落ち着いてください。何人いるのですか？』

『四人だ』

『それに、隊長と相手を合わせて・・・6p!？』

『6pとは何なのだ、教えろ』

まったく聞いたことのない言葉や、いつも冷静沈着であるクラリッサがあせっているのが声からわかり、同様にあせってしまう。

『6pとは・・・六人でゴニョゴニョ』

『なに!？ 六人でゴニョゴニョだと』

『はい、その通りです』

『では、一体どうすれば言いのだ』

『ここは、積極的に良くしかないですね・・・隊長』
『なんだ』

急に落ち着いた雰囲気で話しかけてくるクラリッサに驚くラウラ。
なんとなく尋常ではない空気を読み取った。ゴクツ、と喉を鳴らす。

『ご武運を』

『ありがとう』

最後に聞こえてきた言葉に、体の奥から力がわいて来る感覚。心の中で、覚悟を決め宙の元へ・・・

「やっと戻ってきたか、遅いぞ」

ラウラが帰ってくる前に、三人組を誘っていた。どのようにしたかというところ

『俺の家に来ないか？』

と、言っただけだった。もちろん、三人は食事の誘いだって言うことはわかってる。

「す、すまない。ちょっとな」

「別に良いよ」

内心、香から来るプレッシャーにビビっているが、平静を装う。まだラウラから返事はもらっていないので、聞いた。

「で？ 来るの？ 来ないの？」

「行くに決まっているだろうが」

決まっているのかよ！！

口には出さなかったが、心の中でツツコミを入れる。もちろん、手の甲を振って。

そして、ここでもようやく他力本願作戦を実行することにした。

「お前ら、なにが食べたい？」

「和食かな？」

「右に同じく」

「智花様と同じです」

「なるほど、腹が減っては戦はできぬ、と言うしな。いい心がけだぞ嫁よ」

最後に言った言葉に全員が

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

といった反応を示す。その様子に不思議そうに首を傾げるラウラ。

「どうした？ やるのだろうか、あれを？」

みんなは未だに頭上にはてなマークを浮かべている。ちなみに香は嫁という言葉に反応し、俺の腕を握りつぶそうとしている。

イタイ・・・それよりなにを言っているんだこいつは？ 本気で情緒不安定なんじゃ・・・

また本気で心配してしまった。そんなことよりも今は香の機嫌を直すのが一番なので、早速家路についた。

このあと、家につき無事に食事を終わらせることができ、香の機嫌をよくすることに成功した。

その後、俺は皿洗いをしていたのだが・・・一人の勘違い（もちろんラウラである）で俺は初体験をしてしまった。

「お兄ちゃん！！ そこになおりやがれです」

「どうしたんだ！？ 香、口調がおかしいぞ？」

「そんなことはありません。早くそこに座りなさい」

「いや、だって、皿洗いの途中だし・・・」

「そんなもの後でやれば良いです。とにかく座ってください」

そのあまりの気迫に押されやっていた皿洗いをやめ、香の前に座った。

「宙君、説明してね」

目が笑っていない・・・

「あんたどうなるか分かってんのよね？」

指をなぜ鳴らす

「お許しを」

ガシツとつかむなよ・・・

「嘘なのか？」

疑問系なのに怒りマークが出てるのはなぜなんだろうか？

そして五人に囲まれて、罵詈雑言を受け続けるという初体験を受けるはめに・・・

それは終電の時間まで続いた。いや、終電を理由に逃げ出してきたと言ったほうが正しい。

第35話 勘違いはほどほどに・・・（後書き）

どーでした？

次回からやっとな福音戦ですよ！！ いやー、うれしいなー。やっただよ。

一ヶ月もやっというて何をやってたんだろうか・・・

誤字脱字訂正などあったらよろしくお願いします。

第36話 臨海学校（前書き）

どーも、明日から学校が休みなので（高校受験）テンションが急上昇中のsirasuです。

いやーやつと来ました、福音戦。ISの面白さはここにあると思っています。いまのところは・・・

ではでは第36話、どうぞ

第36話 臨海学校

第36話

「海っ！ 見えたあっ！」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの女子が声をあげる。

臨海学校初日、天候にも恵まれて無事快晴。陽光を反射する海面は穏やかで、心地よさそうな潮風にゆっくりと揺らいでいた。

そんな中で唯一、ズーンとした空気をももし出していた男が一人いた。その名は神代 宙。理由は一晩前に起こった出来事だ。心はもうすでに折れかけている。

あゝ、俺はもう死んだほうが良いな。うん、そうしよう、それがいいよね・・・

そんなことを考えさせるぐらいひどかったらしい。ちなみにそれを起こしたきっかけを作った本人はというところ・・・

「……………」

という状態で宙の隣に座っている。というわけで、

右側は一夏たち一行が騒いでいて、左側では宙とラウラの沈黙の状態だった。なかなかシニールである。

シニールとか言ってるじゃねえよ

宙はあまりの苦しさから地の文を読む痛い能力を手に入れた。テレテレテッテン♪

ドラクエのレベルアップの音を鳴らすな！！　そして、痛い能力じゃねえ

こうして、誰かのやさしい気遣いによって本調子を戻した宙だった。

もう、そうにでもなりやがれ・・・

そんなことがあり、軽く元気を取り戻すことに成功した。

「そろそろもう目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

千冬さんの言葉によって全員がそれに従う。指導力抜群であった。もしくは、絶対王政という。

言葉通りほどなくしてバスは目的地である旅館に到着し、四台のバスからIS学園一年生がわらわらと出てきて整列した。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくお願いしまーす」」」

千冬さんの言葉の後、全員で挨拶をする。聞いた話だとこの旅館は毎年お世話になっているらしい。俺たちの挨拶が終わった後、着物姿の女将さんが丁寧にお辞儀をした。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」

見た目は三十歳ぐらいに見える。そして、しっかりとした大人の雰囲気漂わせたが、仕事柄笑顔が絶えないからなのか、その容姿は

女将という立場とは逆にすごく若々しく見えた。

「あら、こちらが噂の・・・？」

一夏の方を見て千冬さんに尋ねた。

「ええ、まあ。そして、こちらがその補佐をしているものだ。今年は二人男子がいるせいで浴場分けが難しくなってしまって申し訳ありません」

と、俺の説明も同時にしてくれた。心境的にも自己紹介するのはちよつと無理だったのでありがたかった。どうやらここでも俺の存在は隠し通すつもりらしい。

「いえいえ、そんな。それに、いい男の子たちじゃありませんか。しっかりしてそうな感じを受けますよ」

「感じがするだけです。挨拶をしろ、馬鹿者ども」

ぐいっと頭を押さえられる。

「お、織斑一夏です。よろしく願います」

「神代宙といいます。よろしく願います」

「うふふ、ご丁寧にどうも。清洲景子です」

そういってお辞儀をする女将さん。その動作はとてもきれいだった。その後いろいろあった所でのほんさんが話しかけてきた。

「ね、ねー。おりむー。そーちゃん」

おりむゝが一夏で、そーちゃんが俺だ。その呼び方をする人はひとりしかないことを知っているの、声の主を探して振り返った。見つけたのだがその人は異様に遅い移動速度でこっちに向かってきた。

のほほんさんだ。

「おりむゝとそーちゃんの部屋ってどこ？ 一覧に書いてなかったー。遊びに行くから教えてー」

その言葉で周りにいた女子たちが一斉に聞き耳を立てた。だが、俺も場所はわからない。

「わからない」

「俺も知らない。廊下にも寝るんじゃねえの？」

「わー、それはいいねー。私もそうしようかなー。あー。床つめたーいってー」

一夏も知らないらしい。山田先生が言うにはどこかの部屋が用意されるようだが……。

「織斑、お前の部屋はこっちだ。ついてこい。神代は山田先生についていけ」

というわけなので山田先生に黙って着いていくと、そこはすごい武装された部屋の扉だった。

「神代君の部屋はここになります。なにか、問題があったら教えてください」

「いやいやいや、問題ありまくりでしょうか!!　なんですか、これは?」

あきらかに赤外線を張っているし、よく見ると細いワイヤーも張られている。ワイヤーの先には手榴弾がある始末だ。これは一体、どこの囚人を捕らえておく場所なんだ?　という疑問が出てくるぐらい、ほかに武装されていた。

「ああ、そうでしたね」

その言葉にホツとしたとき

「入り方の説明書を渡しと来ますね」

ズザザザッとおもいつきりこけた。山田先生は素でギャグをいえるらしい。顔がひりひりする。

「そうじゃなくてですね、何でここなんですか?」

「いろいろと問題が行われては困りますからね・・・はい、説明書です」

と強引に押し付けられ、先生は面倒ごとを避けるかのように逃げていった。

「これ、どうすんだよ」

といいながらも、パスワードを打ち込んでいき、四角あけたところでついに扉が開いた。ボタンを押すだけでも赤外線やらワイヤーや

らに気を使ってしまい、もうクタクタだ。

だが！！ 目の前に海が広がっていて入らないわけがない。いざ、海へ！

というわけで、更衣室のある別館に行こうとしたら一夏が、なにやら見たことのあるウサミミの目の前に立っていた。よく見ると『引っ張ってください』という張り紙がしてある。

「宙、どう思う？」

「あの人だろうな」

あの人——篠ノ之束さんのことだ。いつもつけていたウサミミに間違いない。俺の言葉を聞いた一夏は、それを引っこ抜いた。それはウサミミだけだったので、束さんがいると思っていたのか、力が入りすぎていた一夏は盛大にこけた。

キイイイン……。と、何かが高速で向かってくるような音がしたので上を向く。

ドカーーーーン！ などの物体は地面に突き刺さった。その形は

「「に、にんじん・・・？」」

一夏とシンクロしながらそうつぶやいた。しかも、イラストチックなデフォルメにんじんときたもんだ。まさに、理解不能だった。

「あっはっはっ！ 引っかかったね、いっくん！ らっくん！」

バカッと二つに分かれたにんじんから笑い声とともに出てきたのは、

天才・篠ノ之束さんだ。その格好はアリスが着ているような青と白のワンピースだった。そして、一夏の手の中にあつたウサミミを装備する。

らっくん、て・・・変わっていないなこの人は・・・

「お久しぶりですね。束さん」

「お、お久しぶりです。束さん」

「うんうん。おひさだね。本当に久しいねー。ところで二人とも、箒ちゃんはどこかな？ さっきまで一緒だったよね？ トイレ？」

俺が来たときにはすでに箒はいなかったはずだけど・・・

「えーと・・・」

一夏も回答に困っている様子。

「まあ、この私が開発した箒ちゃん探知機ですぐに見つかるよ。じゃあねいっくん、らっくん。また後でね！」

そんな便利なものがあるならいちいち聞くなよと言いたかったが、すでに目の前から束さんは消えていた。そして、俺と一夏は目を合わせたため息をついた。そのまま、更衣室へと入る。

着替えた。その辺の描写は気にするなよ。

一夏は準備運動をしはじめたので別行動をすることにした。すでに、浜辺では女子たちが肌を焼いたり、ビーチボールで遊んでいたり、泳いでいたりしている。その姿を見るのも、変態の行動では？ と思いやめた。

俺も泳ごうかなと思い、海にゆっくりと入っていく。最初は冷たかったが、今ではとても心地いい。体も慣れてきたので本格的の泳ごうとしたとき、急に砂浜のほうが騒がしくなった。どうやら一夏がまたハプニングに巻き込まれたようだ。助けるのもめんどくさいので泳ぐ。ある程度、沖に行ったところで泳ぐことをやめ、力を放棄した。すると、体が水に浮く、この感覚があまりにも久しぶりで気持ちよかったので襲ってきた眠気を受け入れた。

第36話 臨海学校（後書き）

どーでした？

前にも言いましたが、どんどん書き方を変えています。処女作品な
んで直すところがいっぱいあり大変です。他の作品を見て学習し真
似させていただいています。

読みにくいところなどありましたら遠慮なく指摘してください。結
構です。

誤字脱字訂正などありましたらよろしく願います。

第37話 臨海学校2（前書き）

ども、S i r a s uです。

今日から高校入試ですね。公立の……。受験生のみんながんばれ
！！

正直な話、ざまあW Wとか思っていたり思っていなかったり……

ではでは第37話、どうぞ

第37話 臨海学校2

第37話

『おまえは何のために生きている』

誰なんだ？ 俺に話しかけてくるのは。ここはどこなんだ？

真っ暗な世界に一人だけたっていた。周りには何もなく、まさに無の世界と呼ぶにふさわしい場所だった。

『おまえは永遠に理解されないと言うのに』

俺の質問に答えろよ……。なにが理解されないだ。お前に俺のなにがわかる。

『全てだ。おまえにもっとも近きもので遠きものだからな』

ああ？ お前は厨二病ですか？ なにをいつているんだよ

『一度堕ちたやつは、もう二度戻ることは不可能だ。罪滅ぼしなど必要ない』

意味がないとでも？

『そうだ。おまえは知っているはずだ、俺を……。』

「・・・うっ！」

頭に軽い衝撃がくる。目を開けると、目の前に壁があった。よく見るとそれは防波堤で、俺はそれに頭をぶつけたらしい。どうやら俺は水の上に浮かびながら寝ていて、波に流され頭を打ち、起きたらしい。

それより、なんだったんだ？ 変な夢だったなあれは・・・

無の空間の中ではっきりと聞こえた言葉。全然意味がわからなかったが、なんとなく気になった。しかし、そんなことよりも今は体が冷え切っているので砂浜に戻ろうと泳ぎ始めた。防波堤まで流されていたので、浜まで二キロぐらいはあったが、それを難なく泳ぎきった。

「宙君。どこに行ってたの？」

泳ぎきって、砂浜で寝転がっていたときに話しかけられた。この声は智花だ。声が聞こえたところへ振り向くとそこには、もちろん智花と・・・なんだ？

「それなんだ？」

奇妙奇天烈な存在がいた。バスタオルを何枚か体に巻きつけている。しかも、体中をだ。誰なんだ？

「出てきたほうがいいと思うよ。大丈夫だから」

「だ、だ、大丈夫かどうかは私が決める・・・」

聞こえてきたのはラウラの声だった。確かにバスタオルで包まれた体系や身長を考えると一致したが、声からはいつもの覇気が感じられなかった。

「せっかく水着に着替えたんだよ。見てもらわないと」

「ま、待て。私にも心の準備と言うものがあってだな・・・」

そんな風に言っている智花は、薄紫色と言っても赤に近い紫のさらに薄いやつのビキニを着てパレオを巻いている。確かに、肌の白さとその薄紫は非常にグーなので

「智花似合ってるぞ、水着」

「ふえっ！？ あ、ああありがとう」

とほめたのだが、すっごい勢いでテンパリはじめた。あまりのテンパリぶりに隣にいる、ラウラであろうタオルの塊も驚いている。

相変わずだけど、こいつは女子と話すのはいいけど男子と話すのは苦手だよな

宙だからこそテンパッているという事実に気がつかない、宙だった。

「ほ、ほら、ほめてもらったよ。ラウラも大丈夫だって」

「そ、そうだな。脱げばいいのだろう」

智花はいまだに顔が真っ赤なのであんまり説得力がないと思うが、
今ならなんにでもすがり付いてしまうほど自信がないラウラだったので、
勢いのままにバスタオルを殴り捨てしまった。

「わ、笑いたければ笑うがいい・・・！」

ラウラが身に着けていた水着は、黒の水着だった。それもレースを
ふんだんにあしらったもので、それはランジェリーに見えなくもな
い。

もっとも、ラウラの体じゃ・・・ごほん、失言だな。

さらにいつも伸ばしきっている髪は左右で一对のアップテールにな
っている。そして、もしもじと落ち着かなさそうにしている。それ
が、

かわええ。いや、まじで。

「だ、だ大丈夫だよ。宙君」

「落ち着けよ、智花。・・・ラウラ」

「な、なんだ」

「かわいいよ。大丈夫、似合っているからさ」

「なっ・・・！」

俺の言葉がよほど予想外だったのか、ラウラは驚きに一瞬たじろい
だあとそのまま顔を赤くした。

「じゃ、社交辞令ならいらん・・・」

「そうか、本心なんだが・・・。ちなみに俺は自分で言うのも何だが、はつきりと言うほうだぞ」

「ッ！！！」

固まってしまった。ためしに目の前で手を振ってみるが反応がない。どうしたらいいものかと考えていたら

ボンッ！ 頭になにやらやわらかいものがぶつかった。地面に転がっていたのでそれを拾う。

「ビーチボール？」

「おーい、宙。こっちだ」

向こうのほうから一夏の声が聞こえる。どうやらビーチバレーをしていてこっちに飛んできたらしいのだが・・・一夏の奥で飛び跳ねているのはほんさんの胸が弾んでいるのを見る。それを見たとき俺の中で何かが切れた。

一夏 ああああ！！ またお前はああああ！！ このリア充が
ああああ！！

「いざ、日輪の力を借りて必殺のシュートオオオ！！」

ボールが割れないように、しかし一夏にぶつけるために鞭のようにしなった足をおもいっきり振りぬく。飛んでいったボールはきれいな軌道を描き一夏の顔面に直撃した。それを見て、とってもすすき

りしたので、ラウラをどうしようかなと思い振り返ると

「か、かわ、可愛いと……言われると、私は……。ううつ」

俺と目が合った瞬間、顔を真っ赤に染め脱兎のごとく逃げ出した。

「お、おい、ラウラ!？」

声をかけてみたが、別館の中へ消えていった。

もう何言っても無駄だな……。それより腹減ったな

「智花、飯にしないか？」

「う、うん、そうだね」

近くにいた智花に聞いてみたところ、俺の意見に賛同した智化は歩いている俺の隣にやってきた。

「そういえば、宙君はどここの部屋なの？」

「別に教えてもいいが……来ないほうがいいぞ」

「なんで？」

「危険なんだよ……あそこは」

とあそこの危なさを説明すると残念そうに顔をうつむかせた。パスワードのことを教えたかったのだが、教えたところであのトラップは智花たちだと、逆に危険なのでやめておいた。

それから時間はあつという間に過ぎて、七時半。大宴会場で食事を取っていたのだが、案の定一夏の周りで騒ぎが起こる。その騒動のせいで、俺も巻き込まれてしまい・・・現在俺の周りには、あーんと口を開けたたくさんの大きいひな鳥に囲まれている。智花は俺の隣で食べていたはずだが・・・消えた。優や葵たちもなぜかこの騒動にまぎれている。

これ、一体どうすればいいんだ？

と俺が落ち込んでいたとき

「お前たちは静かに食事することもできんのか」

助け舟の登場だ。軍艦並みの

「どうにも、体力が有り余っているようだな。よかろう。それでは、今から砂浜をランニングして来い。距離は・・・そうだな。五十キロもあれば十分だろう」

「いえいえいえ！　とんでもないです！　おとなしく食事をします！」

そうして、ひな鳥たちは元の場所に戻っていった。俺の隣はいつの間にか智花ではなく優と葵が座っている。周りの女子から、ずるいとか聞こえてくるけど気にしていないようだ。そんなこんなで初日の夕飯は終わった。余談だが、その後智花がどこに言ったのかは知らない。

「ふー、さっぱりした」

「久しぶりの風呂だったな」

と言うわけで俺は今一夏の部屋にいる。正確に言うと千冬さんの部屋だが……。なぜこの部屋にいるのかと言うと、千冬さんに呼ばれたからだ。

「ん？ 宙だけか？ 女ではなく男を呼ぶとは……」

「千冬さん（姉）が呼んだんでしょうが（だろ）」

ごすっ。俺と一夏が同じタイミングで言った後、同じタイミングで頭にチョップが入った。

「織斑先生と呼べ」

「わかりやしたよ。それより……」

「まあ、いいじゃん。ふたりきりだし、風呂上りだし、久しぶりに・

・・」

織斑先生の部屋の前では一夏の一行と宙の一行がたむろっていた。
全員面白いことに扉に耳をつけているそこでは、

『千冬姉、久しぶりだからちょっと緊張してる？』

『そんな訳あるか、馬鹿者。——んっ！　す、少しは加減をしろ・・
』

『はいはい。んじゃあ、ここは・・と』

『くあっ！　そこはもっと、ゆっくりと優しくだな・・・』

『痛いぐらいがちょうどいいってね』

『あああっ！』

「「「「「・・「「「「「」

その音を聞いた八人は沈黙している。それはお通夜のようなだった。

『じゃあ次は』

『どこにすっかな』

『お前ら少し待て』

三人の声が途切れた。あれ？　と思ったのか八人は耳をさらにくつつけた。

バンッ！！

「「「「「へぶっ！！」「」「」「」」

おもいつきり開いた扉にぶつかり。聞いてはいけなかったような声を上げる八人。

「なにをしてるか、馬鹿者どもが」

「は、はは・・・」

「ふむ、まあいい。盗み聞きは感心しないが、入れ」

そして、千冬さんの出す気迫におされて黙って入ってくる八人。正直スペースが・・・ない

「全員好きなところに座れ」

きつつきつつになった部屋の中で八人が黙って座り始める。宙や一夏は

「散歩しに行かないか？」

「ああ、夜風に当たるのもいいな」

と言うわけで退散した。

「よし行ったな。・・・単刀直入に聞こう。お前ら、あいつらのどこがいいんだ」

あいつらとはもちろん一夏や宙のことをさしているのだろう。

「わ、わ、私は、その・・・宙君は」

「別に好きとかじゃ・・・」

「宙様はすばらしいお方です」

「つ、強いところでしょうか・・・」

これは宙の一行だけだ、一夏の一行も一人ひとりが答えていく。その答えの一つ一つを返していく千冬。

「宙君は何だ？ 雅」

「は、はい。その、なんといいですか・・・大切な人です」

「そうか」

それを聞き微笑む千冬。そして智花の次に優へ

「好きじゃないなら、なぜいつも近くにいる」

「智花と付き合わせるためにです。何か問題でもあるんですか？」

「それはなぜだ」

「宙にとって必要ですから・・・」

「ふふっ、まあいい」

なにやら意味深な笑いを残し今度は葵に

「すばらしいとか言ったな」

「はい」

「どこがすばらしいんだ？」

「先生と言えど、教えることはできません」

「どうしてだ？」

「言えないものは言えません」

「すばらしい所なんて、ないだろうからな」

それに反応する葵。

「どういう意味ですか？」

「そういう意味だ。他にどう読み取る？」

そして、沈黙。二人ともにらみ合う。ある程度にらみ合ったところでラウラへ

「あいつは確かに強い、強いが・・・この中で一番弱いぞ」

「どういう意味ですか？」

「まだわかっていないようだな。あいつのそばに居たいなら早く気づくことだな」

こうして宙の一行に一通り話をした後、千冬は宙の一行の方を向き四人へこう言った。

「最後に一つだけ言うが私の知っている宙は、今の宙ではない」

この言葉に宙の一行はほぼ首をかしげた。一行の中でこの意味を知っているのは優だけ・・・

第37話 臨海学校2（後書き）

どーでした？

次回ようやく新ISの登場です。設定については後日出しますが名前は出します。

s i r a s uは横文字で名前つけるの苦手なんです。今回も全部漢字ですね。

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第38話 新しい専用機（前書き）

どーも、sirasuです。

宿題全然やってねー、と今気づきました。何やってんだよ
小説書いていたら・・・11時だど！？ ってな状況に・・・orz

ではでは第38話、どうぞ

第38話 新しい専用機

第38話

優の記憶の中では宙は笑っていた。ついさっき千冬さんが言ったことが気になって思い返してみることにしたのだ。今の笑い方とは違う無邪気な笑い方だった。

私は今の笑い方は嫌いだった。どこか無理をしているようで・・・智花が彼女だったときはうれしそうに笑っていたことを覚えている。昔は良かった。あの時の宙が私は好きだった。けど今は違う。好きになれない。

理由はわかっている。宙は意識しているかはわからないけど、明らかに私たちに気を遣っている。そんなことが嫌だった。嫌いだ。私の好きな彼はもういない・・・智花が彼女のときだけ・・・だったら私のすることは・・・

合宿二日目。今日は午前中から夜まで丸一日ISの各種装備試験運用とデータ鳥に追われる。特に専用気持ちは大量の装備が待っているのだから大変だ。

「ようやく全員集まったな。今日は各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用のパーツテストだ。全員、迅速に行え」

はい、と返事をして解散していく。現在俺たちがいる場所はIS試験用のビーチで、四方を切り立ったがけに囲まれている。ちょっとした秘密のビーチのようだ。ドーム状になっているので入るには一度海面に潜って入ることになっている。本当に税金がここに消えているのではないかと思うぐらいだ。

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに來い」

「はい」

打鉄用の装備を運んでいた箒は、千冬さんに呼ばれてそちらへ向かった。

「お前は今日から専用――」

「ちーちゃーん！！！」

ずどどどど・・・！ と砂煙を上げて近づいてくる人影。その速度は無茶苦茶速い。たぶん、ISみたいなものをつけているからだと思うのだが、その人影が束さんなのが問題だ。立ち入り禁止もなんのその、稀代の天才・篠ノ之束さんは堂々と臨海学校に乱入してきた。

「やあやあ！ 会いたかったよ、ちーちゃん！ さあ、ハグハグしよう！ 愛を確かめ――ぶへっ」

「うるさいぞ、束」

飛びかかってきた束さんを片手でつかむ。しかも顔面を、容赦なし

に、アイアンクローを決めている。

「ぐぬぬぬ・・・相変わらず容赦ないアイアンクローだねっ」

そして、その拘束から抜け出した束さん。この人も軽く人外の領域のに思えてくる。その人は箒のほうを向いた。

「やあ！」

「・・・どうも」

「えへへ、お久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おつきくなったね、箒ちゃん。特におっぱいが」

がんっ！

「殴りますよ」

すでに殴っているじゃないか・・・

日本刀の鞘で束さんを叩いた箒がそう言った。頭を押さえながら涙目に訴える束さん。そんな二人のやり取りを一年生の皆さんはポカーンと見ていた。そんなときに山田先生が関係者以外は立ち入り禁止です、と伝えに言ったのだが、

「ん？ 奇妙奇天烈なことを言うね。I S 関係者と言うなら、一番はこの私をおいて他にいないよ」

とあえなく撃沈した。昔からこの人は何を言っても無駄だ。好きにさせとくしかない。それから束さんは千冬さんに言われて嫌そうに

自己紹介をした。

自己紹介の後は、また束さん関係で人騒動があったが、少し前にも言ったとおり好きにさせた。

本当にこの人は台風のような人だ。

そう思い直した宙だった。どこから現れては、巻き込み、勝手に去っていく。そんな迷惑極まりない人だ。しかし、この人は何度でも言うが、稀代の天才です。

「それで、頼んでおいたものは・・・？」

「うっふっふ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ！」

ややためらいがちに箒がそう聞くと、束さんは言葉どうり大空をビシッと指して答えた。他の生徒も見上げている。

ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！

「おわっ!？」

「のわっ!？」

いきなり四つの金属の塊が落ちてきたことにびっくりする俺と一夏。銀色のそれらの中の 하나가、次の瞬間正面らしき壁がばたりと倒れてその中身を俺たちに見せた。そこにあるのは・・・

「じゃじゃーん！ これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』！ 全スペックが現行ISを上回る束さんお手製ISだよ！」

そんな衝撃的事実をさらりと言った。

最新鋭機にして、最高性能機か……。すごいを乗り越して呆れてしまうって……

今は束さんの独壇場なのであまりしゃべらない一夏と宙。ここで束さんの注意を引くと、絶対に嫌な予感しかしないのでだまっているのだ。

そんなのを知っているのか知らないのかはわからないが、束さんはすばやく箒を促しフィッティングとパーソナライズを始めた。すぐに現れた六枚のディスプレイを見ながら空中投影キーボードを叩いていく。しかも、しゃべりながら。本人曰く、しゃべるときと作業をするときは、頭の使い方が全然違うから、楽に同時進行できるよ、と言っていた。相変わらずの天才振りである。

「あの専用機って篠ノ之さんがもらえるの……？ 身内ってだけで」

「だよねえ。なんかなずるいよねえ」

確かにその通りだと思うが、俺や一夏もそんな感じで専用機をもらっているの、少し肩身が狭くなった。束さんは未だに操作をしなからそれに反応した。

「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな？ 有史以来、世界が平等であったことなど一度もないよ」

この人が言うことにも一理ある。が、反論することはできなかった。この世の中が平等でないことぐらい、嫌と言うほどこの身をもって経験している。

なぜ俺にだけ平等に死を与えなかったのだろうか？

ふと、そんな考えが頭をよぎるがすぐに頭を振り雑念を飛ばした。

「いっくん、らっくん。白式と残響を見せて。束さんは興味心身なのだよ」

「え、あ。はい」

「別にいいですけど・・・」

全てを終わらせたのかキーボードを消して、こっちに振り返りながらそういつてきた。

俺は残響を呼ぶために集中する。

出て来い、残響

そう頭の中で思い浮かべると黒いペンダントが光を放つ。光はやがて体中を包み、形を成した。

「データ見せてね。うりゃうりゃ」

そういつて、一夏の白式と俺の残響の装甲にコードさしていく。すると、さっきと同じようにディスプレイが出てきた。

「ん・・・不思議なフラグメントマップを構築してるね。なんだろう？ 見たこともないパターン。それも二人とも・・・。男の子だからかな？」

フラグメントマップと言うのは人間で言う遺伝子のようなやつだ。そんなこんなで『紅椿』の作業が終了したので、試運転もかねて飛ぶことになった。

箒が目を閉じて集中すると、次の瞬間に紅椿はものすごいスピードで飛翔した。その急加速した余波で砂が舞い上がる。残響を装備した状態なので特に動じることはなかったが、あまりの性能に驚いた。

本当に厄介なことをしてくれたな。これだと今までがんばってきた開発者さんたちが報われない気がするよ・・・

搭乗者である箒も驚いている。次は武器の使用らしい。

両脇にある刀を抜く。その動作はとても滑らかで、さすが箒だなと思った。それから一通り武器を使った。

『雨月』は打突と同時にビーム刃がいくつも出て、敵を蜂の巣にする武器

『空裂』は斬撃と同時に功性エネルギーの帯を発生させる武器らしい。

俺的には、『空裂』は衝撃波を飛ばすと考えたほうがわかりやすかった。

「すげえ・・・」

十六連装のミサイルポッドを難なく落としてきた紅椿を見て、宙以外のここにいるものが驚嘆の言葉をつぶやく。そう、俺以外だ、俺以外のみんなが言葉を失った。

理由はわからないけど、何かが引つかかる。なんだろうなこの感じ？

その様子に気がついたのか、束さんが話しかけてきた。

「ん〜？ どうしたのかな？ らっくんは驚いていないようだね〜」

俺の様子は少し予想外だったらしい、若干不機嫌だ。

「いえ、驚いていないわけではないですよ。ちよつとね・・・」

「嘘はつかなくてもいいよ。天才である私にはわかるからね」

「嘘じゃないですよ。すこしね・・・」

「ふーん。嘘つく人は嫌いだよーだ」

何とかごまかそうと思ったが、自称天才？ である束さんにはわかっていたようだ。口を尖らせていかにも不機嫌そうな態度をとっている。

「それより、束さん。あれなんですか？」

と落ちてきた金属の塊が三つ残っていたので指さした。すると、不機嫌な態度が一変し今度はうれしそうに話した。

「お〜、よく気が付いてくれました、らっくん。あれは実験機として作ったISなんだけど〜」

「実験機？」

「そうそう、残響と紅椿の実験機なんだよ〜。知らないから持ってきたかった」

すると、周りが突然うるさくなった。

「いない？」

「つてことは・・・」

「・・・もらえる？」

急にテンションが上がり始める女子達、もらえるかもしれないというだけでこの上がりようだ。智花や優、葵が俺の近くに集まってくる。表情からして、三人とも苦手らしい。俺だって苦手だ。束さんもとってもいやな顔をしている。

「えーと、ここにあの箱を開けるパスワードがあります」

とおもむろにポケットから取り出したのは鍵だった。それを振りかぶって、草むらの中に投げた。

「早い者勝ち」

と束さんが言うと、それを追いかけて走り去っていく女子の群れ。それを見て束さんも機嫌を取り戻した。その一部始終を見て思ったことは、

束さんの性格から考えて、嘘だな

一夏も筈、千冬さんまでもが同じような顔をしている。全員考えていることは同じらしい。

「あっはっは、あの箱と言うのはこれのことなのにな」

そして取り出したのは小さい箱。確かにあの箱とは言ったけど・・・ひどい。俺の近くにいる三人は、走り去らずにいた。

「あちゃー、三人だけ残ったか。おいしいー」

「おしー、じゃないだろう。馬鹿者が」

ガツン！ 生徒たちをあそこまでばらけさせたことに相当腹が立っているようで、怒りの鉄拳制裁が行われた。

「ううう、痛いじゃないか、ちーちゃん・・・まあ、いいか。三人にあげるよ、ほい」

と言いながら何かの鍵を投げた。智花、優、葵、の三人はあわててキャッチする。

智花は白い鍵。優は赤い鍵。葵は青い鍵。

「名前は、白、赤、青の順に、水仙、豊水、断罪と言うから」

「「「あ、ありがとうございます」」」

束さんはいつものように冷たい口調で、必要最低限の業務連絡だけはしてくれた。それにもかかわらず、感謝する三人。礼儀が言いと言うよりは専用機を持てることがうれしいように見える。

その三人の姿を見て、束さんは少しだけ笑った。いやらしく・・・

はあ、また何か考えてるよ・・・。今度は何をしでかすんだろうか・・・

との笑いはとても不安だった。そのとき

「たっ、た、大変です！　お、おお、織斑先生っ！」

悲しくもこの不安はたぶんの中した。

第38話 新しい専用機（後書き）

どーでした？

オリISの設定については明日出します。

誤字脱字訂正などあったらよろしくお願いします。

新 I S 水仙・豊水・断水（前書き）

はいはい、束さんだよ。

今日は雑魚はお休みなんだって。うれしいね。

まったく、あの雑魚は釜揚げでもされてれば良いのにね。

あの塩加減がたまらないんだよ！

新IS 水仙・豊水・断水

宙

あれから三人のISがファースト・シフトした。
なぜか、sirasuはその部分を書かなかったようだ。
要するに逃げ出した、と言うことになるな。

ここで突然だが、昨日sirasuからメールが届いた。
用件は、説明が面倒だからよろしく頼むと言うことだ。
俺もめんどくさいので東さんに頼んだところ・・・

はいはいーい、みんなのアイドル・篠ノ之東ねだよ。

今回はらっくんが説明よろしくお願いしますと言うことでやる
ことになったんだよ。

正直乗り気じゃないけどね。だーかーらー、テキストを出しと
くことにしたんだよ。

ではでは、私は今からちーちゃんと愛を確かめにいくからねー、
バイバーイ。

この人にも逃げられた。俺も必死になって探したが、見つかる
わけがない。

よって、この場にあつたテキストを載せることにしたからな。

(俺の一言入れて)

これで勘弁してくれ。いや、勘弁してください。

機体名 水仙すいせん

世代 第三・五世代（束が作ったため）

色 白を基本としている。所々黄色い部分もある。

形 西洋の鎧みたいな感じ

武装 『六輪』ろくりん

『一』はじめ

『おうか』

『黄花』

『すいりゅう』

『水流』

機体説明

残響・紅椿の実験機。この機体を元に二機は作られた。いわゆるプロトタイプと呼ばれるものだ。この機体も二機と同じく万能型。性能は二機には及ばないが、束さんが設計・製作をしているので現存する第三世代機を上回る性能を持つ。肩についている体を覆っている白いマントが特徴的である。

待機状態は残響と同じネックレス（白バージョン）

武器説明

『六輪』は先ほど説明した白いマントのこと。この機体の名前の由

来となっている主武装である。全部で六枚ありその一つ一つが自機を中心とした六メートルの範囲内において自由に展開が可能となっている。このマントは一枚一枚が対ビームコーティング、防弾処理、防刃処理、耐熱処理されており、薄くやわらかい印象とは裏腹にとっても高い防御力を有してある。また角にP I Cが搭載されており魔法のじゅうたんの様に移動が可能。

『一』は紅椿の武装である「空裂」の試験的武装。「空裂」からわかるようにこれもビームの衝撃波を飛ばせる。形は両刃の剣で長さは一般的なものとなっている。

『黄花』は黄色の円形の盾。これは拡散ビームを撃つことができ、近距離、中距離において質より量でシールドエネルギーをじりじりと減らす。

『水流』は残響の武装である「大正」の試験的武装。これも遠距離用となっている。常に機体の背面に装備されており、発射するときには右わきの下から出るようになっていく。これは「大正」とは違いチャージを行わずに撃つことができるが、威力はそんなにない。しかし、弾速はとても早く回避が困難になっている。これまた質より量だ。

宙の一言

武器からわかるように決定打にかけているI Sだな。

機体名 豊水ほうすい

世代 第三・五世代

色 青をベースにしている

形 イメージとしてはブラックサレナのように全身をアーマーで包んでいる感じ。肩にあるアンロック・ユニットの巨大な盾が特徴的。

武装 『ビームシールド発生装置』

『蠍ヤシロウ』

機体説明

紅椿のワン・オフ・アビリティである「絢爛舞踏」の試作機。「絢爛舞踏」とは違い触れただけでエネルギーを供給することはできないが、バイパスを簡単に何本でも構築できる。ほかのISと比べセンサー系においては感度、範囲が異常に向上している。これらより支援型として発展している。また、エネルギー消費量を第一に考えられて設計されているので攻撃武装はなく、肩にあるアンロック・ユニットの巨大な実体シールドと両腕に装備されている『ビームシールド発生装置』のよって防御に特化している。ただし腰と盾についているスラスターの性能はトップクラスとなっている。

そして、バイパスをつなげることでセンサーを同調させると、二つのISの演算装置を用いて命中率、状況処理、行動の最適化をらくらくとこなせるようになる。

待機状態は青のリストバンド（優と同じことに不満を抱いている）

武器説明

『ビームシールド発生装置』の出力、方向を調節することで準ビームソードを作ることができる。

『蠍』は実体シールドの内側に装備されているリニアライフルのことである。発射角度は狭いが、実体シールド自体がアンロック・ユニットのためあまり関係ない。威力はかなり高い。

宙の一言

あの突進は恐ろしかった・・・

機体名 だんすい
断水

世代 第三・五世代

色 紅椿の鮮やかな赤とは違い、黒っぽい赤

形 ライデン（バーチャロン）をイメージしてください。

武装 『試製長距離射程ビーム砲』
『試製電磁投射砲』

機体説明

背中にある大型のバックパックが特徴的。その右と左の両方に武器

がつけられている。ビーム兵器や実弾兵器の実験機となっている。名前にある通り圧倒的火力を有し、短時間で広範囲を殲滅することができる。ただし、エネルギー消費率は束が作った中で最低。待機状態は赤のリストバンド（葵と同じなのが結構気に入らないらしい）

武装説明

『試製長距離射程ビーム砲』は最初「大正」の試作品として作られたが後に、「一弦」となる。一発一発の威力や射程は文句無しだが、連射が不可能だった。それに対処するためバックパックに大型のコンデンサーをつけたことにより連射は可能となったがエネルギー消費率が上がった。

『試製電磁投射砲』も最初は「大正」の試作品だったが「二弦」となった。これは連射性能、貫通力が桁違いだったが砲身加熱や電磁場を作る際のエネルギー消費率さらに弾数の減りが異常に早かった、といういろいろと問題が多かった。よって砲身に冷却用のタンク、着脱式のバッテリーもつけられ、バックパックに大型弾倉がつけられた。

宙の一言

優の攻撃的な正確からして、とてもつもなく恐ろしく思えてくるISなのだが・・・。

新 I S 水仙・豊水・断水（後書き）

宙 束さんがいないと思ったあんなところに・・・。

何で前書きだけ書いたんだろうか？ 後書きは俺なのか？

と言うことで、後書きを書かされることになりました。

始めましてでいいんだよな。めんどくさいからそうしてくれ
・・・何書けばいいんだ？

あまりネタねえしな・・・あっ

誤字脱字訂正があつたらよろしく。

こんなんの良いか・・・

P. S 初めての試みです。不評ならやめますので・・・。

第39話 作戦会議（前書き）

どーも、sirasuです。

アニメを見たのですが・・・

あつやべ、抜かれた。

と思いました。

と言うわけで、第39話どうぞ

第39話 作戦会議

第39話

「では、現状を説明する」

束さんの協力によって智花、優、葵のISのファースト・シフトを終わらせ、千冬さんに呼ばれていたので旅館の一番奥に設けられた宴会用の大座敷・風花の間へ三人を引き連れ行った。行った直後に会議が始まる。

照明を落とした薄暗い部屋に、ぼうっと大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼動にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS『銀の福音』《シルバリオ・ゴスペル》が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡が入った」

これを聞いたとたん、一夏以外のメンバーが厳しい顔つきとなる。俺も一夏と同じく意味がまったく分からない。ぽかんとしてしまった。

「それをどうしろと？」

と疑問を素直にぶつけた。他のメンバーは正式な代表候補生やきちんとしたISについての知識を勉強している人ばかりなので、こういった事態に対してどうするか分かったというようだ。ラウラはともかくあの三人が理解していることに少しだけ、感心し悔しく思った。

「待っている、それも説明する。その後だ、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することがわかった。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、われわれがこの事態に対処することとなった。教員は学園の訓練機を使用して空域および海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

は？ どゆこと？ w h y？

「それでは作戦会議を始める。意見があるものは挙手するように」

「はい」

手を挙げたのは鈴だった。なんとなくだが言うことが分かるのだが・

「専用機持ちといいましたがなぜ宙が呼ばれているんですか？」

ほらね、鈴だけこの中で俺の事知らないからね、予想はしてたよ。

「そうか、お前だけ知らなかったのか。宙は専用機持ち、以上だ。他に聞きたかったらこの作戦会議の後で聞け」

千冬さんはそれだけ言い、二言を許さなかった。鈴が俺のことをにらみつける。言ってくる事が容易に予想がつく

何でアンタがIS使えるのよ、とかだろうな・・・うんざりするよ、まったく。

入学当時を思い出し、つらくなった。

「はい」

次に手を挙げたのはセシリアだった。その目つきはいつもより鋭い。

「目標 I S の詳細なスペックを要求します」

「分かった。ただし、これは二カ国の最重要軍事機密だ。けっして口外するな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

やはり俺と一夏だけが理解できていないようだ。代表候補生と三人は教師陣の皆さんとともに会席を始めた。

「一夏」

「なんだ？」

「わかっていないよな」

「ああ」

そんな俺と一夏の腑抜けた会話の途中にも真剣に意見を交わしている。それを情けなく思う。そんなときだった。

「一回きりのチャンス・・・と言う事はやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体であたるしかありませんね」

と言った山田先生の言葉で、全員が一夏へ視線を向ける。当の本人はまったく理解していないが。

「一夏、あんたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は――」

「どうやって一夏を運ぶかだね・・・・・・・・・・」

と言う風に話が勝手に進んでいく、その事態をようやく理解したのか

「ちよっ、ちよと待ってくれ！　お、俺が行くのか！？」

と反論するも

「「当然」」

一夏一行のみなさんの声がきれいにハモリった。異論は認めないようだ。それから、千冬さんに活を入れてもらい一夏は承諾した。

なんかきれいに一夏が操られているような・・・

そんな気がしたが、気にしたら負けだと思う。

そうこうして、作戦はセシリアの乗る『ブルー・ティアーズ』の強襲用高機動パッケージ『ストライクガナー』で一夏を運ぶ事になるようにした。

ちなみにパッケージとは簡単に説明すると追加装備のことだ。

「待った待った。その作戦はちよっと待ったなんだよ！」

この語尾をのぼす話し方、束さんだ。しかも天井からのご入場である。

「一体、どこの忍者なんですか・・・」

と呆れ気味につぶやいてしまった。その本人は甲賀とかぶつぶつとなんか言っていたが、すぐに話を戻し

「聞いて聞いて！　ここは断・然！　紅椿の出番なんだよっ！」

「なに？」

「紅椿のスペックデータを見てみて！　パッケージなんかなくても超高速機動ができるんだよ！」

そんな束さんの言葉に応えるように福音のスペックデータが紅椿のものに書き換えられる。

「紅椿の展開装甲を調整して、はいはいはいと。ホラ！　これでスピードはばっちり！」

ここで解説。展開装甲とは第四世代型のISに使われている技術の事を指す。『パッケージ換装を必要としない万能機』と言う考えだ。この技術は各国で研究されているがいまだ完成していない。いわゆるオーバーテクノロジーだ。追記だが、第一世代は『ISの完成』。第二世代は『後付武装による多様化』。第三世代が『操縦者のイメージ・インターフェイスを利用した特殊兵器の実装』と言ううことになっている。いまのところ第四世代機は一夏の白式、箒の紅椿、宙の残響だけだ。

「どっかの誰かさん、説明ありがとね。紅椿には全身に展開装甲が使われているからシステム最大稼動時にはスペックデータはさらに倍プッシュだ★」

その言葉にここにいた全ての人が驚愕の表情をする。当たり前だろう、すでに紅椿の性能は現存する全てのISの性能を上回っているのにもかかわらずさらに倍になるのだから。

今までの研究成果や膨大な資金を使って開発している各国がまったくやっている事が無意味と言うことになる。こんな馬鹿げたことはないだろう。

というわけで作戦は紅椿と白式による追跡および撃墜と言う作戦へと変わった。時間は三十分後と言うことで俺も準備に取り掛かろうと退室しようとしてところ

「ちょっとまったー」

もちろん東さんだ。その一言に作業に取り掛かろうとしていた全ての人の足と手が止まる。

「まだだ、まだいけるよ。らっくん、今までに『大正』を百パーセントの出力で撃った事があるかな？」

「ありませんけど、それがどうしたんですか？」

五十パーセントでレベル4の遮断シールドを破るくらいだから相当な威力があると思う。だが、今回の作戦にはまったく関係がないはずだ。長距離射撃は相手が動かないことを前提に使うものだから、と思っていた。

「ふっふっふ、『大正』の百パーセントの出力は五十キロぐらいじゃ、そこは俺の距離なんだよ」

「は？」

その場にいた全員が呆れた声を上げる。

「『大正』はチャージ率によって威力だけでなく速度、射程まで変わるんだよ。しかも、最大射程は地球の半分ぐらいかなあ？ 計算上ではそうになっているし、弾速は最大で現存するエネルギー系の武器の三倍ぐらい出るんだよ。これも計算上だけどね」

「全て計算上じゃないですか！！」

「計算上でも天才の私が言っているんだよ？ 間違いないから、はっはっは」

またもや全員が呆れたため息をする。確実なデータがないのに実戦で使おうなんて一体何を考えているのか分からない。まあ、実戦経験のないあの二人のこともだけど・・・。

ただその中で一人だけ目を輝かせたものがいた。・・・ラウラだ。

「よしっ、喜べ嫁よ。私が教えてやろう。遠距離射撃のコツから基本まで、手取り足取りだ」

「いやいやいや、ラウラ。基本からコツまでだろ？ なんだよコツから基本までって」

「まあ、そうとも言うな」

「いや、そうとしか言わないから」

「仲のいいとこ見せ付けちゃってくれて、悪いけどさ。その必要はないんだな。だってこの場には豊水の人もいるしね」

「またもや東さんの介入である。ホント目立ちたがりな人だ。これじゃ俺の影が・・・」

「らっくん、影の薄さなんて気にしちゃだめだよ。私なんてこれ以降ほとんど出番ないんだから」

「東さん」「らっくん」

そして、抱き合う二人。よく見るとみんな引いていた。その視線があまりにもひどかったのだ

「じ、冗談はこれぐらいにして・・・。どういう意味ですか？」

「そうだね、これぐらいにしとこうか、ちーちゃんが嫉妬するしね。それで、よく聞いてくれたね、らっくん。えらい、えらいよく。豊水と残響をつないでセンサーを共有すればいいんだよ。そうすれば自動演算されて命中率は格段に跳ね上がるから」

さっきと同じく全員、驚愕の表情を浮かべる。この人には驚かされてばかりだ。

こうして作戦は俺と葵の遠距離支援と筈と一夏の強襲で決まった。

第39話 作戦会議（後書き）

どーでした？

後書きはこの前のほうが良いですか？

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第40話 初見「銀の福音」(前書き)

ども、sirassuです。

第40話 初見「銀の福音」

第40話

「宙様」

「なんだ？」

俺たちは今、海上にいる。あの旅館から数十キロ離れている地点で豊水と残響をつなげ、エネルギー補給と豊水の強化型センサーを残響をセンサーと同調している状態で待機している。一夏と箒はすでに先行し「銀の福音」の元へ行った。

「大正」のチャージは終わり、センサーの同調も完璧、照準もすでに合わせている。準備は完璧だが、ただ一つ気になる事があった。葵もそのことを気にしているようだ。

「箒さんのことですが」

「ああ、わかっている。あれは浮かれすぎだ、なにがあるかわからないから気を引き締めてくれ」

「わかりました」

「と言っても本格的な実践は俺もお前も初めてだがな」

「はい、そうですね。宙様もお気をつけて」

「ああ」

と言った会話を交わした後だった。一夏と箒が「銀の福音」を見つけたようだ。状況を皆で共有するためにオープンチャンネルは常に開いている状態なので、そう言った会話が聞こえた。会話から十秒後に交戦すると言うことだから、俺は作戦内容をもう一度頭に浮かべる。

俺と葵の役目は一夏たちの初撃が外れた場合、「銀の福音」を落とすべく支援砲撃をせよ。と言うことだ。要するに、もしものための存在。

元から作戦の中心になることは不可能だったので、このぐらいが妥当かなと考えてはいた。が、箒の様子を見て責任は重大だと思っている。それほど箒の浮かれ状態はひどいものだった。確かに箒の実力は知っているし（実際に戦ったからな）ISの性能もわかってるつもりだが、不安で仕方がない。そう俺の勘が言っていた。

『敵機確認。迎撃モードへ移行。《銀の鐘》（シルバーベル）、稼動開始』

と、ふと機械的な声がオープンチャンネルより聞こえてきた。

俺の勘は悪いことにまた当たってしまったようだ。これで何回目だ？ クラス代表戦のときも束さんのときも今のもこれで三回目、しかも百発百中と来たもんだ。正直俺の勘が恐ろしく思えてくる。

モニターで一夏たちの姿を捉え見ていたが、そのときは初撃を福音にギリギリのところかわされているところだった。

『織斑、箒が失敗した。宙、開始してくれ』

『了解』

オープンチャンネルで聞こえてきたのは千冬さんの声だった。開始

と言うのはもちろん作戦の開始で、俺がトリガーを引くきっかけとなる言葉だ。

初めての百パーセントの「大正」を撃つ事になっているので多少は緊張しているが、その緊張のせいで失敗することは許されない。よって無理やり押し込みあせらず照準を合わせ、そして引き金を引いた。

ばおおおお、と雄たけびを上げるように砲口から黒いビームが撃たれる。その反動はすさまじいものだったが、なんとか豊水のスラスターで相殺することに成功。そして、その一条の光は瞬く間にセンサーの中で福音に迫っていく。が、もちろんかわされた。命中率がいくら上がったとしても所詮、超遠距離射撃なのであたらないことは分かっていた、よってそんなにびっくりすることはなかった。だが、がっかりはしなかったが驚きはした。束さんの言うとおり「大正」が放った一撃はとても速く、綺麗だった。

そしてモニター内で一夏と箒の戦っている様子を見ながら、再度チャージを開始する。

「宙様、あせってはいませんか？」

「どうして？」

「あなたの事ですから」

「そうだな、確かに俺はあせりやすいな。けど、今はまだ大丈夫だ。あっちも見えている限りがんばっているからね」

一夏と箒は今福音と交戦中で、箒と一夏で左右から攻めて落とすことを考えている会話が聞こえた。

ただ、その会話を聞く限りではあまり安心できる内容じゃない。未だに箒は浮かれている状態だ。正直、危険すぎる、としか思えなか

ったが圧倒的な戦闘風景を見てもその感じは消えることはなかった。二刀流で福音を追い詰めていく箒、しかも展開装甲の自動攻撃つきでだ。急加速、急転換も展開装甲はお手の物で簡単に距離をつめる紅椿。圧倒的な連射性能を誇る福音の《銀の鐘》の弾幕でさえ自動迎撃システムと機動性よって軽々と交わしていく様子は、俺に不信感を持たせる。

やっぱり、あの時（ミサイルを落とした時）と同じ感じ、力に酔っているな

箒が福音を捕らえたときだった。絶好のチャンスと呼ぶべき隙ができたと言うのに一夏は反対方向へ進んむ。

『一夏!?!』

『うおおおっ!!』

そんな会話が聞こえる。一夏は一発の光弾を零落白夜で消した、その理由は分からない。

「葵、わかるか？」

「少しお待ちを……密漁船がありますね」

とモニターに密漁船のアップが現れた。海域は確かに封鎖されたはずだが、漏れがあったようだ。

「まさか、助けるために……」

「たぶん、そうだと思います」

「あの馬鹿野郎が」

「そう言っている宙様も言葉と顔があっていませんよ」

たぶん俺の顔はうれしそうなのだろう。言葉は怒っている言葉なのに表情はうれしそう、そんな状態なのだろうと容易に予想がついた。しかし、最悪な事態をセンサーは捉えていた。一夏の零落白夜、白式のエネルギー切れだ。光の刃は消え展開装甲が消えた。それが意味するのは作戦の失敗。しかも、紅椿の手から落ちた刀が光の粒子へと消えるところも、これも具現維持限界・・・エネルギー切れだ。

「葵っ!!」

「わかっています。しかし、エネルギーはまだ・・・」

くそっ!! 早くしないと・・・

『箒いいっ!!』

一夏の叫び声が聞こえる。モニター越しに一夏が箒に照準を合わせた福音の間に割り込もうとしている所だった。

間に入った一夏は落ちた。

それを見た俺は・・・飛び出していた。瞬時加速を使い葵から離れすばやく夜空を駆けた。自身のIS残響の性能をフルに使いおもしろいっきり加速する。この数ヶ月で身に着けていた最高速度の出し方は無駄ではなかった。翼の展開装甲を開き、さらに加速。今さっきま

で豊水のエネルギー供給を受けていたためエネルギーは満タン、気にすることもないので紅椿で一夏を抱えている箒の元へ向かう。

『宙、わかっているだろうな？ 戦闘は避けるんだぞ』

『わかっています。そんなに馬鹿じゃありませんから心配しないで下さい』

そんなことを通信でいったが、内心あの福音に対する怒りでいっぱいだった。それと見ることにしか出来なかった自分に対する怒りも含めて。

箒たちの姿がだんだんと大きくなっていく。

「箒っ！」

「一夏がつ、一夏がつ」

「わかっている、下がれ早くっ！」

混乱している状態の箒に下がれと命じたが、とどかない。しかも最悪なことに福音はまだ攻撃を続けている。

そんな箒と紅椿にせまる光弾をなんとか「二弦」と「一弦」で撃ち落としていくが光弾の数が多すぎる。紅椿ごと動かし回避させてまた迎撃し、箒に声をかける。

「ここは俺が何とかするから、早く一夏に手当てをっ！！」

その言葉によりやく気が付いた箒はハッとし、旅館とは逆方向へと進みだした。相当混乱しているようで、その目はうつろになり何を見ているのかもわからない。

まずい、そう思った俺は箒のISを攻撃した。エネルギーは底をつきかけていたので簡単にISは光の粒子となり消える。PICを失い、重力に従うように落ちていく箒と一夏を捕まえその場から最大速度で旅館へ帰った。

第40話 初見「銀の福音」(後書き)

どーでした？

次回は明日となります。

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第41話 福音戦（前書き）

どーも、地震で大変なときにのんきに小説を書いていたsirasuです。

本当に大丈夫なんでしょうか？ ふざけてはいないですけど、映画の日本沈没を思い出しました。私はとある県の離島に住んでいますので、津波注意報は出されましたが被害がありませんでした。

ではでは第41話、どうぞ

第41話 福音戦

第41話

あれから三時間がたった。しかし、一夏は未だに目を覚まさない。箒もうなだれたまま一夏の隣に座っている。

俺たちは一夏の手当てが終わり次第、専用機持ちを呼び福音を倒す決意をした。しかし、肝心の箒があれだと士気が下がると言うものだ。みんなもそのことを気にかけている。

「宙、ちょっと言ってくるわ」

「まて、鈴。俺が行くよ」

一夏が寝ている部屋の前で専用機持ちは集まっていた。どうにかしてでも箒を連れて行きたい、それが俺たちの考えだ。一夏たち一行は箒に怒っている。大切な人を傷つけた人として。

最初に行くと言い出した鈴を止め、俺が行くことにする。俺だつて一夏のこと大切だ。力におぼれ過信し、結果仲間を傷つけたあいつが許せない。あいつにガツンと言ってやる、そう心に決め、扉を開けて部屋に入る、すると思っていた通りに箒は一夏の隣に座っていた。

「箒、お前のせいでこうなっているんだろ？ どうしてうなだれているんだ？」

「.....」

箒は何も答えなかった。ただただ頭を下げているだけだ。

「やることがあるだろう？、箒。今、動かないと後悔するぞ」

「わ、私・・・は後悔したって良い。もうISは・・・使わない」

そんな箒の言葉に俺は無意識のうちに手を振り上げていた。

バシンッ！ 俺は箒の頬を叩いた。目を覚ますように。叩かれた箒は何の抵抗もせず倒れた。倒れてからも動こうとはしない、そのような様子を見て怒った。

「そんなちっぽけな覚悟で一夏のそばに居るつもりか？ ふざけんなよ。俺はお前を絶対に許さないからな。力を手に入れて自意識過剰になって人を傷つけて、そしたら自分は責任から逃げるって言うのかよ！！ そんな覚悟で一夏のそばに居るのなっ！、ありえないだろ。お前は——」

箒の目を直視する。箒はまだ目の光を失っていなかった。ただ、奥底にあるだけ・・・

「幼馴染がやられて、黙ってているようなことしかできない弱者だ」

「ど、どうしろと言うんだ！ もう敵の居所もわからない！ 戦えないのだから仕方がないだろう。私だって敵はかたきとりたいんだ」

目の奥にあった光は輝きを取り戻し、箒は立ち上がった。その姿は雄々しく、勇ましかった。

不安は消えた、か・・・

「お前ら入ってこいよ」

そういつて入ってきたのは、専用機持ち全員だった。

「ここから三十キロ離れた沖合い上空に目標を確認した。そこで倒れている男のために衛星を使うとわな・・・」

「甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済みよ」

「こっちも『ストライクガンナー』のインストール終わりました」

「準備オツケーだよ。いつでもいける」

「初めての実戦だけど、がんばるからね」

「気は進まないけどさ・・・仲間がやられて黙っているほど、私は馬鹿じゃないからさ」

「宙様が戦いますからね・・・喜んで参加させてもらいます」

ラウラ、鈴、セシリア、シャルロット、智花、優、葵は部屋の中に入りながら一人ずつそう言った。

「で、お前はどするよ、箒」

「私・・・私は――」

みんなの目の前で拳を固める箒。手を白くなるまで力を入れている、そこからは決意しか感じられなかった。

「戦う・・・戦って、勝つ！ 今度こそ、負けはしない！」

「だってよ、みんな。いいよな？、作戦に入れても」

全員はいつせいに頷いた。

海上二百メートルで福音はひざを抱えていた。翼はまるで腕で抱くように全身を包み込んでいる。不意に訃音が顔を空けた瞬間、超音速で飛来した砲弾が頭部を直撃、大爆発を起こした。

「初弾命中。続けて砲撃を行う！」

「調子良いわね」

五キロ離れて地点にいるのは、ラウラと優だ。ただし、ラウラのISはいつもの『シュヴァルツェア・レーゲン』ではない、八十口径レールカノン《ブリッツ》を二門、左右の肩に装備し四枚の物理シールドを装備している砲戦パッケージ『パンツァー・カノン』を装備した『シュヴァルツェア・レーゲン』だ。

その砲撃に気づきエネルギー弾を放ちながら近づいてくる福音。

「そこはあたしの有効射程距離だ」

エネルギー弾を片っ端から撃ち落していく優の断水。左腰から突き出した『試製電磁投射砲』の圧倒的連射能力により福音の放ったエネルギー弾ごと攻撃する。砲身の先端からは電磁波による光の円が

出来ており、神々しい光景とは裏腹に凶悪的な威力を秘めていた。
しかし、砲撃仕様はその反動相殺のため機動との両立が難しい。
機動力に特化した福音は優とラウラの弾幕を避け接近し右手を伸ばす。

「――セシリア！！（頼んだわよ）」

二人のそういう言葉に答えるように、上空より飛来した青一色のISは福音の伸ばされた手を弾く。ステルスモードによる奇襲だ。

『ストライクガンナー』を装備した『ブルー・ティアーズ』は六機のビットをスカート状の腰部に接続され、スラスターとして用いられている。さらに手にした大型のBTレーザーライフル《スターダスト・シューター》はその全長が二メートル以上もあり、ビットをスラスターとして使い失った火力を十分に補っている。

五百キロでの戦闘を行うために頭部に装着した超高感度ハイパーセンサー《ブリリアント・クリアランス》により最高速からの反転そして、福音を捉えて射撃した。

『敵機Bを確認。排除行動へと移る』

「遅いよ」

セシリアの射撃を避けている福音は真後ろからの突然の攻撃に体制を崩す。それはセシリアの背中に乗り、接近していたステルスモードのシャルロットだった。

ショットガン二丁により姿勢を崩していた福音はすぐに体制を立て直し、エネルギー弾を放つ。

「おっと。悪いけど。この『ガーデン・カーテン』は、そのぐらいじゃ落ちないよ」

リヴァイブ専用パッケージ『ガーデン・カーテン』は二枚ずつ装備されている実体シールドとエネルギーシールドの両方で福音の弾雨を防ぐ。

防御の間に得意のラピッド・スイッチにより武器を換え隙を見て反撃しているシャルロット。そのセリリアとシャルロットの攻撃に引き付けられていた福音より、距離を置いて砲撃を再開するラウラと優。優はさっきとは違い『試製長距離ビーム砲』で砲撃をしていた。

『……優先順位を変更。現空域からの離脱を最優先に』

機械的な声がオープンチャンネルより聞こえてきた瞬間、全方向へ射撃を行い全スラスターを開き離脱しようとする福音。

「させるかあっ！」

「させない！」

海面が爆ぜ、飛び出す影が二つ。ひとつは『紅椿』とその背中に乗った『甲龍』。一つは『豊水』とその背中に乗った『水仙』だった。

「離脱する前に叩き落す！」

福音へと突撃する紅椿と水仙。紅椿の背中から降りた鈴は、機能増幅パッケージ『崩山』を戦闘状態に移行させる。水仙を乗せていた葵は優の元へと行きエネルギーの供給を行う。

鈴の両肩の衝撃砲が開くと同時に、増設された二つの砲口がその姿を現す。合計四門の衝撃砲が一斉に火を吹いた。

『!?!』

肉薄していた紅椿と水仙は離脱し、その後ろから衝撃砲による弾丸が一気に降り注ぐ。しかしそれらはいつもの不可視の弾丸ではなく、赤い炎をまとっていた。しかも、福音のそれに勝るとも劣らない弾雨。

「やりましたの!?!」

「――まだよ!」

拡散衝撃砲の直撃を受けてなお、福音はその機能を停止させていなかった。

『《銀の金》最大稼動――開始』

両腕を左右いっぱいに広げ、さらに翼も自身から見て外側へと向ける。その瞬間真上からの黒いビームがふってくる。その砲撃をなんとか避けたることに成功した福音だったが、体制を崩した。

「真打はいつだって最後って決まってるんだよ」

そう言い捨て、二丁銃を展開し剣へと換えて、重力とスラスタの加速で福音の上空よりすれ違いに斬撃をあげた。かすただけだったが、作戦は上々、全員は勝てると思った。

「役者はそろった。舞台から降りてもらおうぜシルバリオ・ゴスペル」
剣先を福音に向けて言った。その宙の一言で本格的な戦闘は始まった。

第41話 福音戦（後書き）

どーでした？

気づけば地震発生から三日はたっていますね。たくさん死者を出しましたし、原発も爆発するし・・・一体どうなるのやら？

簡単にわかることは、日本の経済状況は停滞し好景気になる時間が延びたことですかね・・・

次回から後書きはキャラに任せようかな？ （気分しだいです）

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第42話 落ちる宙（前書き）

ども、sirasuです。

読んでもらったら分かりますが、すいません。

では第46話、どうぞ

第42話 落ちる宙

第42話

「いやー、言ってみたかったんだよね。かっこいいセリフ」

エネルギー弾の一斉発射が始まり、豊水の後ろやシャルロットの後ろに隠れているときにそんな言葉を言った。すると、全員が一瞬だけ「なにかんがえてんの？」見たいな視線を向けてきた。向けた後はすぐに福音へと集中する。

「それにしても・・・これはちょっと、きついね」

「そうですね」

福音の異常な連射を立て続けに受けることは防御使用のISや防御専用パッケージを装備したISでも厳しかった。

そうこうしている間にもシャルロットの物理シールドは完全に落ちた。葵のほうは何かシールドの内側にある『蠍』により迎撃しているので落ちてはいないが時間の問題だ。

「ラウラ！ 優！ 頼む！」

「セシリア！ お願い！」

「了解だ」

「お任せになって！」

葵とシャルロットと入れ替わりながらラウラとセシリアと優が三方向からの射撃を開始する。セシリアによる高機動射撃、ラウラの砲戦使用による射撃、優の圧倒的な火力重視の射撃を交互に行う。福音はそれらにも射撃を加えるが、智花の水仙のマントによって防がれる。俺も葵に隠れるのをやめ接近する。

「足が止まればこっちのもんよ」

「片羽ぐらいはもうぞ」

鈴と同時に接近する俺。ヒットアンドウェイの容量で接近した後、高速で下がる。鈴は双天牙月による斬撃の後、強化された衝撃砲を撃つ。もちろん二人の狙いは頭部に接続された《銀の鐘》。

「もらったあああっ！」

セシリア、ラウラ、優は射撃をやめる。俺は七弦を起動させ鈴の周りに展開させ、福音に接近する。鈴は七弦によって落とされるのでエネルギー弾を気にもせず、斬撃を加える。同時に衝撃砲を使いながらダメージを与えた。俺と鈴はお互いにサポートしながら接近戦を仕掛けた。そして、ついに鈴の双天牙月の斬撃が福音の片羽を奪う。

「鈴!!」

「はっ、はっ・・・! どうよ——宙!？」

片羽になったても福音はすぐに体勢を立て直し、鈴へ回し蹴りを与えようとしたが、それは宙の七弦のワイヤーに切断される。ただし、ワイヤーを強引に左手で引っ張ったため宙の左手も切断された。

「気にすんなよ——まだか！」

切断されていないほうでさらに回し蹴りを加えようとする福音。鈴は何とか反応することができたが、当たり所が悪く海面へと墜ちていった。

墜ちていく鈴をハイパーセンサーが捉えたが、目立った外傷はないようだ。

「鈴！ おのれっ——！！」

箒は両手に刀を持ち福音へと切りかかった。それと同時に俺も残った片腕で切り込んだが、エネルギー弾の牽制射撃によりうまく近づけない。

俺の対処するために箒の急加速に反応が遅れた福音の右肩に刃が食い込む。

よしっ、いける

そう思った刹那、福音は信じられないことに左右両方の刃を手のひらで握り締めて止めた。それに箒も驚いたいたが、さらに驚くことに刀身から放出されるエネルギーにより装甲が焼き切れていることを気にもせず、両腕を最大まで開いた。

刀ごと両腕を引っ張られ敵の目の前で無防備な状態をさらす。そして、そこに俺への牽制をやめたもう一つの羽が箒へと向けられた。

「俺を気にしなくても良いんだね？」

箒へと向いた砲口は俺に絶好のチャンスを与える。もちろん一夏の時のように密漁船はない、残った右腕で一弦を振り抜く。

その斬撃により両羽を失った福音は海面へと墜ちていった。

「宙、すまない」

「いやいや、どうもいたしまして。・・・それより鈴は？」

「あそこらへんに——ッ——！」

智花が指を刺したとたん、海面が強烈な光の弾によって吹き飛んだ。

「!？」

全員の顔が緊張によって強張る。

球状に爆発した海面は時間が止まったようにへこみ、その中心に福音はいた。青い雷をまとった福音は最初のときのようにひざを抱えている。

「『セカンド・シフト第二形態移行』だ！」

ラウラが叫んだ瞬間

『キアアアアアア・・・!!』

機械的な獣の叫び声を響かせた福音はラウラへと飛び掛る。

「なにっ!？」

あまりの速さにラウラも動くことが出来ず足をつかまれた。そして、切断された頭部から光の翼が生えた。

「ラウラ！ シールドを切れ！！」

「なにっ！・・・そうか、わかった」

俺の言葉に全員が驚く、ラウラも最初は驚いたいたが本意を悟ったようだ。俺はその言葉を信じ、イグニッション・ブーストで近づき切る。狙いは福音ではなく、ラウラのつかまれた足だ。

シールドをなくした足は簡単に切れた。福音から離れることが出来るようになったラウラを引っ張り離れようとするが、逃がさないかのようにエネルギー弾雨が襲う。

「私のことは良い、離れろ！！」

「俺に命令すんなっ！」

ラウラの発言を完全に否定する。

絶対にやらせん

胴体をひねり展開していた七弦ごと動かす。一回転することによって振り回された七弦は、エネルギー弾雨のほとんどを切り落とした。それを確認したシャルロットと智花は同時に接近し、ショットガンと一による射撃と斬撃を与えようとした。

ドンッ！！ その音はシャルロットが引き金を引いた音ではない、福音の体にいたるところから出てきた光の翼により放たれたエネルギー弾によって四散したショットガンと一の音だった。さらに、エネルギー弾はシャルロットや智花を吹き飛ばした。福音はそれに追撃をかけようと追う。

俺はラウラを離し背面の展開装甲を開いてイグニッション・ブースト、福音の背後へと迫る。だが、元から福音の狙いは俺だったら

しく近づいた瞬間に体の方向を入れ替え、光の翼を広げた。

まずいっ！　そう思ったときにはすでに遅くエネルギーの弾雨は降り注いだ。避けようと思えば避けれたが、後ろにはラウラがいる。

「避けるっ！！　私のことはいい」

「無理だね」

避けることはできない、いや、したくない。だから両腕を交差し絶対防御領域を守った。それと同時に大正のチャージもだ。

装甲に次々と当たるエネルギー弾。ラウラが避けるとか何とか言っていたが、無視する。エネルギー弾雨が降り注いだ後、残響は空中に残っていた。しかし、両手両足は吹き飛び、体を守っていた装甲もボロボロ。まさに満身創痍の状態だった。

その様子を見た福音は俺を敵とは見なかったのかすぐにシャルロットや智花の追撃を開始する。

「まだ翼はあるんだよっ！」

残響には背面についている翼しかスラスタがない。そして、翼はいまだ健在、これが不幸中の幸いだった。追いかけている福音を追い抜く。智花とシャルロットの間に割り込み大正を前方へと向けた。すると、福音は俺を叩き落そうと翼を広げる。

「勝負っ！！」

福音のエネルギー弾と残響の大正は同時に撃たれた。多方向からのエネルギー弾に対して対策を取ることができないため、当たり続ける。大正は吹き飛び、エネルギーもほとんどなく、全身に焼けるような痛みと衝撃とともに海面に墜ちていったが、ハイパーセンサー

は福音を捉えていた。

モニターに移る光景は、福音に当たった所だった。その周りは煙が立ち上っている。

ざまあWW、だ。・・・なにつ！

煙がはれた後立っていた福音は無傷だった。両腕を交差し防御していたようだが、その両腕も無傷。

智花たちが俺の名前を呼んでいたが、海面に落ちたときの衝撃が背中に走った後、俺の意識は闇に墜ちた。

第42話 落ちる宙（後書き）

なんかありきたりで、すいません。

次回はようやくセカ・・・ゴホン

宙「ネタばらしか、てめえ？ この前の話で俺に出番くれるって言ったじゃねえか？」

おやおや、キャラがなかなか定まらない宙君じゃありませんか

宙「それ以上言ったら、殺す」

あざーす。どうぞ殺してみてください。僕は死なないよ。神だからねっ！

宙「次回もよろしく願います」

ええっ！ 無視なの？ そこ無視するところ？

宙「誤字脱字訂正などありましたらよろしく願います」

だからそれ、俺のセリフ！！

第43話 死の夢（前書き）

こんにちはsirasuです。昨日は本当にすいませんでした。毎日一回は投稿しようと決めていたのに・・・親に見つかりって・・・orz

今日から毎日投稿ができなくなるかもしれません。ですが、できるだけ投稿します。これからもよろしく願います。

ではでは第43話、どうぞ

第43話 死の夢

第43話

海面に落ちた俺は、月の光が差し込む夜の暗い海の中にいた。

ああ、俺・・・死ぬのかな？ まあ、悪くなかったけどな。しかし、走馬灯って言うのも嘘なのか、スローモーションにならなかったよ。確か、記憶がすごいスピードで見れるんだっけ？ ならなくて本当に良かったよな。もう二度と、あの光景は見たくないから・・・。

「宙君！」

「宙！」

「宙様！」

「そ、宙っ！」

ふふふ、智花たちが泣いているよ。ラウラなんか一番取り乱してるし。俺なんかのためにさ、何でだろうな。俺はあいつらに何もやれていないのに・・・。

・・・俺、なんでこんなも考えているんだろうな。もしかしてこれが走馬灯か？ そしたら、悪くないな。記憶がよみがえるよりも、あいつらの声を聞いて死ねるのなら。

これが死か、何年も待ち望んでいたはずなのに・・・・・・・・寂しいな。

宙は暗い海の中で静かに目を閉じた。

『神代 宙か、またここに来たのか？』

ここは・・・？

目を開けるとそこは、先日来たあの無の世界だった。ただ一つだけ違うことがある。声の主が見えることと声がはっきりと聞こえることだ。声の主は黒い衣をまとっている赤い髪の男だった。顔は見えない。

「俺は死んだのか？ お前のことがよく見えるよ」

「どうだろうな、俺にもわからん」

「はあ？ お前は神様じゃないのか？」

真つ暗闇のこの世界で唯一見えている人物だからそう思った。

「ふん、俺が神だったらお前をここに入れない」

「じゃあ、お前は・・・」

「前にも言ったはずだ、お前に最も近き者でもっとも遠き者だと」

「だから、お前は厨二病か？ ダサいぞ、それ」

「どう思われようとかまわん、事実だからな」

赤髪の男は俺に近づいて来る。

「まあ、いいか。なあ、一つだけ質問していいか？」

「質問はいいが、適応性が高いなお前は。以前ここに来た女どもは恐怖で動けなかったぞ」

「へえ、俺以外のやつが来ているんだ。・・・それより質問だが、ここにはつれてこないと言ったな、じゃあ、お前は这个世界の何なんだ？」

「二回質問があったと思うのだが、まあいいだろう。俺は这个世界の創造主とでも思ってくれて良いぞ、現に簡単に这个世界を操ることが出来る」

聞かなければよかったと今俺は後悔している。本当に胡散臭い。

「本来ならば、お前みたいなやつここに来れないどころか、接点すら持てないはずなんだが」

「俺が始めてきたと言うのか？ お前の言うやつらの中で」

「ああ、そうだ。お前が初めてだ、男の中でな」

「なっ!？」

男が初めてだと？　ここは、もしかして・・・

「エコーか？」

「ほう、ものわかりがいいな。正確に言えば、今は残響と言うのが・・・」

「何でここにつれてきたんだ」

「俺は連れてこようとして連れてきたやつはいない。なんでここにいちいち入ってくるのかわからん。静かにしていたいと言うのに・・・」

「俺がISの中にいると言うのなら・・・まだ、生きているのか」

「もしかして死にたかったのか？」

声のトーンが落ちていることに気が付いたのか、そう聞いてきた。

「ああ、死にたいね。けど、生きているのなら精一杯生きるさ。そう決めたんだ」

「そうか、だったら見せてやろう」

赤い髪の男はパチンと指を鳴らす。すると、無の世界にいくつものウィンドウが出てくる。そこに写っていたのは・・・墜ちていく仲間姿だ。

「・・・・・・・・」

その光景に俺は言葉を失う。俺はただそれを呆然と見つめ、立っていることしかできなかった。

まだ、俺は・・・

「どうした、急に黙り込んで」

ニヤリと口元を曲げながらそう言う。その笑みはとても気持ち悪かった。

「早く俺を起こせ！　できるんだろ？」

「できるが、やりたくはない」

「ふざけるなっ！！　俺は守らなくちゃいけないんだ」

「どうせ死ぬ気でだろ？」

「当たり前だ」

「死ぬ気、か・・・俺が変わりに死ぬの間違いじゃないのか？」

「それがどうした、痛みや悲しみは俺が背負う。そ」「そう決めた」
ぐっ」

そう決めた、の部分で赤い髪の子と声が重なる。

「俺はそんなやつは死ねばいいと思っている。だから死ぬがいい」

「黙って見ていろと言うのかよっ！　ふざけんっ！」

「おお、そうだな、見ているのもかわいそうだから消してやろう」

そう言うとき男は指を鳴らした。すると、ウィンドウは一つを残して

消えた。その一つのウィンドウの中には一夏が戦っている。よく見ると一夏の白式は形が違っていた。

「い、一夏!？」

「先をこされたか、まあ良い。こんなへたれに力を貸すぐらいならな」

赤い髪の男が何か言っているような気がするが耳に届かない。

「これで良い。お前が戻る必要はないはずだ。安心して死ねるだろう?」

「くっ、なんでだ。なんで、俺を戻してくれないんだ」

「自分で考えろ。俺は知っているぞ、お前はもうすでに気が付いているはずだ。口に出せ、意識しろ。本当の気持ちはなんだ」

男の言葉の意味が良くわからなかったが、俺は頭の中からそれを探そうとする。だが、探せば探すほど雑念が散らばり、もっと見えなくなる。思考は停止した。

なんで、なんで、俺はいつもいつも見ていることしか出来なんだ。どうしてなんだ。

力は手に入れた。戦う理由も。足りないものなどないはずだ。だったら・・・

「俺は死なない・・・生きるために戦う。だから俺を・・・」

「ダメだ。そんなことは当たり前だ。そしてそれをお前は望んでい

ない」

ふと、ウィンドウを見た。目の前では一夏が戦っている様子が写っている。その隣にはいつも箒がいた。一緒に戦っていた。そう、一緒に・・・

・・・・・・ああ、そうだ。俺は・・・俺は・・・

答えが見つかったとき涙がこみ上げてきた。

「羨ましかったんだ」

涙が流れ出ていくと同時に言葉も出て行く。

「羨ましかったんだ、一夏が」

考えてみれば、簡単なことだった。いつも大切なものは近くにある。良くそんな言葉をよく聞くが、嘘じゃない。

少し意識すれば、わかる。けど、身近にあり過ぎてわからなくなるだけだ。最初はいつだって気が付いている。それはみんな同じ。だけど、大切すぎて、当たり前すぎて、気づいたときにはなくなっただよように見えなくなるだけ、そんな単純なことだ。あまりに単純で思考すらなくなってしまう。

「一緒に戦っていることが羨ましいんだ。俺は・・・いつも一人だった」

涙が頬を伝うことを感じた。口から言葉が出るほど、溢れてくる。

「いつもいつも、俺は誰かが傷つかないように率先して戦ってきた。

たった一人を守るために大勢の人を傷つけていたんだ」

頭の中に智花たちの顔が浮かんでくる。

俺はいつも悪いことをしているやつを倒せばいいと思っていた。だから、カツアゲをする学生からみんなに迷惑をかけるヤクザ、暴力団・・・要するに社会のゴミをつぶしてきた。当時は悪いことだとは思っていなかった。

けど、それが正しいことではないと教えてくれたのは、あいつらだった。

「けど、それは仲間を信じていなかったんだ。いや、信じるのが出来なかったんだ」

信じたらどこかに行ってしまうそうで、大切に思うほどいなくなっ
てしまいそうで、怖かった。一人が怖かったんだ。恐怖ゆえのあの
行動だった。恐れられていれば、必ず人の心に残るから、と心の奥
底で思っていた。弱い俺は・・・そうすることでしか心を・・・心
を・・・支えきれなかった。

「本当は俺だって・・・あいつと同じように戦いたかった」

自分の犯してきた罪は何だかんだ言って、自分のためだった。弱い
自分を守るため・・・

「戦いたい・・・一人で闘うことしかできない力など要らない。仲
間を守るために・・・一緒に戦える力が欲しい。あいつらと一緒に
戦えるのなら・・・守れるのなら・・・どんな手段でも使ってやる。
だから俺に戦わせろっ!!」

「どんな手段でもか、それは最後の手段だがな・・・まあ、ようや

く気が付いたようだからな、いいだろう。それほどの覚悟見せてもらうぞ。……最後に一言だけ言っておく、俺は大の負けず嫌いだ」

頭痛が走り、その場に倒れる。そして……

目を覚ます。そこは海中だった。もうどれぐらい深いかわからないほど暗い。光は届かないほど深い深海だ。

首にかかっている待機状態の残響のエネルギーを確認すると完全に回復している。

一緒に戦うための力、守るための力、か。

暗い海中の中で宙の体を白い光が包み込む。その輝きは海面まで届いたと言う。

《覆水残響 起動開始》

第43話 死の夢（後書き）

智花「どうでしたか？」

あれ？ 俺のセリフが取られたぞ？

宙「お前は引っ込んでいろ」

きびしっ！ もっとやさしくしてくれたって良いじゃぐほお

智花「ああっダメだよ宙君。暴力は・・・」

宙「こいつの出番ぐらい消しても良いはずだ」

まったく、これだから性格が不安定な人は・・・

宙「お前のせいだろうがな」

誰のことだろうな。俺は知らないぜっ！！

宙「・・・」

智花「・・・」

あれ？ おかしいなツツコミがないぞ

宙・智花「次回も楽しみにしてくれ（してください）。誤字脱字訂正などがあったら（ありましたら）よろしく（お願いします）」

無視かよ・
・
・

第44話 勝利（前書き）

（ノ。㐂。）こんにちわ。今日も早く投稿することができました。
今のところいい調子です。

ですが・・・この後に待ち構えている宿題の山々。休日じゃないの
にこの多さ！ 最早いじめである。

というわけで第44話、どうぞ

第44話 勝利

第44話

空気ではなく、水を切って飛んだ。寝ぼけていた魚たちがびっくりして逃げていくのがわかる。

すまん、魚よ。それよりも本当に都合が良いな・・・俺ってもしかして主人公なのか？ じゃないと、こんなにうまく行くわけないよな。けどもし、俺が主人公なら守れるはずだ。

頭の中では、強敵出現↓やられる↓復活とともにパワーアップのビジョンが浮かぶ。

けど、実際つらいよな・・・。あんな思いするぐらいならしたくないな。もっと強くならないと。

ようやく海面が見えてくる。今でも交戦しているらしい。間に合った、そんな言葉が脳裏に浮かぶ。

福音がセカンド・シフトしたあと、やられた私たちは箒がやられていた様子をただ見ることにしか出来なかった。

けど、一夏さんがやってきた。新しい姿にISを持って、その姿は希望に見えたけど私たちにとっては、複雑な気持ちだった。宙はなくなった。

今私は、水仙を一極限定モードで起動しマント一つで優と葵、ラウラさんを運んでいる。

早く探しにいきたい。早く助けてあげたいのに……。そんなことをしたら人として何かを失ってしまうと思った。大切な人のために動くことはとても良いことだとは思っている。けど、目の前で倒れている友人を見捨てていくことではない。だから、この人達を安全なところまで運んだ後、すぐに探しに行かないと……

そのときだった、海面が急に光った。鈴は自力で孤島に上がってきたので、海の中にいるのは宙だけ……。それも重症の。だから、その光は……。希望だった。

ハイパーセンサーが福音を捉える。それは、体に自身の翼を巻きつけエネルギーの繭まゆに包まれているところだった。

嫌な予感がする。そんな気がした。今のところ俺の勘は百発百中なので、イグニッション・ブーストを使い仲間がいる反応の方向へ海面を飛び出した。

久しぶりに見た空は、海とは違いすがすがしい。気持ちが良いのだ、空を飛んでいる感覚が、とても。

「宙君」

泣きそうな声で俺の名を呼ぶやつがいる。けど、その方向を向くわけにはいかなかった。

福音の翼が回転しながら一斉に開き、全方位へ嵐のようにエネルギーの弾丸を雨のように降らせる。もちろんその攻撃範囲には戦っている一夏と箒以外も含まれる。

すぐに、視線で武装を確認。この状況に合った武器を選び起動させる。それは『七弦武装』と名づけられた、手のひらに仕込まれたアンカーのことだ。ワイヤーは切断ではなく、強度に特化している。

「やらせんっ！」

両の手からそれを撃ち出し、ある程度撃ち出したところでワイヤーをつかみ、まるで縄跳びのようにおもいきり回転させる。BT兵器であるアンカーは頭の中で考えたとおりに動き、加速したワイヤーは仲間たちに降り注ぐであろう弾雨を全て防いだ。

そして、仲間たちに振り返りこういった。

「ただいま」

海面から飛び出したISは、黒く輝いていてかっこよかった。

形は基本的に残響のままだったが全体的なカラーリングが変わっていた。最も変わっているところは翼だった。固定されていた翼ではなく、一対の巨大な翼を模したアンロック・ユニットがついている。またバックパックには二本の赤い何かが左右に取り付いていた。腰に七弦はない、代わりについていたのはスラスターのようなものだ。

そのISを眼前に捉えて見ほれていたら、福音から攻撃が来る。黒いISは手のひらから何かを出しそれを、まわし始めた。それは円形の巨大な盾に見える。二つの円形の盾はエネルギー弾を全てをなぎ払う。

そして、振り向いた。その顔は知っている。私の好きな人で大切

な人、見間違うはずはない・・・宙だ。

「ただいま」

とてもその言葉が久しぶりに聞いたようだった。涙が頬を伝わった。

「一夏あ！　いくぞっ！」

「そ、宙！？　わかった」

「う、嘘だろ！？」

箒だけが俺のことを嘘って言いました。本当に俺って嫌われているのかな？　まったくひどいよね

「嘘じゃないよ。それより早くあいつを倒すぞ。あいつらを守るのは俺に任せて、突撃して来いっ！、一夏」

未だに箒は目を白黒させている。一夏はこういうときだけ物分りが良い。そういうところが、付き合いやすいところだ。つくづく俺が持っていないものばかり持っているやつだ。羨ましいと思う。

目の前の敵に集中し新しい武器をコールする。『三弦』を視線で確認しコール。それは二丁あり、両の手でしっかりとつかむ。

形は一弦と二弦をさらに増長したライフルのような形だ。片手で扱うには少しだけ技量が必要はずだが、手になじむような感覚でとても軽く簡単に取り回しが出来る。エネルギーは機体と直結して

いるらしく撃ち過ぎはダメらしい。

一夏が突撃し、接近戦を仕掛ける。俺はそのときに福音から出た羽（エネルギー弾）を打ち落とすことに集中した。一夏が零落白夜で切り落とした翼はすぐに再生した。

こじゃ、きりがないな。さて、どうする？

俺の隣を箒の紅椿が駆け抜ける。ただし今までとは違い、赤い光に黄金色の光をまといっている。

その紅椿は一夏の白式に触れた。

「な、なんだ・・・？ エネルギーが——回復！？ 箒、これは——」

「今は考えるな！ いくぞ、一夏！」

そのような会話を聞こえる。

エネルギーが回復ね・・・テキストにあった通りだな。もしかして、白式と紅椿で二つで一つのISなのか？ そうだとすると・・・おっと、こんな事を考えている暇はなかったな。

戦闘の途中で出た流れ弾を打ち貫く。どうやらその弾が最後のようだ。眼前では一夏と箒が協力して福音と戦っている。光の羽はもうほとんど飛んでこなくなってしまった。ここで待機していても無駄だと思い、武器の一覧を見る。

接近、接近はと・・・これか

見つけたデータを二丁の三弦に送る。すると銃身は展開し、剣へと

変わる。今までの短剣とは違い、今回は刃渡りもきっちりある長剣だ。もちろん片刃で、白い刀身は光り輝いている。

イグニッション・ブーストを使う。覆水になってからは三点同時点火となっていて、すさまじいスピードが出た。俺が福音に近づくと自動的に巨大な翼のアンロック・ユニットは折りたたまれ、光の翼を出現させた。その光の翼は赤く煌き、力強く羽く。

「一夏、箒、さっさと片付けるぞ」

「まかせろ」

「言われなくてもわかっている」

三人による三方向同時の斬撃を繰り返す。これはさすがの福音も堪えるらしく、じりじりと防戦一方になっている。一夏の巨大な零落白夜のビーム刃の横なぎを回避した福音を俺と箒で追撃する。一夏の方角に伸びた翼を箒が断ち切り、俺が仲間に向けられていた翼を切り落とす。

「逃がすかああっ！」

「まだまだあっ！」

そして、俺は『四弦』を起動させる。足にある展開装甲が開きつま先と踵からビーム刃が飛び出す。

その回し蹴りと箒の回し蹴りがシンクロし、左右から叩き込む。予想外の攻撃だったのか態勢を崩した福音へ距離をとっていた一夏が待っていましたと言わんばかりに突っ込んだ。福音の翼はほとんどなく迎撃もままならないまま零落白夜が煌く。防御に回していた翼を容易にかき消し、本体へと突き刺さる。

最後の抵抗とばかりに一夏へ手を伸ばすが、俺のサマーソルトによるつま先のビーム刃で切り落とした。ない手を必死に伸ばすがとどくことはない。そして福音は・・・墜ちた。

最後にISのアーマーを失い墜ちていく操縦者を追いかけて、抱きとめる。

「終わったか」

言葉に出してみれば、こんなもんだった。かなり大変だったはずだが、疲労感はなく逆にすがすがしいぐらいだ。心に会ったしがらみは消えうせ、開放感しか残っていない。世界はこんなにも広がった。そう思い直した。

「ああ・・・。やっと、な」

そう、一夏が言った。俺と一夏はお互いを見る。その表情から

「一夏、何かあったようだな」

「お前もな」

「「ふふふ・・・はははは」」

と声を合わせ笑った。みんなが不思議そうに見ている様子がハイパーセンサーが捉える。

俺は間違ってたって良い。こいつらだけは・・・守り抜く。それでいいだな？ エコー

そうして、福音戦は終了した。

この気持ちよさだと、この後に来るであろう説教もたいしたこと
もない。はずだった・・・

第44話 勝利（後書き）

葵「どうでしたか、宙様の勇姿は」

宙「やめろ、冗談抜きで恥ずかしいから・・・」

葵「わかりました」

あれ？ いつの間にか俺のセリフがまた・・・ぐはっ

宙「懲りずにまた出てきたようだな。今度はつぶしてやろう」

葵「無意味な殺生はいけません。犯罪ですから」

おお、ここに来てまともな意見が

葵「でも、ごみは違いますので」

なぜ俺の方向を見て言った？ おかしくないか

宙「最後に言い残したい事は」

ええっ！？ ちょっと待って・・・えーっと

宙「遅い」

わかった。待って、待ってくれ

葵「早くしてください。時は金なりです」

俺の命は金よりも軽いのか・・・

宙「落ち込んでいる暇があるのなら早く言え」

・・・明日覆水残響の紹介をします

宙「そうか、ならば死ね」

・・・

宙・葵「せーの、誤字脱字訂正がありましたらよろしくお願いします。次回もお楽しみにしてください」

セカンド・シフト 覆水残響 5月4日追加（前書き）

こんばんはsirasuです。

今日は皆さんにアンケートをしたいと思っています。詳しい内容は後書きで

ではではIS説明どうぞ

セカンド・シフト 覆水残響 5月4日追加

設定

機体名 覆水残響^{ふくすい}

世代 第四世代

形 固定されていた翼がアンロック・ユニットになったこと意外は大きな変化はない。

ただ少しだけ形状や塗装が変わっただけ
両手の肘から先と両足の膝から先が灰色になっている。
腰にあった「七弦」は無くなり代わりにスラスタが付いている。

武装 手持ち武器 「三弦」

背面武器 「大正統」
「赤羽」^{あかばね}

腰部武器 「黒羽」

特殊武装 「四弦」

「七弦武装」 全七種類

機体説明

宙が数え切れない自分の罪をうけいれることで、残響がセカンド・シフトしたIS。また、残響自体が負けず嫌いなため高性能機とな

っている。

このISは前回の残響とは違い、宙の性格に合わせ進化したため近接戦闘において比類なき力を発揮するように出来ている。と言っても、基本的に全距離対応型のバランス型のため一通りの武器を装備している。

独自に進化した特殊な展開装甲を持っている。

武器説明

「三弦」は、進化前の「一弦」と「二弦」の両方の弱点を克服したオーバースペックの銃。しかし、連射するために機体と直接つなげたため連射することは稼働時間に直接影響する。展開装甲により、長剣へと変形することが出来る。

チャージ可能でチャージをすると長時間照射できる。

「赤羽」あかばね

は背面にあるアンロック・ユニットのことを指す。形状は翼をモチーフにしている、通常の状態では一对の翼になっている。独自に進化した特殊な展開装甲を持ち、紅椿の展開装甲の攻撃・マルチロール防御・機動の多機能ではなく、瞬発力・姿勢制御・速度と移動の三種類を特化した展開装甲を持つ。

近接戦闘になると自動的に瞬発力に特化したエネルギー翼を自動的に展開するようになっている。エネルギー翼は「四弦」の攻撃を邪魔しないようになっている。が、外からの攻撃に対しては防御することができ、さらに翼で敵を切ることもできる。

射撃戦の時は姿勢制御に特化した形態へと自動的に変形する。この状態は翼を八方向へと開く。反動制御も可能。

速度に特化すると翼はISと直接つながり後方へと広がる。

「四弦」は両手両足の灰色の展開装甲の部分のことを指す。射撃はすることができないが、手のひらに小さくビームシールドをはる

ことができ、箆手からは攻撃用のビーム刃や実体剣を展開することができる。ただし、実体剣は両腕の肘からしか出ることは無い。この装備は近接戦闘において驚異的な攻撃範囲を持ち、宙の近接戦闘能力を余すことなく発揮できる装備となっている。

展開前は機体の姿勢制御や推力を変更させることができるようになってる。

「七弦武装」は「七弦」が宙の特性を理解し一つ一つが独自に進化した武器を指す。

そのうち一つは両腕の手のひらに装備されている。これは前の切断用のワイヤーとは違い、強度に特化した使用となっている。もちろんB T兵器であり、斬撃タイプ。

追記

「黒羽」は腰部スラスターに装備されている装備。「黒羽」の本文でも説明したように熱を発したり、妨害電波を常に出し続けることができる。しかもそれ自体が爆発物であり、密度もそれなりにあるので防御にも使用できる。

また、福音のように高速で射出することもできるし、任意に移動させることもできるので攻撃にも使用可能。

「七弦武装」の一つであり箆手型の武器。それは左腕と右腕の両方がある。ただし、二つで一つではない。この箆手は「四弦」部分から先を覆うようになっておりビームシールドを箆手からはれることができる。また爪がついている。

さらに追記

「七弦武装」のひとつである大剣は鞘と剣で二つで一つの構成に

なっている。それが二振り装備されていて、黒羽にマウントが可能。剣は普通の武装だが、鞘はBT兵器となっていて四つに分裂可能。二つはガンビット、残りの二つはソードビットへとなる。

「大正 続」名前通りに「大正」の強化版。全ての性能が一段階ほど上がっている。

セカンド・シフト 覆水残響 5月4日追加（後書き）

どーでした？

???の部分はまだ未使用のところですよ。出て来次第書き足していくのでご心配なく。完成していますし・・・

アンケートのことですが・・・急遽オリキャラ募集します！！

えー、理由はこのあとのストーリーの重要な役目を持つキャラを考えていたのですが・・・この際だから皆様のアイデアをいただこうかと考えた所存です。

けっしてめんどくさいと言う理由ではありません。

条件として

日本人以外

専用機はこちらで考えていますので専用機持ちでお願いします

死ぬこともあります・・・たぶん

もち女性で

一年生です。転校生として出します。

過去話や裏話があってもかまいません。こっちでそのまま使います。多少は書き換えると思いますが……。もち、なくても結構ですよ。

以上です。欲張りすぎだと思いますがこれでよろしくお願いします。

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

五月四日 追記

やっと終わった。すいません時間かけすぎてしまって……。本当にすいません。

第45話 臨海学校 終了（前書き）

どーも三巻がやっと終了しました。うれしいですね。

四巻は短めにしてさっさと五巻に行こうと思っています。

ではでは第45話、どうぞ

第45話 臨海学校 終了

第45話

「作戦完了と言いたいところだが・・・宙!」

「はいっ!」

急に自分の名前を呼ばれたので、ついつい条件反射で返事をしてしまう。

俺たちはあのあと、旅館に帰った。帰ったまでは良かったんだ・・・俺たち勝った。勝ったのだが、勝利の余韻すら感じる暇もなく、千冬さんの説教の餌食に・・・逃れるすべはなかった。

「宙、お前がどんなことをしたか、わかっているんだろうな?」

「はい、先生に何も言わず福音の仕返しに行ったことです」

「違う」

正直に言ったはずだが違ったようだ。千冬さんは頭に手を置いている。

「簡単に言うぞ。お前の存在が各国にばれてしまった」

「・・・は?」

俺の存在はIS学園だけの機密で、確か三年生になったら各国に説明をするはずだ。そう先生たちに説明されて俺はこのIS学園に入

った。

あれ？・・・もしかして・・・

「勝手に行ったからですか？」

「ああ、そうだ。お前が勝手に行くから、情報を隠蔽する対応が遅れた。まったく、やってくれたよ」

「すみません」

今日から俺は先生たちに頭が上がらないようだ。それほど教師陣の視線がいたい。

俺の人生・・・＼（＾Ｏ＾）／オワタ うん、こんなことをしている場合じゃないな。

俺はいつたいどうなるんだろうか？ まあ、どの道最悪にめんどくさいのだろうがな・・・orz

「あ、あの、織斑先生。もうそろそろそのへんで・・・。け、けが人もいますし、ね？」

「ふん・・・」

あの怒っている千冬さんに対して、山田先生はおろおろわたたとしている。俺たちが帰ってきてから救急箱やいろいろな治療道具を持ってきていて忙しい人だ。

一夏と俺の傷はほとんどふさがっている。というか、傷跡がない。理由はわからないが、気づいたら俺たちだけだった。

女性陣が治療をするということで、部屋を出る。部屋を出るときに一夏と目が合った。考えていることは同じなようだ。

「織斑先生、心配をかけてしまい、すいませんでした」

と言い残し、部屋を出た。

「ね、ね、結局なんだったの？ 教えてよ」

「・・・ダメ。機密だから」

ただ今夕食中。現在の俺たちの状況は、たくさんの人（もち女です）に囲まれながら事情聴取？ されている。

一番とっつきやすい、シャルルに聞いているが・・・絶対に逆効果だと思う。あれはあれで責任感がある。しかし、一夏の目の前では・・・

うらやましい、ギャップって良いよね♪

そんなことを考えていたのだが、読まれたようだ。あの四人が俺の方向をいっせいに向く。だけど、一つだけ不快感があった。

優だ。さつきから俺のほうをしきりに見てきては、目が合ったかと思うとすぐに視線を戻す。何気に、顔が赤いような気がする。気のせいだと思いたい。

あ、あれは宙だよね？ やっと、やっと・・・戻った。うれしい、本当にうれしい

けど、複雑。先日、付き合う気はないって言ったけど、前言撤回になるわね・・・。

私は宙が好き。今の宙なら・・・

あー、なんだ？ 優が珍しくもだえているぞ。結構気持ち悪い。

「優・・・どした？」

「な、なんでもないわよ」

言葉はいつもどうりだ。いつもどうりなんだが・・・やっぱり不快感がある。

「お前、大丈夫か？」

「わ、私のことより智花の心配したらどうなのよ」

語尾がかなり小さくなっている。普段の優ならありえない、絶対に。ここまで自信がない様子に不快感よりも心配する気持ちのほうが大きくなってしまった。

「本当に？　少し無理しているよな」

「ツツツ！！！」

出来るだけ真剣に優の目を見ながらそう言うと、驚いたように目を見開き、食べかけのご飯を前にごちそうさまでした、と言い捨てるようにに退室した。

「どうしたんだ？」

優の行動が不思議でたまらないので、そう呟いてしまった。すると、周りにいた女子が何かを哀れむようにため息をつく。

その意味もわからないので、無心に夕食を食べることにした。

「こんなところにいたのか」

防波堤の上に優が座っていた。俺は優の行動が気になり、会おうと部屋を訪れたのだが、ときすでに遅く。部屋にはいなかった。だから、ルームメイトである皆さんにどこに言ったの聞いたところ、誰も知らないわけで・・・結局探さすことになったのだが、偶然窓の外を見たら人影があった。

もちろん、優だって言う確定したわけではなかったが、そこは俺の第六感が発動し行くことになった。そしたら、案の定いるではないか。

「え、え？」

「何うろたえているんだよ？ 気持ち悪いぞ」

ブオン 無言で放たれる拳、狙いは俺のあごだ。まあ、そんなに早くはないので簡単に避けることができた。

「何言ってんのよっ！！」

「おお、戻ったか。よかった、よかった。じゃあな」

うん、やっぱり優はこうでないと、なんか調子が狂うんだよね。

優の調子が戻ったら特に用もないので早々と退散することにする。

「待ちなさい」

いつもの優とはかけ離れた真剣じみた声。まどっている雰囲気もいつもの明るい雰囲気とは違い、真剣じみている。

「殺る気か？」

思わずファイティングポーズをとった。

「なんでよ！ なんでそんな物騒な漢字を使っているのよ！」

「おお！ まさか漢字を聞き分けるとはね、すごいな」

とりあえず、構えを解く。本気で殺る気はないようだ。

「少しだけ、話があるから」

「そうか、わかったよ。で、なんだ？」

「宙、あんた戻ったわよね」

「ん？」

まったく心当たりがないお話だったので。あいまいな返事しか出来なかった。

「自覚してないの？」

「自覚もなにも、何の話だ？ わけのわからないことばかり話すんだったら帰るぞ」

なんのことだ？ 本当におかしくなったのか？

「やっぱり、気づいていないんだね。・・・宙は私が知っている宙に戻ったのよ」

「それでも意味が・・・」

優の目は真剣なままで、決して嘘をついているようには見えない。だから聞くことにしたのだが・・・

「あんたにはわからないわよ」

「そうか、そうなのか。じゃあな」

あんまりにも拍子抜けすぎた答えだったのであきれてしまい、帰る

ことにした。善は急げだ、素早く方向を変えて走る準備をする。

よい、ド「だから待ちなさい」・・・ん？

「今度は何？」

俺の浴衣の袖を片手で引っ張っている。その引っ張っている手は白くなるまで力を入れている。振り返って優の顔を見てみると、妙に顔が赤い。耳まで真っ赤になっている。そして、俺の浴衣をつかんでいないほうの手は自分の浴衣を握り締めていた。

「・・・待って」

まるで絞り出したかのような声でそう言った。普段の優なら考えられないほど元気がない声だ。

「あたしは・・・」

「・・・」

そんな、か細い声に俺は言葉を失ってしまう。もう、どうしていいかわからない。それほど、優は真剣だった。

お互いが黙り始めて数分がたった。優は顔を伏せている。この雰囲気の中、最初に切り出したのは優だった。

「あ、あんたのことが好「しー」・・・へ？」

なにやら決定的な言葉を言おうとしていたが、口到人差し指をつけ黙らせる。なぜかと言うと・・・

「三人とも出来れば穏便に済ませたいので、さっさと出てこい。もし、出てこないのなら・・・実力行使？」

拳を握ってハーと息を吹きかける。そして、出来る限りの笑顔で三人が隠れている方向を向いた。

「毎回思うのだが、どうしてわかるんだ？」

「さすがです」

「だから言ったよね、絶対見つかるって」

いやいや、しぶしぶのような各々で違う反応をしながら出てきた。優は固まっている。

普段の勘が鋭いこいつなら、わかっていると思ったんだけどな。

「で、何しに来たの？」

「ふむ、いい質問だ。そこにいる嘘吐きを捕まえるためかな？」

絶対盗み聞きだったよね

「ラウラ、嘘吐きなら目の前にいるぞ」

「どこだ？」

完璧にスルーされた。たぶんだけど、大真面目に……。その様子を見ていた智花たちは苦笑する。だが、すぐにその苦笑は消える。

波の音が大きく聞こえるほどあたりが静まり、俺に視線が集まる。

おいおい、この空気をどうかしろと？・・・まあ、いいか

「ラウラ」

「なんだ」

実にラウラらしい返事だった。俺が戻ってきたときに泣きじゃくっていたやつがセリフじゃない。だから・・・

「へえー、そらあ、そらあ、と泣きじゃくっていたやつが、こんなにもなんでもない顔をするんだ」

「う、ううううるさい」

からかってみたところ、恥ずかしいのか顔を真っ赤にしてうろたえる。

「冗談だよ・・・それよりも俺は見つけたぞ、力とは何かをな。お前もすぐに見つけることが出来るはずだ。お前は俺よりも優秀だからな。」

おもいっきり殴られそうになったが、俺の顔を見るとまた恥ずかしそうに目をそらす。そんな姿がとても可愛い。

「くくくつ、はははははははは」

思わず笑ってしまった。それに続いてみんなも笑い出す。ラウラはどうしていいのかわからない表情をしている。種明かしをするのも

もったいなかったので、星空の下で笑い続けた。

翌朝。朝食を食べた後、ISおよび専用装備の撤収作業に当たる。その作業が終了したとき時間は十時を過ぎていた。その後、バスに乗り込みIS学園へ帰る。

「あゝ・・・」

「さっきからどうしたんだ？ 一夏。朝も元気なかったし・・・」

「な、なんでもない。ははは・・・」

百人に聞いても百人が俺を同じ事を考えるだろう。それほど、元気がない。口からは魂が少しだけ出ている。

「すまん・・・誰か、飲み物を持ってないか・・・？」

「俺は持っていない」

旅館で腹いっぱいお茶をいただいたので昼あたりまで待つだろう、と思ったので買ってこなかった。その後も一夏は他のメンバーに聞くが、撃沈。

「宙、こっちを向け。他の女を見ることは許さん」

「さいですか」

後少しでも気を抜いたらA I Cで拘束される勢いだった。こめかみがぴくぴくしている。

ちなみに、昨日俺はラウラに嫁ではなく名前で呼ぶように約束をした。本人曰く、かなりいやいやに約束をしたらしい。

顔を真っ赤にしていたからよほど嫌だったんだろうな

余談だが、ラウラは宙と指きりができると言うことで承諾した。もちろん、顔が赤くなっているのもそこからだ。

「ねえ、織斑一夏君と神代宙君はいるかしら」

俺と一夏の名前が呼ばれる。聞いたことのない声に多少は緊張するが、声の主を見るとなんとなく危険ではないことがわかった。

「あ、はい。俺ですけど」

「ん？ ああ、俺のことです」

「君たちがそうなんだ。へえ」

青いカジュアルなスーツを着た金髪の美女は俺たちの顔を覗き込むようにしていった。たぶん、好奇心だと思う。世界で唯一I Sを使える男だし、俺にいたっては昨日今日で世界中に広まった二人目だから。

ふと、鼻先を掠める柑橘系のコロンの香りがする。とても良い匂

いだ。

「あ、あの、あなたは・・・？」

「あー、なにかようですか？」

「私はナターシャ・ファイルス。『銀の福音』の操縦者よ」

「えー」

「あなたがですか・・・」

予想外の言葉だったか一夏が混乱している。ちなみに俺のほうはなんとなくわかっていた。全体の雰囲気から俺が昨日抱きとめた体に似ていたからだ。

「これはお礼。ありがとう、白いナイトに黒のナイトさん」

「え、あ、う・・・？」

「いいえ、どうもいたしまして」

どうやら、昨日の一件のことや自分の好奇心だけでここに足を運んできたようだ。律儀に挨拶をしてくるといふことは悪い人ではないらしい。

「じゃあ、またね。バイ」

「さようなら」

「は、ああ・・・」

未だに事態を理解していないのか、一夏は気の抜けた返事をする。そんな気の抜けた返事をして手だけは振っている。

急に悪寒が体全体を駆け抜けた。たぶん、ラウラだ。それと・・・
一夏の一行かな？

「宙、何をしているんだ？」

「ラウラ、何でそんなに怒っているんだよ」

「私は怒っていないぞ」

ラウラは嘘つきだな、怒りマークが出ているぞ

「別にいいじゃないか、お前はもっと良い事しているだろ？ それ
とも、俺からのほうが良いのか？」

「・・・・・・・・」

固まった。俺の作戦勝ちである。こういうことに弱いラウラは簡単に無力化が出来る。そういう意味では一番手のかからない子だ。しかし、一つだけ問題があって・・・この状態から戻ると妙に積極的になることだ。

ま、簡単に言うとは諸刃の剣だな

こうして俺は何とかトラブルを避けることが出来た。後回しにした
だけだが・・・

一夏の方は、四人組に追いかけられている。ざまあww、と俺は
哀れみの視線を一夏に向け、臨海学校の幕は閉じた。

第45話 臨海学校 終了（後書き）

どーでした？

オリキャラの募集の件ですが、昨日ものすごくすばらしい意見が出たので終了とさせていただきます。

皆様ありがとうございました。

宙「まあ、この辺はいいとして出番すくねえか」

あなたが一番多いから良いでしょ。まだ出ていない人いっぱいいるし

宙「そうだな」

おお、素直だねゲフツ

宙「気持ち悪い」

すガハッ

宙「喋るな」

・・・

宙「よし、それでいい。誤字脱字訂正があったら頼む。次回もお楽しみに」

第46話 夏休み（前書き）

どもsirasuです。

やっと四巻にきました。今回は五話ぐらいで四巻を終えたいと思います。

では、第46話どうぞ

第46話 夏休み

第46話

自分の人指し指についている指輪を眺めている。この指輪は智花が修学旅行から帰って来たときにもらったものだ。もちろん、葵や優、ラウラも貰っている。智花は福音に勝った記念とか言っていたが、水着を買いに行ったときに買っていったものだろう。

・・・だとしたら、本当は何のために買ったんだろうか？

気になったので理由を考えようとしたが・・・

「あつい」

暑さに耐え切れず思考を停止した。俺は今リビングのフローリングの上で寝転がっている。格好は短パンに白のタンクトップを着ている。

八月は夏休みでほとんどの生徒が故郷に帰るので俺も家に帰ったのだが、運が悪くクーラーが故障していた。（小説なので地球温暖化はない）今はまだ朝なので昼のいことを考えると憂鬱になる。ニュースによるとこの夏は例年よりはるかに暑くなるらしい。それも憂鬱になっている要素のひとつだ。

妹の部屋のクーラーは故障はしていないが、香は二学期から登校するらしいので勉強中、よって部屋に行くにも行けない。

学校の寮ならただでクーラーが使えるが、ようもないのに寮に居続けるのは禁止されているので、できなかった。ちなみに一夏は家に誰もいないことから免除されている。

「何しようかな？」

今、やることなく暇をもてあましているところだ。宿題をしようにしても俺の性格上、最初にやって遊ぶほうなので、一日目で終わらせてしまった。宿題を先に済ませてしまうとこういうときに何をして良いのかわからなくなる。テレビを見てもアニメや夏休み特番が多く見ていてつまらない。もともとテレビはあまり見るほうじゃないのでなおさらだ。

「あつい」

本当に何もすることがない。あまり家のことを気にかけていなかったから何があるのかも把握していないのでどこから手をつけていいのかわからない。部屋の片づけをしても良いのだが・・・何もない小、中学校であんなことをしていたので趣味はなく、何も買っていなかったのであるのはISの参考書ぐらいのもんだ。状況で言えば部屋の中は机とベッドと本棚があり机の上に電話帳みたいな参考書があるだけ。高校入学のために使っていた参考書は香にあげたので本当に何もない。

そういえば、一夏たちと昔ゲームしたな・・・

「・・・ゲームでも買いに行くか」

なんとなくゲームを買いに行こうと思い、すぐに用意をする。薄い青のカッターシャツに腕を通して、短パンをジーンパンに履き替えて香に行く場所を伝えた。

着いた。いつものことなので気にしないでくれ。もちろん「レゾナンス」だ。ここは俺の知っている限りなんでもそろっているから。

「レゾナンス」の入り口付近にあった案内板でゲームショップの場所をチェックする。その案内板に書いてあるとおりなら二階にあるらしい。エスカレーターを使い、二階に行き、探す。目的の場所はわりと簡単に見つけることができた。

俺の家になんかハードあったっけ？

そんな考えが浮かんだ。香はゲームをしないし、ましてや共働きの両親がやるはずもない。ハードから買うことになりそうだ。なので財布の中身を確認する、結構な額が入っていたので心配することはなかった。

いざ、ゲームショップに行ってみるとあまりの種類の多さに物怖じしてしまった。

「やべ、ネットで事前に調べとけばよかった」

いかん。最近のゲームについてのことがまったくわからない。何が人気なのかどれが面白いのとか……。さすがに俺だってドラクエやFFのことは知っている。だが俺の目の前に並んであるゲームは知らなかった。と言うか全部同じに見えてきた。

色の多さに目がちかちかしてきたので、こめかみを押さえていると・・・

「そ、宙？」

『コア・ネットワーク』って役に立つわね。専用機を持ってから

知ったけど、こんなにも簡単のわかるなんて……。

優は『コア・ネットワーク』……コア同士が特殊な情報網でつながっているシステムのこと。詳細な場所の情報はお互いが登録する必要があるが、ある程度の場所は特定できるようになっている。

宙はこのことを知らないからステルス潜伏モードにもしていないし……ラッキーってやつね

「そ、宙？」

「んあ？」

どこからか俺の知っている声が聞こえてくる。最近こんなことが多い気がしないでおこう。

「宙じゃない、どうしたの？」

棚の隙間から声の主を窺う。……優だ。

「優、どうしてこんなところにいるんだ？」

「それはあたしのセリフよ。アンタのほうこそなんでこんなところにいるのよ」

「ゲームを買いに？」

「なんで疑問系なの？」

「お前もだろ？」

「また疑問系だけど」

これ以上話をしててもこの調子はかわらなそうだったので、話を変える。

「それはいいとして、質問していいか？」

「まあ、いいけど・・・何？」

「オススメはあるか？」

「はあ？」

わ、分かっているさ、言いたいことぐらいわかるさ。ゲーム屋に来てオススメはあるかと漠然に聞いてもしかたがないことぐらい。でもそれ以上に頼りたい気持ち分かってくれよ・・・

「ゲームが欲しいんだけどさ、良いのないかな？」

「私も始めてきたんだけど・・・」

ええっ？ 衝撃の事実が判明！！ 優も初めてだった。

「おい、へんな期待させてんじゃねーぞ」

「アンタが勝手に期待したんでしょうが」

「どうしたら良いんだよっ!!」

「知らないわよっ!!」

俺たちがけんかをしていると男性の店員が話しかけてきた。

「あ、あの・・・お客様？ 店内ではお静かに・・・」

注意された。「すみません」と二人で謝り肩を落とす。さらに買いにくくなってしまった。

「ゲームのことについてなんか教えてくれないか？」

腹をくくり何でも良いので情報を聞ことにした。

「良いわよ」

「ありがと・・・それで？」

「マ●才は赤よ」

「うん。誰でも知っている情報だな。でもそうじゃなくて、最近のゲームを教えて欲しいんだけど。それか売れたゲーム」

「最近のゲームは知らないけど、売れたゲームなら知っているわよ・
・ポ●モン」

「大雑把な答えだね。・・・俺の質問が悪いのかな？」

優の性格上この手のお話は結構まじめだ。まじめだからこそ、ツツコミにくい。

「もうお前から聞くのやめるわ・・・アクションゲームってどこにあるんだ？」

「ああ、あのどこからがそのゲームか分からない大雑把な種類のゲームね、こっちよ」

同感だった。FPSでもアクションゲームだし、横スクロールアクションでも同じ。

別け方が大雑把過ぎるんだよね

「ありがとうございます」

優についていき、到着。陳列させられたゲームの種類の多さに頭がまた痛くなる。

「どれがいいのかな？」

「現実が一番良いんじゃない」

素でこんなことを言ってきましたこの娘は・・・リアルでボッコボコにしろとでも？ それでも、俺を元に戻した張本人ですか？

「ゲームを選ぶときって何を基準にしているんだろうな？」

「売れているやつじゃないの？」

「俺たち知らないよね？」

「・・・・・・・・」

ゲームを買いに來ただけだったが、先が長くなりそうだ。

第46話 夏休み（後書き）

どーでした？

今日の投稿はこれで終わりにしたいと思います。

と言いますか緋弾のアリアのほうを始めたのでそっちのほうを投稿しようかな〜と思っています。

まあ、まだ本遍じゃないですけどね・・・

今回はキャラの出番はなしです。殴られたくないし・・・

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第47話 ゲームトーク（前書き）

（ノ。D。）こんばんわ s i r a s u です。

現在着々と古いやつを書き換えています。今は三話ぐらいかな？

ではでは第47話、どうぞ

第47話 ゲームトーク

第47話

前回のお話

宙はゲームを買いに来た。理由はなんとなくだ。そこで優と出会った。宙は優にオススメのゲームを聞くが優は知らなかったらしい。心の奥底で何でお前はいるんだ？ とか何とか思いながらも買い物をする二人だった。

「売れ筋のゲームって何が違うんだろうな」

「広告料だと思うけど」

「その答えってありか？」

「私に聞かれても困るんだけど」

「そうだよな」

優が答え切れなくても仕方のないことだろう。俺は優どころか智花、葵そしてラウラの趣味を知らない。何でこの四人がたとえに出たかと言うと、なんとなくだ。

まあ、ラウラにいたっては軍人だから・・・恐ろしくやばい趣味があるはずだ。

「ないぞ、そんなものは」

「うおっ!!」

突然俺の隣からラウラの声が聞こえた。視線をその方向へ向かせる
と案の定ラウラがいる。

ふう、びっくりしたな。てかこいつ人の考えていることを読んだ
のか？

「私は人の考えなんて読めないぞ」

「いやいやいや、読めてるじゃないか」

「考えていることは同じとはな・・・相思相愛、か」

「なんかこの前もこんなことあったけどさ、違うから」

なんとなくデジャブを感じた。いや、実際デジャブではない。確かに
あったはず・・・

「そんなことよりも、ラウラ一体いつ近づいたんだ？」

「ふっ、お前が他の女に気を取られているときだ」

「さいですか」

あの忌々しい嘘つき女が怪しいと思って着いて来て見れば、宙と密会しているではないか。まったく、宙も私というものがありながら・・・まあ、いいか。宿題をせずに宙といえるのも悪くはない

余計な詮索をしないほうが良いだろう。ラウラのこめかみには怒りマークが出ている、最近はめっちゃくちゃこのマークをよく見てきた。この現象はあまりよろしくないなので回避することにする。

しかし、黙っていててもこの状況（なんのゲームを買うか）は良くはならないこともわかっていた。よって、腹をくくり聞いてみる。

「ラウラ、オススメのゲームはないか」

「ない」

腹をくくって聞いたはずなのだが、返ってきた返事はまさかの「ない」の二文字だけだった。この調子でいくと・・・決まらない気がする。たぶん、いや絶対決まらない。

「どうしようか」

「さあな」

「ゲームを買わないといけないわけなの？」

「うーん、難しい質問だな。暇だから買おうとしていたんだけど・・・」

「暇だからって・・・宿題は？」

「終わった」

「はあっ!？」

「それは本当かつ!？」

「ほ、本当だから。落ち着けよ、お前ら」

二人が食いかかって来たので、手のひらをかざして落ち着かせる。ちなみにIS学園の宿題は大量にあった。千冬さん本人が直々に出すと言うことで本当にたくさんだ。女子が数人涙目になっていたのは余談だ。寮を具体的に説明すると・・・あのISの参考書（電話帳）が薄く見えるぐらいだ。最後に一言、答えがない。

本当にあれは、鬼のようにあったな・・・やってもやっても減らない感じがしたんだよね

「写させなさい!!」

「写させろ!!」

「無理だ。俺が殺される」

絶対聞いてくるだろうと思いましたよ、はい。どんなにお願いさ

れても無理だ。俺はまだ死ねない。

俺の言葉に二人は千冬さんの言葉を思い出したのか、黙り込んだ。

この様子を見てみると、どんだけ恐怖で縛っているのかがわかるな

「んじゃ、ここにいても無駄だな。どっかに行こうぜ」

「そうね」

「ああ」

そうしてゲーム屋の出口をくぐった。けど、どうしてもゲームが欲しい。なんとなくだが、俺が欲している。確かに読書も悪くわないが体が固まりそうだ。

どうすっかな、ホント・・・・・・・・あつ、店員！！

超高速で切り返す。その切り返しにラウラと優はついていくことができずに置いていかれた。

俺は再度店の中に入り、レジへと進む。そこに店員はいなかったので呼んでみた。

「少し待ってください」

ここであせっても仕方がないので待つ。すると、ラウラと優が遅れてやってきた。

「どうしたの」

「どうしたんだ」

「店員のことを忘れていたから、最後の頼みかな」

遅れてきた二人のほうへ振り返り、顔を見ながらそういった。

「あ」

店員はぬけた声を出した。二人の顔を見ているので店員の顔が見れないが、ラウラと優の表情が面白いことになっているので振り向いた。

「あ」

「あ」

「あ」

「宙様!？」

『葵!？』

ちなみに俺、優、ラウラ、葵、三人の順番だ。レジの中にいたのは俺の犬?（認めていないが）の葵だった。格好はこの店のロゴが入っているエプロンをつけている。

「バイトか？」

「はい」

「どうした? 買いたいものがあるのか?」

「これのお返しをですね」

「ああ」

葵は手の甲をむけて指輪を見せた。智花から貰った指輪だった。この場にいる全員が持っている指輪。

お返しは良いと本人は言っていたが、葵の性格上許せなかったようだ。ちなみに（さっきから多いな）俺はこういう場合、黙って従うほうだ。なぜなら、そっちのほうが相手に気を遣わせずにすむと言う理由だからだ。

「お前らしいな」

「そうですか」

本人は意識していないようだが、ほんのりと頬が赤くなっている。それはとても新鮮な光景で少しだけ驚いてしまった。

「・・・お前もそんな表情するんだな」

「今なんとおしゃいましたか？」

「いや、なんでもない。それよりなんか良いゲームないか」

「ありません」

・・・あれ？ 確か店員だよね？ どうしてそんな言葉が出るのかな？

「ホントに？」

「私はゲーム自体オススメしませんので」

「ええっ!？　ここゲームショップだよな？　仮にもその店員だろ」

「仮ではありません。れっきとした店員です」

胸を張りそう答える葵。その胸にはきらりと光るネームプレートがあった。そこには白石という名前が書かれている。

うーん。これは・・・

「用件はそれだけでしょうか？」

「それだけなんだけど・・・」

「そうですか、それでは失礼します。宿題がありますので」

『仕事しろよ』

さっきから空気だった二人と声が重なる。そりゃそうだろう。宿題しているだけで金がもらえるのはかなりおかしいだろう。

そういや、俺って人の事言えないよな・・・

今の財布の中の金もパクツた金だ。一応合法なんだと思っている。異論はみとめない。

「葵、何でも良いから教えてくれないか」

「わかりました。何を教えて欲しいですか」

「神ゲーって何？」

「一部の熱狂的信者による過剰な持ち上げですね」

「パクってるよね、そのセリフ」

「この話自体「ダメだ、それ以上はダメ」・・・わかりました」

「じゃあ、今一番売れているゲームを教えてください」

「白騎士物語ですね」

「ん？ 伏字にしなくて良いの？」

「なんのことですか」

なんとなくいけない気がする・・・

名前を聞いたときなぜか著作権と言う単語が頭に出てきた。どう反応して良いのかわからないので一応聞いてみる。

「このゲームはですね、あの白騎士のお話を題材にしたゲームです。ミサイルを打ち落としていたりするゲームです」

「ほっ 良かった」

「何が良かったのですか」

「こっちの話だ」

白騎士事件の白騎士だった。世界にあるミサイル発射施設が同時にハッキングされ日本に向かって撃たれ、それを世界最初のIS白騎士により半数以上を打ち落とした事件だ。その後も死者を一人も出さずに世界中の戦艦や戦闘機を壊滅させた。俺の両親はその事件のせいで死んでいる。

まあ、犯人は捕まっていないけどさ・・・どうでもいいか。今は・・・

目の前にいる三人を見る。これに智花を足した四人を守ると決めた。

犯人のことよりも四人を守ることが先決だな

買い物の途中でまた覚悟を決める宙だった。買い物はまだ続きそう
だ。

第47話 ゲームトーク（後書き）

今回のお話は完璧なネタでして・・・

このネタがわかる人はなかなか私と気が合いますねゝ 無視しても
かまいませんよ

もうそろ記念として何か書こうかなと思っています。

誤字脱字訂正などありましたらゴハッ

宙「俺の出番を消すきか？」

ごめんね、忘れてた・・・まじで

宙「そうか、そうか。・・・許されると思うなよ。これが終わった
ら殺す

誤字脱字訂正などがあつたら夜露死苦」

何か古いね・・・

宙「さて、ショータイムだ」

ぎゃーーーーー

第48話 買い物後（前書き）

（ノ。Д。）こんばんわ sirasuです。

毎回思うのですがsirasuと英語で書くのめんどくせえ

やめませんけどねww

ではでは第48話、どうぞ

第48話 買い物後

第48話

一番売れていると言う「白●土物語」（なんとなく伏字にしてみました）
by sirasu）をハードごと買い、今は食品売り場に
来ている。ゲームを買った後、時計を確認してみれば昼になりそう
な時間帯だった。おなかもへってきたので丁度いいと思い、何か安
いものがないかと来てみたのだが・・・

「何でついて来てるんだ？」

「まあ、いいじゃない」

「気にするな、このままお前のお世話になろう・・・と」

「宙様、手伝いますので」

別にご馳走してもいいのだが・・・

「葵、おまえバイトは？」

「終わらせてきました」

「ええー」

「嫌ですか？」

「いや、別にいいんだけど・・・なあ」

本当に別にいいのだが、そのときのやりとりが・・・

『店長、今からバイトやめますので働いた分だけください。確か自給千円でしたよね』

『ええっ！？ 急にどうしたの？ そんなに勝手に決められて困るよ』

『早く渡しなさい』

と、まあ、こんな感じのやりとりがあったのだ。

はたから見ると・・・恐喝にしか見えなかったのだが・・・

店長の初老の男性がしぶしぶと給料を渡していた様子は本当にかわいそうだった。

そして買い物を再開した。

「おっ安いな」

手にしたのは、マグロの赤身のブロックだった。丁度タイムセールスで安くなっていたので、今日の昼飯には適していた。

漬け丼かな？ 今日の昼飯は

白いご飯の上に醤油漬けたマグロをのせて、さらにすりおろした長芋を最後にのせて完成。想像しただけでうまそうだったので決めた。

マグロの赤身を人数分買い物籠の中にいれ長芋を探す。わりと簡単に見つけることができたので値段もみずに買い物籠に入れる。

こういう時はお金があるとかないとか関係なく、欲しいものがあったら欲しいときに買うのが、俺のモットーだ。

時期を逃すと逆に買いづらくなるから・・・それよりも、バイトしようかな

いくら俺でも無断で拝借したお金（またはパクった金とも言う）ばっかり使っているのも気が引けてきたので、少しぐらい稼いでみたい気持ちもある。

俺たちはその後、家に帰り昼ごはんを作った。勉強中だった香も含めてテーブルを囲んだ。

漬け丼は簡単にできるので、一人で作った。長芋をすりおろしたせいで手がかゆい。

「うわ、何だこのねばねばしたものは？」

ラウラが初めて長芋を見て言った言葉だ。確かにドイツに長芋があるとは思えなかったが、その驚いている様子は普段のラウラから想

像することができない。

「ふふふ」

その初めて見せるラウラの表情に頬が緩んでしまう。

「宙、どうして笑った？」

「いや、まあ、な」

ラウラに問い詰められてが、できるだけ穏便に受け流した。理由は第六感だけが知っている。

「どうして笑ったんだと聞いているのだ」

前言撤回、受け流せなかった。

「いいじゃないか、別に。それよりも早く食べろよ」

「良くないから言っているんだ」

「言わないといけないのか」

「ああ、そうだな。夫婦に隠し事はないはずだろう」

ガンッ テーブルの下で俺の脚を香が踏み潰す。

やめてくれ、イタイ・・・

視線で香に抗議を飛ばすが、聞いてくれないようだ。凍りつかせる

ようににらみつけている。

「なあ夫婦って言うのやめないか、ラウラ。・・・ちょっと危険なんだよ俺が」

「私とお前が結婚するのは時間の問題だろ？ 別に早くなっただけじゃないか」

ゴキッ さらにテーブル・・・水面下での攻撃が強くなる。足が碎けそうだ。

「香、すまん。やめてくれ」

「嫌です」

あまりの痛さに香に直接抗議をしたが完全否定された。

「ラウラ、本当にやめてくれ。別にいいじゃないか、そう言わないと結婚できないわけじゃあるまいし」

「ふむ、確かにその通りだが・・・まあ、いいだろう。その代わり言うこと一つだけ聞いてもらうからな」

ゴッ 足にきていた攻撃が腹に来る。香の左腕がわき腹にくいこむ。・・・イタイ。

「やめてくれ、本当に」

「ふふふ、お兄ちゃんたら。ふふふ・・・」

そういった香は初めて見せるような恐ろしい表情だった。

なんかこの夏は初めての一面を見ることが多いな。・・・ひどいことにしかなかったがな。

こうして俺の昼ご飯は頭を抱えるような問題が多発した。と言うか何か失うものが多かったような気がしてたまらない。

全員が昼ご飯を食べたところで後片付けをする。もちろん俺一人で・・・。

後ろから「いい主夫になるよね」とか何とか聞こえてきたが、気にしない気にしない。気にしたら負けだ。そして、食器を洗った後テーブルで談笑をする。本当に楽しい、そう思える。

ああ、こんな時間がいつまでも続いたら良いな

と考えていたらいつの間にか寝ていた。

「ねえ、香ちゃん。宙君はいつもこの調子なの？」

「寝ていることですか」

「うん、そうね」

「お兄ちゃんはこの調子ですよ。けど、久しぶりですね」

「そうなんだ」

優は宙がみんなの前で寝ていることがとてもうれしかったので今日に聞いてみた。

安心して寝ていることにその場にいる全員が寝顔を見てしまう。

「可愛いですよね、宙様は」

「ああ、かわいいな」

葵の問いにラウラが答える。無邪気と言うか、なんというか宙の寝顔は屈託のない表情をしていた。

「・・・お兄ちゃんを戻してくれて、ありがとうございます」

唐突に香が頭を下げる。

「また、あのお兄ちゃんを見れるとは思っていませんでした。本当にありがとうございます」

「いや、私たちは何もしてないわよ。宙は一人で戻ったの」

宙が変わった・・・戻ったのは福音戦のとき、正確に言えば海中から出てきたときからだ。その変化に気が付いているのは優をはじめ千冬そして香だけだ。

「どこが戻ったんですか」

「意味がわからないな」

「はい、目です。目にあのかのときの輝きが戻ったんですよ」

ラウラと葵の質問にうれしそうに答える香。そう、宙の目は輝きを取り戻した。誰でも幼い頃に一度は見せている輝き、何かに興味を持ったときや真剣になっているときに見せる輝き。今までの宙はそれがなかったのだ。

二人は香の答えの意味は分からなかった。しかし・・・

（そうですか・・・それで宙様は優しくなっていたのですね）

（そうか、気が付かなかった・・・いや、気が付くはずもないか。けど、それが強さなのか？・・・まだわからないな）

心のどこかでは宙の変化に気が付いていた。それをうれしく思っていたのだ。

「皆さんもお兄ちゃんのこと好きなんですね」

その様子を見た香の一言だった。その言葉には純粋な気持ちがかもっていた。

「今の宙ならね。あの時は嫌いよ」

「私に宙様はまぶしすぎます。ですが・・・好きです」

「好きだ。大好きだぞ」

『ふふふ・・・あははははは』

四人はいっせいに笑い出す。全員が本気だった。目を見ればわかる。

「負けません。お兄ちゃんは私が」

「私だって・・・二度とあのようににはさせないから」

「私はこのお方のそばに入れば良いんです。ですので邪魔はさせません」

「宙は私の嫁だ。絶対に渡さん」

こうして四人は結束を固めた。それぞれの胸に共通の目標を掲げて・

「んあ・・・」

あれ？ 俺寝ていたのか・・・どれくらい寝ていたのかな

目の前では四人が仲良く談笑していた。

プルルルルル・・・

四人が談笑していたとき、不意にかかってきた電話

「俺か・・・」

そう言いながら机に突っ伏していた体を起こし、携帯電話の通話ボタンを押す。

「もしもし」

『もしもし、山田ですけど』

「山田先生、何かようですか」

『すいません、明日学園にきてください。性能の調査を行わないといけないので・・・』

「そうなんですか、わかりました」

『あ、それと・・・新しく専用機を貰った三人にも声をかけてくれませんか』

「はい、わかりました」

プツツと切れた電話。寝ぼけ気味だったので口調が少しおかしかった。まだ、頭がよく働いていないが先生に言われたことをそのまま告げる。

「明日学園にいくぞ。ISの性能の調査らしい」

第48話 買い物後（後書き）

どーでした？

そう言えば前に言っていたテーマの件ですが四巻は以前に言ったので五巻のテーマを発表します。

題して『始動』です。

何が始動するのかは想像してください。結構ですよ。かなりのネタバレですね。

今回はキャラのやつ休止です。なんとなくね・・・手抜きではないですよ。ネタがないだけです。

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

番外編＋新キャラ・新IS紹介（前書き）

こんにちは sirasuです。

今回は

PV

ユニーク

539, 446アクセス 48, 006人の記念です。

完全にノリで書いたので読みにくいと思います。すいません。

では番外編、どうぞ

番外編＋新キャラ・新IS紹介

こんにちは、記念として番外編にしたいと思います。

まずは、新キャラと新ISを発表します。

そのまえに笑衛様、すばらしいキャラを考えていただき本当にありがとうございます。では発表します。

名前 アリシア・ベルリオーズ カナダ代表候補

特徴 薄氷の目 ブロンドのストレート

性格 気さくだが質実剛健で歯に衣着せぬ物言が多く、強者には賞賛を送り弱気には地味に呆れながらもなんだかんだいって援助するタイプの姉御肌。そのせいか同姓によくもてる。当の本人にユリの気はない。

専用機 アバランシュ

世代 第三世代

特徴 カナダの第二世代の装甲を使っているので見た目は第二世代

武装 銃剣「メルト」

複合型シールド「ダウン」

機体説明

特徴的なのは イフリート a f r i t s y s t e m を搭載していること。このシステムは第二世代の装甲の下に隠されている特殊な合金でできた I S を加熱するシステム。そのためこのシステムを使う場合一回装甲をパージしなければならない。しかし、装甲をはずしたぶんだけ軽くなり機動力は上がる。このシステム起動時にはありとあらゆる実弾兵器を無力化し、熱量を主としたビーム兵器でも無力化できる。そして合金自体を武器と化す。

武装は二つと少ないがシステム使用時に圧倒的な機動力と攻撃力を有する最も完成に近い第三世代となっている。欠点と言えばシステムを長時間使用するとパイロットに負担がかかること。現在はアリシアが乗るのでその欠点もほぼなくなっている状況である。

武器説明

「メルト」銃剣。長い銃身を持つライフルの下に刃がつけられている。実弾を使用するタイプ。これにも特殊な合金が使われておりシステム使用時には色が変わる。

「ダウン」複合型シールドで攻撃用のクローが装備されているシールド。

めちやくちや地震の地域の人には迷惑なネーミングですね……。機体案はかなりの数を考えていたのでカナダの代表候補ということでしたんですが、時と場が悪いような……

だってメルトダウンって……

さてこれより番外編入ります。文字数かせいですいませんでした。

題して『○○にとって●●とは!!』

さあ、始まりました。司会進行を勤めさせていただく神です。

宙「神様ね」

智花「へえ、そうなんだ」

優「信じちゃダメよ。あれは頭がおかしい人なんだから」

葵「そこが智花様のいいところですけどね」

ラウラ「神などいない」

何か宙の一行は個性的過ぎますね、特に最後のはちょっと・・・。
さて、一夏の方は？

一夏「神様がいるぞ!!」

箒「馬鹿がいるぞ」

鈴「馬鹿ね」

セシリア「馬鹿ですわね」

シャルロット「・・・馬鹿」

シャルロットが頭を押さえています。かなりきついですね一夏君。
俺のせいなんですけどねww
さて、本題に入ります。

『一夏にとってあの一行とは？』

一夏「一行って誰だ？」

それはこの作品の中で作者が勝手につけている集合名詞ですよ。
箒、鈴、セシリア、シャルロットのことですね。

一夏「そうか、そうなのか・・・んじゃ、言うぞ」

一行「・・・ゴクリ」

一夏「仲間だな」

普通に予想範囲ですね。向こうで肩を落としている皆さんもかなりシニールです。さて続いて一夏君に・・・

『一夏にとって一行の好きなところは？』

一夏君には一人ひとり好きなところを言ってもらいます「ちょっと、こい」

ずるずると自称神が宙にひきづられて何かの陰に入った。

宙「おい、このままいくと俺たちの出番がなくなるじゃねえか」

まあまあ、普段はあなたたちのほうが目立つからいいじゃないですか

宙「俺の言うことが聞けないのか」

すいませんでした。だからその殺気をちょっと抑えて抑えて、そして物騒なものをしまつて……で、何をすればいいんですか？

宙「ゴニョゴニョ」

わかりました。

ということで戻ってきた自称神は続ける。

すいません。質問を変えます。

『一夏にとって一行の関係は？』

箒、鈴、セシリア、シャルロットの順でお願いします。

一夏「そうだな……ファースト幼馴染、セカンド幼馴染、友達、親友ってどこか」

一行「ブチッ！」

なにやら、いけないものが切れましたね。一夏さんのご冥福を祈ることにします。

一夏「何のことだ？」

後ろをぐらんになってください。見ただけで死ねますから

一夏「なおさら見れないじゃないか」

見なくてもいいですよ。すぐに体が理解すると思います。

一夏「は？」

一行「いゝちゝかゝ？」

これでいいですか？ 宙

宙「上出来だな」

なんか癪にさわりますがいいとしましょう

一夏「全然よくない！！」

追いかけれながらそんなことを言ったところでどうなるんでしょうね？

宙とその一行「さあ」

さて一夏君達のこととはほつといて次はあなたたちの番ですね。誰からいきましようか？

ラウラ「私だ」

自信満々ですね。何聞かれたも良いんですか

ラウラ「無論だ。私と宙の関係はそれぐらいでは変わらないからな」

そうですか・・・では

『宙にとってラウラとは?』

最初は簡単にいきましようか、じゃあ宙よろしくお願いしますね

宙「そうだな、ラウラか・・・ラウラはえーと・・・うーん」

ラウラ「なぜそんなにも悩むのだ!?!」

宙「だって・・・なあ?」

俺に振られても答えることはできませんよ

宙「なんといったらいいものか」

ラウラさんラウラさん・・・ちよつとこっちへ

ラウラ「なんだ?」

宙には内緒ですよ。これをつけてください

自称神は補聴器みたいなものをラウラに差し出した。

ラウラ「これは・・・?」

私が改造しました。人の本音が聞こえます。

ラウラ「それは本当か!？」

はい、ですので・・・首を絞めないで・・・

ラウラは自称神の襟首をつかみ、思いっきり上げている。

ラウラ「すまない。それでは早速」

意気込んで補聴器を耳につけるラウラ。そして倒れた。

顔が真っ赤になって今すね。何が聞こえたのでしょうか・・・

(ラウラは可愛いよな。あの銀髪はとてもきれいだし、どう言えば傷つけずに済むのか・・・)

理解しました。ありがとうございます。宙は一夏と違うタイプの女たらしですね。

次は智花は最後にして優にしましょうか

優「・・・／＼」

すでに顔を真っ赤にしてどうするんですか。まったく・・・では

『宙にとって優とは?』

これも簡単にいきましよう。これ以上何かつけると優も倒れかけませんしね。ちゃっちゃと終わらせてください。作者も結構疲れ

ていますので

宙「どうせ怪盗ロワイヤルをしたいだろ？ そんなやつ言うことなんて無視すればいいんだよ」

ギク――（。；）――ッ！！！！

相当あせていますね作者。ざまあWW、です。

宙「ざまあWW、だな。携帯持っていないくせにパソコンでやりやがって！！」

愚痴はそろそろやめときましょう、泣きかけています。早く終わらせてあげるのが彼のためですね。

宙「そうだな。優は・・・」

優「・・・／／／」

なぜ赤くなる、優よ

宙「心配なんだよね。何か最近キョドってるし」

バタンッ！！

また、倒れましたね。一夏君のことも心配ですが、こちらは女性陣のほうが心配です。

宙「おーい、どうした？」

宙の勘違いは加速する結果となったところで次は葵ちゃん行きま
しょうか

葵「良いですよ」

今回は大丈夫そうですね。では

『宙にとって葵は?』

今回も簡単にいきましょう。作者が泣きますので・・・

宙「最悪だな」

葵「そうですね」

早く言ってください

宙「ふむ・・・犬?」

葵「宙様が犬と言ってくれた。言ってくれた。言ってくれた。言っ
てくれた」

あれ? 今回は大丈夫かな、と思っていましたか・・・意外な一
面が発覚しましたね。

葵「言ってくれた。言ってくれた。……」

敬語でもないですし、これはちょっとやばいですね。

宙「おい、大丈夫か」

葵「心配なさっている。心配なさっている。……」

なぜでしょうか？ 敬語に戻ったのは良いとして……宙は火に油を注いだような気がします。

宙「葵？」

完全に廃人と化しましたね。またですか、智花ちゃんが心配です。では、次にいきましょう。

『宙にとって智花はどんな関係？』

作者がやる気になっています。こんなことを言えば、智花ちゃんが……

宙「智花は……／＼／＼」

今度は宙が壊れるんですか？

智花「……／＼／＼」

両方とも顔を赤くしては話になりませんね……

宙「智花……」

智花「宙君……」

めちゃくちゃ良い雰囲気じゃないですか。このままにしとけばいいところまで行けそうな気がします。しかしですね……

ズドドドッ!!

まことに申しにくいのですが・・・一夏君が戻ってきましたね。
しかも、その先には宙が・・・

一夏「ちよっ・・・どけっ!!」

宙「智花は・・・ウゲッ」

ズドーンッ!!

きれいな放物線を描いて飛んでいく宙。智花はなんとか難を逃れる
ことができた。

恋は盲目とはこの事ですね。回りが見えなくなる点ですが・・・

ここで宙の一行はさらに勘違いが加速していくこととなった。

(一夏も・・・)

番外編＋新キャラ・新I S紹介（後書き）

どーでしたか？

読みにくかったでしょう？

こんなこと聞くなりゃんと書けっと思っていますが、勘弁してください。お願いします。

これが実力です。私の・・・自信なくなりました。

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第49話 不幸（前書き）

こんにちは sirasuです。

言い忘れていましたが「シュープリス」は出します。決定事項です。
わかる人にはわかりますよね？

それと、後書きでまたアンケート？ アイデア募集？ をします。

ではでは第49話、どうぞ

第49話 不幸

第49話

俺たち四人十一夏は今学園に来ている。そのわけはセカンド・シフトした俺のISの性能を調べるためと、新しい専用機持ちとなった三人のISの性能も調べるめだ。十一夏のISも

「俺の扱いひどくねえか!？」

「智花、久しぶり」

「うん、そうだね」

一夏が何かほざいているがもちろん無視。

何日かぶりに智花に会った。智花は実家に帰っていたので最近会っていないのだ。優と葵は頻繁に会っているので言葉を交わす必要もないので試験の開始時間を智花とだべることにした。

会話の内容はくだらないものだ。日常のことや夏休みは何をしているかなどの話。そんな話でも久しぶりに会ったので楽しい。

うん、久しぶりだな。智花の笑顔は久しぶりに見るからいつも異常に癒されますな

「あ、皆さん丁度集まっていますね。いまから開始しましょうか」

「おkです」

「あ、はい」

「はい」

「はいはい」

「わかりました」

順番は宙、（一夏）、智花、優そして葵だ。

「それでは今から渡す資料どうりに指定の場所に来てください」

と手渡されたのは一枚の紙。どうやら一枚一枚違うようだ。俺は第一アリーナで入学の際にやったゲームから始めるようだ。

余談だがあのゲームは束さんが作つたらしい、千冬さんに臨海学校が終わってから聞いた。さらに余談だがIS学園で正式に試験として加わつたらしい。

また、あれをするのか・・・

少し憂鬱な気分になりながらもアリーナへと足を運んだ。ピットの中で残響を起動させアリーナ内へと飛び立つ。

「宙君、準備は良いですか」

「はい、全然大丈夫です」

山田先生が俺の引率らしく試験のことについて話しかけてきた。

とにかく早く終わらせるために集中する。あのときに見た光景と同じ空中には灰色の球体の的がういている。しかも・・・この前より数が多い。

「少し多くないですかね」

「はい、二百機あります。レベルもそこまで上がりますので注意し

てください」

この前の二倍だそうです・・・めんどっ!!・・・でも簡単にできそうだな・・・

ブーッ試験開始のブザーが鳴った。鳴ったと同時に両手のひらに「三弦」をコール、「四弦」を全て展開し目標の群れに突っ込む。アンロック・ユニットは赤い翼を自動的に展開した。

「三弦」をチャージしたまま両手両足の「四弦」と「赤羽」で回転しながら切り刻んでいく。以前の残響よりも自分の思いど通りに動くので楽に近づいてくる的や逃げていく的を切ることができた。宙はもともと一人で集団と戦ってきたので一対多は得意中の得意だ。周りを囲まれている状態でも視界に入らない死角にいるものまでも動きを察知することができる。だからあえて大群の中に突っ込んだ。

ーレベル78

機械的な音が耳に入ってきた。それでも腕や足の動きをとめることはなかい、的が銃弾を撃ってくるが「赤羽」で動きながら防ぐ、と同時に切る。

一通り自分の周りにいた的を破壊した後は「三弦」を開放する。両腕を開き回転しながら上昇することで逃げ場をなくすように長時間照射した。これで自分より下に的はなくなった。

ーレベル156

残り44機か・・・案外簡単だな

機体性能が上がっているためか楽に落としていくことができた。

視線で腰部武装「黒羽」を起動させる。この武装は腰についているスラスターと一体化しているのでコールの必要がない。

起動した「黒羽」はスラスター部分からその名どおりに黒い羽撒き散らす。黒い羽は常に妨害電波や熱を放ち敵のレーダーなどを無効化している反面、羽自体が爆発物となっている。

移動しながら「三弦」を撃っていたので黒い羽が尾を引くようにアリーナ内にばら撒かれる。黒い羽の効果で的の動きが著しく低下した。もちろんそこを狙わない宙ではない、近くにいる的は切り伏せ遠くにいる的は打ち落とす。

「最後だ」

そう言いながら的を撃ち貫く。

ビーーーと試験終了のブザーが鳴った。

この試験の結果が後に大変なことになるとはこのとき誰も知らない。

その後もいろいろな試験を受け性能調査は終了した。時間は丁度昼過ぎだったので今日は智花を誘い、みんなで昼食を取ろうとしたところ・・・

「ごめんね、今日も家の用事が・・・」

「宿題が終わっていないのよ」

「バイトです」

だそうだ。と言うわけで俺は一人虚しくうどんをすすっていた。

「はあ、今日はどうしようかな・・・」

頭の中で考えていたことが無意識に口に出ていた。ちなみに現在の

場所は駅にあった立ち食いのうどん屋である。

・・・そうだ。今日と泳ぎに行く約束してたよな、だったらチケットを買いに行くか。ウォーターワールドだっけ？ あそこなら良いだろう。

そうしてうどんの汁を飲み干し電車に乗った。もちろん行き先はウォーターワールド。

途中乗換えなどをしてやって来たウォーターワールド。

「・・・どうしようかな」

なぜ現在進行系で悩んでいるかと言うと・・・

『売り切れ？』

『はい、今月の前売り券は売り切れとなっております』

『マジか・・・』

と言うわけだ。簡単に今の状況を説明すると来た意味がないです、はい。

ガキンッ！

ドーム状の室内プールの中から金属音が聞こえてきた。最近はかなりの頻度で聞いているため、まったく気にならなかった。後日一夏に話を聞いたところ丁度鈴とセシリアがケンカしていたそうだ。

また電車に乗り来たのは駅前のオープンテラスのカフェ。この虚しい気持ちを甘いものでも食べて慰めようと考えたので来てみたのだが・・・

「全員、動くんじゃないえ！」

入った瞬間この仕打ちだった。席に移動しようとしていたのである程度は男三人組と距離が離れていた。周りの人が現状を理解できていないようだ、が次の瞬間に一発の銃声になることですぐに理解した。

「きゃあああっ!？」

「騒ぐんじゃねえ！ 静かにしろ！」

三人組の格好は見るからに強盗と言う感じだった。・・・あまりに強盗で言う言葉もない。

「あー、犯人一味に告ぐ。君たちはすでに包囲されている。おとなしく投降しなさい。繰り返す――」

いろいろな意味で言葉を失ってしまう。

もう、やだ。めんどい・・・つぶすか・・・

犯人はとても不幸だ。なぜなら今日の宙はとてつもなく鬱憤^{うっぴん}がたまっているからだ。

一人はショットガン、一人はハンドガン、一人はサブマシンガンか・・・雑魚

「雑魚」

考えていたことが口に出してしまった。

「何い!!」

と強盗Aが振り返る。だが、時すでに遅し。宙の右足は強盗Aが持っていたショットガンを蹴り飛ばしていた。男はすかさず後ろに下がろうとしたがその行動も遅い。

「はあ」

ため息混じりにおろされた右足は強盗Aの右肩に食い込む。強盗Aは倒れた。

強盗Aを倒した後すぐに近くにいた強盗Bが持っていたハンドガンのスライドする部分をつかみ、特殊な動きと衝撃ですぐに分解し、それを手に持ったまま強盗Bの顔へぶち込んだ。強盗Bは壁まで吹っ飛んだ。

「ひい」

最後の強盗Cがその様子を見て逃げようとしていた。

ガシッ ただ今絶賛憂さ晴らし中の宙だ、逃がすわけがない。

「お前ら本当不幸だよ」

「な、なにがだ」

強盗Cの声は震えている。当たり前だろうサブマシンガンを持っていたところで素人が人を撃てるはずがない。ましてや仲間が目の前で簡単に倒されているところを見れば戦意を失うのもわかる。

「なあ、知ってるか・・・俺は今機嫌が悪いん、だっ」

ブンッ！ つかんでいた強盗Cを思いっきり壁に向かって投げた。そしてゴキッと音を鳴らして壁にぶつかりずると地面に落ちていった。

一通り片付いたのでめんどくさくなる前に帰ろうとしたとき、またあの声が聞こえてきた。

「捕まってムシヨぐらしになるぐらいなら、いっそ吹き飛ばしてやらあっ！」

確実に意識を断っていたはずだが、リーダーは決まりが浅かったのかそう叫んで立ち上がり、革ジャンを左右に広げる。

「そこにあつたのは、なんと爆弾でした」

宙は棒読みで言い放ち、男に近づいた。

「ふざっ」「ふざけてなんかないよ」・・・」

「ただ少しばかりブチ切れてるだけだから」

強盗Aに右足で足払いをし、そして浮いた男の体に膝をみぞおちに入れ、その足を軸に右回し蹴りを首に叩き込んだ。

「これで、最後っと」

吹っ飛び倒れた男に止めとして股間を踏んだ。それも思いつきり。そのとき客の中にいた男の何かが縮み上がったのは言うまでもない。

「不幸だ」

最後に倒れている三人組を見てそうつぶやいた。

もう、何もやる気がおきねえ・・・

タッタッタと近づいてくる足音が聞こえた。振り返ってみれば・・・

「宙君？」

「宙っ！」

メイド服姿のラウラと執事服姿のシャルロットだった。

「おお、お前らいたんだ。・・・じゃあね」

そういった宙は妙に哀愁漂う背中を見せて店の裏口から出て行った。

第49話 不幸（後書き）

どーでした？

早速アンケートの件ですが今回は

水仙・豊水・断水のキャノンボール・スリリング（速さを競う競技です）のときに使う強化パッケージ案です。

というか普通の強化パッケージでお願いします。製作者は束と言うことになっているので多少はチトでもかまいません。

またラウラの強化パッケージ案も募集します。

理由は五巻のSSが終わりそうになった頃にわかります。

私も一生懸命考えましたが、なかなか良い案が浮かばないので皆様のお力をもう一度借りたいと思います。

不甲斐なくてすいません。

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第50話 夏祭り（前書き）

こんばんは sirasuです。

強化パッケージの件はまだまだ募集中です。よろしくお願いします。

四巻も残り一話となりました。早くアリアを書きたいなく。
もちろん、これが終わってからです。

ではでは第52話、どうぞ

第50話 夏祭り

第50話

「楽しいですね、お兄ちゃん」

「そ、そうだね」

「・・・宙君」

現在の状況を説明しよう。現在宙は智花の実家の近くにある神社の夏祭りに参加しているとところだ。それだけ聞いていればなんか問題はないのだが・・・要約すると妹からのプレッシャーがやばい。

理由はわかってる。それは二人で夏祭りに行こうと海にいけない言い訳として誘ったのだが・・・少し前に説明したように智花の実家の近くだったことだ。そんなに広くない規模の祭りなので出会いがしらにばったりと・・・

もちろん誘わない俺ではない。

人数多いほうが楽しいからな・・・

そう考えてわけであって、決して香の機嫌を悪くしようと思って誘ったわけではない。しかし、現に香の機嫌は右斜め下がりだ。

プレッシャーがやばいって

「宙君、私邪魔かな？」

「いや、大丈夫だ。うん、全然・・・」

かなり語尾が小さくなっているがそこは智花だ、気になったところを簡単に口に出すことはない。

「全然気にしてませんから大丈夫ですよ。ね、お兄ちゃん」

いやいやいや、香よ。口調と言葉が全然合っていないぞ

まったく持って嫌味にしか聞こえなかった。特に最後のほうは宙に對しての怒りがこもっている。

「すまん、怒ってるよな」

「全然怒っていません」

絶対嘘だ・・・目が笑っていないし

「怒っているよな、本当にすまん。何でも言うこと聞くから許してくれ」

「ホントですか!？」

昔から香はこういうと大概許してくれる。扱いやすいな、とか思わないで欲しい。このときの香の命令は・・・ダメだ。思い出すだけで頭が痛くなってくる。

ラウラのときと同じようにこれも諸刃の剣だ。あまり使わないようにしているがこういう時はしょうがないだろう。

どうやら香は許してくれたようで、見てわかるぐらいにうきうきしている。しかも腕を組んでいる。別に妹だからいいんだけど・・・

「くつつきすぎじゃないのか」

「別にいいじゃないですか、嫌じゃないですよね」

「あ、ああ、そうだね」

ちなみに補足説明だが香の胸は・・・ちいS・・・ゴホン、さっしてください。

葵のと同じぐらいか・・・ってなに不謹慎なこと考えているんだよ！！

ずっとふれているのもあれだし、けどふれているのも良いし・・・といった心の中の葛藤を必死で抑える。またはジレンマと言う。

そうこうしているうちに人が増えてきた。今からが祭りの本番みたいで、にぎやかになりつつある。もちろん、人ごみも同じくすごいものになっている。

「智花、ほい」

「え？」

はぐれたら大変だと思い。智花に手を差し伸べてのだが、智花は固まってしまった。

「おい、おい。大丈夫か」

「ふえっ！？　だ、ただ大丈夫。だいじょぶ」

噛んだね

「落ち着けよ、はぐれたら大変だろ」

「え、あ、うん。そうだね。はぐれたら大変だよね」

そうして俺の手に遠慮がちに腕を伸ばし、これまた遠慮がちに俺の手を握る。

あー、もう。そんな握り方じゃ・・・覚悟を決めるか

「・・・・・・・・しっかりと握れよ、ほら」

今度こそしっかりと智花の手を握る。顔が熱くなっていくのが自分でもわかる。だから智花に顔を見せないように顔をそむけた。めちやくちやどきどきしているが、表に出さないように努力。

「どこから行く？」

これが俺の今できる最大限の強がりだ。

お兄ちゃんはまだ私以外にでれでれして・・・いいなあ、智花さん。うらやましい・・・

わ、私、宙君と・・・手・・・繋いでる。宙君の手って・・・大きいな

うーむ、恥ずかしい。それよりも香と智花の浴衣・・・似合っているな

香の浴衣は空色の生地で白い帯を締めている。さらに反対色の太陽の絵柄が描かれている。それらは香の明るい性格や純粋な心を表しているようで、とても似合っていた。

純粋なだけに・・・気性が荒いのが痛いところだけだな

嘘がわかりやすいし、俺の一つの行動で表情がころころと変わるの
は見ていて面白いのだが、結構大変だ。

智花の浴衣は濃紺の生地に臙脂色えんじの帯をつけている。一見渋いように見えるが、きらびやかな金魚の踊っている様が描かれている。それらは智花の奥ゆかしい性格とその奥にある行動力の強さを証明しているようだった。

そんな二人はともきれいで・・・

この状態の俺って両手に花ってやつか・・・一夏のこと言えかね？

腕を組んでいる香を見て笑い、智花の手をぎゅっと握りなおした。

「お前ら、本当に似合っているよ・・・浴衣。正直きれいだ」

「えっ!？　ほほ、本当ですか？」

「あ、ああありがとうございます・・・ございます」

かなりの変化球だったらしく珍しく香もうろたえている。智花にいたっては敬語さえ使っている始末だ。

「そんなにうろたえることか？」

「服装をほめられてうれしくならない女の人はいませんよ」

「うん、そうだよ。とってもうれしい」

そう香に自慢げに言われ、智花は控えめにうれしいと言った。

香は積極的なほうなのか？　智花は相変わらずだし・・・

そんな考え事をしていたが、今は祭り楽しまないと損だ。

「次はどこ行く？」

そして、八時。花火の時間だ。

今までは遊びまくっていたからな、余韻として花火を楽しむのも良いだろう。というかもともとこれがメインだけど・・・

神社の奥にある丘の上に三人で登り、見渡しが良いところで草むらに腰掛けた。香もある程度機嫌を取り戻しているし悪いこともないので、心から花火を楽しめるだろうと思っている。

その様子が二人には子供みたいにはしゃいでいるように見えた。

これだからお兄ちゃんは・・・でも、可愛いんですね

ふふ、宙君たら。このときの表情が私は好きなんだ。・・・好き、か。

Bannon 待ちに待った花火が始まる。三人で見た花火はとてもきれいだっただ。

花火の光で二人の顔（特に智花）がとてつもなく綺麗になり出したので、見とれていたことは余談だ。

そのご智花と別れ帰宅した俺たちはテレビを見ている。

その番組のタイトルは「ISを使える二人の男」

なんかタイトルがこれだけだと・・・BL？

内容は俺や一夏の訓練成績などだ。今となってはもう慣れたが、俺の存在がばれたときは大勢の記者や報道陣が殺到した。連日インタビューや記者へのスカウトなど対応に追われていたが千冬さんだったので大勢の方が門前払いされた。それでも異常な数だった。

にしても、捏造しすぎじゃね？ めちゃくちゃ俺たちができるように報道されている気がするよ

番組の内容を見て素直にそう思った。しかし、隣の香を見ると目が輝いている。

「・・・はあ、風呂は言ってくる」

言葉を失ったのでさっさと寝ることにした。こうして俺の夏は過ぎていく。

第50話 夏祭り（後書き）

智花「どーでした？」

宙「・・・・・・・・」

智花「どうしたの？」

宙「いや、あの変態が出てこないな」と

智花「出てきて欲しいの？」

宙「んなわけないだろ。それよりも・・・」

智花「わかってるよ。せーの」

宙・智花「次回もお楽しみに（してください）」

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第51話 暗躍するのは二つの影（前書き）

おはようございます　でいいのかな？　S i r a s uです。

やっと、四巻を終えることができました。

ついに、私の物語の山場に入りますね。

ではでは第51話、どうぞ

第51話 暗躍するのは二つの影

第51話

「すまん」

「全然大丈夫ですよ」

香はとってもうきうきしている。理由は俺が夏風邪をひいたからだと思う・・・。

自分で言うのも悲しくなるね・・・はぁ・・・そういえば冒頭で妹に謝るのが癖になっているかも・・・はぁ

ものすごく憂鬱な気分だ。何もやる気が起きないし体の節々がきしんでいるので今日は一日中寝ていようと思ったのだが・・・無理のようだ。

『宙、今日は暇か』

ラウラからのプライベートチャンネルだ。

『暇だけど、今日は無理かな』

『理由は？』

言えるわけじゃないすか・・・

もし言ったとしよう。絶対に・・・来る！そして・・・思考を中

止。これ以上考えない。

『寝ていたいだけだ』

別に嘘のことを言っていないし・・・

『そうか、じゃあそっちに行こう』

『・・・は？』

どこからそんな話に？ やばいっ！

『今日は無理だ！ 無理無理無理、まじで』

『別に寝ていたいのならかまわないだろ・・・私も寝ていたいしな・・・』

空白のの部分は何なんだよ！？

『ゴニョゴニョというわけだ』

『ん？ 何も聞こえなかったけど』

『行くことにしたからな』

えっ？ 無視？・・・ブツツ あ、切れた。・・・寝よう。

絶望しか感じる事ができない会話だったので、寝ることにする。
寝ていたらとばかりは来ないはず・・・たぶん。

ピンポーン。家のチャイムになる。

って、早っ！！

プライベートチャンネルでの会話より数分もたっていない。考えられることは移動しながら会話していたことだけだ。

・・・ということは？ 電車に乗りながらしてたの？ 来る気満々じゃないか・・・

そして、玄関の会話が聞こえてくる。

「」「おはようございます」「」

聞こえてきたのは数人分の声。それだけで誰がいるのかわかる。

「おはようございます。今日はどのような用件でしょうか」

彼女たちに挨拶を返す香。兄としてはとてもうれしく思うのだが、今はそんな場合じゃない。

「遊びに来たのだが」

「すみません。お兄ちゃんは夏風邪をひいてしまって」

そこでそのことを言うのは間違いだぞ妹よ・・・はあ。

「そうか、じゃあ看病に来た。入るぞ」

ラウラは香に有無を言わず家に入ってきた。いや、これでは侵入

だ。

しかも、そのまま俺の部屋がある二階へ階段を上ってくる音が聞こえる。そして・・・

「私が看病してやろう」

扉を開けてこのずうずうしさだ。頭が痛くなる以前に涙が出てくる。

「泣くほどつらいようだな。だが安心しろ私がついている」

哀れみの涙を変な方向で捉えられた。そして俺のベッドの中に・・・

「おいっ!! 　なんで入ってくるんだよ!!」

「何が悪いのだ。うつしたほうが治りが早いと聞いたのだが」

「だから誰だよ。そんな間違いを教えたのは・・・。はあ、俺は早く治したいんだよ。だからそつとしていてくれ」

そこで全員が集合する。俺の布団の中にラウラが入ろうとしている状況で。

「お兄ちゃん、元気そうですね」

「・・・宙君」

「ほー、いい度胸ね」

「最低ですよ」

うん、そう来ると思いました。

四人の呆れた顔とものすごく痛い視線が俺に向けられる。

「誤解だから、早くラウラを抑えてくれないか」

なるべく他の意味を悟られないような言葉を選び、頼む。

「「「・・・」」」

無言でラウラを引き剥がす四人。その様子はかなり怖い。ラウラも最初のうちは抵抗していたが四人のそんな状態を見て抵抗をやめた。夏風邪なのでうつす心配はないはず・・・だから部屋にいてもいいのだが・・・

目の前で遊ばれるのはちょっとな

できれば寝ていたいのに気になって寝ることができない。しかも、少しでも覗こうとすると

「お兄ちゃんは寝ていてください。治るまでは一切の身動きを禁止します」

この命令が飛んでくる。人間としてこの命令は無理だと思う。

もう良いや、寝る

ふとんを頭までかぶり、光と音をある程度遮断する。これで少しまともになったので寝れるはずだ。

目を開けた。そこはもちろんふとんの中だ。汗がやばい。だが気分は悪くないし、体の痛みをある程度治まっている。ただ、一つだけ違和感があるとすれば体の側面に感じる人の体温と重さ。顔を出し外を確認すると・・・全員が寝ていた。

看病しに来たんじゃないのかよ

心の中でツツコミを入れ、シャツを確認する。案の定べっとりだ。だからシャワーを浴びに行こうと体を起こそうとしたら、香が起きた。

「お兄ちゃん、動かないでくださいと言いましたよね」

「す、すいません」

できるだけ穏便にことを済ませようと素直に謝り、ふとんに戻る。

「どうして動こうとしたんですか」

「いや、ちょっと・・・」

なぜか第六感が危険を察知したので言葉をにがらせる。

「ちょっと?」

だが香は見逃してはくれなかった。俺に顔を近づけてくる香。

「シャワーを浴びに行こうかなって、ハハハ」

さらに第六感の発動し危険を察知する。なんか乾いた笑いが自然と出てしまう。

「確かにそうですね。汗が出ますよね。気が付かなくてすいませ
ん」

「いや、別に良いよ」

「だったら私が体を拭きますので・・・だから・・・その・・・」
かなり嫌な予感がしたので身をひく。

「・・・脱いでください」

「嫌だ」

完全に拒否したことでガバッと起き上がる残りのメンバー。

「宙君。脱いでも大丈夫だよ」

「へっ?」

「あたしが拭いてあげるわ」

「え?」

「宙様ここは私めが」

「ちよっ」

「未来の妻として、な」

「な、じゃなくて」

それに乗乗する香を含めた四人で・・・

「「「「さあ、早く」」」」

俺の取っ組みかかった。

「いやーーーーーーー」

そして俺は何とか必死に抵抗した。だが、抵抗した結果さらにこじらせてしまい・・・地獄（看病）の期間が延びた。

ここに一番大変だったと思ってことを記しておこう。

時間は昼食。もちろん、俺はこの部屋を出ること自体を禁止されていた。そこへラウラがおかゆを持ってきたときだった。

「ほら、口をあけろ。あーんってしろ、あーんって」

レンゲにおかゆを入れて口元へ強引に差し出してくるラウラ。

「・・・・・・・・」

「どうした？　口もあけられないほどつらいのか」

「そうじゃなくてな」

なんで、こんなことに？

「一つ言わせてくれ、俺は一人で食えるのだが」

「気にするな。これぐらい簡単にできる。手間でも何でもない。これこそ嫁の務め」

「嫁になっているところは素直にうれしいが・・・お前の手間とか、そんな話じゃなくなてな・・・」

「そして、嫁の差し出したものを笑って食べる事こそが夫の務め」

「・・・・・・・・」

また言葉を失ってしまった。

「さあ、口をあけろ。あけないと強引にねじ込むぞ」

ラウラには有無を言わせぬ迫力があり、従うしかなかった。

「あ、あーん」

「もっと大きく開けろ」

ねじ込まれるのはほんとに嫌なので従う。大きく開けた口の中にラウラが運んできたおかゆが入ってくる。

——熱っ！

「はふはふっ」

「どうした？ はふはふっ、じゃわからんぞ」

「熱いんだよっ！！ せめて冷ませよ！」

「うまいのかと聞いているんだ」

なんなんだ？ この不思議と話がかみ合っていない感じは・・・

「まあ、おいしいけど」

「そうだろう？ 智花の料理はうまいからな」

「なんで、お前が偉そうにしてんだよ」

「私だって手伝ったのだぞ」

ラウラの料理の腕前はよく知っている。それはなんというか・・・微妙なのだ。現に前作ってもらったおでん（今は夏です）は、煮ているはずなのに、こんがりと焼き色がついていた。

「何を手伝ったんだ？」

「味見した」

「・・・・・・」

またまた言葉を失う。

手伝ったのかそれ？

「いいから、あーんしろ、あーん」

今度はきちんと冷ましたのを口に運んできてくれた。

「うまいな」

「そうだな、確かにうまいな・・・もぐもぐ・・・」

すると、おもむろに自分の口におかゆを運んでいったラウラ。しかも、きちんと冷ましている。

「なんでお前が食ってんだよ」

「腹が減ったからだ」

さいですか

「これじゃあ、・・・・・・・・間接キス・・・・・・・・／／／」

そして自分がやったことなのに顔を真っ赤にして冷やしてもいないおかゆを口に持ってくる。

もちろん、ため息しか出なかった。

とまあ、こんなラウラはこんな感じだった。それが何日か交代で食べさせているらしく、何回かこんな事があったのだ。本当に地獄かと思った。

「―――以上が、織斑一夏、神代宙の報告になります」

薄暗い部屋の中で、三人の女性がテーブルを囲っている。

二人は席に着き、中央の一人は立っていた。それはさながら王に仕える忠臣のようで、室内には厳かな緊張感が横たわっていた。

「そろそろ動くべきかしらね」

中心の女性がつぶやく。しかし、その声は澄み渡っていて、小声であってもしっかりと二人の耳に届いた。

「正直、この件に関しては、対応が遅すぎる気がします」

「各方面から苦言も相当数……。もう待つべきではないかと……」

室内の三人は、本年度の新入生の専用機持ちの多さ、そして完全なイレギュラーの存在、その本格的な対応を迫られているのだった。

「……ふむ」

窓の外を眺めていた王が、くるりと身を翻す。

「決めたわ、そろそろ動き出しましょう。我らが我らであるために」

「では!？」

「近く、機を窺って接触します。あなたたちはバックアップを」

「りよ、了解しました!」

「承知・・・」

くすりと、王は笑みを浮かべる。

それはさながら獲物を見つけた猛禽類のようで。

それはさながら冷徹な氷河の女王のようで。

——ぞくり、と。

ぞくぞく、とさせる。

見るものを魅了して止まない、そんな笑みだった。

「覚悟してもらいましょう。織斑一夏に神代宙」

満月を背に、女性は微笑む。

ぱちんと、扇子を閉じる音が静かに、しかし確か響いた。

とあるマンションの最上階。そこに二人の女性と一人の少女がいた。二人の目の前に一人の少女が立っている。

「??? わかっているわよね」

「はい、私の成すべきことは神代宙を———することです」

「よろしい。では行って来なさい」

「はい」

静かにその少女はブロンド色のストレートをひるがえし、部屋から出て行く。薄氷の瞳は明るい廊下のなかで静かに輝いた。

第51話 暗躍するのは二つの影（後書き）

どーでした？

今回はキャラにはお休みしていただきます。
私のテンションが上がっているので。

やっと、五巻です。

（ ´ , ´ | ˋ ˋ ） クッククク・・・（ ´ ヲ ˋ ） フハハハハ・・・
（ ´ ヲ ˋ ） ハァーハッハッハッハ！！

来た。私はここからシリアスにします。がんばります。

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

強化パッケージはまだまだ募集中です。

覆水の武装も追加してきますね！

第52話 またまた転校生!?(前書き)

こんにちは sirasuです。

本日二度目の投稿となりました。結構きつかったです。

今日は弟とガンダムのゲームをしていたんですが、結構難しいですね。

むづゲーのアマード・コアより苦戦しましたww。

ではでは第52話、どうぞ

第52話 またまた転校生!?

第52話

「えー、今日は転校生を紹介します」

二学期が始まってから最初のH Rで山田先生がそういった。クラスホームルームのみんなを見てみると一夏は“またか”みたいな表情をしていて、クラスの女子（一夏一行を除く）達はなんかもものすごく目を光らせている。

ちなみに俺は一夏と同じく・・・

またか。てか、無駄に一组、転校生多くね？

この学校の七不思議に入るんじゃないかと思うほどの疑問だった。

「カナダの代表候補生 アリシア・ベルリオーズさんです」

「アリシア・ベルリオーズだ。よろしく」

そう山田先生に紹介されて入ってきたのはブロンドのストレートヘアに薄氷の瞳を持った美少女だった。

美少女って言ってもこの学校多いからな・・・

この学校の女子は可愛い子が多い、しかも倍率がめちゃくちゃなので頭も良い子が多い。なので他校からは憧れの的としてこの学園は見られている。

そのせいなのか一夏や俺も美少女に対する感覚が少しづつ薄れて

きている。はずだったのだが・・・

肝心の一夏が見とれているのか視線を転校生から離さなかった。

俺、知らね

この後に起こるであろう出来事を後ろから伝わってくる殺気を元に頭の中で想像し一夏に合掌をする。

内心H Rの終了を楽しみにしている宙だった。

自己紹介が終わったところで自分の席に着こうと転校生が移動する。俺はその移動している転校生と目が合った。その瞬間、後ろから来る殺気に体を震わせる。振り向いてみると・・・

終わったら、来い

いつの間にラウラとアイコンタクトが取れるようになったのかはわからないが、そう言っている気がした。この後確実に来るであろう不幸をどう対処するかを考えている途中でH Rは何事もなかったかのように幕を閉じた。

「他の女を見るなと言っただろうがっ！」

現在クラス内で怒られ中。一夏は三人に校内を追いかけている。

「・・・すいません」

結局何も思いつかなかったので素直に謝っている。

「お前はどうすれば私の恋人という自覚をもてるのだ」

実際は恋人ではないのですが・・・

ちなみにクラスみんなはこの光景が日常的なのでわりと無視している。転校生は目を見開いて驚いていた。

「・・・わかりません」

この場では認めたほうが楽なので認めた。腰を折り頭を下げる。今の自分にできる精一杯の誠意をこめた謝罪にラウラは驚いた。

「わ、わかればいいんだ。次はないからな」

何がわかったのかは意味不だが、今回はあっさりと終わった。普段はもっと長いので変な虚無感がある。

悪い事じゃないんだけど・・・なんだかなあ

調子が狂ったので席に着き次の授業を待つことにした。

「いつも、あんな感じなのか」

席に着き顔を伏せたところで転校生が話しかけてきた。

「ああ、そうだね。・・・それより、なんて呼べば良いんだ？」

「別にアリシアでもかまわない」

「んじゃ、俺のことも宙で良い。それで、なんでそう思ったんだ？」

「恋人と言って何も反応しないところを見るとな」

確かに花も恥らう十代の乙女の反応じゃなかったしな。

「面白いところに着眼するね」

あまりにこの状況が普通なので俺たち・・・いや、このクラスの着眼点がずれているらしい。アリシアはそういう意味でも稀有な存在だった。

「褒めているのか」

「一応ね」

確かにこの状況では褒めていると言うよりも“一般的だね”と言ったニュアンスの方が強い。

「そうか。それよりも・・・良いのか」

「何が」

「あれ」

いまいちアリシアの言っている意味がわからなかったが彼女が指をさしている方向を向くと・・・理解した。

その方向には・・・鬼とかしたラウラが不適に笑っていた。

あっ、やばっ。目が・・・目が光っているし

コハーと特殊な呼吸方法で近づいてくるラウラ。それに冷や汗がだらだらと頬を伝う。第六感や本能が察知する前に体が勝手に動き逃げ出す。

「・・・すまん」

アリシアの声が教室から出て行く際に聞こえた。雰囲気から謝っている事はわかったが今はそんなことを考えている暇はない。脱兎のごとく教室いや、ラウラから距離をとろうと廊下を走る。なるべく人が少ないところを選び走っていると、丁度廊下が交差しているところから一夏が飛び出してきた。

まずっ

そう思ったときにはもう遅かった。人間の体にアンチロック・ブレイキ・システムABSなどと言った便利なシステムがあるはずもないので、一夏と俺はスピードを落とすことができずにぶつかった。

時は放課後、場所は屋上。俺と一夏は互いに四人の目の前に正座している。ぶつかったときは千冬さんもとい織斑先生によって救われたが、怒られる時間が遅くなっただけだった。

・
一夏の方は四人に罵倒され続けているが、俺の場合はと言うと・・・

「私の目の前に馬鹿がいるとはな、すぐに言った事を忘れてしまう

ほどの馬鹿がいるとはな。これは体に刻み込まないといけないな。
大丈夫だこれは躰だ、他意はない」

ラウラの独壇場だった。他のやつもラウラのことを認めているので
とめようとも考えていない。

「さて、何から始めようか」

その後、ラウラに寝技を初めいろいろな関節を決められた。まあ、
痛くはなかったのだが・・・視線が痛かった。

密着してるしな・・・はあ

ラウラを覗く三人に罵倒され、心が折れたことをいま思い返すと体
が震える。

「でやああああっ!!」

ガキーンッ！ と金属音が響き、鈴の「双天牙月」と一夏の「雪
片式型」がぶつかる。

今日は九月三日。IS学園の最初の実戦訓練は一組と二組の合同
で始まった。目の前では鈴と一夏が戦っている。

俺はアリーナでこの戦いを観戦している。隣にはもちろんラウラ

がいて、そして専用機持ちということでアリシアがいる。このことでラウラから一悶着がもちろんあった。が、率直に専用機持ちの意見が聞きたいと言うと、了承した。

俺もラウラの扱い方がようやくわかってきたな・・・良い事なのか？

「ラウラはどう思う？」

目の前で行われている模擬戦について聞いてみた。

「頭が悪いな」

「そうか」

なんとなく意味がわかるよ、ラウラ。

長いと言っても数ヶ月だが、ある程度言いたいことがわかるようになった。

一夏はよく考えないからエネルギー効率の悪い白式に振り回されていることぐらい・・・

一夏の白式はセカンド・シフトしてからエネルギー効率が段違いに悪くなった。その理由は多機能武装腕《アームド・アーム雪羅》が新武装として加わったからだ。「雪羅」は零落白夜をシールドとして利用できる。だから一夏の後先を考えない戦闘はさらにエネルギーの消費を加速させる羽目となった。

「んじゃ、アリシアは？」

隣にいるアリシアに感想や意見を求める。もともとこのために呼んだのだ。

「弱い。テレビで見たときよりも凄みを感じないな」

「そうだろうな・・・捏造しすぎなんだよ、あれ」

香があれ見てうるさいんだよ、ホント・・・

あの事件、銀の福音戦のときに俺の存在が各国にばれてしまい。結果俺は一夏と同様に世界中に取材されたり中継されたりと大忙しの日々となってしまった。しかも、その報道がある程度捏造されているためよく勘違いされる。香もその一人であり、熱狂してしまった。

これが本当に疲れるんだよ・・・はあ

「お前も弱いのか？」

アリシアがそう聞いてきた。

確かに一夏があの状態なら聞いてくるのもわかるが・・・

「確かめてみるか？」

力を誇示するのは嫌いなので、そしてアリシアの実力が知りたかったので挑発もかねてそう言ってみた。

「そうだな、確かめてみるとしうか」

そして、次の試合は俺とアリシアとなった。

第52話　またまた転校生！？（後書き）

どーでした？

やっと、ベルリオーズ改めアリシアが登場しました。

なかなか口調が決まらず悩みましたが、これに決めました。

このキャラを考えてくれた笑衝様、イメージと違ったらすいません。

なんとなく、ベルリオーズに近い口調にしようと思ったのですが・
・この原作自体に使われている口調が多すぎてキャラが薄くなってしまうので、セリフで勝負しようと思います。その人の名言と言え
ば・・・わかりますよね？

そして、その人+誰かの名台詞を使おうかな〜と思っております。

今回の後書きもキャラはでませんでしたね。

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

強化パッケージはまだ募集中です。ラウラのも募集中です。

第53話 転校生の実力（前書き）

こんにちはsirasuです。

今回はやっと戦闘シーンです。なかなかこのシーンが苦手なところが最近の悩みです。

ではでは第53話、どうぞ

第53話 転校生の実力

第53話

俺は今アリーナ内でアリシアと対峙している。ちなみに一夏と鈴の試合は一夏の負けで終わった。

「ISを展開しろ」

「はい」

「わかりました」

二人は織斑先生の言葉に従いお互いのISを起動させる。

いくぞ

こい

二人の体を光の粒子が包み込み、そしてISが二人の体に装備される。

もちろん宙のISは覆水、そしてアリシアのISは・・・

「第3世代なのか？」

「見た目は第2世代ね」

「確かにそうだな」

「まあ、ブルーティアーズの敵じゃありませんわ」

宙、鈴、ラウラ、セシリアの順番だ。みんなはアリシアの最初の試合ということで張り切ってみている。そしてみんなの言うとおりモニターの情報では第三世代と表示してあるが、見た目はカナダの第二世代型ISにしか見えない。

——戦闘待機状態のISを確認。搭乗者はアリシア・ベルリオーズ。ISネーム『アバランシュ』。戦闘タイプ近・中距離タイプ。特殊武装あり——

「宙の敵じゃないな」

「そうだな」

「油断しちゃダメだよ」

今度は一夏、箒、シャルロットだ。何だかんだ言っこの学年は俺の実力を認めているやつが多いから、こんなことを言うのだが……

「ラウラ、全員黙らせろ。……シャルロットの言うとおりだ。アリシアは強い」

アリシアの雰囲気を見ておごりを捨てる。罵倒を受けても動じないところや目つきでアリシアは強いと認識した。

「わかるのか」

「大体な」

わからなかったら、俺は生きていないさ

実力の世界で簡単に生き残る方法は唯一つ、それは相手の力量を素早く見抜くことだ。それができなくては生きていくことは不可能に近い。だから宙もその力を持っている。というか身に着けなければいけないかった。

「すまないな」

「戦う前に謝るのかお前は？」

「確かにそうだな。・・・では実力を見せてもらおうぞ」

「それは俺のセリフだ」

『試合開始』

織斑先生の掛け声と同時に二人は飛び出した。

ガキーン！ いつの間にかコールしていた宙の「三弦」の展開状態とアリシアの銃剣「メルト」がぶつかり金属音を出す。白い刀身と赤い刀身が火花を散らして鏝迫り合いを行う。

そして、二人とも押し切れないことを悟ったのか同時に離れると同時に射撃戦に移行した。

ガン！ ガン！ と響く銃声を鳴らしながら、撃っては回避の行動を繰り返す。

こいつは・・・強い

宙は確かに強者だ

その一連の動作だけでお互いは実力を認め合った。だが、その事実を二人は知らない。だから慎重に攻め続けた。銃で撃っては回避の繰り返しをする。そして、先に宙が仕掛けた。

両腕の籠手にある「四弦」を起動させビーム刃を展開し、アリシアに接近戦を仕掛ける。

「くっ」

アリシアは銃剣が一本しかないので手数がふり、だから下がって距離をとろうとしたが覆水の「赤羽」の機動力には勝つことができなかった。すぐに距離をつめられ超近接戦闘に入る。

アリシアは複合型シールドをコールし、そのクローと「メルト」で「四弦」の斬撃を受け止め、受け流す。しかし、宙が両足のつま先にある「四弦」を展開し攻め立てると次第に劣勢になっていった。

「これで決める」

宙は複合シールドを回し蹴りによる斬撃で切断し、その勢いのまま両手両足で縦横無尽に刃を走らせる。アリシアは何とか「メルト」で防いでは至近距離での射撃で応戦するがジリ貧だ。

すでにアバランシュの装甲はボロボロになっている。

「まだだっ」

「もう遅い」

そして、宙の猛攻の中アリシアが一瞬見せた隙を逃さず宙が両腕のビーム刃を振り下ろす。この勝負の行方は誰が見ても宙の勝利を確信していた。

決まったな

宙もこの一撃で試合が終わると思っていたが、次の瞬間この場にいた全員が目可疑う光景を見ることがなった。アリシアのIS アバランシュは「メルト」を投げ捨て、宙のビーム刃を手のひらで受け止めていた。それも装甲が剥がれ落ちた黄金色に輝く部分で・・・

「全てを溶かしつくせ Afrit system」

アリシアの言葉に答えるようにアバランシュの装甲が分裂する。そのISは宙のビーム刃を握りつぶす。

「何っ!？」

宙に驚いている暇はなかった。すぐに黄金色のISは右足で蹴り上げてくる。それを何とか「四弦」の手のひらだけに展開できるビームシールドで受け止め、後退する。

「おいおい、なんだよそれ」

「これか、これはイフリート・システム。この機体に装備された第三世代兵器だ」

イフリート・システムとはカナダが開発した第三世代兵器。もともとカナダ自体がISのエネルギーを熱に変換するために実験をしていた。その実験の途中で生まれたのがこのシステムだ。このシステムは特殊な合金でできた装甲を熱することでありとあらゆる実弾や実体剣を無効化し実体シールドを溶かす。ビーム兵器は熱量を主とした武装なら無効化することができるようになっている。

「それ、チートじゃん」

情報を読みとった宙がニヒルと笑う。

「そんなことを言っている場合か？」

熱量を使用したスラスタは装甲をパージをしたアバランシュを爆発的な加速力で移動させる。その加速に驚いた宙は対応が遅れてしまった。そこにアリシアの拳が突き刺さる。その拳は装甲を溶かすはずだったが・・・

「驚かせてくれたお返しだ。どうせ、ビームシールドで無効化できるんだろ？」

宙は「七弦武装」の一つでビームシールドを展開しそれを防いでいた。それは左腕の「四弦」から先を覆うようになっていて、その腕には爪が付いておりその爪は一つ一つが短剣のようになっている。それに左腕の指を入れた。

「新武装か・・・でもそれではこの装甲を傷つけることはできないな」

「そうか？ 溶ける前に切れば良いんだろ？」

ISのモニターに流れてくる情報を読み取ったアリシアはこれが過去のデータにないことを知った。しかし、イフリート・システムで発生している熱は耐熱している装甲ですら容易に溶かすことのできるようになっていて。だからこそ宙の言っていることが不可能とわかっていた。

わかっている。わかっているのに、恐怖をしてしまうのか・・・
頭で理解していても心が油断することを拒んでいた。そう考えさせるような自信が宙にあったのだ。

「速攻で倒す」

「やれるものならやってみろ」

アリシアは銃剣を拾う、そのとたん銃剣が黄金色に輝いた。これは熱が銃剣にも伝わった証拠だ。そして構える。宙も「七弦武装」の左腕をひくようにして構えた。

「いくぞ!!」

二人は吼えるようにして叫び同時に突っ込んだ。

どうせ時間制限があるんだ。だったら強いうちに倒さなきゃ意味がない

早く倒さなければな

二人はすれ違う一瞬で勝負を決めるために集中し、そして閃いた。
キーン！ 鏝迫り合いとは違う澄んだ金属音がアリーナ内に響き、観戦席が静まる。そして・・・

ビーーーー『試合終了。勝者——神代 宙』

ワァァと歓声が上がる。しかし、宙はこの試合の結果に不満を抱

いた。左腕を見ると爪は溶けてボロボロになっている。

これじゃあな・・・

なんとも言いがたい気持ちを抑えISを解除する。そしてアリシアの元へ・・・

歓声が上がっているなか、アリシアは立ち尽くしていた。手に持つ「メルト」の刃はその半ばから断ち切られていた。断ち切られた刃は自分の後ろの地面に刺さっている。宙はあの一瞬で「メルト」と爪で引き裂いたのだ。それも宣言どおり溶ける前に。

全力を出して負けたのか・・・ふふっ、悔しいのかうれしいのかわからんな。

しかし、あのISなら勝敗はわからないな・・・
フェントム・タスク
これが宙の実力。亡国企業が欲しがるわけだ。

アリシアはISを解除し、宙の元へ・・・

「アリシア・・・強いな」

「お前のほうこそ」

二人は向き合いそして、今度はお互いに認め合ったことを知った。そして授業は終了した。

今の試合をモニターで見ていた教師陣は・・・

「織斑先生、これを」

山田先生が今の試合結果の資料を持ってくる。

「ありがとう」

それを受け取り千冬さんは一通り目を通す。その中で一つだけが気になった。それをすぐに指差す。

「これは？」

「やはり、織斑先生も気になりましたか」

そして、空中投影ディスプレイで説明を始める。
その内容は宙のIS「残響」の稼働率が三十パーセントについてだ。

「これは明らかにおかしい数値です。一夏君の「雪羅」は現に八十パーセントを出しています」

山田先生の説明にその場にいた教師がうなづく。

普通のISなら常にそのぐらいいかなければならない。それなのにも関わらず、低い数値しか出さない場合から考えられることは・

全力を出していない。

「それか、無意識のうちにISの性能を隠している。だな」

「はい、織斑先生の言うとおりです」

「要、注意しておくのでしょうか」

そう言った後、モニター室の空気は重たくなった。

第53話 転校生の実力（後書き）

アリシア「どーだ？」

宙「・・・うーむ」

アリシア「どうしたんだ？」

宙「いや、な。まだ出てきていないやつがいっぱいいるというのに
アリシアが出てきて良かったのか、と」

アリシア「確かにそうだな・・・」

宙「まあ、いいか・・・それよりもさっさと終わらせるか」

アリシア「ああ」

宙・アリシア「誤字脱字訂正などがあつたら、よろしく」

二人の口調がかぶりそうで怖いsirasuです。現に今重なって
いたし・・・

まだまだパッケージ募集中♪

第54話 生徒会長 更識楯無登場!! (前書き)

おはようございます。

ではでは第54話、どうぞ

第54話 生徒会長 更識楯無登場!!

第54話

実戦訓練があつた後、みんなで食事をとった。ただし、今回はアリシアも混ざっている。

「これ、うまいな」

「そうだろ？」

俺はラウラが食べていたシュニツェル（仔牛のカツレツ）を分けてもらって食べているところだ。ラウラは俺がうまいと言うと自慢げに無い胸をそらした。

ちなみに俺のご飯は和風日替わり定食。今日はサバの味噌煮だった。なかなかうまい。

「それにしても強かったわよね。アリシア」

鈴がそういった。今日の実戦訓練で専用機持ちのメンバーはアリシアの実力を認めたらしい。理由は俺と互角に戦っていたから……そんなことでいいのかよ……はあ

俺も結構やばかったんだけだな。

内心、あの戦いはギリギリだった。最後の一撃もうまく入っていなければ、俺が負けていただろう。それほどアリシアは強かった。だからこそ俺も彼女の實力を認めている。

「そうだよ。ね。宙君をあそこまで追い込むなんて」

鈴の言った言葉にシャルロットが反応する。

「シャルロット、俺は言うほど強くないぞ」

「それは、過ぎた謙遜だよ宙君。私たちの目標なんだから」

これで二回目だが福音の一件から俺の強さはみんなに認められ、目標となっている。俺としてはうれしいが、言うほどみんなより強くは無いはずだ。

「それに比べて一夏さんは・・・」

「俺だってがんばってるんだよ」

そしてそのことでセシリアのダメだしをくらい落ち込む一夏。テールブルの端で小さくなっていた。

「まあまあ、気にすんなって」

「お前に言われてもなあ」

俺は励まそうと声をかけたのだがさらに落ち込んでしまった。

「強者が弱者へしてやれることは強くあることだぞ、宙」

そんなところを見て、ラウラが俺のほうを向きそう言った。そのなぜか目は輝いている。

（夫が強ければ、私も誇れるしな）

「そうかな、だったら俺は目標でいいのか？」

「そうだ」

「ありがとう、ラウラ」

素直にラウラに感謝を伝える。すると、ラウラは顔を俺からそらした。その様子を見ていたいつもの三人はため息をつく。

どうしたんだ？

まったく意味がわからないのでラウラに聞こうと手を肩に伸ばしたのだが、パシッとアリシアにつかまれた。

「今はやめておけ」

「どうして？」

「いいから」

そんな短い会話だったが、アリシアの目には俺を黙らせるほどの何かがあった。またそれを見ていつもの三人はため息をつく。

一体なんなんだ？

俺の疑問は消えることなく食事は終了した。

「やっぱり無駄に広いもんだ・・・」

「そうだな・・・確かに広すぎだ」

俺と一夏専用となっているロッカールームは、静か過ぎる。静か過ぎて逆に落ち着かないのだ。

そのとき、不意に近づいてくる気配。それを感じ取ったので振り向くと、そこには二年生の知らない人が俺の口に扇子を当てていた。その人は俺の口に扇子を当てたまま自分の口に人差し指を当て「しー」と俺にしか聞こえないようにいった。そして・・・

「だーれだ？」

同級生よりは大人びている声でそう言い、一夏の両目をふさいだ。一夏は困惑しているのか動かない。

「はい、時間切れ」

手を離れた。そしてようやく一夏が振り返る。

「・・・誰？」

「誰ですかだろ」

一夏は目の前にいる人が二年生と言うことに気が付いていないよ

うなので教えた。そして俺もその人を見る。その二年生は余裕を感じさせる雰囲気を放っていた。それも人を落ち着けるような。そして知らない人がイタズラっぽく笑っているところを見ていると・・・

じ、時間がっ!!

知らない二年生の奥にある時計がふと目に入る。その時計はここから教室までギリギリ間に合う時間をさしていた。

「すみません、俺は先に行きます」

一応二年生なので敬語を使い、そのロッカールームから急いで教室まで走った。

「ま、間に合った」

とっくに授業の始まりは過ぎていたが、教室に大急ぎで入る。織斑先生がまだ来ていないみたいなのでさっさと着席しようとしたのだが・・・

「どこがだ？」

「へっ？」

急に襟首をつかまれた、引きずられる。恐る恐る振り返るとそこには……

「・・・織斑先生」

鬼が立っていた。クラスの人の表情を窺うと「あちゃー」と言った顔をしている。

「一夏は？」

「たぶん、まだです」

「そうか、わかった。・・・一夏が来るまでそこで立っている」

織斑先生が指したのは廊下だった。反論ができる相手ではないので黙ってそれに従った。

その後一夏が来た後れた理由を説明したのだが、その理由が・

「見知らぬ女子生徒と話していた」

俺の体は無気力感が襲う。この一夏の調子じゃ何を言っても無駄な雰囲気だったので全てを受け入れることにした。その後シャルロットによるラピッド・スイッチの実演により蜂の巣にされかけた。

翌日。SHRと一限目の半分の時間を使って全校集会が行われた。

もちのろんで男は俺と一夏だけである。あまりにもアウェー感がすごいので肩身が狭くなってしまうている。しかも女子はざわざわと五月蠅い。

もう……いやだ…

「それでは、生徒会長から説明をさせていただきます」

静かにそう告げたのは生徒会役員の一人だろう。その声でざわついていた女子が静かになっていく。

「やあみんな。おはよう」

「!!」

「へ？」

俺は素っ頓狂な声を上げるほど、一夏言葉を失うほど驚いた。壇上の上に立っているのは見間違えるはずがない、昨日の怒られる原因となった人だ。

「ふふっ」

その人と一瞬だけ目が合う。すると、壇上にいる生徒会長が微笑む。

やべっ、何か嫌な予感が・・・

未だに一度もはずしたことがない第六感が危険を察知する。

「さてさて、今年は色々と立て込んでいてちゃんとした挨拶がまだ

だったね。私の名前は更識楯無。君たち学生の長よ。以後、よろしく」

そんな生徒会長　更識楯無には異性同姓を問わず魅了するらしく、周りにいる女子が熱っぽいため息を漏らす。

何というか……とらえどころがなさそうな人だな……

「では、今月の一大イベント学園祭だけど、今回に限り特別ルールを導入するわ。その内容というのは」

扇子を慣れた様子で取り出し、横へとスライドさせる。それに応じるように空中投影ディスプレイが浮かび上がった。

「名づけて、『各部対抗織斑一夏及び神代宙争奪戦』！」

「
・
・
・
はあ
」

「え
・
・
・
？」

[illegible]

俺はため息を一夏は驚いている声を、そして俺らを除く全校生徒はホールがゆれるほどの叫び声をあげる。

「静かに。学年では毎年各部ごとに：ry」

要約すると毎年この学園では部活の出し物で競争するらしい。その競争で上位の組に入ると特別助成金が入る仕組みだったが、今年は俺たちを取り合うようにした。

それを聞いた女子は・・・

「うおおおおおっ！」

こんな声出せるのか？　と思うほどの猛々しい雄たけび声を上げる。

「素晴らしい、素晴らしいは会長！」

「こうなったら、やってやる・・・やああってやるわ！」

「今日からすぐに準備始めるわよ！　秋季大会？　ほっとけ、あんなん！」

あちらこちらでやる気を出した部活の声が聞こえてくる。

秋季大会をあんなん呼ばわりはないでしょ・・・そのことだけは取り消せよ

「というか、俺の了承とかないぞ・・・」

「確かに・・・」

俺と一夏は生徒会長を見ると

「あはっ♪」

ウィンクでお返しされた。

それだけ？　それだけで巻き込まれたの俺たち・・・？

心がorz状態の俺と一夏は呆れた顔で周りを見渡す。

「よしよしよしっ、盛り上がってきたああ！」

「ねえねえねえ、一夏君と宙君どっちが欲しい？」

「私の部活は宙君かな」

「良かった。私たちは一夏君だから」

「今日の放課後から集会するわよ！ 意見の出し合いで多数決取るから！」

「最高で一位、最低でも一位よ！ そして両方ともゲットオ！」

周りは本人たちの考えていることも知らずに好きなことを言っている。

この学園生活は俺たちに女子は一度火がついたら止まらないことを教えてくれた。

第54話 生徒会長 更識楯無登場!! (後書き)

どーでした？

次回はいつになるのやら……

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第55話 クラスの出し物（前書き）

おはようございます。S i r a s uです。

今回もまたまたアンケートです。あとは後書きで!!

ではでは第55話、どうぞ

第55話 クラスの出し物

第55話

同日の放課後、教室では特別HRが行われた。内容は学園祭でのクラスの出し物だ。女子はわいわいと騒いでいる。一応一夏がクラス代表（と言う名の学級委員長）なので最終確認をしているのだが・

渡された用紙に書かれていた内容は『一夏と宙（女装で）のホストクラブ』『男子とツイスター』『男子とポツキー遊び』『王様ゲーム』『一夏と宙のビュエル♪』

「却下」

「却下、却下、却下、却下、却下！！」

一夏、俺の順で拒否する。もちろんこんなの却下だ。内容が全部ダメだ。

特に女装とか俺はもう二度とやりたくないし、ビュエル♪なんてまったくもって断固拒否する。

「ええええええー！ー！ーっ！！」

女子が大音量のサラウンドでブーイングを叫ぶ。

「あ、アホか！ 誰がうれしいんだ、こんなもん！」「こんなの許すと思ってるのか？」

「私はうれしいわね。断言する！」

「そうだそうだ！ 女子を喜ばせる義務を全うせよ！」

「織斑一夏と神代宙は共通財産である！」

「他のクラスからいろいろ言われているんだってば。うちの部の先輩もうるさいし」

「助けると思って！」

「救世主^{メシア}気取りで！」

男子と言っても二人だがそれと女子の二グループに別れての言い争い。必然的に数が多い女子が有利になるがこちらは一步も引くことができない。

こんなときに頼りになる千冬さんも今は不在だ。理由はめんどくさい。

教師がそれいいのか？

こんなことを少しでも口に出せば一瞬で死ぬことになるので心中だけにしておく。最近俺は我慢をしすぎだと思いが気のせいだろうか？

「山田先生、ダメですよね？　こんなおかしな企画は」

「えっ！？　私に振るんですか？」

一夏が山田先生にふるが、案の定頬を赤らめ否定しなかった。

「とにかく、普通の意見をくれよ」

俺はうんざりしているのでつぶやくように言った。心底、あきらめている。

「メイド喫茶はどうだ」

そう言って来たのは先日メイドの格好でバイトしていたラウラだ。その様子を見ていなければ俺は一夏と同じく怪訝な顔をしているだろう。クラスのみんなも。

「客受けはいいだろう。それに、飲食店は……」

急にすらすらとしゃべり出すラウラ。しかも、要点をきっちりまとめているのでわかりやすかったが、クラスのみんなもラウラのこんなキャラを知らないので戸惑っている。

「え、えーと……みんなはどう思う？」

一夏がみんなにそう聞く。ここは悔しいが一夏にしかできない。俺はクラス代表決定戦（クラスの女子情報）の後に来たから。

「いいんじゃないかな？　一夏と宙君には執事か厨房を担当してもらえばオーケーだよな」

そう言ったのはシャルロットだ。

一夏は呼び捨てで俺は君付けか……まあ、別に良いか。

そんなことを考えたが本当に関係ないことだったのですぐにやめた。

シャルロットの言った事はクラスのみんなに受け入れられ、一気に盛り上がる女子達。

「メイド服はどうする！？ 私演劇部衣装係だから縫えるけど！」

クラスの女子がそう答える。

「メイド服ならツテがある。執事服も含めて一着だけ貸してもらうか聞いてみよう」

またもや発言したのはラウラだ。ラウラはみんなに注目されているのが恥ずかしいのか発言したあとは俺の後に隠れた。

「・・・一着？」

ラウラが隠れているのは別にかまわないが・・・一着っておかし
くね？

「ラウラわかってるじゃん。それでいいからね」

「えっ」

「んじゃ、言ってくる」

一夏が先生へ報告しに行く。しかも、早足で…

「待てっ・・・ちよっ」

一夏を追いかけようとしたらクラス中の女子にバリケードを張られた後、飛び込んできた。俺の抵抗むなく俺は男なのにメイドをすることに・・・

これで、俺たちのクラスはメイド＋執事喫茶あらため『ご奉仕喫茶』となった。

「宙君はなんになったの？」

そう聞いてきたのは智花だ。現在俺の周りにはいつもの三人とラウラそしてアリシアがいる。場所は第三アリーナ、練習中だ。

「ご奉仕喫茶だってよ。まじめに嫌なんだけどな・・・今回も」

「まーまー、気にしたら負けよ」

「優は他のクラスで女だからそう言えるんだよ。一度俺は女装しているんだ、わかるだろ」

「しかし宙様、あのときの女装は素晴らしかったですよ」

葵はほめているつもりでそれを言っているだろうが・・・

「ほめ言葉じゃねえし、それ」

男が女装してそれがどれだけ綺麗だろうが、ほめられることほどうれしくないものはない。俺はそう思っている。

「それよりもお前たちは何をするんだ？」

「こっちは普通の喫茶店だよ」

「普通が一番いいよ」

本当にそう思っている。俺や一夏の周りは普通じゃなうことが多い。しかも、結構おおごとが・・・

「そうだね。普通が一番いいよね」

智花がそれに乗乗する。智花が常識人で本当に良かったと思う。

「そんなに宙の女装はすごいのか」

この場で一人だけ女装のことを知らないアリシアが聞いてくる。

・・・思い出したいくはないんだが

「すごいわよ。私たちが自信をなくすほどにね」

そんな俺の気持ちとは裏腹に優は答える。

「それほどなのか、一度は見てみたいな」

アリシアは普段無表情なだけに驚いた表情や興味津々な表情は珍しいので思わず見とれてしまう。そこへ三人がジトー、とした視線が来た。

「へえー」

「ほー」

「ふーん」

本当に仲が良い三人だ。いつも俺の嫌なところで同時に反応する。

「これは、違うぞ。違うんだ」

なんとか三人の誤解を解こうとするが・・・

「何が違うの？」

「意味がわからないわ」

「何をおっしゃっているのですか」

関係ないよ、といった表情での三連コンボ。結構これが効く。
その後三人の誤解を解くため練習を中止してまで機嫌を取った。
ちなみにこの時、一夏は生徒会長にボコボコにやられていたらしい。そして・・・

「あれ？ 一夏さん」

「一夏じゃないか。今日はどうしたんだ？ 確か第四アリーナで練習だったよな」

智花が最初にアリーナの訪問者に反応した。それに俺が続く形となる。機嫌を一通り取り戻させたところで一夏が生徒会長を連れてアリーナへ来たようだ。なぜかううもある。

「私が今日から一夏君の専属コーチをすることになったの、よろしくね」

「そうですか」

「興味ないの？」

「そうですね、特に」

一夏が隣で「ひどいっ!」とか何とか言っているが疲れているので無視する。そして、そのまま帰ろうとした。

「宙、ちょっと訓練に付き合え」

一難去ってまた一難、三人の機嫌を取り戻した後はラウラの訓練に誘われた。断ろうと一度は思ったが・・・そんな雰囲気じゃないのでやめた。

ラウラはそのときにここにきた理由を教えてくれた。どうやら俺がラウラに訓練していることを知らせていなかったなので、会長にそのことを聞いて激怒、ということらしい。

その後俺とラウラとアリシアは一夏の訓練のために模擬戦を会長にやらされた。

疲れているのに・・・

俺は部屋に返った直後にベットに飛び込んで爆睡したのは言うまでもない。

それから俺の生活は安定期に入った。理由は一夏が会長に取られたこと、そのことにより俺の方向へ来る面倒ごとが減ったからだ。

今思えば俺の不幸のほとんどは一夏が持ってきたことになっていた。
といっても・・・面倒ごとがなくなったのは良いけど、少し寂しいな・・・

「呼びましたか？」

「どわっ!？」

俺の隣から急に、本当に急に現れたのは葵だった。この光景もとてもなく久しぶりだ。

「お前一体どうやって入ってきたんだよ」

鍵は閉めていたはずだ。

「扉からですが？」

そう言って取り出したのはピッキングツール。しかも、見た目でわかるほど使い込まれている。

「・・・・・・・・・・」

言葉を失い、頭痛がする。

「気分が悪いのですか」

手を頭に当てていたので、葵は気遣いをする。

確かに、確かに寂しいと思ったけど!! 別にこんなイレギュラ

ーが起これと念じたわけじゃないぞ!!

「・・・なんでもないんだ。そう、なんでもない」

俺は何も考えなくなかったので、葵を強引に押し倒し・・・た？
足が不運なことに何もないところでつまづいた。

「あっ、宙様。そんな・・・恥ずかしいです」

現在ベッド、葵、俺と言った状況。葵はうつとうしいように伸びている前髪のせいで目こそ見えないが、確実に頬を赤らめている。その状況を素早く打開すべく素早くたたせて扉の向こうまで押し返した。

何もしていないぞ!! 本当だからな。ただ単に力加減を間違っただけだ。

全力で誰かに言い訳をする。その場に二人：いや、三人がいないことを本当にうれしく思った。

いよいよ明日は待ちに待っていない学園祭。まだこのときは誰もあんなことになろうとは誰も考えていなかった。

第55話 クラスの出し物（後書き）

どーでした？

アンケートですが、六巻のテーマについてです。

これは自分で言うのもなんですが、重大なことです。テーマが違えば話も変わってくるので……

テーマは

『過去の災禍そして生まれる情』『信じるもの』『義と悪』です。

できればどれが良いか答えてください。お願いします。

誤字脱字訂正などがありましたらよろしくお願いします。

P. S さまよう人様すいません。一つ書き忘れていたので、ここで追加させて置きます。

第56話 文化祭っ!!

第56話

いよいよやってきた学園祭当日。

一般公開はしていないのでオープニングセレモニーなどはなかったが・・・

『野郎共っ!! 今こそ全力で男を勝ち取るときだ。テンション上げていこうぜーっ!!』

『おおおおおおおおおっ!!』

放送部の誰かによって全員のテンションは最高潮だ。……一生恨んでやる。

「なあ、一夏」

「なんだ？」

「立場逆じゃね？ 普通、男が女を・・・だよな」

「気にしたら負けだ」

そして、二人して肩を落とす。しかし、肩をずっと落としているわけにもいかない。

「いらっしゃいませ♪ こちらへどうぞ、お嬢様」

接客している中で一番、と言うぐらい楽しそうにしているシャルロットがまたお客を案内している。

ちなみに、接客しているメンバーは俺、一夏、シャルロット、セシリアそして箒とラウラだ。アリシアはキッチンで戦闘中。ちなみにアリシアも俺の女装しているところを見て自信を失っていた。

「ラウラがメイドね・・・一度見たとはいえ、あれはちょっと」

そう言った宙の視線の先にはとてつもなく不機嫌な表情で接客をしているラウラがいる。

「ちょっと、その人。テーブルに案内してよ」

聞きなれたこの声の持ち主は鈴だ。

「鈴か、わかった。今すぐに・・・」

「ちよっ、ちよっと待って・・・あんた誰？」

「誰って・・・神代だけど」

「はあっ!？」

鈴が驚くのも良くわかる。なぜなら俺の今の格好はメイドだからだ。

早朝から女子に呼び出しをくらい、セットした。今回は薄化粧をして黒髪の長髪のカツラをつけただけで終わった。ボイスチェンジャーは使っていないので声はそのままだ。その点については・・・

『声は変えないでね?』

『なんで』

『そっちのほうがいいから』

まったく意味がわからない理由で押し切られた。だから地声でメ
イドをしているのだが、かなりの女子が同じように驚く反応がする。
目の前で目を見開き固まっている鈴を見て・・・

「一夏、お前指名のお客様だ。よろしく」

一夏に鈴を押し付け、ほかの俺を指名しているところに行った。
そこには予想外の人物が・・・

「きちやった、えへへ」

「来たわよく」

「来ました」

「テーブルはこちらになりますね」

声色を変えて関係ない人のようにテーブルへ案内し、すぐに立ち
去ろうとしたところで、ガシッと肩をつかまれた。

「宙君を指名します♪」

「あたしが、あんたの正体を見分け切れないとでも？」

「宙様、綺麗ですよ」

なるべく、めんどくさそうなことを避けたかったのだが無理だっ
た。

智花がうれしそうなのでよしとするか……

「お客様、こちらがメニューになります」

どうせめんどくさいことになるなら、とさっさと済ましたかったので音速で持ってくる。

「ふーん、面白いわね・・・じゃあ、『メイドにご褒美セット』で」

「えー、ケーキセット三つですね。わかりました。少々お待ちください」

優の言った言葉を脳内で変換し、ダッシュでその場を離れようとしたがガシッとまた肩をつかまれる。

「宙君、お客様の希望したものを持ってくるのが普通だよ」

そう言っている智花の顔は真剣そのもので二言を許さないものだった。

「・・・はい、かしこまりました。『メイドにご褒美セット』ですね。少々お待ちください」

そして俺はそのセットを受け取った後、智花達の席へ……

「お待たせしました。お嬢様」

そのセットはポッキーとアイスティーのセットで値段もお手頃価格。結構な女子が俺と一夏を指名してこれを頼む。

勘弁してくれよ

内心そう思っているのだが、一応はお客様なので隠しておく。

「うん」

「早いわね」

「宙様、私がしましょうか？」

この中で唯一葵だけが落ち着いていない。理由はたぶんだが、俺にこんなことをさせているのが嫌なのだろう。

いつもいつも、俺の世話ばっかするからなく。仕方ないか葵に関してはいつもの感謝のつもりで接客することにした。そして、その三人の前に座る。

そのことに驚いているが、無視してさっさと済ませる。

「説明いたします」

「ポッキー食べさせるんだよね」

「食べさせるのよね」

「食べさせていただきます」

えー、お客様はご理解のうえでこのセットを頼んでいたみたいですが

「知ってたんかい」

思わずつつこんでしまった。というかつつこまずにはいられなかった。

「言葉遣いがダメだよ」

「そうよ、私たちはお・客・様」

「私の真似をすればよろしいかと」

口調を怒られてしまった。

「お見苦しいところをお見せしてしまってますいませんでした。では、早速しましょうか」

「はい、あーん」

「あーん」

「あ、あーんです」

現在の状況は三人にポッキーを差し出されている女装したメイドの男、という状況だ。

一体どうなっているんだ？

この不思議すぎる空間は理解できない。たぶん、フェルマーの最終定理ぐらい難しいはずだ。無論、一瞬だけ躊躇したがすぐに腹をくくり、パクツと銜^{くわ}えた。

パキツとポッキーは口の中で碎け溶ける。確かに甘くておいしいのだが、そんなことを考える前に周りの視線が痛い。そんなときだった。

「どうもー、新聞部でーす。話題の織斑執事と神代女装メイドを取材しに来ましたー」

新聞部の黛薫子の登場だ。ことあるごとに俺たちの写真を撮りに来るので結構な顔なじみになりつつある。

「写真取らせてねー。もちろんツーショットでー」

すると何かが高速で接近して来る。

「撮るぞ」

その近づいて来た何かはもちろんラウラで、こいつも有無を言わせなかった。

俺ってもしかして…尻にしかれるパターン？

「じゃあ、撮るねー」

俺が思考をやめたところですぐにカメラを構える新聞部。

「ちょっと待て」

そして手を前にかざしストップを急にかけるラウラ。
一体どうしたんだ？ いやな予感しかないが……

「しかし、なんだな。私とお前ではそれなりに身長差があるな」

確かにラウラは俺の胸ぐらいの身長だ。

どうせ、言いたいことぐらいはわかりますよーだ。

「そうだな・・・じゃあ、ほいっと」

なので抱きかかえた。足の膝裏に手を入れて肩を支える。いわゆる、お姫様抱っこ。

メイドにお姫様抱っこされるメイドって・・・

そのことに目を光らせた新聞部の人。さすがだと思う。

「お、おおお落ち着け宙」

「なんでだ？ 嫌か」

「い、いやではない。いやではないが・・・その・・・恥ず」

「はい、チーズ」

シャッターの音がなって顔を真っ赤にしていたラウラを撮る薫子先輩。その顔は満足した顔で、ほんのりと上気している。その後は一夏と他のメンバーが一人ずつ撮っていった。

俺が一夏の写真会で暇をしていると、携帯が不意に鳴る。

『もしもし』

『お兄ちゃん。今、校門のところに來てるんだけど広すぎて・・・』

そうそう、俺は学園祭の招待券を妹の香にあげたんだ。今の今まで完璧に忘れていた。

『了解した。すぐ行くから待っててね』

携帯電話の通話終了ボタンを押し、クラスの人に伝えようとしたら

「行ってきた良いよ。ふふふ」

「ほら、早く行く!」

「待たせたらダメだよ」

会話を聞かれていたようで、暖かい目で見送られた。その理由はまったくわからなかったが香を一人で待たせるのも悪いので、走って校門へ向かった。もちろん女装メイドで・・・

「ごめん、待った？」

「？ あ、あの・・・誰ですか？」

校門で一人待っていた香へ話しかけた。返ってきた返事に俺は落ち込んだ。そして俺の今の状況に気が付く。

・・・メイド服じゃん

「俺だよ、俺」

何とか俺のことをわかって欲しかったのであきらめずに話しかけたところ

「詐欺なんかに引っかけりませんよ」

さらに警戒された。もう、めんどくさかったのでカツラをはずす。

「お兄ちゃん!？」

「やっと、わかってくれたか」

「はい、けど・・・その格好は？」

「いろいろな事情があるんだ」

さらに落ち込んでいるところをさっしたのか、香はそれ以上話しかけなかった。

「じゃあ、行こうか。まずは俺のクラスで良いよな。まだ出歩く許可貰っていないんだ」

「はい」

そして学園内に俺たちは入った。

第56話 文化祭っ!! (後書き)

どーでした？

パッケージは今日までとなっております。急に期限を発表してすいません。

アンケートは今週いっぱいまでです。

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第57話 シンデレラ

第57話

どうなってやる。

これは俺が妹に学園を案内するためにクラスによったのだが・・・

「きゃー、彼女よ」

「かわいいー」

「神様はいないのかな」

「名前は？」

俺と香はもてあそばれている。いや、もみくちやにされていた。

「やめろ」

まずは誤認を解くためにクラスの女子を止めようとする。話を聞いてもらうには仕方のないことだったのだが・・・

「こんな可愛い彼女がいるなんて、幸せ者だね」

「ふっふっふ、少しだけいじめちゃえっ!!」

「遊んで、遊んで」

止まらなかった。もうやめてくれ……

「そいつは俺の妹なんだ」

「あ、そうなんだ」

「この席に座って座って」

「ちっ」

「気づいてたのかよっ！！　そして最後のちっ、てなんだ。ちっ、て」

「あはは」

「これがメニューだよ」

「まあまあ」

頭痛がしはじめたのでこめかみを押さえる。そしてメニューをキラとした目で見ている香を見る。

そういえば・・・こんな事あいつ初めてだったよな？

香は昔から体が弱いのであまりが外出した事がない。たぶん、メニューなんて見た事もなかったんだろう。興味津々の表情で見た。

「初めてだっけ」

「うん」

「そうか。けどな、これは普通のやつじゃないからな」

「そうなんだ」

俺の言葉はたぶん香の耳には届いていないはずだ。そのような気の抜けた……というか棒読みな返事だった。これが普通と思われるといういろと残念な娘になるが、今は楽しそうなのでこのままにし

ておこうと思う。

「あれ？ 宙君発見」

「ん？ 生徒会長、どうしたんですか？」

声のした方向を見ると生徒会長 更識楯無がいた。口元を隠している開かれた扇子には『神出鬼没』と達筆な字で書かれていた。

「ちよつと、良いかな？」

「今はちよつと、むr」

「Ok？ ありがとう。早速こっちにきて」

何も言わせないように口を押さえて引っ張られた。教室をものすごいスピードで突っ切りどこかに行こうとする。

「ちよつ・・・おまつ・・・」

抵抗という抵抗すらできずに連れて行かれる俺。そんなことをしている生徒会長は・・・

「妹さんも参加してね」

捨て台詞をいいながら走っている。人外だろ、この人・・・
そして連れて来られたのは、第四アリーナの更衣室。そこで待っていたのは王子様姿の一夏だ。目が合うと一夏も何か同情しているような感じがした。

「おまえもか・・・」

「おまえも生徒会長に？」

「ああ」

「そうか」

そしてロッカーの中に衣装があると聞いていたのでロッカーを開いた。そこには・・・

「は？」

閉めた。絶対、見間違いだったのもう一度このロッカーなのかを確認し開けた。

「まじで？」

もう一度閉め、しつこいようだが確認し、開ける。

「・・・・・・・・」

そこにはお姫様のような服とカツラが入っていた。置手紙もきちんとおいてある。

『どうだった。楯無のお姉ちゃんからのプレゼントだよ。さっさとそれ着て出てきてね』

そう書かれていた。選択肢もないようなのでそれを着て、更衣室から出る。

「うんうん、似合うわね。はい、ガラスの靴」

「はぁ・・・」

一夏はすでにスタンバイ状態らしい。そんなことを聞きながら強化ガラスでできている靴を履く。

会長は俺が靴を履いたのを確認すると・・・

「さて、そろそろ始めまるわよ」

会長に連れられて舞台袖に移動し、始まりを待つ。するとすぐにブザーが鳴り響き、証明が落ちる。そして、幕が上がりライトが点灯する。

「むかしむかしあるところに、シンデレラと言う少女がいました」

内容は普通のようなのだが、それだと俺が女装する必要がわからないので不安になってくる。絶対これは何かある。そう俺の勘が告げていた。

「否、それは最早名前ではない。幾多の舞踏会を抜け、群がる敵兵をなぎ倒し、灰燼をまとうことさえいとわぬ地上最強の兵士たち。彼女らと呼ぶにふさわしい称号・・・それが『灰被り姫』（シンデレラ）！」

はい、予想通りです。普通じゃない！

俺と一夏は同時にお互いの方向を向き合う。その表情から一夏も俺と同じく困惑している事を読み取る。

そんな俺たちの困惑を無視しナレーションは続く。

「今宵もまた、血に飢えたシンデレラたちの夜が始まる。王子の冠と王女のガラスの靴に隠された隣国の軍事機密を狙い、舞踏会という名の死地に少女たちが舞い踊る！」

「だってさ」

「いや、俺に振られても」

「もらったあああ！」

いきなりの叫び声とともに投げられたのは中国の手裏剣こと飛刀。それを片手の指ではさんでつかみ。

「あぶなっ」

そして俺の目の前を通り過ぎたのは鈴だった。鈴は白地に銀のあしらいが美しいシンデレラ・ドレスを身にまとっている。

「私の狙いは・・・一夏っ！！」

そう言い捨て蹴りの動作に入る。それを見たたん反射的に体が動き一夏を突き飛ばす。

「あぶなーい」

棒読みで読まれた言葉にももちろん誠意などなく、ただなんとなく一夏を突き飛ばした。

がしゃーん、と音を立てて崩れ去るセット。目を回している一夏に赤いポインターが近づく。そしてパァン！、と一夏の顔の近くが

弾けとんだ。

「のわあっ!？」

一夏はそのことに跳ね起き辺りを見回す。どうやらスナイパーライフルでの射撃のようだが、発射音とマズルフラッシュが見えないところを見るとサイレンサーを装備しているようだ。

「殺し合いなのか？」

一夏が走り出して逃げ去っていくのを見送りながら、俺に走って近づいてくる人からちぎっては投げちぎっては投げを繰り返している。そんなときだった、不意に銃口をこちらに向けていたのを見たので、反射的に銃口から身を外す。

パン！ 発砲音とマズルフラッシュが同時に発生した。なんとか回避に成功したが・・・

「だから、銃とか飛刀とか危ないだろうっ！」

「大丈夫、私のはゴム弾だから」

そう言って物陰から出てきたのは智花でその手にはベレッタが握られている。笑顔で銃を向けられているのでまじめに怖い。それに気を取られていると俺の足元の地面にチュンチュンとはじけた。

飛んできた方向を確認するとそこにはサイレンサーを装備したM4A1を装備した優がいた。

撃たれた地面をどう見てもゴム弾は発見できず、床のセットが確実にえぐれていた。

「それ本物だよね？」

「別に良いじゃない・・・その服防弾使用らしいよ」

「らしいっておかしいだろうが、それで撃つてくんのかよ」

そして俺の言葉を無視し優は銃口を向ける。そのせいで軽く絶望している俺の後ろと優とは逆の横からタクティカル・ナイフを二本持ったラウラとサブマシンガンを装備した葵が現れる。

「邪魔者は排除しておいたぞ」

「無粋な方々には眠ってもらいました」

二人のそんな言葉に周りを見渡してみると、その言葉通りにみんな気絶していた。

「逃げないでね」

「避けちゃダメよ」

「観念してください」

「さっさと死ね」

どれも無理な事ばかりだが、俺の今の現状は『四面楚歌』だ。逃げ場は上しかないじゃん。

上空を見ても飛んで届く範囲につかむところがないのであきらめる。

宙を囲んでいる四人の心の中にはある言葉が・・・

『生徒会長権限で宙君のガラスの靴を取ったものには同室を許可しまーす』

生徒会長の言葉は四人をやる気にするには十二分だった。それど

ころか銃まで出してきたほどだ。

そんなことを知らない宙は現在の状況をどうしようかと戦意を喪失した中で試行錯誤を繰り返していた。考えても良い案は出てこなかった。そこで両手を挙げ降参のポーズをとった。

すると、四人全員が微笑み近づいてくる。そんな絶体絶命の宙の目の前にするするする、とロープが降りてくる。最初は驚いたがすぐにそれをつかんだ。するとロープは誰かに引っ張られる、それに身を任せると体はどんどん空中に上がっていった。

「・・・待って！」

「ちよっ、反則じゃない」

「卑怯ですよ」

「貴様っ！」

四人はロープを切ろうと銃を撃ったりナイフを投げたりしているが、不規則にゆれている俺の体やロープに当たることなくセットの天井へとたどり着いた。そして、そこにいたのはアリシアだった

「お前も俺を狙っているのか？」

一応敵でないことを確かめる。四人がいきなり襲い掛かってきたのでアリシアにもその可能性はあると思ったからだ。

「いや、私はお前と二人きりになりたかったただけだ。・・・ここじゃダメだな。こい」

手招きをした後、アリシアは歩き出した。宙は一瞬だけ戸惑った様子を見せたがすぐにアリシアの背中を追っていった。

アリシアの背中を追ってきた場所は屋上だった。その間は誰にも会っていない。

「・・・ここならいいか」

おもむろに周りを見渡し確認した後、宙の方向へと向く。

「どうして、俺と二人きりに？」

アリシアの行動は宙には理解できなかった。二人きりになる理由はたいてい告白等しか思いつかなかったもので、さらに困惑してしまう。

「告白じゃないから、安心しろ」

「・・・そうか」

さすがに安心はしなかったが、警戒は解いた。

「最初に言っておくがこれは、勧誘じゃない。命令だ」

そして俺の安定期は崩れることに……

第57話 シンデレラ（後書き）

どーでした？

本日二度目の投稿です。

うまくいけば後一回ぐらいできるかも……

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第58話 接触 亡国企業

第58話

「ガラスの靴を渡せ!？」

「そうだ」

「何で? 話の脈絡がわからないんだけど」

「気にするな。そっちのほうが何かと楽だからな」

シンデレラの乱により、絶体絶命のピンチをアリシアに助けてもらったのだが命令されてしまった。

「別にガラスの靴ぐらい良いんだけど・・・もしかしてあいつらが狙っていたのこれか？」

「大方そうだろう」

「まあ、いいか。・・・・・・ほれ」

「ありがとう」

ガラスの靴をアリシアに渡した。すると彼女が妖艶に微笑んだが気にしないでおこうと思う。というか気にしたらダメだ。そう、ダメなんだ。

「ふむ、侵入者か・・・すまない、私は行くからな」

オープン・チャンネルに学園に侵入者が来たときのアラームが鳴った。普通ならマニュアルどおりに逃げるのだが、今回は専用機持ちだけらしいので避難をせずに侵入者の迅速な排除または捕縛が求められる。

だが、アリシアはそのどれにも当てはまらない行動をした。俺と同じ胸元にある黒いペンダントから光の粒子が出る。その光の粒子はアリシアの体を包み込み、そしてISになった。そのISは「アバランシュ」ではない、漆黒のISだ。

そして、彼女は口元以外を覆うバイザーを付けて飛び立った。

「・・・・・・・・」

それを無言で見送った宙はその体を翻し食堂へと足を運んだ。

「クソッ！ ドイツのISだな!？」

「その通りだ、『亡国企業』」

学園の近くにある公園にラウラの冷たい声が響く。そこでは一人の女性がAICにとらわれていた。冷たい声のラウラは「ドイツの冷や水」と呼ばれるにはふさわしい威圧感を持っていた。

「動くな。すでに狙撃手がお前の眉間に狙いを定めている」

「くっ・・・！」

「洗いざらい吐いてもらおうか。貴様らの組織について」

軍人であるラウラは、かねてからその秘密結社の情報をわずかに持っていた。そして、今回の襲撃。そして、ISによる戦闘。それらのことから、組織が相当に巨大なものだと理解していた。

（まあ、宙ではなく一夏を狙っただけ、見る目がないがな・・・）

「お前のISはアメリカの第二世代だな。どこで手に入れた。言え」
「言うわけねーだろうが！」

ISのコアは束しか製造できない。よって奪ったことになるのは当然だ。そして、国防に関する重大な過失であるため、どの国も盗まれたことを公にはできない。

ISの強奪計画を企て実行する組織力は決して小さくはないということだった。

「よかろう。私は尋問の心得は多少はある。長い付き合いになりそうだな」

そう言ってラウラが接近しようとした瞬間、セシリアからのプライベート・チャンネルが開かれた。

『離れて！ 別々の方向から二機来ますわ！』

「何・・・？」

ラウラがセンサー域を拡大した瞬間に、右からはレーザーで右肩を貫かれ、左からの実弾で左肩を撃たれた。ISの装甲を装着していなければ死んでいた。

すぐに眼帯をはずし『ヴォーダン・オージェ』を発動し、二発のレーザーをギリギリでかわす。

『ラウラさん！ 下がって！』

セシリアはすぐに飛来位置を割り出し標準を向けた。ロングレンジ用スコープに映し出されたのはセシリアが知っている機体。

『そんな・・・まさか！？』

その機体はBT二号機『サイレンと・ゼフィロス』。シールドビットを試験的に搭載した機体であり、基礎データに『ブルー・ティアーズ』が使われている。

「何をしている！？ セシリア、撃て！」

「くっ・・・！」

すぐさまレーザーライフルによる狙撃を試みたが、撃つ前にバァン！、とライフルが弾けとんだ。その弾けとんだ後にキィイインツ！、と発射音が聞こえた。

そしてすぐにそれを行った機体を確認する。

（黒い・・・IS！？ そして超長距離射撃を高速戦闘下での精密射撃！？）

武器を失ったのでビットを射出するが、黒いISの肩からパージした物体が飛来し、二機をすぐに打ち落とす。残りの二機も『サイレンと・ゼフィロス』のビットに打ち落とされる。

（まさか、BT兵器！？　それも八機同時制御と六機同時制御！？）

黒いISにもBT兵器を装備していることに驚愕したが、すぐに思考を切り替えミサイルを飛ばす。

自身の真下に撃たれたミサイルを空中で姿勢制御をとらせ、襲撃者の死角から向かわせる。

それは必中を確信したセシリアだったが、次の瞬間信じられないことが起こった。

「な・・・！？」

ビームが弧を描いて曲がり、ミサイル・ビットを打ち落とした。

それは今まで声を出すことはなかったセシリアに声を出させるほどの信じがたい光景だった。

「何をしている！　回避行動をとれ！」

「っ———！？」

ラウラがセシリアを突き飛ばし、代わりにレーザービットの射撃を浴びる、シュヴァルツェア・レーゲンの装甲が飛び散るのを見て我に返るセシリア。しかし、そのときすでに遅く襲撃者は女性の元へ行っていた。

「迎えに来たぞ、オータム」

「てめえ・・・私を呼び捨てにすんじゃねえ！」

ラウラやセシリアは黒いISが遠くから援護射撃をしているためなかなか近づくことができない。その間にサイレント・ゼフィロスはピンク色に光るナイフでAICを引き裂き、オータムの自由を確保した。

「この程度か、ドイツの遺伝子強化素体」
アドヴァンスト

黒のISはいつの間にかサイレント・ゼフィルスに近づいており隣に立っていた。ラウラはサイレント・ゼフィルスの操縦者が嘲笑の笑みに歪むのを確かに見た。

「貴様・・・なぜそれを知っている」

「言う必要はない。ではな」

オータムを掴み、そのまま飛来した方向へと離脱していく。その間に黒いISが時間を稼ぐ。

「邪魔だっ！」

叫び声をあげ両手のプラズマ手刀を展開し斬りかかる。それをブレードライフルで受け止めた黒いISは背面にあるグレネードランチャーとレールガンをを起動させ標準を合わせる。

ラウラはすぐに距離をとろうとするが、その前に撃たれて両の足を失った。これで満身創痍となったラウラに黒いISの操縦者は視線を向ける。ラウラからは黒いISの操縦者の顔を見ることができない、唯一見せている口元にも何の変化もなかった。

「・・・・・・・・」

無言のまま黒いISは離脱していったサイレント・ゼフィロスの方向へ機体を向けた。その背面部の装甲が開き、一気に噴出しその場を離れた。

「ラウラさん！　すぐに学園に連絡を！　わたくしは追跡します！」

「やめろ！　もう追っても無駄だ。それに、追いついたところで今の我々では敗北は目に見えている」

ぎゅうっと悔しさに唇をかみ締め、セシリアは敵が飛翔していった方向をにらむ。その圧倒的な実力差を見せられ、しかも証拠を残すことなく去っていった襲撃者二人にラウラとセシリアは嵐の予感を感じ取っていた。

宙は食堂で軽い間食をとったあとに部屋に戻り制服に着替えていた。彼の頭に残るっているのは放課後での会話。その会話が本当なら・・・

「宙、いるか」

今宙が考えてたことの張本人が帰ってきた。

「いるよ」

「そうか」

その張本人の手には大きな旅行かばんがあった。それを不審に思った宙は・・・

「それどうしたんだ？」

聞いてみた。聞かれたほうは手に持つかばんを見てこう言う。

「これか？ 本当に何も聞いていないんだな」

聞かされるどころか疑問しか思いつかなかった。

「宙のガラスの靴を取ったものには会長権限で同室を許す、だそうだ」

「・・・・・・・・・・はっ？」

宙は長い時間をかけてようやく言葉に意味を理解したが、一応聞き間違いじゃないのか、と思い聞きなおした。

「同室を許可された、以上だ」

それを聞いたとたん宙は両手を地面につけて両膝を地面につける、そして四つんばいになった。

「まじ・・・・・・・・？」

「まじだ」

「・・・・・・・・」

言葉を失った宙はしばらくの間、四つんばいを維持し続けた。
そしてある程度時間がたったところで宙は立ち上がり告げた。

「本当なんだな・・・あれは」

「ああ、うそはつかない」

「そうか・・・んじゃ、寝ますか」

「そうだな」

そして、宙とアリシアは寝た。その最初の夜、緊張して宙だけが眠れなかったことは余談だ。

第58話 接触 亡国企業（後書き）

どーでした？

自分で思うのだけれどこういうのは難しすぎる。書いていて自身の限界が見えました。

Orz

まあ、そんなことはおいといて……一応出しました「シュープリス」！！

軽く改造はしていますがその詳細も、大きい見せ場があるのでそこで紹介したいと思っています。

六巻のテーマが今週いっぱいといっていたが……間に合わないことに気がついたsirasu

すいません、上記の通りです。今日中にしたいと思っています。

毎回予定を決めきれず、ご迷惑をおかけしてすいませんでした。

誤字脱字訂正などありましたらよろしく願います。

第59話 終わりの始まり

第59話

「お前…大丈夫か？」

「ははっ…見ての通りだ」

現在ものすごく眠い。理由は昨日から俺の部屋にアリシアが来ているせいだ。特に寝ているときはへんに緊張してしまって眠るどころか疲れてしまった。

今日の朝鏡で確認したが目の下にクマができていた。

「自己管理はきちんとしろ、宙」

ちなみにアリシアは普通だった。今の俺の現状も知らないでこんなことを言うアリシアに…何ていえばよいのかな？

「…そうだね」

一応、納得だけはしておく。三人が「ドイツの冷や水」であるラウラがすくんでしまうほどの視線を俺に向けてきている。これ以上厄介が増えるのはごめんだ。

「みなさん、先日の学園祭ではお疲れ様でした。それではこれより、投票結果の発表を始めます」

会話を無視して俺と一夏の争奪戦の結果発表だ。体育館に集まっている全校生徒（もちろん俺と一夏をのぞく）が

唾を飲む音が聞こえる。

何もそんなに本気にならなくても……

「一位は、生徒会主催の観客参加型劇『シンデレラ』！」

「「……えっ？」」

一同はポカーンと放心状態に入る。そして数秒後我に返った女子が大ブーイングを起こす。

「卑怯！ ずるい！ イカサマ！」

「何で生徒会なのよ！ おかしいわよ！」

「私たちががんばったのに！」

そんな苦情をまあまあと手で制し、言葉が続ける。

「劇の参加条件は『生徒会に投票すること』よ。でも、私たちは別に参加を強制したわけではないのだから、立派に民意といえるわね」

……負けるわけがないじゃないか……はあ

これは最初から勝ちが決まっていた勝負だった。どんなに他の部ががんばっていても全校生徒のほとんどが俺たち男と同室を目指して『シンデレラ』に参加するのだから……必然というやつだ。

「はい、落ち着いて。大丈夫、一夏君や宙君は部に派遣します。それらの申請書は、生徒会に提出してください、よろしく願います」

……また、俺たちの意思は無いようだな

普段の俺なら確実に怒っているはずだが、それを超えるほどのやられた感があった。

その後、案の定、部活動のアピール合戦となり会長がしめて集会は終わった。

何一つ納得していないがな……

このあとに会長室に来るようにいわれたが、それを丁寧に断った。

「てめえ！　どういふことだよ！？」

高層マンションの最上階。豪華な飾りが溢れかえっているその部屋で、オータムは少女に詰め寄っていた。

「……………」

「何とか言え！　このガキが！」

少女を壁に叩きつけ、それでも怒りを納めるには足りないオータムは腰からナイフを抜く。

「その顔切り刻んでやる……………！」

「やめとけ」

「やめなさい、オータム。うるさいわよ」

バスルームから出てきた美女とそれを見ていた少女の声が重なる。どちらとも美しい金髪を持っている。

「スコール……！」

怒りにくるっていたオータムはバスローブに身を包んだ女性へと向き直る。

「怒ってばかりだと老けるわよ。落ち着きなさい、オータム」

スコールと呼ばれた女性はバスローブのままソファアへと腰を下ろす。

そんな姿をオータムは悔しそうに見つめる。

もう一人の金髪の少女は壁に叩きつけられたほうの少女の元へ行き手を差し伸べていた。

「大丈夫か？」

「私に構うな」

差し伸べられた手を振り払い一人で立ち上がった。

そんなことをされても金髪の少女は眉一つ動かさないどころか少しだけ笑って見せた。それも、小さい子供を見ているかのような感じ……

「エム、ISを整備に回しといて頂戴。『サイレント・ゼフィルス』はまだ奪って間もない機体だから、再度調整が必要よ」

「わかった」

「ベルリオーズも一応整備に回しておいたら？ 最近整備してないでしょう？」

「そうだな」

エムと呼ばれた少女は短く返事をし、ベルリオーズ……アリシアは軽くうなずいた。

二人は一緒に部屋を出て、エムだけが立ち止まった。

エムは一人通路で胸のロケットを握り締めまぶたを閉じる。

もう少し……もう少しだ

ずっと待っていた。焦がれたときはもうすぐ側まで来ている。

これで私の復習が始められる……。そう、やっと――

やっと、会うことができる。

……織斑千冬……
ねえさん

アリシアは歩き続けた。

これで私は……始められる。

脳裏に浮かぶのは祖国での崩れた家庭。

私は……間違っているのだから……いや、間違っていない。

自分の疑問を強く否定する。

宙、お前は……お前の覚悟は……

アリシアは強く強く一步を踏み出していくのだった。

第59話 終わりの始まり（後書き）

もうそろそろ、ネタを出そうかな……

部活動のこともあるので丁度良いかと思っています。

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

サッカーならイナズマイ●ブンかな？

野球なら……必殺技が出る野球漫画持っていないので却下

ハンドボールはいまいち理解できないし……

テニスならテニプリがあっただけど一夏に取られて……

水泳？ 書きにくいな

剣道だと……オリキャラとの絡みが難しいし

料理……何をするんだ？

茶道はラウラ最近出番ありすぎなので却下

今考えたらサッカーしかない！！ どうしようか……

第60話 久しぶりの憤慨（前書き）

祝第60話にして6巻です。

そして六巻のテーマは「義と悪・信じるもの」です。

ではでは第60話、どうぞ

第60話 久しぶりの憤慨

第60話

「えっ!？ 一夏の誕生日って今月なの!？」

「お、おう」

俺が寮で夕食をとっていたとき、なぜかその話題につながった。シャルロットが大げさに立ち上がって声を上げる。正直うるさい。もちろん俺はそれを無視して食事を再開する。

「宙は？」

毎回思うのだがうまいことラウラに邪魔されすぎじゃないか？俺。

「俺は………教えていなかったのか？」

ビクウツ!! 擬音語が聞こえるぐらい体をビクつかせる三人。ばればれだし…

「何のことかな」

「今は食事中よ。静かにして」

「行儀が悪いですよ」

思わずため息が出てしまうほどの名演技ぶりだった。無論ラウラがそれを許すはずがない。

「自分たちだけ知っていればよいのか？」

ジトーとした目で三人を見るラウラ。

「いや、まだだからね」

「あんたになんて教えるもんですか」

「宙様に聞けばよいではないですか？」

ラウラが俺のほうを向く。

「俺の誕生日は……」

教えていいんだろうか……俺は……

「宙？ どうしたんだ？」

「あ、いや……なんでもない。……そのときが来れば教えるよ」

「本当だな？」

「ああ、ラウラを仲間はずれにはしないから」

今の俺にできる限りの笑顔でラウラにそう言った。
すると顔を真っ赤にしてうつむくラウラ。

毎回赤くするのやめろよ……反応に困る……

「宙も誕生日来るか？」

急に一夏が話しかけてくる。

「お前の誕生日って……確か…『キャノンボール・ファスト』じゃなかった？」

『キャノンボール・ファスト』はISの高速バトルレースのことだ。本来なら国際大会として行われるが、IS学園は市の催しとして学園の生徒が参加することになっている。

専用機部門と訓練機部門でわかれることになる。

「だから午後からやるんだけどお前も来いよ」

「行けたらな」

俺はできるだけ平静を装う。これも強がりだ。

「ん？　そういえば明日からキャノンボール・ファストのたえの高機動調整を始めるんだよな？　あれって具体的にどうするんだ？」

「高機動パッケージをインストールだろ？　先生の話を聞いておけよ」

「ぐっ……すまん」

しまった、という顔をする一夏。そして、笑い始めるみんな。

俺は……どうすればいいんだ？　どうしたら…

俺の頭の中を駆け巡って行く言葉。その言葉をふりはらうように髪をくしゃくしゃとかく。

何でこう言うことになっているかという……原因は…

「宙、どうしたんだ？　顔色が悪いな。一緒に帰ろうか？」

先日の学園祭で同室になったアリシアだ。

こいつはキャノンボール・ファストまでに決めておけといったきた。

「お前のせいだよ。なんであんなことを言ったんだ？」

「別にいいじゃないか、お前が欲しいのだよ」

はっ？　確かにニュアンスは間違っていないが……

「なっ」

「はぁ！？」

「宙様？」

「宙っ！！」

こんなことになることは分かっていたさ……

四人は同時に俺へ近づいてくる。目だけで『説明しろ！！』という言葉……命令が伝わってくる。

「なんでもないんだよ。だから、落ち着け」

「なんでもない？　がんばって告白したというのに……」

「火に油を注ぐなよ、アリシア！！」

ガシッ　襟首を掴まれた。そして引きずられる。

「ラウラさんや？　これは一体……」

「お前たち良いよな？　やるぞ」

「はい」

「覚悟しなさい」

「すみません」

「智花？　優？　葵？　俺を見捨てるのか？」

「「大丈夫」」

仲良く三人は声を合わせる。そしておもむろにタクティカルナイフを抜くラウラ。

「ちょ……待てラウラ……話せば分かる………ぎゃー……」

宙の断末魔が食堂に響き、食事は終わった。が、俺の尋問は翌日まで続いた。

で、結局だ。結局こうなってしまった。

俺は今集合場所へと移動している。理由は昨日尋問された後四人

全員に誘われたからだ、デートに…

デートの時間までは何とか間に合うような時間だったので、歩いて移動していたのだが…目の前で智花が、ナンパされている。

目をゴシゴシとこすったが、間違いないようだ。

面倒事増やさないでくれよ…はあ

「ねえねえ、カーノジョっ♪」

「今日ヒマ？ どっか行こうよ」

女性優遇制度のおかげでナンパみたいな行為は禁止となっているが、こう言うやつらはいつになっても消えてくれないらしい。

絶滅してくれよ、本当に…

智花はかたくなに断っているが力にはかなわないので肩をつかまれて、引っ張られている。

「おい、その手をはなせよ」

なぜかいつの間にか半ギレ状態になっている俺はできるだけ穏便に済ませようと考えていたのに、口が勝手に動いてしまった。

「なんだよ」

目に見えて不機嫌そうに威嚇してくるチャラ男Aとしておく。

「俺たちは同意で動いてんの、わかる？」

そして今、調子に乗っている方をチャラ男Bとする。

さて、どういう風にこいつらを殺ろう……いや、社会的に殺してやろうかな？

普段の俺ならここまで怒るはずがないのだが、今日に至っては抑えきれない怒りが感情を支配する。

「とも……彼女は俺のつれだ。手を出すなよ」

作り笑顔で言いつつ、近づいていく。

本人は気づいていないが殺気が垂れ流し状態となっており、その辺の動物たちは大急ぎで逃げ、人間は若干距離を置いていた。

チャラ男共はもちろん、気にしていない。が、智花が震えていた。その様子を見て———殺す。

「つれ？ 知らねえんだよ、んなこと。邪魔はさっさと帰れよ」

完全に今の言葉で切れた。堪忍袋の緒はかなり堅いはずだが何度も言うが今回だけはすぐに沸点に来了。

智花の肩をつかんでいたチャラ男Aの手を強引に引き剥がし、純粹な握力だけでつぶす。

ゴキイと骨が折れる音がし、転げまわるチャラ男A。

「いて——がっ」

声を聞くのもいやだったので転げまわっていた男のあごを蹴り気絶させた。

「やるか？」

呆然と立ち尽くしていたチャラ男Bに握りこぶしを見せる。
それだけでBは走って逃げていった。

「宙君！ ……ごめんなさい」

助けてもらったのが本当に申し訳ないようだ。小さい声で謝ってくる。

「いいよ、全然」

そしてやさしく手を握る。

「行くぞ」

「うんっ！」

うれしそうに笑う智花を見て安心し、ほかのやつらの到着を待つ。
もちろん、手は握ったままだ。

智花は顔を赤くしたままだ。俺はできるだけ顔に出さないようにした。

そんなときに携帯の着信音になる。この音は智花のだ。

「えっ!？」

真剣に携帯の画面を見つめていた智花が驚きの声を上げる。

「ごめんね、今日は無理みたい。優も葵もラウラも…」

「どうしたんだ？」

「なんかキャノンボール・ファストの装備が来たらしいの。そのインストールと調整をしなくちゃいけないくて……今日は…」

「そうか、わかった。行ってきたいいよ、俺は買い物があるから」

「ごめんね」

そして、最後に丁寧に頭を下げて走り出していく智花。

その背中が見えなくなったところで買い物を始めようとした。したのだが……振り返ってみると、アリシアがいる。

「行くぞ」

こめかみが思いっきり痛んできた。

「はいはい」

拒否権はないので彼女についていく。

行き先は事前に言っていたアクセサリーショップ。俺が智花からもらった指輪と同じ場所だ。

「それでよろしいですか？」

「はい、大丈夫です」

目的の品が買えたところで腹が減ってきた。

「アリシア、昼飯」

俺の隣にアリシアがいるが、デートという雰囲気ではない。どちらかというと、仕事みたいな雰囲気だ。

「ああ」

必要最低限な言葉だけでコミュニケーションをとる。それだけで十分だ。

そして適当なところで適当なランチを食べる。

「決まったか？」

「そうだね、決まったよ」

「それが答えか」

そう言って俺の手に持ったアクセサリーショップの袋を見る。

「正解」

キャノンボール・ファストは大荒れ注意報だ。

第60話 久しぶりの憤慨（後書き）

どーでした？

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第61話 貸し出しキャンペーン(前書き)

こんにちは sirasuです。

今回は軽い息抜きです。最近、暗い内容が多すぎる……

第61話 貸し出しキャンペーン

第61話

「フアイヤートルネードッ!!」

なぜこんなことになっているかという話は過去にさかのぼる

「サッカー部!？」

「ええ、そうよ。じゃあ行ってきたさい」

月曜日の放課後、どういうわけか会長に集合をかけられたので生徒会室に来て見れば……『生徒会執行部織斑一夏及び神代宙貸し出しキャンペーン』の最初の部活派遣だった。

なんかもう、いやなんだけど……

心底嫌気がさしている、理由はもちろん勝手に決められたからだ。俺たちの意思とは関係無しに進んだこの計画はいやなものではない。しかし、俺たちの発言力はなしに等しいので言い返すことも不可能。仕方なくしているだけだ。

というわけで現在サッカー部の部室の前だ。どういうわけか軽い会を開くらしい。

部室を目の前にして体が震えているぞ、これは……

「武者震いね」

「違うわっ!!」

後から声を急にかけられた。

これは断じて武者震いなんかじゃない。これは恐怖による震えだ
!!

声からすでに分かっていたが案の定、優だった。

「別に良いじゃない、さあ、入った入った」

そう言って強引にぐいぐいと体を押し始める優。

「やめろ! やめてくれ」

そんな俺の否定行為虚しく部屋の中へ……

『きゃーーーーー』

入っていきなりの高音による黄色い声援の大砲が発射された。思わず吹き飛びそうになってしまう程の威力。

おいおいおい……これって何? あまりのテンションに体がびくびくしているのは気のせいかな? それかこの後に起こるであろう悲劇にかだらが震えているのか?

「武者震いが大きくなったわね」

「だ・か・ら……」

「はいはい、わかったわかった」

一体何がわかってるんですか？ こいつは…

「歓迎会の開始だ！このまま宙君を奪ってしまえ！！！」

「「「「おおっーーーー」」」」

こんなわけで歓迎会が始まった。しかし、ひとつだけ俺は気になることが会った。

「サッカーって何？」

俺は本気でサッカーやルール、やりかたを知らない。

千冬さんの元で武術を習っていたりして、がきのころには友達とあんまり遊べなかったな

「「「「……………」」」」

沈黙。そして、困惑。

「え？ 男の子だよね」

「どうする？」

「ワールドカップの試合の録画とか見せれば良いじゃないかな？」

「ナイスアイデア！！ 早速準備を…」

女子達が話を勝手に進めているが……

「ここテレビないよな？」

そう、ここの部屋を見渡してもテーブルそしてロッカーぐらいしかない。

「何を言ってるの？　ここにあるよ」

しゅるしゅるしゅる、と天井を取っ手を引っ張って出てきたのはスクリーンだった。

設備ハンパねえ！！　高校だよ？　ここ？

そしてプロジェクターから映し出されたのは……

「ファイヤートルネードッ！！」

あれ？　ワールドカップってアニメ？

映し出されたのは襟を立てたサイヤ人ふうな髪型の男が炎を足にまどわせてボールを蹴っているシーンだった。

これはサッカー部の部員も予想外だったらしく十分ぐらい見とれていた。

「ちょ、ちょっと、だれよ。よく見たら録画が全部イ●ズマイレブンになっているじゃない」

「誰よこんなことしたのは」

「きゃー豪●寺カッコイイー」

「「「お前かつ！！」」」」

そして、簡易リンチが始まった。若干顔がにやけているやつもいるし、やられて喜んでいるやつもいるが気にしていたらだめだと思う。

これまた十分ほしていたんだけど……妙にすっきりした表情の人もあるし、なぜか進んでやられるほうに入っていた人もいるの

で見てもぬふりをしていた。

何かこの部活いろいろと危なくね？

「というわけで、宙君にはこれをやってもらいましょう！！」

意味がわからないことをしゃべり出す部員。

「はあ？ 一体どこからそんな話になってんの？」

「まあ、かつこよかったからね〜ぜひ、あれをやってください」

「できるわけないじゃん、アニメだし……」

炎が足から出るわけがないし、それ以前にいろいろと無理がある。それが分からないほどアニメと現実の境が分からなくなっているようだ。

「練習よ。練習で必ずできるようになるはず！！ やるしかないわ」

「「「おおー」」」」

俺の意見はどこでも通ってくれない。そんな様子を見ていた優も呆れた顔をしていた。たぶん、この部活の中では唯一の常識人なのだろう。

それでも、かなり外れている部類に入るのだが……

そしてグラウンド。シュートの基本も知らない素人がグラウンドシューズで制服姿でゴールの目の前に立っている。

もちろん、次に何をすれば良いのかよく分からないので部長と思われる人に聞いてみたのだが……

「まずはボールを上にあげて、追いかけるようにジャンプしながら回転して蹴る！！」

「は、はあ…」

とにかくボールを上にあげることが最初らしいので蹴り上げる。バスッ 確かに俺は上にあげようとして蹴ったはずなのだが、いつの間にかゴールの中に入っていた。キーパーがまじめに震えているが何があったのだろうか？ 上を見ていたので何が起こったのが良くわからない。

「うん、宙君。力をもっと抜こうか。じゃないと速すぎるからね、そして上に蹴り上げるときにはこうするんだよ」

「おおっ！」

思わず声が出てしまう程綺麗に決めた部長の実演によりようやく蹴り上げる要領をつかみ、二回目。

ボールを救うようにやさしく蹴り上げた。するとボールはぐんぐんと上空へ上がっていく。

「よし！ 次は回転しながらジャンプして蹴る」

「はい」

なぜか調子が上がってきたので、やってみる。周りから見ても結構なノリノリぶりだろう。

ボールの落下とともにジャンプして、回転を合わせて……蹴る！！ガンッ！！ 今度はゴールのバーにあたった。しかし、なぜかゴ

ールの下の地面を見てゴールキーパーは震えている。

「めりこんでる」とどこからか聞こえたが、気にしない気にしない。ゴールがボールの衝撃でめり込んだなんて気にしない。

そして、ようやく地面に足をつけることができたので部長の元へ足を運ぶ。

全ての部員がポカーンとしているがどうしたんだらうか？

「できるもんですね、意外と」

「そ、そうね。やればできるものね」

顔が真っ青になって俺を見ているが、理由が分からない。

「あんた、やりすぎよ」

「何言ってるんだよ、優。やらせたのそっちだろう？」

「確かにね。でも物事には限度があるじゃない。部員のみんなが自身をつぶされているわよ」

優の言うとおり結構な人数の人が手を地面に付けている。

「お前は大丈夫そうだな」

「気遣いありがとね。わたしは結構あんたの行動に離れてるから…」

「すまん」

優のどこか悲しそうな表情を見て、反射的に謝る。

まあ、確かに結構優の目の前でやんちゃしてたな…

「気にしない、気にしない」

優のこの軽い性格にも結構助けられたのか……はぁ……信じるものはなんだろうな？

「ふっ、そうだな」

「さあ、試合しましょう、試合。歓迎試合よ」

「「「おおー！ー！ー！！！」」」」

ほんとにノリが良い部員たちだ。すぐに試合の用意をし始める。それも物の数分で完了したが、チームわけでいろいろとひと悶着があつたが何とか終了。

そして、試合開始だ。

「フアイヤートルネードッ！！」

というわけでした。

試合も無事？ に終わり。ちなみに結果は圧勝だ。最終的にはサッカー部対俺になったが圧勝だった。

寮へと帰還すると、そこには必ずあの人がいるわけで……

「その格好本気でどうにかならないのか？」

「別に良いだろ、これぐらい」

アリシアの格好はシャワーを浴びた後は常に下着姿だ。巨乳？
丰满なバスト？ そんな単語から連想される胸は下着だけではあまりにも刺激的過ぎる。

しかもだ、かなりアリシアはスタイルが良すぎるので……いろいろと、な…わかるだろ？

「見とれているのか？」

そんなことを言いながら、胸を強調するように抱き上げる。

「やめろ、やめてくれ、やめてください」

これ以上見せ付けられてはいろいろと危ないので、高速で土下座をする。

「仕方ない」

毎回こんなやり取りが会ったところでカッターシャツを着るアリシア。それでも十分凶悪的だが……

こうして俺の眠れぬ日々は続く。

第61話 貸し出しキャンペーン（後書き）

どーでした？

最近軽いスランプ気味です。

シリアスは好きなのに書くのはダメって以上ですよ〜

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第62話 実戦練習『キャノンボール・ファスト』

第62話

「はい、それでは皆さん。今日は高速機動についての授業をしますよー」

第六アリーナに元気な山田先生の声が響く。俺の心境はとてもブルーだけど……

「この第六アリーナでは中央タワーと繋がっていて、高機動実習が可能であることは先週言いましたね？ それじゃあ、まずは専用機持ちの皆さんに実習してもらいましょう！」

山田先生がそう言って指差したところには俺と一夏そしてセシリアがいた。

どうやら通常装備の人と強化パッケージの人、展開装甲の人で競争をして欲しいみたいだ。

がんばれーと言う声援にこたえるように軽く手をあげ、ISのモニターを視点指定で高機動用バイザーにするためにハイスピードにする。さらに格スラスターを連動監視設定にして準備完了。

「終わったぞ」

「こっちもだ」

「心配は必要なくてよ」

「では、……3・2・1・ゴー！」

山田先生のフラッグにあわせ一気に飛翔する。俺はすぐに速度重視型に赤羽を変形させて加速させる。

流れていく景色も高機動用のバイザーのおかげで鮮明に見える。まずは様子見と言うことで速度を落として一夏に並ぶ。すぐにセシリアが抜き去ってしまうがここは我慢した。

途中で一夏が加速したのでそれに合わせて加速させる。操作も簡単だったので特に気にすることもなく三人で併走してアリーナの地表へと戻った。

「はいっ。お疲れ様でした！ ふたりともすっごく優秀でしたよ」

山田先生はうれしそうに俺たちをほめているのだが……その……胸がですね……はい。

ぴょんぴょんと跳ねているので胸と一緒に上下している。

一夏と俺は何か目をそらして回避する。

目のやり場に困るんだよ！

「おい、宙。おい！」

「なんだ？ どうした？ ラウラ」

「お前も、その……なんだ……。む、胸は大きいほうが良いのか？」

「……………」

「何か言えー！！」

「そんなに怒るな。…そうだな……」

オープンチャンネルごしにラウラがつばを飲む音が聞こえる。
からかつてみるか……くくくっ

「確かに大きいのは好きだな」

「っ———!!」

ラウラはそれを聞いたとたん世界の終わりというような表情を取った。その表情があまりにもおもしろすぎたのでおもいつきり笑ってしまった。

「くくくっ……ははははははっ」

俺が急に笑い出したことに驚くラウラ。しかも、俺の顔を見た瞬間驚いた顔はすぐに世界の終わりの表情へと変わる。それが本当におもしろすぎる。

「冗談、冗談。大丈夫、大きいのも小さいのも関係ないから」

「ほ、本当だな！」

オープンチャンネルのはずなのに身を乗り出している様子が用意に想像できるぐらいの勢いで聞いてきた。

「本当だ。それよりもそんな小さなことを気にしている女のほうが俺は嫌いだ」

「そ、そうなのか？ 私は気にしていないからな」

その光景を見てオープンチャンネルだったことも有り、クラスの

みんなが暖かな視線をラウラに向ける。俺のほうにはキラキラとした目が向けられていた。

「いいか。今年は異例の一年参加だが、やる以上は各自結果を残すように」

そうですね、千冬さんなら言うと思いました。けど……俺は何をしたいんだろうか……

たぶん俺の顔は落ち込んでいるだろう。アリシアの肘が腹に刺さる。いや、それよりも心に刺さった。

「キャノンボール・ファストでの経験は必ず生きてくるだろう。それでは訓練機組みの選出を行うので、各自割り振られた機体に取り込め。ぼやぼやするな。開始！」

各々がやる気を見せているなか、俺はアリシアの元へ行く。そしてプライベートチャンネルを開く。

『揺らぎそうだ』

『だろうな』

アリシアとの簡単な会話を終えて一夏の元へ、少しの間雑談をして気分を紛らわす。

そこへ山田先生が近づいてきた。

「織斑君、神代君、殺気の実演すばらしかったですよ。特にバイザーを使うのが始めてなのに、あの機体操縦はすごいです！」

「あ、ありがとうございます」

「ありがとうございます」

本気じゃないけどな……

一夏に合わせてスピードを調節することが今さっきの練習だったので、すこしだけ罪悪感だ。

しかし、そんな罪悪感を容易に吹き飛ばしてしまうような山田先生の胸元が必然的に目に入る。

ISを装備していると視線が高くなるしな……てか、千冬さんの気配が……！！

身の危険を感じたので素早くその場を離れてラウラの元へ……

「ラウラ、調子はどうだ？」

「今強化パッケージ「ストライクパック」のインストールが終わったところだ。これから調整に入るのだが……お前はもうしているんだ？」

ラウラの強化パッケージである「ストライクパック」は背面部に二つの独立したAIとソードビットキャリアを装備したものだ。通常状態ならラウラの攻撃に合わせてAIが勝手に攻撃してくれる優れものだ。高機動状態なら勝手に攻撃をしてくれなくなるが全てのビットのスラスターを移動にまわすことで高機動が可能になる。

「俺か、俺は赤羽の速度重視型で十分な速度が出るから特にこれといったチューニングは必要なくてな」

「それでは通常の状態が良いってことか？」

「そう言うことだ」

「お前のISは化け物だな」

まあ、確かに増設やチューニングを行わないで良い、というのは少しやりすぎだと思う。が、さすがは第四世代といったところか……自分のISの性能を再認識していたときにラウラのウサミミみたいなセンサーがぴくぴくと動いているのを見てしまった。それはとても……かわいい。

「宙？ 宙!!」

「おわっ、なんだ？ 急にどうしたんだラウラ」

結構……いや、かなり可愛かったのでつつい見とれてしまった。

「宙、一緒に練習しないか？」

ISを装備していることもあり、上目使いで頼んでくる。
断れるわけないだろ!!

「わ、わかった。お前にタイミングは任せる」

「うむ、では行くぞ」

さっきと同じように飛翔しラウラに併走する。ラウラは経験者だけあって加速の仕方もうまい、それを真似するように少しだけ距離をとっていたのだが、一つだけ疑問が浮かんできた。

「ラウラ、質問なんだが」

「なんだ？」

「カーブは直角に曲がったほうが早いよな？」

「確かに早いのは早いけど…常識的に考えて無理だろ」

ラウラの口から常識的って言葉が出るとは！！

「いや、こうすれば」

ちょうどカーブがきたので頭の中にあるイメージを実践してみる。
まずは、曲がる部分の頂点に来たところで赤羽を瞬発力重視型に変更し強引に逆方向へと噴射する。そして姿勢制御重視型へ変形させて制御と同時に進行方向を変えて速度重視にして直進する。

これを二回行ったところでカーブを曲がっているラウラを完全に抜き去った。

「できたろ？」

「お前ってやつは……」

（お前は一体どこまで行けば良いんだ。今やったやつは馬鹿みたいな機体性能と高度な技術が必要なのに……いとも簡単に成功させたぞと！？）

そしてそれ以降黙っていたラウラに併走してアリーナへと足をつける。

「ラウラ？ どうしたんだ？」

「いや、少しだけ驚いているだけだ」

「それとラウラに言いたいことがあるんだけど」

「なんだ」

俺の頭の中にあったアイデアをラウラに教える。

その内容は、A I Cを使った曲がり方で慣性を停止させることができるのならラウラのI Sでも簡単に直角に曲がることができるはずだ。という内容。

「確かに……できないこともないな」

そして、飛び立つラウラ。素早く行動する力は出さすがだと思う。事前に直視映像ダイレクト・ビューのチャンネル番号を教えてもらっていたので繋げる。

ダイレクト・ビューとは簡単に説明すると視界の共有だ。

ラウラの視界で見ていると……うまくいったようだ。

かなり強引にスラスターを使用したが一応は成功した。

「意外と……できたな」

「確かに……できたな」

俺の中でも半信半疑だったのでその様子を見てびっくりした。

そんなふたりの様子を見て教師陣が落ち込んでいたのは余談だ。ちなみに千冬さんは当たり前だろ、と言う表情をしていた。

第62話 実戦練習『キャノンボール・ファスト』（後書き）

どーでした？

七巻が来ないので先が書けない・・・

一応67ぐらいまでは書き終えているので今日中に投稿します。

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第68話 キャノンボール・ファスト 当日

第63話

本日はキャノンボール・ファスト当日。そして俺の―――だ。
会場は超満員で、空には花火が上がっている。

会場の中には香がいる。本来なら呼ぶはずがないのだが、調べていたのか強制的に渡させられた。

「おー、よく晴れたな」

「ああ、そうだな」

雲ひとつない綺麗な青空を見上げる。それは今の俺にとって本当にまぶしすぎた。

「一夏、宙。こんなところにいたのか。早く準備をしろ」

「おう、箒。いやなに、すっげー客入りだと思ってな」

「俺は先に行くよ」

一夏と箒から離れる。

今日のスケジュールは二年生のレースがあった後、一年生の専用機持ち、訓練機、そして三年生の順だ。

観客の中にはIS産業関係者や各国政府関係者も来ているようだ。やつらにとっては良いデモンストレーションだろう……

『最初に言っておくがこれは、勧誘じゃない。命令だ』

学校の屋上で夕焼けをバックにそう言ってきたアリシアはとても真剣な表情だったが、アリシアの言っていることが理解できなかった。

『命令？』

『そうだ』

『なんの？』

『私たち亡国企業に入れ』
ファントム・タスク

ファントム・タスク？　なんだ？　聞いたことがないな。それ以前に……どういうわけだ？

『理解できていないようだな。まあ、良い、それも想定済みだ。……まずはこれを聞け』

ゆっくりとした動作でボイスレコーダーをポケットから取り出して、投げつけられる。

そして言われるがまま再生ボタンを押した。そこには……

『かつて、十二カ国の軍事コンピューターを同時にハッキングする

という歴史的な事件を自作した、天才がな
ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？』

なっ！？　なんだ？　何なんだこれは……千冬さんに束さん？

『これは私が独自に手に入れたものだ。無論、上には提出していない。お前を引き抜くだけに手に入れた』

そんなことは聞いていない。これは……一体？
そしてそのボイスレコーダーには続きがあった。

『これもたえ話だが、神代が海外旅行へいったことも分かっていた。いや、その上でハッキングをした』

処理できないほどの情報が頭に入ってくるような感覚。すぐに巻き戻してもう一度再生させる。

『これもたえ話だが、神代が海外旅行へいったことも分かっていた。いや、その上でハッキングをした』

ボイスレコーダーにはこれ以上は記録されていなかった。

『どういうことだ……これは？』

知らないうちに言葉が口から漏れていく。頭の中が真っ白で何も考えることができない。間違いだと思いたいが無意識のうちに五回も同じところを再生していた。

絶望感に似た感情が俺を襲う。そしてすぐに飲み込まれる。
胸が苦しい、呼吸がうまくいかない。

『ハア……ハア………』

感情が爆発しそうで胸が締め付けられる。

『グッ……ガッ………』

何かを吐き出すように息を全て吐き出す。

本当の話なのか？ 作り物じゃないのか？

こういう疑問が浮かばなかったわけでもない、一度は疑った。しかし、ボイスレコーダーに記録されている音声の向こう側に海の音が聞こえている。それと、聞きなれている千冬さんの声を俺が間違うはずがない、それこそが証拠だ。

今でも行方がわからない束さんが千冬さんに会うことは不可能だ。ただし、臨海学校の途中なら確かに束さんはいた。可能だ。

これが本当だと信じたくはない、信じたくなかった。だけど……よく聞けば聞くほど確実な証拠となってしまう。

『…ゴホッゴホッ……ガッ…』

頭が痛い。普段よく頭痛をするがあれの比ではない。

『わかったか？ これで十分だろ？ 私たちの目的はこれにも関係している。これ以上、抵抗しないでくれ、私だって好きでこういうことをしているわけではない』

それでも譲れないものがある。俺にはそれがあった。

『俺は……俺には決めたことがある。これが……たとえ……本当のことだとしても……俺はあいつらのそばにいる』

呼吸がしづらかったのに意外とさらっと言葉が出た。不思議だ……なんだろうか……

『だからこれ以上抵抗するなといっている。聞こえないのか』

『どれだけなにをいわれても、変わることはない!』

力強く叫んだ。あの時と同じように、自分に言い聞かせるようにだ。呼吸もやりやすくなってきた。

でも足りない。

自分自身を襲っている感情は大きすぎた。

徐々に飲み込まれていくような気がする。少しでも気を抜いてしまえば自分は狂ってしまうだろう。

それほど限界が近かった。

『これ以上は言いたくない』

アリシアの顔が悲しみにゆがんでいく。アリシアの言っていることは本当のようだ。

『それでも……』

ズキンと痛む。

正直、束さんが憎くてしかたがない。けど、今の俺には関係ない。

『それでも……俺は……』

また、痛む。

確かにうらむことは簡単で、信じることは難しいが、そんなことは百も承知だった。

だから、俺は…

『あいつらのそばにいる。そして守る。……そう、決めた』

『そうか。お前の判断は正しい……』

俺はこれでよかったんだ……よかったんだ。

『けど、あなたは知らない』

さらに悲しそうな表情を取るアリシア。

なぜだ……なぜ、そんな表情をするんだ。悲しくなるようなことなんて何もないはずだ。

『ラウラ・ボーデヴィツヒ』

確実にアリシアの口からそんな単語がもれた。

体に緊張が走る。

『そう、例えばラウラ・ボーデヴィツヒだ』

以前とアリシアは悲しそうな表情で続けた。

『ヴォーダン・オージェが、原因不明か。おかしいとは思ったことはないか？』

アリシアの言うとおりヴォーダンオージェの危険性はない。

理論上の話ではあったが不適合すら存在しないはずだった。そうだとすれば……

『……まさか、人の手が』

それが唯一考えられることだった。

『本当のことは私は知らない。しかし、ボーデヴィツヒのナノマシンを制御することはできる』

『それじゃあ……もしかして……』

『暴走させれば、最高でも両目の視界は消え、最低だと死………
もう一度聞く、亡国企業ファントム・タスクに入れ』

今でもアリシアの表情は変わっていないかった。

それも含めて衝撃的だった。

アリシアも相当な覚悟があったはずだ。少ないとはいえともになごしてきたのだから、感情を本人は抑えているようだけど、抑え切れない感情は表情で分かる。

俺が断ればラウラが死……ぬ。

『命令……か』

四肢の力が徐々に抜けていき、地面に両膝を突いてしまう。

俺に選択肢など最初からなかった。

『わかった』

そう言った自分が怖くなった。寂しくなった。感情が薄くなっていくのが分かる。

何もできない自分が悔しくて両手を握り締めた。

『ありがとう』

アリシアが感謝の言葉を述べた。俺は何もしていないのに……
そしていろいろと頭の中で考えたが、覚悟を決めることにした。
まずは両足に力をこめて立つ、そしてアリシアと真剣に向き合った。

『宙、早速ですまない。キャノンボール・ファストで裏切るぞ』

『わかった』

『そしてだ、そして……ガラスの靴を渡せ』

『それではみなさん、一年生の専用機持ちのレースを開催します』

二年生の競技が終わり一年生の番だ。

専用機持ちのメンバーは各々が自信満々に試合開始前に言葉を言っていた。

一夏「やるからには一位だ」

セシリア「わたくしが負けるはずがなくてよ」

鈴「ふふん。私の強化パッケージをなめてもらっちゃ困るわね」

箒「ふん。戦いは武器で決まるものではないということを教えてやる」

ラウラ「戦いとは流れだ。全体を支配するものが勝つ」

シャルロット「みんな、全力で戦おうね」

智花「新しい装備もあるし…がんばる」

優「負ける気がしないわね」

葵「宙様の恥にはなりません」

アリシア「真剣に勝負をしよう」

そして俺は……

「楽に行こうか」

一番言っただけだった言葉を自分で言った。

ちなみに強化パッケージ組みがセシリア・鈴・智花・優・葵・ラウラとなっている。

チューニング組みは俺と一夏と箒だ。全員が第四世代機となっている。

増設組みはシャルロット・アリシアだ。

智花・優・葵の強化パッケージは三人とも同じ東作の「メビウス」をつけている。

「メビウス」は外見上ではこれといった違いはない。しかし旋回時や被弾時における慣性エネルギーを一時的に蓄えるようになっていて、このエネルギーを使うことでイグニッション・ブーストに似た加速を行うことができる。また同時に使用することででたらめな動きも可能。

ということらしい。本人たち曰く「同時使用は振り回されてしまっただけにいいが、加速するときには最高」だそうだ。

3

考え事をしている内に秒読みが開始された。

2

さて、ゼフィルスがでるまでは待機、か

1……ゴー!

シグナルランプの色が変わったと同時に全員が飛び出した。

第68話 キャノンボール・ファスト 当日（後書き）

どーでした？

正直に言いましょう。

むずい！！

難しすぎる！！

これは俺の手に扱えるような代物じ

ゃない！！

オーバー
以上です。

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第64話 襲撃者 エム

第64話

キャノンボール・ファストが始まった。全員が一気に飛び出す。俺は一応様子見として最後尾に位置している。

第一コーナーでセシリアを先頭とした列が出来る。ただし三人だけは大きさにコーナーを回っていた。

あれが……メビウスのチャージか……

鈴の後ろを走っていうウラは通常通りにコーナーを回ったが、俺は直角に曲がり三人を抜き去る。

「一夏、お先！」

いきなり勝負を仕掛けた鈴は第一コーナーを過ぎたところで鈴が衝撃砲を使用しセシリアを追い抜く。

「シングル ON」

「それしかできないけどね」

「それでも十分です」

そして追い抜いた鈴をさらに三人が驚異的な加速で抜き去る。

さて、第二コーナーで仕掛けるか

背中についている『大正 改』を起動させ照準を合わせる。

「――甘いな」

鈴の後にぴったりと付けていたウラはスリップ・ストームを利用し手に持った大口径リボルバー・キャノンで妨害して三人のあと

を追った。

それにしても「メビウス」の性能はすごいな。
あまりの性能に驚き、そして第二コーナーへと移った。

「行くか」

そう言って大正を放つ。

全員が綺麗なロールで回避したが大正の射線上をあけることになった。全員が一斉に開けてくれた道を一気にフル・スロットルで駆け抜け一位へと躍り出た。

後から妨害の射撃が来るが大正の発射角は背中のバックパックについているため約135度ある。それで後続を妨害し差を広げる。

全員が負けじと必死に追い抜こうとしているが差は広がるばかり……
まだ、一周目なのに……

『そろそろだ』

アリシアがプライベートチャンネルを開いてそう言ってきた。

『わかった』

二周目だ。ここでゼフィルスが介入してくることは分かっている。
突如として入って機体がシャルロットとアリシアを打ち抜いた。
これも作戦。

「!？」

「あれは……サイレント・ゼフィルス!!」

コースアウトしていくシャルロットとアリシア。俺はそれを見な

がら、動きをとめた。

「お兄ちゃん」

私はなんとか指示通りに避難した。けど、心配です。

突如として現れた青いISは撃ち墜ち落とした。お兄ちゃんではなかったけど、それでも危険な人だ。

私の中には一つの心残りがあった。

お兄ちゃん……もう、どこにも行かないよね？

ぎゅう、と掌を握る。そこには祈りがこめられていた。

「大丈夫か！ シャルロット、アリシア！」

一夏が二人を心配して側まで行き、雪羅のエネルギーシールドを展開させた。

次の瞬間にはBTライフルの攻撃が降り注ぐ。

「くっ……！！」

「一夏さん！ あの機体はわたくしが！」

「セシリア！？ おい！」

「BT二号機『サイレント・ゼフィルス』……！ 今度こそ！」

一夏の静止を聞かずに、セシリアは単機でゼフィルスへと向かった。

『準備はいいな』

『いつでもどうぞ』

そういったアリシアは自身のアバランシュを解除し、もう一つのISを装備した。

「シュープリス」それが彼女のISだった。

シュープリスをつけたアリシアはエネルギーシールドを展開しながら驚いている一夏を蹴り飛ばし、隣で倒れているシャルロットに両手のブレードライフルを連射した。

「お前……！？」

「きゃあああああ」

一夏は急に蹴られたことに驚き、シャルロットは自身のISを解除させられてISの保護機能のために強制的に気絶させられた。

「アリシア！？ 貴様あ……！」

ラウラがその黒いISを見て反応する。すぐにラウラは両腕のプラズマ手刀を展開して切りかかった。

それをなんなくブレードライフルで受け止める。

「この前から進歩がないな……ラウラ」

「なぜだ、なぜ貴様がそれに乗っている」

「目の前で起こっていることが理解できないのか？」

ラウラの疑問を一蹴したところで攻撃を仕掛けるアリシア。

そのアリシアの攻撃を困惑しながらも、応じるラウラ。

二人の様子を見たところで、ゼフィルスの様子を見る。そこでは一夏と箒が鈴とセシリアに加勢していた。

「うおおおっ！」

一夏が叫ぶ。作戦では俺は観客の避難し終えるまで待機と言うことになっているが…

『お前が…エム』

『貴様か……？ 新入りは』

『そうだ』

プライベートチャンネルでの会話をしていた。

「狙いは何だ！ 亡国企業！」

「……茶番だな」

「何!？」

一夏の雪片式型と雪羅のクローをバヨネットに対応しながらビームシールドで防いでいたエムは一夏に蹴りを浴びせる。

「ぐっ！」

「一夏っ！」

エムのライフルのゼロ距離射撃を一夏は箒の突進によってギリギリかわした。

エムはすぐにB T フレシキフル 偏向射撃を行い追撃を仕掛ける。ぐにやりと曲がったビームは一夏に迫った。

「うおおおっ!!」

一夏はなんとか雪羅のビームシールドでふさがぐがそこをエムは逃さない。

最大出力のビームが発射されようとしていた。

「ふふ、さすがエムね。あれだけの専用機持ちを相手に、よく立ち回るものだわ」

観客席でサングラス越しにエムを見ていた女性は楽しそうに目を細める。

「しかし、たいしたことないわねえ。もう少しがんばって欲しいのだけれど……アリシアにいたっては遊んでいる始末だし……」

「あら、イベントに強制参加しておいて、その言いぐさはあんまりじゃないかしら」

女性は知っていたこの声の主は———更識楯無、IS学園最強にして、生徒の身でありながら自由国籍権を持つ天才。現在はロシア代表。

「IS『モスクワの深い霧』（グスイート・トウマン・モスクヴェ）だったかしら？ あなたの機体は」

「それは前の名前よ。今は『ミステリアス・レイディ』と言うの」

「そう」

「亡国企業、狙いは何かしら？」

「あら、言うわけじゃないじゃない。せっかく良いシュチュエーションが出来たっていうのに」

女性は楯無をあざ笑う。

「無理やりにでも聞き出して見せるわ」

「それができるかしら？ 更識楯無さん」

「やると言ったわ、スコール」

「けど、残念。良い女には秘密が付き物よ」

そう言いナイフを投げってくる。それを楯無は蛇腹剣『ラスティ・ネイル』で叩き落した。しかし、ナイフは爆散し黒煙が立ち込める。

「絶望しなさい」

それだけを言い残してスコールは逃げていった。

ゼフィルスの最大出力のビームから一夏をかばおうと鈴が間に入ったが、さらに間に入るものがいた。

「トリプルでギリギリでした」

葵のISはライフルのビームをビームシールドで受け止めた。

「葵さん!？」

「無茶はしないでください」

それを俺は観客席を守りながら見ていた。実際は守るのではなく、上司の逃走を手伝うためだけど……。それも必要ないようなのでゆっくりと戦闘空域に近づいていく。

「邪魔してんじゃないわよ!!」

「はあああああっ!!」

優は腰にまわしていたビーム砲を撃って牽制し、智花が前面にマントを展開し突撃する。

優の射撃をかわして、一夏を狙おうとしていたエムの銃口が智花へと向けられた。

「やらせませんわ!」

発射直後にセシリアがエムに体当たりを仕掛けた。

隙をつかれたエムはそのままセシリアに押されてシールドバリアーに押し付けられる。

「貴様……」

「このBT一号機『ブルー・ティアーズ』の力、存分にお見せしましょう!」

四回ほどぶつけたところで壊れたシールドから青いISが市街地へと出た。

「くっ! セシリア、待ってろよ」

「追いかけるわよ! 智花、葵」

「うん」

「了解です」

みんなが一致団結して襲撃者を捕らえようとしていた。

その様子を見て俺はただただ歯を食いしばることしかできずに、市街地へと移動した。

第64話 襲撃者 エム（後書き）

どーでした？

七巻読みました♪（やっとかい！） なかなかの内容でしたよ〜

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

新IS紹介 「シュープリス」(前書き)

すいません。今日はこのぐらいで勘弁してください。
理由は歯医者なので・・・イタイイタイ

注…この「シュープリス」は原作の機体に作者が独自に世界観を壊さない程度に改造しています。

もし、気に入らなかった場合はすいません。

新IS紹介 「シュープリス」

機体名 「シュープリス」

世代 第三世代

特徴 黒の中量級IS。基本的な形は原作通り。

武装 手持ち武装 「ブレードライフル」×2

背部武装 「グレネードランチャー」

「レールガン」

肩部武装 「ペインキラー」×8

機体説明

完璧と言うほどバランスの取れたIS。黒く細身で無駄のない四肢を持ち口元以外を覆う高感度ハイパーセンサーを持つ、そしてBT兵器である「ペインキラー」を筆頭に中距離間において性能をフルに発揮できる。唯一の弱点としてはエネルギー効率が悪い。そのため実弾装備が多くなっている。

武装こそ少ないが、ありとあらゆる戦況に対応できるようにできていて機動力も福音と同じぐらいある。

武装説明

「ブレードライフル」 このISの主武装この機体のプリセット。

リニアライフルの下部にブレードが付いており接近戦もできる。

性能は弾速、威力、命中率全てが安定している。

「グレネードランチャー」ファントム・タスク 右肩武器。亡国企業が開発したもので熱量に特化している。近距離での命中率は高い。

「レールガン」シュープリスの中で唯一のエネルギー兵器であり最速武器で左肩装備。弾速が早いので回避が困難であり、貫通力もあるので用途は広い。劣化ウラン弾などの実弾も使用できるが、その際はエネルギー弾を撃つことができないのであまり使わない。

「ペインキラー」BT兵器。普段は肩の横に四つずつ重なって装備されている。斬撃・射撃の両方が可能で実弾・エネルギー弾でも攻撃可能。

第65話 裏切り（前書き）

最近、なんかものすごく絶不調。進行形で……
読みにくいかもしれません。本当にごめんなさい。

第65話 裏切り

第65話

「……………」

無言でセシリアの『ブルー・ピース』による攻撃を発射前につぶしながら攻撃するエム。

そんな正確な射撃に加えて、圧倒的な連射速度、そしてなによりフレシキブルがセシリアを苦しめる。

「もらいましてよ！」

「ふん……」

手に格闘ブレード『インターセプター』をコールし一気に距離をつめる。

エムもそれに答えるかのようにナイフを呼び出してセシリアと格闘戦を始めた。

「くっ……！」

超高速状態での戦闘は精神力を大きく消費する。

しかし、セシリアには意地でなんとかくらいついた。

キンッ、ギインッ！ ガッ……キインッ！

エムは片手での格闘戦を繰り返しながらも高度を下げてセシリアを立体交差点にぶつけようとする。

「このおっ！」

高速横回転移動でセシリアは何とか回避することに成功するが、その様子を見てエムはからかうように笑っていた。

「そろそろ…か」

「戦闘中に余所見など！」

ラウラの背面についてある二つのソードビットキャリアから出てくるソードビット十二機による攻撃とワイヤーブレードによる六点同時攻撃、さらに両腕のプラズマ手刀で合計二十の攻撃を二つのブレードライフルでさばっていたアリシアは市街地へと出て行ったBT一、二号機を眺めていた。

そんなことが許せなかったのかラウラは攻撃を激しくする。

「単調でつまらない攻撃だな」

そう、ラウラの怒りに任せた攻撃は直線的なものが多くひねりもないのでやすやすと受け止められるか流される。

「ついてこい」

興が冷めたアリシアはラウラにそう告げて飛び去った。
もちろん市街地へと…

「はあああああっ！！　ブルー・ティアーズ・フルバースト！」

ブルー・ピアスを破壊され、シールドエネルギーも大幅に減らされたため、敵わないと判断したアリシアは奥の手であるとじられた砲口からの四問同時発射を行う。

必殺の間合いで最大の攻撃をした。そう言うふうに俺は見えた。

「これが切り札だと？　笑わせるな！」

エムの声を荒げた笑い声が響き、セシリアの射撃を全て高速ロールでよける。

「なっ！？」

「死ね」

エムのバヨネットがセシリアの二の腕を貫く。

「あああああっ！」

耐え難い痛みにこらえきれなかったセシリアの叫びが聞こえる。その声を聞き口元を歪めるエム。

『趣味が悪いな』

『邪魔をするな』

『そうですか』

そんなところを見た俺はエムに対してプライベートチャンネルを開いた。

仲間がやられているところを見て我慢できなくなったのは確かだ。

「バーン」

不意にセシリアがそう言った。

フレシキブルだ。セシリアの四つの砲口から放たれたエネルギーは曲がりゼフィルスの背中へ：

セシリアさんの戦いにやっと追いつくことが出来た私たちは戦闘を見た。

丁度、完全にゼフィルスの裏をかいだセシリアのフレシキブルが迫っていく。

それを見ていた私たちは全員が必中したと思った。さっき合流したラウラも驚き、そして笑っていた。さっきまで完全に怒っていたラウラがそんな顔をしている。

そんなときだった。黒い影がフレシキブルとゼフィロスの間に入

った。

キイン ガァンツ！ その黒い影はビームシールドでフレシキブルのビームを弾き、落ちていくセシリアに向かって銃を撃つ。

それはこの学園にいる人なら誰でも知っているＩＳで操縦者は……

「宙……君？」

宙君だった。

一体何をしているんだろうな？

自分がした行動に自分が一番驚いている。モニターでは俺に撃たれて落ちていくセシリアが映っていた。

その表情はみんなと同じく驚いている表情だ。

「宙……君？」

確かめるような声で智花がそうつぶやいた。

俺には智花に言いたいことがいっぱいあるが今は言うことができない。

「エム、油断しすぎだ」

「うるさー」

「はいはい」

みんなにも言いたいことがあるが、まずは行動と言動だけでそれを示した。

言いたくなかった。それだけのこと……

「あ、あんた……？」

智花も優も現状が理解できていないらしい、夢を見ているかのような目だった。

やっぱり、理解したくないよな……俺だってそうだ。

「エム、こいつらは俺がやるから……お前は援軍の上級生の相手でもしていてくれ」

「新入り風情が私に命令するな」

「±0だ。今さっき助けてやったろ？」

「……ふん」

ゼフィロスが飛んでいくのを見送りそして元仲間達へと視線を向ける。

「し、新入り……？」

比較的頭の回転が速い葵でさえこんな調子だ。唯一まともな面構えをしているのはラウラ。

「宙、これはどういうことだ」

ラウラは俺の目をしつかりと見て、怒声を上げている。
アリシアのこともあるし……よく混乱しないな

「アリシア、お前もよろしく頼む」

隠れていたのか建物の影から出てきたアリシアにそう告げた。わざわざ俺が裏切るところをラウラに見せたかったようだ。
……余計なことをしてくれた。

「わかった。……やられるなよ？」

「こっちのセリフだ、それは」

そしてシュープリスは教師陣のほうへと飛んでいく。

「さて、邪魔者はいなくなったし……何か聞きたいことは？」

そう言って最後の七弦武装をコールする。その七弦武装は黒い鞘を持つ二刀の大剣だ。

それを両手に握り鞘をパージさせる。出てきた赤い刀身は鞘よりも二回りほど小さい。

二つある鞘はそれぞれが四つに分かれてソードビットとガンビットになって俺の体の回りを周回し始める。

「これでワンオフ以外は見せた」

そう言って剣を構えた。

「これは……どういことなの？」

「見れば分かるだろ？ 雅」

初めて名字で呼んだことに對して智花が驚き、寂しそうな表情をする。

「俺はファントム・タスクだ」

「なっ何で？ 何でっ!？」

「雅、これは現実だよ。俺はファントム・タスク……詳細は聞いているはずだ」

先日の襲撃者が来たときにファントム・タスクについての詳細は専用機持ちだけに発表された。そこでちょっとした話は聞いているはずだ。

ファントム・タスクが……犯罪者の集団だってことが…

「宙っ!! あんたが一体何をしているのか分かっているんでしょうね？」

「くくっ……」

「何で笑っているのよ!」

「だって、俺に守られるだけの能無しがさ、俺に説教か？ えらくなったな…夏目」

心から思ってもいない言葉を言ったのは初めてだった。こんなにも……つらいことだったなんて思ってもいなかった。

それほどの衝撃が心を揺さぶらす。

どうしようか？ 仲間に入る条件（強制的だけど……）として出来るだけ関係を切れといわれてあんな事いったけど……これ以上無理かも…

「黙れえええっ！！」

「ははっ」

通信を聞いていたのか一夏が合流したとたんに切りかかってくる。それを受け止め…

「ご立派だな一夏あっ！」

「お前が何を言ったのかわかっているのか？」

「ああ、わかっているさ」

鏢迫り合いを行いながら言い合う。

「何でお前がそこにいるんだよ！ お前は仲間じゃないのかよ」

「俺のことを信じていたのか？ おもしろいなお前らは！」

鬼気迫る表情で言ってくる一夏。それを出来る限り作った笑い顔で応える。

「絆なんてくだらない………友情、愛情、信頼なんてまがい物だ」

「宙あああ！」

「勝てるでも思ってるのかよ、一夏！」

雪片式型と雪羅を受け止め、押し返す。一夏の体勢が崩れたところで一夏の武器を切断し、さらに切りかかる。

「くっそおおお！」

両足を切断しアンロック・ユニットを切り落とした。ハイパーセンサーが落ちていく一夏を捉える。

「まずは一人」

これで良かったんだよね？

さっきから疑問ばかりだ。それも答えのない。

だれか……止めてくれよ…俺を止めてくれよ……

「あら？ おかしいね、篠ノ之が一番最初に飛び込んでくるのかと思ったんだけど……」

また心にも思っていない言葉を出す。自分で自分が怖くなってきた。

気づけば一年生の専用機持ち俺を囲む形が集まっている。

シャルロット、セシリア、一夏の三人を行動不能にした俺たちのことを恨んでいるのか、にらみつけられていた。

「貴様、裏切ったのか？」

「よくも、一夏を」

「どうしたの？ 箒、鈴、かかっておいでよ。愛しの一夏をやったのは俺だ。それとも……俺から行こうか？」

そして切りかかる。まずは箒。

箒は多少は驚いていたが、すぐに反撃を行った。

雨月のレーザーをソードビットで弾き、空裂を七弦で叩き落とし、接近する。

同じ二刀流同士だ。技量の高いほうが勝つ。箒は所詮一刀流、勝てないわけがない。

「甘い」

「くそっ」

素早く戦闘不能にして、助けようと接近していた鈴へと方向を変える。

箒の悔しそうな声が耳に入るが、いちいち気にしてられない。

「あんたねえ！」

「黙れ、舌噛むぞ」

キャノンボール・ファスト使用の強化パッケージに近接戦闘用の武器はなく、あるのは拡散型の衝撃砲だけ、勝てない相手でもない。一気に接近してブースターをすれ違いざまに切り落とし、機動力を下げたところでソードビットを突き刺し、落とす。

「残り四機、か。お前たちもどうしたんだ？ 敵が目の前にいるのに黙ってみているつもりなのか？」

そして智花、優、葵、
ラウラへと向きなおした。

第65話 裏切り（後書き）

きちんと書けているのか心配です。

なんどもなんども読み直してはいるのですが・・・なんとなく納得
がいかない。

けど、理由も分らないので投稿しました。どこかおかしい部分な
どがあった場合はガンガン言ってください。

俺自身が高望みしすぎなだけかな・・・？

第66話 裏切り 2

第66話

目の前には宙君がいる。これは一体どういうことなんだろう……
なんでこんなことになっているか良くわからない。

けど、宙君は目の前でセシリアさん一夏さんと箒さんと鈴さんを
落とした。

なんで？

どうして？

わけがわからないよ…

なんで宙君が……

宙はあたしたちの目の前に立っている。味方ではなく敵で…

宙はそんなそぶりをまったく見せていなかった。

目の輝きだって健在だ。

なら、どうして？ 四人も落としたの？

なんであたしたちが宙と戦わないといけないのよ！

宙様はかかって来いといった。
戦いたくはありません。
けど、宙様は友を傷つけた。
そして私たちの方向を向いて戦えといった。
もう何がなんだかわかりません。

宙は何でそんなところにいる？
あいつは私の夫だ。……夫なんだ。
それでも……あいつは……あいつは裏切った。
本当に裏切ったのか？
誰でも良い、教えてくれ……戦わないといけないのか？

誰も反応しなかった。
それを見た俺は少しだけ安心した。
あいつらも俺と戦いたくないことが分かった。それだけで、うれしかった。

けど、俺はあいつらを倒さないといけない。倒さなければいけないんだ。それが命令。

それが……ラウラを助けることが出来る唯一の方法。

「俺と戦え。……それとも戦いたくないのか？」

「うん、戦いたくないよ」

「戦う理由がないじゃない」

「宙様に剣を向けるわけにはいかないの」

「夫婦が戦う理由などあってたまるか」

そうだな……お前らだって戦いたくはないよな。奥の手、か。やりたくはなかったんだけど……

「夫婦か、くだらない。言っただろ、友情も愛情も全て幻想だと」

右手のISを解除し、人差し指にはめてある指輪を取る。そして……砕いた。

それを見た四人の表情を見るのが、悔しかった。だからこそ、表情を見ないように両腕の大剣を握り締めた。

「これで戦えるはずだ。さあ、剣を取れ、銃を握れ。そして俺と戦え」

明らかに動揺している四人へと向かい、剣を振るう。けど目が死んでいた。

「なぜ、とめようとしなない」

剣が当たる瞬間に止める。それでも、目は動かなかった。剣が目の前にあるというのに四人は動かない。

「もう、いい。戦う気がないなら失せろ」

悔しかった。それしかいえない自分が本当に悔しかった。武装だけを切り落として四人へと背を向ける。ちくしょう、後悔ばかりだ。

「早かったな、宙」

「そうか？ 最悪だったよ」

気分は最悪、やる気はゼロ。だけど、最後の仕事が残っている。アリシアたちに合流した頃には上級生は片付けられていて、現在は学園最強と教師陣と戦っていた。

「エム、大丈夫か？」

「心配するな、うざい」

「わかった。じゃあ、アリシア、エム、生徒会長は俺に任せてくれ」

そして生徒会長更識楯無の前に立つ。これが作戦だった。
生徒が会長を倒せばおもしろいことになるから……そんなことで
戦わせるなよ。

「こんな形で戦うことになるとは思ってもいなかった」

「それはお姉さんのセリフよ。どうしてそこにいるのかしら」

「通信で聞いていただろ？」

「俺はファントム・タスクだ。で、あってる？」

「ああ」

「宙君。あなたが何をしているのか分かっているの？」

楯無はそう言ったが、ランスをすでに構え終え戦闘状態に入っている。

「これは、自分で出した答えだ」

そして俺も構える。両手の力を抜き右足を一步前に踏み出した。

「それがあなたの正義なの？」

「正義とか悪とか関係ない。俺は俺の信じるもののために戦っているだけだ」

「そう、何を話しても無駄だってことね」

水のヴェールをまどっているをまどっているミスティアス・レイ
ディのランスが俺に迫る。

「私があなを止める」

迫ってくるランスに俺は何もせず受け入れた。そしてそのランス
は何の苦もなく俺の胸に突き刺さる。

「うそっ!？」

水がドリルのように回転してあるランスはシールドを突破する威
力はあるが、絶対防御を貫くことは出来ない。

しかし、楯無が驚いたことはそんなことではない。手応えがない
ことに驚いたのだ。

「うそだ」

そして楯無のランスの左横に立ち、あらかじめシールドの中にお
いてあった右手の剣で一閃。

攻撃でシールドを貫通させたわけではない、シールドの中から直
接攻撃したので、もちろん楯無のISは絶対防御を発動させシール
ド・エネルギーが大きく削れる。

「どうして……?」

「あなたでは……俺には勝てない」

ランスを左脇で抱えて、もう一度右手の剣で水平に薙ぎ、ガンビ
ットの集中砲火を浴びせる。

絶対防御は発動しないもののすぐにシールド・エネルギーは切れた。

これで、終わり。終わったんだ、裏切りは……。生徒会長がやられた事実は、すぐに全ての人に知れ渡った。抵抗していた教師陣も士気を失い、武器を捨てる。

「ブリュンヒルで出る前に逃げるぞ」

「了解だ、エム」

「宙、ついてこい。こっちだ」

速度重視型に切り替え、先に撤退して行ったエムとアリシアをおって学園を出て行く。

これで俺は……さようならだ………

静かに波を立てる海面に黄昏色の夕日が落ちている。そんな風景を宙は見ていた。会長との戦いを思い出していた。

俺のワンオフは……あまり使いどころがないな

覆水のワンオフ・アビリティーは「エコー」だ。その名の通り、ギリシャ神話に出てくる妖精エコーのような状態になる。そう、声だけの存在になってしまふのだ。だからあの時は楯無のランスが体をすり抜け、俺の剣がシールド内に入っていた。

補足説明だが、通常ワンオフは稼働率が百パーセントで発生する

ようになっていいる。が、俺の残響は稼働率は百パーセントになってはいない。理由は簡単、残響が負けず嫌いだからこそ稼働率を低くすることで百パーセントになるのをふせいでいるから。群れるのを嫌っているらしい。

ナルキッソス
水仙にふられた残響は声となって存在を消す、か。

「こんなところにいたのか」

「ここは俺の部屋なんだけど……」

ここは俺がファントム・タスクから与えられた部屋だ。シングルではなくダブルなのが不思議だけど…。

アリシアは何もいわずに入ってくるが、それをとがめようとも思わなかった。

「何をしていたんだ？」

「考え事だよ」

アリシアに向けていた視線を戻して夕日を見る。

「男が一人でベランダに立って考え事か」

アリシアの話を聞きながら今の状態を確認した。

「そう見えなくもないな」

「私にはそう見える」

そして静寂。宙は夕日を見つめ、アリシアは宙を見ていた。これ

はこれで良いな、と宙は考える。

「後悔はしていないのか？」

不意にアリシアがそう聞いてきた。

後悔しないわけがない。あれほど気に入っていた場所はないだろう。

そう思えるほど宙の中では学園の存在が大きかった。

そして香のことも気になっていた。何も言わずに出て行った俺のことを怒っているのだろうか、と心配になる。

「していない」

けど、宙はあえてこう答えた。

「したらだめなんだよ。……どうせ、一度裏切ったんだ。もう二度と信じてもらえない。だから、後悔はしない。しても無駄なだけだ」

言えばいうほど自分の首をしめているような気がした。

それでも宙は言い切った。

これでよかったんだ、と本日何度目になるか分からない言葉を心の中でつぶやく。

「強がりはやせ」

そう言ったアリシアの両手は静かに宙の頭の後に回されていた。

「アリシア……？」

その行動の意味がわからない。どうして……そんなことをするん

だ。

「宙、私は後悔している。あんな少しの時間だけでも、だ。……お前が後悔していないはずがない」

そしてアリシアの豊満な胸に顔が押し付けられる。

そのやわらかさや匂いにクラツときたが、なんとか理性を保つ。

「もう一度言う、強がりはやせ、宙」

そんなアリシアのやさしさに自然と涙がこぼれていた。

女の胸の中で泣くのは二回目だけどたまらなく心地が良い。

まさに夢心地だ、このままこれが一生続けば良いな

そう思いながら、俺は涙がかれるまで泣き続けた。

「ありがとう、もう良いよ」

俺が鳴いている間ずっと抱きしめてくれていたアリシアに感謝をつげ、ゆっくりとアリシアの胸から顔を引き離す。

「もう、良いのか」

まだ良いのに、とでも言いたげな目で名残惜しそうに手を放した。そして、俺の胸元をさして一言。

「大事なんだな、それは」

「ああ、大事だよ」

俺の胸元で光っている三つ（・・）のペンダント。待機状態の残響、白銀のロケット、そして智花から貰った指輪。

四人の目の前で壊したのはアリシアと買い物をしていたときに買った同じものだ。智花からもらったものはチェーンを通して、ネックレスにした。

迷いはまだ残っているかもしれないが、今はこれで良い。俺は守るために戦っていると自覚するためにもこいつは必要だ。

「さて、次の作戦は？」

仕事をしてさっさと忘れよう

「吹っ切れるのは良いが、あせるなよ。まだまだ私たちが動くのは先だからな」

夕焼けを見ながら俺は誓いを思い出す。

『どんな手段を使っても守ってやる』

どんな手段が敵になるとは思ってもいなかったよエコー。静かに波を立てる海面は宙の心を表しているようだった。

第66話 裏切り 2（後書き）

む、難しい……書けば書くほど自身がなくなってきました。

この展開は半分ノリで書いているので実際、収拾をつけるためにこの語の展開を考えまくりました。

そのせいで先生に注意された。（授業中だったので……）

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第67話 数日後

第67話

誰かを本気で人を好きになって傷つくことを恐れていた。
一人では何も出来ないくせに強がりばかり言ってたんだ。
心の奥に隠してた弱さも見てみない振りしてたけど……
そんなことさえも吹き飛ばすほどの大きなものを見つけた。

「何を歌っているんだ」

アリシアが話しかけてきた。

いつの間にか口ずさんでいた鼻歌をとめてアリシアの方向を向く。
アリシアの表情を見れば分かることだけど心配をしている。

あれから数日がたった。俺は一応だけど何とか振り切って生活をしている。どこか物足りないものを感じるが、俺はいつものように無視をしている。

「なんとなくだよ。なんとなく口ずさんでただけだ」

「大丈夫か」

「頭が、か？」

「ああ」

「ふふふっ」

今ではこんなに冗談が言えるほどだ。だけど心のすみではあいつ

らのことを考えている自分がいることにも気が付いていた。

といってもアリシアにはばれただけ……

なぜかは良くわからないがアリシアはすぐに俺がそんなことを考えているとどこかへ連れ出す。

あいつらもそうだったよな

「また、あいつらの事を考えているな……」

ビクツと条件反射で反応してしまった。

やっちまった。またどこかへ連れ出される。

「丁度良い、買い物に付き合え」

「は、はい！」

こんな生活も悪くないなと思える日はそう遠くない。

「そ……らくん。どうして……」

宇宙の部屋だ。そこでは智花が一人でベットにうつぶせになっていた。

宙の匂いをかぎたかっただけだ。宙がここにいたことを確認して、宙がいなくなったことを再認識した。

私たちは宙に何をしていたんだろうか……何が悪かったのかな？

答えのない自問自答をどれがけ繰り返しただろうか、もう涙はかれてしまい出ることはない。それほど、泣きながら考えた。

時に謝り、時に自分を責め、時に学園や教師に矛先を向けた。自分がどれだけ小さい人間を思い知らされた数日だった。

「……智花」

そんな智花の隣にいた優は、ただ名前を呼ぶしかできなかった。

何もしてやれない自分が悔しかった。あの時宙と戦っていれば、こんな気持ちになんてならなかったはずだ。

宙はあたしに戦えといった。それは宙も私たちのことを考えていたのだろう、今になって宙の思いやりがわかる。

戦っておけば、こんなに傷つかずにすんだのかもしれない。

いつも遅すぎた。宙はいつもいつも私たちに隠し事をして、どこかへいってしまう。それを止めることが出来ない自分にも腹が立つし、相談してくれない宙にも腹が立つ。

あーもう、何なのよこの気持ちは………教えてよ…

宙様はいい、何を考えて行動しているのでしょか。
私ごときには分かることができないことぐらいわかっている。けど、宙様にも私の気持ちは伝わらないし……いつになったら分かってくれるのだろうか。

私はあなたのそばにいたいだけなのに……
次にやることは決まっている。私は宙様を止める。

「裏切り者……宙は裏切り者」

第四アリーナにてラウラは宙のやっていた試験をやっていた。
やってみればわかるのだが、宙のたたき出した結果はものすごく。
並みの技量ではたどり着くことが出来ない高みに宙はいた。

「裏切り者裏切り者……宙は……神代宙は裏切り者裏切り者裏切り者
……裏切り者には死を……死、を………うわあああああああ
あああ」

どれだけターゲットを切り刻んでも心は戻らない。
最愛の人物を殺さなければならない。そしてそれをするのは私だ。
私があいつを殺す。殺す。殺してあいつを取り戻す。

そんな四人のもとに強化パッケージが届けられた。製作者はもちろん篠ノ之束。

内容は水仙、豊水、断水への攻撃力強化。
意味は残響の撃破だろう。

水仙に「斬艦刀＋弓」

朱雀 弓はBTライフルのデータを元に簡単にフレキシブルを可能にしたものだった。

斬艦刀 展開装甲を使用しており展開後は明らかに質量保存の法則を無視しているほどの巨大な斬艦刀へと変わる。（束曰く、粒子を展開後に放出して構築しているらしい。が、技術は理解不明）

豊水に「爪＋脚部レーザー砲＋アンチマテリアルライフル」

ホークストライク 両腕に取り付けられた巨大な爪。

アクティブレザー オートで敵に向かって一度だけ曲がる特殊なレーザー

ガンズランチャー 見た目は宙が一度使ったアンチマテリアルライフルだが、実弾をエネルギー弾に変えて貫通力と射程を大幅に上げたもの。

断水に「パイルバンカー＋シールド＋ブースター」

リボルビングバンカー グレート・スケールの改良版で威力、連射性能をあげたもの。

シールド シールドといっても両側にクレイモアが装填されているため、衝撃を受けた方向に大量に弾をばら撒くようになっている。

ブースター これまた機動力を挙げるためのただのブースターではなく、クレイモアを発射できる。

「これもやりすぎだな」

この資料を見た千冬はそうつぶやくのであった。

第67話 数日後（後書き）

すいませんが、ここで一度休止させていただきます。

理由はもうひとつのSSを一巻だけ書きたいからです。

同時に書くなんて器用なこと出来ないで・・・一日一回投稿を目標している私としては・・・

たぶん、一週間程度で書き終わると思います。

さて、ここからは雑談なんですが・・・

モンド・グロッソ書こう！！もち、終わってから番外編で。と現在考えております。

そのために～～まずは全員のセカンド・シフトを考えて～～ワン・オフも考えないと～

というわけで一応考えているのですが、今のところワン・オフだけになっていきます。

例えば・・・

ラウラ 「黒兎」

セシリア 「ちっぽけなプライド」

シャルロット 「クリエーター」

鈴 未定です。というか一番難しい！！

智花 「水仙」
ナルキッソス

優 未定

葵 未定

こんな感じです。

こんな感じです。使って欲しいアイデアなどあったら感想に書き込んでもらいたいですね。書くかどうかは未定だけど（笑）

いつの間にかアンケートになってしまいましたが、この辺でさよならしたいと思います。

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第68話 訓練（前書き）

やっと、投稿できた。
投稿できましたよ！

と言うか久々に書いたので、どこかおかしいところがあるかも……

さてさて第68話です。どうぞ

第68話 訓練

「はぁ……はぁ……はぁ」

「きつつ……はぁ……はぁ」

宙とアリシアは暗い部屋に寝転がっていた。その部屋の広さは分からない。どこまでも続いているような部屋だ。

そして、二人とも少しでも多く酸素を取り入れようと胸を激しく上下している。

「少しは、加減しろよ……宙」

「こっちの……セリフだ……アリシア」

呼吸がしにくいのか、言葉が途切れ途切れになっている。

「いつもいつも……がつつきすぎなんだよ」

「それを……男のお前が言うか」

これで何回目だろうか？ いや、何戦目だろうか？

そんな疑問が二人の脳裏に浮かぶ、それほど同じ行為を続けていた。

何度も同じことを続けていたため、頭の中にはそんなイメージが浮かんでいる。

「しかし…最後のほうは…気持ちがよかったな」

「ふむ…どういうことだ？」

徐々に呼吸が落ち着いてきたのか、言葉と言葉の間が狭まる。

「何というか…その…一体感がさあ」

「それは…私も感じたな」

「あれはかなり良かったろ？」

あのなんともいえない、一体感を思い出す。そんな宙の顔は緩んでいた。

「気持ちの悪い顔をするな」

「別に良いだろ？ 本当に気持ちが良かったんだから」

「じゃあ、もう一度するか」

そう言ったアリシアは、宙の体に馬乗りする。そして、艶やかに微笑む。何かを誘うような笑みは、とてもきれいだっただけと言う。

宙はそんな彼女の顔に手をそえて、体を起こした。

両者の顔は今とても接近している。

「ああ、だからそこをどけよ」

そう言って、立ち上がる二人。ISスーツのはだけていた部分を直して、エネルギーを回復させておいた各自のISを起動させる。

「第何ラウンドかは良くわからないけど…次こそは」

「俺が」 「私が」

「「勝つ!!」」

「三弦」と「ブレードライフル」がぶつかり合い、しのぎを削った。

その頃IS学園では……

「専用機持ちのタッグトーナメント？」

先日の、キャノンボール・ファストでの襲撃に対応するために、専用機持ちのレベルアップするために……しかし、それは表の話。本当の目的は、ただ一つ。神代 宙を止めるために。

ただし、それはIS学園の目的。一年生の専用機持ちの中には、殺すために強くなろうとするものもいた。……ラウラだ。

「何をのんきなことを言っているんだ。裏切り者は殺さなければならぬ」と言うのに!!」

IS学園上層部の決定事項の資料を見つめて、一人だけ怒ってい

た。

それを止める者も咎める者など一人もいない。
全員が宙を止めるために強くなろうとしていた。そう、たとえ殺
してでも……

「でも、今のままじゃかなわないから……」

寂しそうにそうつぶやいたのは智花だ。
たぶんだが、この中で一番苦しいはずだ。裏切った後、元に戻る
のに時間がかかったからだ。

「そうよね……もっと、もっと強くならないと……」

「今はそれしかありません……」

優と葵も悔しそうな顔をしながらそう言った。

なんて歪んだ理由で強くなろうとしているのだろうか、このこと
を知れば……宙は悲しむだろう。

そんな四人を見ていた一夏と一夏一行は、辛そうに見ていた。

「何でだろうな」

「……わからん」

一夏のつぶやきに答える筈。

「ゼフィロス……今度こそ……私が！」

「み、みんな元気を出そうよ……ね？」

一人で復讐を誓うセシリアにみんなを元気付けようとしているシヤルロット。

とても不思議な一年生の専用機持ちだった。

「まったく、馬鹿者どもが」

「そうですね。……………それよりも、本当に不思議ですよ。あの宙君が裏切るとは…」

真剣な表情でキャノンボール・ファストでの市街地戦を見ているのは千冬と山田だった。

彼女たちも裏切りの理由は分からなかった。

篠ノ之 束が送りつけてきた強化パッケージ、あれの意味もわからなかった。

二人の疑問は簡単に解くことは出来ないだろう。

「まったく、学園最強の名が泣けちゃうわよね」

とある病室。そのベッドに寝ていたのは更識 楯無。その隣に座っているのは更識 簪。楯無の妹だった。

簪は楯無とは雰囲気为正反対だ。また、伸びている髪の癖毛も内側に向いている。

「……………」

簪は一言も言わずにただ、めがね型のディスプレイを見つめていた。

私は関係ない、そう言っているように……

……お兄ちゃん

香だ。彼女は一人で聖マリアンヌ学園の屋上にいた。二学期から通っていた学園生活は楽しいものだったが、すでにおもしろくともなんとも思はない。

時間は昼休みだが、彼女に近づくものなど誰一人いなかった。

なぜなら、あの市街地戦のことは大々的に報じられたからである。そのため、神代家は世間的に批判された。もちろん、IS学園も例外ではなかったが……

しかし、彼女はそんなことを気にしていなかった。

ただ、宙のしたことが信じられなかったのである。

いつだって、お兄ちゃんは…私をおいて行くのですね……

いつもいつも、届かない場所にいこうとする宙を彼女は嫌いだった。

けど、いつまでたっても宙のことを好きになっている自分がいたことも認めてはいた。

「さて…と、宙」

「ん？」

ISでの訓練を終えて宙たちはシャワーを浴びていた。ここでも、女たちが多いのでシャワー室に男用のものなどはない。つまり、宙の壁一枚越しにアリシアがいることになっている。

最初はさすがに気まづかったが、二、三日もおんなじことを続けていればなれるのも簡単だった。と、言うか、なれないと大変なのだ。

この場所はファントム・タスクで唯一の巨大な基地で、本来なら各々の部隊に分かれて各地に分散しているのだが、今回はなぜか集まってきたのだ。

理由は良くわからないけど、アリシアの話によると今日で全員が集まるらしい。

「さっさと、あがれ。この後に行かないといけない場所がある」

「へいへい、わーりやしたよ」

あんまり怒らせるのも悪かったので、すぐに体を拭いてタオルを

腰に巻きつける。

この姿をアリシアが見てもなんとも言わない、ただし：他の女性に合うと確実に変人扱いされる。

扉が開く音がしたので、アリシアは先にあがったようだ。

「んで？ 今日は何をするんだ？ もう訓練のせいで体がボロボロなんだけど…」

今でもずきずきと関節が痛む。今日の訓練はアリシアとの戦闘だ。あの薄暗い部屋は実質この基地で一番広い部屋だ。その広い部屋でどちらかのエネルギーが切れるまで戦い続けた。

まあ、結果は三十戦十五勝十五敗と五分五分だったんだけどな……

「気にするな。それより急いで着替えろ。今から歓迎会だ」

「……歓迎会？」

不思議とアリシアから聞こえてくるそれは、とてつもなく不気味な響きだった。

第68話 訓練（後書き）

どーでした？

お久しぶりですね、ほんとに・・・
久しぶりすぎて・・・書きにくかった。

それよりも、報告します。

今回から分かっていると思いますが、オリジナルの展開にします。

無論、七巻を踏まえたうえで、です。

若干、更新が遅れるかもしれません。ごめんなさい。
これまで以上に駄文かもしれません。ごめんなさい。

出来るだけがんばりますので、これからよろしくお願いします。

さて、七巻のテーマは「強く、強く」です。

いったいどこまで強くなる気かな？ 宙は。みんなも・・・

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第69話 歓迎会 序

第69話

アリシアについていき、着いた場所は――さっきまで俺たちが戦っていた場所だった。

その入り口に立った俺たちは……

「どうしたんだ？」

急に立ち止まったアリシアに、ぶつかりそうになった。

「いや、一言だけ言っておこうと思ってな……」

「なんだ？」

急に立ち止まっていたと思えば、急に真剣な表情になった彼女を見て、何事かと思った。

いつものあいつなら、こんな真剣な表情、戦闘中しか見たことなかったのに……

「失礼なことを考えていないか？」

「別に……」

アリシアは気味が悪いほどに勘が鋭いので今回も、感づかれたようだ。いつもいつも、彼女にしてやられているので、今度こそはたぶらかそうと、あさっての方向を見て口笛を吹く。

ピューピュー

「へたくそだな」

顔をアリシアに掴まれて強引に正面に向けられる。ぎぎぎ、と首から不気味な音が聞こえる。

「あだだだ、ギブ」

あまりの痛さに顔を掴んでいる手を二回ほど叩き、降参の意を伝える。すると、すぐに手を話してくれた。しかし、未だに首がおかしいので首を曲げ、ポキッポキッと音を鳴らす。

「まったく……それよりも、先に言っておくぞ……気を引き締めろ」

「ああ？」

アリシアの言っている意味がわからないのもう一度聞こうとするが、彼女は無言で扉を開けた。扉を開けた瞬間に、光が漏れる。あの薄暗い部屋からは信じられなかったので少しだけ驚いた。

そして、ざわざわと言う音が聞こえる。どうやら人の声のようだ……それも……大人数のそれで、学園のあれに酷似していた。

あんまり好きじゃないんだけど……

はあ、とため息をついて先に入っていったアリシアの背中を追うように中に入る。

「あれが……」

「へえ」

「見た感じ弱そうだな」

言いたい放題言ってくれましたよ。この人たちは……

あの薄暗く広い部屋を見渡してみれば……人、人、人だった。たぶんこの部屋の半分を占めることのできる人数だろう。もちろん、全員女だ。

「ここでも、か」

学園と同じ雰囲気をかもし出しているファントム・タスクの実働部隊のみなさん。

失礼だとは思うが……あれらと同じレベルだ。本当に……本当に……似ているどころか……そのまんまだ。

まるで見世物を見るような視線にうるさすぎる話し声、こちらのほうが年齢的に高いはずなのにこの始末だ。

女はどこまで言っても、女でしかない……か……

なんとも頭が痛い話だったので、反射的にこめかみを押さえてうつむく。

「さて、宙。今からが歓迎会だ」

もうすでにいろいろな意味でお腹いっぱいになっているというのに、この始末だ。本気でまずい……

これ以上関わっていると、何かと面倒なのでこの部屋を後にしようとして振り返って見たのだが、そこには……

「女、の子？」

見た目、自分の胸の下ぐらいの身長で、たぶん俺よりも年は低いだろう。つりあがった目と赤毛のポニーテールが特徴的な女の子が立ちはだかるように立っていたのだ。

「何でこんなところにこんな女の子が？」

とか何とか言いつつも、視線を合わせて、あっちに行け、と催促してみた。すると……

「I am your opponent!」

「ん？」

そのつりあがった目で敵意をむき出しにしながら、そう言ってきた。

opponent、と言え……確か……敵対者だっけ？

「おい、アリシア。なんていってるんだ？」

何となく嫌な予感はあるが、確認のためにアリシアに聞いてみた。カナダの母国語は英語だったはずだ。

「ああ、それは敵対者だといっている」

どうやら俺の思ったとおりだったようだ。しかし、相手にするのめんどくさかったので、隣を通り過ぎようとした。

「どこに行こうとしている。今からだといっただろうが」

止めたのはもちろんアリシア。そして……襟を急に掴まれたと思えば、今度は投げられていた。

上下がさかさまになっている、そう感じたときに反射的に片手を床につけて、それを支点にしてバク転する。

「何を——ッッ!!」

地面に足をつけたところでいきなり部屋に中央に向かって投げつけたアリシアの文句の一つでも言おうと顔を上げたら、あの赤毛の女の子がとび蹴りをかまそうとしているところだった。

近づいてくる足を手でふせいで、後ろに飛んで距離をとった。

「てめえ」

「やっぱり、男は馬鹿ばっか」

赤毛の少女はそう言った。それも、足を前後に開いて右手を前に突き出し左手を引いて、構えをとってる。

いつの間にか、周りを囲まれていたので逃げ場もなくなっている。くそっ……

「これが……」

歓迎会、か。まさかとは思っていたけど……本気で戦うことになっ
ているとはね。

「その少ない脳みそで、ようやく気づいたの？」

「宙、気をつけろといっただろうが……」

いや、アリシア。一言だけ言わせて貰うぞ……お前が、俺をここに
投げただろうが……！！

無言でアリシアをにらみつけた後、目の前で構えを取っている少
女を見つめる。

「さあ、私と戦いなさい。神代……これが歓迎会だ」

「嫌だ」

そう言って少女から目を背ける。周りにいる全ての女どもブーイングを飛ばすが……無視だ、無視。

「戦う理由がないからね」

そうして手を振って、立ち去ろうとした。が……

もう一度目の前に立ちはだかっている。

なんでよ……何で目の前にいるのよ。確実に振り切ったぞ、確実に！！

「逃げられるとでも？」

腰に手を当てて仁王立ちをしている少女は、自身有り氣に胸を張っている。

その様子はとてもこどもっぽくて……何と良いますか、その……可愛い。

「はいはい。子供は寝る時間ですよ」

可愛いので、ついつい子供を相手にするように言葉を発した。それが……それが……

「クロス」

こんなことになるなんて思ってもいなかった。

第70話 歓迎会 終わり

第70話

「クロス」

ほんの二、三分前には、こんなことになるなんて思ってもいなかった。目の前にいる少女の急激な変貌。今までは出していなかった殺気もダダ漏れだ。

「お、おい。アリシア……俺って、もしかして……地雷踏んだ？」

「そうだ」

ずーん、と肩が重くなる。どうやら、許してくれる様子はなさそうなので……仕方なく戦うことにした。仕方なくだ。本当に仕方ない、戦いたくはない。なぜなら体が痛いから。だからこそ、あまり体に力を入れずに少女の相手をすることにした。

「取り消せ！」

フォンッ！ フォンッ！ と、目の前を過ぎていく少女の拳。ああ、この拳が空気を切る音も久しぶりだ。と考える。攻撃を避けながらも、懐かしさを思い返していた。

「取り消せといっても、何のことか分からないんだけど……」

これも本当のこと、うそは言っていない。

「分かっているから知っているだろうが!!」

それがこの始末だ。戦闘中にアリシアにちよくちよくこの歓迎会について聞いていたのだが……これは、新入りが入ると必ず行われる儀式みたいなものらしい。

現在俺と戦っているのはカリフという名前だ。これの対戦者は抽選で決められるらしく、大体のものが見物したいらしく戦いたくはないらしい。

そうは言っても、これじゃあな……

的確に顔を狙うように振るわれている拳をかわす。この光景を見ている俺は信じる事が出来ない。と言うか……殺そうとしていないか？

周りのやつらも、殺り合え、ばかりいつている。うつとうしい。うつとうしすぎる。だから、もう良いや。やろう……本気で……

「気を付けろよ」

「それはこっちの台詞だああ」

覚悟を決めて拳をかためる。ポキッポキッと関節から音が出た。体は痛い、これで良い。この痛みはあのを思い出す。祖父ちゃんと千冬さんに教えてもらったんだ。負けるはずがない、いや、負けちゃいけない。

と、言っても……

「女の子だからなあ」

「また、馬鹿にしたなあ!!」

右のハイキック、そしてそのまま回転し左で足払いをする少女。

右足を上体を後にそらして回避したあと、バックステップで左をよけた。

さっきから、どういう理由で怒っているのかわからないので対処方法が分からない。アリシアに聞いても……「自分で考えろ」の一点張り。

八方手詰まりだ。だからこそ……

「じゃあ!?!」

胸をさわった。分かっているとは思うが、おっぱいのことだな……自分で言っただけ……結構恥ずかしい。

「————!?!」

声にならない悲鳴を上げたのか、それとも無言の気合なのかは良くわからない。良くわからないが、本気の一撃ということは分かった。思いつき振りかぶっての右のストレート。怒りに任せての攻撃はストレートの名前通りに真っ直ぐでよけやすい。

体重の乗った拳を下にもぐるように避けて、二の腕を掴んで少女の勢いを利用して投げる。

「グッ!」

何か苦しそうな声を上げたが、すぐに立ち上がろうとするので押さえつける。別にエロいことをしているわけではないので、あしからず。

完全に押さえつけたので俺の下から……

「離せ!! 離せ!!」

リズミカルに拳を振るってくるが、届くことはない。そして……
離すわけないだろうが!!

周りからまたまたブーイングが飛んでくるが、無視だ。

「アリシア、いったいどうすれば良いんだ？」

「気絶させるか、殺すか」

うん、普通に後者はないね……と言うか、ないことを祈る宙だった。
しかし、この困った子に一つぐらいお返しをしたかったので…

「殺せば良いんだね？」

物凄く良い笑顔でそう告げて、右腕を上げる。

「えっ!?! ほんき? まって!?!」

驚愕の表情で見上げてくる少女に「待つわけないじゃないか」と
またまた笑顔をでそう答えた。

死にたいして恐怖するのが当たり前な人間だ。それはファントム・
タスクの実働部隊の一人である少女も例外ではなかった。今にも涙
がこぼれそうになっている。

やばっ……俺ってSかも…

新たな扉を開きそうだったので、右腕を素早く振り下ろした。

「おやすみ」

いったいどっちの意味だったのだろうか、少女はまだ知らない
だろう。そんな少女はただ悲鳴を大きく上げるだけだった。

そして、歓迎会だ。どうやらあれは前菜らしく、今行っていることがメインらしい。

目の前で行われていることは、普通の歓迎会だ。お酒を飲んだりうまそうな料理を食べたりと、いたって普通の歓迎会。ときどき最初の前菜で興奮しすぎた人がいるが、それを抑えるのも新入りの俺の仕事らしく、すでに四、五人は夢の世界に旅立ってもらっていた。

「お前は飲まないのか？」

そうやってきたアリシアの手にはお酒が装備されている。未成年だろ、と言うのは場違いだろうと思い、何も言わずに断っておいた。これが…あのファントム・タスクかよ。普通のやつらとかわらねえな……

そう、変わらなかった。酔いつぶれる人もいるし、騒いでいる人も、料理をがんがんで食っている人も……本当にこれが、犯罪組織なのか？　と言う疑問がうかびまくる。しかし、嫌な気はしなかった。むしろ心地良いぐらいだ。

笑い声がこの広い部屋に響く。

さて、いったいいつまで続くのだろうか？　これは……

この祭りは、終わることを知らないかのように続いている。それを見て少しだけ不安になるのだった。

第70話 歓迎会 終わり（後書き）

一応書くことが出来た・・・

さて、自分で読んでみた結果・・・あまり、キャラの描写をしていなかったため、今度からは描写を書いていきたいと思います。

もしかしたら、みなさんのイメージが崩れるかもしれませんが、すいません。

第71話 企業の人

第71話

「何なんだよ、これ…」

そうそう、俺はあの——歓迎会という名の祭り後、寝たのだ。理由はもちろんめんどくさいから、酔っ払いの相手は初めてだったが、目に見えて難しそうだったので部屋の端のイスで座りながら寝たのだ。

そして、やってこない朝はない。小鳥のさえずりや朝の日差しを浴びて……いや、浴びた結果、起きてしまったのだ。朝が来ないことをひそかに願っていたのだが、不変の真実は変わらないそうだ。

だから、過去形の文でも現在形で書かないといけないと言うことが起こるんだ。（中学生以上の人なら分かるよね？）

さて、冒頭に戻るが……目の前にあるのは寝ている女、女、女だ。それも、胸元を大胆に開けている人もいるし、本当にヒドイ人は半裸の人もいるし……酔っ払って寝た人は本当にめんどくさい。と言うことを理解した俺は、誰も片付けを行っていないパーティー会場を片付けることにした。

約十分後……

「終わった…」

とんでもない疲労感が俺を襲う。あの量の食べ物、飲み物、ごみ、を突貫作業で片付けた。ものっそい、突貫作業だったせいで小さなところがきつちりと出来ていないが、気にしない気にしない。腕時計を見て時間を確認すると……九時。腹も減ってきたので朝ごはんを作ることにした俺はパーティー会場を後にした。

適当に伸ばされた黒髪、そして同じく適当な髪型。普通に見ても顔は美形だ。服装は黒く染められたIS学園の制服を着ていた。この辺は、着替えるのがめんどくさかったり、三ヶ月ぐらい着ていたので癖になってしまっていたり……それと、一番の問題はM（織斑まどか）が嫌いだと言うことなので……黒く染めて妥協してもらった。と言うのが、真実だ。

その黒い制服を身にまとっている宙は、このファントム・タスク内のとても設備が良い調理室で軽快なリズムと共に食材を刻んでいた。

「うーん、肉しかないよね？」

パーティーのあまり物をよく見ても、肉しかない。たぶん、ベジタリアンがいるのだろう。それか、太りたくないか、だ。よって、とにかく肉を細かく刻んだ。冷凍庫の中に冷ご飯があったので、チャーハンを作ろうと思う。

適当にご飯と細かく刻んだ肉、そして卵を炒める。味付けは醤油と塩コショウで簡単につけた。醤油がこげるにおいはいつも、香ばしくておいしそうだ。ある程度火が通ったところで適当に盛り付けて……食べようとしたんだけど……

ピョコ　ピョコと動く赤い何か。なぜか見たことのあるような感じがして、少しだけ観察する。あいつだろう、と思っているけど……。その赤い何かの本体は机に隠れてうまく見ることが出来ないが、

徐々に近づいていることは分かる。恐怖はしないが、相手にするとめんどくさそうなので無視して食べようとする。

サササ、とさらに近づいてくる赤い何か。そして、チャーハンが俺の口に入ろうとしたその瞬間……奪われた。

「おい」

レンゲごとかぶりついている赤毛のポニーテールを引っ張る。

「痛いってば」

そう言ってぶんぶん、と拳を振るってくるカリフ。分かっていたとはいえ、どうも好きになれないな、こいつは……

「てめえ、何食ってんだ」

「なんだ？ この私に文句を言うつもりなのかよ」

「勝手に食っておいて、その口か……」

このずうずうしい態度、どこかの銀髪軍人と同じだ。こう言うやつには、もう一度お仕置きが必要だな。レンゲに噛み付いたままの空中に浮いている体を地面に叩きつける。

「おい、もう一度言うぞ。何食ってんだ」

「うるさい、男が私に命令するな」

「そうか……」

地面に横たわったままでも、この口。本当にうざい。足を手で掴み宙吊りにする。多少の抵抗はあったが、所詮体格も力も違う女だ。多少の抵抗も攻撃のうちに入らないものばかりで、簡単だった。

「離せ！ 離せ！」

「そういえば、あの時と同じシュチュだな。いや、周りに人がいないから完璧とはいえないか……」

少しだけ殺気をこめてそう言う。

小柄な体格をしている少女の服装は作業着姿だったので、内心良かったと思いつつ、握る手に力を加える。

「なあ、男が嫌いか？」

殺気をこめていた声とは打って変わって、やさしくそう言う。それだけで、驚いた表情を見せるがすぐに警戒の色を見せた。

「嫌いだ」

彼女の目には悲しみの色が見えた。

「そうか……」

ゆっくりと手を離して無事に地面に付けてやる。

なんでこいつがこんなにも、男を敵視するのかは分からんが……

「それを食うが良い。お前が食ったものは入らない」

この組織に入っている以上、何か思うことがあるのだろうか。

そして、もう一度料理を始めた。

第72話 新聞

第72話

「これはゾンビで●か？」

「いいえ、ただの酔っ払いです」

今回も疑問系で始まりました。

さて、なぜこの疑問が浮かんだのだろうか？ その答えと一緒に飯を食っていたカリフが答えてくれたが、実際何が起きているのかと言うと……

「あゝあゝあゝ」

「うゝうゝうゝ」

もだえ始めていた酔っ払って寝ていた人たち、もちろんアリシア、上司のスコールさん、その彼女オータム、Mもそこにいる。

……………未成年の飲酒は法律上禁止されています。

一応警告しておこう。そう思う俺だった。

場所が変わって、ここはIS学園。一夏たちのクラスだ。

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

休み時間だというのに誰一人話していない。いつものこのクラスだったらうるさすぎて、千冬さんに必ず怒られていたはずのクラスでもこのさまだ。分かっているとは思うが、この状態を作り出したのは宙が原因だ。いや、厳密に言うとう宙が裏切った結果……ラウラが変わってしまったことによるほうが大きい。

目は死んでいる。まどっている空気は常に重苦しく、殺気がこもっている。さらに常時「裏切り者」と呟いている。

そんな彼女を助けようと、一夏たちも奮闘した。自習の時間をすべて、戦闘訓練に費やしているラウラに遊ぼうと誘ったのだ。

「なあ、ラウラ。みんなで遊びに行かないか？」

「……………」

返ってきたのは無言の返事、勇気を出して言った一夏のお誘いもあえなく撃沈した。

「ラウラ、買い物に行かない？ 秋の服もっていなかったよね？」

ラウラと同室である、一夏一行の唯一の常識人であるシャルロットだ。しかし、返ってきたのは……

「……………」

無言。それもシャルロットでも黙ってしまうほどの威力を持った無言だった。もう、何もかも試した結果だ。あの筈だってラウラのために、とがんばって誘ったと言うのに、返って来たのはもちろん、無言だった。

誰も止められなかった。教官としたりしていた千冬の言葉さえ、受け付けなかったのだ。どうしてクラスメイトがラウラをとめる事が出来ようか……いや、できはしないだろう。

またまた、場所が変わり屋上。今度はラウラではなく、智花、優、葵の三人だ。

「わからないよ……全然分からないよ」

うつむき、制服を握り締めている手は白くなっている。あれからいくつもの日にちが立ったが……変わらなかった。一度は振り切ることが出来たが、どうしてもあのことを思い出してしまう。そして、裏切りの理由を考える。優も葵も答えてくれない。誰も答えてくれないのだ。知っているのは宙のみ……

「分からないなら、教えてもらえば良いの。そうでしょう？」

優の言ったとおりだ。分からなければ、教えてもらえば良いのだ。

「罪が重たくなる前に、止めましょう。そう決めたはずです」

現在の宙の罪状は……一応、国のものになっているISの窃盗罪、
だけだ。だが、機密事項を知っている宙は国際IS委員会に追われ
ているのは確かだ。

葵の手に握られていた新聞の見出しには……

『男性のIS操縦者の裏切り』

「すまない、助かった」

そう入っても頭痛がひどい。ガンガンすると言えはわかるだろう
か、そんな感じだ。丁度宙から、水を貰ったところだ。それを一気
に流し込んでも、アルコール独特の気持ち悪さが抜けることはなか
った。

………未成年での飲酒は本当に法律で禁止されているのでやら
ないように……

何度でも言ってやろう。本当にやめてくれ……

「つたく、お前らは本当に馬鹿なのか？」

呆れたように頭に手を置いている宙。ふと、新聞の記事を思い出
す。

……知っているよな？ 本当にこいつは……何を考えているんだ？

現在、私たちの世話をしてもらっているが、彼からはいやそうな気持ちを感じられない、それどころか自ら進んで看病をしている。わからない、どうしてこいつは……

「なぜだ」

「ああ？」

お盆を片手に水を運んでいた宙がアリシアの方向を向く。小さく聞こえないようにしていったはずだが、聞こえていたようだ。

「なんでもない」

どうしてだろうか？ 聞きたいのに、それを拒んでしまった。それも自然に……

「そうか」

そう言って、水を運ぶことを続けた。その彼の後姿………黒に染められたIS学園の制服、その後ポケットに新聞が入っている。それはアリシアが読んだことのあるもので……一面のタイトルは……

『男性のIS操縦者の裏切り』

本当に何を考えているんだ…
疑問は増え続けるばかりだ。

「大丈夫か？」

片っ端から二日酔いで苦しんでいる人を助け出していく。

本当にめんどくさいけど……まあ、いいか。

昨日の夜に夢の世界に旅立ってもらっていた人は無事だったので、その人達に協力してもらいながらすこしでも楽になってもらおうと、せつせと動いていた。

昨日の朝刊を後ポケットに突っ込んでいたことを思い出す。

まあ、こんなものだろう。しかし……まだ、足りないな……

「すまない、こちらにも水を……」

「ん？ ああ、すぐに持っていくよ」

まっ、考え事はいつでも出来るからな……

今は、酔っ払いを助けることに集中することにした。

第72話 新聞（後書き）

さてと、そろそろ七巻の内容に入りたいと思います。

・・・うーむ、ネタを使いたいな〜。と、なんとなく思っています。現に今日は使いましたし・・・

もし、使ってもらいたいネタがあるなら、感想に書いてもらっても結構です。自分の知っている範囲で使わせてもらいますので・・・

まあ、そんなことはおいといて・・・ここでも良い過去話を書きたいと思います。

このオリキャラの神代 宙のネーミングですが・・・よくある名前ですよね？ この名前、実は小学五年のときに考えたものです。（嘘じゃありません）それから、ずっと使い続けているんですけど、名字は変えますけどね♪

と言うわけで、少しづつキャラの生まれを書いていこうかな〜

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第73話 『インフィニット・ストライプス』

第73話

「どうも、私は雑誌『インフィニット・ストライプス』の副編集長をやっている黛 渚子よ。今日はよろしく」

「あ、どうも。織斑一夏です」

「篠ノ之箒です」

「雅智花です」

「夏目優です」

「白石葵といいます」

前に一度説明したのかどうか、わからないので、ここで説明しよう。専用機持ちは普通、国家の代表か候補生となっている。しかも、女性であるためにタレント的なこともするのだ。と言うわけで、IS学園二年生黛薫子の姉が副編集者だったこともあり、雑誌に参加することになった。

しかし……

「もう少し明るく行こうね」

渚子さんの言うとおりに一夏、箒をのぞく三人の雰囲気は暗い。それどころか、威圧しているような気もする。

三人はいやなのだ。あのことを言うのが……

宙のことは、朝刊の一面に載ったように全世界に報道された。これが学園内になら、もみ消していただろうが、市街地で戦い、そして裏切ったために報道されるしかなかったのだ。

そのため、国際ＩＳ委員会が身近にいた一年生の専用機持ちに取調べが行われた。

「最初に言いますけど、あのことは言いたくありません」

だからこそ、智花はそう言った。普段の彼女からは考えられないほど、その目には強い意志がこもっていた。

「わかっているわよ。私はただ専用機持ちとしての意見を聞きたいだけだから安心して」

「それなら……」

「わかりました」

渚子の裏表の内容に見える笑顔で、三人は納得した。もしかしたら、この笑顔は本心からなのかもしれない……ま、誰も知る由もないことだが……

「それじゃ、まずはインタビューから始めましょうか。その後で写真撮影ね」

そう言って渚子さんはペン型のＩＣレコーダーをくりんとまわす。

「それじゃあ、最初の説明いいかしら？　織斑君、女子高に入学した感想は？」

時は少しだけ、進む。

「何を見ている」

「どわああああああ」

ここは、ファントム・タスクの基地にある唯一のショッピングモール。買い物自由が出来ないファントム・タスクの実働部隊が物を買うための施設だ。なのでここには、以前説明した『レゾナンス』以上に設備がよく、品物も揃っている。

その本屋で、ある雑誌を眺めていた宙は、アリシアに急に話しかけられたために驚いているところだった。

「そんなに驚くことでもないだろう」

いやいやいや、驚くでしょ

「な、なんでもないぞ」

そう言いながら、見ていた雑誌を体の後に隠す。

「どれどれ、と」

どうやら宙の見ていた雑誌を一目見ただけで判別したのだろう。本棚に並んでいる同じ雑誌を取り出して、ぱらぱらとめくる。

その様子を見て、ものすごくときどきしている宙。

その理由は、アリシアにIS学園のことを考えているのを見抜かれると買物に誘われるからだ。前にもこんなことがあったが言っていないだったので説明知ることにした。アリシアの買物と言うのは……下着売り場だ。あそこに強引に引っ張られて行き、そして選ばされる。

本当にあそこは行きづらい……

少しだけ……いや、物凄いトラウマがあるので二度と行きたくない。

「これか」

宙が考え事をしている途中に、アリシアは目的のものを見つけたようだ。

まずい、そう思っても逃げ場がない。今になって考え事をする前に逃げておけばよかったと後悔した。

目的のページを宙に向かって見せ付けるように広げるアリシア。

彼女の表情は本当に楽しそうだ。

絶対、嫌がらせだ……

「よく撮れているじゃないか」

ときどきしていた気持ちは、すぐに沈む。

そのページに写っていたのは、一夏たちの写真だ。そこには智花たちも含まれている。

「そうか……そうだよな」

宙はそれを聞いて、うつむいた。

やっぱり、そう見えたのか…
少しは喜ぶだろう、そう思っていたアリシアは驚く。

「どうした？」

確かに、このページに写っているのは笑顔の写真ばかりだ。化粧をしているために、学園にいた頃よりも綺麗に写っていることは確か、しかし宙の表情は晴れない。

「見る価値がない」

そう言って、丁寧に雑誌を閉じてもとの位置に戻す。
偽りの笑顔なんて見たくなかったよ…智花、優、葵…

「おい、宙。待て」

うつむいたまま、立ち去ろうとする宙をとめようと急いで雑誌を閉じて、追いかけるアリシアであった。

時は戻り、スタジオ。

そこでは、一夏をはじめとして箒、智花、優、葵の五人は次々にポーズを変えていく。一応、仕事だと割り切っている五人は、調子よく写真を撮っていた。

少なくとも、常に写真を撮って仕事をしているプロのカメラマン

以外には、そう見えていたはずだ。

こんな服……いらない

智花が着ている服は季節に合わせたコーディネートがされていた。確かに可愛い。スタジオにいた男性たちが目を取られていることはある。

少しだけ幼さが残るかわいらしい顔に、少しだけ色素の抜けた淡い茶色のショートヘアで髪の一部を右側で少しだけ結んでいる。しかし、その顔には作り笑顔しかなかった。

「私は……私は……」

「どうしたの？」

いつの間にか呟いていたのだろう。気づいたら、「私はどうしたら」と呟いていた。

どうしたら、か……もう、決まってるのに何でだろう？ おかしいな

「なんでもありません」

「そうか、なら良いんだ。……それじゃあ、そこにあるヌイグルミを抱きしめて」

「はい」

その人の指示に従い、近くにあった大きなヌイグルミを抱きしめる。

強くなきゃ……もつと、もつと……

少女のその願いは、はたしてどこまで本当なのだろうか……

第73話 『インフィニット・ストライプス』（後書き）

あれ？ 書いて始めてわかったけど……

作者の私でもなぞが深まるばかり……これで良いのかな？

それはそれでおいといて……今日は智花の生まれについて語りましょう。

実はおしめん……いえいえ、おしキャラなんですわ。気づいている人もいるかもしれませんが、彼女は他の作品から抜き出してきます。

名前（名字は違う）、容姿、性格（アレンジしていますが基本は同じかな？）を抜き出しているんですね。大好きな作品の大好きなキャラクターなので使ってみたら……人気ですね、彼女。

感想でも良くできますよ、その名前。うれしいのやら……うれしくないのやら。

作品名は規制が強くなったので、言いません。あしからず……

次回は……優にしましょうか

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第74話 身体検査にエンカウト

第74話

「身体検査に……エンカウトね……はあ……」

『身体検査』に『エンカウト』この二つは俺を本当に悩ませている。まずは一つ目『身体検査』この悩みは現在進行形だ。丁度今パーソナル・データを取っているところなんだけど……焼け付くような熱い視線を感じる。

結局ここでも……動物園みたいだな……

なぜかは知らないが……あの時——祭りの後で看病したあたりから、ずつとこんな感じた。何でこんなことになったのかは分からないので放置をしているのだが、ひどくなりそうなので対策を取りたいと思っているところだ。しかし、心のどこかでは無理だと思っている自分もいる。

次に『エンカウト』だけど……

「出る」

「はいはい」

終わったようなので……あとで説明するようにしようか、と。

スキャンフィールドから出る。待っていたのはアリシアと名前も知らない視線が熱い人達だ。

「これで、今日は終わりか？」

「そうだな。終わりだ。休んでも良いぞ」

「わかった。じゃあな」

そう言って、出て行こうとするのだが……

「待って」

と、止められる。アリシアではない、名前を知らない人だ。そんな人たちはここに数人ほどいるのだが、その中でも一番、年m

「何か？」

口に出さなくて良かった、とそう思う。なぜなら、その人の手には：すでに凶器が握られている。さらに、物凄く綺麗な笑顔だ。正直怖すぎる。

「なんでもない。で？ 用件は？」

「むう、つれないわね。でも良いわ。今からお姉さんたちと遊びに行かない？」

俺のそっけない態度に一度はしかめっ面をしたが、すぐに作り笑いを見せる。あまり好感は持てない、その笑みは俺にとっては不愉快極まりない。

「遊びにですか？ どこに？ 仕事は？」

本当にめんどくさく、不愉快だ。これ以上めんどくさいことに巻き込まれてたまるか……

「どこでもあるじゃない。それに私たちの仕事は整備よ」

こいつをAとする。

「それとも、私たちがあなたを整備してあげようか？」

これをB。

そのほかは本当にその他で結構だ。おくてと言うやつだろう、自ら進言せず他の人の後についておこぼれを貰うようなやつらだ。俺のもっとも嫌いなタイプ。よってその他だ。

ちらっと、アリシアのほうを見てみると……思ったとおりに無視している。

少しぐらい助けてくれたって、罰は当たらないはずなのにな……視線を戻す。助けは来ないようなので、一人で切り抜けることにした。

「自分の体ぐらい自分が一番良く知っています。だから、わざわざお姉様方の手を煩わせるようなことでありません」

あちらの作り笑いに作り笑いで応える。

「それに、遊ぶ場所なんて知りませんから……」

足を進める。さっさとその場から離れたいのために……

「待ちなさいと言ってるでしょ？」

「疑問系で命令されたても……ね？」

沸点が低いやつと付き合っても楽しくないことも分かっている。

さらに足を進める。

予想どうりなら……

ガシッ

ほら来た

「馬鹿にしているの？」

実力がものをいう場所だ、ここは。それなら、一度勝ったという事を刻み付ける叱るまい。

数分後

「」「あゝあゝあゝ」「」「」

ゾンビの完成です。作り方は……R－18です。

「派手にやったな、おい」

「うるさいな、別に良いだろ？ アリシア」

検査室と言う狭い部屋の中で数人を相手に無駄な損害を出さないで倒す。ほぼ、超人技だ。それを見ても驚かないアリシアもアリシアだろうか……

そこが整備班と実戦班との実力の差だろう。しかし、それを理解しないやつが一人だけいるのだ。

そいつの顔を頭に浮かべて、ため息をつく。

「ふっ、今日は何回目だ？」

「助けてくれない、人でなしに言うつもりはない」

相変わらずの口の悪さだ。惚れ惚れするよ……と。

「俺はもう行くよ。じゃあな」

そして、出て行った。

手元にある資料は宙のパーソナルデータだ。

ふーん、思ったとおりの身体能力だな……

そこに記されていたのは、思ったとおりの身体能力だ。しかし、驚くべきはI S適正。高いのではない、低すぎるのだ。

【E】

この基地——この世界に、これほど低い数値など存在しない。現にこの基地にいるI S保持者はほぼ全員が【A】だ。低くても【B】。それなのに……宙は【E】。ありえない、ありえなさ過ぎる。この数値で、あの動きができるはずがない。

「どういうことだ」

不思議だな……あいつは……

そんなことを考えながらも、ふふふ、と一人で笑うのであった。

エンカウントー——この言葉の意味を知っていますか？ この意味は、よくRPGで使われます。フィールドを歩いているとランダムに敵が出現することだ。そうゲームの中で起こることなのだ。現実世界で起こって良いことではない。それが、今、俺の目の前で起こっている。

「勝負！」

カリフだね……今日で何度目だろうか……

思い出すことさえ難しいので、考えない。あのお祭りからの一件でこいつは俺を目の敵にしており、出会うだけで勝負を挑んでくるのだ。

ああ、めんどくさい

「はいはい、弱いやつは黙っていてください」

と、軽ーくカリフの手をひねり、無力化させる。

「離せ！」

「離せ？ それで離したらどうするんだ？」

「もちろん、ふっとばすに決まっているだろうが！」

めんどくさい

そんなときだった。急にファントム・タスクより貰った新しい携

帯が震える。

ちびっ子を押さえていない方の手で携帯電話を取る。

「はい、何ですか？ スクールさん」

「スクールで良いといっているでしょ」

「とし…」

年上にそんな言葉遣いは…ということを言おうとしたら…

「何か言ったかしら？」

つぶされてしまった。

なぜだろう、今日同じことが一回あったはずなのに、またやってしまった。携帯電話から黒いオーラが出ているのは気のせいだ。

「いいえ、何でもありません。それよりも……」

「命令よ」

これで動ける。そう確信した宙の手には力がこめられていた。

第74話 身体検査にエンカウント（後書き）

今日は…優ですね…

優の生まれは…その…はい…実は最初この作品に出ないはずでした。

しかし、宙の裏切りは考えていなかったのですが、他の理由で智花と戦わせようと考えていたところ…力量不足では？　そう思っ
て作りました。

すいません。

で、キャラの原案は…クラ●ドの藤林の姉ですかね？　確か、
一番最初に思いついた原案がそうだったはず。

けど、現在は軽くキャラ崩壊していますけどね…

現在は作者のノリです。原案を基本としたノリです。

次回は…葬か…あなたは気づいていますか？

第75話 作戦会議 ダーク・サイド（前書き）

このタイトル、後でも使いそうだな・・・『作戦会議 学園サイド』
で・・・

ネタバレですねW 気にしないでください。

第75話 作戦会議 ダーク・サイド

第75話

スコールさん…いや、スコールの呼び出しがあったので指示通りの部屋へと向かう。その間にもカリフからのエンカウトが発生したが、何とか切り抜けた。

もう、さんざんだ。あのエンカウトはとてもめんどくさいし、女を殴り続けると言うのも…

まったく…胸を触ったことは謝ったというのに…なぜ？ 誰も教えてくれないんだよね

そうこうしている間に指示された部屋の前に立った。コン、コンとノックして扉の取っ手にてをかけて開ける。

「失礼します」

一応、上司だ。十六歳で上司が出来るとは思ってもいなかったけど、何とかなれることが出来た。なれることが出来ないといけなかった、そう言ったほうが適切かも知れないが…。

「やっとか、遅すぎるぞ」

「……はあ」

本気で頭が痛くなってきた。部屋に入った瞬間、アリシアと目が合う。何で？ そう考えたが、すぐにやめた。どうせ、後ろにいる二人が関わっているのだろう。

「席について……今から説明を始めるから」

スコールの命令どおりに席につく。

「あなたたちに与えられた命令は……」

「もったいぶらないで早く言ってください」

「てめえっ！」

レズであろうと思われるオータムが俺に対して怒るが、もち無視。無視だ無視、相手にするのもめんどくさい。そのあたりはすぐにスコールがオータムをなだめることで終了したので良かった。これ以上何か言われていたら、こぶしのほうが出ていたかもしれない。

あれれ？ こっちに来てから暴力的になっていないか？ まあ、どうせあいつのせいだろうけどな

膝の上で握り締めていた拳をゆるめてスコールの言葉を待った。

「ちょっと待て……あなたたち？」

少し前のスコールの言葉を思い出してそう言う。聞き間違いでなければ……

「ええ、そうよ。あなたたちに、よ」

軽い絶望感、悲壮感、そんな感じなものが俺を襲う。

おいおいおい、どう考えてもアリシアしかないじゃないか……

「そんなに嫌いか？」

くつくつく、と笑いながらアリシアが言う。物凄く体がだるい、

何も考えたくない。

「お前と一緒に？ ああ、めんどくさい」

「あら？ 嫌なの、アリシアと一緒にじゃ…」

「スコール、その通りです。いやです」

「そう」

いやらしく微笑むスコール。

あああ……

また全身を襲う、いやな感じ。これは慣れようとしても絶対に慣れることはないだろう。

「あなたのパートナーはアリシア決定ね」

はい、予想していた答え来ましたー！ー！。最悪です。最悪なんです。本当に最悪だー！ー！。

頭を抱え込む。よりにもよってあいつとパートナーになるなんて…、と考えるもいなかったの、本当に頭が痛くなる。あいつと同じ部屋になったところで、何も良いことがなかったからだ。

い、いや、まあ、確かに…：男として悪いことはなかったけど…：て、ちがー！うー！！ そんなことじゃなくて、そう！ あいつと一緒に良いことがない！ それが言いたかったんだ。

はたから宙の様子をうかがっていると、頭を抱えて苦しんでいるようにしか見えなかったのは、この部屋にいた三人だけのお話。

翌日、一応あの後にはスコールから命令を聞いた俺はアリシアと共に食事をしていた。ちなみに俺が今食べているものは……カロリーメイトだ。

伏字？ 気にすんな

ついでにアリシアは、パンとスープだ。ここの食堂もなかなかおいしいものを提供してくれるのだけれど、昨日のあれで食欲がわかなかったのでカロリーメイトにした。

「さて、どうするか」

静かな食事はアリシアが先に壊す。別に悪い事ではないが、今は心情的に恨みたい気分だ。

「命令が……『目立て』だしな」

しかし、いくら気分が優れないと言っても仕事だ。無視することは出来ない。よって、仕方なく会話を成立させる。

そこで、今回俺たちに与えられた命令を説明するでしょう。与えられた命令は唯一つ『目立て』と言うこと。理由は俺とアリシアの存在はすでに世界中に知れ渡っているのです、隠密行動がしにくい。ファントム・タスクと言う組織自体は公表されてはいないが、各国の軍の間ではすでに広まっていることだろう。よって、俺たちがすることは他の部隊が動きやすいように俺たちが注意をひきつける。と言うことだ。

「まったくもって、めんどくさいな」

どれだけ大雑把な命令なのだろうか……と言うか目立つたためなら何でもして良い。それだけ、やることが大過ぎる。アリシアもこのことに同感らしく珍しく嫌そうな顔をした。

「宙、何か意見を出せ」

「俺ばかりに押し付けてるんじゃないよ」

我不関焉^{われかんせず}、と言わんばかりに思考を停止させるようなそぶりを見せる。

まったく、良い性格してるよな…はあ……

「ふふん、そうだろう？」

「心を読むなよ。そして胸はって言えるところじゃないから」

自身有り気に胸を張っているアリシアに釘を刺して、考える。べ、別にあいつのためじゃないんだからね
と、どうでも良い事を考えて本題に戻った。

「某機動戦士〇が二つのやつらのように、あれか？ 武力介入と言
うやつか？」

「私には世界の歪みは見えないな」

ですよね〜

改めて考えてみる。

「じゃあ……………次は、軍の基地でもつぶしてみるか」

「さっきと何が違う？　そして、対策されたらどうするんだ？　一応、MがIS奪還を命じられていると言うのに…………」

「奪還だと？　奪取の間違いだろ？」

奪還——奪い返すこと

奪取——奪い取ること

似ているようで違う、みんなは分かっているよね？

「そうとも言う」

言わないし、と心の中でツッコミを入れてまた考える。

ドガン！！！！　急に食堂の扉が吹っ飛んだ。そして運悪く俺に向かって飛んできた。それを部分展開した腕で吹き飛ばす。

「また…てめえか」

静かに怒りが腹のそこから湧き上がってくる。もち相手はカリフだ。

「大丈夫だ。お前に興味はない！」

そう言っけずかずかと俺たちの席に近づいてくる。

「姉様！！」

誰だよ？

急に近づいてきては、そんなことを良い始めるカリフに対して哀

れみの視線を向ける。

「IS学園にまた黒いISが侵入しました」

姉様Ⅱアリシアということは分かったけど……

「なんて言った!!」

ガタ、と音を立てて立ち上がり胸元を掴む。掴んだ先では苦しそうにしているカリフがいるが、今は目に入らなかった。

「やめろ」

そう言っつて、俺の腕を引き剥がし、やさしく手を伸ばすアリシアを見て反省する。未だにこうして無駄に暴力を振るうことは悪い癖らしい。

そう言えば、葵にも悪いことしたな、と考えている暇はないな…

「教えてくれ、どう言うことなんだ」

「はい、姉様」

そして説明されたのは、ついさっきIS学園に黒い全身装甲フル・スキンのISが襲撃したと言うことらしい。それも五機。

「カリフ用意は出来ているな」

「はい。インストール量子変換も調整も済んでいます。いつでも行けます」

会話の内容はいまいち分からないが、俺のときとは違う元気の良

い返事をする。その様子にいらいらとした感情を感じた。

「宙、行くぞ」

「何を言っているんだ。確かに命令は守れるが…ここからでは間に合わないだろう？」

確かにもう一度学園に介入すれば、確実に報道されるだろう。これは好都合な襲撃のはずだけど…間に合わない。この場所は詳しくはいえないが、ISを使ったとしても学園までは何時間もかかる。そんな時間が有れば、教師陣が全てを終わらせるだろう。

ブリュンヒルデ
元世界一もいるしな。

「ここで行かなければ、後悔することになる。そして、馬鹿にするな。秘策はある」

黙って着いて来い、最後にそれだけを行ったアリシアは食堂からすぐに出て行った。

第75話 作戦会議 ダーク・サイド（後書き）

ちなみに00は好きです。嫌いじゃありません。
まあ、一番は種ですけどね！

次回は・・・智花視点かな？ それとも原作キャラの視点にしようかな？ 迷う。

急いで書いたので誤字脱字訂正が多そうです。一応は確認しましたが、もれている可能性が・・・そのときはよろしくお願いします。

第76話 専用機タッグトーナメント 当日（前書き）

タイトルはこれで良いのか？

第76話 専用機タッグトーナメント 当日

第76話

専用機限定タッグマッチ——表の目的として発表されているのは、無人ISの襲撃などに対するため、ファントム・タスクの襲撃に対するための専用機持ちのレベルアップを……。しかし、本当の目的は……宙の奪還だ。そのためのレベルアップ。

なぜ一人のために？ 理由は簡単だ。宙の裏切り以降学園内はまるでお通夜のような暗さに包まれた。最近になってようやく明るくなっていたが、それでも十代乙女の本来の元気は取り戻すことは出来なかった。自分の学校から裏切り者を出した罪の意識、背負うはずはないが背負ってしまった意識を取り除くには必要なのだ。神代宙という存在が。

「まったく、こんなセリフを俺に言わせる気かよ」

ISを展開した俺は台本を片手に書かれたセリフを記憶していた。ちなみにアリシアは最終調整中。

「でもね、メディアを利用しない手はないのよ」

仕方ない、そう言わんばかりにスコールが言った。

そうだったとしても、これクサスギル！

「準備完了だ。行くぞ」

ここでも結局、俺の意見、思いは関係ないようだ。俺の苦悩はここごとくと言っても良いほどアリシアにつぶされていた。しかし、これも仕事と振り切り「はいはい」とダルそうに返事をしてアリシアに近づいた。

「今日はがんばろう」

誰よりも自分に言って欲しい言葉。言っていて悲しくなる。どんなに思いを捨てても、考える事をやめても引きずってしまう。

「はい、がんばりましょう」

黒髪の長髪で、前髪が目を覆っている葵ちゃんがそう言うけど……
嘘。嘘だよ。やめてよ。そんな目で……

「智花」

「……優」

淡い黄色のポニーテールの優が自分の名前を呼ぶ。それは暖かく

て、心地の良いものだった。けど…

けど…やっぱり私は…

やっぱり地面を見つめてしまう。ここ最近の私の癖。ダメだ、と思ってもいつの間にかうつむいてしまう。

「智花!!」

そんな私の様子を見て、強く優は私の名前を呼んだ。はっ、と顔を上げて優の目を見る。

「しっかりしなさい！ 智花。振り向いちゃダメ、そう言ったわよね」

「う、うん。……でも」

「でも、は禁止。今日は試合のことだけ考えなさい。今までの成果を見せましょう」

学園が動けないことは知っている。けど……いつかくるチャンスに結果を出せるように練習をしている。

「うん、そうだね。ありがとう」

思いつきり作り笑いだけど、今はこれで良い。いつか…いつか、心の底から笑えるときが来ることを信じているから…。

「それでは、開会の挨拶を更識楯無生徒会長からさせていただきます」

布仏 虚さんがそう言って、マイクスタンドから一步だけ下がった。その一言で私語をしていた人達はすぐに静かになる。みんな生

徒会長の言葉を待つように口を閉じたのだ。同じ一年生の織斑一夏くんと布仏 本音さんも生徒会メンバーだったので、壇上に立っていた。

「どうも、皆さん。今日は専用機持ちのタッグトーナメントですが、試合内容は皆さんにとつてとても勉強になると思います。しっかりと見ていてください」

濁りのない声でしっかりと発音したので、すつ、と頭に入ってくる。

生徒会長である更識楯無は物凄い存在感を持っている。それに……

「まあ、それはそれとして！」

ぱんっ、と扇子を開き高らかに宣言した。

「優勝ペア予想応援・食券争奪戦！」

このように人気があるのだ。すでにまわりにいるみんなは、わああああっ！、と騒いでいる。明るく、元気で、誰にでも等しく接することが出来る更識楯無さんは、私の憧れでもある。しかし、その人も……宙君に負けている。学園最強の敗北、無論それが意味するのは……学園内に宙君を倒せる人がいないことだ。だから、恨みはないけど会長は私が倒す。倒さなければ、私たちに彼に挑戦する権利さえないのだ。

ちなみにペアは、私——雅智花、夏目優ペア・白石葵、ラウラ・ボーデヴィツヒペア。そのほかの人達はきちんとペアを組んでいるが、鈴さんだけは……先生である山田先生が訓練機に乗ってペアを作っていた。

今なら言えます。ごめんなさい、鈴さん。

心の中でそう言っておかないと彼女が理不尽すぎてかわいそうな気がした。

「では、対戦表を発表します！」

そこに書かれていたのは：『第一試合 織斑一夏、更識簪ペアV
S 更識楯無、篠ノ之箒ペア』

どうやら私たちの出番はまだまだのようだ。

「行こう」

「わかっているわよ」

優にそう言っ、自分たちの倉庫に行った。もちろん、専用ISの最終調整と強化パッケージと『メビウス』の同調率を上げるためだ。この二つが同時に最大稼動すれば、理論上ではあるがあの『紅椿』と同等の性能になるらしい。けど、まだ遠い。

これさえ完成させてしまえば、私たちだって戦えるはず。がんばらないと……

いつの間にか合流していた葵ちゃんと三人で、機体を試合開始までいじることにした。ちなみにラウラちゃんは、この倉庫の中の個室で精神統一をしている。みんなこの試合にかけているのだ。間違っていたとしてもね。

ズドオオオオンッ！

「きゃっ」

突然、訪れた地震のような大きなゆれと大きな音。丁度立っていた私は、思わず声を上げてしまい、座り込んでしまった。葵ちゃんは無表情のまま、優は驚きながらもしっかりと地面に足を付けていた。

恥ずかしい…、そう思ってしまった。しかし、すぐに切り替えて連絡する。

「先生、詳細なデータを頼みます」

倉庫内にある端末で確認しようとしたところ…

バシャンッ！ の音と同時に全ての電気が赤に変わる。そして次々と浮かぶディスプレイに『非常事態警報発令』の文字。

いったい…どうなっているの？

第76話 専用機タッグトーナメント 当日（後書き）

今日こそは葵を説明します。

葵も優とおなじ理由で作りました。名前の由来は散髪屋の名字になんとはなくです。

こいつも同じようなキャラがいます。どちらかと言うと葵を作った後に見つけたんですが、明らかに真似をしていますね（こっちが）。オリジナルなのにオリジナルじゃないキャラになってしまいました。ショックです。性格も容姿も同じって・・・信じてください。本当の話ですので・・・

さて、独り言を書きたいと思います。ウィキで調べていたらシャルロット・デュノアと湊智花の声優：同じじゃん！？

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第77話 襲撃 ゴーレム? (前書き)

すいません、やっと投稿できました。

別にGWを遊んでいたわけではありません。兄弟や親にことごとく執筆のチャンスをつぶされていただけです……

ではでは第77話、どうぞ!!

第77話 襲撃 ゴーレム？

第77話

「詳細なデータを頼みます」

少し前にも同じことを言ったが、返ってくることはなかったのもう一度。今回はきっちり返ってきた。

IS学園内に五機の無人ISが侵入したらしい。各アリーナの上空から超高速降下によって出現し、待機中だった専用機持ちを襲っているらしい。

……あれ？ 少しおかしいな。私たちのところには……

ドガアアアンッ！ 倉庫の壁を破壊して黒いフル・スキンのISが入ってくる。

「まさか！？」

「そのまさかでしょうね」

隣でデータを見ていた優もそう言った。ラウラちゃんも部屋から飛び出していた。

「来て、水仙」

「来なさい、断水」

「行きますよ、豊水」

「来い、シュヴァルツェア・レーゲン」

敵を眼前にしたとたん、自分のISを素早く展開する私たち。しかも、視線だけで何をするのかもわかってしまった。展開後はいっ

せいに散開し、敵の動きを待ちながら武器を展開または使用可能にする。私は一と斬艦刀を両腕にコールドした。優は右手につけているリボルビングバンカーのセーフティを解除し、左手に背面の試作電磁投射砲を腰越しに構えていた。葵は両腕のガンズランチャーをコールドし、ラウラはソードビットを全て自身の周りに展開していた。

黒のフル・スキンのISの名前は『ゴーレム?』という、クラス代表決定戦のときに襲撃してきたのは『ゴーレム?』。見た目は黒のマネキンと表現したほうが良いだろう。それほど、今回のISはスマートに繊細に出来ていた。しかし、右手の肘から先がブレードになっている点や、左手が『ゴーレム?』のときの腕が改良されたものが付いているところを見れば、総合的な火力が上がっていることは用意に想像できた。

みんなは各アリーナで戦闘中とのこと、私は心の端っこで心配し目の前の敵を見据えた。

爆発的な加速とでも言うべきだろうか、それほどの加速力で突っ込んできたゴーレム?。

狙いは……私!!

両腕に握っている剣を握り締めて、上段から振り下ろされた右腕のブレードによる初撃を受け止める。

「今っ!!」

この狭い倉庫で戦っては、被害が大きくなる。と言う考えはみんなわかっていて……

「わかっている」

ラウラが放ったワイヤーブレードが左腕を掴んだ。ゴーレム?はそれを振りほどこうと強引に力をこめるが、ワイヤーブレードが六

本も絡まっているのでなかなか解けない。さらにA I Cによる右腕の拘束も完了していた。

腕に伝わってきていた力が抜けているのを感じたので距離をとる。

「悪いけど……あなたなんか邪魔をされている場合じゃないの」

私は冷たくそう言い放ち、腕を引いた。ゴーレム？は危険を察知したのか、機体の周りを浮遊していた丸い球体からビームシールドを発生させる。しかし、発生させたのにもかかわらず葵の放ったガンズランチャーのエネルギー弾が用意に貫く。ただし一転突破型だったので威力は信頼できないけど、それだけで十分だった。優はいつの間にか……いや、作戦通りに接近し右腕のリボルビングバンカーが牙をむいた。

「智花の言うとおりに、邪魔」

ガンッ！ 葉莢が右腕から飛び出し、巨大な釘を打ち出した。ガンズランチャーが開けた穴を広げた。そこへ、待っていましたと言わんばかりに引いた腕を突き出す。もちろん、斬艦刀のほうだ。それを展開し巨大な両刃の剣へと成した。全長200メートルはくだらない代物だ。巨大な剣へと変形する過程でゴーレム？を倉庫から押し出す。

「逃がしません」

再度構えなおしたガンズランチャーの砲口が何度も光り、同時にゴーレム？の硬い装甲の間接部分を正確に貫く。

どんなに精巧で強靱ですばらしい機械であっても、所詮機械だ。関節をつぶせば複雑な動きは出来ない。現に智花たちの目の前にい

るゴーレム？は著しく運動性能が低下していた。それも、武器で攻撃するときは機体ごとPICパッシブ・イナージェル・キャンセラーで向きを変えるしかない。

「哀れだな……人形ごときが私の前に立つな！」

ソードビットの二つを連結させて剣にしたものを手に持ち、間接に開いた穴にねじ込むウラを見て、少し……いや、完全に私たちが引いたのは内緒の話……かな？

「お、織斑先生」

「なんだ」

山田先生からのプライベートチャンネルをモニター室で受け取っていた千冬。山田先生の声は驚いていた。

「大きな熱源が接近していませんか？」

「ああ、こちらでも確認済みだ」

「ま、また敵ですか？　いったいどうすれば……」

「落ち着け、まだ敵と決まったわけではない。今は、生徒の非難に集中しろ」

モニター室のレーダーを見ながら、落ち着きを失っている山田先生を落ち着かせる。確かにレーダー上には巨大な熱源がこのIS学園に接近していた。

「は、はい」

若干自身のないような返事に千冬は頭を痛めたが、すぐに冷静さを取り戻しレーダーをにらみつけた。

一つではない……二つ、か。さて、鬼が出るか蛇が出るか……ふっ、私らしくないな。しかし、期待しているぞ、宙。

薄暗いモニター室で、確信に近い予想で接近する熱源に期待を膨らませるのであった。

第77話 襲撃 ゴーレム？（後書き）

むっ、今日は誰にしようか……アリシア・ベルリオーズ？

なんで疑問系かというと、このキャラはご存知？ の通りにオリキヤラ募集したときに採用させていただきましたキャラクターです。個人的にはかなり好きな部類に入ります。

ですが…実質剛健で歯に衣着せぬ、と言う性格ですが……会長さんに似ていないか？ 不思議ですね。出来るだけ再現しようとしているのですが、いまいちできていないような、できているような……

ついでにカリフも説明しておきましょう。

と言うか、まだほとんど説明していませんよね。この後の話で素性は説明するとしましょう。

誤字脱字訂正などありましたらよろしく願います。
もう少しで、好きなキャラクターのアンケートします。予告です。

第78話 到着？ 襲撃？ 亡国企業！（前書き）

すいません、少しだけ、ご都合主義になっているかも・・・ごめんなさい。

強引に入れたかったんでね、アレを……

そして今回の話は、時間列が物凄く複雑になっていると思います。すいません。

ではでは第78話、どうぞ！

第78話 到着？ 襲撃？ 亡国企業！

第78話

「しっかしまー、すごいなこれ」

ゴオオオオ！ 物凄い音だ。耳が壊れそう。ISの全長の二倍ほどもある五本のロケットエンジンを積んだようなパッケージの上に捕まっているので、本当に音がすごいのだ。その辺は何かISのセンサーをいじくって制御しているが、たぶん付けてなかったら大変なことになるはずだ。実際に音だけでも人間は気絶します。

誰に説明してんだ？ まあ、良いか…

「まあ、このパッケージは新型だしな」

この『シュープリス』についているパッケージは第二世代型なのだ。その特徴は、自由なパッケージの出し入れが可能と言うことだ。ようするに、もともとISの性能の拡張を目的としたパッケージがその場その場で適切なものに変換させることだ出来るのだ。しかも、それが…亡国企業ファントム・タスクの純産とのこと。そして、実用に成功させているのも亡国企業ファントム・タスクだけだ。

俺の場合はどんなパッケージであろうが…一個が限界なんだけど…

自分のISに文句を言うつもりはないが、不満を少しぐらい言ってもかまわないだろう。

「宙、あと少しで到着だ。準備は出来ているのだろうか？」

「あれか？ バリアを破る準備か？ 大丈夫だ。出来ている」

「了解」

眼前に広がる仮想のモニターの中には大正と三弦のチャージ完了の文字が表示されている。学園到達と同時にバリアを破壊。後は目標の確保を優先に自由行動。ちなみに、目標はあの黒いフル・スキンのコアだ。ファントム・タスクもISの数をそろえたいようなので、こういう場合のどから手が出るほど欲しいもののようなのだ。

今の俺の心情で言えば、どうでも良いことなんだけど……スコールさんとの約束だし……守ることにしようか

ラウラがいじめにいい結果、五機のうち一機を戦闘不能にすることに成功した。現在は豊水の同時演算能力を使ってアリーナのバリアをハッキングで破ろうとしているところだ。

「大丈夫なのかな？ みんな」

「心配しなくても大丈夫よ。ただ、鈴が心配ね」

「どうして？」

鈴さんだって一応……じゃなくて普通に代表候補生なのに……

「山田先生は今鈴から離れているのよ。だから、一人でいると思う

わ」

「確かにそうですね」

葵ちゃんの相槌もあり、私は納得。だから、今はみんなの増援に行こうとがんばっているのだ。と言うか、早くしないとラウラちゃんが出っ走ってしまいそうなので……がんばろう。

ハッキングはあまり得意じゃないが、一生懸命にバリアを破ろうとしている三人組。そしてその後にはいらいらとした様子で仁王立ちしている銀髪の軍人。この状況は……どうということなのだろうか……

ここは箒たちのいるアリーナ。こっちも現在進行形でゴーレム？の襲撃を受けていた。しかし、戦況はジリ貧。それを打開するために楯無は発動させた。必殺技と言うべきものを。

———《ミストルティンの槍》発動———

更識楯無のIS——『ミステリアス・レイディ』の最大にして最高の攻撃。体中を守っているアクア・ナノマシンを一つに集め攻撃用に特化させた大技。その威力は小型気化爆弾四個分に相当するエネルギーを持つ。まさに奥の手中の奥の手。

ドガアアアアンツツ！！それは巨大な衝撃となり音となって大気を振るわせた。

ドガアアアンツ！ 制御していたはずのISのセンサーが一つの爆発音を捉えた。音は小さかったが確かに聞こえたのだ。

「アリシア、まだなのか」

「もう少しだ」

彼女が歯を食いしばっている様子を見て、それが本当のことで彼女が本気だということを察した。そして、あの爆発音一つ聞いただけで時間があまりないことを再認識した。

「くそっ、VOBを使用してもこの程度なのか」

バンガード・オバード・ブリスト
VOB。それがこのパッケージの名前だ。その名前を忌々しく口に出したが、現段階でこれが一番速いことはわかっているのだ、どうしようもない感じが本気でつらい。

「そんなに、心配か」

「……そうだな」

「後悔はしないといった男が……」

「それはすいませんね」

アリシアの悪口を、サツ、と受け流し集中する。三弦を両腕に握り締めて大正を構える。無論、狙うのは一撃必殺。アリーナのバリアごと黒いフル・スキンのISを破壊する。そう言う意気込みがあった。

更識簪 生徒会長である楯無の妹はアリーナでゴーレム？と一人で戦っていた。しかし、機体性能、無人機だからその精密な回避運動にじわじわとおされ、仕舞いには………地面の転がっていた簪にゴーレム？の右腕であるブレードが振り下ろされた。

ザシュツ…… 何かが切れた音だ。ゴーレム？から振り下ろされていた剣は私の体に触れることはない。

「――えっ？」

この目で見たはずなのに、ブレードは確かに私に向かって振り下ろされたのに……振り下ろされる直前に私とゴーレム？の間に割りと言った影がそれを防いだのだ。

「おねえ……ちゃん……？」

その影は生徒会長こと更識楯無だった。
最後の力をふりそぼった上での飛翔だったのか、私の方に倒れ掛

かってきた体に力が入っていなかった。そして、背中から血が出ている。

「どう、して……こんな……」

「妹を助けるのに、理由が必要……?」

楯無の言ったことは、まさに正論だった。すぐには何も言い返せず、黙ってしまう。

「だって……もう、無理なんだよう……」

「無理じゃ……ないわ」

「無理だよ! この世にヒーローなんか、いないんだよ!」

「そうかしら……?」

にこりと笑うお姉ちゃんは、どこまでもやさしい

「でも……、でもお……!」

私の涙は止まらない。そんな私を「しょうがないな」というような顔で、優しく撫でている。

「……いない、さ……」

小さいけど確かに聞こえたのだ、一夏の声が。

「完全無欠の……ヒーローなんて、いない……」

頭をゴーレム？につかまれたまま、両手両足をだらりと垂らしている。

しかし、徐々にその声に力が戻っていく。

「完全無欠のヒーローなんてやつらは……泣きもしなけりや、笑いもしないからな……」

力を体に入れて再び動かそうとする。

そんな一夏の姿はひどかった。ボロボロなのに、傷だらけなのに、戦えそうもないのに、必死で動かそうとしている一夏はとても眩しい。

「だから！ 俺は！」

ビシュン！ 左手の雪羅がクローモードのエネルギーソードが放出される。そのエネルギーソードを一夏は振るってゴーレム？の腕を切り落とした。

「俺は、人間だ。泣きも、笑いもする。負けるときだってある。けど——諦めない！ 逃げ出さずに戦える、人間だ」

急な反撃にゴーレム？が距離をとったときだった。

黒い一条の光が、ゴーレム？の左腕を貫く。貫かれた左腕をゴーレム？はパージし、左腕が爆散する。

「立派……ご立派だな」

声の聞こえた方向を向くように見上げた空には……一度だけデータで見たことのある黒いIS。もちろんフル・スキンではない。そし

て……唯一^{ゆい}おねえちゃんを倒したIS。

その黒いISはその手に持った銃を剣へと変形させて、急降下。

「まさか……」

一夏がそう言った。

ズドオオオンッ！ 急に現れて、急に襲ってきた黒いIS。そのスピードは異常過ぎるぐらいでゴーレム？の反応が遅れるほどだった。

舞い上がる砂煙。少しの沈黙。一夏は砂煙の中を凝視している。私のISのハイパーセンサーも捉えたようだ。目の前に広がっているモニターの中にその黒いISの全体がアップで写された。今はまだ、影しか見えないが……徐々に砂煙は消えていく。

そして、私が見たのは……裏切り者のISがゴーレム？の上に立っているところだった。その手にはゴーレム？のコアらしきものが握られている。

「こちら宙。コア一個の確保完了っ」と

第78話 到着？ 襲撃？ 亡国企業！（後書き）

どーでした？ 久しぶりだね、このセリフw

明日からはもう一つの小説を書きたいので、少しでも更新が遅れます。（また、一週間ほど）これまた、ごめんなさい。

できるだけ、早く済ませてこっちを書きに戻ってきます。

誤字脱字訂正などありましたら、よろしくお願いします。

立てすぎたフラグを回収するためのプロットを早く書かねば！！

突然のキャラの人気投票（前書き）

すいません。一週間更新しないと豪語していたのですが、急遽キャラの人気投票をしたくなったので、実行することになりました。

突然のキャラの人気投票

投票の仕方は、一位に3、二位に2、三位に1ポイントのよくある方法でいきたいと思います。

ランキング上位に輝いた栄光あるキャラクターには……何か書こうと思ったのですが……現在裏切り中のため、アフターストーリーを書くのかな、と考えています。

何か書いて欲しい内容があれば、投票のついでに書いていただけたらうれしいです。全力を持って書かせていただきたいと思います。

べ、別に、いつも力を抜いているわけじゃないんだからね！w

本当に常に全力です。内容はある程度の無茶なら実行できるので、遠慮せず書いてください。

例えばI Fとかでも全然かまいませんよ。

もし宙が裏切らなかったら、もしあの世界または他の世界にいったとしたら、もし●●と●●が……（R18は勘弁してください）したら、e t c. e t c.

最後に最近空気と化している原作キャラも見捨てないでください。こればかりは実力不足なので、ごめんなさい。

突然のキャラの人気投票（後書き）

期間は投稿予定日である、来週の火曜日までにしたいと思います。

第79話 集結（前書き）

久しぶりの投稿です。一週間ぶりですけど・・・

さて、アンケートは今日の日付が変わるまで、です。どうかよろしくお願いします。

第79話 集結

第78話

「こちら宙。コア一個の確保完了っ」と

「了解した」

強化パッケージ――VOBをクローズし、ゴーレム？を見下ろす。
ふう、めんどくさいな：少しばかり強そうじゃないか

これは宙と一緒に決めたことだが「ノルマは一人一機」ということになっているので、私も一機ぐらいは落とさねばならない。

決めたこととはいえ面倒なことには変わりはないので、一気に片付けることにした。

左肩のレールガンを前方へと跳ね上げ、照準を合わせる。するとゴーレム？は攻撃を仕掛けながら回避運動を取り始める。

しかし、少しばかり遅かったようだ。アリシアはゴーレム？が行動を始める前にレールガンを撃っていた。

それをゴーレム？は回避は困難と考えたのか、自身の周りを浮遊している球状の物体を円に並べ、エネルギーシールドを展開して防御する。

だが、放たれた弾丸は止まることを知らなかった。エネルギーシールドを貫き、本体へと突き刺さる。

使用された弾丸は――劣化ウラン弾。それも自己鋭化現象を特化させ、放射能が出るのを抑えたファントム・タスク製。ただし、その便利性なのかコストがかかりすぎるので今回は二発しかもってき
ていない。

所詮、あのメリクリウスもどきか：

心でゴーレム？を侮蔑し、レールガンの直撃を受け体制を崩した

ところに飛び込んだ。自由落下にブーストをたしたスピードで両腕のブレードライフルをゴーレム？の肩へと振り下ろした。

「おおおっ！」

背面のスラスタを全開にし突き刺したブレードを気合と共に押し込んだ。

本当に硬い装甲だったが、バキバキッ！ とした音を立てて両腕を切り落とした。そしてすぐにグレネードランチャーを跳ね上げ、エネルギーシールドの展開できない至近距離でグレネードランチャーを撃つ。

ドガアアンツ！ グレネードを放ったアリシア自身は後方へとQ^{クイック}
B^{ブースト}とイグニッション・ブーストを併用し離脱していた。

墜ちたゴーレム？の中からISのコアを引き抜く。

「アリシアだ。こちらも一個回収した。これから合流する」

「宙！」

ボロボロの白式をまとった一夏が俺の名を呼ぶ。

隣にいる会長と同じ髪の色をした女の子が俺をにらみつけている。それに…会長が倒れているところをハイパーセンサーが捉えていた。さらに箒の姿も……

「篠ノ之、出て来いよ。隠れていようと無駄だ」

どれだけ構造物の裏に隠れていようと、ISのハイパーセンサーは無効化することが出来ない。

箒はそのことを知っているはずだが、本能的に体を隠してしまった。それは宙に抱いている前回の落とされた記憶のせいなのかは、誰にもわからない。無論、本人にも。

しぶしぶ、と言った様子で紅椿をまとった箒が姿を現す。

――IS接近 全部で10機

モニターに出てきた文字を認識し、その方向へと首を向ける。

西から近づいてくる機影は三機。鈴、シャルロット、セシリア。

東からは四機。智花、優、葵、ラウラ。

北からはゴーレム？が二機。

南からはアリシア。

いくら中央のアリーナだからといって、きすぎじゃないか？ そんな疑問が浮かんた。

ゴーレム？の上に立っていたので、それから足を離し空中へ行く。今手に持っているのは三弦だけなので七弦武装の大剣をコール。

バッシュ！ 鞘をパージし黒羽へと固定し、もう一本をまたコールする。

大剣を右手に、ライフルを左手に持った状態で、ゴーレム？の方
向を向く。

「アリシア、二機来たけど一機もらうよ」

「ご勝手に」

いつもどおりのそっけない返事だった。

「了解」

ふっ、と笑い三弦に向けた瞬間、捕捉していたゴーレム？が後退しはじめた。

何もしていないのに…

照準すら合わせていないのに回避行動を取った無人機を不自然に思ったが、すぐにその意味が理解できた。

東の方向から一条の光がゴーレム？のいた場所を横切った。撃つたのは葵。

俺がいつか使った『バレットM82A1』を空中で構えていた。しかも銃口から煙が出ているところを見れば、確実に今のは葵が撃ったとわかった。

「それは私たちの獲物です」

「そうか、それなら…」

もう一機の方角を向き…

「アリシア、手伝えよ」

いつの間にか…いや、必然的に合流していたアリシアに協力を頼み、突っ込んだ。

「それは私たちの獲物です」

宙が相手をしようとしていたゴーレム？を狙って撃った葵ちゃんがそう言った。

確かに私たちはゴーレム？をあと一機ぐらい落とそうかと思っていたが、まさか宙君が狙っている相手を横取りするとは思っていなかった。

『葵ちゃん？　どうしたの？』

すぐにプライベートチャンネルを開き、真意を確かめようとする。

『すいません。ですが……』

ああ、そうか。わかったよ。

葵ちゃんの沈黙で語りたいことを悟って…

『いいよ。言わなくても、私も同じ』

「見て欲しかった」ただそれだけだったのだ。たとえば……裏切られたとしても特別でありたいのだろう。

一途…か。……うん！

「みんな、やろう。ラウラちゃんも」

最後にみんなに呼びかけて全速力でゴーレム？の元へ。ラウラちゃんも嫌々ながら同意しえくれたので戦力的には十分だった。

モニターに宙君の映像を視界の端に映させ、弓をコールし引き絞った。

第79話 集結（後書き）

今のところ、記憶が正しければ…一位は……宙かな？

アンケートに書かれているほうを優先しますが、自分が書こうかな？
？ と思っているASの内容を少しだけ書いておきます。

今書いている小説の終了時点から十数年後を書きたいと思っています。

具体的にはモンド・グロッソ決勝戦当日。

その場に立っているのは……誰？

この話をランキング上位の視点から書きたいと思っていました。

ちなみにアンケートでは…

宙の場合。オリキャラ十会長十簪のカップリング案が出ています。

IFが多数ですが…

逆に女性キャラは宙とのカップリング案が……いや、智花と宙がく
つつく話が多数です。

どれを書くかは…今のところ未定です。決まったときは後書きあたりで報告しますね。

アンケートの結果発表!

素早く本遍を書きたいと思いますが、これまた素早くアンケートの結果を書きたいと思います。

一位 神代 宙 9点

二位 雅 智花 6点

三位 更識 簪 3点

四位 織斑 一夏

ラウラ・ボーデヴィツヒ

シャルロット・デュノア 2点

五位 更識 楯無

白石 葵

アリシア・ベルリオーズ 1点 でした!!

計画通り…ニヤリ

宙「なに、かっこつけてんだよ」

自分、デスノテのキラさんが大好きなんすよ。それよりも…うれしくないんですか? 一位

宙「今の状況じゃなかったらな」

ソウデスカ、ヨカッタデスネ

宙「そうか、そうか、殺されたいのか」

メッソウモナイヨ？ それよりもよかったね。十分イチャイチャさせてやるよ。神の力でな！

宙「紙のうえで、か？」

うまいこと………いってないね

宙「わかってるよ!!」

しかし、簪が三位になるとは………ちょっと以外

簪「ありが、とう………ございます」

難しいなく、簪………（うれしいのやら、うれしくないのやら……）

簪「な、何の話………ですか？」

こっちの話ですよ（セリフが書きにくいなんて絶対言えない）
それよりも、智花が二位か………一位狙えたはずなのに……

智花「そ、そんな………私は、そんなに………」

ふむ………（勝手にどっかいったな、宙のやつ）………そんなに謙遜せん
でもええよ

簪「関西、弁？」

関西弁でもよかけど、自分のにはこっちのほうが好きかねゝ

智花「それは…何弁なんですか？」

大ヒントでもあげましょう。「あらゝみじよかね、智花ちゃん」
これがわかったらあなたはすごい！

簪「誰に…その、言ってる、の？」

智花「検索すれば一発ですよね」

誰でも良いじゃないですか…別にね。それにね、智花さん…禁句ですよ、それ？

簪・智花「す、すみません」

かぶった、かぶったね、かぶっちゃたよ。まあ、良いか。
それよりも上位三名の方には、報告どおり何か書きましょう。

簪・智花「三名？」

それもこっちのお話です。気にしないでください。（気にしたら
ね…宙がね…怒るからね…）

さてさて、本題に戻りましょう。

宙のお話は…『かいちょう智花・楯無とのカップリング』なんですけど…
二位に智花がきているので…会長を、と思ったんですけど…良

いですか？ 無言は肯定とみなします。

智花のお話は……『宙とのカップリング』でいきましょう。I F
なので付き合った状態で始めます。

簪のお話は……これも『宙とのカップリング』です。

I Fの内容がアンケートに書かれていたので、それを採用させて
いただきます。ありがとうございました。

内容…内気だった頃の自分に優しく手を差し伸べてくれた宙に惚
れて、付き合い始めて楯無会長に「宙君と簪の結婚は何時にしよう
か？」とか「お姉ちゃん、又は姉さんって呼んでね？」etc. . .
とかいう悪ふざけ全開なからかい（と書いて本気）だが、簪は本気
で受け止めている為本気で相談し始めて調子に乗った楯無会長はど
んどん話を進めていき、「結婚前提のお付き合い」になってしまった

あれ？ 簪のが本気で長くなりそうです。何話使うつもりなのか
な？ と言うか全部長いよね？

パパッと終わらせるつもりが……こんなにも長くなるなんて……
……思ってもいなかったな

まあ、日ごろの感謝の気持ちですので全力で書かせていただきました
と思います。

本遍のほうが一段落したところに、一位から順に投稿します。普段
よりも時間がかかると思いますが、すいません。お待ちしていただ
けると、うれしい限りです。

一応、今日は出来るだけ本遍を書いて、出来たら投稿します。

アンケートの結果発表！（後書き）

誤字脱字があるかも、そのときは…なにとぞよろしくお願いします。

第80話 メイン

第80話

もう一機の無人機『ゴーレム?』をあの四人に任せて、俺たちは目の前の無人機に集中することにしたのだが……

「めんどくさいから、まかせる」

「ふざけるな。手伝えよ」

この肝心なときに俺とアリシアは口げんかをしていた。事の発端は、ただのどちらが相手をするか、だ。最初は宙が基本的に戦い、アリシアがサポートと言うことになっていたのだが……アリシアがそれを放棄。そのことに対し、宙が文句を言う、と言う状況が発生したのだ。

「俺だってめんどくさいんだ。二人で簡単に潰せるだろ?」

「お前がめんどくさいのなら、私だってめんどうなんだ。ここは、あの専用機持ちに任せたらどうだ?」

ちなみにこの会話はプライベート・チャンネルです。

「それも良いけどよ。俺たちは一応、コアの奪取を頼まれているだろ?」

スコールさんに……と付け加える。

まあ、あの人も中間管理職だしな……上に何を言われたのだろうか?

「ミス・ミュゼルのことを出すか……しかたがないな」

さて、こんなにも普段どおりに会話しているように見えるが……二人とも武器を持っているため、激しい攻撃を受けていた。

しかし、かすりもしないのもまた事実だ。紙一重と言うのか、攻撃を先読みしているのか、かすりもしない。

しかも、敵を見ていないのにブレードを受け止めたり、地味にカウンターを決めていたり、神業か？　と思うほどに攻撃をよけていた。

「結局、手伝ってくれるのか？」

「めんどくさいけど……仕方がない、か」

しぶしぶ、とも表現できるし、いやいや、とも表現できる。そんな感じでようやくだらりとたらししていた武器を持った両腕を持ち上げた。

「それよりも、見てなくて良いのか？　あいつらを」

「別に大丈夫だと思う。ここに来るときにあの無人機の残骸が一つだけあった」

綺麗に間接を潰された状態だったので、強いやつがいるのだろう。そう思っているからだ。

現にハイパーセンサーで確認してみるが、見事に無人機をかく乱していた。

その様子にうれしいのやら、悲しいのか、良くわからない感情がほほを緩ませたが……

ガギツ　ゴーレム？のブレードを宙が剣で受け止めた音だ。

「なあ、一つだけ言わせて貰って良いか？」

「ああ、かまわない」

「「さっきから……ちまちまとおお………うるさいんだよ!!」」

宙が一言だけ言うつもりだったのだが、いつの間にかアリシアも参加していた。

受け止めていた剣が動き、ゴーレム？のブレードを弾いた。ゴーレム？はもちまえの正確なP I C操作、それに正確なスラスト操作で体制を元に戻し、ブレードを俺に、熱線銃をアリシアに向けて、特攻を仕掛けてきた。

「こんなもの……あいつの断頭台ギロチンへの行進に比べれば!!」

振り下ろされたブレードに対抗するように大剣を振るう。

「銃口が見えているだけ、楽なんだよ!!」

ご自慢のQ B——イグニッション・ブーストクイック・ブーストとは違い、タメは必要なく素早く移動できるアリシア専用の特殊技能。リスクは特になくイグニッション・ブーストより使いやすいが、移動距離は短い。また、Q Bの後にイグニッション・ブーストをすると……イグニッション・ブーストのタメが打消しされるという……チトが発生する。前回使用したのもこれだった。

アリシアに熱線銃を向けていたゴーレム？にQ Bで近づき、至近距離で最後の劣化ウラン弾（ファントム・タスクver）を打ち込

んだ。

ギャリンッ！ ドガァァアンッ！ ブレードを両断し、熱線銃は内側から爆散した。

ゴーレム？は両腕を失った時の衝撃で体制を崩していたが、すぐに体制を戻す。しかし、それがまずかった。

振り上げた剣の勢いをそのままにその場で一回転し、がら空きのわき腹に…

劣化ウラン弾を撃ち尽したため必要のなくなったレールガンをクリックし、ブレードライフルを宙と同じくわき腹に…

「「雑魚が！ 邪魔をするな！！」」

見事にシンクロした両者の刃は……ゴーレム？を上半身と下半身を、永遠にさよならさせた。

あそこで体勢を立て直さずに、後退していればこうはならなかったものを…本当に可愛そうだ。二人とも……怒りを思いつきりぶつただけなのだ。その怒りは…最近の戦闘訓練から今現在の会話の邪魔まで、はつきりいつて…とばかりを受けたのだった。

そんなゴーレム？は、宙に装甲を切り開かれコアを摘出されていた。

「これで三つ目、と」

「これぐらいで良いだろう、帰るぞ」

「まだ終わっていないよ。メインの仕事がね……」

ここに来る前に暗記していた台本を思い出す。恥ずかしく、臭すぎるセリフだったが、これがメインだ。

本当ならメディアの力を借りたいところだったのだが、運の悪い

事にこの場にいなかった。

ふむ、どうしようか……いや、少し待てよ………

「黛薰子」

「誰だ、それは」

「新聞部の人だよ。こいつをうまく使えば……いける。多少の変更はありだろ？ アリシア」

「もちろんだ。まあ、だが、もっと恥ずかしくなるな」

出来るだけそのことを考えないようにしておいたのだが、最後の最後で彼女に釘を刺されてしまった。

心が半分ほど折れかかったが、仕事だと割り切って我慢することにする。

傷つかないで欲しいけど……

ふかーいため息をついて、脳内でだれかに謝るのだった。

「ごめん」と。

第80話 メイン（後書き）

この話が終わるまでいたい何話使うのだろうか……そして、I F ストーリーに何話使うことになるのやら……この小説が今年中に終わるのか!!

苦悩が多い s i r a s u です。来年は受験生だし、困りましたよ。これを終わらせたいのだけれど……脳内にはまだまだ残っている妄想。誤字脱字訂正がありましたらよろしくお願いします。

第81話 はじめまして、俺が……神代宙だ（前書き）

意味深なタイトル……なのかな？

最近の終わり方って……少々むかついている俺がいます。もっと長く
かければ良いのにな……

けど、長くしたら一日一話投稿ができなくなるしな……

第81話 はじめまして、俺が……神代宙だ

第81話

中央のアリーナで宙とアリシアはプライベートチャンネルで会話しながら、四人の戦闘が終わるのを待っていた。

普通なら、どうして逃げないの？、とでも思われるのかもしれないが、前にはシャルロット、セシリアのヨーロッパコンビが、左右には鈴と知らない機体が控えていた。そして……上空には……誰だろう？

俺が学園にいたときには見たことのなかった機体が制空権を握っていた。武器は呼び出していないところをみれば、今のところ攻撃を仕掛けてくる気はないようだ。

『これは使えるよね。まったくもって、ラッキーラッキー』

『使えるものは何でも使う、ね。おおっ、立派な悪人だな』

『『はあ』』

周りからの飛んでくる、ビリビリとした空気。これが非常に疲れる。

二人同時にため息をつくぐらいだ。

『逃げられないように包囲してくれるのは、ありがたいんだけど……』

『これは、必要ないな』

疲れるが気にしないで行こう。それよりも今は気になることがあ

るのだ。

さてさて、お手並み拝見といこうか……

「智花！ 右よ！」

「了解……葵ちゃん、援護よろしく」

「わかりました」

近接戦闘が苦手な断水が後方支援。防御に秀でている豊水が、中距離間においての支援を中心に動いている。そして、ラウラが自由戦闘、水仙が近接戦闘をしていた。

強化パッケージの性能のおかげでゴーレム？のについていくことが出来ているため、そんなに個人としての実力は上がっていなかったが、それ以上に連携が物凄く取れていた。

一見ラウラが暴走しているように見えるが、実は良くみんなのことを見ていた。全員がラウラの動きについていけているのが、そのことを如実に物語っていた。

「ブレードに気をつけろ」

「あ、あまり出過ぎないでね」

訂正しておこう、みんながついてこれる限界ギリギリのところ

行動していた。

ラウラに引っ張られるように全員が連携を取り、ゴーレム？を圧倒、沈黙させていた。

ご自慢の左腕の熱線銃の射線を巧みに回避しながら、ブレードの攻撃に合わせて一人が動きを止め、全員が攻撃を仕掛けるという戦法をとっていたのだ。

結果……

『倒したじゃないか』

『しかも、ノーダメージ……』

『ほめてやらないのか？』

ニヤニヤしながらのその言葉に……

「はあ……たとえ今の状況じゃなくても、やめてるわ！！」

嫌気がさして、思いつき叫んでいた。

誰がこんなやつ隣でほめるかよ！

そして、急に俺が叫んだからだろうか……全員が武器を呼び出しこっちに向いている。

「あ、今は抵抗する気ないからね」

いまさらそんなことを言っても無駄なことはわかっていたが、一応言ってみた。

もちろん、誰もおろしてくれない。

ハハハ、と笑いながらも冷や汗をむちゃくちゃかいていた。

『どうするんだよ。アリシア』

『知らん』

「ふ、ふふふ、ふふ」

ふざけるなーっ！、とでも言おうとしたのだが、武器を向けてきてさらに殺気まで飛ばされては何も言えなかった。

ごめんなさい、ちっとも俺のせいじゃないんです。

全面的にコイツのせいなんです。

違うんです、事の発端はあいつなんです…

一瞬で大量の謝罪の言葉が思いついたが、言っても無駄なことはついさっき確認済みだったので何も…

もう何も言うもんか！！

あまりのじれったさに逆切れして、地面を強く踏みつける。

「あのー、さっきから何してるっすか？」

不意に上空からふざけた調子の言葉が聞こえてくる。

それと同時にISのモニターに声の持ち主の情報が入ってきた。

——敵ISを確認。操縦者フォルテ・サファイア。ISネーム『コールド・ブラッド』

それだけかい！

あまりの情報の少なさに少々半切れの状態だった。

「イエイエ、ホントウニ、ナニモアリマセンヨ」

「片言に言いつても、全然説得力ないぞ」

――敵ISを確認。操縦者ダリル・ケイシー。ISネーム『ヘル・ハウンド・ver2.5』

やっぱり少ないし!!　　と言うか話を聞かないと相手の情報を取れないのかよ!　欠陥品かコイツ?

自分のISの情報収集能力を疑い、呆れる。

『アリシア、敵の情報を教えてくれないか?』

『知らん』

……一蹴されました。もう少しでも詳しい情報が欲しいな、それがあれば……どこまでやれるのかわかるだろうし……おっと

「んん?　全員揃ったようだね」

四人が合流し、包囲網の完成。そのことを確認し、余裕のある表情で俺は言った。

「何か考えでもあるのか?」

ラウラがそう言う。

恨みのこもった目であった。実際にそのことはあまり気にならない。

「そうだよ、えーと?　ボーデヴィツヒでよかったっけ?」

何にかチンとなったのか、良くわからないが……一步目を踏み出した。

「ダメだよ」

「うるさい、止めるな！」

激昂状態と言うのだろうか、簡単に怒っている様子がわかる。

何とか三人に言いくるめられて、ラウラが落ち着いた様子を見せた。

「本題に入ろうか」

そんなようすをケラケラと笑いながら、次の語を次げる。

ちなみに言うと、プライベート・チャンネルの中ではアリシアの笑い声がひどいほど聞こえていた。

本当に女なのか？ と疑問に思うほどだ。

『かっこつけすぎだろ、宙』

ぐはっ、宙は精神的なダメージを受けた

『俺だって好きでこんなしゃべり方をしているわけじゃないんだぞ』

『ハハハ』

……………アリシアのことを忘却の彼方に押し出し、腹をくくろう
静かに覚悟を決めて一言目を搾り出した。

「はじめまして、俺が……神代宙だ」

これから始まる、台本上の宙おれになりきって見せましょう。

第82話 怒り

第82話

「はじめまして、俺が……神代宙だ」

回線はオープンにし、できれば新聞部のあの人に聞いてもらえるようにした。

メディアを利用し偽りの目標を発表すること、それがメインの目的だ。

「それは、どういう意味かしら」

自己紹介に最初に反応したのは優だ。

「そのままの意味だけど？」

「今のあなたが……本物ってことなのかしら」

まったく持ってその通りだよ

「そうだ。………何か問題でも？」

ギリギリとした歯を食いしばる音を、ハイパーセンサーが捉える。ふう、こんな程度で………沸点が低いね

「今までのことは……あなたにとってなんだったの？」

楽しい時間だった、とは言えない。自分の言葉を言ってはならな

かった。

「遊び、もしくは暇つぶしだ」

そう言っって少しづつ、自身のISを上昇させる。

ちなみにこれも台本通り、完璧すぎるでよかった。さすがはスコールさん、性格をどこで調べたのか良くわからないが今のところ支障はない。

「待てよ」

静かに、けど確かに、怒りのこもった声が俺へ向かって放たれた。

「待てよ、お前……」

「死にぞこないの…織斑か？」

ここで第三者の介入があることも……台本どおりだったりする。と言うか、入ってこなかったらこのまま帰っていたところだ。

あの人……神なんじゃないか？ この読みは……

驚異的過ぎる先読みの能力に、驚き…寒気がした。

『この世に神はいると思うか？』

アリシアに向かってのプライベート・チャンネルを開く。

『いるかもしれないな』

台本のことを知っている、アリシアもそれを肯定した。
やっぱり神様はこの世にいるんだね！

「お前が何を言ったのか、わかっているのか」

おっと、話を戻そうか

「うん？ 何のことだい」

「お前は…お前は…やりすぎだ」

「俺は何もしていないぞ、あいつらが…」

「黙れ！！」

一夏はボロボロの体で強くはつきりと言葉を放つ。
油断してはならない目であつた。強者の目だ。

「これ以上、傷つけるなよ」

また静かに闘志を込めていた。

「誰を？」

「みんなを」

「お前は他人のために怒れるんだな。愚かだな」

一夏だけでなく、周りにいるやつら全員が俺のほうを向く。

「前にも言っただろ、友情、愛情、そんなものはくだらない、と」

くだらない、本当にくだらない。こんなことしか俺は言えない。
実にばかばかしい。悔しい。

「あいつらが勝手に、あいつのことを好きになったんだろ？ 人の
本質を見抜けないほうが悪いんじゃないのか？」

涙をためているのは智花、今までの言葉にそれほど堪えるものが
あったのだろう。

「お前はっ！」

ボロボロの肢体で、ボロボロのスラスターを使い、突っ込んでく
る一夏。

「何にも思わないのか！ あいつらを傷つけて何も思わないのか！」

一夏の最強武器である『零落白夜』はもう使えない、エネルギー
も空っぽ、何ができると言うのだ。

しかし、それでも、一夏には恐怖する何かが存在した。
やっぱりお前は強いよ

「ああ、思わないね。まったくもって、思わない」

怒り任せに振られる雪片。速くはない、力もない、ただ避けるこ
とができない。

キンッ 受け止めるしかなかった。

剣には感情を伝えることもできる、と言う。俺は確かに一夏の怒
りを感じた。

「あいにく、死にぞこないに興味はないよ」

その場で一回転し、かかと落としを浴びせた。アリーナの地面に叩きつけられる一夏。

かかとの展開装甲を開き、赤いビーム刃が出現させる。

「くたばれ」

イグニッション・ブーストで接近、そのままのスピードで踏みつけた。

シールドバリアを貫き、絶対防御にビーム刃が突き刺さる。

ビーム刃と絶対防御の間には、バリバリッ、とした閃光が漏れていた。

止めと言わんばかりに、グッ、と足に力を入れる。

「くそ」

それが一夏の最後に言った言葉だった。絶対防御も次第に消えていき、ビーム刃を拒むものは何もなかった。

ニヒルな笑みを浮かべ、ゆっくりと足を下ろそうとしたときだった。

「ぐっ」

「……………」

横からの強い衝撃が俺の体に加わる。

無言のシャルロットが体当たりを仕掛けてきた。シャルロットの顔には激しい怒りと悲しみの表情が見える。

たぶん、物凄い葛藤があったのだろう。

「君はもつと賢い娘だと思っていたのに…」

「黙って」

そう言つて両腕にコールしたのは、アサルト・ライフル。

「許さないから…」

俺のほうに向かつてのイグニッション・ブースト。それと同時に放たれる銃弾。

籠手をコールしエネルギーシールドを前方に展開して銃弾を防ぎ、シャルロットの突進に合わせて剣を引いた。

「絶対に許さない！」

ヒュッ、と小さな風きり音を出して投げられたアサルト・ライフル。放り投げた手にはグレネードランチャー。

周りにいる人たちは手を出さなかった。いや、シャルロットの気迫におされて何もできない状態であつた。

「怖い怖い」

未だに撃ち続けているアサルト・ライフルの銃弾を防ぎながら剣の間に合入ったシャルロットに剣を突き出した。

シャルロットはそのことを予想していたようで、突き出された剣に合わせるように後に跳躍し、グレネードランチャーを撃ってきた。意外なことに狙いは俺でなく、数秒前に投げられていたアサルト・ライフル。

しまった！

ドガアアンッ！ 轟音、閃光、爆風、そして撒き散らさせるアサ

ルト・ライフルの破片。

反射的に箆手を頭上にかざし、防御を試みるが：

「僕の勝ちだ」

ラファール・リヴァイブの盾に隠されている第二世代最強武器『グレート・スケール』。

俺の盾は頭上、手は突き出したまま。敵は真正面で武器を構えている。

間に合わない？ 油断しすぎだよ、シャルロット

「ありがとう」

箆手を装備している手には三弦がまだある。すぐさま展開して長剣に。もう、降り注いできている破片は無視。

いくらシャルロットでも突き出した腕を元に戻すことはできないだろう、それができるのは俺ぐらいだからだ。

ミシミシッ、と腕が悲鳴を上げるがそれを無視して、グレート・スケールの杭を自分の体からそらす。

ニヤッ、と笑って見せる俺。信じられないようなものを見て、驚愕の表情のシャルロット。

「得意なんだよ…接近戦はっ！」

箆手をクローズして四弦をすべて展開させる。

ガガガッ、とシールドバリアが破片によって削られていくが無視。グレート・スケールをそらした方向へと回転し、肘と近接戦闘用の赤羽で切る。

正面に来たときにはさらに接近して大剣と長剣、それに四弦を振り下ろす。

「墜ちろ」

シールドバリアを強引に破り、その勢いのまま振りぬく。
絶対防御が発動しても、振りぬく力を変えない。

「きゃあああ」

ISのエネルギーが切れ、絶対防御でも防ぎ切れなかった衝撃が
シャルロットを地面にたたきつけた。

その様子を見ても、不思議と何も感じなかった。

第82話 怒り（後書き）

うーん？ 納得いくような、いけないような

それよりも……シャルロットファンの皆様、ごめんなさい。

個人的に戦闘シーンが書きやすいので最初に戦わせました。
といっても戦闘シーンは駄文ですけど……

もっと勉強しよう。

休日はいつもとどおり投稿できないかも……
できたとしてもアリアを書こう。

第83話 アイロニー

第83話

シャルロットは完全に墜ちた。ISの装甲はなく、パイロットス
ーツのままで、だ。

運の良いことにも命に別状はないらしい、ハイパーセンサーが比
に食いも教えてくれた。

規則正しく上下する胸、それを見て少しだけ安堵するが……外側
には絶対に見せなかった。

それどころかさらに、ニヒルな笑みを浮かべ…

「雑魚は雑魚らしく、黙っておけば良いものを」

感情を殺し、覚悟を決めて戦った。

内心どれだけ驚いたことか、どれだけ苦戦しただろうか、どれだ
け……葛藤を振り切るのに時間がかかったか、そのどれも見せ付け
ずに俺は戦った。

「怖い」それが今の俺だ。

怖いんだ。これからもっとたくさん傷つけるかもしれないことが、
怖いんだ。

けど、俺は……『亡国企業』ファントム・タスクなんだ。

「アリシア手を出すなよ。これは俺の獲物だ」

「手など元から出す気はない」

「余裕そうじゃない」

「お相手をお願いしますか？」

俺とアリシアの会話に入り込んできたのは、鈴とセシリア。

しかし、先に攻撃を仕掛けてきたのはラウラだった。

降り注ぐかのように上空からのワイヤーブレード。正面からは大型のレールガンの砲撃。御丁寧^{アクトイブ・イナーシャル}にラウラ曰く『停止結界』ことA I C^{・キャンセラ}で両腕と両足を拘束されていた。

「ヴォーダン・オージェ、ね」

俺の裏切りの原因が牙をむいていた。

アリシアの話からは、まだまだ俺を勧誘するためのものはいっぱいあった、が…大本はこれだった。確かにほかの事も普通の人間だったら、抗えないほどの効力を持っていた。

しかし、俺はそんなことは気にしない。俺が決めたことは『守る』ということ、そこに世間体などは存在しない。

そのため、俺が…裏切ったのはあの金色に光る……『越境の瞳』^{ヴォーダン・オージェ}は憎くて仕方がなかった。

——^{ワンオフ・アビリティ}単一仕様能力発動。『エコー』

存在が消える。両腕と両足にあった拘束は意味をなくし、俺の体があるであろう場所にはワイヤーブレードとレールガンの弾が通った。

俺が消えたことに気付いたのか巻き上げられる、ワイヤーブレード。

自分のワンオフを切り、そのうち一本を掴んでみせる。

俺のワンオフ……『エコー』の唯一の弱点は存在が消えている間には誰の攻撃もどのような力も及ばないが、こちらからも攻撃ができなくなることだ。ちなみに効果範囲は、自分の体と触れているも

のだけ。

「ボーデヴィツヒ。不意打ちとは随分と落ちたものだな」

「貴様に言われる筋合いはない」

ワイヤーブレードを引っ張り強引にラウラをたくしよせる。

ラウラは両腕のプラズマ手刀を展開。

俺はシャルロットを落としたときの状態のままで……切りあった。

「裏切り者は、殺す」

「できるのならばな」

振り下ろされ、突き出され、はられる手刀を同じように振り、突き、はらう。

「なあ、一つだけ聞いて良いか」

「裏切り者に語る口などない」

肉薄した接近戦のため、残りの人は傍観することしかできなかった。

「そう言なよ。……お前は今、誰なんだ。軍の人間か、それともラウラ・ボーデヴィツヒか？」

「……………軍の人間だ」

「そうか」

聞きたくはなかったその言葉、自らの意思を捨てているのか、それか本気で殺しに来ているのか、そんなことはわからない。

殺気は鋭く尖り、自分に刺さっているかのような痛みが走る。

「なら、お前は俺には勝てない」

残念なことにそれなら、宙は剣を振るうことができた。躊躇することなく全力で剣を振るう。

両腕の長剣と大剣、それに四弦が加わり合計8本の刃がラウラを襲う。それにラウラがソードビットを展開して応戦した。

以前アリシアはこの全ての攻撃を防いでいたと言う。

あいつにできて、俺にできないことはない。それに……こっちのほうが武器の数は多い！

「おおおっ」

「はぁあっ」

全力でぶつかった。どんなに死角からの攻撃が来ようとも、それらをすぐに察知し対応する。

やっぱり手ごわい。学年一位といわれるのもわかるが……この程度の覚悟のやつにだけは負けたくはない

どうしてだ。どうして私がコイツに勝てないのだ。

互いの実寮は拮抗とも言っているだろう。現にいま行っている戦闘では一撃たりともあたっていない。一撃すら与えていないのも事実だが……

どうしてだ、あと少しなのに……どうして届かない。押し切れない。手数では勝っているのに……

単純計算で20対10。お互いの攻撃方法は私のほうが二倍。

私は……私の誇りにかけても……裏切り者だけにだけは！

「負けねえ」「負けん」

これは意地と意地のぶつかり合い。互いにとっての最高の一撃を繰り出す。

宙は最速にして最高の一撃を——トーナメントのときに使った一撃を放つ。

ラウラは自らの全力を持ってそれに応える。

「……………」

一瞬の沈黙。

先に動いたのは——ラウラだった。

「なぜだ……なぜ私は負けるのだ。裏切り者なんか……」

それだけ言い残して墜ちていく。I Sの装甲は光の粒子となって消え去った。

それを尻目に俺は笑う。

「皮肉だな。……お前たちのために戦っているのに、どうしてこうも攻撃されるのかな」

さてさて、大切なものを冗談抜きに何か失った気がするけど、これからが本番。

本音としてはさっさと終わらせて帰りたいー

第83話 アイロニー（後書き）

はいはい、強さの順列を教えてください？ わかりました。
今のところ……

アリシア≧宙≧会長＞ラウラ＞専用機持ち＞モブキャラ そんな感じ。

千冬と山田を混ぜるとまた変わってきますけどね。

これはワンオフを含めた上での結果となります。自作自演ですよ、これ。

さてと次回はやっと……ギロチンを使えるね。

「私の出番はここだけなのか？」

「貴様は空気でもかまわんど、ベルリオーズ」

「水没王子か」

「はん、ネタの俺より空気が薄い一位には言われたくない」

と言うわけで、一度やってみたかったのでやってみました。
なんかあの二人って仲が悪そうな気がする。

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第84話 作戦終了（前書き）

やっと一段落つけました。

IFストーリーなんです、後二話ぐらいでこのお話が終わると思うので、そこから書きたいと思います。
その辺の情報は後書きで：

それでは第84話、どうぞ

第84話 作戦終了

第84話

「皮肉だな。……お前たちのために戦っているのに、どうしてもこうも攻撃されるのかな」

周りにいた専用機持ちのすべての手が止まった。

武器はすべて俺の方向へ向けられているが、セシリアはすでにスコープから目を離している。

「それは…」

「どういことなのですか」

智花と葵が俺の言葉に反応する。

「あつ、すまん。お前たちには関係ないか」

軽い調子で言って、剣を肩に預ける。

「お前たちのために、だ」

そう言って…倒れている一夏、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラの順番で三弦の剣状態でさしていく。

意識のある鈴とセシリアはたじろぐ。

「ISは俺の全てを奪った。お前たちだって同じだろ？ シャルロットはISのせいで女を一度失った。ラウラは自らの目を嫌い、セ

シリアの家庭も鈴の家庭も崩壊しているじゃないか」

直接的にはないが間接的にでも関係はある。さらにISが作り出した副産物の『女尊男卑』の世界。

「深宇宙探索として開発されたISも、軍事目的として使用されている始末。冷戦状態は続き、女尊男卑はたくさんの不幸を作り出した」

ファントム・タスク……俺が入ってから一番おどろいたことは、構成されているメンバーのほとんどがISに対して何らかの感情が存在していることだ。

アリシアも家族を失っている。

「幸せか？　こんな世界」

「……」

「……」

鈴とセシリアは言い返すことができなかった。
宙の言っていることは確かにその通りだ。

「そんなこと……そんなことない」

「へえ、君がそんなことを言っても仕方がないのに」

智花には残念だけど、今この状況で言える言葉なんてものはない。

「ISに対して、苦勞したことがあるか？　悲しんだことはあるか」

？ 絶望したことは？ ないくせに出しゃばるな……それは俺にとって、侮辱に過ぎない」

本当は「俺たちに」とでも言おうかと思ったが、あいつらを突き放すのには「俺に」のほうが効果的だと考えた。

結果、大成功……はあ…

うれしくともなんともないので、その場でため息を漏らす。

「だって「お前の意見なんて知らない。聞きたくない。時間の無駄だ。黙れ」 ツッ！」

それでも対抗するように煩勞を言おうとするが、やめさせる。これ以上言いたくなかったし、不愉快だった。……傷つけたくなかった。

「The person who slips and has not fallen down. It doesn't necessarily stand safely certain.」

「！ それはっ」

セシリアの母国、イギリスのことわざみたいなものだ。

すべて転んだことのない者は、安全確実に立っているとは言えない、という意味。

ここでは、苦勞しないものは、正しいしいとはいえない、と言う意味で使った。

英語だけど、わかるよね？

「あとは…燕雀いずくんぞ鴻鵠の志を知らんや」

故事成語、意味は小さい人間に大きな人間の考えていることはわからない、と言う意味。

あえて、ストレートに言わなかった。

台本どおりなら……

『ふざけた理由だな。何も知らないお前が、俺のことを知ったかのようなことを言うのか？ 本当にふざけるなよ。お前の言っていることは机上の空論、夢物語なんだよ。この世の中が正しいことだけ出回っていると思うなよ。この世の中は常に人の欲望でしか動いていないと言うことを知れ。そして、無知は罪だ』

それと……

『理想を求めても足りず、思いを重ねてもまだ足りず、命を賭けても尚届かず、全てを賭けても至らない……これが現実と言うものだ』

うん、最後のは完全にネタだね。台本にも：『使うな!!』と二重丸で強調されているし……あの人は何がしたかったのだろうか？ 疑問に思うが、これぐらいで良いと思う。

「興が冷めた。アリシア帰ろうか」

背を向け、武器をクローズし、赤羽を速度重視型に変更させる。

「私たちが逃がすと思っているっすか」

「逃がすかよ」

「おやおや、二年と三年生の先輩でしたよね」

「「……………」」

無言は肯定と受け取ってもかまわないのだろう。照準も合わせられてるので、ISのモニターに『ロックされています』の文字と、警告音が鳴り響いている。

だけど……間違いだよ

「俺だけに集中してて良いんだ？」

『よろしく』

『了解』

本当に楽しそうな声が返ってきた。

あいつも暇だったんだな…

しみじみとそう思い、なぜか悲しく思ってきた。このときに『空気』と言う言葉が頭に浮かんだのはここだけの秘密にしておこう。

「何を言っているのかさっぱりっすね」

「馬鹿かお前は、さっき手え出すなって言ったのはお前だろう？」

「プライベートチャンネル♪」

にっこりと笑い、告げる。

その瞬間、「っす」が口癖の……………誰かにアリシアの蹴りがクリーンヒットで綺麗に入った。

別に名前を忘れたわけではない。確か……………

——敵IS。操縦者フォルテ・サファイア。ISネーム『コールド・ブラッド』

そう、フォルテ・サファイアだ。忘れていたわけではない。

「ふふ、憂さ晴らしに付き合え」

蹴り飛ばした後にライフルを乱射し、追撃を仕掛ける。

が、呼び出したシールドがその弾幕を防いだ。

「それぐらいで、どうにかなると思っているっすか」

「知らないのか？ 憂さ晴らしというのは、一方的にやるから憂さ晴らしなんだよ」

いつの間にか展開していたグレネードランチャーが火を噴いた。すぐさま回避行動に移ったフォルテはすぐに射線から機体をそらす。突如として現れた何か、弾があたり、爆風を撒き散らした。

「なんだと!？」

「不思議か？」

もう一人——えーと名前は：ダリル・ケイシーだ。そのケイシーがまたアリシアにタックルで吹き飛ばす。

「これが答えだ」

そういつて指をぱちんと鳴らす。
すると、未だに吹き飛ばされているダリルの背後に何かが出現し、

右肩を貫いた。

「ぐう！」

体中を走る痛みにあたえながら、ダリルが右肩を貫いた物体を確認する。

「これは…」

それは刀だった。日本刀のような感じにそりがある刀。

そうこれがアリシアのワンオフ・アビリティー『断頭台^{ギロチン}への行進』。任意の場所、任意の大きさを刃物呼び出すことができる。固定もできるし移動させることもできる。

完璧なるチート！！　そうは言っても俺のワンオフも反則まがいなんだけどな〜

『アリシア早く済ませてくれよ。もう作戦時間いっぱいいっぱい』

『いちいち、うるさい。憂さ晴らしぐらいゆっくりさせろよ』

『時間だ。遊ぶな』

『ぶーぶー、後で絶対に遊んでもらうからな』

『……それはマジで勘弁』

本気でそれだけはおめんこうむる。そんなことされた日には、たぶん、体のほうが先に死ぬ。いや、精神も確実にあの世に行くだろう。

『知らん、男に二言はない。そうだろう？』

何も言っていないませんが、と言う前にアリシアが止めをさした。

サファイアはグレネードの爆風に吹き飛ばされたところに、剣の雨が降り。

ダリルは右肩を刺されたまま動けないでいたため、グレネードランチャーの餌食となり…全てが終わった。

「じゃあな」

「ふっ、感傷だが、別の形で出会いたかったぞ……」

アリシアの展開したVOBに掌から射出したワイヤーをひっかけて、巻き上げてつかまる。

これで終了。これで会うことはないだろう。悲しくもあるが、どこかうれしくもあった。

すべてが終わってから……見に来るか…

第84話 作戦終了（後書き）

無理やり感がひどいような・・・orz

うん、まあ、しかし・・・後悔はしていない。

そして、IFストーリーのお話に入りますと・・・

「頭の中でイチャイチャしてんじゃねーよ」です。

授業中妄想のし過ぎで集中できません。宙のリア充が!!!

楯無と・・・デートのお話で

智花と・・・付き合った場合のお話で

簪と・・・結婚を前提にお付き合いになったわけのお話で

何しとんじゃーっっ!! 作者血の涙。

あ、でも期待しないでくださいね。それを全て書くわけにもいかな
いし、完全にかけるわけではないので・・・文才ないし・・・

誤字脱字訂正などありましたらよろしく願います。

第85話 帰還

第85話

太平洋上空―日本経済水域外―宙はアリシアのVOBの背中に乗って基地へと帰っていた。

特に話すこともなかったので黙っていた宙だったが、ふと思う出だしたように口を開いた。

「アリシア、少しだけ止まってくれないか？」

「理由は？」

まあ、確かに理由がないと止まってくれないか：

「ちょっと、言いたいことがあるんだよ」

「誰に？」

さすがにごまかせないことを悟ったので、本当のことを言うことにした。

「妹に：一言ね」

「わかった」

俺はコイツのニヤニヤとした顔が嫌いだ。正直、いや、なんとなく恥ずかしい。

そんなことはおいといて、左腕のISを解除し携帯を呼び出す。
コール

GPS対策のため電源を切っていたのだが、今なら問題ないので電源をつけて妹の携帯に電話する。

数回の呼び出し音の後、ようやくつながった。

『お、お兄ちゃん！？ 今どこにいるの？ ニュースのことは本当なの？ どうして、どうしてこんなことをするの？（ry）』

物凄い、質問攻めだった。

それはそれは、黙っていたら永遠と続きそうなほどだ。聞くのもめんどくさかったし、時間もないので：

『ごめん、そんなに話をしている時間はないんだ。だから、簡単に言うな』

『……………』

それだけ言うと、すぐに黙る香。本当にできたやつ……………できたやつなのか？ 疑問ができたけど、そんなことを考えている時間はさつき言ったように、ない。

『いつか』

『えっ？』

『いつか帰るよ。…………あと、養子離縁届がお前の部屋にある、参考書の中にあるから…わたししておいて、よろしく』

養子はその届けさえあれば…簡単に離縁することができる。迷惑もかけたし、正直申し訳なさ過ぎるので出してもらうことにした。

『お兄ちゃ』

ピッ 何かを言おうとしていたけど、強制的に通話を切って、バッテリーをはずした。

「良いのか？」

その様子を見てアリシアが心配そうに聞いてきた。

「もっていても…何にもならないしな」

GPSがあるので居場所もばれるし、一応だけど仲間に迷惑だけはかけたくない。そう思って、俺はSIMカードを綺麗に碎いて、携帯ごと海の中に放り投げた。

「帰ろうか」

「わかった」

必要最低限の会話をして、また発進する。

スコールさんに頼んで、携帯を貰おう…

携帯依存症ではないが…たぶん、生活に困るだろう、とそう思ったのであった。

「おかえりなさい、命令破り」

ここはファントム・タスク実働部隊の基地。といってもそのうちの一つののだが……

今さっきの言葉は俺が返ってきたときに言われた言葉だ。グサツ、と心に突き刺さりました。

ニコニコしたような顔で怒りをあらわにしているスコールさんが目の前にいる。

「すみません」

一応、わかってやってきた。

命令違反——それは、俺が今回の作戦目的である「偽りの宣言を世界に知らしめる」ということだったのだが……

「ですが、その場にはテレビなどのメディア関係者もいなかったので、今回は言いませんでした」

「それは確かに本当のことだったわ……けど、命令違反は命令違反よ。勝手な行動は謹んでちょうだい」

ぐう、の声も出ない。

確かにこの作戦は重要だった。ファントム・タスクの目的を全世界に知らしめることによって、注目を俺とアリシアに向けることが本来の目標だったのだ。

俺はISを世界で使える男の一人だし、アリシアは元カナダ代表候補生だ。話題性がありすぎる。

こんなおいしいネタは各国のメディアにとっておいしすぎる話だっただろう。

前回、俺が裏切ったことはすぐに全世界の人達に知れ渡ったこと

もあつたので、俺たちにこの作戦をさせたのだろう、簡単に予想がつく。

「それにあなた、個人的感情で言わなかったんじゃないの？」

「ッッ!!」

言いたくなかったから、言わなかった。

理由は簡単、その内容が『俺たちはこの世界の全てのISを破壊し、全ての国をファントム・タスクの配下に置く』とかなんとか、そのへんは元から言うつもりはなかったので暗記していなかったりする。

それは本当のことだった。間違いではない、俺が俺の個人的な感情を優先して言わなかったのは確かなことだ。

焦燥と動揺を悟られないように、言った。

「なんのことだか」

実際に内心はあせりまくりだ。

間違いなく、俺の心は落ち着いていないし：呂律が回っていないと思う。

「くくく」

後ろでは思いっきり笑いをこらえている人物が一人。

「馬鹿が」

明らかな侮蔑を込められている視線を浴びせている人物が横方向に一人。

「スコール、私のほうが役に立つのに…なぜこんなやつに重要な役目を与えたんだ」

レズが一人。こいつはスコールさんの隣に…
改めて思うが…このメンバーは個性が強すぎないか？

「何を考えているのかしら？」

千冬さんとはまた違うタイプの綺麗なお姉さん。
これが俺の小隊メンバー、アリシアは俺のエレメント——戦闘時の二機編成のことだ。
はぁ、先が思いやられる…

このように怒られている状況下でも、馬鹿なことを考える宙だった。

「宙」

急にスコールさんからお呼び出しがかかった。

「なんですか？」

「今日の夜は付き合ってもらおうわよ」

「はい？」

俺の守備範囲は広くないですよ

「ちょっとしたお食事どころに用事があるのよ」

はい、もちろんそっちの意味ですよ。そう、俺の守備範囲は時間帯的な意味で広くないー（意味不）

「わかりました……と言っても今の俺には反論する権利はないんですよね」

「わかっているじゃない」

さいですか…

第86話 どの道……（前書き）

ここで一言だけ言わせて貰いたい。

今のお話はオリジナル展開です。設定もオリジナルです。これが本当のことだと思わないでください。お願いします。

設定いじくった後にこれを入れるの忘れていたので、ここで出させていただきました。

ではでは第86話、どうぞ！

第86話 どの道……

第86話

「ねえ、あなたはどのようにして私たちの誘いに乗ったのかしら」

「俺にとって、いつの間にか……大切な存在になっていたやつが人質になっているから」

本当に守りたいと思ってしまっていたのだ、ラウラ・ボーデヴィ
ツヒのことを……

「たたが目よ」

「あんたらにとっては『たたが』だろうな、俺にとっては大事なあ
いつの一部だ……あいつにとってはどうだろうかしらんが……
それに、命を落とす危険もあるといった」

「嘘だとしたら？」

「あいつはふざけたやつだけど、うそはつかないだろ？」

「そうよ。けど、どうしてそれがわかったの？」

「俺は……昔いろいろあってな。その辺は良くわかるんだ、悪意と
か敵意とかは特に」

町中の不良、ヤクザ、暴力団の皆さんとケンカしていたときだ。
最初の不良のときは良かったけど……暴力団クラスになれば、銃が出

てきたから：生き残るためには必要だった。

その後も訪れる、他の町や都市からのお客さんを相手にしていくうちにどんどん鋭くなっていったのだった。

「そう、あなたは何をするのかわかっているの？」

「俺にとっては正義です。守るためですから：」

裏切り当日の夢を思い出した。

福音戦のときに出てきた、残響がまた出てきたのだ。

『皮肉だよな、お前も：一緒に戦いたくて手に入れた力をこのように使うとはな』

用件はそれだけだったらしく、すぐに消えたが……その言葉は消えなかった。

「それに俺は子供ではありません。善悪の判断もできます」

「わかったわ」

聞きたいことはそれだけだったのだろう、目の前にある食べ物を食べ始めるスコールさん。

それにならない俺の食べ始める。

高級とのことなので、味は良かった。本当に良かったのだが……お腹いっぱいにはならない。

俺はそっちのほうが好きなんだけどな

いまさら文句も言えないので、黙って食べるが……気分もあまりよくなかったりする。

ちなみに現在地はホテル『テレシア』の最上階レストラン。VI

Pルームだそうだ。

宙は知らないが、今扉を開ければ一夏と箒が食事をしているところだったりする。

そんな俺の服装は……女物のドレスだ。

理由はもちろん、俺の顔はばれてるから……

スカートは、スースー、するし、ドレスは動きにくい。最悪だ。さらに薄化粧までしているので、ここまで来るときに男の視線がいたかったのは事実だ。

『似合うな』

そんなことをアリシアがまじめな表情で言ったときは、思わずおもしろいって笑ってしまった。

その後、おもしろいって笑われたけど……

そんなこんなで俺はスコールさんと食事を取っていたのだ。

ついさっきまで質問攻めにあっていた。あれは全て本心である。

I S名 アリーヤ

世代 第二世代

俺は食事の後、すぐに部屋に戻りアリシアのISデータを眺めていた。

これが……アリシアのIS『シュープリス』のファースト・シフト時のISだ。

性能は本当に燃費が悪い機体性能なのだが、それを補って余りある機動能力・射撃性能が存在する。

が、目を引くのはそこではない……美しさ、だ。

鋭角を基本とした独特なフォルムに、F1カーを想像させるようなパーツ構成。そして、最後にエネルギーを二の次に機動を特化した性能の潔さ……完璧だ。

素で『あたらなければどうということはない』を貫いているのは本当にいいと思う。

俺も『シュープリス』を始めてみたときは本当に心を奪われたものだ『おおっ』と感嘆の声を上げてしまったことを今でも覚えている。

ほぼ、全ての男がこの期待に惚れるであろう。

アリシアがどう思っているのかは知らないが、羨ましい。

ただ……

『断頭台^{ギロチン}への行進』

「ギロチン、ね」

思わず口に出してしまったが、恐ろしい名前だ。

模擬戦のときは本当に厄介な能力だった。

要注意、とテキストに加えて俺は眠る。

さて、俺はこれからどうなるのだろうか？

進むべき道、信じるもの、善と悪、この世の中個人で動かすには困難なものばかりである。

そこで意志は存在を失い、ただの人形となるか…あるいは、意志を貫き通し世界を裏切るか…それか、全てを守り英雄となるか…

どの道、俺に残された選択肢は少なかった。

第86話 どの道……（後書き）

宙「やっとなな…」

アリシア「何がだ？」

宙「これがオリジナル展開の第一期終了だ」

アリシア「そうか、じゃあ何期まであるんだ？」

宙「作者にでも聞いてくれ」

はいはい、きちやいましたよ作者

宙・アリシア（なんとなくぶっ飛ばしたい）

駄々漏れだよ、感情が・・・それにぶっ飛ばしてもギャグ補正がかかって何度でも復活するけど？

宙・アリシア（安心した。何度でもぶっ飛ばそう）

キラッ☆ 自ら星になりました。

さて、冗談はおいといて第3期を一応の完結としております。

第一期に宙の裏切りを…

第二期に取り戻しを…

第三期は「ひひひ」です。

ということで、明日からIFストーリーを書かせてもらいます。これは時間がかかりそうですので、一日一回投稿は無理かと…

すいませんね。

IFストーリー 宙×楯無 修正中（前書き）

すいません、物凄く時間がかかりました。

言い訳としては…三人称視点を貫こうとしたため、IFだったので、恋愛描写は難しい、休みは書けなかったため、6, 198字なので…

それではIFです、どうぞ！

IFストーリー 宙×楯無 修正中

IFストーリー

「うーん」

ただいま駅前で一人の青年が今か今かと誰かを待っていた。

その青年の格好は夏だと言うのに黒のジーパンをはき、上は灰色の何もないTシャツを着ていた。あつぐるしそうな格好ではあるが、しかし不思議とそう思わせないような美麗な顔だった。

腕についているG－SHOCKを見てはため息をつき、時間が少したてばもう一度見て、ため息をつく動作を繰り返していた。

「ここまで待たされると……俺が間違っているような気がしてくるよ……はぁ…」

もう一度だけおもいつきため息をつく。

しかし、なんと腕時計を見ても来そうな気配がしない。

さて、なぜこんなことになっているかを説明しよう。

今駅前で誰かを待っているような様子の青年の名前は神代 宙。

まぎれもなく、IFの元の世界の主人公である。そんな彼は……数週間前から付き合っている一人の女性を待っていたのだ。

その女性の名は更識 楯無。宙が通っているIS学園の生徒会長である。

それ、なんてギャルゲ？ そんな質問は受け付けない。まあ、確かに生徒会長が付き合っている学校なんてそんなにあると思う。

しかし、付き合っていることは事実だ。知っているのは当の本人たちだけだが……それが二人だけの秘密、みたいな感じになってい

ることもまた事実である。

告白したのは…なんと生徒会長のほうから……………

『ねえ、私と付き合ってみない？』

夕暮れの生徒会室の場であった。仕事が一通り終わり、他の人が帰ってからの告白。

シュチュとしては申し分ない。それに…そのときの彼女の笑みはとても魅力的だった。

宙には好きな人がいた。だが、その気持ちも生徒会活動の途中でだんだんと会長に傾いていった。それも知らない間に、だ。

もちろん、最初は戸惑った。知らない間に彼女のことが好きになっていたので自分の気持ちに整理がつかず悩んだものだ。が…冷静に考えてみれば、彼女が好きだったことに気が付き…付き合っている。

そして、今にもどる。

宙はまだ腕時計を見ていた。まだ、楯無は来ない。

「うん、これは…どうしよう」

彼がこんなにもなって困っている理由。それは待たされている時間だ。

この世には、秒、分、時、といろいろな時間の表し方が存在する。そして、彼の待たされた時間をそれぞれの表記にすると…

秒——7200

分——120

時——2

そう、約二時間ほど駅前で立ち往生しているのだ。もう、すでに彼のライフはゼロになっているかもしれない…

唐突だが、この世界は女尊男卑の世界。男が下で、女が上の世界。イケメンの皆様は豚みたいに太った金持ちの女のものになり生活ができる……と言ったことが現実になるかもしれない世界。

そんな世界では逆ナンが普通に行われている。彼もその事態に何度か遭遇していた。

なんとか『彼女を待っているから』そんな言葉で、どうにかなんとでも？ もちろん、ならない。この世界の現実はそんなに甘くない……「ねえ、そのあなた。私たちと遊ばない？」ないっ！！

また、声をかけられていた。今日で何回目だろうか……本気で質^{たち}が悪い。

「彼女を待っているから」

常套手段を一応言ってみる。うまくいけばこれだけで手を引いて……「二時間も待っているじゃない」くれない。

最悪である。これ以上ないぐらいの最悪な気分だ。と言うかこれ以上あったら教えてほしいレベル。

「それに携帯とか一回も使わないってことは……彼女いるなんてうそじゃないの？」

ケイタイ ナニソレ、タベレルノ？

完全に今の今まで携帯の存在を忘れていた宙はすぐに携帯を取り出して、彼女に電話を入れる。

その間、目の前にいる女性は無視だ。

(初デートのはずなんだけど……)

『もしもし、楯無？』

数回のコールの後やっと電話に出たのですぐに聞いてみることに

した。

『今日の何時からだっけ？』

一応、遠まわしに言ってみた。それぐらいいもしないと、気がすまなかったからだ。

『二時間前』

返ってきたのは……少しだけ、いや、本気で怒りたくなってくるようなせりふだった。

『楯無……』

しかし、電話の会長の声の後から聞こえて来る音を聞いて怒りも落ち着いた。

電車の音がしたのだ。

駅前にいる俺が聞いている音と同じ音が……なので、電話を切る。目の前にいるやつらもこれで終わりなので、無視し続けた。

「ごめんね、遅れちゃった」

テヘッ、と笑いながら近づいてくる。

そうそう、ちなみに服装は……ロンティー・カーディガン・スカート。色は上から白・水色・淡い赤だ。

正直に言う……似合っていた。

「遅いよ……さて、行こうか」

逆ナンパのお姉さんたちがいるので、怒らずに手を引っ張って早

足で歩き始める。

呼び止めるような声が聞こえたけど、もちろん無視して歩き続けた。

ある程度歩くと簡単に諦めてくれたので、早足だったのをゆつくりとした歩幅に変えて……事情聴取を始めた。

「なんで、遅れたんだ？」

「アハハ、男の子が細かいことを気にしちゃダメ」

「二時間を細かいことにする男のほうが、問題じゃないか？」

「ぶー、宙のいけず」

頬を膨らませて抗議の視線を向ける楯無だった。
さすがの宙もその会長らしからぬ様子には面食らい、許してしま
うほかなかった。

「わかったよ。兎に角、用事が会ったんだよね？」

「うん、家の用事がちよっとね」

宙が妥協した結果、楯無はすぐに素直に応えた。

「家のことは教えてもらったから、最初からそう言ってもらえばよ
かったのに……」

「いやー、そこは……ほら、ね？」

「何がですか！」

「ノリってことで」

宙は内心で：『ノリで二時間も待たされた理由を片付けられて堪るかよ』と考えていた。

「それよりも少しだけ、小腹がすいたわね」

それもそうだろう、午後一時に待ち合わせしていたのだから：二時間もたてば、三時になるのは必然的だろう。

宙も楯無の言葉に同意し、何か食べれるものを探す。

ファーストフードぐらいなら金銭面的に大丈夫なはずだ。

ちなみにこの宙、付き合ってからバイトを始めた。理由は：

『パクツた金は：使えないな』

さすがに彼女のためにつく金が黒い金では気分が悪かったので、バイトを始めた。

ちなみに、パクツた金は元のところに返しにいった。もちろん、問題が発生したがそこは更識家：…と言っても楯無一人だけだけど：彼女のご協力の上、隠蔽工作させてもらった。

「それじゃあ、あそこにしよっか？」

無邪気に笑いながら、指を刺したのは……

「@クルーズ…」

「そう、@クルーズ。ここでおごってくれたら、男が上がるね」

本人もニヤついているのでわかって言っているのだろう。余計に質が悪い。

さらにぐりぐりと肘をわき腹に入れてきている。

（これは……仕方がないよな）

いつの間にか、宙が下手になってるのは……楯無の人たらしスキルが強すぎるせいであろうか……それとも宙が真正のDMなのか……それか宙が楯無に頭を上げられないのか……この問題は皆さんのご想像にお任せします。

冗談はさておき、@クルーズの中へ……

「おいしいね、宙」

本当に上手においしそうにイチゴパフェを食べる楯無の目の前で、ズズズ、とコーヒーをすすする宙。

（仕方がない……財布が……）

楯無の頼んだのは……少しだけ高いはずのパフェのはずなんだけど……値段を、チラッ、と見ただけでも夏目さんが……いやいや、それは無断で持ち出したお金でした……まあ、野口さんが軽く二人ほど出て行くような値段だった。

なので、俺が飲んでいるコーヒーはこの店の中で高いほうだ。味はわからないが……個人的には好きな部類に入るはずだ。ちなみに値段は500円というワンコイン。

（高い……）

バイトでしか稼ぎのない学生にとっては……この店はレベルは高すぎる。

「うーん、おいし」

実に幸せそうに食べる楯無。そんな楯無を見ながらコーヒーを飲

んでいると…

「食べる？」

「ツツ！！」

「またもや、笑いながらイチゴをのせたスプーンを突き出してくる。これはあの恋人と同士でやる『あーん』とやらの違いがない。が、しかし、大勢…それも不特定多数の人の中でそれをやる勇気がない『ヘタレ』の宙君は話をそらす方向に持っていく。」

「そういえば、次はどこに行く？」

「そう、確かにそれはデートにとっては深刻な問題だ。楯無は知らないとして、宙は初めてのデートだ。」

「そんなやつでも、デートコースを考えないわけではない。ただ単に、思いつかなかったただけだ。」

「待っている時間でも考えていたのだが、思いつかなかった。よって、楯無に聞いてみることにしたのだ。」

「思いつかない、か。それじゃあ、ダメだよ。女の子としてみればリードされたいな」

「そんなことを良いながらも、突き出していたスプーンを自分の口の中に運び、真剣に考えているあたりは楯無も真剣なのだろう。」

「宙はその様子を見て少し恥ずかしく、うれしかった。それを、表に出すことはなかったが…」

「映画なんかどう？」

軽い調子でそう言っているが、目は真剣。
なので…宙も真剣に応えるのだったが…

「映画、か…：難しくないか？　だって個人的な趣味もあるだろうし、会話がなない。それに盛り上がり欠けたときは…気まずくないか？」

真剣すぎた故の強すぎる言葉の襲撃だった。
受けた楯無も…

「うぐっ」

苦い顔で笑っている。

「じゃ、じゃあ…ゲーセン？」

なぜに疑問系なのか、少々遠慮がちなところとか、そんなところを疑問に思っている場合じゃない。

「俺はふたりでゆっくりしたいな、あそこだと落ち着かない、うるさい、人口密度が高い、ゲームに集中しちゃうかも…」

またもや言葉の襲撃。これも、楯無はたまらず…

「ひぐう」

うなっていた。

しかし、黙ってやられている楯無など存在しない。今現在、やられている間にもこの状況を打開する何かを考えていた。

「あっ」

かわいらしい声を上げた楯無は、急にニヤニヤと笑い始めた。

「こんなに詳しいと言うことは……調べたのよね？」

「うぐっ」

痛いところをつかれてしまった宙は楯無と同じように、苦い表情を浮かべる。

「そういえば……昨日の生徒会の後でデートのことを決めたわね？
と言うことは時間的に夜に調べた、と……」

「ひぐう」

そして、この場には苦々しく笑っている宙と、恍惚の表情でニヤニヤとしている楯無。

「ニヤニヤすんなよ、楯無」

「いや♪ だって真剣に考えてくれたんだもん」

（どの口が、ゝもん、言うんだよ……）

「……それじゃあ、ぶらぶらとウィンドウショッピングでもしようか」

お金ないし……とでも入れたかったが、それはさすがに格好が悪すぎる。

「うん、そうだね…そうしようか」

こうして…俺たちの初デートは決まったのだが……………

「何でこんなことになってんだよー！ーッッ！！」

現在、宙は女性用の服専門店の更衣室。

そう思いっきり楯無に女装を楽しんでいたのだ。
それなら叫びたくなる気持ちもわかるだろう。

「それじゃあ、次はこれね」

そう言って洋服をカーテンの向こう側から入れてくる。

それをしぶしぶと受け取る宙だったが、これまでの女装で抗体が
できているのでそんなに嫌ではなかった。

そう言っても好きだというわけではないので、あしからず。

「楽しそうだな…おい」

「はい、とてもたのしいですね。楯無様」

「そうでしょ?」

さっきから、宙の元へ運ばれる服の量が多いかと思えば店員さん

もグルだった。そして常連だった。

（計画通り…）と楯無が笑っているが、宙は知ることはないだろう。と言うか知らないほうが良い。

それを淡々と着ていく宙も宙だと思うが…

ちなみに、長髪黒髪のウィッグを装備しているので女装にも違和感がなかったりする。

「それじゃあ……」

楯無の急なタメに少しだけこわばってしまった宙。

（なんとなく…いや、これは絶対に…）

「これ着けてみて？」

入ってきたのは下着でした。

もちろん、女性用。

「はあ？」

ある意味予想通りのものが届いたので宙は自分の私服を着て、お得意の無視でそのまま更衣室を出た。

「これは無理」

少しもあせていないようなそぶりで出てきて楯無から差し出された下着をそのまま楯無に返す。

「いくらなんでも女物の下着は無理だ」

そう、いくら女装が苦痛にならなくなったとはいえ、さすがにこ

れは無理だろう。

そして、宙には：（さすがにこれを理由にすれば楯無も……）と
言う考えがあった。

「男性用もありますが？」

「……………」

「よしっ、それいってみようか」

絶望的な言葉を聞いた宙に、楯無の追撃。

さてさて、いつになったら主導権を握れるのやら…
この後、宙は思いつき走り去っていったと言う…

「っ、疲れた」

「そんなこと言って良いの？ 彼女の前で」

確かにデートの後で「疲れた」などの言葉を言うのはタブーであ
ろうが…

振り回されたので仕方のないことだろう。
なぜなら…

・柄の悪いお兄ちゃんにあえてぶつかり、女尊男卑を逆手に取り宙
のせいに……リアルストリートファイターが発生し、バトルへ…

そんなことを数回繰り返して、宙は体力的にボロボロに…
そんな様子を楯無は恍惚の表情で眺め…穴が開くほど見つめていた。

「♪」

現在でも楽しそうな楯無。

ちなみに宙と楯無は寮へと帰っていた。

そして、楯無の部屋のところまで送り、自らも部屋に返ろうとする。

「んじゃ、これで終わり…」

「ダメ」

「ん？ 不服か？」

プツクリと頬を膨らませる楯無、そんな様子に宙も面食らったように歩みを止めた。

「今日…楽しかった？」

「…どうしたんだ？ 楯無」

「あの、さ。宙は昔…」

「うん」

「彼女いたんだよね？」

「ああ、いたよ」

確か宙には彼女がいた。

「だから、さ。どうだった？」

「……」

（もしかして…気にしてんのか？）

「楯無」

宙は少しだけ肩身の狭くなっている楯無にやさしく話しかけた。

「うん」

そんな宙の話し方に、ビクッ、と肩を震わせて返事をする楯無。

（こいつは…）

そんな楯無は見たことがなかった宙は少しだけ戸惑う。
だが…覚悟を決めた。

「今回のデートは…」

「うん」

「俺も初めてだったよ」

宙は楯無には言っていなかったようだ。

「え!？」

(う、うそ…宙は初めてだったの? それじゃあ…)
こういうのを「杞憂」と言う。つまり、楯無は最初から不安でたまらなかったようだ。

「あと、楽しかった。確かに振り回されまくったけどさ…なんだかんだ言って楽しかったんだよ」

「あ、あの、えと…」

不安ゆえのあの振り回し方だったのだろう。

(……まったく)

いまだ、不安な様子を見せている楯無を可愛いと思ってしまい、同時にいとおしく思っていた。

「好きだよ」

意外とあっさりと出てしまったようだ。言った本人の顔も驚いている。

だが、またまた覚悟を決めたようだ。

「楯無のことが好きだ。なんていったって可愛いしな」

「……」

恐る恐る、と言った様子だろうか。したから宙の顔を見上げるようにして、顔をあげた。

急な宙の告白に、あの楯無でも驚いているようだ。

それに…少しだけだが…涙目である。

(あー、安心させてこそ…男だよな)

なんか変な持論ではあるが、間違えではない。

「惚れた弱みってやつだ」

そう言った宙は、やや強引に楯無の体を引き寄せ…口付けを交わす。

小さく、やわらかく、女の子らしい体に…甘く、やわらかく、なんだかとてもせつない感じの唇。

そのどれもが…宙にとっては初めてでうれしく思い…

『楯無でよかった』

そう思えた。

余談だが、この次の日。宙と会長のキスシーンが学校内新聞の一面を飾り…問題が大量に発生した。

「宙！ これはどういうことなのかしら？」

一番最初に突撃してきたのは優だった、無論意味がわからないのでしばらく理由を聞いた後…

「あ、ちょ、まて、これはだなあ……」

言い訳、男らしくないが言い訳。

「宙君……幸せにね」

いつの間にか来ていた智花に優への説明を妨げられた。
待て待て、はじめてみたんだけど……智花の黒い所……
そんな感じで驚きながらも……

「いや、これは、違……」

「何が違うのかしら？」

だれぞ、教えてくれないか？　これは何と言う……修羅場なんだ
い？

後から楯無に話しかけられ、前方からは智花と優のコンビ。

というかここ俺の部屋なんですけど……というか目と目の間で発
生している、バチバチ、したものはなんでしょうか？

人生初(?)となる修羅場にどうしていいのか良くわからない宙
は、ただ黙っていた。

「ふーん」

「早く説明してくれないかしら？」

「宙様……生涯の伴侶を見つけたのですね」

しかし、修羅場は宙の望む望まないにかかわらず加速していく。

「あら、宙。おはよう」

「ん……ああ、おはよう楯無」

……気付いたときすでに遅し、普通に楯無に挨拶されたためこちらも普通に返してもらった。

IFストーリー 宙×楯無 修正中（後書き）

どーでした？

相当、突貫作業でしたのでおかしいところがあったかもしれませんが。そう言う場合は、どんな感想のほうに書き込んでください。それを次のIFを書くときに参考にしたいと思います。

また、三人称視点どうでしたか？

ほかのIFもこれでいいのかな？ と考えております。

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

次のIFのネタが思いつかない：orz

IFストーリー 智花×宙（前書き）

宙、出番多くね？ そこは主人公クオリティw

さて、こんなにも時間がかかった言い訳として…宿題が…orz、テストの後処理が…orz、動画がおもしろすぎてはまってしまい…orz、趣味に時間をとられて…orzです。

ごめんなさい。こんな文才のない自分にとって行進速度が唯一のとりえなのに……スイマセン。

IFストーリー 智花×宙

IFストーリー

ここはIS学園、インフィニット・ストラトス ISと呼ばれる深宇宙探索用のパワードスーツを日本が全世界から圧力をかけられて作らされた学園。…これであつてるよね？

で、このIS学園の中の一年三組の外で一人の男が待っていた。

「なんか…デジャブ…」

なんでだろうか？ と宙は考えていた。

(二時間…：駅前…：会長…：)

そんなキーワードが宙の頭の中に、ふと浮かんだのはどうしてだろうか？

しかし、宙にはそんな事を考えている暇はなかった。すぐに今まで考えて言うことを中止して、自己紹介の事を考え始めた。

(なんていえば良いのかな？ 俺は始めましてなんだけど…)

ちなみにこの世界の時間系列は宙の最初の専用機をもらったあとです。ファースト・シフトしたあたりかな？ 正確に言うと第七話あたり…

「そういえば…智花は何組なんだろう？」

昨日の夜のことを思い出していた。

宙は智花と久しぶりに会ったのだが、なぜだが…：逃げられた。

一応、宙と付き合っているのだが…

「一夏も何組なんだろうか？ できれば同じクラスのほうがうれし

いけど…」

人はこれをフラグと言う。（フラグうんぬんの前に一夏は一組だ
って言うことを知らない）

「では入ってきてください」

名前も知らない先生（このIFだけのモブ…）が宙に教室の中に
いは入れ、と促したので…黙って従い教室の中に入る。

『キャーーーーー』

さて、これがフラグ回収と言うものだろうか見渡す限りの…女子
！ 女子！ 女子！

男子などいないクラスを見て…頭を抑えなくなったが一応自己紹
介をする宙。

「はじめまして…神代 宙と言います。よ、よろしく…」

若干引き気味だったのか、緊張してたのか、それは良くわからな
いが、いつもの宙らしくなかった。

その理由は大体わかるだろう…智花と優がいたからだ。

最初は智花しか見えなかったので良かったのだが…途中で発見
した優に苦笑いが浮かぶ。

「やっと来たー」

「やったね、やったね、これもクラス代表のおかげだね」

「やっぱりカッコイイな～イケメンだよイケメン」

「はいはい、私語は慎んでください。それじゃあ、宙君は……」

女子達の話し声を先生がすぐにとめて、席を探し始める。

「あそこで良いよね？」

そう言って指差したのは……智花の席の隣。確かにうれしかったが……その席の後には優がいる。

うれしいのかうれしくないのか良くわからない。そんなことを思いながらも……めんどくさいことは勘弁だったので、顔には出さない宙だった。

しかし、そんな努力むなしく……勘の良い優にはそれを気づかれ……

「あとで……」

座った瞬間にそんなことを言われた。背筋が一瞬だけビクッと震える。

智花は智花でうれしそうにこっちを見て笑っている。

（また、うれしいかうれしくないかわからん）

宙の顔は引きつった笑みを浮かべていた。

こうして、無事（？）に朝のHRは終わった。

そして、一時間目。それはISの基礎知識の授業だった。

本当に基礎的なことだったので、聞くこともなく……授業を終える宙。

入学したのが遅かったのだが、なんとか「千冬さんに怒られたくない」の一身で必死に勉強した甲斐があったというものだ。
いまや伝説となっている『一夏、全部わかりません事件』の二の舞にならなくてよかった、と本当に思っている。

「宙君、わかった？」

智花がそう聞いてくるが…「ああ」と応え、笑ってみせる。
今までは宙が教える立場にいたので智花は少しだけ張り切っているようだ。

そんな様子を見て宙はほほえましく思い、また笑って見せた。
（委員長も自ら立候補したと言うし……楽しそうだし……）
最後に手を智花の頭に置き、ぽんぽん、と軽く叩いた。

「もう」

そう言って、ぷくう、と頬を膨らませているが、若干うれしそうだった。

「そういえば…お前なんであのとき逃げたんだ？」

昨日の夜のことを思い出して、そう言ったようだ。

昨日の夜、宙は試験の興奮が忘れられず眠れずにいたので、気分転換をしようと外を走っていたのだが……走り終わった後、智花が寮の前になぜかいたので、話しかけたら逃げられたのだ。

とにかく、意味がわからなかったなので今聞いておこうと聞いてみた。

「あ、その…ごめん」

あまり言いたくはないのだろう。そんな様子を感じたので、宙は深追いせずもう一つの聞きたいことを口に出した。

「さっき、このクラスの生徒が…『やっと来たー』とか何とかいったけど…どういう意味だ？」

「それはね、宙君の試験のあとクラス代表の間でジャンケン大会があったの…そこで勝ったクラスに宙君が…」

（おいおい、生徒を賭けに使うなよ）

「何でも生徒会長が一番関わっているらしいよ？」

「はぁ……」

本気でその生徒会長とやらを殴りたくなってきているようだ。いつの間にか宙は智花の死角で拳を握っていた。

しかし、そんなことを思っているのも智花と同じクラスになっていたことは素直にうれしかった宙であった。

「楽しそうね、宙」

不意に話しかけたのは優だ。

「ああ、お前が出てこなければ…幸せだったのかもな」

これが小、中学生と同じ学校だった反動だ。二人ともこれが冗談だとわかっているし、スキンシップみたいなものだった。

「あのときの恩を忘れたのかしら？」

「結果的に同じ学校になったただけだ。お前に恩を売った覚えはない」

あの時——それは、宙が智花と別れようとしたことだった。理由として智花はIS学園に志望していたので、遠距離と言うかなかなか会えなくなるぐらいなら別れたほうが良いだろうと思ったから。宙も智花もそれを望んでいなかったが、負担になるぐらいなら、と宙は考えて実行しようと思ったのだが……どこからそのことを知ったのかは知らないが、優に止められたのだ。

『馬っ鹿じゃないの？ 別に良いじゃない、二人とも望んでいないんだし…』

『俺は藍越、あいつはISだ。付き合っていることに利点はない』

『利点、で決めるの？ 最低ね』

『仕方がない。このほうがためになる』

『あなたの、ね。智花は望んでいないし、ためにはならないわよ。それとも…嫌いになったの？』

『そんなわけあるか………』

『あの事を気にしているのね。まったく……そう言うことだったら、まだ智花の近くにいたほうが良いわ』

『俺にとっては大きな問題なんだけどな…』

『だからこそよ。とにかく、智花のそばにいればいつかわかるわよ』

『別れるな、ね。こっちも覚悟を決めてきているのだが……まあ、良いか』

こんな感じに説得されたのを思い出す。
多少なりとも覚悟はあったはずなのだが、良い感じに説得されてしまったのだ。

智花は宙と優の会話を聞いて、不思議そうな表情をしていた。

「まったく……お前は本当にめんどくさいやつだな」

「腐れ縁と言うやつよ。気にしたら負け」

「ああ、嫌だ嫌だ」

首を横に振りながら、軽くため息をつく。

（こいつは本当に何を考えているのかわからない）

多少の恐怖もあるが、さすがは幼馴染だろう。そこまで嫌いにならないのを不思議と思う宙であった。

依然としてこの会話の意味、意図が理解できていない智花は、二人の顔を交互に見合わせていた。

そして、昼休み。昼食の時間である。

午前中の授業を難なく終わらせた宙と智花、そして優は三人で仲

良く席についていた。

ちなみに、宙はカツ丼。智花はうどん。優はパスタ。麺類多いな……三人は楽しく談笑していた。

「宙君、どうだった？」

「授業もついていけたし、今のところ問題はないかな」

「あんた中学の三年のときに急に成績上がったからね」

「ああ、そうだった？」

ケンカをしまくっていた宙が藍越学園にはいてるはずないだろう。そんなに現実と言うのは甘くできていない。あの一夏でさえ中学生のときは頭が良かったものだ。

就職率が良い学校は倍率も高くなるし……とそんなところへ入れた宙の頭の良さは窺えるだろう。

しかし……あの一夏が教師を目指していたとは……信じられないこともあるものだ。

ちなみに宙は両親に負担をかけたくなかったからである。まあ、それを言うなら一夏も千冬に負担をかけたくなかったただけなのだが……

「うん、すぐに私の成績を超えたし……」

実際、この学園に入れた二人の成績は……言わなくてもわかるであろう。そんな二人を短期間で超えたのは……

「反省した結果だよ。智花たちに助けられたしね」

ずいぶんとくらしい話であるが、今となっては過去の話。三人とも

気軽に放せるようになっていた。

宙もこの空気は好きであった。へんな過去を持つものとしては過去話ほどこいやなものはない。

しかし、この二人は本当に優しいやつだ。空気をきちんと読んでくれるし、深追いはしない。実に気軽なのだ。

「それに…妹のためであつたしね」

アハハ、と笑いながら応えた。

勉強したのは確かに妹のためでもあつた。その辺は近々本編で語るでしょう。

「シスコンね…」

「いや、違うよ。ただの罪滅ぼしさ」

「うん、絶対宙君は違う」

二人しての反撃に優は苦笑を浮かべ、パスタを食べる。

宙と智花も食べ始める。その後も楽しく(?)談笑をして昼休みは終わった。

「やっと、終わった」

午後の最後の授業を終えた宙はその瞬間に両腕を高々と上げ体を伸ばした。

イスに座り続けていたので体が固まっているのをほぐすと、快感に近いものがある。

実際に優も同じことをしていた。智花はしてはいないが：

「じゃあ、一緒に帰ろう宙君。優も」

「私はパスこれからしないといけないことがあるからね」

「しないといけないことってなんだよ」

「あんたには秘密」

智花の誘いを断ると言うことは優にとってあまりなかったことなので宙は不思議に思ったが、深追いすることはないだろうと思い何も言わなかった。

「智花、ちょっときてくれない」

そう言って手招きをする優、それに智花も従って近づいた。

（コソコソコソ……寮に帰るまでに時間を稼ぎなさい……コソコソコソ）

智花の顔が一気に赤く染まった。

宙はそのことに気にはなったが、これも深追いすることはないだろう。

「じゃあ、宙君……一緒に帰ろう？」

さつきとは違い、遠慮がちに誘ってきた智花。
宙はその様子に少しだけ戸惑いを見せたが：

「ああ、一緒に帰ろうか」

笑顔で返した。

「少しだけ…遠回りして良かな？」

「ん、別に良いよ。で？ どこに行くんだ？」

「ちょっと、その辺を……」

「了解」と

そして、二人でIS学園を回ること…

未だに良くわからない広大な敷地を持つ学園を案内してもらいながら、ここでも談笑をし始める二人。あきないやつらだ…

「ここがアリーナです」

「知ってるけど…」

「あう、ご…ごめんなさい」

さつきからこんな感じだった。確かに宙の知らない施設も教えてもらった。図書館など、しかし智花はあせているのか、知っているはずの施設まで教えてくる始末だ。確かに役に立とうとしている姿勢はとても宙にとってうれしかったが…

「落ち着けよ、何してんだ？」

逆に心配に鳴ってきたので、落ち着くように促したのだが…

「あ、あ、あれが寮」

（時間を……少しでも…）

「……………」

もう何も言うまい、と言わんばかりに智花の肩に手を置く。その行動に智花も悟ったのか急に黙った。

（簡単に落ち着くことができれば……かなり優秀なのに…）なんとなく残念に思う宙であった。

ピピピッ

何のひねりもない黒電話の着メロがなった。この音は智花の携帯の音だ。

二人して気まづくなっていたので、非常に空気を読んでいる呼び出し鈴に感謝の意を告げる二人。

「もしもし」

すぐに携帯に出る智花。

『ふふっ、準備完了よ。早く寮に来てちょうだい』

「ゆ、優！？　どうやつ…」

（いつも肝心なことを教えてくれない…）

どうやらすぐに切られたようだ。あわてているところから容易に予想がついた。

「智花……」

宙はその様子を哀れに思ったようだ。

（智花も俺と同じようにあいつ（優）に振り回されている一人なんだな…）

妙に親近感がわく宙であった。

「さてと…ここまで来たことだし、帰ろうか」

「うん、そうだね」

あえて、優の言ったことを言わない智花。

宙も本人が肯定したので寮に戻ることにした。裏工作を知らずに…まだ説明が終わっていない施設がいろいろとあるようだが、今はこれでよかった。

実際に優に言ったことも気になるし、落ち着いていない智花にこれ以上負担をかけるのも…、と思っている宙。

それと、優にやったことに少しだけ困ったし、これ以上迷惑をかけるのも…、と考えている智花。

どっちもどっちだが、優の掌で踊っていると言うことだけは忘れてはならない。

宙は自分の部屋に来ていた。しかし、そこには……『織斑 一夏』のネームプレートが…

ここまでは良いだろう。そう、ここまでは良かった…しかしそのネームプレートの下にあるべき宙の名前はなく、あったのは『篠ノ之 箒』のネームプレート。

「あれ？ これはどういうことなんだ？」

突然の部屋の喪失に驚く宙。しかも、丁寧なことに扉の前には宙の私物が……

智花もそれを見てなぜかため息をつく。

「あっ、遅かったわね。今日からあなたの部屋はこっちよ」

そう言って案内されたのは……『神代 宙』のネームプレートの下に『雅 智花』の名前がある部屋。

「はぁ？ 待て待て待て」

「嫌なの？」

なぜか自分のことじゃないのに不服そうな表情をとる優、それに對して…

「状況を説明しろ」

とにかく、わけのわからない宙。

「織斑君の部屋に箒ちゃんが入って、智花の部屋にあんたが入りました。説明終了」

物凄く簡単な説明だった。無論、宙も腹を立ててはいるが…それ以上に気になったのは優のツヤツヤとした表情だった。

「おい、何でそんなにおもしろそうな顔してんだよ」

「知らな〜い」

そして、はしって逃げた優。

宙は頬の筋肉が引きつるのを確認しながら…一夏の携帯に連絡を入れる。

『もしもし、宙だ』

『宙か、用件はわかってる』

『話が早くて助かるよ。山田先生だったな?』

『ああ』

『これは……OHANASIの必要性があると見た』

『OHANASIだな』

『『ふふふ』』

最後に二人で黒く笑い、通話を終了する。

その様子を見ていたほかの女子生徒たち（智花も含む）は普通に

ガクブルっていたという。

そして、部屋の中に……と言っても数時間前の話だが……

とにかく、明日の山田先生にOHANASIができたのでそのことについて考えながらも、読書をしていた。

ちなみにその本はの名前は『f a t e / z e r o』宙はこのランサーが地味に好きだったりする。

（俺のISで槍は使えないのかな？）

またまた、ちなみにだが…智花は風呂に行っている。

まだ男の大浴場の使用は許可されていないので、この部屋のシャワーを使ったのだが……宙だって男の子。

言いたい事はわかるだろう？ 好きな女の子、と言うか彼女が使ったシャワー（ry

読書をしているのも自らの愚息を静め（ry

あまり興奮しな（ry

しかし、逆に本の内容が熱すぎて…落ち着k（ry

（いかん……いかんぞ……）

どこのACですか、フロム脳か、コジマ汚染の影響なのか、良くわからん。とにかくLRということだけはわかっているのだが…

（うん、静ま…）

「ただいま」

しかし、宙の苦悩を知らない智花は無常にも普通に部屋に帰って

来た。

「お、お帰り…」

(じよ、冗談じゃ…)

またネタかよ。思わず突っ込んでしまうほど本気であせっている
宙、智花は何も知らずに無防備にくつろぐ。

まあ、確かに……この状況は男にとっては厄介だろう。
そう言えば言い忘れていたが…

(濡れ髪は…まずい………うなじは……まずい)

言いたい事はわかったであろうことにする。濡れ髪f (ry
読書に集中しようとする宙だが、如何せん…できていない。

そんな宙の目の前にいる智花はベットにすわり、髪を解かして
いた。

(気持ちよかったな…えへへ)

なんとも緊張感のないお方である。近くにいる宙があんなこと
なっているとは知らずに…

「な、何時かな？」

いつにもなく、よそよそしい態度で腕時計を確認する宙。

もちろん、いつものG-SHOCK。使用理由は壊れないから、
それと百人殴っても大丈夫♪ そんな武器だから…

時計は十時を指していたので…

「お、俺は寝る……お休み」

布団をかぶり、同時に煩惱も退散させようとした。
が…すつ、と入ってくる人の体温が一つ。

「うおおいしい、な、な、な、何を…」

この役目は主に智花の役目ではないだろうか？

「え、あ、あ、あの、その…一緒に」

何だこの光景は…テンパリまくりが二人揃うとなかなかシユールな光景である。

（本気でまずいって）

（積極的に…積極的に…）

宙はヘタレ、智花は誰かの入知恵だろう。

「い、い、一緒に？」

「あ、うん、い、一緒に…ダメ？」

この視線に耐えうるスキルを持っていない宙は撃沈した。断ることもせず、ただただ黙って布団の中にもぐるのであった。

（あかん…ゴールしたら、あかん……学生なのにゴールインするのは…あかん）

もうダメ人間となった宙。仕方がない、そう仕方がない。これ以上は危険と判断したため強制的に寝ようとした。

「ねえ、宙君」

「な、何だ？」

たずねるような口調だった。それと、少しだけ不安そうな声だった。

「わ、私って…」

「うん」

これは真剣に応えるべきと思ったんだろう、宙はいつもの口調になっていた。

智花もその口調を聞いて、落ち着き始めた。

「魅力ないかな？」

「ぶっ」

あまりの突発的過ぎる告白に、戸惑いを隠しきれずふきだした宙。

「うう」

言った智花本人も当然のごとく恥ずかしいのだろうか、耳まで真っ赤に染まっている。

（ここでも…デジャブ…）

「いや、ないわけではない」

「でも、襲ってこないし…」

「言ってて、恥ずかしくならないのか？ それ…」

言われて初めて智花はそのことに気付く。さらに赤く染める。

（そうか…あいつの言っていたことは、案外あたっているかな…直接本人に聞き出してみるのも…）

「なあ、お前…俺のことどう思う？」

「え！？ それは…」

「俺としては…いじめを助けて恩を売ったようなものだから………
…何というか」

ずっと悩んでいたことだった。好きかどうかの問題ではなく、好意を擦り付けた感しか未だにないのだ。いじめという状況の中だった。正直助ける気はなかったので、いたたまれない感じがしてたまらない。

これが、あまりにもひどく…深刻な問題だった。

「…宙君」

生唾を飲む音が聞こえた。

「……………うん」

「私は…そのことがあって好きになったわけじゃないよ」

「え？」

宙にとって、予想外の答えだった。

「わ、私はね。あのあとに宙君を……その……ん！」

（あー、無理。本気で可愛いやこいつ）

無理やり唇を奪っていた。ファーストキスの味はレモンの味と誰が言ったのだろうか……

（智花の味に決まっているだろうがっ!!）

どんな味だよ……一度で良いから聞いてみたいものである。
無理やりだったのにもかかわらず、智花はそれを受け止めた。それどころか……以外に積極的であった。

「はぁ……はぁ……はぁ……智花……好きだ」

「う……うん……はぁ……私も」

息が続かず、一度離れたが……またすぐにくつつきあう。

（これ以上はR18指定の描写が合ったりなかったりするの……すいません。事実として熱い夜だったのは……秘密にしておきましょう）

後日談……さて、フラグを回収しておこうと思う。

一夏と宙がなぜ同じ部屋からはずされたかと言うと……

『こんにちは、山田先生』

『夏目さんでしたっけ？ こんにちは』

『今日は相談が会ってきました』

『それは……いったい何ですか？』

『織斑君と宙についての話が合ってきたんですよ』

『確か小学校からの友達でしたっけ？ 仲が良いのは見てて良くわかりますね』

『先生、それは間違っていますよ。仲が良いんじゃないかって……良いくいんですが………できているんですよ』

『ええッ！？ それは本当ですか!!』

『はい確かです。これが証拠です』

完全なる合成なのだが……そこはこの手のお話に弱いことに定評のある山田先生。良く聞けばわかることなのに……残念な結果となっていました。

『ま、まさか……一夏君が受けて宙君が攻めだとは……』

『ということで部屋割り変えてもかまいませんよね？』

『はい、これならさすがに大丈夫だと思います。後日きちんと指導をしておくことにしますね』

『ありがとうございます』

こうして……一夏と宙は離れることになったのである。

ちなみに、山田先生の不注意でこの話が漏れ……学校中に広まり……腐女子共が騒ぎに騒いだと言う。

また、一夏は箒、セシリアの共同戦線の元……あの世に召され……宙

は智花に誤解され、それを解くのに半月はかかったという。その件に関しては優にとって予想外だったらしく、親身に解決まで手伝ってくれた。

これにて一件落着（？）で波乱の一学期は過ぎたのであった。

IFストーリー 智花×宙（後書き）

次回もIFでお送りします。

簪×宙です。

以外に難しいのでは？

ちなみに今回：8000字ぐらいあります。

前回よりも2000多い！！

疲れました。

感想お待ちしております。もしかしたら誤字脱字があるかも：

書いていて気付いたけど：同じ展開構成。作者は馬鹿です。プロットの時点で気付けよ。

ネタもマニアックなものばかり：変態会社の神ゲーです。それと：鍵かな？

ここから先は、作者の個人的なだべりになります。プロット完成後、友達に見せると：

『後日談がメインじゃね』

思いつきり落ち込みました。

とにかく次回もできるだけ早く投稿したいと思っています

IFストーリー 簪×宙 part 1 (前書き)

俺は何に影響を受けたのだろうか？

だが、後悔はしていない。していないはずだ。

もちpart 2あります。お楽しみにww

ではIFストーリーです、どうぞ！！

IFストーリー 簪×宙 part 1

IFストーリー

「はっ…はっ…はっ…」

更識 簪は次の授業が移動教室のため、移動していた。

そんなに遠くはないが、自らの機体《打鉄・弍型》を作るのに集中してしまい…時間を見過ごしてしまったのだ。

（私の…馬鹿）

自嘲してもいまさらだ。時間的には間に合うが、体力的には授業を受けることができるか、できないかの瀬戸際になりそうだった。

「うわっ」

「きゃっ」

授業の開始が迫って、ほとんどの生徒が教室内にいるはずなのだが…簪は誰かとぶつかってしまった。盛大に二人して尻餅をついた。二人とも状況を把握するためなのか、相手よりもまず自分の体を見ている。

女の子というのには硬すぎる体だったので、一瞬『織斑一夏』の名前が浮かんでしまい、ムッ、とする。

最初に、ごめん、と言うべきなのにもかかわらず。

「なに…してるの」

そう言ってしまった。

簪は確かに『織斑一夏』のことがにくかったが、さすがにこれは

ないだろうと思い：すぐに訂正しようとしたのだが：

「あー、大丈夫か？」

いつの間にか立っていたぶつかった人から手を差し出されていた。声は男のものだったので確実に織斑一夏だと思い、自分から立とうと顔を上げたところ：

（う、うそ：織斑一夏じゃない？）

知らない顔がそこにあった。

記憶の片隅には男子がもう一人増えた、と言うことは覚えていたが、こんなところで出会ったしまうとは思わなかった。

一夏とはまた違ったタイプだと言うことは小耳に挟んでいた簪。聞いた話では：

- ・やさしい：らしい
- ・ワイルド：らしい
- ・強い：らしい　と全体的な評価がいまいちだった人だ。

「本当に大丈夫か？」

いつまでも差し出した手を握らないので、不審に思ったのかもう一度聞いてきた。

「ご、ごめんなさい」

それに応えるように手をとった簪。

宙は握った手を、ぐっ、と引き上げた。

「きゃっ」

簪は驚いた声を上げた。そして、勢いに負けてしまい…宙の胸の中に…

「おわっ」

「んんっ!？」

両者とも予想外の展開だったのであろう。すぐに飛ぶように離れた。

「すまん」

「ごめんなさい」

宙はともかく、簪のほうは謝ってばかりだ。

そんな簪はすぐに地面を見て、落し物がないかを確認する。

本当に時間がないのだ。時間さえあれば、丁寧には謝っているのに

……

「一つだけ質問して良いか？」

そんな簪の前に空気が読めない男が一人。

「…はい」

時間はないが、最低限のことだと思った簪だったのだが…

「サンキュー、それで一組ってどこにあるんだ？」

答える気を失っても仕方がない、質問だった。

この学校は確かに広いが、そんなに難しい構造ではないのだ。
ぶっちゃけ、玄関からすぐの右が一組で後はそれに続くようにな
らんでいる、そんな作り。

軽く呆れ気味になるが…一応、答えることにした。

「…あっち」

一組の方向を指を刺して示す。

初対面の人物にあまりしゃべれる簪ではなかったので、今はこん
なところが限界であった。

そんな簪の限界にも、ほとんど気にしなかった宙は…

「ありがとな」

それだけを言って、走り去っていった。良くも悪くも風のように…

「あつ、名前聞いていなかった…」

最後に簪が言った言葉はおしくも宙が走り去ったあとだった。
しかし、本当に大切なことを忘れてもらっては困る。

『キーンコーンカーンコーン』

今の彼女にとっては絶望に等しいチャイムだった。今の一件で遅
れていることを忘れていた簪は、すぐにチャイムを聞いて走り出す。
授業にも遅れたせいかな…宙への好感度は最悪なようだ。

ちなみに、宙はギリギリで間に合っていたようだ。千冬の出席簿
アタックだけは避けられなかったが…

そして時は昼休み。場所は屋上。

いつもどおり、ここは騒がしいのだが…今は授業後、誰もいない。数人が食事を取っている光景が目につくが、どれもおとなしい生徒ばかりだ。

「良かった」

転校したてである宙は最近の質問攻めにうんざりしていたところである。

そんな宙がこの学校に来て最初に見つけたのが…この理想郷だ。屋上に上がるドアの死角となる場所にベンチがあるのだ。日当たりは悪い・風は強い、と残念なところが多いが…誰も使用しないので見つかりにくい。

まさに、理想郷。聖域。これ以上の場所はないぐらいだ。そんなところに、宙は寝転び…静かなうちに眠る。

「ふふっ…」

久しぶりにおにぎりを買ひ、久しぶりに屋上でご飯を食べようと

思った簪は一人屋上を目指していた。

目的の場所があるのだ、誰も近づかないので落ち着ける場所。

別に一人が好きだと言うわけではない。が、しかし…一人ほど良いものはないと考えているのも事実だった。

(…一人だと…作業もはかどる…)

そして、屋上の扉を開け放ち…ベンチの前へ…

「な…なんで…」

「…ZZZ」

ベンチに横たわって寝ている人物、それは…あの人物だった。簪を授業に遅らせた張本人は、目の前で思いつき寝ている。完全なる無防備と言うやつだ。

(一発だけ…一発だけ…叩いても…)

「んん…」

起きた。宙は目の前で起きた。簪の目の前で起きた。

「……………」

背を、ぐー、と伸ばして気持ちよさそうに緊張をとき、目を、ゴシゴシ、とこする。

「ん？」

不意に宙は顔を上げた。

「……………」

「……………」

簪と宙はお互いに目をあわせ、沈黙を作る。

「あ」

そして、先に口に出したのは宙だった。

「あのときの……誰だっけ？」

当然の答えだった。

なぜなら、あの時に二人ともお互いの名前を語っていないのだから……

「それは……こっちのセリフ」

「ありゃ？ 俺って結構知っている人多いと思ったんだけどな」

そりゃ、男でISを使える二人のうち一人なのだから……知らない人のほうが少ないはず。

その知らない人のうちに……簪はいた。

「まあ、いいか……えと、俺の名前は………」

固まった。そう、固まったのだ。その理由は簪にはわからなかった。

なぜなら……簪の後には……女子の群れが……

「きゃー、見つけたわ」

「ここにいたのね」

「やっただよ、やっど…」

「ねえねえ、一つだけ聞いても良いかな？」

ピクピク、と頬を引きつらせてた宙は…

「すまん、また…今度」

微笑を浮かべながら宙はそう言った。

二度と会いたくはなかったが…コク、とうなづいてしまう。そんなことをさせるような、何か、があったのだ。

なぜだろう、そう考えている途中で、宙は走り去って行った。

その様子を目だけで追いながら、ベンチに座り…簪は粗食をゆっくりとはじめるのであった。

「しかし、あいつ…誰なんだろうか？ 結局お礼いえてないんだけど…」

こちらは現在進行形で走っている宙。

もちろん、追いかけてくる女子の集団から逃げるためだった。

しかし、どんなに走ったとしてもあの集団が振り切れることはない。

それどころか…一歩的に増えている気がする。

（なぜだ？ これはいったい…どうしたらこうなるんだ？）

その答えは約十分後…一応聖域を見つけたのでそこで入り休んだ。
（あれか？ 一夏の興味がなくなったときにやってきた俺は…調子の良いおもちやってやつなのか？ それに…俺はリ●クか？
そしてあいつらはフ●ントムなのか？）

「勘弁してくれよ…マスターソードあっても勝てる気がしないつうの」

とにかく、宙は聖域（建物の死角）を見つけて逃げ込むのであった。

そして一日目は終わる。ふたりとも…お互いの名前は聞ききれなかった。

次に二日目に入る。

「あいつは、どこだ？」

「え？ だれのこと？」

「私のことでしょ？」

「なに期待してんのよ。私に決まっているじゃない」
「結局誰なの？」

廊下であいつ——あの娘を見つけないといけないのだ。さすがに今日ぐらいはお礼が言いたい。

そう考えていたのだが：いつの間にか囲まれていた。

「「誰なの？」」

「早く選んでよ」

（なにを選べと？）

困惑しながらも、ISを一瞬だけ展開し女子どもの頭を飛び越える。

校則違反だが、仕方がない。そう言い聞かせて使用した。

（やったことに後悔はありません……たとえ千冬さんに怒られたとしても……後悔は……していない）

しかし……結局俺は女子に邪魔されるような気がする。それに名前を聞いていないし……

『二度あることは三度ある』『三度目の正直』はたして宙はどっちに転がるのやら……

「あっ……」

へんなことを考えていたら、宙の目の前に簪が現れた。と言うか居た。

（ラッキー♪）

「山田センセー、神代君が……」

（ギャーッス）

それは…まずい…さすがに無理無理。いくらなんでも千冬さんの地獄の体罰と言う名の補修は受けたくない。

後悔はしていない、といったわりには…この状態だ。

「えっ!？ ……ちょっ」

宙は目的の少女を強引に引っ張り、この場から離脱した。
傍から見れば拉致にしか見えないのだが…

「はあ…はあ…」

宙は全力で息をしていた。もちろん肩で、だ。
簪はその手をここに着いた時に離されていたようで、掴まれていた手首をさすりながら宙をにらみつけていた。

「どうして…？」

そんな簪の口から出た言葉だ。

「どうしてって……お礼を……」

「…?。」

また宙が止まったので、またか、と後を売りかえってみるが、何もない。

それに……お礼、と言う言葉が頭の中に残ったままだった。

（私は…授業に遅れたのに…）

「ありがとう」

不意にそういわれた。

宙の顔を急いで振り返り簪は見る。

「いやー、やっと言えたよ。良かった、良かった」

宙は安堵したような表情だった。

「急に連れ出したりして、すまん」

お礼を言ったり、謝ったり……忙しい人物だとこのとき簪は思った。

いつの間にか…自分が後れていたこともどうでもよくなっていた。

「おお、そうだ。自己紹介がまだだったな…神代 宙だ。よろしく」

そう言って宙は手を差し出した。

簪は一瞬だけ躊躇したが、その手を握り返し…

「簪…更識 簪」

それだけ言って、握っていた手を離して教室へと帰ろうとする簪。
（あれ？　　そういえば…何かあったような………あつ）

簪は先生に呼ばれていたことを完全に忘れていた。それを思い出して：今さっき知った宙のことを思いっきり恨むのであった。

さて、三日目。

二日目で完璧に簪に恨まれた宙は、またあの理想郷で寝ていた。そんな宙の理想郷に近づく人影が一人。更識 簪である。

理由はもちろん『ゆっくり』したかったからである。

昨日は宙に振り回され先生に怒られたので、今日ぐらいはゆっくりしながら集中して《打鉄・式式》を作ってたのである。

しかし、残念なことだが：簪が好きなあの場所も死角ということ忘れてはならない。

「え：？」

この場所：屋上へと上がる扉の近くにあるため、ある程度接近した状態でしか：そのベンチを見ることができないのだ。

「んん」

そして、簪からしてみれば余りあいたくなかった相手は：またまた、運の悪い事に目の前で起きた。

「更識簪だったよね？」

寝起きとは思えないほどのはっきりとした口調であった。

それもそのはず、宙はとても寝起きが良いのだ。生まれてこの方二度寝したことはないらしい。

いきなりの呼び捨てに簪も、ムツ、としたが…これ以上関わりたくなかったので、その場から離れようとしたのだが…

「お前もここが好きなんだろう？ 座れよ」

そう言って宙は座りなおし、その隣を、ポンポン、と叩いた。

簪は黙っていたが、ふとため息をつき、呆れたような表情を見せた。

（私がここに来るのを…なんでしってるの？）

そんな疑問もあったが、呆れてしまったのだ。宙のそのうれしそうな表情に。

「いやー、大人数に囲まれるのはいやなんだけど、最近話相手がいなくてね」

（それは…ううん、だめ）

危うく同情しかけてしまった。宙の言うことは本当のことだったし、かわいそうであったが…何度も何度も邪魔されてばかりでは同情する価値がない。

「別に…」

どこぞの人ではないが、それだけ言ってその場から立ち去った。

「ふむ、つれないね。お姉さん」

簪が立ち去ったあとに、出てきた女子生徒に向かってそう言った。更識簪と同じ色の髪を持つが、内側ではなく外側にはねている髪型。出るところはきちんと出ているメリハリのある体を持つ彼女の名は…更識 楯無。

更識の名前の通り、簪の姉妹であり姉である。

「大丈夫大丈夫、宙君はそのまま良いわよ」

「女狐、ね。俺は彼女に興味があるだけで手伝っているんだ。お前、これがばれたら…あいつは立ち直れなくなるぞ。俺よりも酷い状況になる」

「大丈夫だと思うよ」

少しだけ幼い感じが残るかわいらしい顔、ショートカットの髪型で、色素の薄い髪色の美少女…智花だ。

「智花、お前もお人よしの一人だよな」

髪を、ぼりぼり、とかいて智花に視線を向ける。

彼女もこの計画？ 作戦？ の参加している一人だ。正直な話、宙の近くにいる楯無に言いくるめられただけなのだ。

「はあ、まあ…しゃあない」

「そんなふうに簡単に割り切れるところは…ほれちゃいそうね」

「生徒会長様にそんなことを言われて恐悦至極ですよ」

「フフッ、顔とセリフがあっていないよ。宙君」

楽しそうな会話はこれで終わった。三人は：ただ、楯無の目的のために動く。

しかし、宙は知らない。

無知というわけではないが、人の気持ちは誰にもわからないものなのだ。

IFストーリー 簪×宙 part 1 (後書き)

冒頭に戻りますが・・・俺は何に影響されたのだろうか？

鍵か？ キーか？ k●yなのか？

実際は、こんなこと考えていなかったのに・・・いつの間にかこんなことに・・・

『後悔はしていない』はず・・・OTL

ですが、まあ個人的に納得する範囲で展開させますんで、気に入らない人が多数出るかもしれませんが・・・がんばります。

とにかく、このIF絶対に完結させてやる！！

こうなるような感じはあったのでフラグ立てておいて良かった・・・
本当なら一話完結したかったなゝ

IFストーリー 簪×宙 peat2 (前書き)

まずは一言言わせください、遅くなってスイマセンでした。

そして空牙刹那様、ご希望通りかけなくてすいませんでした。暴走した結果・・・本当にごめんなさい。意外と難しいね・・・orz

やっと投稿できました。

ネタがね、思いつかなくてね、何度も挫折したよ・・・

IFストーリー 簪×宙 peat2

IFストーリー 簪×宙

宙は簪のことが好きではない。

会長の頼みごとだから彼女と接しているだけだ。

そこには一つの感情以外は存在しない。

『心配』と言えは言いすぎだが、『興味』と言うのもまた違う。
そんな感情だ。

自分の過去、彼女の現在いる場所はあまりにも近すぎる。

「結局……」

（何をしたいんだ？）

自分で自分のしていることがわからなくなった。

彼女を救いたい？ 彼女が気になる？

（馬鹿馬鹿しいな……）

宙はそう思っていた。だが、その足は確実に彼女の元へと向かっている。

（どうして？）

宙はいつもいつも、こうして簪の目の前に現れる。

「どした？ さっきからこっちばかり見て」

おいしそうに私と同じ『かき揚げうどん』をすすっている彼は、私の視線に気付きそう言ってきた。

「自惚れ……」

「ふーん」

簪の悪態にも何の反応を見せなかった中はまた、うどんをすすする。

「それよりさ、あの事考えてくれた？」

「だから……いや……」

「だから、考えてくれて言ってんだよ」

あの事——それはすなわち、タッグトーナメントのことだった。
しかし、簪には自分のISがない。

正確に言えばできていないだけだが……

しかし、簪はこのタッグに間に合わないこともわかっている。

それを承知のうえで宙は言っていたのだ。

「それに……あなたには組むべき人がいるはず……」

簪は知っている。彼には元カノがいることを……小耳に挟んだだけだが……

そのことを踏まえて彼女は宙に言った。

そこには多少の躊躇いと……嫌な感情があった。

「確かにいるけどさ、君は専用機持ち。勝つ確率は上がるから君に頼んだんだけどな」

それは簪にとって嫌味にしか聞こえなかった。

織斑一夏のせいで『打鉄・式式』が、まだ完成していないことはまだ彼女か：彼女の姉しか知らないはず。

そうだからこそ、こう言ってきたのは：悪意がないだけに簪にとって苦痛でしかなかった。

無言で唇をかみ締める簪。できるだけ、目の前にいる彼にだけは見せないようにした。

が、彼はすでに気付いている。

（ああ、くだらないことで：こいつも……）

「なあ、ISを見せてくれないか？」

「ツツ！！ あ、あなたはっ！」

宙のデリカシーのない言葉に簪は激怒した。

箸を、自分の手を机に叩きつけて、簪は飛び出していく。

「……………行きましたよ」

その様子を視線だけで追いながらも、近くに潜んでいたと思われる楯無に向かって宙は呟く。

「エンディングは見えた？」

「悪い冗談だ。俺は：人を幸せにするような『落とし神』にはなれない」

「謙遜ね。できるわよ、あなたならね」

もうすでに、不幸にしている宙にとってはそれも嫌味でしかない。しかし、行くしかないのだ。彼女を救うためには……

「それで、いつ結婚する予定なのかしら？」

「……………冗談はよしてくださいよ」

楯無の本当なのか良くわからない言葉を、軽めに流して簪を追う。

簪は食堂から走って出たあと、格納庫に来ていた。目の前には作りかけの『打鉄・式』がある。

倉持技研が開発をしていたのだが、完成間近にして一夏のIS『白式』に登場によって技術者を全て取られてしまい。開発は中止。未完成のままに終わっていた。

簪は一夏がにくかった。しかし、これも一つのチャンスでもあった。

かつて簪の姉——更識楯無は自身のIS『ミステリアス・レイディ』を自力で完成させたと言う。

昔からの目標であった楯無を超える絶好のチャンス。

だけど……（あの人は…あの人は…私を——馬鹿にしているの？）簪の取っては専用機のことを聞かれることは嫌でしかなかった。どれだけがんばっても、完成しない。どれだけ努力しても……姉

には追いつけていない感じがして嫌であつたのだ。

「何も…何も…」

わかっていない、宙は何もわかっていない。

（誰も…誰も…私のことを理解してくれない……）

涙をこらえるように『打鉄・式式』の目の前で頭をたれ、唇をかみ締めた。

（俺は…本当に何やっているんだろうな…ほっとけば良いものを…）

別に無視しても良かった。あれは他人だ、と割り切ってしまうば無視できていたはずなのだ。

しかし、心のどこかでは彼女のことを心配していた。

自分と同じような気がしたのだ。

自分の存在が信じれなくなり…証明しようとしてケンカに明け暮れていた自分と同じにおいがしたのだ。

「まったく、一人で…なんて、何も得られやしないのに……」

これで二度目になるが、宙は簪のことを好きではない。

しかし、裏を返せば嫌いではないのだ。気になるだけであって…

（俺は…）

過去の自分を見ているようで、気分は悪かった。

本当の気持ちなんて……自分ですら気がつけないことが多いものである。

簪が一人でISの前に座っている。

どうやら落ち着き始めたようだ。

しかし、そんなに心の傷というものは消えない。

「何もわかっていない……そう、わたしのことなんて……」

簪は一人、いつも一人、常に一人、誰も要らなかった。必要ないのだ。

コンプレックスと言うものなのだ。一人でやって、勝たなければならぬのだ。

楯無に……そう、完璧な自慢でもある姉に……

「何にもわかっていない」

不意にそう聞こえた。

声の主は、もちろん宙。

簪にとってはにくい相手でもあり、嫌いな相手である。

「あなたに……何がわかると言うの？」

「わかるよ。お前は俺に似ているから……」

「……………」

宙のどこか遠くを見るかのような視線に、簪は一瞬だけ黙ってしまふ。

その瞳は、悲しみだけで表現するには…足りない。もっと、深い何かがそこにあったのだ。

しかし、黙って聞いているだけの簪ではない。

「ふざけないで……何もわからない」

頼りなさげに聞こえる、言葉の節々にいちいち間が開くのでそれは仕方がないことだが……かんざしの目にはしっかりと怒りがあつた。

「一人は楽しいか？」

「……ッッ!!」

宙の言葉は簪の心を揺さぶる。

その様子を見た宙は……追撃をかける。

「一人で何かを成し遂げて…お前は満足なのか？」

黙るしかない簪。

簪にとって、その言葉は…

「お前は、間違っている」

気にしていた言葉だ。

いつも胸の奥で突っかかっていた言葉だ。
不必要だとは思いながらも、捨て切れなかった感情。

これでよかったのか？

本当に良いのかな？

正しいことなのか？

まだまだ、たくさんの言葉が彼女を攻め立てた。

が、それを簪は無視……いや、受け入れてここまで一人で全てをこなしてきた。

それゆえに、誰も信じれないのだ。

どこかで笑っているようで……姉に勝てない自分のことを……

かつて、簪は楯無と仲が良かった。

姉妹愛と言うものも垣間見えたような気がする。

しかし、今となっては……できすぎた姉に対するコンプレックスに
しかならなかった。

姉はできた、そう親から期待された簪。

けど、簪には楯無のしたことはできなかった。

そのうち親の関心は……楯無のものに……

できる姉、できない妹。どちらを大切にするかは一目瞭然だった
かもしれない。

それでも、簪は誰かに認めて欲しかった。自分と言う存在を……

そんな中、彼は言う。

「間違っているよ。俺と同じだから……」

やはり、どこか遠くを見ているような瞳でそう言った。

「俺は一人だった。そして何人もの人を傷つけた。周りの事を考えずにただ黙々と…」

「わ、私は……誰にも迷惑を…」

「十分に付けてるよ。気が付かないだけだ。俺もそうだった。心地良いだろう？ 今は……けど、それは結局、今だけなんだ。そのままいけばお前の側から人が消える」

「関係ない……それが…」

どうした、そう言おうとしたとき……宙はそれをさえぎるようにしていった。

「何かを失って手に入れたものに価値があるのか？」

「くっ……」

簪はそれぐらいわかっている。百も承知だった。

「それでも……私は……」

「その調子だとな、一生勝てないよ。あの人には……」

「な、何で……？」

簪にはわからなかった。

全否定される理由が、わからない。

（何が違うと言うの？ 何が……一人でやれば勝てるの……認めてくれるはずなの……）

「一人で勝てるわけないだろう？ あの人の中にはたくさんの方がいるというのに…」

「ッッ！」

所詮、一人でなんてそんなものだ。

楯無だって…何でもかんでも一人でできるはずがない。

周りには誰かが必ずいたはずだ。

人は生まれながらにして、一人だ。他人に自分の心がわかるわけがない。よって、一人なのだ。

だが、一人≡孤独、の方程式なんてものは成り立たない。

「だからお前は間違っているんだ。一人でなんてやめろ。

結局人間は、社会と他者との関係でしか人間になりえないんだ。

それに…不可能な障害の前にこだわり続ける頑固さほど愚かなものはない」

そう言って、手を差し伸べる。

「お前はどっちだ。このまま、人を捨てるか？ それとも、人を信じるか？」

簪の手は震えている。

怒りなのか絶望なのか、それはわからない。

握り締めて震えているのではない。

目の前に起こった出来事について震えている。

怖かったのだ。恐ろしかったのだ。

「どうして……」

わからない。わからない。わからない。

（どうして私の目の前に立つの？ どうして手を差し伸べるの？
どうして私を救おうとしているの？ 私はこれで良いの、これが
良かったの。勝てれば良いの、誰かに認めて欲しいだけなの。…な
のに……なのに……）

「どうしてあなたは私のことを……」

「……………知らん……と言うか知るか」

「え？」

驚くのは当たり前だ。今まで簪のことを言っていたやつが、何の
感情もなくこんなことをいえるはずがない。

宙は楯無に頼まれたから簪に……ということはない。

（俺だってわからん）

もやもやした気持ちなのだ。

自分自身でもわからない、この気持ちを……どう説明すれば良いの
だ。

（何でだろうな？ 俺はこう言うやつが一番嫌いなはずなのに……
助けたいとも思わなかったのに……）

「お人好しなんだろうな……」

そうれだけを言い、簪に向かって笑う。

その笑顔に簪は何かを感じた。

さっきと同じ、初めての感情だった。

優しく笑っている宙に、何らかの感情を抱いたのだ。

負の感情なのではない。しかし、今まで感じたことのある感情ではなく、新しい感情。

「来いよ、一緒に来い。反省も後悔も一度で十分だ。

お前は十分に反省したよ。だから、来い。一人でできなくても、二人ならできるだろう？」

それでもできなかったら、何人でも呼べば良い」

命令形だが強引に押し付けるのではない。

ただ、やさしくそう言われた。

それだけで、簪の心には十分に届いた。

簪は恐る恐る手を伸ばす。宙もそれをただただ待っていた。

どんなに遅くたって良いのだ、一歩ずつでも進むことができるのであれば…

…そして二人の手が繋がった。

このとき、ようやく二人はその気持ちの正体に気づいた。

(好き、か)

(これが…恋?)

遅すぎる発見だが、これはこれで一件落着ということにしておう。

後日談…

「はあ、なんとなくあんたの掌で踊っているような気がするよ」

「ふふっ、それは秘密。それよりも、似合っているわよ」

宙の服装——それは：『五つ紋付羽織袴』。

更識家のものだ。つまり、それが意味するものとは……婿養子。そう言ったほうが簡単だろう。

「絶対にあれはあんたの策略だった。なにが：『姉さんと呼んでも良いわよ』だの、『姪の顔が早く見たいわ』だの、『ご結婚はいつの予定?』だ」

「だから、それは秘密」

口に人差し指を当てて、微笑をする楯無。

その服装は『黒留袖』。さすがは現更識家当主。きっちりと着こなしているその姿は、とても綺麗だった。

「それよりも、あの娘のところにいかなくても良いの?」

不意をつかれたので、一瞬だけたじろいでしまうが……

「ああ、それなら問題ない。今日の朝に言われたんだよ……

『びっくりさせてあげる』ってね。さすがは、あんたの妹だ。似てきたよ」

今じゃ俺のほうの立場が下になっているぐらいな……、その言葉を付け足そうか迷ったが……無粋だったのでやめておいたのだ。

「そうね、本当に綺麗になったわ」

「それよりも：あんたは見つけたのか？ 男」

「なっ……んん、いつか見つけるわよ」

ついさっき前までの宙と同じようにたじろいだ後、平静を装うように楯無は告げたが：

宙の目が：『ここからはずっと俺のターン』とでも言わんばかりに光り：

「いやー、いっ」

「あ、もうこんな時間。早くいかないと…」

一文字目を聴いた瞬間に、楯無はあわてて支度を始めた。

「じゃあね」

それだけ言って、部屋から出ようとする楯無に……宙が何かを呟いた。

その言葉は本人には聞こえなかっただろうが……確実に『ありがとう』そう言っていた。

「さて、それじゃあ、俺も行きますか」

幸せ、とはこういうものを言うのだろうか……そうしみじみ思うのであった。

IFストーリー 簀×宙 peat2 (後書き)

次から、本遍!!

とでも言いたかったのですが・・・緋弾の二次がアニメに抜かれたため、一週間ほどお休みします。ごめんなさい。

本遍のネタはできているので、ある程度は連続投稿できると思います。

誤字脱字訂正などありましたら、よろしくお願いします。

第87話 約一ヵ月後…（前書き）

まずは、期末試験が近づいてきたので更新できません。来週の木曜日からできると思います。

そして、なんとなくOPの曲を考えましたww
これは後書きで・・・

今回は説明が主となります。思いつきり飛ばしましたが、めんどくさいからではなく使用です。

では、第87話どうぞ！

第87話 約一ヵ月後：

第87話

「試験終了だ。帰還する」

「お疲れ様、ナルミ。ハッチ開けとくから勝手にしめといて……それとあとで格納庫に来て、あなたの専用機が完成したから」

「了解した、カリフ」

以前、アリシアが使っていたISアバランシュの改良型に当たるISがハッチの中に入った。

美しい黒髪を持ち、まさに美形ともいえる顔立ち、清楚な雰囲気をもとう美少女だ。

そのナルミと呼ばれた美少女はISから降りてハッチを閉める操作を行う。

「調子はどうだ。あれの」

「オータムか。なかなか良い子だったよ」

あれはオータムの専用機になるISだ。

《アラクネ》のほうは修理に物凄く時間を使うらしいので、代わりとして用意されたようだ。

改良点としては、ブースターの強化、発熱を各自で独立してできるようにしエネルギーの問題を解決。そして極めつけはページ後の性能の底上げだ。

発熱量が無茶苦茶に上げられたために操縦者に負担をかけるよう

になったが、それを補って余りあるほどの運動性能と武器を手に入れた。

「そうか」

もう一度だけISを見たオータムは、彼女らしい嫌な笑みを浮かべてハッチ部分から出て行った。

ナルミはまたISに乗っておくにあるハンガーまで持っていき、乗りやすいように肩膝を立てるようにして降りる。

「報告書がまだ出ていないわよ。ナルミ」

「すみません。今すぐに作ってきます」

前々回の作戦の報告書を出していないことを指摘されたナルミは自室に戻る準備を始めたが、たくさんの少女に行く手を阻まれる。

「今日こそお覚悟を……お姉様」

「是非、夜のお相手をお願いします」

「何を言っているの？ ナルミ様は私を見ているの！！」

いつもどおりの光景だったのか、ナルミは額に手を当てて懐から銃を引き抜いた。

使用銃はいつもどおり『Beretta 92FS』。信用性の高い武器だ。使用する弾丸はもちろんゴム弾に摩り替えてある。

しかし、相手の武器は（略称です）『ビゾン』『ロビンソン』『HK』『M4A1』『レミントン』などなど、ショットガンからアサルトライフルまで種類はさまざまだが、拳銃一つで相手にするのは難しいかと思われた。

が、ナルミはそれを難なく……

「動くな」

打開してしまった。

一人の少女の首に銃口を当て人質にする。

それだけで、全ての少女が武器を下げるはずだった。

そう、いつもなら……

「One or All・All or One」

流暢な英語でよく知られている言葉を告げる。

それに応えるように、目の前にいる少女たちも……

「「One or All・All or One」」

「……………」

もう、黙るしかなかったナルミは……人質の少女を気絶させ、死地へと向かった。

ガシヨンッ

ゴム弾のマガジンを通常の9mmパラに変えて、リロードを行う。
ナルミVS武装少女の乱はナルミの一人勝ちに終わった。

「今日は苦戦したようね」

「ええ、最近は本当に強くなったと思うの」

「そうねえ、もうそろそろかしら…」

スコールが遠くを見るかのような目で思考に入った。

「心配なのだろう？」

「見ていたなら手伝ってくれたって良いじゃない？ アリシア」

「めんどくさいことは性に合わないんだ」

「人をいじるのは好きな癖にか？」

「気にするな、些細な問題じゃない」

いつもどおりの対応、これが亡国企業の普通だった。

その後、ナルミは報告書を提出し、カリフのもとに向かうのであった。

「ふう、今日も疲れた」

体をベットに預けるように、背中から飛び込んだ。

ここに来てから約一ヶ月ぐらい立っただろうか……あまり詳しい日時は覚えていなかった。

そんなものはここでは必要なかったからだ。

書類、ミッション、書類、ミッションが永遠と続く毎日。

まあ、ここにきたばかりの俺のところに来る仕事といっても雑用なんだが……

最近まじめな仕事として行ったのは、民族紛争に介入したことぐらいだ。

しかし、悪い事だけではない。いいこともある。

たとえば……

・あのカリフを飯を作るという条件で買収した。というか、カリフは整備班の人でした。

これで襲われることはなくなったということだ。さらに、機体の調整なども任せられるようになった。一石二鳥だ。と、言いたいの
は山々なんだが……理由は後々語らせてもらえとうれしい。

・暇なときは自由に射撃訓練、近接格闘戦の訓練などを受けさせてもらえるようになったので、基本的な体力は物凄くついた。

ふふ、これでアリシアに勝てる。と思ったこともあったけど、ア
イツもおんなじ訓練を受けているんだけど……

・戦争孤児がここに拾われてくることが多いので……子供の扱いが
うまくなったということ。

何のためになるのかわからんが、まあ、これも良いことだろう。
そう思いたい。

・極めつけは、女の裸を見ても動じなくなったことだ。

時はISの時代。如何せん、女が多いのは必然的なのだ。それも、IS学園とは違い……大人なお姉さんが……そりゃ、勧誘も桁違いでレベルが違いすぎる。

最初はかなりおされていて……いつも、すんでのところのアリシアに助けてもらえなかったら……犯されるところだった。その後はアリシアの雷をいつもいつも食らう破目になったのだが……

と、まあ、いろいろなことがあったんだ。

確かにこの生活は大変だったが、慣れてしまえばさほど問題ではなかった。

あれいこうIS学園との接触はない。

あ、そうそう、良い忘れていたけど……俺が裏切った理由が増えました。スコールさんに全てを教えてもらったから。

一つ目は、ラウラのヴォーダン・オージェ

二つ目は、織斑一夏のISの強奪。

これは束さんが絡んでいるのと男が使えるIS、だからで、俺がいれば狙う理由もないということになった。

三つ目は、あいつら三人のISだな。水仙・豊水・断水のISも対象となっていたのだが、俺が裏切る代わりにそれをやめてもらった。

四つ目は……ナノマシンのことなんだけど……これのことも、後にわかる。

これで俺は亡国企業を裏切れなくなった。

個人的には、確かにこの環境は好きであったので気持ちの問題はないが……

まあ、あっちのことも気になるんだ。何をしているのか、とか……いろいろとな……

第87話 約一ヵ月後…（後書き）

というわけで、裏切り編第二期始まりました〜。D。ノノ” ☆
パチパチパチパチ

といっても、すぐに更新できるわけではないのですが…orz

まあ、そんなことは気にせずに前書きで書いたOP曲を発表しましょう。

「真実の翼―サダメノツバサ―」です。

宙「エロゲの曲じゃねえか!!」

バキッ!

ぐふっ…:…な、ナイスドロップキックだ。

服をはたき、砂埃を落としたところで姿勢を正す作者。

エロゲの曲を使って何が悪い!

宙「開き直るな! ドンだけ恥ずかしいことをしているのかわかってんのか?」

う、うるさい、IFストーリーを書いている…あ、忘れていたけど、IF、自分あれで納得していないからね。時間を見つけては加筆修正していくつもりだからね。

宙「最初に言えええええええ!」

すまん、完璧に忘れていたんだ。今の今まで、現在進行形でな。

宙「前書きの時点で気付いてくれよ、話がそれちゃったじゃないか・
・・」

うん、じゃあ話を戻そうか・・エロゲの曲を使うことが恥ずかしい？という質問だったな。

宙「ああ」

よし、今から自分歌います。一回ぐらい聞けば、必ずその考えが変わるはずだ。

宙「その自信はいつたどこから来るんだよ」

そこは、ほら、主人公補正だろ？

宙「この小説の主人公は俺なんだけど」

きにすんな、些細な問題じゃないからよ。

宙「なんだか、お前に言われるとすげえむかつくんだけど・・・」

そういえば、今思ったけど・・・なんでこの曲がエロゲのだってわかったの？

宙「いや、お前の足元に…」

(。D。)ハッ！ か、隠さねば…

宙「ばればれ何ですけど…」

何のことかな？ 正直このゲームまだプレイしていないからな、
本当だぞ

宙「どこまで本当なのやら・・・それより歌うんじゃないのか？」

おお、また話が脱線してしまっていたな・・・よしっ、歌うぞ！！

《歌詞の無断使用が禁止されたので削除されました》

・・・どうだ？

宙「いや、そんなどや顔見せられても・・・」

うわーん、わりと本気だったのに・・・くそう

画面の前のお友達は気になったならニコ動で検索してみてね

宙「ちゃっかり宣伝してるじゃねえか」

何とでも言え、一人ぐらいいは知ってる人がいる……はず……

宙「自信なさそうだな」

正直なところ、思いつきりひかれて、お気に入り数が減ると思
っています。はい。

宙「妥当な判断だ」

ですが、自分は負けない。この小説を完結させるまでは書き続け

る。

いくらネトゲがおもしろくても！

宙「・・・その理由さえなければ、もしかしたらへらなかつたかもしれないのにな…残念だ」

と、兎に角、絶対完結させてやるんだからねっ！

第88話 専用機と新武装

第88話

「さて、ナルミ。これがあなたの専用機となる《武御雷》よ」

黄色の装甲に青白いアクセントが入ったカラーリング。

装甲の形は刺々しい風貌で、いかにも雷を連想させるようだ。

「剣の神様の名前を、ね。すこし、大げさすぎじゃない？」

「別にたいしたことはないわ。現にあなたの近接戦闘能力は最強クラスだから」

「でも大丈夫なの？ 私なんかがもらっても」

「一応、これは実験機だから問題はないと思う。それに優秀な人に使ってもらったほうが作った私にとってはうれしいから」

少しだけ照れくさそうに笑うカリフに、ナルミはなんともいえない気持ちになる。

だましているような気がしてたまらないのだ。

「……ありがと、壊さない程度に扱っね」

装甲に触れて、感触を確かめたナルミ。

「練習相手は私がしてやろう」

「あら？ 自らとは、珍しいね。アリシア」

ふと聞こえてきた、聞きなれたその声に振り向きながら返答した。
ブロンドのストレートで、薄氷の目を持つ少女、アリシアだ。

「けど、どうしたの？ あなたはあまりここには来ないはずと聞いたのだけれど…」

ここは格納庫、普通ならあまり立ち寄ることのない施設だ。

「なに、私はカリフに呼ばれてきたんだ。詳しい内容は知らんがな」

「お姉様、待ってしました」

元気良く応えるのはもちろんカリフ。

ちなみに、この二人の関係は……後々語らせてもらう。
が、カリフ曰く『命の恩人』だそうだ。

「新装備が届きました。それと、頼まれていたものも完成しました」

「頼まれていたもの？」

カリフのアリシアへの説明に疑問を感じたのか、ナルミが疑問を口に出す。

「お姉様からの依頼なのよ。ブレードライフルに変わる武器を作ってくれ、というね」

言葉遣いが自分とアリシアとでは違うことに眉を顰めた。

「これが、武御雷の細かい機体説明ね。そして、これが新武装の一覧です。お姉様」

やっぱり言葉遣いが気に入らないのか嫌な表情をするが、おとなしく渡された説明書を読むナルミ。

同じく渡された一覧表を眺めるアリシア。

二人が美少女だけに……物凄く画になる光景だ。

それを覗いていた百合っ気のある腐女子達が騒いでいるのもわかることだが……如何せん、二人は気付いていない。

「こ、今夜のおかずは……」

「ギター――（。▽。）――！！ インスピレーションがわきましたわ！！ 今すぐに作ってきます」

「あ、それ……私にも読ませてください」

「ふ、ふつくしい……」

「ああ、アリシア姉様……」

「私はナルミ様派……」

聞かなかったことにしておこう。二言は認めない。

「ふむ、この『04－MARVE』はお前が作ったのだろうか？」

「あ、はい。そうです。何でわかったんですか？」

「私がブレードライフルの代わりを作ってくれと頼んだ。だから、近距離での運用を主として作られていたこれがお前が作ったものだろうという推測だよ」

「う、うれしいです」

珍しく、頬を赤く染めるカリフ。

本当に珍しい。

本当に珍しいのだ。

宙…というか、男にはあまり見せない表情だった。

そうそう、整備班には多少の男もいる。大体が力仕事要員だが…
兎に角、しつこいようだが珍しい。

「カリフ、質問が一つだけあるのだが」

「なによ」

そして、この言葉遣いの差である。

この言葉遣いに多少の不満を覚えつつ、それを抑えながら言葉を
続けるナルミ。

「なんなんだ、この防御の低さは？」

資料の一角にある、ステータスの部分にある。防御性能のレベル
を示しているところを指で指す。

そこには…：防御性能『G』。決して『グレイト』の意味ではな
い。Aから順に数えて『G』だ。

ちなみに、宙の残響でも『B』はある。というか、基本的にシー
ルドバリアーがるので『D』以下になることがあまりないのだが…：

「ああ、それはね…：防御捨てちゃった」

テヘツ、と舌を出して笑うカリフ。

「笑い話じゃないぞ。シールドバリアーが薄すぎる」

薄いⅡかんたんに破られる、と言うこと。

その辺はいくらでも調節が効くのがISなのだが……

「だってしょうがないじゃない。エネルギーの消費が激しくて、そっちまでエネルギーを回せないんだから。でも、その分の機動性は確保できているでしょう？」

「確かにそうだけど……いくらなんでも、これは……」

ない。本当に、ない。

「これは、本当に、私専用なのか？」

本当に、の部分強調してナルミは言う。

「ええ」

だが、涼しい顔で返されてしまう。

「あなたには必要ないでしょ。防御なんて、今のところシュミレーターでは被弾率ゼロだし」

「それは……けど、実戦じゃないのよ？」

「練習でできたことができなくなるわけがないじゃない。練習でできなかったことは実戦でもできないけどね」

まさに、ぐうの声も出ない。そんな様子だった。

ここでこの『武御雷』の資料をもう一度見る。

機体名 武御雷

世代 準第四世代

武装 近接ブレード 『草薙の剣』くさなぎ つるぎ 『天叢雲剣』あめのむらくも

機体説明

宙の残響の『展開装甲』のデータを元に作り出した亡国企業製I S。

そのため、基本性能が若干低めである。よって、世代も準第四世代。

攻撃・防御・移動に変形ができる展開装甲なのだが……如何せん、エネルギー効率が悪すぎる。しかも、攻撃・防御を使用する際のFCS（火気管制システム）が未だ完成の域に達しておらず、使用不可能な状態。

なので、機動力に特化したISと考えても良い。

しかし、移動だけに展開装甲を使ってしまう結果……全身の展開装甲を防御するものがなくなり、展開装甲の弱点とも言える防御力の薄さが目立ってしまった。（展開するとは、装甲の間にすきまがあるのと同意義）

「『04—MARVE』は使うとして、もうひとつは『051ANNR』を使おう。グレネードは……ったく、何ヶ月待たせたら気が済んだんだ。『OGOTO』を使う。この三つを基本的に使っていくから、カリフ」

「はい」

「インストールは任せた」

「わかりました」

シュープリスの待機状態である、腰につけていた黒いチェーンをカリフに預けてナルミのほうを向いた。

「さて、私と戦わないか？」

無論、決闘の申し込みというやつだ。

ナルミにも断る理由がないので、受けて立つことにしたようだ。

第89話 ランキング（前書き）

そういえば、いつの間にか新キャラ出していましたW

まあ、彼女については後々すべてがわかりますよ。

それにいつの間にか、シュूपリスの全装備を再現することができました。

これが本当のシュूपリスだ！

ちなみに、俺の嫁はシュूपリスのマーブを月光に変えただけですW

では、第89話どうぞ

第89話 ランキング

第89話

「本当に他の武装は必要ないのですか？」

「ああ、防御がなければそんなに弾数もいらんだろう」

シュープリスにインストールを済ませたカリフが心配そうにアリスアの顔を覗いていた。

アリスアは特に気にしていない表情を取っている。

肝が据わっているというのか、緊張していないというのか……なんともいえないが、戦闘前にこうやって落ち着いている人は間違いなく強いということはわかる。

ナルミも武御雷を装着しちょっとした訓練をこなしたことで、あらかじめナルミの情報をISに入れていたのかわずか数分たらずでファースト・シフトを終えた。

「これは、とんだじゃじゃ馬だな」

そう、このISは本当に性能がピーキーだそうだ。

展開装甲の防御と攻撃をすてたら、最早本当に展開装甲なのかと疑いたくもなるが……それらを考慮しても本当にピーキー過ぎる性能だ。

ファースト・シフトするまでに何度も何度も四苦八苦しながらも試行錯誤を繰り返してはいるのだが、うまく扱えることはなかった。

「苦労しているようだな」

「試し撃ちはしなくてもいいの？」

アリシアの戦闘前の声かけに、皮肉のこもった口調で答えるナルミ。

「大丈夫だ。戦闘中に感覚ぐらい合わせるさ」

多少人外なことを言っていることについては、つつこまないことにしておこう。

時は同じくして場所は変わり、アリーナの観客席では……

「どっちに賭ける？　アリシアかナルミ」

「もちろん、アリシアに決まってる」

「そうそう、新入りが最近専用機もらったぐらいで勝てるわけないじゃない」

「でも、訓練では良い動きしていたわよ」

「うんうん、センスを感じたね…あれは」

「まだ慣れていない感じだったけどね」

賭けが行われていた。

ここ亡国企業内では暇なやつらが集まり、日々自らの腕前を上げるべく鍛錬している。

それこそがアリーナ。ここで強さを競い、ランク付けし、向上心を保っている。

まあ、やっていることはほとんど犯罪なのだけど……存在自体が犯罪の亡国企業に言われても、どうということはない。

ちなみに参考までにアリシアのISでのランクは……1位。宙は……9位。ナルミは……10位だ。

IS以外のランク（射撃、徒手空拳等の総合）だとアリシアは……1位。宙は……39位。ナルミは最下位だ。

「そう言えば、もう一人の新人君は？」

「宙君のこと？」

「そうそう」

賭けを行っていた数人のうち一人が、ふと気が付いたように宙の名前を出した。

「宙は興味ないから部屋にこもっているわよ」

みな疑問に答えたのはスコールだ。

ちなみに、スコールのランクは……存在しない。圏外ではなく、自ら好んで参加していないだけだ。

「ありゃ、つれないね」

「まあ、唯一の男の子だからね」

「もうそろそろ慣れてきた頃と思ってたんだけど……まだまだあの初々しい様子が見れるのかな」

「確かにここに来たときのあの反応は、可愛かったわね」

彼女たちにしてみれば、高校一年生も男の子だ。男ではなく、男の子と表現するのは……年が離れて……ごほん、ごほん。精神年齢が高いのだろう。決して、実際の年齢が高い……わけではない、はず。

「で？ スコールさんはどっちにかけるのかしら」

「そうねえ、未来投資としてナルミに百万賭けようかしらねえ」

「おおっ、思い切りましたね」

「これぐらいしないと未来投資とはいえないじゃない？」

「まったくその通りです」

そうして賭けは終わる。

割合的にはアリシアが多く、ナルミは少ない。

ナルミが勝てば……たくさんの人が泣きを見るはめになるだろう。勝てばの話だが……

「ランク1位といきなり対戦とかありえないんじゃないの？」

「しらん」

「できれば2位のMさんにアドバイスを……」

「しらん」

「……………ほんとに？」

「しらん」

丁度近くにいたMを話し相手にしていたナルミ。

その後、Mは去っていった。

ナルミは以前としてその場に立っていた。

緊張しているのか、手は震えているし、体が強張ったままである。

「うーん、めんどくさいな」

ただし、体とは裏腹に声のほうには緊張感が一切なかった。

実際にまじめに戦うので殺しあいとほとんど変わらないことは確かである。

緊張することも必然的に良くわかるのだが、声に緊張感がないのはどういうことなのだろうか？

「スコールさんに期待されてたら…負けるわけにはいかないよね…
…はあ」

重苦しいため息を吐き、ISを装着する。
そして、アリーナへと飛び出した。

「本当にこれだけで……」

「これだけで十分だ。それとも、自分の作ったものに自信がないのか？」

「それは……」

「教えたはずだ、技術者になるなら納得いかないものだけは作るな、と」

「……はい」

アリシアの言葉に、小さくか弱い声で返事をしたカリフ。

「私はお前を信頼している。だからこれだけで十分だ」

「だったら……負けないでください」

「了解だ」

アリシアは自信を持っているわけではない。
ただ、いつもどおり最善を尽くしているだけだ。
深いことは考えずにただ、最善を……。
ならば、やることはただひとつ。

勝つ、ということだけ……。

薄氷の目は、アリーナ内に先に入った黄色のISを見つめた。

第89話外伝 宙の一日 亡国企業編（前書き）

すいません、最近スランプ気味・・・

ちょっと、息抜きに執筆してみたが裏目に出かけている・・・

早く勘を取り戻したい。

第89話外伝 宙の一日 亡国企業編

第89話外伝

A M 5..00 起床

「ふう、良く寝た」

相変わらずの寝起きの良さだ。

目を開けたかと思いきや、すぐに立ち始めた。

両腕を天に向かって伸ばして体を伸ばし、軽いストレッチをした後で息を思いっきり吐く。

「（ハァ）ハァ…」

（つム）ゴシゴシ

なんか、顔文字が見えて気がするが…：…気にしない。

所詮これは外伝である。気にしてはならない。

という訳で、いつもの行為を行った後すぐに部屋を出た宙であった。

A M 5..15

いつもの行為、と書いて変な想像をしたのは作者だけであろうか？
いや、たぶん違う（笑）
この時間帯の宙は……

「♪」

鼻歌を奏でながら、朝食を作っていた。

以前話した、カリフを三食で買収した、ということなのでその飯を作っている。

手馴れた手つきで魚を焼き、酢の物を作り、味噌汁を作り、ご飯を炊く。

メニューはどうやら和食のようだ。

が、量がハンパな量じゃない。

魚は一気に数十匹ほどやき、酢の物はでっかいボウル、味噌汁にいたっては寸胴だ。無論ご飯も巨大な釜である。

「飯」

「おはよう、宙君」

「いつも、いい匂いね」

「あら？ 今日のは和食なんだ」

寝ぼけているのか、語尾が若干伸びているが……そこはお姉さんだ、すぐに目を覚ましてご飯を宙から受け取り、食べ始める。

AM 6:00 朝食

お姉様方（いい年こいて年下に料理作らせているお姉様方）の食事が一通りすんだところで、自分の朝食に移る。
それはもう恐ろしい勢いで口の中に食べ物を突っ込んで、味噌汁で流し込んでいる状態だ。
もう少しゆっくりでもいいんじゃない？
しかし、その後の仕事が大変なので時間はそんなになかったりする。

A M 6..30

がしやがしや、と大量の水の中で食器を洗う。
これだけ多いとかなり大変だ。

あ、そうそうなぜ宙がみんなの食事を作っているかというところ……

・カリフに飯を作った⇒みんなが見てる⇒宙「あ、あのく食べますか？」

と言うこと、なんとも年上が多い職場は大変だ。

ここには確かに食事係となるものが存在していたが、仕事を取られたので……飯を食うほうに回っている。

なんとも宙にとって世知辛い世の中になったもんだ。

P M 0..00 昼食

この辺ぐらいまでは命令がない限り、特にこれといった仕事はなく。

兎に角、飯を作ることが優先させられる。

ちなみに今日の昼ご飯は、麺類全般でした。

P M 1..00

さて、ここからが宙の本当の仕事だ。それは……

「お兄ちゃん」

ガスッ

「お、おふっ」

股間に走る痛み、顔中のいろんな穴から、ありとあらゆる汁が出てしまうほどの痛み。

男にしかわからんこの痛みを目の前にいるこのかわいい(?)少女・少年達にどうやって教えようか、と、困っている宙。

「何でこんなことをしたの？」

震えた声で恐る恐る聞いてみる。

たぶん……

「んとね、カリフのお姉ちゃんから：これをしてやればよろこぶから、って」

子供たちの中から代表して一人の少女が、そう言った。

「そうか」

さいですか、そうなんですか！　もういい、あいつの飯減らす！
！　これは決定事項なんだからね、男に二言はないからな！！！！

「どうかしたんですか？」

事実を知らない無邪気な子供たちが、顔を覗いてくる。

どの顔をも、ほめてほめて、といつているような顔をしていた。
そう、何にも知らない少女たちは嬉々として喜んでいるが、少年は……俺の方を、ポンポン、と叩いている。

こんな少年達に慰められている俺って……
とか何とか思いつつも、少女たちに事実を……はい、ごめんなさい。言うことができません。

「ううん、何にもないよ。それよりも、これは本当に特別なときだ
けやろうね」

「なんで？」

「これはね、特別な条件が揃わないかぎり使っちゃダメなんだよ」

「特別な条件？」

まずはここで一言だけ謝らせてもらいたい。

「そう、特別な条件なんだ。例えば……」

俺の話を真剣に聞くこの子達になんともいえない罪悪感が芽生え始める。

「そう、例えば……例えばね。屈強な男の人に後からつかまれた時とか、時々いる蹴られて喜ぶ人とかにすると、喜ばれるんだよ」

「そうなんだ」

「そうなの」

うんうん、と頷きもってもらいたいと言っているように見える。間違いではない、決して間違いなんかじゃないが……何だこの罪悪感。

一応謝っておくことにする。ごめんなさい。変態の人ごめんなさい、犯罪者の方ごめんなさい。

といってもこの子達……普通の子供たちではないのだが……なぜならこの子達、午前中は訓練を受けているからだ。

それに、この子達は戦争孤児に元奴隷、親に売られたもの、捨てられたもの……何かしらの悲劇が訪れた子供たちだ。

皆、心に深い傷を負うか、愛に飢えている。

「何して遊ぶ？」

「何でもいいよ」

だから、ここファントムタスクでは兵士として鍛える代わりに子

供たちを生活させてあげている。

そして、みんな子供たちに優しくしているのだ。

「何でも良いの？」

「うん」

けど、このように子供らしくない行動を良く取る。

相手の顔色を窺ったり、遠慮したり、もっと甘えてもいいのだが

……

「ここじゃ狭いから…広い部屋まで競争な。are you ready？」

「「OK!!」「」」

一瞬にして散らばる子供たち。まるで蜘蛛の子を散らすように四方八方に走り去っていく。

見ただろうか？

これが子供たちの実力である。

英才教育の賜物というやつだ。正直…笑えない。あの速度で…しかも武器をきちんと装備して……そして、極めつけは小学六年生ほどの年齢だというのに……ファントムタスクなんて恐ろしい

「しかし、負けるわけにもいかんしな」

多少、大人気ない気もするし、しかし一通りの年上感を出しておかないと、という気持ちもある。

まあ、適当に力を抜いて遊びますか」

P M 3..00 勉強会

これも、命令がないときだけだが…

「あゝ、これわかる？」

勉強会。

子供たちに勉強を教える。

先生たちはもちろん、お姉様方。年上の……ごめんなさい。

「わかんない」

やっているのは基礎中の基礎。国語と算数なんだが…

「1+1は？」

そんなレベル。

まあ仕方がない。

俺がここにきてから、はじめたことだった。

きっかけは……

『今何時？』と宙が聞いてみたところ……

『？』小首をかしげるしぐさ。が帰ってきたのだ。

まさかと思いつつ、少しだけ試してみたところ…

『今日は何曜日だっけ？』『ようび？』

こんなレベルだったのだ。

まあ、勉強を教えてはならないということはわかってはいたが…基礎ができないのは困ってしまう。

ということ…基礎的な知識を思わせることを徹底させた。

まあ、ただ…

「これはな、亀甲結び」

「そこお、なに教えてんだ!!」

変なことを教えないようにするのが、一番難しいことなのだが…

P M 6..00 晩飯

あれから、みっちり…子供たちではなく、変なことを教えようとするお姉様方にちよつとした教育を…なんか喜んでいたけど、なんとか教育を終えて晩飯を作ることにした。

「うん、いいね」

出来上がったばかりのポトフの味見をし、うなずいた。

あまり煮込みに時間をかけることができなかったが、我ながらうまくできたもんだと自負しております。

さてさて、今晚のおかずはこのポトフ。

それと、肉だな。ステーキだな、一人ずつ焼くのはめんどくさいが、そこはただいまシェフとなっている俺にとっては何の苦もない。

お茶の子さいさいというやつだ。……本当の理由は少し違って、
こう思うことでしか精神を保つことができない。

「早く、早く」

能天気な女どもが、飯を早く出せとせかす。

本当に何なんだよ、俺の立場は…

どことなく虚しさを覚えた宙は、肉を焼き続けた。

P M 9..00 終身…あ、間違えた。就寝ね。

早すぎる？ いや、これぐらいで丁度いいんだよ。

今はまだ若いときだから少しぐらい徹夜しても大丈夫なんだけど、
できるだけの寝ている時間は作りたいのだ。

そうしておけば、スコールさんからの無茶苦茶な仕事をいつでも
こなすことができるから。

本当に突然来る、物凄い量の書類整理だけは大変なんだ。

裏切ってすぐに、大量の書類が俺の手元に来たときは正直死ぬか
と思った。

思わず…

「千冬さんより酷い…」

と、ポツリと呟いたものだ。

ただ、Mがすぐに俺のところに来て大暴れしていったのもう二
度とあの人の名前をここで言うことはなくなつた。

個人的には、こんな生活も悪くないと思っている。
未練は残っているが、今は一日一日を生きていこうかな……

でも……最後には笑いたいよ。あいつらと一緒に……それと、フ
アントムタスクも、な。

第90話 ランキング戦（前書き）

うわっ、しゃれにならないぐらいの不調。

早く感覚を取り戻さないと……けど、書かないと戻らない感覚。

なにこのジレンマ？

第90話 ランキング戦

第90話

「準備はいいか？」

「無論だ」

「はい」

スコールの問いにアリシア、ナルミの順番で返答した。

両者とも武器を構える。

アリシアは両腕の武器をナルミに向け、ナルミは二本の太刀をコールし前方で交差をさせた。

「はじめ」

凜としたスコールの声がスピーカーに響き渡り、アリシアとナルミが同時に飛び出す。

が、先に仕掛けたのはアリシアであった。

イグニッション・ブーストによる超高速での接近、そして両腕の銃による射撃のヒット・アンド・ウェイだ。

ナルミはそのいきなりの強襲に反応が遅れてしまい、何発かもらってしまった。

眼前に移るモニターのシールド・エネルギーが減ったことを見て、表情をしかめる。

「くそっ」

「まだまだ」

自分の失態に自嘲するナルミに追撃を仕掛けるアリシア。
ナルミはすぐに思考を切り替え次の攻撃に備える。

ほとんど自然体に近い形で二刀を持ち上げ接近するアリシアに反撃をかけようとする。

しかし、相手はあのランク1位。

「甘い」

今度はクイック・ブーストによる回り込み。

ランク1位というのは伊達ではないらしい。

超高速状態での近接戦闘、クイック・ブーストによる緩急のある戦闘。

そして、グレネードの広域攻撃にワン・オフ。

死角がないとはこのこと。

どうやら今回の戦闘ではワン・オフの使用はしないようだが、それでも十分強い。

なんとかナルミはアリシアの攻撃をそらしたが、一方的な攻撃はまだまだ続く。

至近距離でのクイック・ブーストを恐れてか、アリシアの接近に合わせて後方へと下がり一定距離を保つ。

けど、ナルミの武器は近接戦闘用の武器しかないため攻撃を当てることができず…アリシアの銃撃をただ黙って受けることしかできなかった。

「なめるなっ」

隙を見ては接近し斬撃を浴びせようと太刀を振るうが当たることなく、それどころかグレネードの直撃をもらってしまう始末。

もう、勝ち目などない。

一方的に攻撃を受け続け、敗北を待つしかない。そう観客も思っていたところだった。

こんなようにで負けるぐらいなら……

消えた。

アリシアの目と鼻の先にいたあの黄色い機体が消えた。すぐにセンサーが感知し、その方向を見ると……

「勝負はここから」

苦しそうな顔でアリシアをにらみつけるナルミがそこにいた。また、黄色い機体の装甲が開きエネルギーを出していた。余波が光となって機体から出ているのだ。

「これは……」

突然起こった事態に、少しの驚きを見せるアリシア。

まあ、すぐにそれも感情を押さえつけて通常の状態に戻った。

「さすがね、けど……ここからはあなたの自由にはさせない」

「ふっ、良いだろう」

そして、また武器を構えて同時に飛び出した。

「やっぱりね、はずしちゃうよね『リミッター』」

カリフは一人、格納庫で呟いていた。

武御雷は欠陥機である。

第四世代なのに展開装甲が移動時のみの使用しかできないからではない。

むしろ、移動だけであつたらほとんどのISに勝てる潜在能力を秘めたISなのだ。

ただしそれは、PICが『G』を打ち消してしまえば、と言う前提だ。

このIS、ほとんどカリフの趣味から考え出されたISなので搭乗者の安全など考慮していない。

そう、『G』がそのまま搭乗者へと襲い掛かってしまうのだ。

そのために『リミッター』を常時使用することで負担を減らしているのだが……

「お姉さま相手じゃ、無理よね」

その口調は、こうなることがわかっていたかのように

「さて、データを取らなくちゃ」

その言葉には楽しんでいる勘定が秘められているようで

「ふふふ」

その笑みには…何か深い考えがありそうだ。

第91話 次の命令は……（前書き）

戦闘シーンは……カットさせていただきました。

理由はここを詳しく描写しても、特にこれと言った利益はなかったからです。

本心はニガテだから……

第91話 次の命令は……

第91話

「……負けた」

「良い勝負だった」

エネルギーが切れその場に膝をつけてうなだれるナルミ。
それを見つめるアリシア。

確かに良い勝負だった。

リミッターをはずしたナルミは最初こそアリシアを圧倒したいたが、そのスピードになれたアリシアが反撃。

そして最後はほとんどの力が拮抗している状態で……

『これで』

その一言とともに……武御雷のGに耐えられなくなった体にアリシアの左手に持っていた『04-MARVE』の銃口が右肩に刺さり、ナルミのISは起動を終了させた。

「良い勝負だったわね」

「すごいじゃない」

「あのアリシアと同じなんて……」

賞賛の言葉ならもういやと言うほど周りから聞いた。
そんな言葉が欲しいわけじゃないナルミはただ黙ってその場から

去っていく。

更衣室に行き一人で着替えた後、自室に戻っていった。

「ふう、今日はこれぐらいかな？」

今日の晩御飯の仕込を終えて一休みするところだ。
宙は切ざんだ野菜を端に寄せながら包丁を洗っている。

「♪」

鼻歌を歌いながらしているので苦痛な作業ではないらしい。
それどころか楽しそうな雰囲気さえある。

「お兄ちゃん、今日のご飯は何？」

「うん、そうだね。なんだろうね」

楽しそうに聞いてきた女の子におふざけ程度に応える。

「いつの間に来てたの？」

たしか…この子達は勉強をしているじかんだいのはずだけど……

「先生たちがなんかランキング戦が始まるとか何とかで…」

「ああ、そうだったのか。ってことは自習していたんだろ？」

「うん、亀甲縛りの」

無邪気に笑ってそう応える。

こういうときどういう反応をすればいいのだろうか？

教えたものを怒るような表情か？

真実を教えずにその場しのぎのような表情か？

で、宙のとった行動は：

「ハハハ」

乾いた笑みを浮かべるだけだった。

「でもね、ちゃんと足し算もしたんだよ」

うんうん、こういうやつらには笑っていて欲しいな～

ロリコンなんかではないが、そう思ってしまうほどの笑顔。

守ってあげたい存在であることは確かだ。

「それよりも教えてよ～」

「教えないよ」

ぶー、と頬をかわいらしく膨らませている女の子の隣で無表情を貫く宙。

内心これが本当に楽しいのでよくよくこの状態で楽しんでいるのだ。

ただ、なんとなく昔のあいつに似ているのも本当の理由なんだが

……

「ロリコン」

「ロリコン」

「ロリコン」

「さて、それなら今日の晩飯はコイツらの分だけでいいか」

ランキング戦から帰ってきたのだろうかと思われるお姉さんたちが食堂に到着した。

その瞬間に俺の心を傷つける発言が聞こえたのでちょっとしたお返しだ。

「今日はね、君たちの好きなものを作ろうと思っている。だから何でも言ってくれ」

「「「はい」」」

あまりレパートリーは少ないけど、これだけ食材があまっているので結構な料理が作れるだろう。

今は目の前で好き放題に言っている女の子たちの要望を聞き入れている。

「「「すいませんでしたあ」」」

うむ、美女たち（一部例外もあり）がそろって俺に頭を下げているこの状況は……なんだか、こう、胸の奥からなんともいえない気持ちたちが湧き上がってくるのを感じる。

楽しい……違う。

うれしい……違う。

じゃあ、なんだろうか？

そう思いあごに手を当てながら考え事していると……

「「もう二度と言いません」「」

別に催促をしたつもりはないのだが、土下座を始めた。

「もういいですよ」

特に気にすることもなかったので、適当にそう言った。

今はこの胸にあるこの気持ちの事を考えるだけで精一杯だったのだ。

ふーむ、なんだろうな」

「って…待たんかっ！」

「はい!？」

急に叫ばれたので何事かと思い返事をする。

「あたしらが土下座しているのに、何も思わなかったのか？」

「はい……そうですが？」

数人の女性の中の一人が代表として質問してきたので答えてあげたのだが……どうもいけなかったようだ。

「殺すか」

「いいわね」

「賛成」

「どう殺る」

物騒な声が聞こえる。

「何しようとしてるんですか、あなたたちが勝手にしたんですよ？」

もちろん、猛抗議するが……ギロリッ！

聞いてくれなさそうである。

この場を何とかすべく、全力で頭を使うが……何もでない。

あああ、どうすりゃいいんだよー！

虚しく、虚しく、宙の心の声は響くのであった。

さてさて飢えた子女どもに飯を作り自分のご飯を食っていたところであった。

本当に久しぶりに自分が作った飯を食った。今までは菓子パンばかり食べて生活していたから、本当に久しぶりだ。

「うむ、ここにきてからうまくなったような気がする……」

別に自慢ではないが、素直にそう思った。

ここにきてから、結構料理を作るようになったからかな？

見はしていたとはいえ、こんなふうになっていたとは……

味

「宙はいるかしら？」

「はいはい」

食事中に上司に呼びかけられた。
特にこれと言った不満はないので問題はない。

「あら、食事中だったの？」

「いえ、問題はありません。ご用件は？」

ついさっきも言ったが、食事中に話しかけられてもこれと言った不満はないためスコールさんに話を促した。
結構食事中に話しかけると怒るやつがここにいるが、俺はその例外。

「アリシアと共にここを叩いてちょうだい」

渡されたのは一つの資料。

場所は……ヨーロッパ。

そして今回の相手はIS委員会の部隊。

「了解です」

どうせ俺には拒否権なんてものは存在しないので黙って従うしかない。

が、どうせやるなら楽しくやらないと……

久しぶりの実戦、試合ではなく本当の殺し合い、それでも楽しむしかない。

これが唯一やる俺のことだから……

「ご期待にそむくようなことはありませんよ」

第91話 次の命令は……（後書き）

次の相手はヨーロッパでIS委員会の部隊。

と言っても、IS委員会の部隊（ISを所持している国の部隊と同意義）です。

こちらの小説の設定ではそういうことにしているので、あしからず。宙の目の前に立ちふさがるのは……だれにしようかな〜ww

第92話 気苦労も多いんだ…

第92話

- ・ 水は方円の器に従う
- ・ 朱に交われば赤くなる
- ・ 麻の中の蓬

この言葉の意味を知っているだろうか？

この言葉の意味はどれも『人は環境に人間関係に感化され、良くも悪くもなる』と言った意味を持っている。もっと詳しく説明すると『赤に交われば赤くなる』は悪い意味で、『麻の中の蓬』は良い意味で使われる。

今の宙に対して使用できるものは…

- ・ 水は方円の器に従う
- ・ 朱に交われば赤くなる

この二つだ。

「はあ」

俺のために空けられた更衣室でISスーツに着替えていたところ

だ。

ちなみにこのISスーツは学園で使用していたものではなく、ファントム・タスク製のものを使用している。

その理由は、データを取りたいから、と言うのもあるし、防御性能のほうは一般のものよりも高いからだ。

やることやることが常に危険が伴うためであろう。

いつの時代の戦争もやっぱり人の命ほど大切なものはないのだろう。

多少ISへの伝達率が下がってはいるが、たいした問題じゃないためにこつちを使っている。

まあ、アリシアは専用のもので使ってはいるがな……

ボタン、と更衣室のロッカーを閉めて鍵をかける。

ガチャリ、ガチャガチャ、ガチャリ、パチンツ、ガチャ……

何重にも何重にも鍵をかける。

南京錠から電子の物まで幅広く、いろんな種類の、特別ピッキング対策などが強いものばかりだ。

これをわざわざロッカーにつける理由はとても簡単。

「これぐらいにしないと、着替えが盗まれるからな……はあ」

そうファントム・タスクの構成員は女が多数である。無論、ISを使えるから、と言う意味合いが強いせいだ。

しかし、男もきちんといる。

ファントム・タスクはもともとISが世界中に広まる前から存在している。よって、男の構成員も存在しているのだ。しかも、確固たる立場を持って……

だから、ファントム・タスク内には『女尊男卑』と言う考え方も『男尊女卑』と言う考えも存在しておらず、ただあるのは……

『完全実力主義』

これだけである。

さて、本題に戻ろう。

宙の着替えが盗まれる。この理由は……飢えているのだ。男に……確かに男だったら他にもいる。

が、いるのは屈強な男、それか偏った男ばかりなのだ。見た目、百戦錬磨の人もいるし、体格がすごい人もいるし、古傷が物凄く多かったり、機械フェチであったり……

とにかく変態ばかりなのである。

そこで男に飢えている女どもにとって宙は格好の餌食であり、憧れの的でもある。

それが、着替えを盗む行為につながってしまったのだ。

最初はもちろんびっくりした。わけがわからなかったし、ISSーツでこの施設の中を移動することほど危険なことではない。

しかもたつぷりと汗が染み込んだものまで盗まれる始末。

恥ずかしいどころの問題じゃない、一種の羞恥プレイに近い。

「結局、洗濯物も自分で洗わないといけなくなったし……自分の部屋にいたときだって心が休まるところがない」

そのため、この一ヶ月。

ため息をよくするのであった。

「意外と早かったな」

着替えも済んだので格納庫に移動すると、先に来ていたのであらうと思われるアリシアに話しかけられた。

「そうだな、そろそろ道も覚えてきたからな」

「ふっ、男に方向音痴はいないと聞くが？」

「本ばかりの情報をあてにするなよ。男にも方向音痴ぐらい入るさ」

宙の言ったとおり、アリシアの趣味は読書である。

今だって、壁に背を預けながら片手で本を持ち読んでいたところだ。

意外と知識量も多く博識で……こいつのことを知れば知るほど、すごいやつだと感心してしまった。

「じゃあお前は方向音痴か」

「うーん、たぶん違うと思うぜ。道がわからなくなったことはあるが、迷ったことはない」

ちなみに知っているとは思うが、なぜ女のほうが方向音痴が多いかという……昔からの習性でオスはよく巣から出て狩りに行くため巣に帰るための方向感覚は鋭くなり、メスは巣でオスの帰りを待つから方向感覚が鈍くなってしまったためである。

「そうか」

興味なさげに呟き、また読書を始めたアリシア。

美女だけにその風景はとても画になっており、不覚にも見とれてしまった。

まあ、そんなことをしていると……宙の視線に気付いたアリシアがニヤニヤと笑い始めることになる。

「お前は本当にそのギャップさえなければ、文句なしの美人なんだけどな」

「文句なしの美人と言うことは、私はお前から見て美人なのだろう？」

「あ」

自分の失態に気付いたので、素っ頓狂な声を上げてしまう。

「そうかそうか」

また、にやりと笑うアリシア。

「前言撤回する」

「断る」

取り消そうとはしたものの、速攻で断られてしまった。

たぶんだが、この先この発言は換えられることはないだろう。その事実、また……

「はあ」

ため息をついてしまった。

「準備はいいな？」

「いつでも」

ハッチを開けてもらい出撃準備をする。
と言っても、バイクなのだが……

「なら、先に行く」

「ついていきますよ」

この作戦、まずはここからヨーロッパに移動しないといけないのが最大の欠点だ。

しかし、ISを使ってしまえばアジトの場所が特定される危険がある、ある程度はなれたところでISを使い、アリシアのVOBで一気にヨーロッパまで移動すると言うのがミッションプラン。

豪快にエンジンをふかし、先に跳び出て行ったアリシアの背中を追うように、俺もバイクを走らせた。

第93話 ちょっとした苦悩 信じるのは…

第93話

ISスーツの上にライダースーツを着ているのもどうかと思うが……

とにかく、目的に到着した。

もうライダースーツなんて必要ないので脱ぎ捨てる。

このとき、不意にアリシアの生着替えに目を奪われたのは秘密だ。確かに女性はまだ見飽きたような気がしたのだが、なぜか目を奪われてしまった。

不思議だ……、と考えていると…

「準備はできているな？」

「……………」

「聞いているのか？」

「あ、ああ、わかった。できている」

と言う会話になっていた。

アリシアは不審気に表情を変えつつもISを起動させVOBをコールした。

俺はそれの上に乗る、空気抵抗を受けないように姿勢を低くする。

『こちらアリシアだ。以降はコードネーム“A”とする。ミッシェンプランに従い、VOBでの強襲を仕掛ける』

『はい、こちら管制室です。了解しました。作戦行動を開始してください』

『了解』

いかにもと言うかどこかで聞いたことのある会話内容だったが、これが普通だ。

一応、俺もしないといけないのだが…如何せん、馬鹿なお姉様たちのおかげで決まらない。普通なら個人が決めたりイニシャルで決めるもののだが、決まらない。

もう『宙』だから『S』で良いのではないのか、と言ってみたものの……

「「それはできない」」

「かわいくない」

「おもしろくない」

「男の子なんだから個性を出そうよ」

「Sはたぶん多かったはず…」

「そ、そうよ。多かったはず！」

物凄い言葉のラッシュに俺の意見は問答無用で却下された。

その後も俺の意見は聞いてくれず、『会議は踊る』なみに決まらない。

『こちら宙だ。コードネームはないから、“宙”でかまわない』

正直なところ、俺は通信をしないのでコードネームなんてたいしたものはいらない。

今ほしいのは自由な時間だと言うのに…

ゴオオオオオオ

突然、エンジンの音が鳴り響き、噴出口から火が吹き出る。

「行くぞ」

「ああ」

轟音とともに空気を引き裂き空を翔る。高感度ハイパーセンサーのおかげで視界に問題はないが、この光景はすごいものである。前のときは海だったので変化はなかったが、今回は地上の上を飛んでいるので景色がどんどん変わっていく。

大地が緑に染まったり、茶色に染まったりと、忙しく色が変わっていくのは飽きないもので……見ていてなんとなく心を揺さぶる何かがあった。

しかし、その楽しい時間はすぐに終わった。

海に出たのだ。

確かにヨーロッパに行くにはしかたのないことなのだけれど……不満だ。

同時刻 I S 学園

あの事件から約一ヶ月がたち、徐々に生徒たちは落ち着きを取り

戻し始めたところだった。

ようやく生徒たちの笑顔が見られるようになったのを見て教師たちが喜んでいられるのも事実であった。

しかし、悲しみは終わらない。

皆、『彼』の話はあまりしない。それどころか、自ら避けるように会話をしている。

どこかよそよそしく会話をしていた。

そして、あの三人は……

「やっと元に戻った感じがするわね」

「けど、まだまだかな」

「そうですね」

この状況を元に戻そうと四苦八苦していた。

本当は一番落ち込みそうな三人なのだが、いや、だからこそこの状況を改善するために動いている。しかし、やはり言うべきか、進んで『彼』の話はしない。

「結局あいつの考えは、わからずじまい。……何がしたかったんだろうね？」

「うん、わからない。けど、私は信じるよ。私たちを助けに来た、と言うのは自惚れかもしれないけど……信じるだけの意味はあると思う」

優の問いに答える智花の瞳には確かな強さがあった。

「私はもとよりあの方を慕う気持ちは変わりませんから」

「それはどういう意味なのかしら？」

意地の悪い笑みを浮かべて優は問いかける。

「教えませんよ」

しかし、葵はそれを冷たくあしらった。

「そういえば……ラウラちゃんはどこに言ったのかな？」

「私は知らないわよ」

「それはですね……確かドイツに一度帰国したそうですよ。ISのデータを取るために、と言っていました」

「そうなんだ」

ISは自己進化するように設定されているので、データがどんどん変わっていくのだ。

ましてや『シュヴァルツェア・レーゲン』はトライアル段階の機体。ドイツ本国にとってもこのIS学園で蓄積したISのデータはのどから手が出るほど欲しいものなのだろう。次期主力IS候補なのだから。

ちなみに、この三人と一夏、筭のISに関してはどこの国に所属するかはまだ決まっていない。どこの国も篠ノ之束が作ったISのデータ、技術が欲しいのだろう。

本当の目的を偽り変な理由をつけて国の代表候補にしたい、と言う魂胆が透けて見える会議が容易に目に浮かぶ。これが確かなら、

人間とはこんなにも醜いものなのだろうか、と思えるぐらいだ。

「しかし、まゝ。あのラウラがあんなことになるかわね」

「なると思うよ普通。ラウラちゃんは良くあの人のことを知らないから…」

「一つ言わせてもらうけど、智花より私のほうが付き合い長いからね」

「関係は智花様のほうが深いですけどね」

「ほほう、あんた、私にけんかを売っているのかしら」

「それは良い考えですね。最近は本当に強くなった気がしますので腕試しでもしたいと思っていたところです」

「はいはい、ケンカはダメだよ。今はそんなことをしている場合じゃないからね」

優と葵のケンカは智花にとめられた。

今の会話からわかるように、いつも以上に専用機持ちや普通の人達もISの訓練、授業に一生懸命になっている。これは良い傾向なのだが、やはり…『彼』の影響だと考えると、どこか嫌な気もちでもあるのであった。

第94話 ISに罪はない（前書き）

雑談

宙「なあ、数週間前によく気が付いたんだが……」

智花「なに？ 宙君」

宙「いやゝ、シャルロットとお前の声って……にてるよな？」

智花「……………（中の人と同じなんていえない）」

第94話 ISに罪はない

第94話

真っ暗で無機質な部屋。

そこでは会話が繰り広げられていた。

「神代 宙か。……本当に使えるのか？」

そこでは一人の男性がそう言っていた。

「Mと同じようにナノマシンを入れたほうがよかったのでは？」

前の男性に便乗するかのように他の男性が言葉を続けた。

「いいえ、それは必要ないと思います。彼はすでにあそこに居場所を見つけていますので」

そんな男二人の質問に……綺麗な金髪を持った長身の女性が応えた。

この部屋の紅一点ともいえるべき美貌を持つ彼女はその言葉を言った後、落ち着いた様子で姿勢を正す。

「それに……アリシアか。なかなか、あいつも使えるもんだ」

初老の男性が次の話題をあげて

「右に同じく。彼女は一番使えますよ」

また、他の男性がそれに便乗する。

ここまででこの部屋にいるのは、5人。しかし、開いている席は5個もある。

「おや？ 君が人をほめるなんて珍しいじゃないか」

「ふふ、そんなことはありませんよ。ただ、彼女は絶対に私たちに逆らせませんからね」

「黒い黒い」

「あなたにだけは言われたくありませんね」

話をしている人達の顔は良く見えない。

そして……

「次の一手は、あれでよろしいですね？」

女性が最後の確認とばかりにそう言った。

「異論はない。あれなら神代 宙もこちらへ完全に落ちるだろう」

「アリシアと同じ使えるやつが二人になるのか。これでさらに世界は……」

最後の言葉は静かに闇に消えていった。

五人のうち男性だけがいやらしく笑いだ。女性は無表情のままだった。

「宙。もうすぐつく、あちらも用意ができているはずだ。戦闘準備をしておけ」

「ああ、もうチャージはすんでいる。敵を見つけ次第データをよこせ」

VOBの上に乗りながら、大正を前方に展開させて射撃の準備をする。

さらに超高感度ハイパーセンサーを起動させ、索敵を開始する。スコープ状のレクテイルが右目に当てられたので左目を閉じ、精密射撃の準備を終えた。

「さてと、これより俺はミッションプランに従い。敵拠点への砲撃を開始するが……」

「どうした？」

不意に言葉を止めた俺にアリシアが反応する。

「が、だ。アリシア」

「だからどうした？　もう時間はないぞ」

「拠点、と言うことは……主要施設を破壊すればいいんだな？　必要最低限の殺しはやらなくていいのだろうか？」

「ふっ、お人よしか。まあ、ミッションに影響が出ない程度ならかまわん。遠慮なく撃つがいいさ」

いろいろと言葉に矛盾を感じるが、そこは気にせず。

「了解」

それだけを言って、視界に入った敵の拠点に狙いを定める。

まず最初に狙うのは、格納庫。

それじゃあ、始めますか……狙い打つぜ

某機動戦士00のノリでトリガーを引き、それと同時にVOBから離れた。

アリシアもVOBを収納して通常推力に切り替える。目標に着弾したのを確認して両者ともイグニッション・ブーストで一気に基地との距離を狭める。

この基地はヨーロッパ最大のIS製造または開発工場だ。EUで開かれるイグニッション・プランに先立ち開発されたここは世界有数の大規模な工場でもあり、最新の技術が集まった場所でもある。

そのため、ここにはIS委員会の部隊が展開しており常時警戒をしていた。

まあ、それでも警備にまわせるISがないこともわかった上での作戦なんだけどな……

警備が薄いと言うことではないが、所詮IS二機で襲われることなんて考えてもなかったのだろう。容易に遠距離射撃での目標の破壊ができたり、こうして接近していたりと簡単にことが進む。

「反応が遅いな」

ようやく発進した戦闘機——『ユーロファイター タイフーン』

を見てアリシアが皮肉そうに呟く。

ユーロファイター タイフーン——まさにヨーロッパが誇る最強の戦闘機と言ってもいいものが出てくるところはさすがと言うものだろう。アフターバーナーを使用せずとも超音速飛行ができるスーパークルーズ性能を持っていたり、と本当に実践的な機体なのだが……三次元機動のできない戦闘機ではISを止めることなどできない。

一応、殺しの許可も出ている。

「だからって…」

殺すわけにはいけないので、できるだけ脱出ができる程度に破壊していく。

アリシアは普通に撃ち抜いているが……

「やはり……甘い男だな。おまえは……」

「人を殺しているISに罪はない。俺はコイツの力を使って人を殺したいと思わない」

「すでに何人か殺していると思うが？」

たぶん、さっきの格納庫の狙撃でも直撃か間接的に人を殺しているはずだ。

「……………それでも、目の前にいるやつだけは救ってやる。俺なりのけじめだ。それに人を殺すのは最終的に人間だろ？」

「そうだな」

「殺した実感を知ってしまったえば、俺はもう二度と俺にはなれない」

「……好きにするが良い」

戦闘機のたぶん第一波を対処したところで、基地の重要拠点と思われる場所に予め量子変換^{インスタール}していたスコールさん愛用の爆発するISのナイフを両腕に呼び出し、投げつける。

爆発音があたりに響き、建物は崩壊。人の叫び声が聞こえる。

ISのハイパーセンサーが逃げ惑う人達を捕らえる。見たくない。見たくないんだ。こんなこと……

しかし、やらなければならぬ。俺にはやるべき事がある。

第94話 ISに罪はない（後書き）

さて、ひさしぶりに後書きを書いてみたいと思います。
ちなみに前書きのは完全にネタですよw

俺、高校生です。なので夏休み中。女はいないのであまり忙しくなくすごせそうです。

そして更新もできる……そう思っていたときに私にもありました。
ネトゲにはまってからはほとんど小説が書けず、更新が遅れてしま
ってスイマセン。（期待してくれている方がいればいいのですが…
…）

この先の展開は……お察しの通りだと思います。

ただ、ちょっととした難しいところがあったので更新ペースが少しだ
け遅れると思います。

その難しいところを一言で説明すると…

『姉妹機が何だー！ーっ！！俺流にしてやるわ！！』

と言うことです。わかる人にはわかると思います。

と言う訳なのでこれからがんばります。

第95話 覚悟（前書き）

うーん。なぜこのようなことを書いたのだろうか？

あまり残酷にならないように書き換えたけど……書き換えなかったらやばかった：

第95話 覚悟

第95話

「出撃の要請があった、急いで出撃の用意をしろ」

ドイツの誇る最強と謳われる――現シュヴァルツェア・ハーゼ隊の隊長『クラリッサ・ハルフォーフ』の命令は隊員たちにとって絶対である。

疑問を持つこともなく、素直に受け止め、彼女たちは機敏に動く。完璧だった。一糸の乱れもなく彼女たちはもくもくと命令をこなす。これこそが彼女たちが軍人である証拠であり、誇りでもあった。

「ラウラ隊長には教えなくていいのですか？」

そう、ここにラウラがいないことを除けば……

「……………」

クラリッサは黙ってしまふ。その神妙な顔つきに隊員のほとんどが事情を察したようだ。

先日から一時的に帰国しているラウラ・ボーデヴィツヒは現在この部隊にいるはずだった。今は少しだけIS関連の事情で席をはずしている。

「未確認情報だが、あいつ《……》が関わっているらしい。隊長が出るべきではないと私が勝手に判断した」

「……わかりました」

隊員の一人が代表して返事をする。

その間にも用意をしているこの人達には脱帽物である。

「できたな。……いくぞ」

人がごみのようだ。

かの有名なおっさんのセリフをふと思い出してしまった。

残響の腰武器『黒羽』を撒き散らしながら施設を破壊して回る。管制塔や通信施設、それにその他の施設をどんどん破壊していく。そのたびにちらちらと見える人が逃げ惑う姿……こんなことをしていたら頭がどうにかなりそうだ。

『黒羽』の本来の性能であるジャマー兼フレアもしっかりと働いているので……さっきからしきりに戦闘機が撃っている『サイドワインダー』や戦闘機自体に使用されている赤外線搜索追跡システム——IRSTを無効化している。

そもそもISはPICだけを使用していれば赤外線なんてものはないのだが、移動手段はPICではなくジェットエンジンなどを使用しているので赤外線を出している。特にアリシアは噴射地表^{サーフェ}滑走が基本移動なので赤外線を放出しまくりと言う……

ドオオオオオッ！

遠方より聞こえてくるのはたぶんアリシアのグレネードの音だろう。アリシアの性格上、狙いが外れることはほばない。狙われたら今日は不幸だった、そう思ってもかまわない。

「これで破壊し終えたか？」

「あと少しだな……」

「そうか、それじゃあ俺は……」

「好きにするがいい」

アリシアには俺の考えていることがわかっていようだ。本当に油断のないやつ……

「了解だ。好きにする」

そう言ってアリシアの方向とは逆の方向へと進む。

俺たちが破壊して通り過ぎた方向だ。これで少しでも罪滅ぼしになればいいのだが……

崩れた瓦礫を剣で切り崩したり、パワーアシストを使用し瓦礫どかしていく。もちろん運んだ瓦礫は人がいないことを確認してからそこに置く。

人を助けようとしているわけではない。ただ、人がいればいいな、そう思ってやっていることだ。人を殺ろすのは怖いが……もっと怖いのは助けることができる命を見捨てることだ。

それがたとえ……人の死体を見ることになっても……

ほら出てきた

顔面は碎けて顔かどうかもわからなくなっている。黒っぽい髪は頭蓋骨が碎けたようで血で真っ赤に染まっていた。かすかに空気の音が漏れる音が聞こえる。生きているのだろう。

普通の人間なら……、そう思っていたときもあった。普通の人間ならここで口を押さえたりすることができののだろうか、と。

しかし、俺はもう何も感じなくなっていた。人の死を見ても何も感じないし、死に対しても恐怖を抱かない。いつからかは知らないが、人として大切なものを何か失ったようだ。

「……ふう」

息抜き程度にため息をつく。

人を助けるのも楽じゃないね。特にこういう場合は……

俺には目の前にいる人を助けることができない。

ならばどうする？

殺すしかないだろう？

もう何も感じないよ。人間用の拳銃――Beretta 92F
Sを取り出し、俺はその人の頭に向けた。せめて苦しめないように、
と一撃で殺すために俺は確実に頭に拳銃を向けて引き金を引く。
罪悪感などなかった。これが俺の優しさだと割り切った。けど、
大切なものを一つ失う感じがした。

「言っただろう？ 自分を追い詰めるだけだ、と」

「わかってるさ。けど、これしかできないんだ」

自分の無力さなんてもうずっと昔から呪っていた。所詮一人の力
なんてこんなもんだと、守りたいものがあっても自分より強いやつ
らには通用しないことを知った。

ピピピッ！

突然の警告音。アリシアもこの音に反応し、俺の方向を向く。

『二時の方向より敵の増援です。ISは二機で大型の爆撃機の編成です。規模は……小隊以上中隊以下。ISを配備しているあたり特殊部隊かと思われます』

「二時の方向だとっ!？」

思わず口に出してしまった。なぜなら二時の方向と言えば、ドイツ。そして特殊部隊といえば……シュヴァルツェア・ハーゼ……

「遅すぎる増援だな……宙、迎撃するぞ」

俺の動揺を無視するようにアリシアはそう言う。

この作戦の本当の目的は、ヨーロッパのこの工場をISで襲うことでヨーロッパの国々のISをまとめてつぶすこと。

『宙。大丈夫ですか?』

「気遣いはいらん。弾薬も十分にある。継続しての戦闘を可能と判断した」

厳しく突き放すアリシア。

『ですが……迷いを持つ人は……』

死ぬ、とでもいいのだろうか。自分でもわかっている。そんな彼女の気遣いはともうれしかった。

「……俺は……大丈夫だ」

わかつている。俺は……

「やるよ。詳しい情報を頼む」

『わかりました』

第95話 覚悟（後書き）

どーでした？

前書きにも書いたとおり、何かに感化された結果・・・変な描写を書いてしまった。しかし、確実にR18の範囲に入っていたので書き直しました。もちろんグロイ方向で・・・

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第96話 策略（前書き）

お待ちせです。

ううう、最近うまく書けていない気がするゝ

でも、がんばる！

第96話 策略

第96話

ああ言ってしまったので、もうやるしかない。

しかし、まんざらでもないと思っている自分もいるので混乱しそ
うだ。

「ISは二機、大型の爆撃機と言ったか」

『はい』

「爆撃機の種類は？」

『スピリットかと思われます』

B-2 スピリット——全身翼のステルス爆撃機だ。一応最新機
ではあるがその開発にかかる費用と整備製の悪さから少数生産され
た爆撃機である。

なぜアメリカの爆撃機がシュヴァルツェア・ハーゼに配備されて
いるんだ？ そしてなぜここを爆撃する必要があるんだ？

「気をつけろよ」

「お前に言われなくてもそのつもりだ」

目の前に広がっているモニターの中に爆撃機の編隊が見える。数
は…15機。

十五機でここを面制圧するつもりか？ そんなことをしたらここ

の工場は使えなくなるのに……

今だに敵の意図が読めないので注意をしよう。

「そしてあれが……シュヴァルツェア・ツヴァイクと、始めてみる機体だな」

ラウラの専用機『シュヴァルツェア・レーゲン』と似た機体と、黒を主体とした機体がもう一つ。

搭乗者は知らない女の子だが気をつけたほうがいいはずだ。

シュヴァルツェア・ツヴァイクの武装は見た感じレーゲンとあまり変わりはない。大型のレールカノンとプラズマ手刀を出すであろう両腕の袖のような部分、それにレーゲンと同じアンロック・ユニット。どれもが見たことのある武器だ。唯一見たことのない武器はアンロック・ユニットに付けられている大剣。どうやらツヴァイクは近接戦闘主体の装備できたようだ。

そしてもう一つのISはレーゲン、ツヴァイクと同じタイプの装甲を持っていることから『シュヴァルツェア』の名をもつのだろうと予測できる。装備はプラズマ手刀ではなく、右腕に楯のような武器がついているだけ、アンロック・ユニットはなく、シュヴァルツェア系の細いシルエツトがそのままでている。ただバックツパックとして一対の棒状の何かを取り付けられていた。用途はわからない。銃かもしれないし、ブースターかもしれない。

「何が来てもかまわん。作戦は成功させるだけだ」

「やるしかないよなあ」

徐々に近づいているシュヴァルツェア・ハーゼ隊。

迎撃体制を整えるファントム・タスク勢。宙は大正と三弦をチャージし、アリシアはグレネード・両腕の武器をクローズし右手に『

R G O 1—P I T O N E』レールガンと左肩に『049ANSC』スナイパーキャノン、右肩にレールガンをコール。

「弾幕は任せる」

「ちゃんと当てろよ」

難しい注文をしてくるアリシアに苦笑いで応える。しかし……「やる」と言う意味だけは目で伝えた。あいつが気がついたのかは知らないが……

「いくぞ」

俺に背中を見せるように前に出たアリシアは、とても力強く見えた。

女のくせに……男前過ぎるよな……

なんとなく同姓が惚れる理由もわかった。これと言ってたいしたことではなかったが、なんとなくうれしく感じてしまう。知らない一面を見れて、と言う意味だろうか？ 良くわからない感情だった。まるで「後ろは任せた」とでも言わんばかりの後姿に頼もしく感じながら、照準は彼女らに向けられている。爆撃機ではなくISのほうへ。

チカッ、とアリシアの右腕の武器と右肩の武器の銃口が光り、高速で銃弾が射出された。また左肩の武器は轟音を周囲にとどろかせながら銃弾を放つ。

敵のISは回避行動を取り難くその銃弾を避けた。しかしアリシアは次々に銃弾を放っていく。時々爆撃機を守るためなのかスナイパーキャノンの弾をツヴァイクがプラズマ手刀で切り落としていくのが見える。

もう一つのISはその楯で攻撃を防いでいた。

「宙、爆撃機を先に狙え。何かあるぞ」

「了解」

あれほどまでに爆撃機を守ると言うことに違和感を感じた。それはアリシアも同じだったようだ。

照準をISから爆撃機へと向ける。

「何っ!？」

急に方向転換したり、急な加速をし始める。

これは……

どういうつもりなのかまったくわからない。よって、対処ができない。

「かまわん! 撃ち落せ」

何を根拠に言っているのかよくわからんが……他にいい方法も見つからないのでそれに従う。

「何が起こつても知らんからな」

「知るか」

責任を完全に放棄しやがった……

心の中では愚痴を呟いたが……口には出さず引き金を引いた。

轟音と同時に放たれる黒い閃光。それは一直線にスピリットに向かい……命中した。いや、避けなかった、そう言ったほうが正しいはずだ。

突っ込んできたスピリットは四散した。が、その後に起こったのは普通の爆発じゃなかった。

ほとぼしる強烈な白い閃光。それに物凄い爆音。

「くうあ……ぐうう……」

「ちっ……あゝあゝあゝ」

宙もアリシアともども苦悶の声を上げる。

それは当たり前だった。遠距離戦用に視覚と聴覚を強化していたのだ。そう、それはまるでスタングレネードを目の前と耳のすぐ横で爆発したのと同じことだった。

「そこだっ！」

「甘いすっ！」

シュヴァルツェア・ハーゼのふたりは最初からこれを狙っていたようだ。

爆発したあとすぐに眼帯をはずし、ヴォーダン・オージエを起動させて接近する。

もちろん、視覚と聴覚を奪われた宙たちにはその音は聞こえていない。

第97話 情け? (前書き)

遅くなってスイマセン。

第97話 情け？

第97話

『アリシアっ！』

『わかっている』

目は閉じているがISのセンサー類は頭の中に出すことができるのですぐさま呼び出す。

感覚としてはまぶたの裏に見えるようなところだ。

しかしあの戦闘機に詰まっていた火薬の量が多く、熱探知のセンサーは使えなくなっていた。

今は俺とアリシアとの位置確認だけだからいいけど……もしあいつらの後にあるスピリット全部にこれが積まれているとしたら……そう考えただけでも恐ろしくなる。

『退くなよ』

相変わらず物凄いことを簡単に言ってくれる。けど、もうすでに慣れている。

『言われなくてもわかっている』

二人ともお互いの位置を確認した後、さらにタイミングをプライベートチャンネルで確認し、一緒に離れる。

視界や聴覚を奪われた今、お互いが近くにいて見方を撃つことの
フレンドリーファイヤ
ほうが怖い。

「ホントやってくれたよな、お前らあ！」

まだ視界がチカチカするが武器を呼び出し、戦闘体制を整える。
俺は三弦を一つだけ長剣にした。

アリシアは今使用していた武器をしまい、いつのも武器を呼び出した。

「調子に乗るなっ！」

なんとなくだ。なんとなく攻撃を予想して回避する。

いや、攻撃を相手がしているのかは知らないが、ランダムに回避行動を取る。

ただの時間稼ぎにしか過ぎないが今はその時間稼ぎが命綱だった。

何回アリシアと近接戦闘していると思ってるんだ。この程度でひるむわけねえだろ！

たが目と耳が使えなくなっただけだ。この程度でやられてたまるか！ 私にはやらねばならんだ！

宙とアリシアは少しだけ目を開けた。未だに視界ははっきりとしないがそれでよかった。視界からはいる情報はあまりたよらずに判断要因として使うのだ。敵が来たときに視界に入る影のようなものだけで攻撃を的確に回避する。

基本的に信じるものは「己の勘」と「経験」。宙はケンカで自然と身についたそれ、アリシアは今までやってきた厳しい訓練で培ったそれをフルに使用していた。

その動きは現役の軍人である二人を相手にするのは不十分かと思われたが、十分通用していた。

「ちょこまかとおっ！」

「いい加減にっ！」

ツヴァイクの大剣をアリシアはかわし牽制の射撃を時々入れる。
アンノウンの機体は楯状に見える右腕の武装からプラズマの刃を出し宙に切りかかっているが、宙はそれを見えているかのように長剣で受けとめて三弦の銃口を相手に突きつけた。

「捕まえた」

すぐにトリガーを引いて銃弾を発射するが、アンノウンの機体は身をひねり回避する。

音は聞こえないが爆風がないことに気が付いた宙は「やるじゃん」と呟き、またランダムに回避行動を取り始めた。

「よし、見えてきたぞ」

「こちらもだ」

徐々に視界が回復する。それに伴い表情も柔らかくなっていった。そして、見えるようになった目でもう一度敵を確認する。

「あんたが、クラリッサ・ハルフォーフか？」

以前からラウラから聞いていた話し相手、それとファントム・タスクでもらった情報を照らし合わせてみた。

「聞いてどうする」

「いや、ただ見方殺しの嫌な上官だな、と思ってさ」

スピリットに特攻させて俺たちの目をくらませることまでは良かったのだが……パイロットがどうなっているからは知らない。

「存外、甘い男なんだな」

「そうだろ？」

アリシアがクラリッサに言葉に反応して相槌をうつ。若干うれしそうだ。

「……気にすることはない。あれはすべて無人だ」

その言葉に、ほっ、とするのはダメなのだろうか、と考えたが……すぐに思考をやめた。答えは出そうになかったからだ。

「そうか、クラリッサということは否定しないんだな」

話を変える。

「隠すつもりはないさ。どうせばれていることぐらいわかっている」

「ふっ」

アリシアがその言葉に鼻で笑った。俺はそのことが良くわからないので、不思議そうな表情をしているのだろう。

そんなときだった。確実な敵意を持ってこちらを見ている人が一人……あの女の子だ。

「そちらは誰だ？」

「人に聞く態度ではないですね」

丁寧な口調ではあるが意外と辛口だった。

その女の子は栗色のポニーテールで幼い顔だ。

「こちらとしては名前とI S名だけ教えてもらえればうれしいんだけど……」

「それも知ってどうするんですか？」

「お前は俺の名前を知っているだろう？ 平等にしようぜ」

屁理屈かもしれないが、知っておきたい気持ちはあった。

『何を企んでいる』

勘の良いアリシアにはすぐにばれてしまった。

『別に良いだろう？』

そう、別に戦闘前に名前を聞いてはいけないということはない。だからといって、聞くやつも少ないが……

『個人的な興味だよ』

『未練はないと言ったはずだが？』

『そこにつっこまれるのは……きついな。けど……知っていたほう

が俺にとっては得なんだ』

俺のほうを見るアリシアは視線だけで「くだらない」と言い、敵を見据えた。

知らない人のほうもクラリッサのことを見ている。そして、何かを覚悟したのだろう。こちらを見たときの目はとても強い何かを感じる。

「どうせ、公表しないといけないのですから……言いましょう」

どうやらこの人は礼儀正しい人なのだろう。俺たちは敵なのにも関わらず、彼女は普通に姿勢を正した。武器を構えたりはしていない。

「このISは《シュヴァルツェア・リヒト》。そして私はカティア・ファティです」

第98話 シュヴァツェア・ハーゼ（前書き）

遅くなってスイマセン。

これからの更新速度はこのぐらいになるかと思っています。ごめんなさい。

第98話 シュヴァツェア・ハーゼ

第98話

IS名は《シュヴァルツェア・リヒト》ね……さしずめ《黒い光り》と言うことか。なかなか言い名前じゃないか……操縦者もなかなか礼儀のただしい子だったしな……環境は大丈夫なのにね。まったくあいつも何でそんなところにいて、あんなふうになってしまったんだろう。

「それじゃあ、やろうか……」

俺としては聞くこともなくなった。だからと言って話を打ち切り、戦おう、というのはどうかと思うが……

「とっくの昔に準備はできているんだがな」

呆れたような顔をしてアリシアは言う。

別にそんな顔をしなくても言いじゃないか……

そして、この戦闘は仕切りなおされた。

「宙、間違ってもスピリットだけは落とすなよ」

「はあ、お前は保護者か。……落とすかよ、あんなの二度目は勘弁だ」

そうはいってるが、たぶんやる時はやると思うので一応、一定以上の刺激が目や耳に入らないように設定を施す。これで準備は完

了。レーダーも熱源探知ではなく電磁波にしておいた。まあ、爆発したときにプラズマが発生していたらどうにもならないけど……

「行けるな、宙」

何を思ったのかは知らないが、話しかけてきたアリシア。

「ああ、そのつもりだ」

「それは良かった。行くぞ」

その言葉と同時にイグニッション・ブースト。一気に前方にいたクラリッサとカティアにおどりでる。俺もそれに続くかのようにイグニッション・ブーストで接近する。

アリシアの駆る《シュープリス》の一つ前の《アリーヤ》の機体の開発コンセプトは『高速近距離戦を想定し、瞬発寮に特化した高機動体』だ。

そのシュープリスの隣をたやすくクラリッサはぬけて、俺の前へと現れた。

『すまない、そちらで相手をしていてくれ』

『問題ない。……お前が早く倒してこっちを手伝ってくれたらな』

冗談を少しだけ含めていってみた。

『言ってる』

冷たく無視された。

が、たぶん助けてくれるだろうと思っている。

あいつは何だかんだで……やさしいからな……

「いいだろう、俺が相手になってやる」

「いい心がけだ。シュヴァルツェア・ハーゼ副隊長……クラリッサ・ハルフォーフだ」

名乗った。と言うことは……名乗らないわけにはいかない。

「ファントム・タスク実働部隊……宙だ」

名乗った後、挨拶がてらに三弦を三回放った。

一発目は避け、二発目は大剣で切られ、三発目は大剣の腹によってふせがれる。

だが、視界はふさがれていた。そこを狙って銃を剣に変形させ切りかかる。

「くっ……」

「まだまだあつ！」

四弦を全て開放し切りかかる。赤羽も自動で近接戦闘用になっていた。

両腕の剣を振るう動作と共に四弦がクラリッサを襲う。時折、体を回転させることによって全身で攻撃を放った。

四方八方から迫り来る攻撃を丁寧に回避するか防ぐように対処していくが、如何せん。手数で圧倒的に負けているのだ。防ぎきれないにも限界がある。

剣撃と同時に四弦のビーム刃がクラリッサを襲い、剣を返すときにも四弦のビーム刃が襲ってくる。また、戦闘中の回転により赤羽

による横一闪。その回転を利用し、回し蹴りによる踵とつま先からのビーム刃。

ありとあらゆる方向から、複雑なタイミングで来る攻撃を全て防御や回避することなんて不可能だ。世界最強のあの人ならやりかねないが……

それでもクラリッサを苦戦させるのには十分だった。

「しつこいっ！」

距離をとるためにワイヤーブレードを放ったが、逆にそれを三弦をクローズしてまで掴み、引き寄せる。

「無駄だ。あきらめろ」

このときすでに……宙の實力は相当上がっていた。

毎日のように繰り返される物凄い訓練。それに加えてアリシアとの模擬戦。自分と同等かそれ以上の相手と模擬戦をするのだ。否が応でも簡単に實力はあがってしまう。

それも……アリシアとともに……

「お前が相手か……」

「不服ですか？」

「いや、私のほうがアイツよりの強いんだが……良いのか？」

ちなみに、アリシアと宙の戦績は……一回だけアリシアのほうが勝っている。

まあ、確かにアリシアのほうが強いが……

「私が負けるとしても言いたいですか……なめないでください」

カティアもカティアで、精鋭部隊の中から選ばれている。実力は推して測るべきだろう。

「ふっ、なめるだと……馬鹿なことを言うな」

強くにらみつける。

「私は敵を侮ったりはしないさ」

侮らない、驕らない、それがアリシアだ。

決して敵を下に見ない。それは作戦を完璧に成功させるためだった。

そしてそれが彼女の誇りだ。

完璧に……完全に……それがアリシア・ベルリオーズだ。

それから無言のまま武器を構える両者。

緊張がその場を駆け巡る。しかし、その緊張もすぐに終わる。

アリシアが先に仕掛けたのだ。両腕の武器の照準を合わせてトリガーを引く。

綺麗にそれは回避されたが、攻撃は終わらない。

次々と射出されていく弾。それをカティアはかわしきれずに被弾する。しかし、あたった数は少なくダメージは微々たる物であった。

こいつは……完璧とはいえないが、弾幕の薄いところに移動して
いるだと……

確かに私の武器はアサルトライフルだが……ここまで避けられるも
のなのか……

第98話 シュヴァツェア・ハーゼ（後書き）

誤字脱字訂正などありましたらよろしくおねがいます。

第99話 恐れ

第99話

アリシアがカティアの技術に驚いていたところ、宙はクラリッサに詰め寄っていた。

「諦めろ、俺には勝てん」

三弦を離してまで握ったワイヤーブレードだ。早々簡単に離せるもんじゃないかった。

引っ張り上げると同時に、三弦を突きつけた。それはやはり大剣の腹によって受け止められたが、四弦の攻撃は防げなかったようだ。ワイヤーブレードを持っていた方の四弦を同時に突きつけていたのだ。それは肩口に深く刺さっている。

「ぐう」

クラリッサは苦悶の声を上げる。表情も噛み締めているような表情だ。

だが、宙はそれ以上に気になっていることがあった。迷いすぎだ。

「手加減をするな。お前を殺すぞ」

そう、俺に攻撃することをためらっているように見える。

「お前それでも軍人か？」

軍人にとっては屈辱的なセリフだろうに……クラリッサはそれを聞いても微動だにしなかった。

「貴様は……なぜあの方を裏切ったのだ」

クラリッサがそう言ったのは、四弦を肩から抜いた頃だった。痛みで顔を歪めずに、俺に向かっていった。

「関係ないだろ」

しかし、一蹴。クラリッサを蹴り飛ばす。

「本気を出せ。殺すぞ」

声を低くして殺気を放つ。今日二度目の言葉なのに……クラリッサの目は変わらなかった。

……どうもこいつも俺が裏切ったと思っているのか？ なぜだ

……

「あの方の話では……お前は裏切るようなやつではないはずだ」

「だから言っただろう？ あれは全て演技だと」

「演技だと見抜けないお方ではない」

どこからそんな信頼関係ができていいのかは知らない。だが、そう言っている目が怖いと感じた。

なんとなく感じる恐怖……いや、確実に俺はその目を恐れていた。手が震える。それは怖さからではなく、怒り？ 悲しみ？ よくわからない。ただ、わかっているのは怖いからではない。

「ふざけるな。……くだらないんだよっ！」

さらに接近し、タツクルを当てる。

「そんなもん綺麗ごとだ。俺は裏切った、それは事実だろうが！」

何らかの感情に任せて右の三弦を振るう。右薙ぎの太刀筋はクラリッサの脇を狙っていた。

ガキーン！

「ここで感情的になるお前がどうして裏切ったと言える」

大剣で三弦を受け止めながらそう言う。

「……………」

確かにクラリッサの言うとおりでたつた。

しばらくの間、呆然となっていた俺にクラリッサは受け止めていた三弦をはじき、切りかかる。

一瞬判断が遅れてしまった。

ギイン！

シールド・バリアが破られる。絶対防御に届くまでに後退したのでエネルギーのほうは大丈夫だ。

「あの方にはお前が必要だった」

ただ黙って話を聞くことしかできない。

「私たちには……あの方を戻すことなどではしないのだ。お前が強さを教えてくれると信じていたのだ」

「……………」

そうか、だから……最初IS学園にきたときもラウラは……

「本当に裏切ったのか」

だが、言うことはできないんだ。
言うことはできないけど……

「……裏切らないといけなかったんだ」

少しだけ視線を下に向け、ぼそり、と言う。

『宙!』

『安心しろアリシア。俺はもう二度と裏切ったりはしない』

俺の言った言葉に反応したアリシアを安心させる。

「ラウラが……あいつが……死ぬのは嫌なんだ」

赤羽にエネルギーをためる。イグニッション・ブーストの用意だ。
少しだけ前に加速する。これもイグニッション・ブーストを早くするため。

「失いたくなかった……だから……裏切ったんだ」

クラリッサが武器を下ろすのが見えた。
すまん……

宙の体が消えていく、ワンオフが発動したのだ。

それと同時に溜めていたエネルギーを放出。爆発的な加速力を持つてクラリッサに接近する。

「……………嘘だよ」

「なっ」

驚くクラリッサ。だが、それは遅い。

「あなたにはわからないだろうな、一生」

俺がいつも使っていた技。技と言うのに名前がない技だ。最大にして最速の技。

俺の技ではないが……

パアッン！

剣先が音速を超える音だ。

ギャリン！

三弦がクラリッサの大剣を真一文字に切り裂いた音だ。

「俺の覚悟は誰にもわからんさ……」

誰にも理解されなくてもいい。そう決めた道だ。

振り切った刀を返し、さらに左から右へと振るう。クラリッサに大剣はもうない。宙が真一文字に切り裂いた後クラリッサが捨てたのだ。防御できるのはプラズマ手刀だけだが、展開させる暇なんて与えるわけがない。剣がまた音速をこえて破裂音を出し、クラリッサへと迫る。

だが、不意に剣が止まる。止めようとしてとめたわけではない。何かにつかって止まったわけではない。何もない場所で、何も剣筋をさえぎるものはないのに止まった。

「これは……A I C」

「貴様……許さん。これからは全力で相手をさせてもらおう」

「そうか……しかし驚いたよ。ラウラと違って予備動作がないのか」
A I Cに縛られて動かなくなったので、ワンオフを発動させてにげだす。

第三世代の特徴として感覚操作の特殊兵装はB T兵器やA I C、衝撃砲などがあるが全てにおいて感覚をそのまま操作することは難しい。もともとI S自体少しのラグがあるというのにもかかわらず、過ぎた武装だと思う。

それをクラリッサは予備動作なく発動させた。
そのことに驚いたのだった。

第100話 第三世代兵器（前書き）

ぬう、やけどは昨日やっとなぶくれをつぶしたところ。
何とかかけるようになったので、投稿してみました。

しかし、（；´∀´）…痛いなあ…

第100話記念とかしたいけど・・・早くこの小説終わらせて来年
の受験に備えたいと思っているんだよな。

もちろん、完璧に終わらせるつもりだけど・・・

いまのところ、このペースでいけば200はいくかも知れませんw

がんばるぞー！！ ペースを早くするという意味で

第100話 第三世代兵器

第100話

第三世代兵器。それはセシリアのブルー・ティアーズに装備されてあるBT兵器、鈴の甲龍シエンロンの衝撃砲、ラウラのシュヴァルツェア・レーゲンのAICなどがそれにあたる。

だが、カティアが使用していたのは今までにないものであった。

「まさか私が捕まってしまうとは……やるじゃないか」

アリシアのISを動かなくしているのは黒い光り。

そう、シュヴァルツェア・リヒトの名前どおりの黒い光りだ。

その黒い光りはアリシアのISに絡み付いており、決して切ることもできず、ほどここともできなかった。

「これが新しい第三世代兵器です」

「知らないな」

ファントム・タスクの情報網は本当にすごいものだ。実際にBT兵器、衝撃砲、AICの開発状況すら把握していた。BT兵器を積んだイギリスのIS『サイレント・ゼフィロス』を強奪できたのも情報網による恩恵が大きい。

その情報はファントム・タスク内ではある程度の地位を持つものなら誰でも簡単に閲覧することができる。無論アリシアも可能でミッシェンに行く前は必ず見ていた。だが、この兵器のことは知らなかった。名称も性能もまるで不明。

「やはり、あなたたちは……」

カティアが何かを言おうとして口ごもった。

「すいませんが、ここで終わらせてもらいます」

丁寧な口調でそうつげ、右腕の盾にた武装からプラズマブレードを展開させる。そして、イグニッション・ブーストによる接近、切りかかった。

「たとえ動きを封じられていようとも」

彼女の周りに無数の刃物が出現する。その刃物の形は大小様々だがほとんどの形はあのギロチンだ。ワンオフ『断頭台への行進』^{ギロチン}。

その刃物がカティアのプラズマブレードを受け止める。それどころか、受け止めた瞬間に前方へと射出される刃物。カティアはそれをとっさに戻した盾の様な武装で致命的なものだけを的確に回避した。

だが、この黒い光も『A I C』と同じく集中力が必要なようだ。

光は消え去り、アリシアの体の自由となった。

「形勢逆転だな」

武器を呼び出し、照準を定める。引き金は引かずに前方へ、イグニッション・ブースト。敵の眼前でクイック・ブーストにより敵の側面へ移動する。もちろん、盾のような武装のない左側だ。突然の挙動にカティアはついていけないのか、左腕で守ろうとしている。その刹那。左腕に右腕の盾のような武装が瞬時に現れる。

アリシアはそのことに目を見開きつつも、両腕の銃を撃つ。だが、もちろんガードされる。

「武器の高速切り替えをラピッド・スイッチと言うようですが、私のは高速交換といったところでしょうか？」

右腕に合った武器を一度クローズし、左腕にオープンしたのだ。それもほぼタイムラグがないように……

「それにこのISや武装も私専用に作られた機体ですので、負けるわけにはいかないですね」

「それは難儀なことだ。だが、ここは勝たせてもらう」

もう一度距離をとり、相手の出方を窺うようにして両者が構える。そのときだった。

ドガアアンツツ！

大きな爆音ともにほとばしる閃光。また爆撃機を爆発させてしまったようだ。

「ずいぶんと都合のいいワンオフだな。自分が不利になるとすぐに逃げ出すのか。だからそう簡単に裏切ることができるのだろうか？」

AICから逃れ、距離をとった時にそういわれた。確かにその通りだ、俺はいろんなことから逃げ出してきた。

「何度も言わせるな。最初から俺は裏切ってなんかいない」

両親の死を素直に受け止めていれば……一人が怖くて、死んでないことが怖くて、1人で生きていける自身がほしくて、強くありたいと思ったからけんかをすることもなかった。

あの日から逃げ出してきたのは確かだ。

本当にいやなことを言ってくれる。

「……………俺は最初からお前たちとは違う」

一気に懐に入り右の三弦を水平に振る。それはスウェーで回避された。さらにその流れから右足の蹴りがやってくる。したからうえへと蹴り上げられたそれを回避するのではなく左の銃の状態の三弦で受け止める。剣を返し受け止めた足を狙ってきりつける。が、反対側の足が受け止めた三弦を蹴り後方へと宙返りをするクラリッサ。蹴られた衝撃で少しだけ後ろに下がってしまった。

「ちっ」

「はぁっ」

舌打ち、それと同時にクラリッサのほうへ向かって左腕の三弦を撃つ。丁寧に三発きちんと狙いを定めて撃ったがプラズマ手刀によってすべてがふせられる。

「ならこれはどうだ!」

大正を起動させて前方へと向ける。いくらなんでもこれはプラズマ手刀では無理だろう。チャージは自動的に済ませてあったので撃

つ準備はできている。

そのときだった。射線上に入る黒い影——B—2 スピリットだ。必要以上の音をさえぎるように設定したのが間違いだった。戦闘機のジェットエンジンが出す音もさえぎっていたらしい。

「しまっ」

気づいたときはもう遅かった。

引き金は引かれ、目の前で爆発するスピリット。大量の音と光と熱を吐き出して、盛大に爆発する。

ドガアアンツツ！

第101話 本気（前書き）

うーん、タイトルが普通すぎる。悩むな・・・

第101話 本気

第101話

盛大な爆発音の中、出てきたのはクラリッサだけだった。装甲のところが溶解しており、ダメージをくらっているのが良くわかる。しかし、いくら立っても宙はでてこなかった。

爆風はひいたように見えたが、一部分があるISの形を残していた。

「そこかっ！」

出てくる直前だったのだろう。だから、その空間に新たな物質が出現する場合にその空間自体に何らかの力が働いた、そう考えられる。

クラリッサはそれを知っていたのかは知らないが、宙は出てくる直前だったためAICに反応することができず、捕まってしまった。

「くっ、ねらっていたのか？」

問いかける宙にクラリッサは無言でレールカノン《ブリッツ》を両肩に呼び出し放った。

「なっ!？」

反応が遅れたのか着弾し爆風が当たりに立ち込める。

本気、と言うわけか……ははは……

「いいぜ……あんたがその気になったのなら、手加減なんてしねえ

ぞ」

前方へとっさにコールしていた七弦武装の大剣の柄を握り鞘をパージする。鞘はパージされたあと四つに分かれて空中を漂い始めた。BT兵器だ。

「こい」

勝たせてもらう。絶対にだ。負けるわけにはいかないんだ。

「隊長が本気を出したようです。私を倒して早く彼の手伝いをしなくていいのですか？」

「そんなことは知らないな。あいつにはやらないといけないことがある。わからんやつでもないさ」

「信頼しているのですか？」

「いや」

アリシアは不適に笑ってカティアの問いに答える。

「信用してやっているんだよ。将来性にな……」

「将来性？」

「おっと、しゃべりすぎたかな……まあ、いいか」

そう言って、唐突に足を蹴り上げる。

ワンオフのギロチンを同時に発動させて、まるで砂地を蹴り上げたかのような砂利刃物が大量に前方へと舞い上がった。下手なショットガンよりも多い細かい刃物。圧倒的な面性圧力。

これでわかる。

そう思っ放った一撃だった。そして、アリシアの考えは的中した。

アリシアの攻撃にカティアはアリシアの思ったとおり、全てよけることはやめて最小限のダメージで済ませた。確かにカティアのこの技術には目を見張るものがある。ただ彼女はこういった……『この機体は私専用で作られた』と。それが本当なら……彼女のこういった技術も考えられて作られているはず。それにまだドイツの第三世代兵器《A I C》は使われていない。

あの機体に《A I C》は積んでいない、という推測ができた。

A I Cは銃弾を止めたりすることが出来る。それなのに、今まで一度も使用してない。もし、積んでいたらそれらを使って今までの攻撃をとめているだろう。

そこでアリシアは一つの仮定を立てた。『新兵器——黒い光はA I Cの発展版であり、収束させたものであり拡散できるものではない』と。

「的中か。なら」

今の仮定があたっているのならば、やることはただ一つ。一点集中射撃による、強引なシールド・バリアの突貫。射撃制度精度がもとから良い右腕の銃はそのままに、瞬間火力の高い左腕のアサルト

ライフルを二点バーストに切り替える。

カティアはお手本の様な綺麗な回避行動を取るが、アリシアの銃口はそれを離さない。どれだけ、移動しようと、まるで糸でつながっているかのように銃口はカティアに向けられ、そして撃たれていた。

「くっ、しつこいですよ」

「この程度でか？」

さらにアリシアはここで、高速接近戦を始める。懐に入ったと思えば、後方へとクイックバースト。カティアの近接攻撃を誘いだしてがら空きところに射撃する。また、すぐに旋回してまわりこむ。今度は射撃をすると見せかけて、通り抜けざまの接近攻撃。

「そんな攻撃！」

だが、カティアは短刀を呼び出しその攻撃に備える。

「実戦経験が足りなさ過ぎる」

攻撃の直前に横方向にクイックバースト。短刀を横目に盾のない左側を撃った。さらにカティアの回避行動が遅れていたので連続して撃ち続ける。ある程度のダメージを覚悟したのか、カティアは銃弾を無視してイグニッション・バーストを使いアリシアに接近したが、それでも……圧倒的にアリシアの技量のほうが上であった。短刀を用意に左腕の銃身ではらい、右を至近距離ではなつ。そのため、衝撃があまり減衰せずに与えられた。

「きゃあああ」

さらにもう一発、ふきとんでいるカティアにあてる。そして……

「止めだ」

クイックブーストによりイグニッション・ブーストのためをなくして、吹き飛んでいるカティアに接近する。止めの一撃は左腕の銃による突貫。ふつうなら破ることはできないが、今まで執拗に攻めてきたのでシールド・バリアを紙でも破るかのように破った。最後の絶対防御にも何発もの銃弾をそこから撃ちこんだ。

「私とお前では負けられない理由の価値が違う」

あれだけ、絶対防御に銃弾を打ち込んだのだ。もちろんのごとくエネルギーは切れ、ISは光の粒子となって飛び散った。AICを失ったカティアの体は重力に引かれ、落ちて行く。

「負けるわけにはいかないんだ」

おちていく彼女を尻目にアリシアは宙を援護すべく、機体を加速させるのであった。

第102話 種まき（前書き）

ストックを投稿

第102話 種まき

第102話

「シュヴァルツァ・ハーゼもこんなものか……」

「亡国企業がこれほどの実力だったとはな……」

カティアがやられたときの感想がこれであった。

クラリツサは自分の部下がやられたことを認め亡国企業の実力を
みとめた。

宙は自分がこの部隊を過大評価していることに気付き、その考え
を改めた。別に低く見るつもりはない。だが、アリシアに一对一で
負けたのだ。実力も推してはかるべきだろう。

しかし、油断だけはしない。

アリシアと同じく宙にも負けられない理由がある。

「勝たせてもらう。これ以上の時間はかけられんからな」

「言ってろ」

さて、挑発したもののまったく気にしていないようなので……ど
うしたものか。アリシアが勝った。ということは、できるだけアリ
シアが来る前に倒したい。手伝われる前に……

「いくぞっ！」

刀身を消し、イグニッションブースト。以前に一回、楯無さんを倒した技だ。防御不能の一撃。なずけるなら……そう『幻想●鉄』
イマジネーション・エッセンシャル
『●王結界』!!!

『やめとけ、それはすでに世に出回っている』

『冗談だ』

ふむ、本当になずけるならどうしたものか……と言うかその前になぜ心を読まれたのだ。不思議だが……まあ、いいでしょう。気にしない。

くだらないともいえる
こんな無駄な事を考えながらも戦闘は続く。刀身を消したことによりクラリッサは警戒している。だからこそ、攻めた。相手の手の内がわからないからクラリッサはなるべくこちらを攻撃しない。

「怖いかな？」

剣の柄しか今は見えないけどそれだけ見せびらかすように振る。クラリッサは表情を険しくして見せた。

怖いと見える。まあ、俺だったら普通に怖いからな。

人間誰しも始めてみるものには等しく恐怖を抱くものだ。

ガード不能の一撃。どんなものでも貫く刃。

「ふん、なぜ私が恐れなければならん」

自爆スイッチでもあるのかまた爆撃機が爆発する。

本当にこれはうざい。前は見えなくなるし、何も聞こえなくなる。

「だけどな……もう絶対に眼を逸らさねえええ!!!」

剣を一度クローズし、右手を突き出す。

ワンオフ・アビリティー《残響》^{エコー}発動

普通の発動では自分の体しか消せないけど、自分が触れているものを消すことも可能だ。今のところこの能力にデメリットはない。と言うか知らない。一夏の『零落白夜』は絶対的な攻撃力の代わりに自身のエネルギーを削ると言うデメリットが存在する。アリスアの『断頭台^{ギロチン}への行進』もまたエネルギーを消費する。箒の『絢爛舞踏』のデメリットは存在しないが、発動をうまくすることができないのが唯一の欠点と言うところ。

この通り、軽いデメリットが存在するはずなのだが、俺のワンオフのデメリットは知らない。たぶん、ISに直接話をつけなければわからないとおもう。

わからんことは仕方ないので、デメリットのことは後回しに爆撃機の爆発を消した。

「ごめん」

その後、ボソツと言い捨てて剣をコール。両腕を上段から振り下ろす。もちろん、剣先を消していたので剣先はシールド・バリアの中——絶対防御だ。気合とともにさらに剣に力を加え、力押しで絶対防御へ剣を押し付ける。絶対防御は切り裂くことはできない。絶対だ。しかし、それが発動している途中は大幅にシールド・エネルギーを減らすことができる。

「終わりだ」

いくら軍用のISと言っても、シールドエネルギーが無限にあるわけじゃない。最後に右の剣を引き、また刀身を消して体をねじり

左を戻すと同時に正拳突き of 要領で突き出す。

「くう」

ISは光の粒子となって消えISの自動保護機能が作動したのか、クラリッサは意識を失った状態で地面に向かって落ちて行く。

「プレゼントフォーユー」

スコールさん特性のナイフをわざわざ、追いかけて掌に刺した。

『宙だ。残念だったな』

アリシアにプライベート・チャンネルを開く。

『何が、だ？ 後輩の成長が見られたんだ。別にいいさ』

『後輩、ね。今まで一度も聞いたことはなかったけどな』

『気にするな。……それよりも、種はまいたか？』

『まかなかったら、この作戦自体失敗だろうが』

『違うない』

種と言ひ言い回しは言ひえて妙だが……ま、とにかくこの作戦で一番重要なことだった。その仕込みも終わったし、これで今のところは完璧だ。

『まだドイツにはIS所持者がいる。が、私もエネルギーを使います』

ぎた。ここは撤退しよう』

ラウラか。まあ、今のアイツじゃあいてにならないが…

『俺の奥の手も使っちゃったし、お前に従うか……』

そして、アリシアはOBを起動させて、俺がそれに掌底にあるアンカーでひっかけて上りカリフにつけてもらった取っ手を掴み発進した。

そう、俺たちは作戦を成功させて基地へと帰ったのだ。

第103話 焼き芋（前書き）

こんにちは sirasuです。

お久しぶりです。

第103話 焼き芋

第103話

パチパチ、と何かが爆ぜる音が聞こえる。亡国企業基地の外で俺は火を見ていた。いや、火の番をしていた。

半分まで燃えてしまった木の棒を火の中に投げ込み、また新しい棒を持って火が消えないようにいじくっていた。

十月中旬のこの季節、少し肌寒いので焚き火は非常に外にいるものにとってはありがたい。もちろん、秋の季節に焚き火と言えば…：焼き芋である。それもちゃんとアルミホイルに包んで焚き火の中に入れていた。本当は落ち葉だけでやきいもをつくりたかったのだが、私物で燃やしたいものがあつたのでそれも一緒に燃やしているところだった。

じよじよに火が弱くなってきたので隣においてあつたダンボールの中の私物を手に取ろうと手を突っ込んだのだが…。

「あれ？」

ない。

なかった。

あれだけ入れておいたと思っていた私物も今は全部燃やしてしまったらしい。燃料がなくなってきたのに対し、火は弱まっていくばかり…。焼き芋が出来上がるまで燃やし続けるには、ちと足りない。

「ダンボール燃やしても…：無理だろうな」

しかたがない。そう思って側においてあつた箒を手に取り、落ち葉を集め始める。

「何をしている」

落ち葉で小さな山が作れるぐらい集めた頃だった。亡国企業の制服というか正装（要するにスーツ姿）それにコートを羽織っている。そんなアリシアが話しかけてきた。

質問に答えるでしょう。

「秋と言えば？」

質問に質問でかえす。正直、普通に答える気などまったくない。

「知るか」

なぜなら、こう返ってくる事自体すでに読めていたのだから。だけど、こいつとはこういうやりとりをしないと会話が始まった気がしない、だからこんな会話の開始しかできない。

「答えは……「やきいも」だ」

そして結局はこれ。どうせ何でもかんでも知っているやつに聞いたところで何の楽しみもないのだ。だが、素直に聞いても教えてくれないのも確かだ。

「やはり、知っていたんだな。どこまで知っているのやら……」

「何でも知っているわけではない、私が知っているのは私が知っていることだけだ」

「それでもだっつの」

コイツの知識量には少しだけおかしいところがある。物凄く多いのだ。

「あっ」

「どうした？」

「お前燃やしたいもの持ってないか？」

「燃やしたいもの？」

俺の質問に少しだけ探りを入れてくる。

「深い意味はないよ。焼き芋を作ってるだろ？ 実は燃やすものが少し足りなくて困っているんだ」

「だから、いらないものをもってこいと？」

多少、俺の話からそれているが、その通りだ。黙ってうなづくと、アリシアは身を翻す。

「待ってろ」

んー、うまくいきさえすれば……知識量の秘密が来るかもしれない。

五分後……

落ち葉をある程度集めて火の中に入れていたところ……ようやく現れた。

ダンボールの化物が……

「もってきたぞ」

声はアリシアの声。確かにそうだ。だが、どうみてもダンボールが二つ重なって、足がはえてるようにしか見えない。

「ふう……。わかった。その辺に下ろしてくれ」

いったん自分を落착かせて、ダンボールの化物に話しかける。ダンボールの化物は、俺の驚きを無視してその場にダンボールを下ろした。もちろん、その後から出てきたのはアリシアだ。

正体はわかっていたが、実際に自分の背丈を越えるダンボールが足を生やしてこちらに向かってくる様子は地味に恐怖を感じるものだった。

「よかった」

そう呟く。幸いにもアリシアにはこの独り言が聞こえていないらしく、焚き火に当たり暖まっていた。

下ろしたダンボールの二段目を地面に下ろし、一段目から物色し始める。

箱を開けるとそこは大量の本だった。

どこぞのノーベル賞ですか？

なんとなく思いついたフレーズがパクリだったことにツツコミを入れる。

そう、これこそがアリシアの知識量の大本だと推測されるものだ。確固たる自信はない。だが、これでしか説明できない。

「ふーん」

とにかく、呆れるほどの大量のほうが詰まっていた。文庫に新書、ハードカバーの本まである。ただし、それらはほんの一部でいろいろな種類の本が大量にダンボールに詰まっていた。

ダンボール一箱分の本ね……

個人的にはもったいないと、物色していたのだが……普通に気になる本を見つけてしまった。その本を手に取りダンボールから出している……。

「どうするんだ？」

「どうするんだって……読むしかないだろ？」

というか他にどのような使い道があるのか聞きたいぐらいだ。

「いや、本についた私のおいを……」

「かぐわけないから」

「ふむ、カリフたちはよく匂うぞ」

知らない情報来ました。

聞きたくない情報来ました。

記憶から削除させてもらいます。

完了しました。

「二、三冊もらうからな」

話を無視して会話を続ける。激しく間違いがあるような言い方だが、問題ないはず。

「どうせ燃やそうとした本だからな、好きにしてくれ……ちなみに、その本の犯人は「だあああああ」だ」

俺は何も聞いてない。

推理小説において、ネタバレほどおもしろくないことはない。一応名作と呼ばれる本だと言うのに…。

「つまらんな」

「こっちのセリフだ。つまらんことをするな」

これで一箱目の物色は終わり、二箱目に移った。

「うっ」

これは……エロ本か……

一箱目以上に大量に詰まったエロ本。重量比が普通の本と比べて1.5倍ほどある。

「アリシア、お前……まさか……」

「勘違いするな、買ったわけではない。あいつらがよく私の部屋に忘れていくのだ」

遠い目をしてそう言った。

ああ、コイツもコイツで苦勞しているんだな…、とそう思った。

あいつらⅡカリフを始めとしたちよつとした集団。

というか、この量の忘れ物をするわけがない。どうせ、わざと落としていつているのだろう。あいつの回りにいる女どもは全員レズ臭いからな……

「何だレズじゃなかったのか」

「一緒にするな、ドアホ。私にだって異性を意識することぐらいあるさ」

「ふーん」

「なんだその疑いの目は」

「いや……」

『異性を意識することぐらいある』……すまん、アリシア。もっともそう言うものから縁が遠いやつだと思っていたよ。

「俺にはその手にあまり興味はないからな」

ⅠS学園・亡国企業と、女子の多いところにいたためか女に対する耐性がついてしまったようだ。

「そりゃ、あんなのだからな」

どこか遠い目で言うアリシア。

「あんなんだからな」

アリシアの言葉に続けた。

酔っ払いで半裸の馬鹿どもを掃除してたらからな…。

IS学園では、無防備な女子の緊張感のない姿を見せられてたし…。てか、普通の状態の女子よりえろいぞ、あの無防備な女子ってやつは。

エロ本をちぎりながら火の中に入れているが、目がとられることはない。てか、これを見て何が面白いのかまったくわからん。そう思えるようになったのは、確実にIS学園と亡国企業の女達のせいだろう。不思議と後悔がない。

ここで、一度会話を切るように、ふう、と息を吐く。

「ミーティングの結果を教えてくれ」

まだここにきて日の浅い俺はミーティングに参加する権利はない。てか、作戦実行者にミーティングの参加権がないのはどういうことだ？ おかしい…はず…。

だが、聞けないことはまぎれもない事実なので、こうして俺はミーティングの結果をアリシアから聞くことになっている。別にこれについては聞く権利ぐらいはあるらしい。

「EUのイグニッションプランは…スケジュールに大幅な遅れが発生した」

重要な拠点を集中的にやったんだ。これぐらいの成果があって当然だろう。

「予想以上の遅れが出たので大成功と言ったところだ。次にドイツ

のシュバルツェア・ハーゼを倒したことで各国の重要拠点の軍備が強化された」

いまさら……そう思ってしまった。

この前、俺の口から亡国企業は宣言を出していたと言うのに、まだ軍備の強化をおこなっていなかったのか、無能すぎる。遅すぎる。

「対応が遅いな、何をやっているんだ？」

「別に良いじゃないか、馬鹿を相手にするのは楽だ」

しかし、『各国の重要拠点の軍備が強化された』ということには、まだ裏がある。

大きな基地、工場に戦力を置くということは重要ではない部分は軍備が薄くなるということ。戦力は有限だ。無限ではないので必然的に弱体化するところぐらいある。

「イレイズド……ここの目的はこれか」

「ああ、一度目はただの罠だな。これが本命だ」

イレイズド——地図に載らない基地。いわゆる秘密基地。

一度、Mが基地に襲撃したことがあった。

表向きの目標は『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルのコアの奪取。

本当の目的は基地の警備のレベルを上げること。

「大規模な戦力移動は、イレイズドにとって結構な痛手だろうな……」

「そうだ。強化したくても強化することはできん」

「イレイズドは弱体化する……か…」

あえて、レベルを上げたことによって安心感を持たせたのだ。あつちは、自分たちの情報がリークしていることに気がついていない。警備のレベルを上げた、そうネット上に少し流した程度で戦力を割けば安心だと思っているのだろう。残念だが、少数で全国と戦うには情報と言うアドバンテージは必然的に必要なのだ。

「わかつているじゃないか」

もちろん、弱体化した基地にすることはただひとつ。

「次の作戦はもちろん……」

「残念だが宙。我々に次の作戦に参加する権利はない」

亡国企業では、前述の通り二回連続で作戦に参加することは原則できないことになっている。それに深い意味合いはなく、単に休暇なだけだ。

しかし、疲れを次の作戦に持ち込まないだけ成功率は段違いになってくるので、実に理にかなっているのも事実だ。
実際に、亡国企業のミッション成功率は物凄い。

「そうか……さてと、焼き芋も焼けた。もちろん、もっていくだろ？」

「あまり、驚かないのだな」

「そうか？　こんなもんだろ」

アリシアの胸元めがけて焼き芋を投げつける。それをアリシアは難なくキャッチ。

やきたて、できたて、アツアツのアルミホイルに包まった焼き芋を素手でとつても表情一つ変えないのは驚きだった。

さっきの参加権より驚いている。

まあ、確かに驚いてはいたが……『さすが、アリシア』と、そう思ったのは俺だけだろうな。

それから、なんこもなんこも焼き芋を投げつけたのだが、一度も歪めることもなかった。

ちなみに、大量のエロ本は焼き芋のための犠牲となった。いや、いけにえか…。

最後にニヤニヤしながら

「一番の貢献者たちに持って行ってやれよ」

そう言った。

それを聞いたアリシアは後ろ手に片手を挙げて去っていった。お礼がないのはいつものこと。

「お前ら、焼き芋いるか？」

ISの格納庫だ。今日もここで様々な性別（そうは言っても二つしか性別はないが……）、人種の人たちが研究、開発、実験をして

いる。

「差し入れですか？」

目を煌かせて近づいてくる女性技術者達。もちろん、その中心人物はカリフだ。

「カリフ……何を作っているんだ？」

技術者たちの後にあるのは何やら組み立て途中と思われる装甲があった。形になってはいないがISの装甲だと言うことぐらいはわかる。

二重構造になっている装甲……

「アバランシュか」

二重の装甲、もともとアリシアが使っていた機体だ。所々は違うとはいえ見慣れているものに違いない。

自問自答になってしまったが、技術者たちは気にしない、それが百合百合クオリティ。

「そうです。あの機体は欠陥機でしたからね。改修し終わったところですよ」

カナダの技術者全員を敵に回してもおかしくないセリフを、サラッ、と言いのけてしまうカリフ。その様子はまるで、ほめてほめたと尻尾を振っている犬のようだ。毎度のことながら華麗にスルー。焼き芋を手渡していく。

スルーされたことに軽く落ち込んでいたカリフも、パアッ、と笑顔を取りもどす。現金なやつだ。

「うまいな」

宙の作った焼き芋の皮をむき、かぶりつく。まだ、温かい。
ほんのりした甘みが口の中に広がる。

「おいしいですね」

アリシアの感嘆にほかのやつらも賛同する。

たとえば、人種は違っていてもそんなに味覚は変わらないらしい。
イギリス人は……除いておいたほうが無難か……。

「良かったな。綺麗なお姉さんたちが頑張ったおかげだぞ」

そう、皮肉に笑いながらアリシアが言う。

ただし、この時この言葉の本当の意味を知るものは誰一人として
いなかった。

第103話 焼き芋（後書き）

活動報告の通りに久々に書き上げました。
更新が遅れてスイマセン。つぎもこんな感じで投稿していきます。

第103話外伝 カリフのプロローグ（前書き）

さてと、そろそろファントム・タスクのメンバーの過去でも・・・
そう考えた私は何を考えたのかこんなものを書いてしまった。
後悔はしていないが、これでいいのか？ σ（。▽。）オレ

第103話外伝 カリフのプロローグ

第103話外伝

「姉様の部屋から例の物がなくなったわ」

「情報源はどこから？」

「姉様よ。今日も例の物を口実に部屋に入ろうと思ったのだけれど、宙に上げたといっていたわ」

「何っ！？ お気に召さなかったのか？」

「われわれの傑作だぞ？」

「はあ、落ち着きなさい。話し合うことはそこじゃないでしょ？」

「……すまない」

「宙に持っていかれたことのほうが問題のようね」

「そういうこと。一大事でしょ？ だから私は……ここに奪還作戦の開始を宣言するわ！！」

「「「おおーっ！！」」」

「ここに、あらかじめ作っておいた作戦を三行で簡潔にまとめたのがあるわ」

力強く、机にたたきつけたスケッチブックには……

『忍び込んで』

『奪い返して』

『暗殺（´・v・`）b』

そう書かれていた。

「という話を今日の食堂で聞いたんだ」

「なぜ止めなかったし」

私には関係ない、そう言わんばかりに興味の無い顔でそう言ったアリシアに思わずツツコミを入れる。

「ふっ、お前は男だからな。何とかするだろうと思って」

「今まで起きた中で一番の修羅場だと思っている」

内容はどうであれ、生死に関わる確率が一番高い。

「だいいち、お前なら何かしらのフォローを入れることぐらいできたんじゃないか？」

「興味がない、それで十分だろ」

脱力感が体を襲う。

もうだめだ。こいつに何を言ってもどうにもならない。

そう思えてきたので、頭を抱えて悩み始める。

確かにアリシアの言うとおり、女一人が忍び込んだところで殺されない自身はある。ただ、殺されないだけで、怪我をするかもしれないのだが。

「その話をしていたやつはいったい誰なんだ？」

話を聞いていたのなら、話していたやつことぐらいはわかるだろうと、問いかけてみる。

「カリフだ」

「なんだ、カリフか」

速答で返って来た答えに、一気に俺の中の脱力感がなくなった。てっきり、戦闘部隊の一人が突撃してくるのかと思っていた。

整備班のやつらなら大丈夫だ。鍛え方が違うし、戦闘訓練もしていない。そんなやつらが一人来たところで何にもならない。

これならば安心だ。そう思っていた。

「馬鹿にするなよ。何を持ち出してくるかわからんぞ？」

「え？」

素っ頓狂な声を上げる。

「整備班だからな兵器の管理は一任されている」

「はっ？」

またもや、素っ頓狂は声を上げた。

「始めて聞いたぞ？」

「始めていったからな。ちなみに、武器の扱いは武器の整備をしているやつらが一番知っているだろうという、上の判断だ」

えーと、確かにここでは銃を持つことも帯剣することもできる。ただし、それはあくまで護身武器というカテゴリーに登録されているものだけだ。代表的なものを上げるとハンドガン系やサブマシンガン系、ナイフだ。

それ以上のものは兵器と言うカテゴリーに入っており、護身武器以上の火力だ。ショットガンを始めとした、対人特化の武器が多かったり。RPGなどの対戦車用の武器まである。手持ちできる武器の中でもトップクラスの火力をもったものばかりだ。

「それって、性格とか関係ないのか？」

「忘れたか？　ここは実力主義だぞ？」

ぐう、の音も出ない。アリシア様のおっしゃるとおりでした。

また、頭を抱えて悩み始める。

どうする？　殺されるぐらいなら逃げたほうがいいのか、いや、部屋の中をあさくられるのは嫌だしな…。迎え撃つにしても何を持ってくるかわからないし…。マシンガンとか持ってこられたらマッハで蜂の巣にされそうだしな。

「そんなに悩むのだったら、私がいい提案をしてやろう」

俺のそんな様子を見て、哀れに思ったのかそう言ってきた。

助け舟が出たのだ、一応その意見を聞く必要もあると思い、すぐさまアリシアの手を借りるのだった。

薄暗い部屋に入った。時は夜なので、当たり前と言ったら当たり前。前に暗いのだが、暗闇に慣れた目はある程度とおくを見渡せるようになっていた。

大嫌いな臭いに、顔をゆがませる。

男の……臭いだ。

しかし、思っていたよりも部屋は片付いており、潜入時に何かを踏んでターゲットを起こすと言う凡ミスの心配がなくなったことには感謝した。

だけど、男の部屋だからね。

感謝すること自体に悪寒を覚えて、すぐに気持ちの修正をする。

五分後、あさった。それはもう、あさった。

ベッドの下から、引き出しの隅々まで、綺麗に細かく完璧に。

それでも、目的のものはひとつも出なかった。

どこかに隠したのかしら？ いや、けどそんなに時間があるとは思えない。捨てた？ 男がエロ本を捨てると言う選択肢はあまり考えられないわね。だとしたら、隠す以外に方法がないのだけれど……

侵入者は深く考え込んだ。ありとあらゆる行動を一つずつ確認していった後に辿り着いた答えは：

「見られるぐらいなら殺したほうがましね」

物騒すぎる答えだった。

たたが、エロ本。されど、エロ本。

ナイフを抜いて握り、足音を消して接近する。

「んんっ、カリフ：」

ビクッ、と体がはねた。

ゴロン、と寝返りをうった宙の口から出た言葉に心臓が高鳴る。

こ、これは、あれよ。そう、ばれるかばれないかでどきどきしているのよ。

自分を正当化し、心を落ち着ける。たとえば、男の子とが嫌いでも他人に寝言で自分の名前を呼ばれることは誰だって、変なことを考えるだろう。

「ちいせえなあ」

ただし、余計な一言さえなければ。

カリフの心臓の高鳴りはなかったかのようにおさまり。一気に熱は冷めた。

やっぱりね、こんなことだろうとおもったわ。所詮男なんてこんなものよ、デリカシーもないし、がさつな生き物だし、それに……ふと、昔のことを思い出しそうになってやめた。怒りがこみ上げてくる。その怒りを八つ当たりではアルがナイフに込めて、宙に近づき振り上げた。

「けど、可愛いんだよな」

そう、振り上げたそのときだった。ピタッ、とナイフが空中で止まる。渾身の力で振り下ろしたので、止めるのに相当力がかかってしまった。よって、無駄に入りすぎた力が腕を、プルプル、としている。

「えっ？」

始めて見た、始めて見た。

こんな、こんな……

信じられないものを見るかのように二、三步下がり、ナイフを落とす。コンクリートの上に絨毯を引いているだけの床なので、カキン、と金属音になった。

カリフの体が震えている。ばれるのが怖いわけではなかった。嫌悪感に近い感覚が体を恐怖で強張らせる。見たくない、けど、見てしまった。

違う……これは違う……男じゃない……

いつの間にか走り出していた。コンクリートの冷たく硬い足音が響く。結局足が止まったのは、自分の部屋に帰った。

「普通にやりすぎた感じしかしないのだが」

罪悪感とも言うべき、もやもやした感じがする。

「アリシアの言うことに従ったのが、そもそもの間違いなのか？」

今さらではあるが、後悔している。結果、なにやらめんどくさいことになっているわけだし…

ただ、命があるから反論しづらい。

ため息をついたあと、床に落ちてあるナイフを拾う。

「これは…」

どうやら、手製の投げナイフのようだ。手入れもきちんとしてあるので切れ味は推してはかるべきだろう。それ以前に、人を殺すことにおいて、特化しすぎているような気がして仕方ない。

こんなんで、刺されたら……

すこし、怖くなったので考えるのをやめて机に置く。そして布団にもぐった。

第103話外伝 カリフのプロローグ（後書き）

更新遅れてスイマセン。

今週は県のテストとやらが土、日にあるので勉強三昧でした。
無論明日もテストです。

来週中には次話をあげたいと考えています。

第104話 女子の部屋（前書き）

どんだん、ラストまでの道のりが遠くなっているよな・・・きがする。

第104話 女子の部屋

第104話

俺は食堂にきていた。昨日が作戦実行日だったので、今日は休みだ。カリフもその点については許してくれるだろう。そして、今日の昼からの職場でもある。

俺はもうしわけない、と手伝うこともできた。が、元からここにいた人たち――先任の人たちから「久しぶりに私たちだけでやらせて欲しい」と言われてしまった。

俺がここにいるときは、俺がほとんど1人で調理をしていたので彼女たちの仕事を奪っていたらしい。確かに俺は彼女たちと関わりたくなかったので、仕込み程度しか手伝ってもらってなかった。

それが、あの人達にプレッシャーを与えているなんて思わなかったな。配慮不足か。

素直に反省する。ここに着たばかりのころは、あまり関係を深く持たないようにしていたが、どうやら俺は変わったようだ。ここにいることを少しずつ好きになってしまっている。以前ほどの疎外感もなくなった、物珍しい視線も感じなくなった、それはとてもうれしいことで……とても親切な対応だった。

しかし、そんな俺にも悩みがある。カリフのことだ……

アリシアに話をされ、そのとおりにやったが現在いやな予感しか

していない。

これで仲良くできるのならしてみたいのだが、あの反応からするとその確率は0に等しいだろう。それどころか確実にややこしい話に発展していると確信している。

「まあ、まずは話を聞かないとな」

直接本人に聞くか、間接的に聞くかの問題は後回しにして最初に辿り着いた結論がそれだ。無意識のうちに呟いてしまったが、周りに一つも気配がないので問題はないだろう。

「ブツブツ……」

あのような反応をしたからには理由があるはずなんだけど、たぶんそれを知ってしまうことは難しいはず。他人の過去話なんて聞きたくないけど、この問題はわからんしな……

「わかるぞ」

体中に電撃が走る感覚がした。脊髄が反り返って、脳にまで達した。心臓の鼓動は早くなり、思考もぐちゃぐちゃとなる。

いない、そう思っていたところに話しかけられたので、普通以上に驚いてしまった。

少しだけ落ち着いたところで、話しかけられた方向を向く。

「アリシアだよな……」

振り向く前に声で気付いた。

聴きなれすぎている声なので間違いはないだろう。その推量はすぐに確定する。

そのアリシアは早朝からきっちり正装なのは、たぶん今日も会

議があるからだろう。

自分の朝食を配膳トレーに載せて、俺の隣に座った。
ちなみに俺の朝食は、ご飯、味噌汁、焼き魚。和風だ。アリシアはパン、スクランブルエッグ、スープ。味噌汁の具は、普通に豆腐とわかめ。スープは見た目からしてコンソメだと思う。

「最近どうだ？」

「なにがだよ」

いきなり聞かれても困るものは困る。それにあまり質問の意図がわからない。

「カリフのことだ」

「わかってるんだろ？ 最悪に決まってるじゃないか……」

アリシアの言うとおりにやったのだ、どうせあらかじめ予想はついているのだろう。これなら自分で考えたほうがましだった、と思っているが……終わったことだ。仕方がない。

この状況を甘んじて受け入れるさ……

若干沈みかける気持ち。それ以上に気になるのはカリフの行動だ。ナイフを落とすまで動揺したのには、何かあるのだろう。今さっきも考えていたことだ。普段のアイツならそのまま振り下ろしてきただろうに、らしくない行動だ。

「では、宙」

「あ？」

「相談がある」

「ぶっつっつっ!!」

口から食べていたものが噴出す。なんとか手でとめようとしたが出てしまったものはどうしようもなかった。雑巾で噴出したものを拭く。その傍ら、アリシアはまるで汚物を見るかのようなさげすんだ視線を俺に飛ばしていた。

お前のせいだからな

そう言っている暇はない。とにかく綺麗に拭いていく。

「急にどうしたんだよ」

一通り綺麗になったところで、殺菌スプレーを吹きかけた。最低限のマナーと言うやつだ。女性が多い以上、このぐらいのことは気をつけておかないと後で何を言われるものかたまったものではない。……すこし、想像してみたが……想像したことに後悔している。

「ダメか？」

不安そうに首を傾げて見せた、アリシア。

「いや、特にだめということはないんだが……どうしたんだ？」

どちらかというと、俺のほうが相談に乗るほうが多いのでアリシアのこの態度は新鮮というか、気持ちが悪いというのか……、とにかく変だ。違和感を感じてしまう。

まあ、うれしいと言えばうれしいし、不思議と頬が緩んでしまう。

「私は午前中に会議があるから昼からでもいいか？」

「すまん、昼は午後の食事の仕込だ。できれば、夜にしてくれ」

久しぶりの仕事だ。というか、ここではこういうことをすることでしか役に立てないので、サボるわけにはいかない。

「なら夜にしよう。場所は私のへやだ」

「おう」

それ以降、彼らの間に会話が生じることはなかった。

ひとつは起きてきたほかの人たちが大量に食堂に入ってきたからで、ひとつは……カリフが目の前に座ったからであった。

それに、それにすこしだけ舌打ちを心の中にする。空気が悪くて仕方がない。別に後ろめたいことがあって空気が悪くなっているわけではない。カリフがいちいち俺のほうを向いては頬を赤く染めて目をそらすから空気が悪くなっている。

それを見たほかのやつらが、さらにその光景にプラスアルファの妄想を加えてひそひそ話を始めるものだから、たちが悪い。

あいつらと言いい、カリフと言いい……乙女か！ いい年こいて乙女してるんじゃないやねえよ！ あ、いやカリフはそれでもいいのか……

「そう言うわけだ。早く何とかしたほうが良い」

「その通りだな。でもその前に私の相談を聞いてもらおうか」

カリフのことを話して相談から話をそらそうとしているところだ。なぜそらそうとしているのかと言うと、物凄くダサイ話。アリシアの部屋に来て恐縮、というか初めての女子の部屋に緊張している。寮の部屋は寮の部屋でしかなく、妹の部屋は論外、幼馴染の優の部屋にも何度か入ったことがあるが……それは幼いころだけなので意味はない。

女に対する体制はついているはずなのに、二人きり・アリシアの匂い・寮の部屋とはまったく違う使い込まれた感じ・そして密室。そのすべてが心そのものを揺さぶる。

「顔が赤いぞ」

「風邪だ!! 問題ない」

「どうやったら問題がなくなるんだ」

動揺しているせいか、思わず口走ってしまう。その様子にアリシアが頭に手を当てて、呆れている。

「私に移ったらどうするつもりだ」

「……（他人の心配すらしない悪魔は死んでしまえ）」

心の中で血の涙を流す。そして、いったん気持ちの整理をし気持ちを静めた。

ふうー……よしっ

覚悟を決めて話を切り出した。

「で、だ。相談ってなんだ？」

これ以上アリシアの流れに乗ってしまうと、逆にここにいる時間が長くなってしまいそうだったからだ。だから、あえて言った。アリシアが嬉々と微笑んでいるのはこの際無視する。

「カリフを男好きにしてくれ」

「……」

「ん？ どうした？」

完璧に目が合っている。一度もそらしていなかったので……嘘ではないだろう。付き合いが短いとはいえ、少なくともアリシアのほうは冗談をいっているような態度ではない。

だが、言葉と言う言葉が出ない。混乱のさらに上のレベルを言っているようだ。

頭の中でアリシアの言葉を何度も何度も噛み砕いては見たものの、以前として何も思いつかない。そんな俺が言えることはただ一つだった。

「男好きに？」

「男好きに」

唯一のできること、繰り返し、であったがそれもまた、繰り返された。

「……」

しかし、本心のほうはまだ良くわかっていない。

「ふむ、ではどこから話そうか」

あごに手を当てて、目をつぶり考えるアリシア。その姿にはとても視線を奪うものがあつたが、真剣になっている宙はそれに目を取られなかった。

「うーん、カリフの過去のことになるのだが……」

「いや、待てよ」

いくらなんでも、他人の過去の話容易に聞いていいものではないだろう。

「プライバシーを考えてな？」

「いや、私の話だから問題ない」

「それとカリフがどう関係するんだよ」

また会話を流されているような気がして、気をつける。

「理解できんと見える」

「そりゃ、理解できないって。何の話をしてるんだよ？」

カリフのはなしからアリシアの話に移っているので、正直混乱気味。

きちんと最初から整理しても……

- ・アリシアに相談を持ちかけられた。
- ・カリフを男好きにしてやってくれ
- ・突然自分の過去話を話し始めようとする

何一つ理解できる要素ねえええええっ！！
幸先がとて不安になってくる宙であった。

第104話 女子の部屋（後書き）

正直、風邪ひきましたよ・・・

昨日更新するはずだったのに、できませんでした。さらに、ノートもなくなって執筆が……くそう。新しいノートを買うまで更新できないかも・・・インドア派なんでw

できるだけ、すぐにかつてきまーす。

第104話外伝 IS学園視点

第104話外伝

IS学園、廊下。そこでは一夏を始めとした数人が全力で走っていた。逃げているわけでもないし、追いかけているわけでもない。目指しているのは職員室だ。

なぜ走ってはいけない廊下を全力で走っているかと言うと、少し前に戻る。

一夏はただ、ボケー、と机に座りながら何もない空中を眺めていた。何もやる気が起きない。ただ、眺めているだけだった。宙が裏切ってIS学園に襲撃に来てから今まで、特にこれと言った用事はない。学園自体も世間からの批判の声と政治的な要因で全ての行事をやめ、勉強を推進した。それにともなって学園中の皆さんは諦めた。

もちろん、勉強が嫌いなやつだっている（と言っても、もともと倍率がクソ高い学校なので少人数だが……）。イライラだったまるはずだ。一夏は自分でもイライラを感じていた。そんなイライラにも我慢の限界があるはず。発散することになった。

いじめなんてなかったこの学園にもいじめが開始したのは数週間前。もちろん、いじているのはイライラしているほう。

結局の話、いじめるのは誰でもいい、イライラさえ治まればそれ

でいい。まだ大人になりきれないこの年頃、自分の気持ちの発散をうまくできないものは、理由さえあれば他人をいじめるようになった。幼くはない、ただ知らないだけ。それだけで許されないと言うことではないが、それでしか発散できないのだ。

では、いじめられているのは？ その答えを求めるには簡単な話だろう。

・宙が裏切った⇒宙のせいだ⇒宙と仲良くしていたやつも悪いⅡ一夏達、宙の一行が対象となった。

集団とはなんと恐ろしいものだろうか……。関係ないはずのやつらでさえ、簡単にいじめの対象にすることができ。どんなに仲が良くても、集団のほうへついつい言ってしまうのは人間の悲しい習性。悪いと思っても、悪いといえないのだ。

四月に入学して、大人気。そして二学期期末にはいじめの対象。波乱の高校一年生、と言えば簡単だが、心底悲しい気持ちでいっぱいだった。

宙をうらむのは簡単だ。いつだってできるし、そんな気持ちは誰にもわからない。だけど……『親友』という言葉がそれを拒む。

切り捨ててしまえばどれだけ楽になれるだろうか？

けど、信じていたい。いや、信じたい。

あいつは裏切ってなんかいない。絶対に。

根拠のない理由ではある。しかし、それ以上に信頼しているのだ。宙のことを。

そんなときだった。

「「一夏っ（さん）！」」

鈴とセシリアが一夏の名前を呼んだ。

何事か、そう振り向いて名前を呼んだほうを向く。それでもその

表情に変わりはなく無表情だ。

その様子に一瞬だけ鈴とセシリアが苦い顔をしたが、すぐに真剣な表情に戻り話を続けた。

「「宙^{さん}が」」

無表情であった一夏もそれを聞いてすこしだけ表情を変える。

気付けば一夏の体は動いていた。椅子を、ガタツ、と鳴らして立ち上がり、走りよっていた。

その時、周りの視線は痛いほど三人を見ていたが当の本人たちはまったく気にしていなかった。

「「軍からの連絡があっただけど（あったのですが）」」

あんな鈴とセシリアでも軍の出身。適正は二の次で……

「「数時間前、EUのイグニッションプランの重要拠点が宙^{さん}とアリスアの二人に落とされたのよ（ました）」」

二人の言葉に一夏どころか教室中がわいた。イグニッション・プランを知らない一夏でさえ、「宙」という一言に驚きを隠しきれなかった。

イグニッションプランが何であれ宙が行動を起こしたと言う事実が一番大きかった。

「イグニッションプランは知らないけど……それは本当なのか？」

「「本当よ（です）」」

さらにどよめきが広がる。

その空気を読んでこれ以上騒がないように、少しだけ場所を変え
る。教室の入り口から廊下へ、できるだけ声が届かないような場所
に移動した。

そのため日のおりが悪く、薄暗くじめったい。陰気な話をする
にあたって、偶然にも似たような雰囲気の場所に来ていた。

「宙が……」

移動している最中も少しずつ聞いていったため、ある程度の情報
はわかった。

一つ、宙がEUの重要な拠点を落としたと言うこと。

二つ、同じく宙がラウラのいた特殊部隊『シュヴァルツェア・ハ
ーゼ』のIS二機のうち、クラリツサ・ハルフォーフを落としたと
言うこと。

いったい、どれほどの力をつけたのだろうか？

俺たちは立ち止まっている。あの日から何一つ進んでいない。自
覚しようとも、進めなかった。自身の弱さを呪った。

立ち止まって入られない、とそう思った。

思ったからには行動に移さねばなるまい。

「行こう、織斑先生のところに」

強くなるためには、力をつけるためには……誰であろうと踏み台
にしないといけない。たとえそれが自分のクラスの担任で、自分の
姉だとしてもそれは避けることのできない宿命に等しいものだった。
その一夏の気持ちの強さがわかったのか、鈴とセシリアが黙って
頷く。

そうして現在に至るのだが、最初は走ってなんかいなかった。いなかったのだが、宙の情報の伝達スピードは常識を逸脱しておりものすごいスピードで伝わってしまったのが、予想外だった。ただし情報の流出に伴いいろいろな見が加わってしまうのはこの世の常識。

哀しいことかな。もちろん智花や優、葵にすら伝わって……

「なんで私達追われる破目になってるのかな？」

「ここが情報源だと問い詰めた結果、自体がややこしくなったのだと思うわ」

「智花様、今は黙って逃げるのが得策かと」

「何言ってるのよ！ あなたたちのせいでしょ？ さっさとどっかいきなさいよ」

「私達はあなた達に用があるからそれはできないよ」

智花経ちの用といっても一夏のそれとほとんど変わりなく、すでに一夏たちに述べている。

が、それでもどうにもならないので、とにかく走る走る。追ってくるのはいろいろな見が混じった情報の確認をするために集まった物好きな集団だ。

ちなみにその見が混じった情報というのは……

『宙とアリシアが仲良くE.U.のイグニッションプランを破壊した。それはさながら恋人のようだったらしい』

何と言ったら言いのだろうか？　どういうふうに伝わったら、このようになるのか本当に不思議だ。

「だああああ、何とかしてくれええええええ」

「体力がない殿方は嫌われますわよ？」

ちなみに、目的地は何度も通り過ぎてすでに学園を数周していた。汗は無駄に流れ、体力は枯渇する。

「こうなったら、時間を無駄にしてまで説明したほうが良くないか？」

「何言ってるのよ一夏。この人数を相手にしてたらいつまで経っても終わらないわよ」

「でも、徐々に増えてる気がしませんか？」

「いやさっきからどんどん増援来てるわよ」

「体力が尽きても、新しい人が来るので集団は途切れれないと思われ
ます」

「ふええ、それじゃあどうすればいいの？」

「「「「逃げるしか……」」」」」

一夏、鈴、セシリア、優、葵の五人の思考は一致した。
そんなどたばたも学校側がやすやすと認めるわけにはいかない。
そんな学校の正義の味方——生徒会長の更識楯無が……

「学校に変わってお仕置きよ」

『見参』と達筆な字で書かれている扇子を、バンツ、と広げて楯無は廊下に仁王立ちする。

普段なら頼もしすぎて高感度が上がるぐらいなのにこういうときに限って、敵に回ると言う残念なお方だった。

「まったく、あなたたちは情報を流しすぎよ。そんなあなたたちは後で座学の時間を設けました。ちゃんと生徒会室に来てね」

「「「「ええええええー！」「」「」「」

口が軽いことは確かに軍人にとって致命的。そんな人達のための座学。いわゆる補習授業。

なんて最悪な人なんだ……

六人の考えがシンクロする。もちろん走ることはやめない。いくら相手が学園最強だからといってここで立ち止まるわけには行かない。
い。

立ち止まればもう二度と日の光を見ることはないだろう。特に後の集団に捕まったら比喩も現実のものとなるに違いない。まさに『前門の虎、後門の狼』状態だ。

徐々に会長と後方の集団との距離が縮んでゆく。

「どうする？」

「強行突破」

一夏と鈴の会話によりまた、ため息を全員ではく。

「通らせてもらいます」

仕方がない、よって右腕だけにISを起動させて剣を握った一夏と智花。今まさに飛びかかろうとしていたときだった。

「別にあなた達を止めるために来たわけじゃないわよ？」

「「えっ！」」

踏み込んだ足のせいで飛び上がりそうになった体を何とか制御させる。前かがみになりながらも、全力で切り込むのをやめた。部分装備のISを解除して光の粒子に戻す。
それでも走るのだけはやめない。

「先に行きなさい。ここは私が食い止めるから」

「……………へ？」

約数人が首をかしげた。

「何よその私がそんなことするわけないって顔は」

「だって……」

「ねえ？」

普段の彼女なら絶対にしなさそうなことなのだ。疑われてもしか

たのないことだろう。

失礼ね、と口を尖らせて足を、スツ、前へ運んだ。

「さあ、ここを通りたかったら私を倒してみなさい」

そう言っている会長の隣を全力で走り抜ける。すれ違いざまの後姿はともかつこよく、そして頼もしく見えた。

(アネゴオオオオオオオオオオオオオオオオ)

と全員思ったに違いない。

そしてこのとき完全に座学（補習）のことを忘れている人も全員に違いはない。

というわけで、ここは職員室前。

学校を何週もして辿り着いたので軽く感動しているものもある。

「まったく貴様らは毎回毎回騒ぎを起こさないときがすまないのか」

いつもどおりのため息をついてから「何のようだ」と問いかける。

「ちふ……織斑先生。宙がやったことは——」
「本当だ。あいつはE
Uどころか私達も敵に回した」

一夏の言葉をさえぎったのは、苛立ちを隠しきれていないラウラだ。

ラウラが行ったこともあり、鈴とセシリアを抜いた三人が絶句する。しかし智花は絶句する前に悲しい目でラウラを見つめる。

「ラウラちゃん」

「そういうふうには私を呼ぶな」

心配そうに名前を呼んだ智花を一蹴する。

ラウラはあれからまったくいいほど戻っていない。いや、どれが本当のラウラかわからないけど、あのときのラウラほど笑っているラウラはいないだろう。こんなことを言えば、ラウラは確実に否定するだろう。『私を知っているかのように話すな』と言われるに違いない。

だけど、みんながみんなこのラウラは嫌いだった。前みたいに笑って欲しいと思っているはずだ。

「あんたねえ」

「優、黙りなさい。話をそらさないで」

掴みかかろうとする優を葵がとめる。ここまで来て無駄に時間を過ごすのはきつい。

「ボーデヴィツヒといま会話していたが確実な話だそうだ。シュバルツェア・ハーゼはIS所持者が二人ともやられたらしい。怪我は軽いようだがな」

さすがは絶対防御と言うところか、と最後に付け加えて話をしめ

る。

「たとえ怪我がなくても、倒したことには変わりはない。しかも追いつきをかけたことだしな」

クラリッサの手に刺したナイフのことだ。

致命傷にはなりえない傷だけど、追いつきをしたと言う事実に変わりはなく。どのような意図であれ敵意はあるに違いない。

その事実がその場に在るものすべてを困惑させる。
なぜ？

どうして？

様々な想像が頭を駆け巡り、思考そのものを麻痺させる。
なぞはなぞを呼び、行動を遅らせる。

仕舞いにはこれが本当の目的なんではないかと考える。

でも、わかりはしない。答えを知るものなどどこにもいない。

「ま、神代がいまさらどうな行動をとっても私達は何もできん」

管轄外なので仕方がない。IS委員会のほうの要請がなければ動けないのがIS学園だ。

学生に危険な戦闘は避けさせるべきなので、こうすることのほうが正しい。

千冬さんが教育者として正しいということはわかっているので、皆もまたそのことについて言いにくいのであった。

少し無音の状態が続き、気まずさがこの場を包んだ。

「貴様らは何しにきた？　こんな話をしに来たのではないだろ？」

さすがは、千冬さん。空気を読むことについては長けていた。一夏たちもどうやって話を切り出していいのか困っていたところだ。

「あ、ああ。そうだ、こんなことをしに来たんじゃない」

はつきりと、そしてしっかりとした気持ちをもって一夏は言った。

「強くなりたい」

と。

「強くなってどうする」

「宙をとめる」

智花がうなづく。鈴がうなづく。優もうなずき、セシリア、葵もうなずいた。

「もう、目をそらさない。あいつは俺たちが止める」

それは、あいつのしたことを認めるということ。

裏切り者として認めて、あいつの意思であのようなことをしていると認めることだ。

「なぜ止める？ 関係ないはずだ」

「間違った道を進む友がいるなら止めるのが友だろ？」

「まだ、あいつを友とするか。馬鹿なのか？」

会話に急に割り込んで、実に不愉快そうな目つきと口調で一夏を蔑むラウラ。

そんなラウラへ一夏は振り向いた。

「いつからそんなやつになっちまったんだよ」

「なんのことだ」

あたりに不穏な空気が流れ始める。

「一夏さん、ここは抑えて」

セシリアが空気を呼んで、なんとか一夏を抑えようとするが。

「いつから、あいつのことを嫌いになったんだよ」

無視する。

「嫌いになっただと？ ……私が他人を好きになるか、ふざけたことをいうな」

「本当に言ってるのか？」

「ああ、それがどうした。くだらないことで私に話すことはない」

「もうお前とは話すこともないさ」

呆れたような感じだった。

このときの一夏に何があったかはわからない。けど、静かにただ激しく怒りがあったことだけがわかった。

「私のセリフだ」

そう言って静かにそこから離れた。そのラウラを見送った一夏は視線を千冬に向ける。

「どうしても強くなりたいんだ」

「強くなってどうする？ どうせ私達にはどうすることもできないのだぞ」

「できなくても、できることだけはやりたい」

IS学園の事情は知っている。でも、何もやらないよりは何かをやりたい、そう思った。

取り戻そう、と一つになっていた学園はもうなくなってしまった。要するにみんな諦めてしまったのだ。

でも、智花たちはあきらめるわけにはいかなかった。彼に関わっているものとして、いや関わっているものじゃなく、ただ好きだからとめようとしている。今でも彼の意味ではない、と信じている。確信も証拠もないけど、信じている。

「右に同じく」

優が智花の肩に手を置く。

「……優」

「智花様、私も同じです。織斑先生、どうかご判断を」

「葵ちゃん、ありがとう」

友の頭を下げる姿に智花も同じく頭を下げる。

「よろしく願います」

「よろしく願いますわ」

そんな三人の姿と一夏の考えに打たれた、鈴とセシリアも頭を下げる。

一夏はその五人を見て、

「俺たちがまだ子供だってことはわかってる。けど、それでも、譲れないものだけはあるんだ」

「だから――」

無理だ、と千冬は言おうとしたが…

「可能性はないかもしれない。けど、たった少しのチャンスに全力をかけた。……頼むよ、簡単に無理なことは無理だ、と割り切る大人にだけはなりたくないんだ」

千冬は言いたかった言葉を押しとどめた。

あるいは、これなら……、と自分の弟の成長に少しだけうれしく思った。

「そうか……わかった。明日第一アリーナに放課後に集合だ。服装はもちろんISスーツだ」

「」「」「はい」「」「」

千冬の返答に、はっ、と顔を上げてうれしそうに返事をした。

後日談として……座学は本当に厳しくおこなわれたようです。放課後の訓練も……鬼畜なため、皆さんの目が死んでいるようになっていたのはここだけの話。

第104話外伝 I S学園視点（後書き）

すいません、アリアのSSを一度だけ書かせてもらったのに執筆に当たります。

二次創作はこれからも続けますよー。一次もそろそろ更新します。

第105話 暴露(前書き)

ども、sirasuです。

なんだか久しぶりなこの件・・・え？ 知らない？ わかりました。

ではでは第105話どうぞ

第105話 暴露

第105話

「全は急げだ。早く教えろ」

「覚悟はできたようだな」

「勘違いするな、諦めたただけだ」

諦めた、を強調して言う。

俺の辛口もまったく気にしていない様子で、こほん、と軽く姿勢を正す。

それは彼女にとってちょっとした覚悟の現れである。彼女の眼差しがそれを如実に示していた。

言いたくないことは誰にだってあるし、それを馬鹿にすることもない。

宙も真摯な態度で聞くべきだと思い、姿勢を正した。

「私は空軍所属の父を持つ家に生まれた。それなりに幸せな家庭だった。もちろん、ISが登場するまでは……」

ここはISに恨むや黒い感情を持っているやつが多い、そう思っていたが……ここにもいたとは思わなかった。

「そしてISは世界に広まった。五歳のときか……そのときから女尊男卑の世界は広がってきた」

ここまで聞くと良くある話。というか、ここにいる人達のほとん

ど同じような話をするだろう。ここまでは……

「男性は不要と父は職を追われ、母は再び表面化した先住民との大規模な構成によって死亡。ついには酒におぼれた父の暴力を受けた」

アリシアの顔に暗い影が差す。

「そして、私は10歳のときに祖父に引き取られた。……祖父は私にやさしくしてくれたよ」

それなのに表情は暗いまま。

「同情というやさしさだった。私にとっては、とてもつらいものだったよ」

それは俺だって体験している。香のところの親父さんに養子にしてもらったけど、一度も心から「お父さん」と呼ぶことはなかった。今じゃ、養子じゃないけどな。ついでに国籍で確認済みだ。

「だが感謝はしていた。何も言わず引き取ってくれたことに。だからこそ、私はISに関わった」

嫌い、ではないにしろ、何らかの負の感情を抱えていたに違いない。家族をバラバラにされたのだから……

「国のISの適性検査を勝手に受け、自ら進んで軍に志願した。祖父に迷惑をかけたくなかった。いや、それ以上にあの優しさに耐えることを嫌った」

何も言うことはできない。同じような境遇を体験しているからだ。

俺の場合はこちらから拒絶していたけど。

「当時のカナダではＩＳの適正が低いものしかおらず、私は軍に喜んで受け入れられた。実験用のモルモットが見つかったんだ、それはうれしいことだっただろうな」

当時のカナダにはアリシアほどの適正の持ち主はほとんど存在せず、自ら軍に志願したアリシアは世間体の良いモルモットだったそうだ。

「幼稚だった私は、祖父に迷惑をかけたくない一身でモルモットになっっていることわからずに軍の訓練と称した実験をおこなってきた」

アリシアの表情に暗い影が差し込んだ。

「そんなにして、離れたかったのか」

「だって、そうだろう！？ ああ祖父の顔だけが頭から離れないんだ。同情の顔が！」

体を乗り出して、らしくない講義。

「落ち着けよ。先を話してくれ」

このままの調子で話されても困る。

過去話か、話しておもしろいものなど何もないのにな……
このさい、自分の過去を見つめなおすのも一つの手だろう。

「……くっ」

やがて折れたように自分の感情を抑えたアリシアが語り始める。

「モルモットになって数ヶ月。私のもとに亡国企業の勧誘が来た」

逆算して考えてみると、俺が馬鹿なことをしていた頃の話になる。まだ、世界の何たるかも社会も知らなかった頃の話なのに彼女は物凄い選択をしたことになる。

「うれしいものだったよ。間違っているといわれて思わず頷いた。世界を変える、その言葉が私を動かした。父と母を思い出し、涙した。だが、ISに罪はない。それに私にとってISは祖父と離れる理由のひとつとなったのだから」

「俺のときは脅迫で、お前ときは勧誘か」

すこしばつの悪そうに言った。

悪気があっていったわけではない、皮肉でもない。

ただ、嫉妬に近いかもしれない。

「そうでもないさ、断れば私は殺されていた」

そこは秘密結社だからわかることなのだが。

小学生——年齢的には高学年のときに思い選択を……

脱帽物である。

親近感も少しだけわいてしまう。

幼い頃に両親をなくして両親を失った。

世界を恨む。

力を望み、孤独を好んだ。

不幸なのは自分だけと知り、自らを呪った。

でも、それ以上にアリシアは困難を潜り抜けている。

「それからはカナダの軍に所属し、そして同時に亡国企業の活動を少しづつしてきた」

頭をひねる。これはすぐには了承できなかった。

「私の軍の扱いは表では一応訓練兵となっていたからな、自由時間は大量にあったんだ。あとは軍の目を欺くだけ、そんなに難しいことではなかったさ」

その時から技術力は群を抜いていたのですね、わかります。こちらの話にも脱帽物だった。

「世界の黒い部分に触れ、ゴミ共を殺してきた」

黒のペンダント。なにかの刃物をモチーフに作られたそれを持ち上げて……

「こいつのコアに使われていたIS^{アレサ}を譲り受けてくだらないものを踏み潰した」

アレサ、すこし巨大ではあるが亡国企業の製作するISのプロトタイプ。少々操作性に難があるが性能は馬鹿げていた。

カリフから教えてもらったが、相当な欠陥機のわりには現状でも普通にやりあえる機体らしい。

「そして何度目かの作戦で、私はとある人物を殺すミッションを受けた。初の私一人の仕事だ」

殺す相手は、アメリカの政治家。
もちろん、馬鹿な政治家のほうだ。

「暗殺が目的だったので、家の見取り図も完璧に頭に入れて入った結果。最後の部屋を回るまで目標を見つけられずに汚職を全部見ってしまった」

言葉にするのもいやなことらしい。

「そして極め付けに奴隷の存在」

酒池肉林。

女、それも当時のアリシアほどの少女もいたそうだ。

慰め物としての奴隷。

娯楽のための奴隷。

「何も感じないまま、思うが尽に力を振るった。そして全員を助けた」

それがアリシアの『お姉さま』と呼ばれる由縁。

「全員が私より年上なんだがな…」

「そうか、全員が年上……え？」

「どうした？」

「いや、カリフは違うだろ？」

背だってこのぐらいだ、と胸に掌を当て身長を示す。

「いや、私より年上だ」

盛大にがつくりとくる。

あれで、俺よりも年上ですか：

ドツとした疲労が肩にのしかかった。

「そんなに衝撃的なことか？」

「だって、そんなそぶりなんて一回も見たことがない……」

話し言葉もガキっぽいし、それに背が小さいし

「胸だって無いしな」

「てめえが言うな！」

アリシアが自分の胸を強調するように腕を組み、俺のセリフであろう言葉を発する。

俺が発するであろうセリフ、に多少の間違いがあるかもしれない……いや、断じて違うが、女性の口から出る言葉ではないことは確実だ。

そして、なぜ俺の考えていたことがわかる。

「私の想像した以上の世界がそこにあった。人が人として扱われていない世界。不幸な世界だ」

「そうだな、お前も俺も同じようなもんだ」

ISの女尊男卑が生んだ不幸が現在の亡国企業を動かしている理由だ。

存在はISの生まれる前からあったが、そうそう簡単に世界を変えるほどの動機が生まれるわけじゃない。その時その時で理由は変わる。

上層部の頭の固いやつらの考えはわからない。この先に何を思っているのかさっぱりだ。もともとの亡国企業の考えなんて、ここにいるやつらは知らない。

「俺もお前も、そしてここにいるやつらも不幸なやつらだな」

「だがな、宙」

黙った。言いたい事はわかっている。

「世界は私達が変わえる。偏に平等な世界に」

平等な世界。

そんなものは存在しないことはわかっている。

東さんも「平等なんてない」といつていた。

その通りだ。しかし、損なことを思わせないほどの自身が彼女にはある。

「そのためにもカリフの男嫌いを治さないといけないんだな？」

「治すことに越したことはない。整備班の結束は我々にとってメリツトだからな」

男と女で仲が悪く思うように作業が進みませんでした、は洒落にならない。

「んじゃ、適当にやってみるよ」

「本気のくせにか？」

あらら、良くわかりで……でも、あながち嘘ではないぞ。
無言。

言葉に出さない、視線だけの会話。

「礼を言う」

「どういたしまして」

……いろいろと本当に大変だな、俺は……

第105話 暴露（後書き）

暴露・・・いろいろ暴露しちゃいましたアリシアさん

そしてようやく使うことができた設定。

アリシアSを作ってくれた人——いまさらですが笑衝様に本当に感謝です。

んじゃ、インタビューといってみましようか

アリシア「潰すぞ」

すみません。（・・ω・・）シヨボーン

某MAD製作者のせいで男の大事な部分が縮みこみます。
やめてください。

アリシア「私には関係ない」

実際はそうなんですが、あなたの本名『アリシア・ベルリオーズ』
と言うじゃないですか。

アリシア「そうだな」

シュープリスを使っているんで完全に作者はあれを意識してしまう
のですよ。

アリシア「結局関係ないな」

そうですね。（・・ω・・）シヨボーン

コラボ（前書き）

初コラボです。

リアフレとのコラボであっちはなんと一次作品。

無理言ったのは自分です。

あっちの小説にも興味を持ってくれたらうれしいです。

コラボ作品名「クラウン・タイム！」作者「春野有希」

この作品・・・書いていたら2万近く書いていたので四部に分けました。

コラボ

コラボ

今日はクリスマス。

時系列で言えば、たぶんIF。

時間は夜で、場所はIS学園会議室。

もちろん、クリスマスといえは無論、パーティーである。

未成年だけのパーティーは危ないので、成人の人が来るはずなんだけど…。

「やつほおー」

『……………はぁ！？』

「ぶー、なにその不満そうな声…」

誰もこの人が来るとは思わないだろう。
というか……

「行方をくらましている人が……………ねえ？」

『ねえ？』

「なに宙君の言ってることにみんな返事してるの！？
それにその
団結力はなに！？」

『ねえ？』

束が涙目になって、言っているのに全員はしかめっ面だ。

「うわーん、みんなが私をいじめる」

こうして、クリスマスパーティーが開く前に成人である束を全員でフォローする羽目となった。

「でもなあ、俺は普通千冬さんが来るものだと思ってたんだけど…」

『確かに』

「うわーん、またみんなが私をいじめる」

「千冬姉は今何やってるんだろう」

もうみんな疲れたのか、泣いている束を完全に無視して千冬さんのことを考え始めた。

「ちーちゃんは、残業だって。教師も大変だよね」

『……はあ』

泣いていたはずの束が千冬のことを言っているのを見て、完璧に

ため息をシंकろさせる。

どうしてこの人は、ここまで不思議な人格をしているのだろうか？
ストレートに言うなら人格破綻者とも思えてくる。
妹である箒はこれを見て赤面していた。

「時間的にもそろそろか……」

「何か言いました？ 束さん」

みんなでシャンパン（ノンアルコール）を片手に立食の形でパーティーをしていると、いきなり束が何かを言い始める。

いつにもなく真面目な顔の束に少しの違和感を覚えたので、また何かをやらかすのか、と少しだけ身構える。

「プレゼント交換をしようか？」

時間的に普通に早い。

まだ、始まったばかりなのに普通に言い出してきた。

EDがアニメの十分ぐらいで流れるのに等しいほど早い。

「いやいや、早いでしょ」

「いやいや、これぐらいの時間にしておけば……プレゼントの会話で意中の人との距離が縮まるからね」

『しないはずがそうか？ いや、やる！！』

「「反語！？」」

異様な女子達のやるきに推されて男子一同（二人しかいないが）

は強引にプレゼント交換の場に移動させられた。

みんながみんな、自分たちのプレゼントを出し始める。

赤、黄、緑、などのクリスマスを意識した可愛いらしいラッピングの施されたプレゼントを出し始める。

俺も自分のプレゼントを目の前に出した。どうやら一夏も同じようなタイミングで出したようだ。

『ッ！！』

空気が変わった。

絶対零度？ 殺気？ 言いたい事はわかるだろうか？ まあ、とにかく普通じゃないことは確かである。

たぶん女子達の視線がこっちを急ににらみつけたのが原因のはずだ。

俺も地味に寒気のようなものを感じて身震いをしていた。

「宙、なんかやばくないか？」

空気が悪い。

一夏も動揺に感じていたようだ。

「そうだな」

相槌をうって、束さんのほうを向いた。

女子達と目が合わないようにするためではなく、束さんを監視するためだ。本当です。

「て、なんですかそれ」

若干、呆れたように呟いた。

東さんの目の前にある、プレゼントボックス——紫と黄色のまがましい箱を目の前においていた。

また、妹である箒が頭を抑えている。

「東さんからのささやかなプレゼントだよ」

ささやか、妙に突っかかる言葉だ。

というより、絶対に何かある。

♪

強引に音楽が鳴り響き……これまた、強引にプレゼントを引っ張られた。

「えっ？ てか、全員落ち着けて」

一夏も強引に取られたらしい。

なんということでしょう、俺の目の前には彼女たちのプレゼントが高速で交換されていていつている。

俺自身何もしていないのだが、勝手に彼女たちが動かしていくのだ。

どういふことかわからないが、一夏一行のプレゼントは高速で流れていくのに対して……智花、優、葵、ラウラのだけが妙に長く手元にある。

「もうどうにでもなれ」

ここに来て、完璧に俺は行動することを諦めた。

「なあ、宙。これはいつになったら音楽が止まるんだろっな」

確かに、音楽プレイヤーの近くには誰もいない。

「終わらない、とかないよな」

「ははは……あるかもな」

「ははは」

もうすでに乾いた笑い声しか出ない。

♪

終わった。

「あー！ー！ー！！」「くそ！」「やったぞ！」「やったわ！」「こ
んなの出来レースですわ」「認めん、認められるか！」「ううう、
もう」

十人十色の反応を見せる。彼女たち。

声から察するにラウラと鈴が喜んでいる。

こんなもんだろう、と自分の手元を確認してみると……

「なぜに二個？」

束さんのあのまがましいプレゼントと、誰のかわからな――

「早く開けて感想を言うがいい、宙」

ラウラのプレゼントのようだ。

これまたかわいらしくラッピングされていて、東さんがどれほど以上なのか如実にあらわしていた。

「なんで、東さんのがここにあるんだよ」

「音楽止めに言ったからじゃないのか」

その手があったか、とがつくりうなだれた。

まがまがしい箱とかわいらしい箱。

おむすびころりん、よりも明暗が分かれているが……はてはて、鬼が出るか蛇が出るか。

目に見えてわかるのは初めてのことだ。

「ほらほら、早く開けるんだ」

がつくりとうなだれている鈴とラウラ以外の女子は、泣く泣くプレゼントを開けている。

少しはわくわくするものではなかっただろうか？

俺も一応わくわくしてい……る？

まがまがしい妖気を放っている箱を見てそれが言えるだろうか？

「そ、そうだな、早く開けてみることにするとしよう」

隣にいる一夏も鈴に煽られてプレゼントの箱を開ける。

それにならない、俺も開けた。

出来るだけ、包み紙を破らないようにリボンから丁寧に開ける。

「むっ、そこまで大切にしてくれるとは……これが、愛、か」

完璧に大切な何かを勘違いしているラウラを無視して開けた。
中に入っていたのは、形概要に歪な――

「……マフラー？」

まあ、見えなくもないのだが……形が以上でな、マフラーに見えない。

たぶんこの形状の布の形はどこか巻く形に違いない。

それほど歪。

もうちょっと、形を整えてくれればよかったんだが、どう反応しているやら。

「ありがとな」

若干声が震えているが、まあ、使用できないほどでもないので首に巻いて見せた。

それ自体が感動物だったのか、ラウラの目が潤んでいく。

「こ、これは違う。な、泣いてなんかいないぞ」

なんとかかわいい生き物なのだろうか？

完全にうれし泣きだってことぐらい俺だってわかる。

「そうだな」

それだけ言って、ラウラの頭に手を置いた。

ポン、ポンと二度頭の上を叩き、はにかんでみせる。

「さてと」

軽く放心状態となっているラウラを見て、これ以上は干渉しないと心に誓い。

紫と黄色の箱を見る。

「なあ、一夏。これをみてくれ……どう思う？」

「そのセリフは、危ないな。箱のほうは、触らないほうが良いんじゃないか？」

「お前もそんな感じか。でもな、開けないわけにはいかないだろう？」

後から感じる視線、ちらちらとこちらを見ては視線をそらす束。何を考えているのやら。

でも、なんとなく期待していることを感じるんだよな。

「鈴はどう思う？」

「別にいいんじゃない？ 開けたって、何とかなるでしょ」

ファントムタスクにいたときの経験がこうになって生きるとは思ってもよらなかった。

もうここにおいておくだけでもいやなのだ。

おいでわかる。

もうこれは投げ捨ててやりたいところなのだが――

「ふふふ、そらあゝ」

抱きついてきているラウラのせいで身動きが取れない。俺にラウラを突き飛ばすという選択肢など元からない。では、どうするか？

開けるしかない。

ここまで期待されたら、もう逃げられない。

「いくぞ」

つばを飲む音が以上に聞こえる。

ゴクリ、と。

我ながら緊張しているようだ。

もう爆弾処理見たいじゃないか……

逃げ出したい心と、外部——主に束の期待からサンドイッチされている。

その状態でゆっくりと指がリボンに手をかけていく。

「ククク……引っかかったね宙君。あっちでみんなと仲良くしてやってよ！」

「はあ？」

リボンが解けた瞬間。

箱が割れて光が漏れる。

まずい、そう思ったときはすでに遅かった。

なんとか、全員ギリギリのところでISを起動させて空中に浮いている。

安堵のため息が漏れて、どっ、と疲れた。

「ここは？」

「わからないな、どこの海だ？　ここは？」

ラウラの問いに一番最初に気付いた俺が答える。

「大丈夫？　一夏」

「ああ、なんとかな」

ISを装備したままよりそう鈴と一夏。

むちゃくちゃ良い雰囲気であります、ラウラ隊長。

と、内心あせりまくっている宙はラウラに質問した。

「テレポートか？」

「そんな技術は知らないな。しかし、束博士のすることだ。考慮してもいいだろう」

完全に軍人モードのスイッチが入っているようだ。

「……軍事衛星にアクセスできない？」

ラウラの口から不穏なキーワードが漏れる。

「どういうことだ？」

「現在位置を検索しようと福音のときに使った衛星にアクセスを試みたのだが、失敗した」

「ちょっと、それは一体どういうことなのよ」

鈴が吼える。

「私にだってわからん。衛星がなくなっている、としか思えん」

いろいろな手段を使ったのだろう。

「それに、プライベートチャンネルもつながらない」

ためしに、智花たちと繋いで見た。

確かにつながらない。

「一夏とはつながったわよ」

鈴がそう言う。

それなら、と。俺もラウラとプライベートチャンネルをつなげてみる。

『ラウラ』

『宙とのプライベートチャンネルは繋がったのか』

ここにいるやつらだけと、プライベートチャンネルが繋がるということはわかった。

だけどいないやつらには繋がらない。軍事衛星にも繋がらない。

「どういうことだ？　じゃあ、ここは一体どこなんだ？」

海のと真ん中のように、水平線しか見えない。

「レーダーに反応？」

ラウラのISが何かを捕らえた。

いち早く索敵モードにしていたのだろう。

すぐにデータリンクをプライベートチャンネルを利用して繋ぐ。

「すごい速さだな。スパークルーズの戦闘機か？　となれば米か、EUぐらいかな？」

「ロシアのSU-50かも知れんな」

「実戦配備してないだろ、ラウラ」

「何があるかわからんだろう」

少々マニアックな方向に会話が進んでいるが、すでに全員戦闘体制を取っていた。

ただし、武器は持っていない。

「接敵」

ラウラの掛け声と同時に、隣を高速で駆け抜ける三機の戦闘機。

「これはっ！　見たことないぞ」

「うちの軍じゃないわ」

「ドイツ軍にあんな機体が配備されてるわけがない」

戦闘機に詳しくない、一夏だけが蚊帳の外だ。

まあ、悪い気はしない。

「オープンチャンネルを開いて、敵じゃないことを……ん？」

戦闘機の下の部分から何かが赤い光——炎のようなものを上げて発射された。

「どうやら、遅かったようだな。履歴を見てみれば、あっちからすでにコンタクトをはかってきていたようだ」

鈴も同じく、といったように頷く。

話に集中しすぎた。それが原因。

「それじゃ、一体どうなるんだ？」

「あんだねえ、普通自分の国の領空に敵がいきなり出現したのよ。領空から追い出すに決まってるじゃない」

一夏の平和ボケした感性を鈴が責める。

だがこうしている間にも炎を吐いているものは止まらない。

「うん、ミサイルだね」

「ミサイルだな」

「ミサイルね」

「なにポケットとしてんだよおおおおお」

平常心を保っている四人に対して、ようやく状況をつかめた一夏が怒る。

「だって、なあ？ 敵と決まったらそう簡単には改めないだろうし……」

「ここは迎撃したほうがいいだろうな」

宙の三弦が光を放ち、ラウラのハンドガンが火を噴いた。

それだけでミサイルが空中で四散する。

戦闘機がそれに反応したように散開し、離脱してからUターンしてきた。

「それにしてもあまり時間がたっていないのに偵察機がすぐに来たことが気になるな」

「空母が近くにあるんじゃない？」

確かに海しかないが……

「たえそうだったとしても、あまりに時間が短すぎる。レーダーの性能も物凄いものだろうし、訓練もされてるはずだ」

「あー、確かにな」

戦術眼？ とでもいうのか、とにかく経験が生きている。

ラウラが一体どこまで考えているのかわからないが、俺が思うに

……

- ・三大洋のどこかにいる。
- ・レーダーが以上に発達しているか、衛星の性能が高い。
- ・戦闘機の挙動を見る限り、きちんと訓練されている。

こんなものだ。

「こいつらを無事に落としてからその後は考えるか」

三弦を剣の状態にして構える宙。

鈴も双天牙月を構えた。

「三機しかないし、一夏はそこでやすんでなさい」

と鈴が言うのを合図に全員が三機の戦闘機に飛び込んでいった。
結果、全滅。

宙は翼だけを切り落とし、ラウラは片翼にハンドガンを撃ちこむ。
鈴も脱出できるように切り裂いたようだ。

「あはは、これで敵になったな」

自らやったこととは言え、話を聞いてくれない方向に持っていつてしまった。

正当防衛、ということで俺の中ではいましたことは正義だ。

「笑っている場合じゃないだろ!？」

能天気笑い始めた宙を一夏が怒った。

「さて、笑うのは後にしろ……撃ってきた!」

データリンクによってラウラの視点を持つてくると、散弾かともわれるほどのレーザーが飛んできた。

「鈴ッ！」

「ラウラ、後に」

箆手呼び出してエネルギーシールドを発生させる。

一夏は零落白夜のシールドだ。

エネルギーシールドがレーザーをはじき、零落白夜が消滅させる。

「ラウラ、レールカノンでぶっ飛ばせ」

「できるだけ、殺さないようにしよう」

どうやら潜水も出来る偵察艇のようだ。

現在は物凄い勢いで俺たちから逃げている。

「早い」

ラウラが意外そうな声を上げた。

小型艇なので小回りが利き、予測ロックが出来ないらしい。

訓練されている、というのはあながち間違いじゃなさそうだ。

「標準をこっちにまわしてくれ。追いかけるのは十八番なんだな」

鬼ごっこなら大得意だ。

ファントムタスクで一体どれほど鬼ごっこをしたか、それもあのがキたちちょこまかと動くんだよな。

「トリガータイミングはいつでもいいぞ」

完全に予測射撃の域だが、逃げている小型艇の数センチ先を確実に捉えている。

そして撃った。

俺のラグを意識して撃ったのか、綺麗にエンジン部分だけを打ち抜いていた。

「すげえ」

思わず感嘆の声を上げてしまう。

「なに、お前のことなんでもわかる」

こっぱずかしいセリフをこうも堂々と言うので、すこしだけ動機が早くなる。

俺らしくないな、そう思い、できるだけその感情を露見させないように努めた。

すると、どこからか視線を感じた。

「お前たち……………何者だ？」

どこからか、男の声が聞こえる。

声と視線から方向を逆探知、といっても感覚のままに振り向いた。ここにきて、始めて見た人間の顔に安堵する。それも、たぶん二人。もう一機は男の陰に隠れて大部分が隠れている。

しかしリーダーに映らないとはこれいかに。

「やっと話せるやつが来た」

第一声がこれだ。普通すぎる。

「死に掛けたぞ？ 普通に……」

攻撃はされたけど、死に掛けたわけじゃないな。
ラウラも鈴も俺も武器をすでになおしている。

「しかしここは一体どこなのだ？」

「どっからどうみても地球でしょうが……たく、どうなってるのよ」

「念のため更新を試みるが、お前たちは何処の星の人間だ？」

少々、不快だ。日本語を話しているというのに、これはどういうことだろうか。

「いや、地球人なんですけど……」

「待て、宙。ISを相手は装備していないぞ！？」

ラウラがそう言うのと一夏と鈴が反応する。

「そういえば……男だな」

「男ね」

確かに男だと思われる人がISよりもごつい感じの装甲をつけていた。

色は青。デザイン性よりも実用性を取っているような装甲は角ば

った印象を受けた。

ガン●ムではないな……

「そんなに俺がめずらしいのか？」

男が意外そうな表情で聞いてきたが……

「お前たち、注目するところはそこじゃない。ISを使っていないのに空を飛んでいるのだぞ？」

呆れ気味のラウラがISをつかっていないのに空中に浮いていることを指摘する。

「確かに……他の国の新兵器か？」

「そんな情報知らないわよ」

「鈴もラウラも知らないのか、じゃあ、あれは一体？」

確かに不思議だ。

あのようなものがあることは知らないし、俺と一夏以外にISを使える人物がいることも知らない。

「まあ、とにかくにも……こちらに戦闘の意思はない」

すでに戦闘機を三機、偵察艇を一船沈没または撃墜しているが……

「ひとついいか？」

「ああ」

返事をする、と、なぜか安心したような表情を取る男。名前はまだ聞いてない。

そいつの後に紫の機体が見えたが、なんかすぐに隠れた。

正直、隠れ切れてはないが……顔さえ隠れればいいらしい。これぞまさしく、頭隠して尻隠さず。

「本当に地球人なのか」

性格が心配性なのか、と疑うほど、また聞いてきた。

「ちゃんと日本語はなせているだろうが……ドイツ語だって、中国語だって話せるぞ？」

「ほう」

と、感心したような声をあげる。

「ラウラと鈴がな……」

ぼそぼそ、と最後に付け加えた。

「宙はドイツ語も中国語も話せるのか……さすが、わが夫」

が、ぼそぼそ、といったことは聞こえていないようで、物凄い勘違いをラウラにされる。

「え？」

素っ頓狂な声が出るほど、驚いた。

正直な話、しゃべれるのは日本語と英語だけだ。

「どうだ？　これが一夏と夫の差だ」

自信満々となない胸を張るラウラ。

「いや、ラウラ？　俺は話せないと……」

弁明しようとする宙。

「ふん！　一夏だって話せるわよ。ねっ？」

一夏に「もめるぐらいある」といわれた無きにしも非ずの胸を張りながら言う鈴。

「だから、ラウラ？　話せないと……」

聞いていなかったのもう一度弁明する宙。

「いや、俺は話せないぞ中国語」　「俺も話せない」

一夏がカミングアウトし、俺もそれに便乗するが……

「それぐらい話してみせなさいよ！　帰ったらしっかりと教育……
ブツブツ」

「俺の話を聞けーーーーー！！」

しっかりと聞いていないのがわかったので、叫んだ。

「あの〜〜〜 って聞いてない？」

そんな会話をしているときに、あの男が話しかけてきた。

「で？ お前たちは何をしに来たんだ？」

「クリスマスパーティーをしていたんだがな」

「まあ、確かにそうだな」

「尋問されているというのに……馬鹿か？」

まあ、実際にいえば尋問ではないのだが、探りをあからさまに入
れてきている相手に軽い言葉は吐きたくない。

そう思っているんだけど、止まらないのは俺たちのほう。

「馬鹿よ、馬鹿」

「馬鹿って何だよ、鈴。パーティーをしていただけじゃないか」

確かに一夏の言うとおりだ。

だが、ここに来てからすこし戦闘をしていたので戦闘Ⅱパーティ
ーといった変な方程式が相手側で成り立っていないことを心から祈
った。

「あの人が変なことをしなければなく、ホント」

「パーティーをしていたただけだな」

一夏しつこい。

「私は軍人だ。尋問などに屈しない」

実際に言えば尋問じゃない。大事なことなので二回言った。

「私も軍人だから、しゃべる気ないわ」

実際に言えば以下略。

「なんなんだ一体……？」

呆れたような声を出す男を無視して宙は言う。

「ふう、とにかくここは……かくまってくれとうれしい」

「だな、軍隊に追いかけられるのはこりごりだ」

この中で唯一平和ボケしている一夏が言う。

別にあれぐらいのことなんて、何度も経験しているんだけど……
数々の死線を潜り抜けてきた宙にとってこの感覚は麻痺している
に等しい。

「せっかくのクリスマスに、まったく」

「ほんと、ここからだっただが……宙、マフラーは落としてない
だろうな」

鈴とラウラがそろってうつむき、ラウラが俺にマフラーのことを
言った。

「落とすかよ、せっかくのプレゼントだぞ？」

そう入っているが、ISを装着したことによって現在粒子状態。
本当の事はわからない。

「ふ、ふん。それでいい」

えらそうでいて、かわいらしい反応をするラウラに和んでしまう。

「でもこれからどうする？」

和んでいる場合でもないことに、和んでから五秒後に気付いた宙
がこれからのことを皆に聞いた。

「あ、あんたが言ってんじゃないわよ！ あんたがあ箱を開けな
ければ良かったことじゃない！！」

呆れて何もいえない状態から鈴が言ってくる。

「はあ、俺の責任か？ 別にどうでも良い、とか何とかお前が言っ
たじゃないか」

「なんで、巻き込むのよ！」

鈴がけんか腰でこちらに突っかかってきたので反射的に、イラッ、
とし、俺もついついけんか腰になってしまった。

「ちょっとストップ！ とりあえず俺の家に来るか？ クリスマス
パーティーの準備中なんだが」

こうしてあの男の言うとおり、一時休戦する俺と鈴であった。

コラボ三部

コラボ三部

「で、結局・・・こうなったわけか」

現在地、明日香宅。

明日香というのはあの男のことだ。

自己紹介もここに移動するまでに済ませておいた。

ついでに足跡は完璧に消すように手を回しておいた。

「おお、すげえなこれは」

普通の家にしちや立派過ぎるクリスマス感に、驚きの声を上げた。

「二次会になるのか？」

「でも、なかなか楽しめそうね、これ」

鈴の珍しい毒舌が明日香に向かう。

「これ、扱いかよ・・・」

悪気はないんだ、悪気は……

と言うべきだったかも知れないが、あるかもしれないのであえて言わなかった。

普段はこんなこと言わないんだ、というべきかも知れないが以下略。

「こちらにもクリスマスあるんだな」

「それは一応、俺たちのセリフなんだがな」

すると突然玄関ドアが開き、ドタバタが物凄くなったバージョンの足音が響いた。

ああ、なんとなく知っているような気がする。

そしてついにリビングのドアは開かれた。

「美和」

「お兄ちゃん！」

明日香がそいつ——妹の名前を呼んで、妹は兄の胸に飛び込んだ。なかなか仲のよさそうな兄弟に見える。だが、俺はそれになんともなく違和感を感じていた。

「お兄ちゃん！ パーティー楽しみ！」

「わかったから、美和。ほらちゃんとお客さんに挨拶して」

そう、明らかに回りが見えてないのである。

兄のことになったら周りが見れなくなる妹……

「はじめまして。村雨美和です。兄がお世話になっております」

というわけで、明日香の名字も村雨である。

そんな礼儀正しい妹の後ろで、すこし意外そうな視線を出している明日香。

こいつは同士だ。そう直感した。

「妹か？」

「そうだが」

まあ、わかりきったことであつたが、一応確認しておいた。

「ふーん、デジャブだ」

「お前も苦勞してるんだな・・・」

「お前もか・・・」

明日香宅のクリスマスパーティーはイレギュラーを含め行われることになった。

「なんかあつちで抱き合ってるぞー」

明日香は妹というキーワードにおいて共感の持てた宙と抱き合っている。それを美和が引き離しにかかっていた。

「一夏、あんたも混ざってくれば？」

「え？」

「てか、今からガールズトークするんだから気を利かせなさいよ」

「…了解」

明日香とはまた違う苦勞を抱えていそうな一夏は不貞腐れつつも

明日香や宙がいる方へと向かった。

リビングに女性陣が集まっていた。

恋する乙女の結託は時にどんな絆より強い、それを体現するように初めて会った鈴音とラウラを含めてメリール、茉莉、現は打ち解けあっていた。現は多少人見知りの気があるがメリールや茉莉のおかげで面と向かって話せるほどになっている。

そしてそこに流れる空気は少し甘美で蠱惑的な雰囲気だ。そう、それは所謂『ガールズトーク』の雰囲気だった。当然その議題は恋話。

「じゃあ、早速！」

茉莉が皆に促すように威勢よく声を上げる。

「とりあえず見て取れる感じでは鈴音は織斑君、ラウラは宙君が好きなわけよね」

ついさっきまでメリール達はそれぞれを『凰さん』『ボーデヴィッヒさん』と呼んでいたが「名前がいい」という二人の意見を尊重し今はもう名前で呼んでいる。ちなみに鈴音は普段『鈴』と皆から呼ばれているので多少むず痒い感じがしていたがさすがにそれは速いというメリール達の意見に譲歩した。

「なっ!？　　べ、別にあたしは幼馴染ってだけで・・・」

「うむ。宙は私の夫だからな」

両者の反応に茉莉はそれぞれ違う意味で「アハハ」と乾いた笑いを洩らす。

「こんな機会そう無いんだからさ。正直に言っちゃいなよ」

茉莉が鈴音に向かって意地悪な笑みを贈った。それに対し鈴音は頬を朱に染めながら、

「う……………」

と黙り込みながら小さく首肯。その場の女性陣にはそれで十分だった。

「あ、あ、あんた達はどんなのよ！ やっぱりあの明日香っていうのが好きなわけ？」

復活した鈴音がメリール、茉莉、現をいっぺんに見つめながら捲くし立てた。

「はっ！？ いや、私は別に……………いや、えつと……………」

人のことを言えないメリールだった。

「わっ、私はす、好きだよ……………明日香が」

誰もが「なにこの可愛いの」と思うほどの初心な表情を浮かべた茉莉。

「……………好き……………うつ」

言ったは良いが自分のセリフで自爆しかけてうろたえた現。これもまた「なにこの可愛いの」。

「ほう。三人で一人の男をめぐって争っているのか。大変だな」

何処か他人事なウウウ。彼女の自信に普段の状況を知る鈴音だけが溜息をはく。

「さ、三人じゃないのよ!」

例の如く復活したメリールが悔しげに叫んだ。その心からの叫びに茉莉と現も「うつ」とダメージを負う。

「他にもいるわけ?」

なんとなく同じ匂いにするメリール達に俄然興味が湧く鈴音。ラウラは物語でも聞くかのような表情だ。

「いるのよ。笑顔の可愛いフランス人やクールで美人なフィンランド人、大和撫子を具現化させた日本人、そして極めつけはアイドルときてる」

綺麗で巨乳な日本人、容姿端麗なイギリス人、下手したら誰よりも近い位置にいるフランス人などを相手にしている鈴音も多少驚いた。

「あんたも苦労してるのね」

「く、苦労なんてしてないわよ! 私が勝つに決まってるの!」

そのメリールの言葉に突っかかる若干二名。

「まだ決まったわけじゃないよ！ 私も負けないもん！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・明日香は私が・・・・・・・・・・道化師
憲章・・・・・・・・・・」

（道化師憲章？）

鈴音、ラウラは当然のことながらメリールや茉莉さえもそのワードの意味は分かっていない。

「ふん、それにしても大変だなお前たちも」

夫のいるラウラには何処吹く風。

「あんただって油断してると宙盗られるわよ」

「そんなことはない！」

自信満々だったラウラの顔に僅かに影が差す。

「えっ？ 普通『夫』って盗られるものなの？」

既に宙Ⅱラウラの夫神話が完成していたメリールはキョトンとした。ちなみにキョトンとしたのはメリールだけだった。

「どうしたら落とせるのかしらね」

何時に無く神妙な面持ちで鈴音が唸る。

「水攻めがいいんじゃないかな？」

「城じゃないわよ！」

完全に打ち解けていた女性陣には既に冗談を言えるほどのムードが空間を支配している。ここでの主な尽力者は茉莉であり「水攻め」も茉莉である。

「や、やっぱり胸が大きい方がいいのかな？」

メリールの発言により四名の被害者が出ました。

「そ、そ、そんなことあるわけじゃない！ い、一夏はその・・・小さい方が・・・きつと・・・」

と徐々に自信を失くし覇気が無くなっていく鈴音。

「やはり胸は大きい方がいいのか・・・」

と一瞬悩みつつもそれは宙の好みだから仕方ないと男前なことを考えるラウラ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・それは・・・・・・・・・・難しい」

と自分の小さな膨らみを見つめつつ落胆する現。

「大体、男子はどうしてそんなに大きい胸が好きなのよ！」

と明日香が聞けば俺はそうでもないかと答えるだろうに勝手に巨乳好きだと決めつけたメリール。

（無くはないし・・・ちよいどいいサイズなんじゃないかな？）

と口には出せないものの心の中で少しガッツポーズをした茉莉。

「あゝもう！ 無いものを考えてもしようがないじゃない！ 折角違う世界（？）みたいな所に運ばれたんだからそれを活かさないわけにはいかないわ！」

復活した鈴音は勢いよく立ちあがり一夏がいるであろうドアの方
向を睨む。

「活かすとはどうするのだ？」

ラウラが鈴音に問う。

「当然、一夏に優しくしてもらってことよ！」

クリスマスと似た様な処遇の女性陣を見て鈴音は多少ハイ状態に
なっていた。

「やさ、しく！？」

何を想像したのかラウラが驚くほどのスピードで全身を赤く染め
た。

「なるほど！ じゃあ、私も明日香に！」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！ 茉莉は普段から一緒に住んでる
んだから少しは譲りなさいよ！」

「えー それは関係ないよ！ だってメリールは明日香と同じ学校に行ってるじゃん！」

「うっ」

鈴音から発生した『優しくしてもらいたい』菌はあっという間に伝染しもはや治療薬は存在していなかった。

「でも、どうしたら優しくしてくれるんだろう？」

茉莉が素朴且つ一番の難題を口にする。それを聞いた女性陣は一片に黙り込んだ。ちなみにラウラはまだ「優しく・・・宙がわたしに・・・」とうわ言のように呟いていた。

「普通、クリスマスなんだから言われなくとも優しくするのが本当よね！」

ある意味本末転倒なことを鈴音が漏らす。そして一夏にそれを求めていいのかそれも分からない。

「す、素直に甘えてみる・・・とか？」

茉莉の発言に鈴音とメリールが「それは・・・」と今世紀最大の思案顔を浮かべた。それはさすがに恥ずかしい悔しいでもと二つの乙女心が戦っていた。そして、それが出来そうな人が目の前にいるのも決して起爆剤にはならず微妙な棘となり心に突き刺さる。そんな複雑な心境が絡み合う何とも言えないもどかしさを感じる。

茉莉は茉莉で普段そういうことをしないメリールのそういう姿は破壊力があるだろうな、と乙女の危険察知レーダーと多少のオタク

の血が警鐘を鳴らす。

そんなことを皆が考えていると「あっ」と茉莉が言って急に頬を朱に染めた。

「どうかした？」

鈴音とラウラ、そしてメリールと現が訝しげに茉莉を見つめる。すると、

「明日香って優しいんだ」

と言った。

「「「は？　？　？」」」」

眼が点。それが今の四人の状況を一番的確に表現していると思われた。

「あっ、いや素直に甘えるにはそういう雰囲気っていうか、心構えっていうか、そういうのが必要かって思って。だから明日香の良い所を……そ、そんな目で見ないで！」

ちなみに四人の目は哀れみや慈悲ではなく羨望だった。

「い、一夏はか、か、格好いいのよ！　それに背も高くなってるし……時々ドキッとすることを言うこともあるし……」

鈴音も茉莉に影響されもとい乗っかり好きな人自慢を始めた。

「明日香は……『そういうの』は鈍感だけどそれ以外はすごく人の気持ちが分かって優しいし、強いし、一緒にいると安心するし……」

メリールは途中でソファに顔を埋め「ううゝ ううゝ」と唸り出した。その顔は真っ赤に染まり皆が心の中で「がんばったね!」と激励の言葉を贈った。

「私は断然『強さ』だ。宙は強い」

強さ。それに必要なのは『優しさ』か『勇気』か『希望』か。明日香がこの場にいたならば、そんなことを考えるのではないだろうか。

「………で………
だし………
………それに………
………みたい………」

主に接続語しか聞こえないくらいの小さな声で明日香評を語る現。まだ唸っているメリール以外の三人が耳を現の口元に近づける。一秒、二秒、三秒……赤、紅、真紅……予想以上の明日香評に他の面々の方が恥ずかしくなり自分のことのように顔色が変わっていった。

「………の………
………だった時………
………それで………」

現の明日香評はSSくらいなら書けそうなほどだった。しかしそれは彼女たちを萎えさせるどころか逆に好きな異性談議をより一層激化させた。

「ていうか一夏は鈍感過ぎるのよ！ 唐変木！」

「あっ、明日香も恋愛系のことには鈍感だね。もしかして先生のせい？」

「先生とはなんだ？」

「明日香には尊敬してる探偵の先生がいるのよ」

「……明日香の夢は探偵」

可憐な花が語るのは初めて出会った王子様のこと。

「強さとは想いの証明だな、うん」

「明日香も強いよ？」

「い、一夏だって負けてないわよ！ そりゃ普段はあかかもしれないけど、でもいざって時にはす、すごいのか、格好いいし……」

ダメだ。鈴音ベタ惚れじゃない」

「あんたもでしょうが、メリール！」

それぞれに美しい色を持つ花々は今、想い人を心に映し麗しく咲き誇る。

「・・・・・・・・・・夕陽・・・・・・・・・・お嫁さん」

「「えっ!?!」」

「うん? 現が明日香の嫁だったのか?」

「いや、これは・・・・・・・・そういうんじゃないと思うわよ・・・・・・・・」

聖夜に咲くはシクラメン（恥ずかしがり屋）、アイスランドポピー（気高い精神）、カトレア（純粋な愛）、ストック（見つめる未来）、そしサザンカ（直向な愛）。

「どんなお願い、しようかな?」↑ワクワク

「そうだな・・・私は宙に・・・・」↑真紅の頬で真剣に。

「わ、私は別にお願いとかがそういうのは・・・・・・・・うううう」↑恥ずかしい。でも・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」↑初心な願い事が溢れそう。

「一夏にお願い・・・・・・・・しちゃうんだ・・・・・・・・あたし・・・・・・・・一夏」↑恋に酔うのは十代乙女の特権です。

想いの形はそれぞれ違うけれど、その強さは皆溢れんばかりで。伝えたくとも伝えられないもどかしさに心が痛む。それでも彼女達は進むだろう。

「みんなでやれば恥ずかしくないよね?」

「そうだな」

「・・・・・・・・・・うん」

「そ、そう・・・・・・・・なの？」

「ま、まあ、もうここまで来たらやるしかないでしょやるしか！」

だから今宵、夢の時間プレゼントを運ぶサンタクロースは彼女達に微笑みかけるに違いない。

「「「「いざ　！　！　！　「「「「」

聖なる夜に魔法をかける、その為に。

コラボ四部

コラボ四部

「やらないか」

背後から、ゾツとする言葉が聞こえた。
背筋が凍りつき、無性に暴力を振るいたくなる。

「「アッー！」」

だがここはお決まりの叫び声。
こうなるのは当たり前だ、軽く反射の領域に近い。

「冗談だよ」

「一夏よ、冗談に聞こえなかった」

冗談を冗談で返す。

もし真面目に、だった場合はここで殺していた。
塵も残らないほどに大正の100パーセントを室内でぶっばなし
てでも、殺していた。

「演技にはできすぎだな」

こちらにも冗談だと思うが、なんか震えている。
ここは例に倣い後ろにズリズリと後退した。

「え？　ちょ、なんで距離をとるんだ！？」

「「危ないから」

妹の存在のおかげで信頼を置けるようになった明日香と口をそろえていう。

ここまで一致するやつがいるなら……今は一夏がエアールになりつつあった。

「口をそろえて言うなー！」

もうすでにエアールと化している一夏を無視して会話を続けた。

「で、あいつらの誰が好きなんだ？」

「好きなんだ……？」

いろいろと聞きたいことはある。

だが、当の本人はどこ吹く風邪だった。

「いや、誰が好きかと聞かれても。でもどうしてそんなことを？」

「いやー、聞いてみたかったんだよ」

あっはっは、と豪快に笑いながら…

（あー、こいつは……苦労してるんだなあ）

と、感慨深くなるのであった。

「こいつもお前と同じ状態かもな」

と、一夏の肩を抱き寄せる。男同士でこの表現はどうかと思うが……そして俺も人のことをいえる立場ではないが……

「そんな羨ましいやつじゃないって」

遠慮とかそんなのなしに、真面目に言っている一夏よりかはましだと思う。

そんな宙の冷ややかな視線を気にしない一夏は明日香に答えを聞きにかかった。

「で、結局どうなんだよ？」

「いや、特に好きとかそう言うのはないんだが」

こいつもか、と呆れてしまった。と言う以前の問題だった。

好意に気付いていないのではなく、好意がわからない人だった。

だが所詮感性なんて人それぞれなので、言い正すことはしないが……とことん呆れてしまった。

「それよりラウラさんは宙の奥さんなのか？」

そんな視線を感じたのだろうか、明日香が俺に向けて反撃をしてきた。

さん付けが妙に新鮮すぎて、驚いてしまう。それをあえて表面には出さないが。

「んー、難しい」

「確かにな……」

二人して悩む。

どう説明したものか、と。

確かにラウラは俺のことを読めと呼ぶ、だが本心はまだ良くわからない。

好き、だというのもわかるがどこまで本気なのか……

「引きずってんだよ。俺がいろいろとな」

自分の気持ちに整理がつかないものでな…

はぁ、と頭を抑えた。

まあ、これでこの世界も十六歳以上は結婚できないらしい、と言うことがわかった。

今さっきの聞き方のニュアンスも疑い半分だった。

「で、はぐらかしたつもりか？」

一夏と俺でニヤニヤと笑いながら問い詰める。

「くっ、……じゃ、じゃあ一夏のほうはどうなんだ？　鈴さんとの関係は？」

探偵の卵をなめるなよ！

脳裏にそんなセリフが響いたような気がした。

もちろんそんなニュータ●プ的な能力なんて持っていないので、無理に考えることはなく、無視。

そんな疑問以上に、さん付けがものすごく不自然ですこしだけ笑いそうになってしまう。

俺が微笑をこらえている傍ら、一夏が明らかに動揺する。

「り、鈴とのことか？」

「それだ」

完全に話をそらされているが、あえてそこにツツコミを入れなかった。

いつでも聞ける、それも理由のひとつだが……一夏の考えを聞くのもなかなか面白そうだったからだ。
そして案の定面白い展開となった。

「り、鈴てさ……メリール・デイソンさん？　に似てるよね」

確かに髪形、体系、口調、そのどれもが似ている。

だがしかし…

「関係ないだろ、一夏」

「て、宙！　お前どっちの味方だよ」

俺はすでに言っているので、明日香と一夏に何といわれようと痛くもかゆくもない。

「さあ、言おうか一夏」

と、二人でずいずいと詰め寄る。

「う、うううううう」

例にもなくうろたえる一夏を見ながら、笑いをこらえる。

明日香も明日香で自分に注目が言っていないことを良い事に一夏に詰め寄っているが、忘れた覚えはない。

ニヒルな笑みを浮かべてこれからいろいろなことをしようと思考をめぐらせるのであった。

で、いろいろあった（後で明日香と一夏がいろいろと手遅れな状態になっているが気にするな）のちに丁度女子達の話し合いも終わったところで……

「どうしてこうなった？」

「撫でろ宙」

体をネコのように摺り寄せてきて、撫でろ、ねだるラウラ。

「まじで？」

「まじだ」

冗談半分ではないようだ。

じよ、冗談じゃ…

「まあ、いいけど……」

でもないやじゃない。

だからラウラの望むとおりに頭を撫でる。

ふと脳裏に浮かんだのは、今さっきの会話。

ラウラがどれだけ自分のことを好きなのかはわからない。だけど、今は……今を楽しむのも悪くはない。

「い、一夏。ちょっとそっちにつめなさいよ」

すこしだけ頬を赤らめ、詰め寄る鈴。

「急にどうしたんだ鈴？」

さっきの話、宙に強引に引き抜かれた齒の浮きそうになるセリフを思い出して、顔を赤くする一夏。

ちなみに、そのセリフは……『鈴もほかのやつらも大事なんだけど、誰か一人選べ、と言われたら誰も選べない』

ニュアンス的には……恥ずかしそうに、それで誇らしげに……だが、完璧に声は消えかかっていた。

「いいから……よっと」

強引に肩で肩を押して隙間を作りそこに自分の体を入れる鈴。

「狭いだろうが」

「これがいいのよ」

手で押して自分の場所を取り合おうとする二人は端から見ても十分にカップルのそれだった。

そんなこんなで場の空気がピンクに色に染まりつつあったなか、玄関の扉が開けられる音を聞く。

「やー、やー明日香君！　楽しんでる？」

空けた本人は……一直線にリビングのドアを開けて開口一番にそんな事を言いやがった。

完全に俺たちのようなイレギュラーのことは目に入っていない。そのようなことから、あの人（束である）と似ているな、そう思ってしまった。

『メアリー博士！？』

俺たち四人以外——ここの世界の人たちがいつせいに同じ名前を呼んだ。

知り合いか？

「ふふん、私のプレゼントは喜んでもらえたみたいだね！」

この言葉で全ての事柄を悟った。

「でも、人の夢は儚いんだよ……」

そして『最後』も。

「博士、それ言ってみただけですよね？」

「まあね！」

明日香と博士の二人による軽口の話が終わった後、博士が取り出

したのは箱状の何か。

「あれ？ それどっかで……」

どっかで見たことがある。

一夏にもアイコンタクトを飛ばして確認すると、一夏も首をひねって応えた。

「これはね、人を平行世界に運ぶ道具なんだよ！」

『えー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
っ
っ
!!』

この場にいる全員が度肝を抜かれた。

パーティーの途中であったが、宙たちの当初の目的は自分たちがいた場所に戻ることであり、明日香たちもそれについて考えていたことを思い出した。

おもむろに説明をし始める博士の声も呆然としたみんなには届いていなかった。

それからと言うものの……

『なんか他の世界の博士と偶然通信が繋がって意気投合しちゃってさ〜』とか…

『パラレルワールドに行ける装置を共同でうんたらかんたら』

完全にあの人だ、と一夏たちの脳内であの人が横ピースを決めるシーンを同時に思い浮かべた。

うんざりしている四人を気にせず、明日香が話しかけてきた。

「お前たち戻れるかもしれないぞ」

確かに説明を聞く限りではそうだ。
うれしくもあるし、悲しくもある。

「そうか……」

「あゝ 急いで帰らないと色々和不味いんだよねゝゝ」

「それを先に言え！」

一夏が叫ぶ。

重要なことを最後に言うところもなんとなく、あの人に似ている。
少しうれしそうにしてるところも、人を少し馬鹿にするところもそ
っくりだ。

「いくか……」

意外とのっそりとした動きで立ち上がり、ラウラの手を取って立
ち上がらせる。

装置の近くに行かねばなるまい。

「いいのか？」

覗きこむように顔を見上げて、ラウラは言う。

心配そうな顔で俺を見上げるのはすこし心に來るものがある。

「未練がないと言ったら嘘になるが、言葉を飾るのに意味はない」

それだけを言い残して、歩き出す宙。

「かっこつけすぎだ……たく、また会おう」

ラウラも宙に続いて、博士のもとに行く。

「そうね、また会いましょう」

「じゃあな」

そして、装置の近くに寄った。

「博士、どうせ外部に起動装置かなにかあるんでしょ？」

「ご名答~~~~~」

過去の経験から装置の仕組みとやらを推測し、確認する。

「じゃあ……さっさと離れろ明日香」

手を開き、近づくなと示す。

「じゃあな」

明日香も悲しいわけではないが、事情をわかっているようだ。

「また会おう」

あの天才であり天災の博士がいる限り、また会えるだろうと「さよなら」ではなく「また会おう」と少々臭いセリフを言った明日香に微笑んだ。

そして、俺たちは光に包まれた。

その後はこれといったこともなく。と言っても、帰ってくれば…
：いろいろな意味でボコボコな束さんの抜け殻と完全に怒り状態の
女性陣がラウラと鈴を吹き飛ばして俺と一夏の側に集まっていた。

「これは…」

「まずいな…」

二人して、徹夜の覚悟でことに当たるのであった。

コラボ四部（後書き）

これで終わりです。

（ ´ ー ` ） フウー．．． 終わった。

あ、ちなみにこれ以降の更新は無理そうです。
年末年始は忙しいですね。課題も．．．

また、来年会いましょう。

では、良いお年を。

第106話 説得？ 前編（前書き）

ふむ、つまらないな、書いていてつまらない話を書くのもどうかと思うが・・・何で書いたんだろう？ 理由はあるんですが、あるんですが・・・ね。

この話が後一話続いたら戦闘パート入ります。

それでは第106話どうぞ

第106話 説得？ 前編

第106話

「うがぁ」

アリシアの頼みを了承してみたのはいいものの、結局どうしたらいいのかわからん。

そうやって宙は馬鹿みたいに床でごろごろと転がっていた。

でも、やらないといけない。

だから行動に移した。

しかしごろごろと床を転がっていた時間は普通に丸二日を使っていた。

アリシアからも視線だけで催促されたり、スコールさんにまでも催促されてこの二日間まるで生きた心地がなかった。

そんな苦悩を乗り越えて宙は今、整備室の目の前に立っていた。

カリフはいつもいつもここにいる。暇さえあれば機械をいじっているやつだ。

だがしかし如何せん。

「どうやったらあいつを説得できるんだろうな」

アハハ、と軽く笑い声を上げながら顔は笑っていない。

『覚悟、覚悟ならなこともない』と夏目漱石著「こころ」の一説を思い出して、同感だと感じた。

そしてそのまま宙は頭の中のもう一人の自分と会議をおこなう。

「あいつのことだから、男好きにしてくれ、という命令は裏があるはずだよな」

「ま、あいつの技術力は確かに必要だしね」

「男好きにしてくれ、というのは自分にはないんだろ？」

「おいしい、どれだけ自己中なんだよ俺は……」

「アホだな、俺……」

はあ、と自分自身にため息をついた。

暗い奈落の底に落ちるように思考を続け――

ガチャ

不意にドアノブがまわりだして扉が開き始める。

思考中から覚醒し体を動かそうと脳が体に命令するが間に合わず……と言うよりも通常の扉の開き方のスピードよりはるかに速いスピードで迫る扉。

ゴチンツツ！

とめちやくちや良い音を出して扉が額にぶつかる。

「うあゝっ！！」

人間に出せないような声を発した宙は額を押さえてうずくまる。

二日間ころがって今日うずくまる。一体どういう生活したらこうなるのだろうか？

アホだ、と自嘲する。

それ以上にやばい感じに痛みがある額をさすり。
はれてるな……はあー

本日二度目のため息を吐いた。

熱を持った自分の額は半端じゃないほど痛い。

タンスに足の小指をぶつける以上に痛い。

「うおっ、誰だ！ て、宙！？」

やはり男勝りな口調で一人騒いでいるカリフ。

「や、やあ」

完璧に俺らしくない返事。

一体どう転べば自分が「やあ」なんて挨拶をするようになるんだ。さわやかな挨拶はさわやかな奴にしか合わないものだと思う。

「きしょくわる！　なんだその挨拶」

もの見事にカリフにもそういわれてしまった。

額をさすりながらそんな挨拶をしたためか、カリフの視線が集中した。

「……それどうしたの？」

心配そうに見上げてくるそいつを見て……

「きしょくわる！　なんだその顔」

思わず言ってしまった。

失敗したと思ってもう遅かったりするのだが、どうしようもないと対ショック体制をとる。

今さっきの額の痛みはまったく用意していなかったので物凄く痛かったが、人間来るとわかってる痛みをこらえることは簡単だ。

「ちょっと、それ腫れてるじゃない！　こっち来なさい」

対ショック体制をとった結果、俺はなぜか引っ張られているわけ
でして……手首にかかっている女の子らしい圧力と男顔負けの引っ
張る力がなぜか微妙な感じを出していた。

引っ張る力が強い。結構スピードが出ている、と言うわけで対シ
ョックのために踏ん張っていた俺はうまく走り出すことが出来ず……

「ケツ！ ケツが痛い！！」

ガッガッ、とリズム良くこすれるケツ。

一步踏み出しては体が浮き、次の一步で地面にぶつかる。

「たく、あんたもドジよね。扉ぐらい避けなさいよ」

「今現在進行してドジを発揮している奴の言うことか！！」

もう俺のお尻は真っ赤になっているんですけど……

ドジにツツコミを入れても完璧に留まらないので、もう痛いとい
う感覚を通り過ぎていたりする。

そして脂汗がだらだらと流れているところで見えてきたのは、階
段。

その階段は螺旋階段のようなものだと思ってもらってもかまわな
い。ただ壁がないだけだ。

物理的に考えて俺の足が手すりに物凄く当たると思う。

冷や汗がだらだらと出てきた。

「ちょ！ これ以上はまじゅい」

かんだ。かんでしまった。

「え？ 何か言った？」

階段手前で急停止。

まさかの停止である。

今まで話を聞いてくれなかったやつがここに来て初めて話を聞きやがった。

「ここで止まるなー！！」

物凄いスピードを持った物体が急に止まれるだろうか？

そんなことはありえない。

「あ」

素っ頓狂な声が漏れてドジがようやく気付く。

手を握る力が強くなるが、もう遅かった。

俺の体は感性にしたがって前方へとぶっ飛び、握られた手は離れる。

「うわあああ！！」

階段の手すりにすら引っかからずに上を軽く通過する。

高さにしておよそ10M。普通の人ならすでに死を覚悟したほうがいいだろう。

だがそこはファントムタスク構成員となった宙。

人外の訓練を受けた宙は空中で身軽に前転し、体制を整えたあと足から着地し、衝撃を殺すように前転して止まった。

無事だったのはいいものの、わなわなとこぶしが震える。

「……早く降りてこいやー！！」

叫んで、本気で説教をするのであった。

説教も終わり、こんどはあっちのターン。

説教を受けた身で現在治療中。

ずいぶんと手馴れた手つきで腫れているところに湿布をはられる。
冷たい湿布が本当に気持ちが良い。

「あう……」

気持ちが良いすぎるせいか、変な声が出てしまった。

「気持ちわりい」

いわれても仕方がない、だから反論できない。

「しかしそれにしてもお前結構手馴れてるな」

ずいぶんとケロッとした感じで軽くしゃべる宙。

ついさっき照れるようなことがあったのになんという図太さというか何と言うか。呆れてしまうほどであった。

でも確かにカリフの手当ての手際は良くて、ギャップにびっくりしてしまった。

「それは……よく怪我するんだ。あいつら」

とおくを見るようにそう言った。

すでに道具はてきばきと片付けられている。

あいつら、というのはたぶん整備班の女性陣だろう。あのなんか変な連帯感のある奴ら。

「怪我する奴は二流じゃないのか？」

「そうね」

片付けられた道具はカリフの胸に抱かれている。

すぐにもっていこうとするがまだ話の最中なので、そわそわとしている。

「お前は？」

「えっ？」

「お前は怪我しないのか？」

一を聞いて十を理解してくれたほうがうれしい。が、カリフはわかってくれない。

まあ、俺もそんなに理解のいいほうじゃないが……

「するわけないだろ、私は一流だ」

自身があるのは結構。

一流なら一流らしく、ドンと胸を張って……すまん、そんな胸無かった。

「死にさらせえ！」

体重の乗ったレバーブローが突き刺さる。

「ど、どうしてわかった」

内臓がつぶれたんじゃないかと思った。

それほど痛かった。

痛むおなかを押さえてなぜわかったのかという理由を聞く。

「私の胸を見たときにピンときたんだ」

「ピンときたときにレバーブローで」

なんとという通報であろうか。

せめて武力ではなく話し合いで解決してもらいたい。

うう、痛し……

まだ痛むお腹を押さえている。

「そんなに痛がらないでよ。男でしようが！」

だから、来るとわかっている衝撃を我慢するのは簡単だといった
だろうか……

「男は関係ないだろうが！ 殴ってやろうか？」

拳を見せ付けるように目の前で握るが――

「やれるもんならやってみなさいよ」

ケンカをここでやってしまえば、たぶんふたりとも怪我どころじやすまないだろう。

ひどい怪我を負ってしまつてアレに支障が出ては本末転倒。おとなしく拳を引いた。

「根性なしめ」

ここで罵倒。

だが、気にしない。

「たく、それよりもなんであんなところに居た。お前のISは他のやつが整備してもう返却しただろ？」

「ん？　これか？　確かに帰ってきてるよ」

胸元を開けてネックレスを取り出し、指先でぶら下げる。

結構この動作を何回もした気がする。

デジャブに近い感覚がしたのでこれ以降は自重しよう。

「も、もしかして……私に見てもらいたいのか？」

なんとも不思議な感じだな。

俺だけに対してデレる必要性もあるまい。

と言うか、これはこれで気味が悪い。

「ドアホ、お前のとこの整備士はそれだけ腕に信用がないのか？」

べし、とチョップを頭に食らわせて、ネックレスをしまう。

なにやら悔しそうに頭をこするカリフ。

「俺がここに来た理由は……」

「理由は？」

「うっ……」

言いにくい、本当に言いにくい。

言葉を選ぶが難しい。

何と言えど、あたりさわりなくこの場を収めることが出来るかを真剣に考えるけど、何も思い浮かばなかった。

「えーと……」

「えーと？」

気になるのはわかるが、それは基本的にうざいからやめて欲しい。と先に言いたくなっただけ、グツとこらえて言葉を探す。

あー、もう良い！ めんどくせえ

「男は嫌いか？ カリフ」

「はあ？」

意味のわからない、と言った表情で完全に呆れているカリフ。

当たり前と言えど当たり前前の反応なので、特に気にすることなく会話を続ける。

「だから男は嫌いか？」

「質問に質問で返すの？」

「そう」

これ以上特に言うことはないから、軽く頷く。

「たく、……嫌いよ、嫌い」

たぶん本人は過去を振り切って、そう言っているのかもしれない。けど見えてしまう。

恐れ、がそこにあることを見てしまった。

カリフ自身では意識や認識してないかもしれないが、どこか恐れている感じがする。

「俺と話していることは、嫌いか？」

「嫌いじゃない……」

けど、と言う単語が続きそうなニュアンス。

一歩うしろへと足を下げるカリフ。

無意識なのだろう。いつの間にかキャラが変わっている。

「それはよかった」

人に自分の心中を出来るだけ悟られず、こちらの知りたいことを聞き出したり、見抜いたりすることは訓練によって鍛えられた。

これは実働部隊の実戦部隊だけが受けているものだ。

アリシア、スコール、オータムと言った実戦部隊にはまったく効果のないことなのだが、カリフなどを始めとする整備員には普通に使用することができる。

話術、と言えば簡単なのだが身内に使用するのとはとてもいたたまれない。

それを堪えてどんどん引き出していく。

「んじゃ、ここから本題に入る」

「え、ええ」

「でもここじゃ話にくいし……お前の部屋開いてる？」

ここでカリフは「恐れ」を露見させた。

明らかにそれは「恐れ」である。

おいつめつつ、救いの手を出す。

出来るだけカリフに近づき、カリフにだけしか聞こえないように

……

「アレのことだ。あまり大きな声で話せん」

ボソツ、と呟いた。

「アレ」と言う単語はあまりにも抽象的で馬鹿らしい暗号だが、案外こういうところでは盲点に等しい単語なのでばれる確立は少ない。

以前は「革命」だのいろいろ考えたり燃したようだが、結局これで落ち着いたらしい。

「わ、わかった。先に言ってるから」

「ん、十分後ぐらいに行くよ」

本当はここで追い詰めておきたいことだけど、（一応）女性の部

屋に入るときにはデリカシーという男同士の付き合いでは絶対に出不い単語の力が以上に働くので、時間を少しでも空ける。

ここだけは相手に考える時間を与えてしまいが、仕方がない。

怒られても困る、できるだけあの状態を続けてくれたらこちらとしては大助かりだ。

とか何とか言いつつも、正直人のデリケートな部分にずかずかと入っていくのはいやだな、と思う宙であった。

第107話 説得？ 後編（前書き）

これで、終わり。次は戦闘パートに入ります。
つまらない話をうpしてスイマセン。
しかし、必要なですよ・・・たぶん。

第107話 説得？ 後編

第107話

やっと五分たった。

時間を適当に潰して、ようやく部屋の前に立つ。

さて、どうしたものか…

ここまで来たのはいいけど、また立ち止まってしまった。

個人差はあるけど、勢いのまま突っ込むのは簡単だ。しかし、一度こうして立ち止まってしまえば、うまくことは進まない。

というか、ここに来て同じことをしている自分に呆れてくる。

一度深く息を吸って盛大に吐いた。

「うし」

と気合を入れて、こんこん、と扉をノックする。

「良い」

らしくないな、と苦笑しつつ扉を開ける。

しかしここに来て女性に慣れたとはいえ、ここまで緊張するとは…いい加減慣れたものだ。

「どーも」

意外と綺麗に――

本棚に強引にねじ込まれている雑誌。

ソファの下に詰め込まれている衣類。

ありとあらゆる隙間に物が見え隠れしている。

なんだか部屋で視姦している様な錯覚さえ起こる。と言うか現実的な話で顔を赤く染めているカリフがそこにいる。

綺麗に見える部屋をあえて気にしないように中央に鎮座する机の前に座った。

ここまで個性が出るとは、アリシアの部屋は本棚に詰まった本で綺麗な部屋だったし、スコールさんの部屋はシンプル過ぎる部屋で、オータムは……うん、人を愛することの恐ろしさと言うものを実感せざる得ない部屋でした。

ちなみにこいつの部屋は大雑把で雑誌のほとんどが機械——おっ
といかんいかん、あまり馬鹿みたいに詮索しては失礼だな。

「汚くてごめん」

初めてこいつの口から心から出た感謝の言葉を聞いた気がする。

「いや、まあ……」

確かにそうなんですけど……
本当は口でそう言いたい。

「五分でここまでは上等だって」

アハハ、と笑い声だけで顔は笑っていない。

ぐちゃぐちゃになりつめられたものを哀れむ。

なんか可愛そうだ。そして五分でこうするしかできない普段の
イツの部屋を思い浮かべて、ああコイツらしい、そんな慈悲深いよ
うな目で見ってしまった。

「初めて……なの」

うわあ、やりにくい。

普通にやりにくい。

こいつは誰だ？ 俺の知っているコイツじゃねえ。

「さいですか、じゃあ時間もないし始めるぞ」

「うん」

やっぱりらしくない。

こっちのほうがやりやすい気もするけど、さすがにこれはないだろう。

「言いたい事はわかるか？」

「この部屋に盗聴器はないわ」

「おお、それはよかった」

普通と言ったら普通の会話だ。

別に聞かれたら悪いとかの話じゃないけど、スパイとかいても困る。

まあ、もともと他の軍に所属していた奴が大半なのでスパイがいともおかしくないのだが、今のところ裏切った奴はいないらしい。

すごいことだ。

「お、男が好きか、と聞かれたけどあれはどういう意味？」

どうやら考えてはくれていたようだ。

だからといってこれ以上は真意を悟られるわけにはいかない、と思っていたのだが、この待ち時間で少しだけ変わってしまった。

今までは俺の真意を悟られることなく普通に嫌いにならなければ良い、そう思っていたんだけど：

別にばれてもまったくかまわないよな

ということに気付いてしまい、いつそのことばらしてしまったほうが楽だと考えた。

ばれても今後の活動にはまったくと言っていいほど支障はきたさな
ないはずだ。

「そうそう、それを話したかったんだ。俺はお前の男嫌いを治さなきゃいけないらしい」

「え？」

「別のことだと思ったか？」

意外そうな声ではなかったから、ある程度は予想していたのだから。
う。

しかしそうだったとしても妙におかしい反応をするものだ。

「そ、それは……」

「らしくねえし」

ビシッ、と脳天にチョップを入れる。

「あたあ！」

少しなき目になるカリフ。

緊張を隠すために出来るだけ努力はしたのだが、やはり普通じゃないカリフの目の前では自分自身を保つのも難しい。

と言うより女の部屋に入っているのに自分なんて保つこと出来ません!!

なれないことはするものではない。

だから軽く殴って自ら軽い調子を出さなくては自分を保つことが出来なかった。

「らしくない、だからやりにくい」

「らしく……ない？」

「お前がしおらしくするたまかよ」

いたって軽い調子で続ける。

これも俺のキャラではない……のか？

そこところは自分でも良くわからない。

客観的に自分を見れば一人前か……

誰かの言葉かまったくわからないけど、脳裏に張り付いている言葉だ。

「お前はもつと牙をむいて突っかかってくれば良いんだよ。生意気なぐらいが丁度良い」

黙るカリフ。顔は真っ赤。下を向き沈黙。

はぁ……

心の中でため息を吐く。決して現実ではやってない。

あまり齒の浮くようなセリフは言いたくないものだ。

恥ずかしいともなんとも思わないが、いいにくいのは確かで結局自分はめんどくさがりやだということがわかった。

俺は面倒が嫌いなんだ！

「で、だ」

そして俺が考えうる作戦……と言えなくもない主題を話にかかった。

「好きにならなくてもいいから嫌いにならないように努力できるか？」

「なっ……んで、私が……努力しないといけないのよ」

微妙にいつもの調子が戻ってきている。

良い傾向だけど、少しよそうより遅い。ここで催促してもいいけど、余計にしくなるだろう。

なのであえて黙ったがニヤニヤと笑った。

「なんなのよ！」

やるせなさから机を叩いたと思われる。

さて、この笑顔が微笑ましい笑顔と取られたのか、意地悪な笑顔と取られたのかどちらかは知らないけど、この笑顔を長々と続けるのは馬鹿らしいだろう。

「努力って言うのは、人が人の性格を変えるのは馬鹿らしいからな。まずは意識改革から始めるのが普通でしょ」

「だからって」

「なるほど、私には自信がないと？」

ある程度コイツの調子が戻ってきていたようなので、すこしずつこちらのペースに持ち込む。

最初から持ち込んでいた感はあるけど、その辺は無視で。

「んなわけないでしょ！」

はい、大きい釣り針にかかってくれました。

k t k rとでも表現するとぴったしだろう。

「そうか、ならやってくれ。そうしたほうがいいからな」

こうして、強引に主張を押し付けて話し合いは終了した。

さてと、これから忙しくなりそうだ。次のミッションはNとMのコンビだから俺は休み。

安心してゆっくりすることしよう。

第107話 説得？ 後編（後書き）

どーでしたか？

さてさて、いろいろと進んできたオリジナル展開ですが・・・

出来上がっていたプロットにどんどん追加されていく、新しい要素。

変な電波を受信しているのか、妄想が爆発しているのでしょうか。

そしてなんかエピローグは大量に出来てしまう事態に・・・この作品終わる気しねー！

一番最短で終わるようにしていきます。自分に残された時間のために。

他の話も需要さえあれば投稿します。

誤字脱字等があればどんどん罵ってください。

（； 㐓）ハアハア／1ア／1ア／、ア／、ア ノ \ア ノ
 \ア / \ア / \ア

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4916q/>

インフィニット・ストラトス 幼馴染と親友と学園で

2012年1月12日22時53分発行